

この素晴らしい世界に居座る T S ド変態野郎にも祝福を

らいじゅう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ズツコンバツコンされたイド変態少年・高橋奏太。その波乱万丈な人生はあっけなく幕を閉じた・・・筈だったのだが、目を覚ますと目の前に天使っぽい人が。

「異世界に行きませんか？一つだけ好きな——」
「女の子にしてください」

馬鹿な願いを叶える為に便利特典を蹴っ飛ばした高橋奏太もとい高橋カナデは本物の女の子に変わる。そうしてエロい事される為の第二の人生が始まる！———と思っただけれど、平穩にエロに励みたいカナデの前に水色の疫病神が現れて!?

このすば世界に、TSD変態野郎が乗り込む話ダヨ!!

文句はあんまり受け付けない!!

目次

ぷろろーぐなんだけど、なんかある？

1

最初の町・・・か。ん、することは決まっていますが？いや、金策。

10

女の子って色々面倒だつてきくけど？うん、あれは本当だわ。

17

え、冒険者のお仕事ですか？なんか、これからするそうです。

25

さて、じゃありベンジにいきますか。はい？新人ですか？

31

そんな痴女みたいに言わないでくれます？ええ？いや、オナリはしますけど。

37

駄目と言われたら余計にやりたくなるのが人間の性ですが？え、あ、いえ、オナニーの話です。

46

貴方のハートを頂きたいのですが？いや、本当はチンコだけで良いです。

53

☆入れたって良いじゃない。だって穴があるんだもの。

63

☆くわえたって良いじゃない。そういうプレイもあるんだし、ね？

70

なにもありませんでしたか？え？ああ、お隣さんは訪ねてきましたけど。

77

☆ちゅーしたって良いじゃない。減るものでもないのだし。

84

はい？これが拷問ですか？いいえ、命を懸けたアルバイトです。

92

男と男の勝負ですか？よし、どんな手を使っても、何がなんでも勝つてこい。以上。

99

☆らぶらぶエッチしても良いじゃない。恋人じゃなくてもさ。

106

■世の中には、知らなくて良いことも、あるようだ（後悔）——
え、また面倒ごと？相手したくないので無視しておきましょう。あ、無理っばいですね。

123

取り敢えずやれるだけはやってみましょう。ふあいとーおー。はい？勇者様が？あいつには期待するな。

129

やれば出来る子、やれば出来る子、YDK。はい、それが彼ですよ？

138

お出かけですか？連れ込み宿なら大歓迎ですが……え、違うの？ちよつと考えさせて。

148

□詮索してはいけないのは分かるが、気になるものは、気になるものだ。だってにんげんだもの

155

☆甘やかしたって良いじゃない。死ぬくらい頑張ったのだし。

164

何を騒いでるんで——はい？パーチーチェンジですか？あれ、急に、行きたく、なくなつて、きたよ。

176

やる時はしっかりやりますが？え？はい、喧嘩は継続中です。

185

もう駄目だあーそんな時、それでも勝つのが主人公の役目ですか？

193

☆語り継がれてみますかって？いえいえ、結構。凡人上等です。

200

お引越するらしいですね、おめでとございます。良かったですね——え、俺もですか？

208

☆お風呂でも良いじゃない。掃除もちゃんとすましておきますし。

*私の名前は同僚じゃないと言っている&俺の友人の恋路が茨なのだが

通常のカニより三倍赤く、三倍大きく、三倍は旨い。それが霜降り赤カニ様ですが？知らない？奇遇だな、俺も知らなかった。

◇間違える事は誰にでもある、魔が差すことだって、だから勘弁して下さい。エリス様。

諦めないで、希望はきつと残ってる。そう、頑張れ。・・・私は取り敢えず、先に逃げときますね？いや、離して！巻き込まないで！

251

機動要塞があるなら、機動戦士とか機動天使とか出てきそうですよね。え？出てこない？そうですか。

強大な敵に半分義務で挑みますが、保険は聞きますか？聞かない、ほう。帰って良いですか。

なんやかんやいっても適材適所つてありますよね？はい、頑張れる所で頑張りますよ。

☆居酒屋でこっそり悪戯しても良いじゃない。バレないようにやるからさ、ね。

☆ありったけをぶつけられても良いじゃない。減るもんじゃないし。

☆しつぽりしまくっても良いじゃない。同意の上なのだし。――俺達の冒険はまだまだ続きます？エンディングじゃないんですか、そ

うですか。

◇名前：サトウカズマ。職業：冒険者。住所：〇〇区〇〇通り旧〇〇

306

298

288

281

274

265

258

241

233

225

216

邸。ご利用お客様以外の世帯者（及び続柄）：パーティーメンバー三人と彼女一人。注意事項：アークプリースト在中。夢の希望：――

314 え？戦いの準備ですか？しませんよ。夜逃げの準備します。――
はい？戦闘開始ですか。ええ、勿論、手加減とかしませんけど。

331 勝利の鍵ですか？それは勿論、愛と友情と利益ですとも。――

上手くないのは世の常ですが、あまりにもあまりではありませんか？

？
――
小便は済ませた？神様にお祈りは？ああ、待て、ごめんって。誰がタライ持ってきてー。

☆ご褒美あげても良いじゃない。頑張ったのだし。――

☆子作りしたって良いじゃない、だってあなたの事がこんなに好きなのだし――

▲我が名はめぐみん！爆裂魔法の愛し子にして、真実を見抜く真紅目（レッドアイズ）を有する者!!――

特に何も無い日々ですが？ええ、そういう時もあると思います。

389 △はわわっ、想定してない事されても困るのですが!?――

見通す悪魔は所望するらしいですけど？あ、いや、でも今日は帰ってどうぞ。――

☆身を寄せあっても良いじゃない。まだまだ冬なのだから。――

またお亡くなりになったんですか？いい加減にしないと本気で怒るぞ。

――
420 お貴族様から呼び出しですか？そうですか、夜逃げの準備始めます

ね。

427

温泉ですか？どこにそんなお金があるんですか。働きなさい、馬車馬のように。

435

ようやくおにゅー武器の出番ですか？あれが相手なら丁度良いですね。

442

水と温泉の都か・・・ほうほう。ヴェネ●ア的なあれですね？

451

水の都でお出掛けらしいですけど、これってデートですか？あつ、やっぱり。えへへ。

459

癒されにきたのだから、当然温泉に入りますとも。いや、取り敢えず女仲間とですけど？

467

☆温泉でだってイチャイチャしても良いじゃない。色々配慮はしますし？

475

はい？これからまた温泉ですけど。良いでしょ、温泉きてるんだから。

482

信用がないのは初めからじゃないですか？え、悪化してんの？あーどんまい

489

犯人はこいつじゃないのかって？いや、流星にそれはないよ。今回は。今回は。

497

えっ、あれですか？友人ではないですよ。ただの通りすがりの信者です。知り合いじゃないです。止めて下さい。

503

もう少し演出あつても良いんですよ。多分、山場ですし？

511

根性とかあつたんですね？ええ、まあ、少しだけ見直しました。少しだけ。

518

最後の一撃は切ない？見た感じ苛烈ですけど

525

後処理が残ってるんですか？それ、あとで良いですか。ちゃんとやるんで。

☆肌を重ねても良いじゃない！あなたの温もりが欲しいんだもの。

あーごめんだけど、誰の何がなんだって？ん？

えっ、また問題事ですか？退屈しませんね。

☆ちよつとは我慢してくれても良いじゃない。これから幾らでも出来るんだし。

旅立ち初日から幸先悪いと？いえ、いつもこんなです。

冒険者としての資質ですか？俺にはないと思いますけど。

アブノーマルな体験ですか？それは御愁傷様です。

☆ズツコンバツコンしなくても良いじゃない、気持ち良くなる方法なんて幾らでもあるんだし。

えっ、林で？ちよつ、何を言ってるのか分かりませんね。

説得に必要なものですか？情報、根気、はったり、それとお土産でしょう。

逃げも隠れもしませんよ？はい、釈明させて頂きます。

何でもない朝ですか？その通りです。それが良いのです

えっ、これが観光名所ですか？なるほど、把握しました。把握。

639

えっ、観光名所ですか？いきましたよ。ええ、あれでしたね。あれでしたよ。

あれが騎士ですか？いいえ、あれは打たれ強い変態です

652

645

ぷろろーぐなんだけど、なんかある？

異世界転生なる言葉をよく聞く昨今。

俺はほとほと生きるのが嫌になった。

と言うのも理由は色々ある。

両親が多額の負債と「解散！」と書かれた手紙を残してトンスラこいた事もそうだし、務めていたバイト先を突然クビになった事もそうだし、四十を越えた女教師に本気でプロポーズされた事もそうだし、幼馴染で彼女だった女子に「本当の恋に目覚めた」とフラれた事もそうだし、親友に絶縁を申し渡されたりした事もそうだけど・・・本当の所はある理由が一番大きい。

まあ、その理由というのが――。

「マンコをチンコで死ぬほど掘られた上で、子宮に中出しされまくりたいと思ってるのに、男の俺にはどう頑張ってもそれが出来ないという事なんだ」

「ぎやああああ!!変態いいいい!!」

とあるビルの屋上。

偶然自殺しようとしてた先輩女子に出会った俺は、身の上話を全力でしたのだが――この反応だ。

変態なのは否定はしないが、流石に少し傷つく。

「そんなに変態変態言わないで下さいよ。先輩」

「先輩ってなんの先輩よ!?変態の!?止めて!!私は普通だから!!」

「いや、変態とは思ってませんってば。ただの、自殺の先輩です。さ、早くお手本見せて下さいよ」

「しれっと自殺を促さないでくれるう!?普通なんか、こう、いい話的な流れで止める感じじゃないの!?――いや、まあ、そうなんだけど!!自殺しにきて、偶然あったあんたに、何となしに身の上話始めたの私だけど!!」

自殺先輩は物凄く怒り狂っている。

激しく地面を叩く姿に弱さは感じられない。覇気すら感じる。なんで自殺しにきたの？熊だろうとライオンだろうと、素手で殺せそうな雰囲気があるよ？

「自殺先輩、まだ全然いける感じじゃないですか？なんで自殺なんか？」

「そりゃ、あんたと比べたら余裕だわ!!友達と喧嘩した程度でここに来てる私なんざ、へそで茶ぐらい沸かせるレベルだわ!!思い直したよ馬鹿野郎!!今から謝りにいくわ!!」

「それは良かった。せっかく女子に生まれたのに、セックスもしないで死ぬなんて勿体無いと思ってたんですよ。沢山ズツコンバツコンして下さい。俺の分まで」

「ズツコンバツコンはしないわ!!んで、誰が処女だ!!いや、処女だけども!!」

自殺先輩は俺に激しくファックキューをかますと、柵に手を掛けた。

「・・・っていうか、あんたは思い止まらない訳？」

「え?いやあ、だってこの先、生きてても希望ありませんし。それに、ワンチャンあるかもしれませんし・・・」

「希望的観測で話すんじゃないわよ。ほら、あんたも生きてりや良いことあるかも知んないでしょ・・・いや、かなり可能性は低いかもしれないけども」

さつと、伸ばされた手が見える。

なんだか妙な事になったなあと思う。

自殺先輩の顔を見上げると何とも言えない顔をしてた。

「ほら」

どうにも自殺する雰囲気ではなくなってしまった。

仕方がないので手を取る。

「それにさ、あんた可愛い顔してるし、アイドルとかなれば借金もどうにか出来るだろうし・・・案外なんかじゃない?」

「いや、借金はそこまで。何とかなると思ってますし。寧ろ、腰砕けになるまでパンパンされない事の方が——」

「どんだけ執着してんのよ！それは来世に期待しときなさいよ！仮に転生だなんだがあつたとしても、今世もすっかり生きれないような奴に、神様がチャンス与える訳ないでしょ!!」

「成る程」

それもそうだ、と立ち上がろうと掴んだ手に力を込める。けど、思っていた感触が伝わってこない。

逆に自殺先輩がこちらに引き寄せられたのだ。

「あつ」

自殺先輩の手元には柵の一部が握られてる。

余程ボロかったのかぼつきりいかれてる。

バランスを崩した自殺先輩がビルの外へと傾く。

スローモーションに映る光景。

驚愕を浮かべる自殺先輩。

咄嗟に、俺は柵を掴み自殺先輩を引っ張った。

その結果自殺先輩は宙を舞い、柵を越え屋上へと戻る。火事場の馬鹿力なんて聞くが、まさにそれが起きたらしい。俺はやれば出来る子だったらしい。

まあ、これが最初で最後だろうけど。

「変態!!」

遠くなる空。

それと屋上から顔を覗かせる自殺先輩。

何となく自殺先輩に悪い気がしたので一言だけ返しておく事にする。

「――よい、人生を」

言葉を告げてからそう間もなく、鈍い音と共に衝撃が頭を走った。

「いや、壮絶過ぎますよ」

ふと気がつく、高級そうな椅子に座る綺麗な人いた。

天使と言われたら天使なんだろうなという美貌だ。

羨ましい。

呆れたような微妙な顔でなければ、手離しで称賛したことだろう。羽もはえてるし。

「——あの、大丈夫ですか？」

俺がポケツと眺めていたのが気になったのか、天使っぽい人が尋ねてきた。おや、天使の輪的なのがある。これは天使様だな。

「大丈夫です。天使様、ここはあの世的なあれですか？転生出来ますか？」

「い、いきなり、ぐいぐいきますね。それに二言めが転生の事なんて。あの、死亡された事に感想とかありませんか？普通は皆さん気になさるんですが・・・悔いとか、ほら、ありませんか？」

「あ、それは良いです。わりと未練ないです。それに痛かったのは覚えてるので、頭でもかち割って死んだんでしようし。自覚はしてます。それより転生出来ますか？」

天使的な人は苦笑いを浮かべ「ナニコノヒト」と冷や汗を流す。これは驚いた、どうやら俺は、天使様でも驚く級の変態だったらしい。成る程、どうりで親友に絶縁される訳だ。「モロツコで手術してくるから、お前のチンコで犯してくれ」と言ったら「本気で勘弁してくれ」と泣きながら絶縁してきたのは親友のせいではないらしい。

うん、ごめんな、親友よ。せめて、アナルだよな。

「えっと、取り敢えず形式にそって説明しますね？」

そうして始まった説明。

回りくどすぎてアレだったが、どうやら転生は出来るらしい。ただ

し、転生すると記憶が消され赤ん坊から再スタートだそうだ。

それはダメだ。

仮に女の子になれたとしても、仮に女の子になってズッコンバッコン出来たとしても、それはもう俺であって俺じゃない。意味がない。自殺しようとしたのは褒められなかったものの、死ぬ寸前に人を助けた事が認められ天国に行く権利もあると言うのだが・・・天国は何もクソみたいな場所らしい。性転換する為の整形外科もないらしい。清々しい程にくそだな。

どちらも断ると、天使様はある世界への転生案を出してきた。

「魔王ですか？」

「はい」

剣と魔法のあるファンタジーな世界があるらしいのだが——どうも人手というか、人の魂不足らしい。魔物だの魔王だのが闊歩するような殺伐とした世界。一度死んだ人魂は皆して別の世界への転生を願い、魂の流出が激しくて困っているとか。

正直、剣とか魔法とかはどうでもいいのだが、その世界に行くなら今の記憶を持ち越し、くわえて転生特典とかいうのがあるらしいのだ。ついでに魔王退治のサブクエストも請け負う事になるらしいが・・・まあ、それは良いだろう。放っておいて。建前みたいなもんなんだろう。

それよりもだ——。

「転生特典・・・」

「はい。こちらから選んで貰う事に——」

「女の子にして下さい」

「はい？」

俺の声が聞こえなかったのか、天使様が首を傾げた。

「もう一度仰って——」

「女の子にして下さい。特別感度が良かったりとか、おっぱい大きくしてくれとか、お尻は安産型がいいとか、そういうのは別にいいんで、

普通にセックスできる平均的で普通な女の子にしてください。ていうか、開発は自分でしたいので。あ、ふたなりとか、そういうアブノーマルな設定とかもいららないです。普通で良いです」

「——気持ちの良いくらい欲望丸出しですね。私、初めて心の底から人に嫌悪しました」

そんな事を言いながらも天使様はマニュアルらしき資料を調べてくれる。

少しすると、溜息をつきながらこちらに視線を向けてきた。

「……出来るみたいです」

「それは良かった、お願いします」

「微塵もぶれないんですね。オススメしておいてなんですが、とても危険な場所ですよ？貴方が向かう世界は。魔王は勿論、ドラゴンとか、ゴブリンとか、そういうのいるですよ？特殊能力とか、神器にしませんか？」

「いや、そこらへんは何かするんで、女の子をお願いします」

「一応心配して……はあ、もう良いです。分かりました。ですが、とてつもない苦痛を受ける事に——」

「お願いします」

「もう！知りませんからね!!」

諦めたような仕草を見せた天使様は呪文を唱えた。

すぐに足元に魔法陣が現れ体が光出す。

「いたたたたた、なにこれ、いたいっ」

「全然痛そうに聞こえませんが!?本当に人ですか、貴方!?魂に刻まれた性の情報を無理矢理転換しているんですよ!?本来なら発狂して霧散するレベルなんですよ!?!」

そこまで痛いことするなら一言いつてほしかった。

そうしたらこんな情けない声出さずに済んだと言うのに。

「そこまで分かってるなら、出来るだけ早く終わりにしてくださいよ。痛いんで」

「本当に痛いんですか!?本当に!?アリに噛まれたみたいな顔してるのに!?!」

「いや、あれはあれで痛いですよ?」

「痛いかも知れませんが!!比べないで下さい!!」

それから少し。

魔法陣の光が消えるとおっぱいの異物感が新たに感じ、股間の異物感が失われたのを感じた。

触ったら棒が消えていて、谷があつた。

谷の中に指を突っ込んだら痛かつた。

「濡れてないと駄目か」

「いきなり何を確認してるんですか!?!」

「不良品つかまされたらやなので」

これは開発せねば。

理想は幼馴染の程よく濡れて締まるあれだ。

お手本があると助かる。

「天使様、これは勿論処女で?子供とか孕めます?」

「何を確認してるんですか!しよ、処女ですよ!勿論!!子供だって—

—てか、何を言わせるんですか!!この変態!!てか、孕みたいんですか!?!ホモなんですか!?!」

「よく言われます。孕めないと、ボテ腹セックスが出来ないので。あ、ホモではないです。男とマンコでセックスしたいだけです」

「このド変態!!」

そんなやり取りしていると足元にまた魔法陣が現れた。

さつきとは違う奴だ。

天使様を見るとジト目だった。

「かなり、かなり不本意ではありますが、貴方——いえ、貴女の選択を尊重します。高橋そ——」

「あ、今は女の子なんで、その男みたいな名前は止めて下さい」

「ああ、もう、話を遮らないで下さい!...それでは、なんと呼べば良いんですか?高橋さん」

名前、名前か。

改めて考えると難しい。

うむむ。

「じゃあ、もとの名前の漢字の一字を貰って、カナデで」
そう言った瞬間、胸が熱くなった。

「あつ!!あつ!!ああああ!!なにしてるんですか!!魂に名前を刻むなんて?!いや、普通の人にあんな事・・・魂に干渉した事で変異したの?いや、でも——」

ブツブツと悩み始めた天使様の姿に、何か余計な事をしたらしいと直感する。

何をしたのか分からないが。

まあ、なんでも良いか。

光に抗わないでいると体が浮いた。

真上に光のゲートが見える。

あれ潜ると転生かな?

「——あ、ちよつ!!勝手に行かないで下さい!!」

あれ!?なんでキャンセル出来ないの!?

「いってきまーす」

「いやいやいや!!いってきまーすではないんですよ!!ちよつ、高橋カナデさーん!!おりてきてさーん!!」

光のゲートを潜る寸前、とある事が気になった。

些細な事だ。

「あの、天使様——」

「あ、聞いてくれた!!降りてきて下さい!」

「あの先輩、元気にしてますか?」

「——ええ!?なん、えっと——」

少しだけ悩んだ素振りを見せたものの、天使様は大きな声で返してくれた。

「はい、元気にしています!!貴方の分も生きるんだって!!」

その言葉を聞いて、少しだけ安心した。

これで本当にあちらに思い残す事はない。

「前の人生にさよならバイバイ——これからは楽しく犯されるぞー」

そういつてゲートを潜ったら、「変態——」という天使様の声が響いてきた。

否定はしないが、いつてらっしゃいくらい言っただけであらう。マル。

最初の町・・・か。ん、することは決まっていますがいや、金策。

石造りの街中を、馬車が音をたてながら進んでいく。

空は馬鹿みたく青く、変わった鳥が鳴き声をあげながら飛んでいく。

回りを見渡せば大きな壁に囲まれたじよーさい都市である事が分かった。

ヨーロッパな街だな。

これは間違いなく異世界だな！とは思えない。

まだ外国という可能性は捨てられない。浚われてここに放り出されたのかも知れない。

なので股間を触った。

Oh、夢じゃない。

夢じゃなかったのてさてどうしようか。

確か最初はアクセルの街とかいう場所に送られた筈だ。

ここは初心者冒険者がたくさん集まる街らしく、俺も冒険者ギルドとかいう場所にいけと言われてたりする。

何でも身分証のない俺がこの世界で生きる為には、なにがともあれ冒険者になって身分証を発行する必要があるらしいのだ。他の方法で身分証を発行しようとする、死ぬほどめんどいらしいので大人しく従う。

レンガの家が立ち並ぶ街を歩きながら、それらしき連中を探す。うわっ、耳長い人がいる。なにあれ。獣耳もいる。うわあ、なにあれ。キョロキョロしながらトコトコ歩いてみたが、中々それっぽいがない。

そうして暫く歩いてると、ついに街の端っこまで来てしまった。あうち。

そこは工事現場のような場所で、見た感じムキムキのおっさんだらけだった。チンコでかそう。最初は普通がいいので、のーせんきゅー

な出会いだ。

「おい!!坊主!!こんな所でウロチョロしてんじやねえ!!怪我すんぞコ
ラア!!」

声に視線を向ければムキムキのおっさんがいた。

凄い胸筋、ぴくぴくしてるやん。

じつと観察してたら、眉をしかめられた。

「なんだよ、そんなにジロジロ見て」

「いえ、別に。あ、そうだ。知ってたらで良いんですけど冒険者ギルドって何処にあるか知りませんか?」

「はあ?冒険者ギルドだあ?反対方向だぞ、そりや。どうしたらこんなところまで迷ってこれんだ」

まあ、詳しく場所について聞いてなかったしなあ。

「———つか、冒険者か。そんなひよろっこい体で大丈夫か?女みてえな面してよ」

「一応女ですけど?」

「女だったのかよ。紛らわしい格好すんなよ」

そう言われて改めて自分の体を見てみた。

服装は飛び降りた時と同じパーカーとジーパン。

よくよく見てみると確かに男の時と比べて全体的に筋肉がない気がする。

でも鶏ガラな体じゃない、スポンが張るくらいにムチムチ感はある。

髪の毛の長さも黒いところは変わらないけど、何処と無く艶々してる。伸ばしたらさまになりそう。ほっぺたを触ってみればプニプニしてた。

男の頃はこんなにプニプニじゃなかったなあ、と感触を味わっているとおっさんに変な目で見られた。

「可愛い顔してんだけど、なんだろうな、この既視感はおお・・・まあ、良いか。取り敢えずこの道真っ直ぐいって広場までいきな。そこま
でいけば、骨の飾りがあるデカイ建物がある。まあ、分かんなかったら其処らで聞きな」

おっさんに道を教えて貰った俺は感謝を伝え、先を急ぐ事にした。去り際、さつきのおっさんが「何へたれてんだカズマ!!」という怒鳴る声が聞こえて、そつと振り返ればレンガの下敷きになった高校生くらしいの兄ちゃんが見えた。

うん、頑張れえー。

案内された通り進むとギルドに辿り着いた。

建物内に入れば武装した連中が沢山いる。

中には身の丈を越えるような大剣をもつ人もいて普通に驚いた。リアルFFFかよ。

料理を運んでるウェイターに聞いて受付に行く。

受付の矢鱈とおっぱい大きいお姉ちゃんに「冒険者になりたいのだけど」というと困ったような顔をされた。

「お一人で、ですか？」

「そうですけど・・・え、後ろに誰かいます？霊的な？」

「いえ、そういう訳では・・・」

詳しく聞いていくと、女一人で冒険者なんて無謀な事をする奴は早々いないらしい。普通は女子同士でチームを組んでくるのだとか。冒険者は体を使う仕事ばかりで、基本的に女には向いてない職業らしい。一部の実力者は確かに成り上がれるが、大半の者はそうなれず様々な理由で引退してしまうのだと。

受付の人は言葉を濁していたが、男と女がチームを組めば起こる事は容易に想像がつく。人型のモンスターもいるらしいので、そういう理由もあるのかもしれないが。

ようは、女一人だとスタート色々面倒よ？大丈夫？って事らしい。ネット小説でそういうの読んだから知ってる。

「大丈夫なんで登録お願いしますー」

「い、良いんですね？分かりました、それではまず登録手数料で千エリス頂きますが――」

お金はなかったなあ。

「——持ってなさそうですねえ」

お姉ちゃんも気づいたらしい。

そうなの、持ってないの。

仕方ないな稼ぐしかない。

「皿洗いとかしますので、お願いします」

「はあ、私の一存では何とも・・・ちよつと待ってて下さいね」

それから少ししてウェイターの仕事をすることが決まり、いよいよ登録することになった。言われるがまま受付に置かれた水晶に触れると、水晶が光を放ち始める。受付のお姉ちゃんの反応から悪くないみたいだ。

結果色々と職業の案内をされたけど、よく分からなかったので冒険者にしておいた。凄く困った顔されたけど、そこは譲らない。何でもスキル取れるとか、素敵じゃない？ねえ。

登録した後はお仕事開始。

頼まれた料理を頼まれたテーブルにお届け。

前世ではファミレスのバイトもしたことあるのでお茶の子さいさいだ。

新人と思われたのか、冒険者達にはかなり絡まれた。

女の子になって初めてナンパもされた。

お尻も撫でられた——勿論、賠償金をむしる。

ズッコンバツコンされたいが、誰でも良い訳ではない。相手は吟味したいのだ。

セクハラ駄目、絶対。

それに、まだ本番は早すぎるから、そういう事とは離れていたい。

ズッコンバツコンするのは慣らしてからだと思う。

いきなりは流石に怖い。

痛いらしいし。

「自慰の道具って、何処に売ってます？」

「仕事中におかしな質問してくんじやないわよ、文なし」

なんやかんや同僚から玩具を売ってるお店を聞いた俺がどんな

デイルドを買うかぼんやり考えながら働いてると、日が暮れた頃に喧しい一団が現れた。

煩せえなど眺めてみれば、昼間の工事現場の人達だった。おっさんもおる。

目があつたので手を振ると、何してんだって顔された。

「何してんだ、お前は」

あ、言われた。

「登録手数料を体で払ってます」

「登録手数料って・・・千エリスも持ってなかったのか。何処の田舎娘なんだお前は」

「何処と言われても」

異世界だしなあ。

言葉に悩んでると、おっさんの後ろから高校生くらいの兄ちゃんが出てきた。

昼間へばってた奴だ。

「おう？カズマ、おめえも飲めるようになったな！」

「当たり前前つすよ!!もう、この為に働いてるっていうか!? シュワシュワおかわりいいい！」

顔が赤くて吐かれた息がなんか臭う。

多分、このシュワシュワとかいうやつで酔っているんだろうなあ。

ぼやーっと眺めてると、俺の顔を見て泣き出した。

「登録手数料・・・ううっ・・・! あんたも苦労したんだなあ! 分かる! 俺もっ、いきなりこんな所にきてっ、無一文で、これからだつてのに、登録にはお金が必要だとかっ、なんだよこのクソゲーはっ!?! つて思ったもん!!」

クソゲー・・・?

おっさんを見れば怪訝そうな顔してる。

「ついて来たのは、なんの役にも立たない穀潰しの駄女神一人!! 最初はさー! ちよっとさ、期待もしたさー! 黙ってれば美人だもんな! けどよ、蓋を開けば飲むことと宴会芸くらいしか取り柄がなくて、我が儘で調子ノリでグータラで、口を開けば甘やかしてよとか! 舐めんなあ

!!俺は保護者か!!」

一頻り泣きわめいたカズマは仕事仲間にも慰められながら喧騒の中に戻っていった。

その背中には悲哀が見て取れる。

「ああ、悪いな。あいつも嫁さん?の事で色々溜まってな」

「嫁さん?」

「——あ、いや、多分な。本人はそうは言ってるけど、雰囲気的にな。あんまし其処んところは聞かねえでやってくれや、色々あんだろ。あ、そうだ、アクアのやつに似てんだよ。坊主——じゃなかったな、嬢ちゃん」

アクア?

「あそこに、ほら、水色の髪の女がいるだろ?あれがアクアだ」

言われた所に視線を向ければ、水芸を披露する女がいた。顔の造りはかなりの物なので、高笑いして酒瓶を振りかざしてなければ少しは違った見方も出来たのだろうが、今はただの酔っぱらいにしか見えな

い。

それも質が悪いタイプの。

てか、あれに似てるとか……。

「……いや、似てねえな。気のせいだ」

おっさんから微妙な顔でフォロースされた。

止めて、何も悪くないのに責められてる気分。

それからもう少し働いて、本日の日当を貰った。

登録手数料を差引いた額なのではした金だ。

とは言え、むしった分も合わせれば目標額にギリ届いた。

給料を片手に出口に向かうと同僚に声を掛けられた。

「これから何処いくのあんた?夜道は危ないから出歩くのは止めときな。それに今からだと宿も取れないよ。明日の朝番出る条件付きだけど、寮のベッド借りれるように先輩から許可とったから来なよ」

それはありがたい。

でも、それとこれとは別だ。

「ちよつと買物があるので」

「買い物？ああ、あんた着の身着のままだつて言つてたっけ？お古だ
けど私の――」

「いや、玩具を」

力強く扉が閉められた。

「・・・いくかつ」

閉じられた扉を背に、俺は初めの一步を踏み出した。

女たるもの情けなく振り返ったりはしない。

ただ前を見え歩むのみ。

夢の第一歩。

大人の玩具を買うために。

「本気で行こうとしてんじゃないわよおお!!」
「うおっう!!」

夢の第一歩は、明日の昼頃踏むことになった。

女の子って色々面倒だつてきくけど？うん、あれは本当だわ。

転生してから早三日、四日、五日。

相変わらずギルドで住込みウエイターをしてる俺は、女の子になつてから生まれたある事に頭を悩ませていた。

なので掃除中、隣にいた同僚に声を掛けた。

「なあ、同僚」

「同僚って呼ぶな馬鹿。私には・・・まあいいか、つで、何？」

「あそこが濡れないんだけど、どうしよう」

「死ね」

成る程・・・つておい。

「辛辣過ぎない？ねえ、同僚？こんなに真剣に悩んでるの？同じ女の子なの？痛いんだよ？あれ入れると、メチャ痛いの？ねえ、これあれかな？俺がおかしいのかな？ちよつと見てくれない？」

「うっさい、禿げろ、死ね、ド変態」

ド変態であることは否定しないけど、あんまりじゃない？同じパンツ穿いた仲なのに。

「なんでそんなに怒ってるの？ずつ友でしょ？俺達」

「僅かでもあんたの心配したのが間違いだったわ。ていうかね、毎晩毎晩下のベッドで煩いのよ!!」

「喘ぎ声大きかった？ごめん」

「喘ぎ声なんて聞こえた試しがないわ!!苦痛の声しか聞こえてこないわ!泣くくらいなら止めなさいよね!!気になって眠れないのよ!!」

泣いてなんかいない。

ちよつと涙がちよちよぎれただけだ。

あれは汗だから。

いや、予想以上に入らないんだもん。

なにこれ、つてなつたわ。

痛みより入っていかない事実悲しくなつたわ。

ローション買わないとあかんか？やたら高いんだよなあ。
転生した翌日。

同僚に例の店に連れてって貰って、お目当ての玩具を買うことが出来たのは良かったのだけど、それからがあれだった。全然気持ちよく無いんですけども、って事だ。

おかしい、こんな筈ではなかったのに。
考えられる事は幾つかある。

一つはこの体が馴染んでないという事。

一つは肉体的な面が見掛けより未熟である可能性がある事。

一つは性的対象がない事だ。

先にあげた二つは、もうぶっちゃけ時間待ち以外手はないので、仕方がないとしても最後の一つが問題だ。

生まれてこの方、俺は本当の意味で誰かに性的興奮を覚えた事がない。

元男ではあるが、ぶっちゃけそこまで女の子が好きじゃなかった。幼馴染といたしてる時も、男特有の不思議と沸き上がる性欲に従ってやったもので、どうもそこまで興奮はしてなかったように思う。

ぶっちゃけ、俺と位置代われよと本気で思ってた。突かれたかった。羨ましかった。

けれど、男が好きかと問われれば、それもどうも違う気がするのだ。親友になら突かれてもいいかな？と思ってたけど、それくらい。

どうも俺は、性別うんぬんより個人のあれこれを重視するみたいだ。

つまりはふたなり女子に突かれるのも、場合によっては吝かではないと言うこと。

「同僚、ちんこ生えてたりしない？」

「仮に生えてたとして、何させる気なわけ？」

俺は右の親指と人差し指で輪を作り、左手の人差し指を突っ込む。
どやあ！

思いきり頭を叩かれた。
痛い。

朝番の仕事を終えた俺は着替えて街に出掛けた。

特にやることはない、ただの散歩だ。

五日目になるがレンガの家が並ぶ街並みを眺めるのは未だ飽きない。やろうと思えば、きつと何時間でも出来ちゃうだろう。――
あ、いや、実際は足疲れるから、適当な所で止めるけどね。

脇道にある屋台を見ながらブラブラしていると、元気な声が響いてきた。

「安いよ安いよー！大根、レタス、ニンジン、トマト！どれも採れたて新鮮ぴちぴち！元気に跳ねる天然もの！一口食べたらあら不思議！栄養満点なうちのお野菜なら、お肌ツヤツヤ！お腹の調子も絶好調！さあさあ！安いよ安いよー！」

何故だか例の水色が野菜の叩き売りしてた。

ふと曜日を考えると工事現場がお休みの日。

成る程。

声に釣られて見てみると、どの野菜もネットを突き破らんと必死の抵抗を見せている。採れ立て新鮮は本当みたいだ。美味しそう！とはならないけど。

「あら？最近よく見るウェイターの子じゃない！！いらつしやい！！安くしとくわよ！！何か買ってて頂戴よ！！ねえ、ねえ！」

何度か話した事はあるけど、ここまで親しくされる覚えはない。俺氏ちよつと困惑。しかし野菜か。この世界に来てから、その跳ね回る姿が気になってあんまり食べなかつたけど・・・そろそろ野菜も食べないのかなあ。

「ん？あ、もしかしてカズマと同じ？跳び跳ねる野菜が苦手だったりするかしら？」

「ええ、まあ。踊り食いって好きじゃないんで。ほら、食べたらお腹の中で根を張ったりしたら怖いじゃないですか。内臓とかに根がから

まったりしたら」

「こ、怖い想像しないでっ!!私まで苦手になるじゃないの!!そんな事ないわよ!・・・本当にかしら?」

そこは自信持って大丈夫って言って欲しかった。

なんかやかんや逃げる野菜ステイックを勧められ食べてみたが、これが意外と美味しかったりした。元々野菜は好きじゃないけど、これは幾らでもイケる。

差し出されたそれを水色とポリポリ食べてると、「何してんだ、アクア」と呆れたような声が聞こえてきた。

視線を向ければジャージ姿のサトウカズマがいた。

「ちゃんとやってんのかと思って来てみれば、お前。店番さぼって・・・その上摘まみ食いか。どうしようもないな」

「ちよつ、止めてよカズマ!そんな可哀想な子を見る目で見ないでよ!!これはさぼってた訳じゃないわ!!試食品に不備がないか確かめてただけなの!!それに朝からずっと働いてるんだから、ちよつと休憩するくらい良いじゃないの!!」

ええ?それは・・・さぼってるちや、さぼってるのね。

「分かった。店の商品食いながら、さぼってんだな」

「ちつがうわよ!!ヒキニート!!」

「誰があ、ヒキニートだ!!昼飯時くらい交代しにきてやれば、お前!!もういい帰る!!」

さつと背を向けたサトウカズマに水色が飛び付いた。

「うわああああん!ちよつと待ってよお!!ヒキニートって言った事は謝るから、交代してよおお!!朝からずっと頑張ってるのお!!お腹減ってきたのお!!ご飯食べたかったのお!!マジックで野菜消して遊べなくて暇だったのお!!ごめんなさいいい!!」

「ええい、泣きわめくな!!分かったから離せ!!てか、最後にとんでもないこと言ったなお前!!またか!またやろうとしたのか!」

一騒ぎした後、店番をサトウカズマにパスした水色は「ちよつと行ってくるわ!」と上機嫌で街中へと消えていった。

残ったサトウカズマはいつものエロい目でこつちを見てきた。見

ても良いけど何がそんなに面白いのか。服もウェイターしてる時と比べたら別に過激な訳じゃないし、野菜ポリポリしてるだけで面白味ないんだけどな。

「あ、あのー、えっと、野菜買ってきます?」

「いや、別に」

試食の野菜スティックを頬張りながらぼやーつとしてると、何となく気になってる事が頭を過った。些細な事だ。

「サトウカズマさん、ちよつと良いですか?」

「は、はい、らっしやい。おかわりつすか? つても、俺どうもこの野菜捌くの抵抗あつて上手く――」

「いや、おかわりは別に」

「――っそうつすか。で、何か?」

俺はサトウカズマの姿を頭から爪先まで確認する。

どうみてもジャージ、Tシャツ、スニーカーと異世界らしくない。

その上、言動がこちらの人とかけ離れてるし、名前にも違和感がある。

「あ、あの、なんでふか」

「転生者だつたりします? 日本からきた」

「おふっ!!」

どうやらそうみたいだ。

「ド変態じゃねえーか」

一頻り転生にいたるまでの事情を説明すると、そんな事言われた。

「いやあ、それほどまででも」

「いや、それほどだよ!?! 転生特典で女の子にして貰うつて正気かよ!?! お前つ、街は比較的平和だけど、一步街出たら化け物の巣窟だぞ!?! 死にたいの!?! アホなの!?!」

おおう、酷い言われよう。

「まあまあ、そんな事言いながら、この世界の人は普通に生きてるし。」

何とかなるでしょ」

「樂觀的ってっーか、凄いなお前」

感心してるんだか、馬鹿にしてるんだか微妙な視線が突き刺さる。ちよつとこそばゆい。

それにしても俺が元男と分かってても、その性欲にまみれた目で見れるのね。サトウカズマ凄いな。

「そう言えば、あの水色・・・アクアも転生者だったりする?」

「ん?いや、あいつは・・・認めたくないが、一応女神だ。転生特典として連れてきた」

成る程、分からん。女神を特典とか、分からん。

けどその後悔が浮かぶ顔を見れば分かる。

サトウカズマも失敗した口か。

「分かる。俺も素直に感度とかあげて貰えば良かった、名器にして貰ったりすれば良かったって思うもん」

「下品過ぎるだろ。最初にカナデに会ったとき、ドキツとしたあのトキメキを汚すんじゃない。くそう、漸く会えた転生者仲間がこんな変態だなんて——てか、一応今は女の子なんだから、言葉使いには気を付けるよ」

「女の子として見てくれるんだ?」

「ん?いや、まあ、なんっーか、俺は女の子のカナデしか知らないし、ピンとこないってのが本当の所かな」

まあ、それもそうかもなあ。

「あ、もしかして顔とかも弄ったのか?」

「いや?男の時と同じだと思うけど」

「マジか」

寮にある姿見の鏡で何度か確認してるけど、若干丸みを帯びた以外は前の俺と同じだ。女みたいな顔してんなと親友にからかわれたりしてたから、まあそうなんだろうなあと思う。

それから日本にいた頃の話をしてると、サトウカズマが生粋の引きこもりのオタクである事が分かった。アニメとかネットゲは勿論、そこから派生した雑学的な知識も凄くて、これは素直に尊敬した。

俺にはこういうのはないからね。

TS物のネット小説は読んだけど。

そうこうしていると水色が帰って来た。

パンパンになった幾つもの袋を抱えて。

何持ってきたのかと疑問に思っていると、水色は感謝の言葉と共にその袋の一つをサトウカズマに渡した。

「これは交代してくれたお礼よ！感謝なさい!!」

お礼なのか、恩義を売りたいのか分からないな。

「なんだよ、これ・・・パンの耳じゃねーか。パン屋のおっさん達に迷惑かけてねーだろうな」

「失礼しちゃうわね！そんな事する訳ないじゃない！仮にも女神よ、私は！ちやーんとお願ひしたら、涙目で「頑張るのよ」とか感動しながら譲ってくれたわ。私の美しさに見惚れたのね、きつと。ね、タダよ！タダ!!褒めて！さあ褒めて!!」

どやあと笑顔を見せる水色に、サトウカズマの方からプチつと何が切れる音が聞こえた。

「完全に物ごい扱いじゃねーか!!最近妙にいたたまれない目で見られると思ったら原因お前か!!パンの耳でもお金を出せって言つたら!!ちよつとでも良いから!」

「な、なんでよ！タダでくれるって言うんだから、タダで良いじゃない!!いやっ！私のお財布に触らないでっ！これは駄目！今晚のシユワシユワ代なの!!生き甲斐なの!!」

「アル中か!!良いから、よこせえ!」

争う二人に釣られて人が集まってきた。全員お客なら大繁盛なんだろうが、全員等しく野次馬なので意味なし。

最早恒例なのか、どちらが勝つか賭け事まで始まる始末。水色に誰も賭けないのは笑った。

巻き込まれるのも面倒なので、サトウカズマにばいちゃして俺は散歩の続きに戻った。

悲鳴とか怒鳴り声とか背後から聞こえるが、まあ、基本的に平和な一日だった。

さあ、ローション買わないと。

え、冒険者のお仕事ですか？なんか、これからするそうですね。

「討伐依頼ですか？」

受付先輩のあげた素っ頓狂な声に、俺は思わず振り向いてしまった。見ればサトウカズマと水色がいた。

「ジャイアントトードは難易度としてはそこまで高くありませんが、家畜も襲うモンスターですので危険もありますよ？本当にお二人で？」

「当然よ!!カズマは兎も角、私は上級職のアークプリースト!!カエルの一匹や二匹、ちよいちよいのちよちよいで片付けちゃうわ!!問題ないわ!!」

「そう、ですね。分かりました。お気をつけて下さい、サトウカズマさん、アクアさん」

俺は困った顔のまま依頼を受注した受付先輩から、隣で皿洗いしている同僚に視線をうつす。視線が合った同僚が怪訝そうな顔をしてきたが、それはスルーしとく。

「ジャイアントトードって、ヤバイんですか？」

「ジャイアントトード？まあ、それは私らからするとねえ。家畜丸飲みにする化け物だし。私も実家が家畜飼ってたけど、この季節になると放牧してたヤギとかやられたわね」

「へえ、成る程なー」

「でも、低級クエストよ？ちゃんと武装した冒険者なら、さっきのアクアさんの言葉通りちよちよいのちよいでしょ」

「へえ、成る程なー」

何故か頭を叩かれた。

「なぜに？」

「返事の仕方がむかついたから」

なんて理不尽。

「それより、すっかり居着いてるけど、あんたはここで働いてて良いの

「冒険者になりたくて来たんでしょ？」

一瞬同僚が何言ってるのか分からずキョトンとしてしまう。だが直ぐに元の設定を思い出した。そういう体だった。

ここでの生活が充実してすっかり忘れていたよ。

ローション作戦が思いの他きいて、楽しいオナニーライフが始まりだしたから忘れていたよ。

サブクエの魔王退治とか、今更思い出したくらいだ。

「・・・いや、でも、別に。危ない事したくないし。オナニー楽しいし」

「本当にあんたは変態ね。昨日も煩かったし・・・いつそ娼婦にでもなりなさいよ。あんたの天国でしょ。お金も稼げるし」

「いや、娼婦はちよつと。不特定多数といたすのは、病気が怖いし」

「時々現実的よね、あんたは」

でも、そうだなあ。

折角冒険者になったのだから、一度くらいはモンスター退治とか行ってもいいかもしれない。

記念に。

思い立ったらなんとやら。

これからクエストに行こうとするサトウカズマに声を掛け同行許可を貰った。最初は渋ってたけど、上目使いでお願いしたら一発だった。「汚ないぞ、変態野郎のくせに」とか言われたけど、そんな変態のお願いを聞いてしまうサトウカズマも中々のものだ。

許可を貰った後は残った洗い物をさっさと済ませて、即行で半休貰った。日頃の行いが良かったお陰か案外すんなり。対価として昨日気紛れで作ったプリンのおかわりを所望されたけど、それくらいなら別にね。

設定が心の中でも生きている間に購入しておいた冒険者なりきりセットにささつと着替え、待ち合わせ場所に向かう。腰に提げたモーニングスターが重い。

「おう、来たかカナデ。なんか冒険者っぽいな」

そう言っ手あげたサトウカズマはいつものジャージ姿。腰に

剣は提げてるけど違和感しかない。

「いつつあ、のんふあんたじー。」

「今日はいきなりごめん。で、同行させてくれてありがとう」

「ああ、別にいいよ。てか、俺達についてきても、あんまり勉強にはならないぞ？二人とも初心者なんだよ。こいつ上級職だけど、戦闘経験とかないし」

こいつと指差された水色は頬を膨らませる。

「むうううう!!何よ、何よ!!確かに戦闘経験はないけど、ヒキニートのカズマさんと一緒にしないでくれますう!!女神なのよ、私は!!見てなさいよ、デカいだけのカエルなんてワンパンよ!」

シユツシユツとシャドーする姿は心強く見える。

けど、サトウカズマは顔をしかめてた。

信用はないらしい。

「それよりも貴女!貴女も転生者だったのね!カズマから聞いたわよ!この世界にすっかり馴染んで楽しんでるみたいね。感じるわよ、魂の輝きから・・・!さあ、感謝して敬いなさい!私のお陰で貴女は今幸せなんですから!!今晚のご飯奢ってくれて良いわよ!!」

意味が分からず首を傾げるとサトウカズマが訝しげに見てきた。

「転生する時、こいつに会ったんだよな?」

「いえ?俺の時は天使っぽい人でしたよ?」

「あ、去り際あった、アクアの後任になった人かな?・・・って、何が覚えてるだよ!?アクアこら!!お前、送り出した人の顔くらい覚えておけよ!!」

サトウカズマの声に水色は視線を逸らした。

水色の額には冷や汗が浮かんでる。

「い、行くわよー!!」

「待てやこら!!」

そうやって賑やかに走り出した二人。

なんやかんやと実に楽しそうだ。

夫婦と間違われても仕方ないな、これは。

俺も武器を片手に、その背中を追い掛けた。

雲一つない、晴れやかな青空の下。

「ああああああ！助けてくれ！アクア、カナデ、助けてくれえええええ！」

「プークスクス！やばい、超うけるんですけど！カズマったら、顔真っ赤で涙目で、超必死なんですけど！」

大爆笑する水色から叫び声があった方向へと視線を向けると、ジャイアントトードに追われるサトウカズマの姿があった。

大層な名前がついてるが、要はデカイカエルの化け物だ。見た目は迫力あるが、強さは全然感じない。小四の時にキャンプ場であった、ヒグマより全然弱そう。打撃系の攻撃が効きにくいとの事もあって、剣を持つてるサトウカズマが格好つけて戦いを挑んだのだが、結果は語るまでもないものだった。

その情けない姿があまりに可哀想だったので、水色に視線を向けて言ってみた。

「助けないんですか？」

「えええー？今面白い所なのに——」

残念そうな顔だな、本気か。

割と瀬戸際なものな、サトウカズマが。

「アクアー！アクアー！！お前いつまでも笑ってないで助けてろよおおおとおお！！」

「まずは、この私をさん付けするところから始めてみましょうか」
「アクア様——」

サトウカズマが綺麗な手のひら返しを披露した所で、漸く水色が重い腰をあげて体をポキポキ鳴らす。

上級職、起動——あ、やば。

ちよつと可愛く見えてきた。馬鹿な子ほどつて奴だろうか。

「ぐすつ……。女神が、たかがカエルにここまで目の目に遭わされて、黙って引き下がれるもんですか……。っ！私はもう、汚されてしまったわ。今の汚れた私を信者が見たら、信仰心なんてダダ下がりよ！これでカエル相手に引き下がったなんて知れたら、美しくも麗しいアクア様の名が廢るってものだわ！」

「おお、何故か闘志が灯ってるじゃないの。どうしたのよ。」

サトウカズマの説得も虚しく、何故か闘志を燃やした水色は怒号をあげながら走り出した。離れた場所でグータラしてたカエルに向かって。

水色の拳が白く光出す。

「神の力、思い知れ！私の前に立ち塞がった事、そして神に牙を剥いた事！地獄で後悔しながら懺悔なさい！ゴツドブローツ！」

凄い威力がありそうな光の拳。

期待出来そうなのに、何故か期待出来ない。

「というのも俺の脳内に、打撃系に耐性がある情報が過っていたのだ。」

ボヨン、とカエルの腹が揺れる。

カエルの表情に変わりはない。

拳の威力は見事に殺されたようだ。

水色の死を悟った俺は、そつとその冥福を祈った。

南無、と。

「……。カ、カエルって、よく見ると可愛いと思うの」

そしてやっぱりパツクリいかれた水色。

そして案の定助けに走ったサトウカズマ。

その日、俺は知った。

冒険者って大変なんだなあ。

そして俺は今晩カエルシチュでオナる事を決めた。

楽しみだなあ。

さて、じやありベンジにいきますか。はい？新人ですか？

カエルの舌で身体中舐められるという、一種の触手シチュで息絶え絶えになるまでオナニーした翌日。

俺はいつものようにウェイターをしていた。

どうしたさー、クレストいかないんさー？と思った人もいるだろう。同僚も「さつさとクレストいけよ、変態が」と急かしてきたがこれにも色々訳がある。

と言うのも昨日、三人のままではクレスト達成は無理と判断した水色がパーティーメンバーを補充すると言い出したのだ。サトウカズマは渋々ながらこれを快諾。初クレストで何もしなかつた俺には選択権はなく、取り敢えずメンバー集めが始まったのだ。

それでメンバーが集まるまで、一旦クレストは中断という訳で待機中という事。

というか、いつの間に仲間になったのか。

ふむ？おかしいな。

まあ、いいか。それは取り敢えずおいておこう。

それならそれでサトウカズマ達と待っていれば良いのに、そう思つた事だろう。同僚も「暇ならお前んとこの童貞に処女でも貫通させて貰つてこい。毎晩煩いんだよ。処女拗らせんのも大概にしろ、そろそろ殺すぞ」と言ってきたが、それも、まあおいておこう。最初はムードとか大事にしたい。サトウカズマになら処女をくれてやるのも吝かではないが、ムードがないから駄目だ。ムード欲しい。

因みに、一番ないのが、ダストとかいう初日に尻撫でてきた馬鹿だ。あいつは殺す。

話は戻ってなんで働く事になったのかと言うと、あの水色のパーティー募集で直ぐに人が集まるとも思えなかつたからだ。ギルド内であの水色の評価は酔っ払いでしかない。普通避ける。

それに元々の予定では一応俺のシフトだったので穴になってる。

人手が微妙に足りてない。それで待ってる間だけという条件つきで働かせて貰っていた。いつもより一割減の時給だが、なにもしないで待ってるよりずっと有意義というもの。お金にもなるし、暇潰しにもなるしね。

「おい、変態。お仲間ん所に変なの来てるよ」

同僚に言われて視線を向ければ魔法使いっぽいのがいた。変だろ
うか？と首を傾げると同僚が説明してくれた。そこにいる魔法使
いが『紅魔族』と呼ばれる頭のおかしい一族らしい。

ただ悪い事ばかりではなく、頭は死ぬほどおもしろい魔法に関して
の才は抜群で能力の高さは保証出来るとか。まあ、その利点を軽く凌
駕するレベルで頭がおかしいからパーティーを組む人が中々いな
かったりするらしいが。

様子を窺つてるとサトウカズマと視線があつた。

めっちゃこつちに来いと手招きされてる。

「行きたくないなあ」

「いいから行きなつて。掃除は私がやつとくから」

そう言われてしまうと仕方ない。

手にしていたモップを同僚に渡し、サトウカズマの下へと向かつ
た。

「悪いな工作中、大丈夫だったか？」

「不本意ながら大丈夫になった」

「お前な・・・」

溜息をつきながらもサトウカズマは紅魔族の女の子に俺が仲間であ
る説明をした。聞いている感じだと俺がOKを出せば仲間になるら
しい。

ぼやーと聞いていると紅魔族の女の子がババツとポーズをとつてき
た。

「ふふふつ、改めて教えましょう！我が名はめぐみん！アークウイ
ザードを生業とし、最強の攻撃魔法、爆裂魔法を操る者・・・！」

決まった、という表情に思う所があつて俺も真似してみた。ババツ
とポーズをとり、声を張る。

「我が名はタカハシ・カナデ！冒険者を生業とし、ギルドのウェイターをしながら、日々オナニーで自らの秘部を開発する者……！」

「アウトロー!!」

スッパーンという音と共に頭に衝撃が走る。

サトウカズマはツツコミの天才や。

そんな俺を紅魔族の女の子が啞然と見つめてくる。

「おお！カツコイイ自己紹介ですね！まさかアクセルにもこんな――

―あれ？でも今なにか変だったような……」

「いやあ!?なんでもないからな!?幻聴だろ、幻聴!!なあ、アクア!!今日は幻聴がよく響く日だなあ！おい！」

「?幻聴?何を言ってるカズマさん?ついに頭おかしくなったの?」

「この馬鹿！空気読めよ！」

誤解されても面白くないのでちゃんと教えようとしたら、サトウカズマにアイアンクローされた。地味に痛い。

喋るなどの事なので頷いておいた。

「あの、日々の後なんて――」

「研鑽とか修行とか!そんなんじやなかったかなあ!!そんな事よりめぐみん!ほら、お腹減ったろ!?メニューでも見て適当に頼んでくれ!な!」

「んん?まあ、そうですね、お言葉に甘えさせて頂きます」

めぐみんは何か言いたそうな顔をしながら、差し出されたメニューを手に取った。俺は引き続きアイアンクローされながら説教された。

いや、だ、大丈夫だつて。

今、殆どお客いないし、ね?ついだよ、出来心。

いたたたたたた、ちよ、いたたた。

はい、すいませんでした、調子に乗りました。

オナニーの素晴らしさを伝えたくて、つい。

少したつて、俺達は揃って平原にやってきていた。

勿論昨日中断したクエストを達成する為だ。
ジャイアントトード討伐である。

今日も元気にカエルの餌食になった水色を横目に、マントをはためかせるめぐみんを見る。杖がめっちゃ光ってる。カッコイイ。

「見ていてください。これが、人類が行える中で最も威力のある攻撃手段。・・・これが、究極の攻撃魔法です」

めぐみんの瞳が紅の光を灯す。

「エクスプロージョンッ！」

めぐみんの怒号と共に、爆炎が大地を砕いた。

そこにいたカエルは灰も残さず木っ端微塵。

凄い、そしておつかねえ。

魔法ってこんなん？

人が使って良いもんじゃなくね？

大丈夫？免許とか必要だったりしない？

心配になってめぐみんを見たら、地面にうつ伏せに倒れていた。サトウカズマは気づいていない。魔法が放たれた場所に釘付けた。目がキラキラしてる。

なんだよ、おい、ちよつと可愛いじゃん。

普段欲望しか映さない濁った目してる癖に。

ギャップ萌えとか止めるよな、子宮にくるだろうが。

「あの一、気づいたなら、何か一声掛けてくれても良いと思うのですが・・・」

俺の視線に気づいたためぐみんが、弱々しくそんな事を言った。喋れるなら放っておいてもと思うが・・・。

「もう死ぬ？埋める？」

「埋めないで下さい！大丈夫ですから！実は——」

めぐみんから話を聞いてみると、どうやらさっきの爆裂なんちゃらは大量の魔力を使う本当に最強レベルの魔法らしい。現在のめぐみんでは一発が限度。それも一発放てばスタミナまで使いきり倒れてしまうのだと。

途中から聞いてたサトウカズマがゲンナリしてたのは言うまでも

ない。

そんな話をしていると、さっきの爆裂なんちゃらの爆音を聞いてかカエルが現れた。恐らくラストガマである。昨日倒した二匹、めぐみんが倒した一匹、今現在水色が体をはって足止めしてるカエルが一匹——数えてみたらやっぱりラストガマである。

てか、水色まだ大丈夫なのかな？

ふと見たらさつきより飲み込まれていた。

凄いビクンビクンしてる。

死んだな。

南無。

「あ、めぐみん！」

サトウカズマの悲鳴のような声に振り向くと、めぐみんがパツクリいかれていた。

そりやもう、パツクリと。

「……カナデ、一匹頼めるか」

モーニングスターでは相性が悪そうだったので、今日はギルドに飾ってあったハルバードを持ってきてる。思ったより軽くて、飾ってある割には切れ味も良好。リングの皮剥きとかも簡単に出来た一品だ。つまり、いけるっちゃ、いける。

「まあ、OK」

「悪いけど頼むわ、アクアの方」

「らじやー」

サトウカズマと獲物を半分こ。

俺も今日はカエルを一匹仕留めた。

初めてカエルを斬った感触はなんとも言えないものだったけど、普段割と料理する派だったのでそこまで感じる物はなかった。どの部位が美味しいんだろうとか、気になった程度だ。

カエルの口から水色を引っ張り出すと、目が死んでいた。そのビチヨビチヨのヌラヌラ感に、どんな舌さばきでまさぐられたのかを考え、昨晚のオナニーを思い出してちよつと興奮したのは内緒だ。

流石に被害者にカエルの舌さばきについては聞かない。聞きたい

けど。

「ありがどねえええー」

助かった事に安堵したのか、ヌラヌラのネチヨネチヨのビチヨビチヨな水色がしがみついていた。ほんのり温もりのある謎の液体の感触に、思わず這わされる舌の感触を想像し俺氏大興奮である。

ああ、めぐみんの代わりに俺が食べられるべきだったか。反省せねば。

「——おい、そこの変態。今とんでもない事考えてたろ」

「ううん、ちよつとだけえ」

「未成年の前で絶対言うなよ。ド変態野郎」

「りよ」

それからカエルの処理とか諸々を済ませ、ビチヨビチヨな二人をつれて俺達は帰った。銭湯に真っ直ぐ行ったのは言うまでもない。

おかずが一杯。

今夜は良い夜になりそうだ。

そんな痴女みたいに言わないでくれますか? ええ? いや、オナリはしますけど。

なんやかんやあって、サトウカズマがクズと変態の称号貰ったり、初クエストを達成したり、一晩では処理仕切れないオカズを得たり、めぐみんの正式なパーティー加入が決まった夜。

初クエスト達成祝いとめぐみんの歓迎会を兼ねた食事会をする事になった。私的にはさつさと帰ってオナニーしたいのだが・・・まあ、こんな日もあるだろう。人間社会で生きる以上、避けられぬイベントはある。

オナニーはちよつと我慢だ。

あー、ムラムラする。

早く帰りたい。

あ、駄目だな。

我慢とか無理ぽ。

報酬を取りにいったサトウカズマと頼んだ料理が来るのを、のんびり股間撫でながら待っていると同僚が顔を見せた。

何事かと思えば手招きされてる。

「——って、カナデー? よそ見しないでちゃんと見て頂戴よ。私この華麗なイリュージョンを。ほらほら、見て見て、いくわよ! お水を入れたコップにハンカチを乗せますとー! じゃじゃーん! ちっちゃくなっちゃったー!」

「おおー! アクア凄いです! どうやってるのですか!? 教えて下さい!! 魔法ですか!?!」

「ちっちゃー! 魔法なんてチャチな物じゃないわ、イリュージョンよ。種も仕掛けもないんだから」

種も仕掛けもないって・・・何でも良いけど、それ元に戻せるのか? 弁償って言われる姿が、目に浮かぶんだけど。・・・いやまあ、な

んでも良いけど。

楽しそうな二人を置いて、取り敢えず俺は同僚の下に向かった。結構繁盛してるし、人手が足りないのかな？

「やっときた」

「気づかなくて・・・それで？手伝い？」

「違うわよ。夜のシフトはちゃんと回ってる。そうじゃなくて、ほら、あんたんとこの童貞捕まってるわよ？」

そつと指差された方を見れば、金髪のチャンネルに捕まってる。何だろ、あのチャンネルー。

「・・・美人局？」

「違う、違う。ある意味、美人局並みに面倒な人だけ。アクセルの冒険者ギルドで、割と問題児の一人よ」

「問題児？」

「名前はダクネス。クルセイダーっていうナイトの上級職なんだけど・・・あんまり評判良くないのよ。聞いた話なんだけど、攻撃当たらないノーコン、無茶な特攻して隊列を乱す、迷惑かけてる癖に改善しない、人の言うこと聞かない・・・まあ、冒険者の間で同じパーティーには入れたくないナンバー3に入るかも知れない人よ」

なにそれ地雷じゃないか。

見てくれのよさに騙されたら、即終了の奴じゃないか。

「普段はクリスって盗賊の子とパーティー組んでるんだけど、クリスって子結構奔放で直ぐどっか行っちゃうのよ。で、一人になると、ああして、新顔の所に顔を出したりしてて・・・面倒な事になる前に止めた方が良いわよ？ほら、あんたんとこの、下心で生きてる所あるじゃない」

「それは否定しないけど」

ここで働いてた時から知ってた事ではあったけど、一緒に仕事してサトウカズマがエロの権化だったって改めて知ったからね。しかもムツツリだからね。

あれだけ濁った目してる癖に。

騙される前に止めにくいこうとしたけど、予想に反して金髪のチャン

ネーをサトウカズマはあしらった。

これは意外だ。——てか、かつこよく見えるから、そのギャップ萌え止めるよな。こっちは突っ込むの我慢してんだよ。きゅんきゅんきちやうだろうが。

ぼけーつと見てると、一人こちらに戻ってきたサトウカズマと目が合った。

「あ、カナデか。待たせたなーって、なんだよその顔？」

「ううん、さ、サトウカズマが女の、それも美人をあしらうとは思わなかったから。普通にびつくりした」

「俺が日頃からどんな目で見られてるのか、よく分かったよ。俺だってな人を選ぶんだよ」

成る程。

面倒臭い何かを本能的に感じたのか。

伊達に水色とめぐみんを拾った訳じゃないらしい。

賢くなったね、サトウカズマ。

「・・・なんだろう、俺はお前にツッコまなくちゃいけない気がする」

「突っ込むの？マジで？出来ればもうちよつと待って欲しいんだけど・・・マジで？」

「ん？待て、なんかずれてる気がする」

そんな話をしながらテーブルに戻ると料理が並んでいた。そしてその料理を前に二匹の獣が涎を垂らしている。なんとか待ては出来たらしい。

俺の方はもう待て出来てないというのに。

偉いね、ふたりは。

俺なんて下着やベーカーかな。

「待たせて悪かったな。んじゃ早速料理を——つと行きたい所だけど、その前に報酬分けるぞー」

そうして取り出されたのは十二万五千エリス。

綺麗に分けると一人頭三万二千五百五十エリスだけど、リーダー手当てとしてサトウカズマは三万五千エリスにして、後のメンバーは切りよく三万という分配にした。

リーダーは大変だからね。手当てくらいないとやってられないからね。

水色がブルー文句を言っていたけど、シユワシユワを目の前においたらご機嫌になった。文句あるかと聞いたけど、「任せるわー」この事。ちよろい。

めぐみんは元よりサトウカズマに預けるつもりだったらしく、あっさりを受け取りを拒否。ご飯やらなんやらの世話をしてくれたりそれで良いらしい。

俺は・・・一応貰っておいた。

ぶつちやけウエイターの仕事の方が儲かってて、受け取らなくても良いかと思っただけど、こういう事はちゃんとしといた方が良いと思うので。

てか、止めるよな。

普段ただのエロの癖に、そんなしつかりした所見せるんじゃないよ。一丁前にリーダー面して。そのギャップ萌えで俺のグラウンドキヤニオンが冠水するだろうが。

そうして受け取りを済ませた後は食事会。

カエルの唐揚げを食べながら皆と談笑——しながらオナニーも断行。もうムラムラしてしょうがない、止められない止まらない。

そもそも、カエルの粘液をお裾分けされてから、俺氏MAXで大興奮してるから本当無理。銭湯で1フィニッシュかましてなかったら、生野菜注文してここで突っ込んだ自信がある。それくらい、限界。

そう俺はローション先生のお陰で普通に突っ込めるようになっていた。一回先生の力を借りて気持ちよさに目覚めてからは、本当日々楽しいオナニーライフを送れている。え？大丈夫、うっかり処女膜破ってない。道具で破るとか、なんか嫌だ。超注意してる。

それより、ありがとう、ローション先生。

それにだ、あれだ、人前でなに食わぬ顔でオナニーするの気持ちいいわ。なにこれ、背徳感っていうの？ばないっす。ばないっすよ、先輩。青姦する奴の気持ち、今なら分かる。このギリギリ感、良いわあ。病み付きになりそう。

「あふっ」

思わず溢れた声に水色が不思議そうな視線を向けてくる。

「どうしたのカナデ？ちよつと顔赤いわよ？もう酔っ払っちゃったの？まだ二杯もシユワシユワ飲んでないのに？」

「まあ、あんまりお酒とか、得意じゃないのでえ——へん」

「そうなのね。それなら、カナデの残りは私が貰ってあげるわ！」

あかん、変な声出てしまった。

水色がアホだから気づかなかったけど、これ人によつては気づく。完全にヤバイわ。

浚われてくジヨツキをぼーっと眺めると、心配そうにこちらを見るめぐみんと目が合った。

「大丈夫ですか？その、無理はしないで下さい。歓迎会をしてくれる気持ちは嬉しいのですが、無理して周りに付き合っただけで飲まなくて良いんですよ？そうですよね？」

そう言いながらめぐみんはサトウカズマに視線を送った。釣られてサトウカズマを見れば、同意するように頷く。あれ、イケメンがいる？

「ま、苦手ならしょうがないからな。無理して飲むものでもないし——」

あつ、今頃気づいた。

サトウカズマがどうか関係ないわ。

多分俺、ただ発情してるだけだわ。

だって今の何でもない言葉で、ちよつとイッたもん。

「——って聞いているか？おーい、カナデさーん？」

「お、おほうっ?!聞いている聞いている!超聞いている!」

「本当か？てか、大丈夫か？」

大丈夫な訳あるか。

軽く放心したわ。

お前のせいで。

それにしても何故こんなにも？

心当たりは昼間のヌルヌルくらい——そう言えば、古来より人は

戦った後とか異様に興奮するものだとかなんとか？いや、よく知らないけど。でも、戦争中とか兵隊さんは女に飢えたりするっていうし……そういうやつだろうか？

「だ、大丈夫ですか？本当に」

ああ、どうしよう。

思いつきりズボズボしたい。

タケシくん（デイルド）入れたい。

「どうしたの？さつきからゴソゴソして？おトイレいきたいの？カナデさん、おトイレなの？この麗しきアクア様に連れションを所望なの？」

今ならダストのアホでも受け入れる自信がある。

いや、それは流石に見境無さすぎ——いや、受け入れるな。間違はなく一発決めちゃうな。

初めての相手がアレとか、後で本気で死にたくなるだろうけど。

「おい、カナデキーン」

ええい、ままよつ！

「ちよつとトイレ……！」

もう1フィニッシュ決めてこようか！

☆☆☆

カナデがトイレに行つて暫く。

中々戻つてこないカナデを心配してか、めぐみんながソワソワし始めた。

「カズマ。だ、大丈夫でしょうか？」

めぐみんなはそう言うが、俺はなにも心配してなかった。

楽天家で簡単にエロワードを発するド変態のカナデとは一月程度の浅い付き合いしかない。今回のジャイアントトードの一件前は、客と店員の関係で大した話もなかった。たまに外で会うと元いた世界

談義で盛り上がったけど、それだけだ。知らない事が多い。けれど大丈夫であろうと何となく思える。——と言うのも、あのド変態、なんの特典も持たず普通に街で暮らしてたりする猛者だからだ。

俺でさえ駄女神とはいえ、共通の感覚を持つてる仲間のアクアがいる。ホームシックになったり、ひもじい思ったり、色々とうんざりしたが、それでも今日まで生きてこられたのは仲間が、味方がいたからだ。

というのに、あのド変態は女になるという訳の分からない特典以外何も得ず、文字通りの着の身着のまままでこちらに来てる。それにも関わらず、初日に職場と宿まで手に入れて、次の日には目的の一つである玩具まで手にいれたらしい。

そう、生活すら危なかった俺と違って、あのド変態は二日目には娯楽品を手にしてるのだ。

この世界での娯楽品は高い。

試しに聞いてみたら、俺の給料の十日分だった。

二日目と言えば、俺なんて貧困で喘いでいたと言うのに。

「・・・大丈夫だろ」

「ですが・・・なにかフラフラしてましたし」

「いや、大丈夫だって。あいつ、動かないジャイアントトードとはいえ、一撃で殺せるやつだからな」

今日の討伐クエストだって、なんののかんの言ってるちゃんとジャイアントトードを仕留めてる。しかも一撃で。俺なんてめっちゃ苦労したのに。

これが持つて生まれた才の差なのだろうか。

前の世界での多額の借金背負わされたと笑い話をしていたが、もしかすると本気で借金を何とか出来るスペックがあつて、それ故に楽天的に笑っていたのではないかと思えてきた。

あれ、おかしいな、目から汗が。

汗が溢れないように上を向いていると、服の袖を引っ張られた。視線を向けるとやつぱりめぐみんが心配そうな顔をしてる。

「やつぱり心配です、カズマ見てきて下さい」

「なんで俺が・・・あいつが元おと——」
「おと？」

元男って言うって良いのか？

そーいやこれ、アクアにも言ってるいな。

覚えてるって言うから、そこんとこ特別言わなかったもんな。あ、こいつら、今日一緒に銭湯行ってるじゃん。

・・・黙っておこう。

「いや、何でもない。ていうかな、女子トイレに俺が行くわけにもいかないだろ？めぐみんが見てこいつて。何かあったら呼んでくれよ」

そう伝えるとめぐみんは隣に視線を向けた。

へべれけになって酒瓶を抱える、もとなんちゃら様だ。

「離してくれそうにないのです」

よく見れば元なんちゃら様はめぐみんの片腕も抱き込んで幸せそうにグースカしてる。

「こんなになんか幸せそうにしてるのを見ると、起こすのも忍びなくて・・・」
こいつ、頭おかしいと思ってるけど、割とイヤツかも知れない。ぶつちやけ、アクアなんてそこらにぶん投げてしまっても、どうでも良い気がするが・・・まあ、お子様に見せる光景でもないしなあ。それなら仕方ないかと近くまで様子を見に行く事にした。あくまで近くまでだ。

基本的に男だらけな冒険者ギルドの女子トイレは男子トイレとは正反対の少し奥まった所にある。理由は言わずもがなだ。言葉にせずとも分かるだろう。

女子トイレへ向かっているとトイレ帰りと思われる女子冒険者から汚物を見るような目で見られたりして、凄く心が傷ついた。帰りたくなった。けど、一度任せろと口にしてしまった以上様子も見ないで帰る訳にもいかない。それは俺のちっちゃなプライドが許さない。だからなんとか視線に堪えて女子トイレの前までやってきたのだが——
——何やら聞き覚えのある声が聞こえてきた。

それはトイレより更に奥、倉庫っぽい所から聞こえていた。

「んん！ああつ、あん！い、いっっちゃううううう！」

少し開いた扉の隙間から響く聞き覚えのある喘ぎ声に、不思議と興奮より怒りを覚えた。

「あふっ、らめえええ!!」

「駄目なのはお前だ、ド変態いいいい!!何してんだお前は!!」

「ひゃうっ!?な、んで、サトウツツツああっ!!ふっ…….
ふう」

それから少しして、真顔のまま頬を紅潮させたカナデが部屋から出てきた。真顔ではあるけど、どこか一仕事終えたような達成感を漂わせていたカナデの手には、ビチャビチャの棒が握られている。噂に聞いていた相棒タカシだろう。

そしてカナデの顔は、いやにツヤツヤしてた。

「……サトウカズマさん、女子トイレの所まで来て、何を騒いでるの?変態かな?」

「お前がっ、一番のっ、変態だろうがああ!!」

「おおふっ!!」

取り敢えず、出てきたあいつには渾身のボディをかましといた。「そこはらめえ」とかふざけた声を出したのでおまけにチョークスリーパーもかました。

それからパーティーリーダーとしてド変態にオナ禁を言い渡した俺は、白目を剥いたド変態を引き摺ってテーブルに戻った。

白い目で見えてくるめぐみんに言いたい。

いや、俺悪くないから。

駄目と言われたら余計にやりたくなるのが人間の性ですが？え、ああ、いえ、オナニーの話です。

オナ禁生活三日目。

サトウカズマにタケシくんを奪われ、性欲を満足に満たせず絶望の淵をさ迷い歩いていた俺は今、沸き上がる劣情の波を押さえ込み朦朧とする意識に鞭を打ちながら――――飛び交うキャベツを殴り飛ばしていた。

「うっだらあ!!」

唸りをあげるモーニングスター。

鬱憤が込められたそれはキャベツの顔面を粉碎する。

攻撃を受けたキャベツは力なく地面に転がった。

「よし、よくやった変態。今日だけは、あんたと同室で良かったと、心の底から思うわ。この調子でどんどん頼むわよー」

そう言いながら俺が打ち落としたキャベツを拾う同僚はホクホク顔。俺と違いご機嫌だった。そのご機嫌、ちよつと分けて欲しい。

「あ、ほら！次来たわよ！やっちゃいなさい、変態！」

「死んだキャベツだけが良いキャベツ！」

「意味わかんないけど、やっちゃいなさい！ボーナスー！いええーい！」

少し前、いつものようにウェイターの仕事をしていた俺の耳に届いたのは聞き慣れない警報だった。

すわゴジラでも攻めてきたのかな、と思いながらのんきにモツプの棒の所へ股間を擦り付け、沸き上がる劣情を紛らわせていると非番でない筈の同僚に頭をスパンと叩かれた。

幾ら同僚とはいえ許せず「何故にいきなり叩くのか」「あと少しだったのに」と問えば、仕事中にオナニーしてるからだと至極真つ当な事を言われた。

せやな。

まあ、オナニーの事はおいておいて。

結局警報がなんだったのかと言うと、アクセル名物のキャベツの収穫祭が始まる合図らしかった。

この世界のキャベツは何故か飛ぶ。それも集団で飛ぶ。理屈とか理由とかよく分からないけど、渡り鳥の如く飛ぶのだ。諸説は色々あるらしいが、まあそこら辺は考えても仕方ないと個人的に思う。何故なら、川でバナナが釣れて、畑でサンマがとれる世界だ。考えるだけアホらしい。

そんなキャベツ渡りだが、毎年アクセルの近くで起こるらしい。そんな訳の分からない物、放っておけば良いのにとと思うだろう。俺はそう思う。けど、実際問題そうもいかない。何故ならこのキャベツ、季節物で特別高く売れるのだ。アクセルブランドなる名前もあるらしく、今年は当たり年で一個一万エリスで取引される事が決まっている。

その為、キャベツ収穫に深く関係する冒険者ギルド職員と、それを収穫する冒険者達は熱気に満ちていた。

アクセル冒険者ギルド『灼熱の刻』である。

そんな激動の日。

同僚によって突如早退させられた俺は冒険者なりきりセットを装備させられ、あれよあれよという間に戦場へと連れていかれた。そして同僚に肩を叩かれこう言われたのだ。「日頃の借りを返せ」と。

はい、そういう訳でキャベツを狩ってます。不本意だけど狩ってます。

いやだってね、断れないもん。同僚めちや怖えんだもん。目がエリスだったもん。逆らったらやられるっ！って思ったよね。売られるって。

そうしてオナニー出来ない悲しみと鬱憤と切なさを込めてキャベツを殴り飛ばすこと暫く、第一波のキャベツ達を討ち滅ぼした所で聞き覚えのある声が耳に響いてきた。

「キャベツが飛ぶって本当なんだよ!? ふぎけん!!」

視線を向ければ宿敵の姿があった。

タケシくんを奪った、サトウカズマだ。

憎しみが心の中で燃え上がる。

百歩譲ってタケシくんを奪った事はいい。

誰が悪かったかと言えば、お家に帰るまでオナニーを我慢出来なかった俺が悪いのだから。遠足は帰るまでが遠足。つまりオナニーは帰ってからすべしということ。——いや、本当の問題点をあげるなら、オナニー出来るような玩具を売ってる所が悪くて、もつと言えばオナニーが気持ちいと思ってしまう体のつくりが悪くて、究極的に言えば俺は全然悪くなくて寧ろ神の悪戯によって苦悩する被害者だとは思うのだけだ。

まあそれは兎も角、俺には許せない事があった。

サトウカズマからふわっとやってきて、鼻を刺激したソレだ。

俺は同僚に向かって踏み出した足を切り返し、サトウカズマに向かってダツシユする。

そしてモーニングスターを構えた。

「このオナニーやろうううう!! 一人でシコシコ楽しんでじゃねえぞこらああああ!!」

「うおっ!? カナデ!」

降り下ろしたそれはあっさりと避けられた。

この野郎、悪運だけは強い!

「あつぶね! いきなり何すんだ馬鹿野郎!」

「うるせえええ!! それはこっちの台詞だ!! おまつ、人にオナ禁させておきながらっ! おまつ、オナニーしたなあああ!! 羨ましいいいいい!!」

「うおっおお!? おおお!? おまつ、止めろおおおお!!」

俺達の周囲にいた冒険者達(女性)から、サトウカズマへ軽蔑の眼差しが飛ぶ。サトウカズマは頬に汗をかき焦り、俺の口を勢いよく押さえてきた。

噎せ返る性の臭いに、ちよつと心が癒される。

「おまつ、こんな時に何言ってるんだ!?!そ、そんな訳ないだろ!?!ただでさえクリスとの一件でクズマとか鬼畜のカズマとか、見に覚えのないあだ名が――」

「はふ、はあ、はあ・・・も、もうちよつと、このままで」

「臭いを嗅ぐんじゃねえ!!」

パツカーンと良い音が鳴った。

頭がめっさ痛い。

「ちよ、ちよつとは手加減しろお」

「誰がするかド変態!!てかおまえなつ、なんて事口走ってるんだ!!みなさーん違いますよー!妄言ですからー!このド変態の妄言ですからー!」

「嘘つくな、サトウカズマ。この臭いは、このイカ臭さは、百パー精液の臭いだ。きつとそうだ、絶対そうだ、そうに違いない、そうだと言ってよオナマ」

「誰がオナマだっ!」

パツカーンと二回目になる良い音が鳴った。

言わずもがな、痛い。

「おい、カズマ。私の前で女性に暴力を振るうな。騎士として三度目は看過出来んぞ」

凜とした声がサトウカズマの動きを止めた。

声の方へと視線を向ければいつかの金髪ノーコン騎士がいる。真っ正面から見れば、中々に綺麗な人だった。色気が凄い。だが聞いている噂通りなら、ただの見せ掛けポンコツである。この間もギルドで騒いでるの見ていたが、中々のポンコツっぷりだった。

俺はサトウカズマにそつと耳打ちした。

「・・・サトウカズマ、見損なつたよ。所詮か」

「どういう意味だ、おい。こら」

「エロマか」

「どんだんあだ名を増やしていくな。ダクネスは・・・あれにも色々あつたんだよ」

詳しく長々と言いつのような事情を聞いたが、要はサトウカズマが

へタレて断れなかったらしい。そして今現在進行形でお試し期間中の仲間みたいになっており、今回のキャベツ収穫の活躍次第ではーみたいな話になってしまったという。

「……」

「な、なんだよつ、その目は」

「お前、結局はおっぱいと顔に負けたろ」

サトウカズマの視線が明後日を見た。

「カナデ。今日はさ、良い天気だな。空が青い」

「キャベツ飛び交ってるけどな」

サトウカズマが見上げた先には沢山のキャベツ達が舞っていた。

僅かな沈黙が流れた後、サトウカズマの瞳にやけくその四文字が映った。

「うるせえええ！お前も元男なら分かるだろ?!しよーがねんだよおお！童貞舐めんなあ！ころつといっちゃうんだよ！本当に、悲しくなるくらい、ころつといっちゃうんだよ！大人の色気は童貞には強すぎるー！」

「知るかあああ！そこを踏ん張るのがリーダーの務めだろおお!!二人のアホの子連れてるだけで一杯一杯の癖に、もう一人体しか取り柄がないノーコン猪ポンコツ騎士なんて捕まえてどうするつもりだあ！」

「体しか取り柄がないつ、ノーコンつ、猪つ、ポンコツ騎士つ……ぐふつ」

視界の端つこでポンコツが膝をついた。

何故だか顔が上気してる。

まあ、良い。無視しておこう。

「カナデ、お前、自分の事平然と棚上げしてよく言えたな。お前だって――」

「もう！そんなにムラムラしてるならつ、俺を抱けば良いじゃない!!」

「――誰が抱くか!!」

拳を握りサトウカズマの前で上下させる。

「シコシコしたんだろつ。なあ、シコシコしたんだろ。このポンコツ

で」

「しつ、してない！してないぞ！！止めろっ、ちよ、そんな目で見るな！」
人差し指と親指をくっつけ丸を作り、もう一つの手の人差し指で丸をズゴズゴする。

「ぶつかってこいつ、ガツンとぶつかってこい！サトウカズマだったら受け止めてやる！俺の股間は受け入れOKだ！こい！出来れば、ちよつとムーディーにこい！」

「ちよつ！違うんですううう！！俺は無実なんですううう！！そんな目で見ないでええ！変態はこいつと、そのダクネスだけなんです！そんな犯罪者を見る目で見ないでええ！！」

「お、おい！カズマ！今、私の事も売らなかったか!?おい！カズマ!!」
それから程なくして金の亡者と化した同僚に連行された俺は、キャベツ達との熱い戦いを繰り広げる事になった。凄いムラムラした。

いつものサトウカズマパーティーはそれぞれ別で活動し、それぞれそこそこに稼いだようだ。水色が捕まえた奴だけ、なんか形が違う気がしたが・・・まあ、黙っておいた。面倒そうだから。

それであるのポンコツはというと、大量のキャベツに襲われ悦んできた。なんだあの変態は。

キャベツ収穫が終わったら、カズマからタケシくんが返却された。何故かローションも一緒で。

「サトウカズマ・・・いいの?」

そう聞いた俺に、サトウカズマはとても良い顔で答えた。

「襲われたくないからな」

そう言い残しダツシユで逃げていったサトウカズマを眺めながら、返して貰ったタケシくんを撫でながら思った。

「・・・フリかな?」

よし、なら襲うか。

そう心に決めた俺はそつとタケシくんをポケットにしまった。オ
ナ禁続行である。

貴方のハートを頂きたいのですが？いや、本当はチンコだけで良いです。

オナ禁生活、延長からの七日目。

あの手この手でサトウカズマの貞操を狙うものの、今日という日まですら回避され続けていた俺は、師匠の下を訪れていた。

「師匠どうやったら、やれますか？」

「人を淫乱女みたいに言うの止めてくれるかな？」

誰かから何かを奪うなら、これ以上の相手はおるまい。

そう思っただけ俺は、盗みのプロである盗賊クリス、もとい師匠に相談していた。

「え？違うんですか？師匠、そんなギルド職員よりある意味過激な露出の多いスケベ服着てるのに、淫乱じゃないんですか？冒険者の間でシコイ貧乳ランキング一位なのに、俺の童貞はクリスにやっただけで冒険者が二十人くらいいたのに、ハートキャッチクリキュアじゃないんですか？ヤリマンビッチじゃないんですか？」

「露出の多い服着てることは言い訳出来ないけど・・・ハートキャッチクリキュアでもないし、ヤリマンビッチでもないから。そもそも経験ないし。というか、そのなんとかランキングとか、自称あたしに童貞くれたとかいうアホ共の話はもっと詳しく教えて」

怒気を纏ったクリスに逆らえる訳もなく、俺は快くアホ共の名前を教えた。嘘つき共には是非とも鉄槌をくれて貰いたい。

一通り話し終えた後、俺は露出趣味のある処女クリスに相談を続行した。ちよつと頼りなくなっただけで、盗みのプロである事は変わらないからね。同僚に相談しても「睡眠薬でも食べ物に混ぜれば？ははは」と鬼畜な提案しかしてこないから、こつちの方が全然頼りになるというもの。

「それにしてもカズマねえ・・・いや、悪い子じゃないよ？でも良いの？」

「まあ、チンコちつさそうだもんね」

「いや、そこじゃなくて」

クリスは少し考える素振りを見せた後、「あのね」と話し始めた。「経験がないからなんとも言えないんだけどさ、そういう事は簡単にしちや駄目だと思うよ。そういうのは結婚した相手とだけするものでしょ。そもそも、その、せ・・・せつく・・・すは愛する男が子供を作る為に行う行為で、快樂の為に行うものではないの」「成る程なー」

「そうなの。良い？エリス様の教えでは——」

そうして始まったのは、クリスによるエリス様のありがたいお言葉講座。教えを口にするクリスは、まるでエリス教の御神体である女神エリスもかくもや、といった雰囲気を漂わせ慈愛に満ちた声で優しく語る。愛するとはなんぞや、幸せとはなんぞやと。

クリスの口から溢れる言葉はまるでオルゴールの音色のように耳に心地よく、いつまでも聞いていたい気持ちにさせられた。

そして同時に凄く眠たくなる声でもあり、俺は自らの体の反応に逆らわず———思う様寝た。

「———って聞いてますか!？」

「っおっほう!?!んにゃ?んん?いひえる、きいてひえる」

「全然聞いてないじゃないですか!!」

プンプンとプンスコするクリスに謝っていると、後ろから笑い声が聞こえてきた。振り向いて見ればウンコと同価値のダストと何故かパーティーを組んでる、魔法使いのリーンの姿があった。ダストをしばいたりしてる内に仲良くなった子だ。

「やつほー、カナデー。カズマのお尻追い掛けるのは止めて、エリス教にでも入信すんのー?」

「おーす、リーン。エリス教には入信しなーい。あとカズマのお尻は追い掛けてないから。チンコだけだから」

「あははっ!今日も今日とてアホだねー、あんたは」

そう笑いながらリーンは俺達の隣に腰掛けた。

「リーン!笑い事じゃないんだからね!」

「まあまあ、クリスも落ち着いて落ち着いて。この子がアホなのは最

初からでしよ。そう目くじらを立てないの。一杯奢るからさ、ね？」
「あ~~~~もうっ！」

リーンに宥められたクリスは膨れながらも椅子に座り直し、大きな声でウェイターを呼ぶとシユワシユワを注文した。大ジョッキを叫ぶ。

それに続いてリーンと俺もおつまみとシユワシユワを頼んでおく。そう時間も掛からずシユワシユワがやってきたので、三人で乾杯した。

クリスがシユワシユワを一気する中、リーンが俺の事情を聞いてきたので素直に教えた。ここ数日アタックが無駄に終わった事や、今夜のゾンビメーカー討伐クエストを置いてけぼりにされた事だ。

「夜クエはマジで身の危険を感じるから、お前は来るなって言われた。くううーなんだよおー、人を性犯罪者みたいにさー！」

「じゃあ、もし何かの拍子でカズマと二人きりになったら？」

「草むらに連れ込む」

「そりや、置いていかれるよ」

なん、だと・・・!?

童貞なら、はい喜んでっていう場面じゃないのか!?

疑いの眼差しでリーンを見れば、呆れた視線が返ってきた。

「じゃあさ、もし夜クエでダストと——」

「殺す」

「そういう事」

成る程・・・いや、待て。

それって、サトウカズマにとって俺は、俺にとってのダストと同レベルという事ではないか。

あまりのシヨックにカエルの唐揚げが口から溢れた。

勿体ないから直ぐ拾って食べ——ようとしたけど、クリスに止められたので未遂に終わる。三秒ルールは通用しなかった。

「そんなにシヨック受けなくても・・・というか、こう言っちゃなんだけど、なんでカズマ？あんまり良い噂聞かないよ？他にも良さげな人いるじゃん。あ、ほら、最近こっちに戻ってきたミツルギさんとか」

リーンは不思議そうな顔でそう言ってきた。

ミツルギ？とやらは知らんからおいておいて、まったく残念な奴だ。カズマの良さが分からんとはな。

「そうだなあ、性欲が籠った舐めるような視線で見ると、こっちはアピールすると途端に怖じ気づく所とか・・・」

「えええ」

「誘惑する為にあげたパンツを、嫌そうな顔をしながらも大事そうにポケットにしまう所とか・・・」

「うわあ」

良いところを挙げた筈なのに、リーンとクリスは何故だかどんどんゲンナリしていく。おかしい。

良い所なのに。エロススケベの癖に隠そうとする、その童貞臭さが良いのに。そういうギャップが良いのに。可愛いのに。キyunキyunくるのに。

「・・・ええつと、まあ、誠実で優しいし？」

「全然説得力ないんだけど」

「ダクネス、大丈夫かな・・・」

ダクネスの何を心配してるんだろうか、クリスは。

基本的にあいつ頭おかしいのに。

仲間に入る前から、大分おかしいのに。

それから暫く話していると女子会してる感じになって、だんだんシユワシユワの量が増えてきた。俺は強い方なので少し気分が高揚してオナリたくなる程度だが、リーンとクリスを見るからにテンションがあがってきた。

「そーらーくりひゅー！しんひゅつのあいを、むけるんらよ!!しよひいで！わたひは、ぼーきえんしやにきやたりつがれりゅようにや、でいまひよーつきやいに、ひえんひえちゆになるんらよおお!!うひやひやひやー！」

「そりやーそりやー！ひやれが、まんえんひよひよよりや!!こっぴらつてねえ、ひやいへんなんらから！しゆきでひよひよにや、ないらよお！ひよれにい、あらしは、みんなやがしあわせにやら、それへい

いんらもん！ふふふふ！」

おお、何言ってるか全然分からない。

でも凄い楽しそう。

もうここまで来ると、酔っぱらわない方がアホみたいだな。損してる気分だ。

という訳で俺も限界にチャレンジ。

酔いの向こう側を目指す為に同僚におかわりを所望。

大ジョッキこいやあ！

◆◆◆

「良いか、アクアちゃんとやれよ？お前が引き受けたんだからな」

「分かってるわよ！何度も言わないで！———というより、このアクア様がそんなに薄情に見えるわけ？そもそも、死者を送ってあげるのはプリーストとしても女神としても歴とした私の役目なんだから、ちゃんとやるわよ」

ふんすと鼻息を漏らすアクアに不安を覚える。

なんかやらかすような気がしてならない。

今夜引き受けたゾンビメーカー討伐クエスト。

クエスト的には大失敗だった。

いる筈のゾンビメーカーはおらず、そこにいたのは無害そうなりッチーが一人。それも人の良さそうなおっとり美人。名前はウイズと違ってちやつかりアクセルの街に店とか出しちゃってる人だった。

リッチーは消毒と騒ぐアホのアクアを押さえて話を聞けば、墓場に集まる成仏出来ない魂を夜な夜な天に還していたらしい。無償で。

リッチーの特性のせいで、副次的にゾンビを発生させていたらしいが、それもそれでちゃんと成仏させており……はい、良い人でした。

色々話し合った結果、人に危害を加えるような人には思えない

ウイズは見逃し、以降の墓場に集まる魂はアクアが処理する事で話はまとまった。これでこれから先ゾンビが墓場に現れる事はないだろう。

勿論それはアクアがサボらなければの話だが。

アクアのアホ面を横目に歩いてると袖を引っ張られた。

振り向けばロリツ子と目が合う。

「どうしたためぐみん？」

「ギルドにいたら、ちゃんと謝るのですよ」

「……」

めぐみんが何を言ってるのかは分かる。カナデの事だ。

置いてくといった時のあの捨てられた子犬みたいな目は忘れられない。どう考えても絶対あいつが悪いけど、あんな顔されると罪悪感が凄い。胃がチクチクする。正直ゾンビメーカーの出現時間を待ってる間にやったバーベキューは、全然美味しく頂けなかった。

「分かっている。あいつが、絶対に、百パーセント、確実に悪かったとしても、もうちよつと言いつか、まあ、なんだ……謝るよ」

そう言うためぐみんが嬉しそうに笑った。

「それでこそカズマです。早く仲直りして下さいね。また皆でクエストいきましよう」

「いや、仲直りも何も、別に喧嘩してる訳じゃ……」

ただあいつが発情してるだけなんだよなあ。

ど変態の顔を思い浮かべていると、ダクネスがしやしやり出てきた。

「そうだぞ、カズマ。あんまりカナデを苛めるな、可哀想だろ。そんなにストレスが溜まってると、私に全力でぶつけてこい。遠慮はいらんぞ。口汚く罵ってくれて良い。寧ろお仕置きなんかも——」

「黙ってる、変態」

「——へ、変態っ、んふう！」

やっぱり謝るの止めようかな……。

変態が二人に戻ってしまうし。

どう謝ろうか悩みながらギルドに戻ると、夜もふけた時間帯だと言
うのに異様に騒がしかった。不審に思いながらギルドの扉を開くと、
普段男だらけの冒険者ギルドが酒臭い女の巣と化していた。

「おお・・・なにか、凄い事になってますね」

「何かあったのか？」

「よく分からないけど、楽しそうね！私も混ぜてー」

アホのアクアがそう走り出すと、めぐみんとダクネスが慌てて追
掛けていった。もう保護者だ。まあ、追い掛けていった二人もそうと
う問題児ではあるが。

俺は雰囲気的に入っただけで入り口で戸惑っていると「おい、カズマ」
と小さな声が聞こえた。見ればカナデに何かと金をむしられるダ
ストが物陰から手招きしている。

そのダストの顔に嫌な予感を覚えた俺は潜伏スキルを発動。静か
にダストの下へと向かう。

「何があった、手短に」

「いや、詳しい事情は俺もしらねえ。野暮用済ませてキース達とリー
ンを呼びに来た時にはこうなってた。かれこれ三時間は酒盛りして
る」

「三時間もこれを見てんのか？暇だな」

「ちげえわ。動きたくても動けなかったんだよ。あいつらなんか不穏
な話――」

何かを言い掛けて、ダストは止まった。

まるで蛇に睨まれたカエルのようなダスト。

嫌な汗が背中をつたり、俺はそっとダストの見つめる先へと振り
返った。

そこには目の座ったリーン。

それと顔を赤くして、ひっくひっくとか変な声をあげるクリスがい
た。

「あーーーーー！かえっへきはろーーーー！！」

「ひやすともいらろー!!」

その声が響いた瞬間、全員の目が俺達を見た。

「カズマ」

「ダスト」

俺達はお互い見つめ合い——お互いを殴り飛ばした。別に示し合わせた作戦ではない。恐らく考えた事が一緒だったただけだ。

「カズマくうううん！なんでいきなり殴ってくるのかなあ!？」

「うるせえ！お前だって同じだろうが！」

俺の言葉にダストは濁った視線を返してくる。

言葉以上に伝わるものがある。この野郎。

そうこのクズは、俺を生け贄として差し出すつもりだったのだ。

まあ、俺もダストを差し出すつもりだったが。

そうこうしてる内、入り口付近で飲んでた酔っ払い冒険者達に俺達は捕まった。女と言えど冒険者。その力は予想以上に強く、頑張って抵抗したが簡単に担ぎあげられた。

俵のように担ぎあげられた俺とダストはそれぞれ運ばれる。俺が向かう先はギルドの奥、賑わいまくってる所のようなうだ。ダストは——分からない。ささっと人混みに消えていったから。ダストが向かう先、人の群れの隙間に拷問器具のような十字の礫台がチラツと見えだが・・・気のせいだと思いたい。

ダストの悲鳴を聞きながら運ばれていくと、空のジョッキが沢山並ぶテーブルの下へと辿り着いた。

そこにはシユワシユワを煽る見慣れた奴。

「・・・おい、説明しろ。カナデ」

俺の声に顔を真っ赤にさせたカナデがこっちを向いた。

その目は完全にいつちやっていた。

「おおあ!?しゃとう、かずゆまがみえゆ!!」

呂律の回らないカナデは立ち上がり、フラフラしながらこちらに向かってくる。

女冒険者は俺を床に置き期待の眼差しで見してきた。

・・・何をしろと?!

フラフラしたままのカナデは俺の腹に頭突きするように突っ込み、そのまま激しく頭を擦り付けてきた。

「うなああああ！まぼりよしにやのにつ、かんひよくまへあるううう！りあゆー！ー！！」

「幻じゃねえから。なあ、何があつたんだよ。そんでこれなに？」

「うはああああ！いかくしやいいいい！！はふつ、はふつふお、ふおおおおおお！！」

「だ、誰がイカ臭いだこらあ！！てか、臭いを嗅ぐな！！臭いを！！」

周りの痛い視線に耐えながらド変態の頭を無理矢理離すと、ド変態と目があった。

「えへへ、しゃとうかずゆまああー」

頬を赤らめニヘラと笑ったその顔に、少しドキツとさせられた。ウエイトレスのこいつを最初に見た時、素直に可愛いと思つた純粹だったあの頃を思い出す。

正直な話、こいつの中身を知らなかったあの頃なら、今のアタックも満更ではなかったと思う。見た目は普通に可愛い女の子だし。彼女欲しいし。元男つていうのは・・・かなり複雑ではあるけど。

それでも、まあ、こういう顔をされると悪くないと思つてしまう自分
分が――

「ずっこんばっこんしょー！」

――おし、危なかった。危なかった！

あと少して頷く所だったあ！！あぶねえええ！！

騙されるな、おれっ！！

息を整えた俺は目の前のド変態に返した。

「――しねえよ！！」

それからなんやかんや酒盛りに混ざり、ダストの懺悔のBGMを聞きながら飲んで騒いだ。

そう、飲んで騒いだのだ。
一番の危険人物と共に。



つづく (*・ω・)
ノ

☆いれたって良いじゃない。だって穴があるんだもの。

「……んんっ、う、んにゃ？」

酒臭さに目を覚ますと隣にサトウカズマがいた。

気持ち良さそうにぐーすかと寝ている。

いつもエロい顔ばかりだけど、今は子供みたいな寝顔だ。なんとなく前に前髪を指でなぞったらくすぐったそうな顔になる。なんか普通に可愛い。

体を持ち上げて辺りを見ると、散乱する大量のジョッキと泥酔し爆睡する冒険者達が見えた。死屍累々といった様子だ。ウェイターの姿は見えない。

それから少しブーツとしながら何をしていたのか考え、直ぐに昨日の女子会を思い出した。大ジョッキ四杯目辺りから記憶があやふやだ。ダスト被害者同盟とか、変態を応援する会とか、よく分からない単語が思い浮かぶ。

何してたんだろうか、俺は。

「――ふあああつ、あつふ」

伸びをすると体がパキポキと音を鳴らした。

床で寝たせいか体が痛い。

ストレッチしながら窓を見ると、綺麗な朝焼けが見える。

今日はシフト休みなので、これから一日何しようか。

そんな事を考えながら、隣に寝てるサトウカズマを見て、ふと思っ

た。

これチャンスなんじゃね？と。

試しに頬を軽く叩いてみる。

呻くだけで起きる気配はない。

ほほう。

試しに肩を軽く揺すってみる。

やはり呻くが寝返りをうつ程度で起きない。

ほほう。

試しにズボンに手を突っ込んでサトウカズマのサトウカズマを握ってみた。

思ったより大きかった。これはタケシくんが慣らしてなければ危ない所だった。

サトウカズマのサトウカズマをシコシコしながら自分の準備を進めていた時、それに気づく。

「…………いや、あかん」

落ち着け、俺。

確かにチャンスだが、こんな事はいけない。

幾らなんでも同意もなしは駄目だ。

それを人は犯罪と呼ぶのだから。

俺は深呼吸し一回落ち着く努力をする。

あまり効果はなかったけど、少しだけ頭がすっきりした。そう、無理矢理するから駄目なのだ。要は同意が取れば良いのだ。

そう、どんな状態であれ。

「サトウカズマ、サトウカズマ」

声を掛けながら揺らす。

先ほどより効果はあったのか、サトウカズマの眉間に皺がよる。完全に起きてしまうとあれだが、上手くやれば……そう思いながら慎重に声を掛け揺らしていると、僅かに瞼が開いた。見れば目がとろんとしてる。

「あぁ？」

よし、確実に寝惚けている。

俺はとある魔法具店で買っておいた魔法式の録音機を取りだし、サトウカズマの口元へと近づける。

この録音機、はつきり言って欠陥品。録音時間は僅か十秒、録音は一発限りしか出来ない仕様。高くて一個しか買えなかったから失敗は許されない。

俺は気持ちを落ち着かせ、そつとサトウカズマの耳元に口を近づけた。ふっと息を掛けたあと耳を軽くねぶり、出来るだけ猫撫で声で伝

える。

「サトウカズマ、エッチしよ」

「んん？へへ、しよ、しよーがねえーなあ……くう」

カチツ、魔法具のスイッチを止める。

再生した物を聞いてみれば、ちゃんとサトウカズマの寝言のような同意の言葉が記録されていた。

よし。

証拠品を得た俺はサトウカズマをさっさと背負い移動を開始。流石にギルド内で事をおっぱじめる訳にはいかない。今はウェイターの姿が見えないけど、いつこの荒れ地に戻ってくるかも知れない。

移動を開始して直ぐ、掃除用具を持った同僚がやってきた。予想通り。

見つかるであれなので、クリスから便利だからと取らされた潜伏スキルを発動。

物陰を移動しながらギルドを後にする。

寮に連れてく訳にもいかないので、さっさと近場の連れ込み宿へ。料金をカウンターに叩きつけた後は案内された部屋と直行。ベッドにサトウカズマを投げ飛ばし、服を剥いで、オプシオンで借りた拘束具を使いグースカ寝てるサトウカズマの手足を拘束して——はい準備完了。

「……」

ベッドに大の字で拘束されるサトウカズマ。

やつといてなんだけど、ちよつとあれだった。

これは流石に、絵が犯罪くさい……いや、同意とつたし。大丈夫だよな？

うん、合法、合法。

自分の服もサクツと脱ぎ、サトウカズマが寝転ぶベッドへと乗りこむ。フツカフカのベッドの感触を楽しみながら進めば、直ぐに反り立つそれが目の前へやってきた。

予想ではポークビッツだったのだが、サトウカズマのそれは思ってたよりずつと立派だった。太きこそタケシくんより少し細いけど、長

さは丁度良い感じ。はつきり言つて悪くない。皮被つてるけども：あ、良かった。仮性だ。

女の子になつて俺の体は少し小さくなつてる。今の体にこのサイズなら・・・もしかしたら、子宮口をトントンされる夢が叶うかも知れない。

仮にトントン出来なくても、ちよつと反り返つてるソレが膣内をグリグリ擦つてくれそうで文句は全然ない。wktkが止まらない。

フェラはまだ抵抗があるので、まずは手でシコる事にした。そのままシコシコすると痛いかも知れないので、ちゃんとローションもつける。

擦る度にニチャニチャと厭らしい音が聞こえる。

掴んだ手にサトウカズマの熱と脈が伝わってくる。

反応してるそれから汗が溢れ出てくる。

凄いい、なんか、凄いいっつい。

やられるとやるのだと全然違う。

男だった頃はそんなに興奮しなかつたものだけど、いざやる側に回ると、俺の手でこうなつてると思うと・・・。

そつと自分の股間に触ると、しつかり湿っていた。

寧ろグチャグチャ、アホみたいに濡れてる。

これなら直ぐに入りそう。

サトウカズマのそれをシコシコしながら、自分の股間に指を這わせる。ねちっこい液体の音が俺とサトウカズマの股間から響いてく。なんかすごい興奮する。

反り立つそれが固くなるのに比例して、俺のお腹もドンドン熱くなつていく。物欲しそうにきゅんきゅんしてるのが分かる。

十分ほぐれた所で、サトウカズマの上に股がる。

後はそこに反り立つそれを入れるだけ。

うはっ、鼻血でそうっ。

いきなりは流石に怖いので、入り口の所をサトウカズマのそれで擦る。俺の粘膜とサトウカズマの粘膜がぐちゅつと混ざり、甘く痺れるような快感が体を走つてく。

いれなくても凄い気持ちいい。

「ふっ、ふっん、んっ、んっ」

擦る度に走る刺激が心地良い。

これだけで、もういつちやいそう。

本番をやらずに果てる訳にもいかなないので擦るのは程ほどにして、今度は狙いを定めて少しだけ腰を下ろす。

するとにゅぷつと、簡単にその頭が入ってくる。

痛くはない。

よく濡れてるおかげで、初めてだけど気持ちいい。

そのままゆっくり腰を落としていけば、それに行き当たった。

後はここを乗り越えるだけ。

一気にいくか、ゆっくりいくか。

いざ目の前にくると迷う。

どう――

「うおっ!?カナデ!!なにしてたんだっ」

――ひよっ!?

状況に驚いたのか、跳び跳ねるように動いたサトウカズマ。拘束さ
れてるから逃げられはしない。

けど、それは俺の体のバランスを崩すのに十分過ぎて――。

「――ツツツツツ!!?!ふあん!!?!」

倒れた拍子に一気に貫かれた。

それも一番奥まで。

幸い痛みはなかったけど、それ以外の衝撃が半端じゃなかった。あ
ほみたくに開発してたせいかな、全身にはしる快樂の波が凄い。目がチ
カチカする。頭もクラクラする。

「うわっ!?えええ!!なにこれ!?カナデさん!?!」

サトウカズマが身動きする度、凶悪なそれが子宮口を、膣内をグリ
グリと刺激していく。

「はっ、あわっ、ふ、うごかにやいでっ」

「いやいやいや!!どんな状態だ、おい!?説明——」

「しゅるからっ・・・!ふっ、んん」

何とか腰をあげようとしたけど、震えて上手くあがらない。途中で力尽きて腰が落ちてしまつて、また一番奥を刺激されてしまう。

頭がパチパチする。

「か、カナデさん!?ちよ、これはっ、まずいつ、ヤバイヤバイ、カナデ!説明は後でいいから早くどけてっ!」

「やつ、やつひえるけどお、ふ、んんん」

頑張つてはいるけど、どうしても腰があがらない。

体を持ち上げる度にサトウカズマのそれが膣壁をゴリゴリ擦ってきて、その刺激でも腰が抜けてしまう。気持ちよ過ぎて、どうしても良くなつてきてるのもあるけど。

そうして頑張ること少し。

アレがくるのが分かった。

何度も味わつたアレが。

「んあああああ!!いつひやううう!!」

頭が真つ白になるような刺激が走り、膣がキュウつと締まつた。瞬間、「あふん」という間抜けな声が聞こえ、サトウカズマのそれが大きくなり——火傷するような熱が突き刺さつたそれから嘔きあがつた。

サトウカズマから出された熱がお腹の中を更に熱くさせていく。

注ぎ込まれた感覚が気持ちよ過ぎて、起き上がっているのも限界になつた。力尽きてサトウカズマの上に倒れば、男特有の筋肉質な体が俺の体を支えてくれる。

汗臭さと酒臭さはあるけど、肌と肌を合わせる感覚は気持ち良い。まだ深く突き刺さつてる、その感触も。

「おにやか、たぶたぶであつたかい、きもちい」

「やつ、やつちまつた・・・」

焦つたようなサトウカズマの声に顔をあげると、顔を青くさせたサトウカズマの顔があつた。

その顔は何故か可愛く見えた。

だから、サトウカズマのほっぺにちゅうしておいた。

「おまつ!?!」

「えへへ、サトウカズマー」

びっくりする顔も可愛くてもう一回ちゅうしておく。

そうしたら、もつとちゅうしたくなつた。

だから気が済むまで沢山ちゅうして、そうしたらまた股が疼いてきて、やっぱり我慢出来なくなつた。

「じえんぶ、せつめいしゆるからあ、もういつかいだへ、ね?」

「待て待て!!おい、カナデ!あ、いやあああ、犯されるううー!」

その後三時間くらい犯つた。

凄い気持ち良かった。マル。

☆くわえたって良いじゃない。そういうプレイもあるんだし、ね？

「はあ？なに言ってるんだ、サトウカズマ？」

サトウカズマとズツコンバツコンしてから一週間後。

街の近所に魔王軍の幹部が引越してきたせいで仕事が激減してしまい、それが原因でサトウカズマパーティーが一時活動休止している今日この頃。

いつものようにウエイターとしての仕事を済ませた俺は、サトウカズマと例の連れ込み宿にやってきていた。

「・・・いや、だからな、やっぱりこれはおかしい」

おかしい・・・？

俺はサトウカズマに言われて辺りを見渡した。

部屋に取り付けられた風呂は狭く快適とは言えないが、特におかしな物は見当たらない。服は言われた通り仕事着。下着もちゃんと着てない。風呂で行為を行っても大丈夫なようにマットも敷かれてる。手にしたスポンジっぽい物にもおかしな所はない。石鹸も良い匂いがする。浴槽は・・・少し浅いかな？——でもこれは文化的に仕方ない。寧ろ個室に風呂があるって凄い。この店はよい店だ。

「うん？何が？」

「本気で言ってるんだろうな、お前は。・・・だからな、カナデと俺が、同じ風呂に入ってる事がおかしいだろうが!!」

俺はそう叫びながらチンコをおっ立てる、説得力皆無のサトウカズマの顔を見た。

穴があくほど見た。

だって今更何を言ってるのだろうと、本気で疑問に思ったのだ。サトウカズマがやれと言ったからやってるのに、と。

「ちよ、恥ずかしい。そんなに見ないで。自分でもわかってます。俺はクズです」

あいよ、武士の情けじゃ。

気の迷いとして受け取っておく。

俺はサトウカズマの顔から目を逸らし、ビンビンに立つチンコをスポンジで洗い始めた。

初セックスを決めたあの日。

サトウカズマは突然の童貞喪失に酷くショックを受けた。それまで世間話で童貞捨てたいとか、彼女欲しいとか、セックスしたとか羨ましいなどとほざいていたので、俺的には喜ぶんじゃないかなろうかとサプライズ気分ですらいたので意外な反応だった。

だから事情を説明して帰した後、サトウカズマが二日に渡って引きこもったのを聞いた時は耳を疑った。

どうしたんだってばよ、と。

それから様子を見に行つて、いきなりしちゃった事を謝つたり、いつものパーティーメンバーと一緒に差し入れしたり、褒めたりおだてたり、何でもお願い聞いちゃうよ？とかモチベーションあがりそうな事言つたり色々したら少しだけ元氣を取り戻した。

一番反応が良かったのは「責任とか考えなくて良いからね？」という言葉だったのは、心の内に留め置こうと思う。最低ではあるけど、男にとってそれが一番怖いもんね。うん、俺は分かつてるよ。許す、許す。

めぐみんと爆裂魔法デートするくらい元氣になつて良かった良かったと思つていたんだけど——その矢先いつものように働いてたらサトウカズマが声を掛けてきたのだ。

どうしたのかと訪ねれば、サトウカズマはキョドリながら聞いてきた「お前、あの、謝つてる時さ……何でもやるって言つたよな？」と。

それでこうして奉仕する事になったのだ。

なんらおかしい所はない。

「いや、俺はさ、ちよつとした復讐がしたくて・・・お前が恥ずかしがれば良いなあとか、それだけだったんだ。それだけだったんだよお」
「はいはい」

その言葉を嘘だとは思わない。

サトウカズマは割りとお子様。下着を剥がれた俺に奉仕（エロなし）させて、恥ずかしがってる所をセクハラしたかったのだろう。やっすいAV企画みたいな、そんなんしたかったんだろう（エロなしで）。

短い付き合いではあるけど、こいつのスケベぶりも、そのヘタレぶりも分かってきてる。

まあ、分かっているからと言って、それに添ってやるつもりはないけど。

「そうは言っても、ここは正直だなあ。凄いビンビンしてるもんな」
もうかなり雄臭い。

洗っても洗っても、その誘うような臭いが消えない。

「か、カナデさんっ、その、やっぱり止めませんか？」

「ヘタレんのも大概にしるよ、お客様。ここまできて、止められるか——ほら、取り敢えず一発出しちゃえって」

一回泡を流した後、素手でシコシコしてあげる。

そう時間も掛からず、ビンビンに立ったそれから白濁液が噴きあがった。量も勢いも結構あって、それを掴んでた手は勿論、その発射口が向いていた壁にも掛かる。一気に風呂場がイカ臭くなった。

壁の惨状を眺めながら前に立たなくて良かったあと思っていると、手に掛かった温かい物に目がいった。

何となく舐めてみると、はつきり言って苦かった。AV女優とか、美味しそうに飲んでるから旨いものかと思っただけど、そんな事なかった。

でも、なんだろ。

嫌いでもないかな？

手についたそれを舐めきってしまうと、何だか物足りなさを感じ

る。

なのでそつとサトウカズマを見ると、顔を手で隠しながらも指の隙間からこつちをチラチラ見る視線と目があった。ちやうど聞こうと思つてたので丁度良いけど・・・はあ、まったく。

「なあ、サトウカズマ?」

「な、ななつ、なんだよ?!」

「ちよつと舐めても良い?」

「はあ!?!」

驚くサトウカズマの顔を見てると設定を思い出した。

言われた通り、ちゃんと沿わないと駄目だな。

だから胸を強調するように腕ではさみ揚げ、上目使いで見つめながら出来るだけ声を高めにし、ちゃんとお願ひし直す。

「お客様のおちんちん、私の口でご奉仕させて貰つてもいいですか?」

それっぽく言つてみると、ちよつと精液を吐き出して元氣なくなつていたサトウカズマのサトウカズマがまたビンビンに戻つた。

アホだなあとか言わないよ、若いつて良いよね。

顔を赤くし喉を鳴らすサトウカズマを見ながら、俺は反り立つそれに舌を這わせる。精液の残りか苦味がある。でも直ぐにしよっぱい味になつた。多分我慢汁とかだと思う。少し尿もあるかも。

いきなり口に突つ込むのは怖いので、最初は舐めていく事にする。

最初は先っぽ。次は固くなった棒。ブラブラしてる僕らのゴールデンボールは・・・今回はスルーしとく。上級者過ぎるしね。

「あ、あう、こそばゆい、カナデ」

サトウカズマの腰とそれがびくびく動く。
なんか可愛い。

色々舐めて分かつたけど、やっぱり先っぽの方が反応良かった。なので重点的に先っぽを舐めてく。舐めれば舐めるだけ、先から液体が溢れてく。味は決して良くないけど、なんか嫌いじゃない。

「・・・うーん。ひよつと、くわへへもいい?」

「啞え・・・歯とかたてんなよ」

俺はその言葉に頷き、思いきつてくわえてみる。

男の時と違って俺の体は少し小さくなってる。それは口の大きさもそう。だから精一杯広げてる筈なのに、サトウカズマのそれが異様に大きく感じてしまう。口の中に入れてると圧迫感が凄い。

歯を立てないよう気をつけながら、頑張つて舌を這わせる。頭のカリの部分を舐めると凄く反応が良くて、直ぐにしょっぱい物が溢れてくる。

もっと欲しくて吸つてみたら、サトウカズマが気持ち良さそうに声を出した。

「まづいつ、それ、ヤバイかもつ」
成る程。

これが良いのか。

それならと、少し頑張つてみる事にした。

我慢汁でこんなに気持ち良さそうなら、射精時にそれをやったらどうなるのか興味が湧いたからだ。

AVとかで見たようにそれを喉に押し入れる。

結構苦しい。気持ちよくはない。

けど、ちよつと視線をあげてみると、サトウカズマは気持ち良さそうにしてる。ふむ、その顔を見てると悪くない気分になるから不思議だ。

苦しいのに耐えながら前後にストロークする事少し。

サトウカズマのそれが大きく膨らむのを感じた。

エロ小説とかなら頭とか押しさえてきそうだなあと思つてサトウカズマの様子を窺つてみたけど、流石はヘタレのサトウカズマ。動かない。

こんな時くらい馬鹿になれば良いのに。

まあ、こういう所があるから憎めないんだけど。

ヘタレの代わりに、自力で奥まで押し込んであげる。
少しおえつてなるけど、そこは我慢。

根性の見せどころ。

「はうっ、あつ、出るう」

「んーんー」

その刺激に反応してか、サトウカズマのそれから二度目の射精が始まる。吐き出されるそれが熱を伴って喉を通っていき、胃に落ちるのが感覚に分かった。

少し射精が落ち着いた頃を見計らって、くわえたそれを吸ってみる。ソバを嚼るような音が鳴って、ドロドロした物が奥から出てきた。口に熱い精液が溢れる。

咀嚼する気はなかったんだけど、最初に舐めたやつと味が違う気がして思わず口の中で転がしてしまった。

苦いけど、何処と無く風味が違う気がするのだ。

いや、相変わらず旨くはないけども。

適当に味わった所で飲み込む。

「……おまつ、え、飲んだの？」

間拔けな声に視線をやるとサトウカズマと目があった。

驚いてるけど、何処か嬉しそう。

昔親友が「ザーメン飲まれるのとか、男の夢だから。お前には分らないだろうが」とかほざいてる姿を思い出す。どちらかと言えばザーメン飲む方になりたかったんだから、分からなくても仕方ないよね？
ねえ？

何となくサトウカズマが期待してるような気がしたので、猫撫で声モードに移行し上目使いでサトウカズマを見上げた。

「ごちそうさまです♪」

そう言ってあげると、サトウカズマはプルプルしながらそっぽ向いた。なんて分かりやすい。好きなんだな、こういうの。

こいつ、変な女に引っ掛かったりしないだろうか。なんか心配だな。

ふーむ、それにしても……。

そつと視線を下に向けると、反り立つそれが目に入る。

二回も出したのにそれはビンビンのままだ。

寧ろ元気になってる気すらする。

どんだけ持て余してんだこいつは。

前回だって、なんやかんや三時間も俺に付き合った事を考えれば相

当に溜まつてるんだらうとは思うが。

まあ、俺も持て余してるし？今日もまた付き合つて貰うかな。

「サトウカズマ、サトウカズマ」

「あ、はい、サトウカズマです」

「なんだそりや。まあ、いいや。続きどうする？このままやる？ベツドにいぐ？」

「なんでやる事は確定してんだよ……」

なんでつてお前。

指でおつたつそれをつついてやれば、「あふん」と間抜けな声が聞こえてきた。

「そのままじゃ、何処もいけないだろ？頑張つて馬小屋戻つても水色と同居だろ、お前。どうすんだ？発散しないと辛いと思うぞ？」

「そ、そうかも知れないけど、でもなあ」

「それになあ——」

煮えきらないサトウカズマに俺の股間をみせてやった。興奮して愛液でドロドロになつてるそれを。

指を入れて掻き回せば、もつと溢れてくる。

「——こっちも、結構限界なんだよ。ねえ、サトウカズマの立派なやつで一杯突いて？お願いっ」

「ずつ、ずるいだろ！そういうのは！」

そう言いながら、それでも悩むサトウカズマ。

いい加減演技するのも疲れたのでマットに押し倒しておいた。股がる俺にサトウカズマが複雑な視線を向けてくる。

これでもエロに振り切らないとは。

まあ、そういう所も良いんだけど。

「ふふつ。まあまあ、ここは一つ、野良犬にでも噛まれたと思つて諦めて付き合つてよ」

「自分で言うなよ」

頬っぺたにちゅうしてから、俺は服を脱いだ。

そしてそれからサトウカズマとめちやくちやセックスした。一晩中した。気持ち良かった。

なにもありませんでしたか？え？ああ、お隣さんは訪ねてきましたけど。

サトウカズマとご奉仕プレイをして数日。

いつものようにウエイターとして仕事に励んでいると受付嬢達がバタバタし始めた。

「緊急要請かな？またか。なんだろう、今度は白菜とか？」

俺のぼやきに今はお客さんのサトウカズマが眉をしかめた。

「白菜は飛ばないだろ・・・？飛ぶのか？飛ばないよな？飛ばないといってくれ。もう疲れた」

「俺に聞くなよ、知らん。もしかしたら、白菜は走ってくるのかも知れないぞ。ヌーみたいに。まあいいや。ほら、お待たせ」

「お、さんきゅーって、おい。から揚げは頼んでないぞ？注文間違えてないか？」

「こっちは俺からの奢り」

今、魔王軍幹部の影響で仕事のないサトウカズマには、当然だが金がない。その為最近のサトウカズマの食卓はかなりしょっぱい状態で、パンと小鉢一杯のジャムとか、ふかした芋と干し肉のスライス一枚とか、なんかそんなんばっかり。

正確にはキャベツの報酬が余ってるらしいが、それはいざという時の為に出来るだけとっておく方針らしい。あつたらあつただけ使ってしまう、何処かの水色とは大違いだ。

から揚げを見つめるサトウカズマは涎を垂らした。

ゴクリと喉が鳴るのが聞こえる。

「奢り・・・いや、でもな・・・」

「遠慮すんなって。冒険者は体が資本だぞ？ちゃんと食わないと、いざというときに困るだろ。特にお前はアホなのとパーティー組んでるんだから・・・お前が動けないと終わるぞ。普通に」

「カナデっ・・・そ、そうかも知れないけど・・・でもな・・・うう」

サトウカズマがちっさなプライドのせいで悩んでると、依頼ボード

を見てくるといったためぐみんが戻ってきた。

めぐみんはテーブルの上のから揚げを見てパチパチと瞬きする。先程腹の虫を鳴かせていた様子を思えば、空腹からくる幻とでも思ったのだろうか。

それから何度か瞬きした後、それが幻でないと気づくとめぐみんは目を輝かせた。

「かつ、カズマ、それは、から揚げでは……！」

そのめぐみんの顔を見たサトウカズマは深い溜息を吐いた。

「悪いカナデ。ありがたく貰つとくわ」

「良いつて。めぐみんと仲良く食べる」

そんなやり取りをしていると、めぐみんが俺の方に寄ってきた。ブルブルンに振られる犬の尻尾を、めぐみんに見てしまう。可愛い。

「カナデっ！ありがとう御座います！」

「あいよー。一杯食べて大きくなるんだよー」

子供特有の可愛らしさに思わず頭を撫でると、めぐみんは見るからに不機嫌そうな顔をした。

「あの……そんな顔で撫でないで下さい。カナデと私は、そんなに歳が変わらないと思うのですが」

「そうは言っても、年下は年下だしな？それにちびっこいし」

「ちびっこ……ぐう、事実だけに何も言えません」

めぐみんの視線が俺の胸を見た。

それからそつと自分の胸を触り悔しそうな顔をする。

「私も、後数年もすれば……っ！」

ああ、うん、頑張れ。

何となく、無理っぽい気がするけど。

曖昧に笑っておいたが、めぐみんはそれが気にいらなかったらしく膨れた。

「むっ、余裕ですね。カナデ。今に追い抜かれて泣いても知りませんよ」

「えええー？……ああ、うん。そんな日がくると良いな」

「ああ!!これは完全に馬鹿にしていますね!もう、怒りましたよ!!そんな

なカナデはこうです!!」

怒りを露にしためぐみんが飛び込んでくる。

何をするのかと思つて行動を見守っていると、徐に胸を鷲掴みにされた。そしてめっちゃ揉まれる。

乱暴な揉み方ではあつたけど、ちよつとだけ気持ちよかつた。乳首辺りを指で押されるの好き。

オナニーの時も自分で弄つたりするけど、やっぱり人にやって貰うのとは違うなあと思ふ。

視線を感じたのでちよつとそつちに目を向ければ、キリツとした顔つきのままエロい目をしたサトウカズマの顔があつた。

そんな顔するなら、やってる時に幾らでも好きに揉めば良いのに。あのヘタレ、こつちが何か言わないと、基本的に手を出してこないからな……。

「……ふあ、あ、あわわわわつ、ぐううつ」

散々に勝手に揉んだめぐみんは勝手にダメージを受け、ついには地面に両膝をついた。

「た、たった二・三歳差で、こんなつ、あり得ません。なにか、悪い事をしてるに決まっています……!」

「決まってるから」

転生特典の代わりに性転換して貰つた体だから、ある意味では邪道ではあるんだろうけど……まあ、悪い事は何もしてないからな。

少ししてダメージから復活しためぐみんは自分の貧相な乳をペタペタし、懇願するようにこつちを見てきた。

「わ、悪い事はしてないなら、その、どうすればそのようになるのですか? い、いえ。別にですね、時がくればそれくらいにはなると思うのですが、その、あくまで参考程度にですね……」

「んんんー? どうだろ」

別に自分で育てた訳じゃないからな。

女になったその時にはこのサイズだったし。

この世界にきてから確認したのだが、俺のパイオツはDよりのCカップであつた。チンコを挟める現状のサイズで十分満足している

俺は、その手の話は興味がないので誰かに聞いた事もない。さっぱりだ。

とはいえ、期待に目をキラキラさせるめぐみんに「分からない」と答えを返すのは酷に思う。

色々と考えた結果、眉唾な話ではあるが前世で培ったそれを教える事にした。

「揉むと良いらしいよ?」

それを聞いたためぐみんは顔を赤くした。

「も、揉むつ、ですか?ええ、自分でですか?」

「自分でも良いし、相手がいるならやって貰うともっと良いらしいよ?俺は——今の所自分で揉んでるけど」

他にも乳首捏ねたり、引つ張つたり、羽箒でささつてやつたり色々してるけど。まあ、それは、おっぱい大きくする為にやつてる訳じゃなくて、ただのオナニーの一環なんだけど。

俺がやつてる事を簡単に教えると、めぐみんは更に顔を赤くさせあわわと慌て出す。

「あわ、あわわわわっ?!カナデは、そんな事してるのですか?!」

「そうだよ。他にもまん——」

「止めろっ、ド変態が!!お子様になに教えてんだ!!」

聞き耳を立てていたムツツリ野郎に思いつきり頭を叩かれた。

酷い、尋ねられたから教えてただけなのに。

話を適当な所で切り上げると、二人は食事を始めた。

二人がから揚げにがつつく姿を眺めていると、同じく空腹で喘いでいるであろう水色の姿が脳裏に浮かぶ。

今頃野菜の叩き売りしてる頃か・・・仕方ないな、夕飯でも奢つてやるか。

それから程なく、ギルド内に緊急要請のアナウンスが響き渡った。

全冒険者に対し戦闘態勢を整えて正門に集合との内容で、冒険者登録してる俺も着替えて正門に向かう事に。

正門に辿り着くとヤバイ雰囲気纏ったモンスターの姿がそこに見えた。

サトウカズマいわくデュラハンというやつらしい。

正門前に立つ漆黒の鎧を着たその騎士は、街中の冒険者達が見守る中、左脇に抱えていたフルフェイスの兜に覆われた首を差し出した。

「・・・俺は、つい先日、この近くの城に越してきた魔王軍の幹部の者だが・・・」

話始めた首はプルプルと小刻みに震え始める。

何故だか、嫌な予感がした。

「まままま、毎日毎日毎日毎日っ!!おお、俺の城に、毎日欠かさず爆裂魔法撃ち込んでく頭のおかしい大馬鹿は、誰だああああー!!」

魔王軍の幹部は、それはもうお怒りだった。

それも、恐らくうちの身内に。

冒険者達がざわつき始める中、俺は恐らく犯人であろうサトウカズマとめぐみんの様子を窺った。サトウカズマはまだ混乱してるようだが、めぐみんは気づいたらしく顔を青くさせてる。めぐみんは馬鹿だがアホではない。頭の回転はすこぶる良い馬鹿なのだ。

こいつらが爆裂魔法ぶっぱデートしてるのは知ってたが場所まで聞いて無い。ただ、いい目標を見つけたと楽しそうに話すめぐみんの姿は見るので・・・多分、そのいい目標が幹部様のお家とかだったのだろう。

よりにもよって、そんなもん攻撃するとは。

サトウカズマの幸運値が高いつてなんなのか。

いつ発揮されているのか。

それから程なくして観念しためぐみんが冒険者達の前に出てくると、犯人だと判断したデュラハンによるクレーム攻撃が始まった。

様子を見てるとデュラハンが暴力的なことはしなさそうなので、隣で顔を青くさせるサトウカズマに声を掛けた。

「どうすんだ、サトウカズマ」

「どうしようもねえよ。このまま帰ってくれるの祈るしかないだろ。めぐみんの爆裂魔法で何とか出来れば良いけど……それも出来るかどうか」

まあ、何度もあの爆心地にいて、まだ元気に文句言ってくるような奴だしな。耐久力は折り紙つきなのだろう。流石幹部様。

そうこうしてる内にめぐみんがデュラハンをキレさせた。デュラハンの人の要求は住みかに爆裂魔法を撃ち込まないでという細やかなものなのに、めぐみんがそれを断固として拒否したのだ。

どうしても城に爆裂魔法を叩き込みたいらしい。

この要求を蹴ればどうなるのか分かりそうなものなのに、めぐみんはそれでも嫌だと言い切った。

撃ち込みたいのだと。

めぐみん。

めぐみんはよくどうして頭がおかしいと言われるのか、よく愚痴を溢しているね。むかつきますとか。

あのね、そういう所だよ。

混沌する会話が交差する中、めぐみんにより水色が呼び出され、場の混沌はその深みを更に増していく。そろそろ闇の扉でも開きそうだ。名も無きナニカでもくるんじゃないだろうか。

それからぼんやり眺めていると、めぐみんが呪われそうになったり、それをダクネスが庇ったり、ダクネスがドM全開でおかしな事を口走ったり、ダクネスがデュラハンの人に拉致されにしようとしたり、デュラハンの人に引かれたり、ダクネスのせいでデュラハンの人に変態扱いされたり、サトウカズマがダクネスを止めに行ったり……まあ、色々であった。主にダクネスが変態だっただけのような気がするが。

けれど、結果的に言えば何も無かったといって良いだろう。

「崇めなさい!!この美しく気高い、超一流のアークプリーストなアクア様に掛かれれば、アンデットの呪いなんて靴下の裏についた米粒も同然よ!!さあ、皆で褒めて褒めて、褒め尽くして!」

そういつてクルクル楽しげに踊り回る水色。

冒険者達から喝采を浴びてさらに調子づき、得意の芸を披露し始めた。

ダクネスに掛けられた呪いを解くべく、決死の覚悟で戦いに向かうとしていたサトウカズマとめぐみんは、呆然とそれを見つめる。

その目に浮かぶ徒労感は果てしない。

デユラハンの呪いをあつさり解呪されたダクネスも、複雑な表情でその光景を眺めてる。

「よっ、勝利の花鳥風月!!」

プシャーと水色の頭の上に置かれた扇子から噴水の如く水が噴きあがる。

それを眺めているとサトウカズマ俺の所にやって来て、そっと呟いた。

「なあ、カナデ」

「どうした」

「愚痴ってもいいかな」

サトウカズマの目には、ちよつと涙が浮かんでいた。

「・・・ああ、うん。良いぞ。幾らでも付きあつてやる」

「ありがとう」

泣くなよ。

シユワシユワ奢つてやるから。

☆ちゅーしたって良いじゃない。減るものでもないのだし。

「あいつらあ！俺の苦勞なんてちつとも分かってねえんだよお!!もう、本当、勘弁してくれよお！返してっ！俺のやる気とっ、平穩とっ、冒険心返してよお!!」

そうやって空のジョッキをテーブルに叩きつけたサトウカズマは泣いた。いや、正確には飲み始めてからずっと泣いてるけど。

幹部様の襲撃後、約束通り愚痴を聞いてやる事にした俺は、普段はかない飲み屋へとサトウカズマを連れていった。———と言うのもギルドには顔見知りが多すぎるからだ。身内の問題で愚痴を溢したいというのに、そのテリトリーで話すというのもアレだからね。

水色みたいな事言うサトウカズマの背中をさすっていると、ちょうど良く店員が近くを通ったので呼び止めておく。おつまみはまだあるが、俺とサトウカズマもお酒が空だからだ。

「サトウカズマ、サトウカズマ。おかわりなんにする?」

「・・・同じやつ」

店員に先程頼んだものと同じ物を頼む。

そう時間も掛からずおかわりがやって来る。

再びジョッキをぶつけ乾杯すれば、サトウカズマは手にしたジョッキに口をつけクピクピと飲み始めた。

何度見ても可愛い飲み方するな、こいつは。

乾き物をしゃぶりながらサトウカズマの様子を見ると、据わった視線と目があった。

何か言いたげな目だ。

「どうした?」

「いっ、いや、なんでもねえよっ」

「ふうん?もしかして、見とれてたりした?」

「誰が見とれるかっ・・・!?!」

元より女顔である事も、それなりに可愛いのも自覚してる。まだ男だった頃、何度ナンパされたか分からない。サトウカズマに女への免疫がない事を考えれば、そういう事もあるかなあと思って言ったのだが、反応を見れば本当にそうだったらしい。

面白くてサトウカズマを眺めてるとそっぽ向かれた。

ちよつとからかい過ぎたかも知れない。

「ごめんってば。ほら、スルメくえ」

「スルメで誤魔化そうとすんな・・・いや、貰うけど」

差し出したスルメを掴もうとしたので華麗にかわす。

訝しげな視線を送ってくるサトウカズマに「あーん」といって口元へソレを差し出せば、ただでさえ酒で火照ってる顔を赤くさせ狼狽えた。

「か、カナデっ、そいうのは止めろっ!」

「夢だつて言ってたろ? 女の子にあーんされるの。叶えてやるよ。ほら、あーん」

「元男にやられても嬉しくないんだよ!!」

成る程———と云いたい所だけど、その割りには鼻息とかメチャ荒いんだよなあ。

「本当にいらぬ? なら止めるけど」

「あ、いや、その・・・お願いします」

「そうそう、人間素直が一番。ほら、あーん」

開いた口にスルメを入れてやった。

恥ずかしそうにしているけど、満更でもないように見える。

「ほら、もう一本くうか?」

「あのな、スルメばかり食わせようとすんなよ」

「ん? ならチーズにしとくか? ほら、あーん」

一つチーズの欠片を摘まみサトウカズマに差し出す。

サトウカズマは少し躊躇ったけど、さつきより早く食いついてきた。まるで餌を待つ小鳥みたいで可愛い。親鳥が頑張つて餌を運ぶ気持ちも分かる。

それから何度かあーんしてくと、サトウカズマも慣れたのか視線で

物を要求するようになってきた。若干生意気にも思ったけど……まあ、今日くらいは勘弁してやろう。いつにも増して楽しそうだし。あ、そうだ。

寧ろ乗っかってやるか。

サトウカズマのご所望通りのおつまみを手にした俺は、それまで通り口元に運んでやった。ほんの少しおまけつきで。

「カズくん、あーん」

「ぶはっ!!?」

サトウカズマは景気よく噴いた。

それは見事に。

「大丈夫、カズくん?」

「ごほっ、馬鹿っ! 本当に止めろっ」

照れてるかと思つて顔を覗けば、割りと嫌そうな顔をしてた。そう言えば前に俺が幼馴染との体験を話した時、随分と微妙な顔をしてたのを思いだした。

それで何となく察する。

「あーごめん。サトウカズマ。ちよつと悪ふぎけが過ぎた」

「いや、そんな謝る程の事でもないけど……でも出来ればカズくんは止めてくれ」

「OK把握、カズマくんにしとく」

「分かってくれれば……いや、カズマくんも止めろ。なんか背筋がゾクゾクする」

そんな事言つてるが反応は悪くない。

カズマくんは大丈夫らしい。

カズくん呼びに何があつたかは知らないが、そつちは触れないでおくでしょう。誰しもそういう事はある。俺にもある……いや、ないな。特に。それでもしいう事なら、アナルに茄子突っ込んで抜けなくなりそうになった事くらいかな。あの頃は、俺も若かつた。ローションも無しでなんて……ふっ、認めたくないものだな。若さ故の過ちというものは(赤い彗星)。

それからカズマくん呼び続行で飲むこと暫く、酔いも限界まできた

のかサトウカズマがうつかりコップを落とした。

よりにもよって俺の方に。

コップが並々注がれていた事もあって、俺はお腹の辺りから下、スカートからパンツまで全部びっしり酒に濡れた。愛液でグチャグチャになるならまだしも、別の理由で濡れているのはなんか気持ち悪い。取り敢えず店員さんにタオルを借りて拭いてみたけど、どうにもならなさそう。

「わ、悪い・・・」

俺の姿を見てたサトウカズマが申し訳なさそうに謝ってきた。その言葉に嘘はなさそうだけど、どうももう一つの事に意識を持ってかれてる気がする。

サトウカズマの目に欲情の色が見えたのだ。

サトウカズマの視線の先はびっしりと濡れた下半身。改めて確認してみればシャツもスカートも肌に張り付いてて、しっかりと体のラインが浮き出てる。個人的には何も感じないが、サトウカズマの厭らしい目を見れば自分がスケベな格好してるのは理解出来る。

もしかしたらこれが、かつての親友が力説していた着衣エロという言葉なのかも知れない。

そうとなれば誘惑しようか。

「良いよ、気にしなくて。態とじゃないだろ？それよりさ、ちよつと変わった飲み方教えてあげよっか」

「変わった飲み方？どんなだ？」

不思議そうなサトウカズマの視線を受けながらメニューを開き、同僚に教えて貰ったそれを頼んだ。そう時間も掛からず届いたそれは淡いピンク色のカクテル。

同僚曰く、アルコール度数が低めで甘く飲みやすいお酒であるらしいのだけど——余計な効能もあるとか。

同僚から、これを出す男は信用するなど言われる、そんな効能が。

「はあ、洒落たもの飲むんだなあ・・・で、どう飲むんだ？火でも点けんのか？」

「あれはアルコール強くないと出来ないんじゃないか？これは弱いか

らな。そうじゃなくてさ、こうね——」

「ん?・・・ん?んぶつ!」

俺はそのカクテルを口に含み、サトウカズマと唇を合わせた。驚きのあまり固まるサトウカズマの唇を舌で抉じ開け、口に含んでいたカクテルを口内へと注ぎ込む。

俺の口の中で生まれた熱が、舌を伝って少しずつサトウカズマの中に入っていくのを感じる。

それがどうしてだか、凄く俺を興奮させた。

気持ちに任せてサトウカズマの舌に自分の舌を絡める。

最初はびくつとしたけど、直ぐに俺の動きに応えるように舌を絡ませてくれた。

厭らしい音が鳴り始める。

俺達の口元から。

男の頃キスは苦手であまりしたことがない。

だからキスの良し悪しなんて分からなくて、同然今サトウカズマとしてるそれが上手なキスかどうかも分からない。——でも、カクテルの味とサトウカズマの唾液が混ざったそのキスは、どうしようもない程に甘くて、蕩けそうになるほどに気持ちよかった。

ずっとそうしていたかったけど、ここはお酒を飲むところでそういう事をする場所じゃない。

我慢して唇を離す。

そうしたら、ギラギラした目付きのサトウカズマと目があった。望んでいた雰囲気があるにあってたけど、脳裏に浮かんだのは『苦笑い』の言葉。確かに誘惑には成功したみたいだけど、どちらかと言えば墓穴を掘った気分になっていたので。

だってきつと、サトウカズマより、俺の方が興奮してる。

「いっは・・・流石に、不味いでしょ?」

絞り出した声にサトウカズマは頷いた。

「二次会、しよっか」

いつもの宿に場所を変えた俺とサトウカズマは、部屋に入ると直ぐにキスを交わした。店でしたような丁寧なキスじゃなくて貪るような激しいキスだ。

エツちな音が部屋中に響いてく。

子宮がきゅんきゅんしてるのを感じ、そつとアソコに触れる。予想していた通りグチャグチャになっていて、手には溢れ出たそれが滴っていた。

指をあそこに這わせ、サトウカズマと何度もキスをする。唇が触れ合う度に、舌が絡み合う度に、気持ちよくて心地好くて、胸の奥とお腹が熱くなつてく。何も考えられなくなる。

息が切れるまで繰り返して、息を吸ったらまたキスをした。数えられないくらい、沢山。

どちらとも知れずキスを止めた俺達は息を整えながら見つめ合う。自分がどんな顔をしているか分からないけど、目の前のサトウカズマのエロい目を見れば察しはつく。きつと同じような顔だろう。エツちな事しか考えてない、頭悪そうな顔だ。

ふとサトウカズマの視線が下がるのを感じた。

「・・・お前、本当、おっぱい好きだなあ」

「し、仕方ないだろっ！男の性なんだよ」

男の性かあ・・・ん？

あ、そうだ。

ふとある事を思い付いた俺は服を脱ぎ捨て、水色用に買っておいたお酒を手にした。不思議そうなサトウカズマをよそに、片手で胸を中央に寄せ、出来た谷間にお酒を注ぐ。

「谷間酒・・・だどっ!?!」

サトウカズマの知識の偏りばないな。

これは知ってるのか。

まあ、何でも良いけど。

「ほら、遠慮しなくて良いぞ。一杯やってけ」

というより早く飲め、ヘタレ。

このサイズだと思ったより酒を置いとくの難しい。

急かすように上目使いで見ると、喉を鳴らしたサトウカズマが顔を近づけてきた。

そして音を立てて飲み始める。

それは何とも言えない様子で、不思議な気持ちにさせられた。気持ちいい訳ではないけど、嫌でもない。

本当、不思議としかいえない気持ちだ。

全部啜り終えると、サトウカズマは徐にキスしてきた。

俺がやったように舌で唇をこじ開け、さっきまで胸の所にあつたお酒を注ぎ込んでくる。

辛めのお酒を買った筈なのに、舌を滑っていくそれはいやに甘く感じる。

全部飲み干すとまた舌が絡んできた。

厭らしい音をたてながら、いっぱい舐め合う。

「・・・っあ、もう、きしゅわっかり」

そうぼやくとサトウカズマの手が胸の所に置かれた。

キスを止めて顔を離れたサトウカズマの目が俺を見つめる。

「そ、それじゃ、その、良いか？」

「いちいち聞くもんじゃないぞ。でもまあ、サトウカズマらしくて良いけどね」

俺はサトウカズマの手を胸に押し付け、軽くちゅーしてから伝えておく。

「いっぱい触って？カズマくんっ」

そうお願いするとサトウカズマの手に力が入り、ぎゅっと掴まれたおっぱいが形を変えた。

甘い刺激と共に。

それからサトウカズマとの二次会が本格的に始まった。

結局夜明けまで沢山セックスしてしまい、その日は夕方まで二人して泥のように眠った。宿代が馬鹿みたいに跳ねあがったのは言うまでもない。

少し失敗したけど、またやりたいと思った。マル。

はい？これが拷問ですか？いいえ、命を懸けたアルバイトです。

「あんだ、最近妙に艶々してるわね」

いつものようにウエイターとして働いていると、急に同僚がそんな事を言ってきた。

テーブルを拭く手を止めそちらへ視線を向ければ、訝しげむような同僚の顔が視界に入る。

「そう？自分だとよく分からないんだけど」

「最近夜も静かだし・・・なに、男でも出来た？」

男か・・・サトウカズマと最近ヤルようにはなっただけど、別に彼氏とかでもないしなあ。あれは・・・なんだろ、セフレ？んん？なんでも良いか。気持ちいいし。

でもまあ、この間の凄かったなあ。

もうオナニーなんか目じやなかった。

「・・・いや、まあ、えへへ」

「ああ、良いわよ言わなくて。ごちそうさま。私も助かるから、精々捨てられないように上手くやんのよ」

同僚は呆れたように溜息をつくとテーブルの片付けを再開した。

暫くすると元気な声が聞こえてきた。

視線を向けるとサトウカズマパーティーが全員集合してる。眺めているとキョロキョロと辺りを窺ってたためぐみんと目が合い手招きされた。

「ほら、呼んでるわよ。・・・あんだもそろそろウエイトレス引退かしらね」

「あはは、そんな事ないって。まだまだ稼がせて貰わないと。それに寮追い出されると困るし」

「どうせ言うなら、もう少し可愛いげのある理由言いなさいよ。いつてらっしやい」

同僚に見送られテーブルに行く。

軽く挨拶を交わし何を話していたのか聞けば、水色がクエストがしたいと騒いでいたのだという。幹部様のせいで閑古鳥がいない、今の時に。

理由を聞けば、どうやら水色には今日の昼食も買う余裕がないらしい。

「お願いよ！手伝ってカナデえ!!! 貴女私の信者でしょ！お願いよお、手伝ってよお！もうバイト三昧の日々は嫌なの！コロッケが売れ残ると店長が怒るのよ！」

そう言っただけ泣きながらしがみついてくる水色。

少しだけ可哀想に思ったけど・・・手加減なしで振り払っておいた。勘違いされても困る。誰が信者だ、誰が。奢ってやるんじゃないかな。

打ち捨てられた水色を見て、サトウカズマの瞳に呆れと憐れみの色が浮かぶ。

「さっきも聞いたぞ。天井はどうなんだ、宴会芸の神様」

「うるさいわよ！黙ってなさいクソニート!!」

「んだと、こらあ!!」

わちゃわちゃと喧嘩し出したサトウカズマ達を放って、依頼書を見る二人の所へ首を伸ばす。そこに書かれていたのは湖の浄化という、一見すると面倒臭そうなくクエストだった。

「大丈夫なのか？浄化なんて」

そう聞くとめぐみんとダクネスは「むむむ」と呻いた。

「出来ないとは言いません。アークプリーストのアクアであれば、浄化魔法がありますからね。ですが、湖一つとなると時間も魔力も沢山必要ですし・・・結構大変です」

「ああ、だから私たちは反対したんだ。浄化中、棲みかを荒らされたブルータルアリゲーターが攻撃してくる事も考えられるしな・・・いや、まあ、襲撃されること事態は悪くないのだが。ああ、浮かぶつ、浮かぶぞ！群れで迫るブルータルアリゲーター達の姿がつ！よってたかって、その獐猛な牙を私に突き立てて——くう！」

めぐみんがダクネスを変な物を見る目で見た。

多分俺も似たような目だろう。

「まあ、良いや。——で、サトウカズマはなんて?」

「一応受けると言っていましたよ。カズマに考えがあるそうで」

「そっか、なら良いや。準備してくる」

水色・めぐみん・ダクネスのゴリ押しなら止めるけど、サトウカズマが悪巧みするなら大丈夫だろ。

そう思った俺はいつもの装備を取りに帰った。

そうして始まった湖の浄化クエスト。

十分な準備を済ませて挑んだ俺達の目の前では、惨劇と呼べる光景が広がっていた。

『ピュリファイケーション』! 『ピュリファイケーション』! 『ピュリファイケーション』! ツツ! いやああああ! オリがまた、変な音したあああ!!」

鋼鉄の檻の中から焦りが混じった水色の叫び声が響く。

その檻の周りには夥しいワニの群れ、群れ、群れ。

さつきから水色が口にする浄化魔法の力が気にくわないのか、水色を守る檻へ一様に牙を突き立てていく。

あまりの悲惨な光景に、サトウカズマとダクネスが檻から伸びる鎖付近でソワソワしてる。

檻がそれなりに丈夫だとはいえ、絵面が絵面だ。二人のその行動も仕方ない。

「それにしても、カズマの作戦がなければ危ない所でしたね。ですよね、カナデ——もぐっ」

意外と肝の座ったためぐみんはお昼のサンドイッチを頬張りながら話し掛けてくる。

「そうだな———というか、よく食べられるな?」

「いざという時にお腹が減って動けない、なんて笑えませんかからね。冒険者たるもの、食べられる時に食べておくものです。カナデも食べておくと良いですよ」

そういうとめぐみんはサンドイツチを差し出してきた。

”郷に入れば”とも言っているので、めぐみんから差し出されたサンドイツチを大人しく受け取っておく。羊臭い。ラムサンドみたいだ。

口の中のサンドイツチを飲み込み、めぐみんは水色の方を眺め続ける。

「それに檻もまだ大丈夫そうですね。取り敢えず、ギリギリまで様子を見てみましょう。いざとなれば私の爆裂魔法で蹴散らしてやりますよ——まあ、ばらついていきますから、全部は無理でしょうが」

「・・・残りの数によつては、ダクネス凵にターゲット分散して、各個撃破するのも良いかもな。ま、尻尾巻いて逃げなきやいけなくなる可能性の高いけど」

もぐつとサンドイツチにかぶりつけば、甘辛いソースが口の中に広がっていった。

なにこれ、普通にラムサンドうまつ。豚肉が至高だと思ってたけど、羊もいけるなあ。

「カズマにはその手の期待はしてませんが、カナデがブルータルアリゲーターを殴り殺してる姿は容易に浮かびますね」

「・・・んっ。俺をなんだと思ってるの?」

「ふふ、頼りにしてますよ」
まったく。

でも、こうしてめぐみんと食事しながら改めて思う。
本当にサトウカズマの言うとおりにして良かったと。

サトウカズマが出した策、水色を檻に入れて湖に沈めるといふ鬼畜染みた方法を。

流石に聞いた当初は鬼かと思った。幾ら水色に苦労させられ恨みがあるとはいえ、仕返しにしてもやり過ぎだと。

けど実際やってみるとこれが上手く嵌まった。現に精神的なダメージは仕方ないにしても、水色には身体的なダメージが殆んどない。浄化する為に水色が出した”水に触れる”という最低条件もクリアしてる。

もしサトウカズマの策がなければ、このクエストはかなりの無理

ゲーだったろう。水色が浄化している間、あのワニの大群を相手にしなければいけないのだ。考えただけでもゾツとする。

『ピュリファイケーション』ツ！」

水色の地獄はまだ峠を越えたばかり。

切に願うのは、このまま何もありませんようにだ。

『ピュリファイケーション』!!うわああああん!!止めてええええ襲わな
いでえええ!!『ピュリファイケーション』!『ピュリファイケーション』!
『ピュリファイケーション』ツツツツ——」

地獄の門が開いてから数時間後。

湖を浄化しつつくし無事目的を達した俺達は、水色を檻に仕舞ったままギルドに向かって帰っていた。

水が綺麗になった事でワニ達は何処かに消え、仕事も終わったのだから出してやれば良いのと思うだろう。俺も思う。というか、皆そう思っている。だが当の本人が出ていきながらないのだ。

なんでも、檻の外は怖いらしい。

殺気を纏った大量のワニに囲まれたまま数時間放置され、ご立派なトラウマを生産したようだ。恐らく一生物のトラウマだろう。

その代償が30万エリスという端金かと思うと泣けてくる。

街についた所で一度は諦めていたサトウカズマも再び出てくるよう説得を始める。馬車の荷台の檻に女の子を入れ、市中を引き回すのは気が引けるのだろう。あと単純に周りの視線が痛いようだ。

それでも頑なに出てこない水色は檻の中を聖域と呼び始めた。ついでに悲しそうに歌い出す始末。

そろそろ、こいつのこれからの生活が心配になってくる。

そんな時だった。

「女神様じゃないですか!!?」

驚愕するような男の声が聞こえたのは。

声に振り向くと檻の鉄格子にしがみつく男がいた。

大層立派な鎧をつけた如何にも”僕、勇者デス”みたいな格好をした男で、腰にはそれを主張するような大振りの剣が見える。格好つけ

すぎて、逆に滑ってる感が凄い装備だ。

その独特の趣味の悪さと、水色を見て女神と言った所から転生者の類いか？——とか思ってたなら、男が鋼鉄の鉄格子を腕力で挟み開けた。ブルータルアリゲーターですら浅い傷しかつけられなかった、その頑丈な鉄格子をだ。それに対しサトウカズマが驚愕の声をあげた。恐らく二重の意味でだろう。

さて、檻の修理代は幾らだろうか。

その後の男の様子から水色を助けようとしているのは分かるのだが、当の本人は男から差し出された手は勿論、人が通れるくらい広げられた檻の鉄格子にすら、ぼんやりと視線を送るだけでピクリともしない。幾らか間をおいて少しだけ虚ろな目を男に向けたけど、やはり動こうとしない。

まあ、そうだよな。

聖域だもんな。

ダクネスがその男を止めに入ると、サトウカズマは水色に声を掛けにいった。なので俺も便乗する。

「おい、アクア。あれお前の知り合いじゃないのか？女神とか呼んだぞ？」

「水色、多分転生者の類いだぞ」

「マジか、カナデ」

「いや、マジかどうかは知らないぞ。でも、それっぽいじゃん？」

俺とカズマはそっと男を見た。

妙に正義感が強い言動や如何にもな鎧とマント。

俺達はお互いの目を合わせ「せやな」と頷く。

俺達に話し掛けられた水色はというと、女神という単語に眉を潜めていた。サトウカズマから「こいつ、まさか」と小さな呟きが聞こえる。

囁くような声が聞こえたので水色に視線を向ければ、ブツブツと何か言ってる。

「女神……めが、女神……ああつ！そう、そうよ！私は女神!!アクシズ教の御神体にして日本担当の超絶スーパーエリート、ア

クア様よ！」

凄い自信満々の瞳。

自分が神様だった事も忘却してたらしい。

どれだけさっきのシヨックだったんだろうか。

復活した水色は直ぐ様檻から這い出ると、胸を張り先程の様子が嘘のように高らかに叫んだ。

「さあ、何かしら？カズマ、カナデ。この女神の私に何をして欲しいのかしら？しようがないから、手伝ってあげるわ」

呆れるカズマに代わり、男を指差して「ゲットアウト」と伝える。水色は「ちよろいもんよ！」と腕捲りして向かった。お願いしといてなんだが、女神としてそれに簡単に返事をするのはどうなのだろうか——とか少し思ったけど黙っておく。

「アクア様つ……！お元気になられて良かった！僕です！御剣響夜です！あなたに魔剣グラムを頂いた！」

「……？？」

感動を全身で伝える男のリアクションとは裏腹に、水色は不思議そうに首を傾げた。

そして少し考えた後、拳に魔力を溜め始める。

一度カエルの時に見たので分かる。ゴッドブローの準備だろう。

「よく分からないけど……カナデにお願いされたから、一回だけ殴るわね」

「ええ!!?なぐつ、あ、あれっ!!?あの、僕です！貴女に勇者として選ばれ転生された、御剣響夜です!!あの日から僕は貴女に選ばれた事を誇りに——」

「ゴッドブロー!!」

「へぶっう!!?」

何かを言いかけていた自称勇者はうちのアホ女神の手によって殴り飛ばされた。思わずファーーと言いたくなる飛びっぷりであった。

「ぎよ、キョウヤ!!」

うわっ、またなんか来た。

今日は厄日だな。

男と男の勝負ですか？よし、どんな手を使っても、何がなんでも勝ってこい。以上。

盛大に水色が自称勇者を殴り飛ばして暫く。

連れの女子二人に介抱される自称勇者へ改めて事情を聞くと、やはり水色が送り出した転生者の一人だった。まあ、当の水色は欠片も覚えていなくて、それを聞いた自称勇者が失意のズンドコに落とされのは言うまでもない。

それから転生者同士という事もあって、サトウカズマとミツルギはお互い情報交換をし始めたのだが——サトウカズマの話聞いた自称勇者のミツルギが何故だか怒り出した。

「君はっ、何を考えているのですかあ!!女神様をこの世界に引きずりこんだ事もそうだがっ、バイトでこき使うわ、カエル退治の囿にするわ、クエストで檻に閉じ込めて湖に浸けるわ、馬小屋に寝泊まりさせるわ——しかも、未だに最弱職だと!そんな体たらくで女神様に何かあつたら、どうするつもりなんだ!ええ!」

サトウカズマの胸ぐらを掴みあげ怒り心頭といった様子のミツルギ。水色が宥めに掛かるが、全然聞く耳を持つとうとしない。

そんなミツルギの態度に普段温厚な変態ダクネスもキレ気味に止めに入る。「礼儀知らず」だと怒りながら口にしたダクネスが少しだけまともに見えた。そう、少しだけ。所詮は礼儀うんぬんどころか、何処でも発情する超絶スーパーDM変態騎士。俺は騙されない。

めぐみんもご立腹の様子で目が赤く光ってる。
撃つなよ、街中で撃つなよ。フリじゃないからな。

注意するように見ていると、めぐみんからジト目が返ってきた。

「……カナデも、その手に持ったもの、振り上げないで下さいよ」
言われてそつと視線を落とす。

そこには俺の手にしっかりと握られた、僕らのモーニングスターの勇姿があつた。

……大丈夫、めぐみん。これはあれだから。ゴキブリを潰す、あ

れだから。対虫専用武器だから。

だからね、人を叩いても大丈夫なの。

笑顔で大丈夫アピールをしたが、怪しむような目で見られてしまった。信頼なしとは・・・くうつ。

それにしても不思議だ。言ってる事はわりとまともなのに、こんなにムカツクなんて。変な呪いでも掛かってるんじゃないか？あいつ。そんな事を思いながらサトウカズマ達のやり取りを眺めると、こちらを見たミツルギと目が合った。

「クルセイダーにアークウィザード？向こうの彼女は冒険者かな？でも筋は悪くなさそうだ。・・・それに皆、随分と綺麗な人達じゃないか。君はパーティメンバーには恵まれているようだね。だが、それなら尚更だよ。アクア様やこんな優秀そうな人達を馬小屋に寝泊まりさせて、恥ずかしいとは思わないのか？」

・・・何言ってるんだ、こいつ。

宿とるのにどんだけ金掛かると思ってたんだ。連れ込み宿とるのに、幾らか掛かっていると思ってたんだ。俺が幾ら延長料金払ったと思ってるんだ。腰に差したご立派な剣、貴様のアナルに挿し込んでやろうか・・・ツツ!!

——おっと、いけない。この間の失態を思い出してたぎってしまった。ふう。

てか、駆け出し冒険者がそんな事出来るわけないだろ。

念の為にめぐみんに確認をとったらやっぱり普通らしい。だよねえ。

イライラが募る中、ミツルギは同情するような視線をこっちに向けてきた。憐れみの混じった笑顔つきで。

「君達、今まで苦労したみたいだね。これからは、僕と一緒に来るといい」

その言葉だけでもカチンときたのに、あろうことかミツルギが側に寄り俺の手を握ってきた。

背筋にそれまで体験したことのないような悪寒が走る。

「勿論馬小屋でなんか寝かせたり——」

「そもそも馬小屋で寝てないのでっ」

力任せにその手を振り払えば、殆んど力が入ってなかったのかミツルギの手は簡単に外れた。すると俺の行動が意外だったのかミツルギはキョトンとし——その後やれやれと肩を竦めて見せた。

端的に言つて、殺したくなつた。

なんだ、こいつ。

殴つていいのかな？サンドバッグ？

「まあ、先程のは例えの一つだよ。そうだな、高級な装備品も買い揃えてあげるし、まだ冒険者なら好きな上級職になれるよう僕が指導してあげよう。——とは言つても、僕が教えられる事って剣の事ぐらいしかないんだけど。でも、君が上級職になれるよう協力はさせて貰うよ。どうかな？」

その顔に嫌みはない。

恐らく善意なのだろうと思う。

かなり押し付けがましくて、イライラするけど。

ミツルギはめぐみんとダクネスに視線を移し続ける。

「それに二人は僕のパーティーと相性がいい。前衛にソードマスターの僕、僕の仲間の戦士と、そしてクルセイダーのあなた。後衛に僕の仲間の盗賊と、アークウイザードのその子にアクア様。構成的にバランスが取れてると思つたけど、改めて考えたらあつらえたみたいにピッタリなパーティー構成じゃないか！」

一人で盛り上がるミツルギの後ろ、サトウカズマの不安そうな顔が目についた。俺達の気持ちちがミツルギに動いたかも知れないと思つたのだろう。金持ちそうだし、顔も悪くないしな。

だが、その心配はいらない。

なにせ俺の後ろで、女子達ドン引いてるからな。

一番脈があつて然るべき水色が「ヤバイ」とか「怖い」とか言つてる始末だからね。あのダクネスでさえ「生理的に受けつけない」「寧ろ殴りたい」って呟いたからね。めぐみんなんて爆裂魔法の魔力練り始めたからね。撃つなよ。

「あ、カナデ。その手、浄化しといてあげるわ『ピュリファイケーション

ン」

あ、ほら。

気を利かせて触られた所を浄化してきたからね。

まさかのミツルギの目の前で。

その様子に安心したのか、サトウカズマは俺達とミツルギの間に割って入り、状況を飲み込めないナルシストを軽く一瞥した。

「そういう訳で、俺の仲間は満場一致であなたのパーティーには行きたくないみたいです。俺達はクエスト完了報告があるから、これで……」

らしくなく格好よく終わった——かと思ったのだが、サトウカズマの前にミツルギが立ち塞がった事で振り出しに。

……たまには格好よく終わらせてあげて欲しい。

「悪いが、アクア様の境遇を知った今、このままアクア様を君に任せる訳にはいかない。——いいか、君には世界は救えない。魔王を倒すのはこの僕だ。それなら、アクア様は僕と一緒に来た方が絶対いい」

水色への執着。パネエ。

てか、もう俺らは良いのか。おい。

いや、また誘われても全力でお断りするけども。

しかし、水色をかあ……。

「……水色、今からでもあいつの所にいけば？それで全部終わる気がするんだけど。贅沢出来ると思うぞ。シュワシュワ飲み放題だぞ」
「い、いやよ！カナデ、なに言ってるの!?馬鹿なの？カナデさん、本当は馬鹿だったの?!贅沢だって、あんなのが隣にいたら安心して出来な
いんですけど!?シュワシュワだって一緒に飲む人がいないと楽しくないんですけど!?止めてえ、私を売らないでよお!!出荷はいやああ
!!」

水色は泣きじやくりながらダクネスの影に隠れる。

そつと涙目でこつちを覗く姿は珍しく可愛く見えた。

「おいでーおいでー、怖くないよー」と餌をあげたい気分になる。

「……君はこの世界に持つてこられるモノとして、アクア様を選んだという事だよ」

水色を女子三人で慰めていると、不穏な言葉を聞いた。

「そーだよ」と呟いたサトウカズマを見れば、いつになく恐い顔をしている。一見するとぼやーっとしてる顔だが気配が違う。それによく見れば腰に提げた剣をいつでも抜ける体勢をとり、ミツルギが剣を抜いた時やりづらい場所に位置どりしてる。もう、やる気満々だ。

よーいドンがなつたら速攻だろう。

「なら、僕と勝負しないか？アクア様を、持つてこられる『者』として指定したんだろう？僕が勝つたらアクア様を譲ってくれ。君が勝つたら、何でも一つ、言う事を聞こうじゃないか」

「よし乗った!!じゃあ行くぞ!」

「えっ!?!ちよっ!待っ……!?!」

やっちやえー。

サトウカズマが勝負を了承して一分後。

そこには無惨に打ち倒されたミツルギと、魔剣を肩にしたサトウカズマの姿があった。

「卑怯者!・卑怯者卑怯者卑怯者ーっ!」

「あんた最低!・最低よ、この卑怯者!・正々堂々と勝負なさいよ!」

ミツルギの取り巻きがやんや言ってるが、サトウカズマは別に悪い事はしてない。

不意打ちで飛びかかったし、ミツルギの武器を窃盗スキルでパクつたし、がら空きの脳天にショートソード(鞘付き)を叩き込んだし、倒れたミツルギに肘鉄で追い討ちかけたりしたが——全然卑怯じゃない。

サトウカズマは自分が出来る事をして戦い、そして勝っただけだ。あえて何が悪かったかと言えば、自分のレベルの高さに胡座をかいて

サトウカズマを侮り、ルールを曖昧にしたままスタートを切らせたミツルギが悪い。

そもそも、レベルの低い駆け出し冒険者に、高レベルの冒険者が賭け勝負を挑む事のほうがよっぽどだ。

流石にそのまま言ったら拗れるので、やんわりその事を伝えておこうと思う。

あのままだと、ちゃんと戦ったサトウカズマが可哀想だから。

「そのボンクラが、頭パーなのが、一番悪いんだよ?」

「何よあんたあ?! 喧嘩売ってんの!?!」

「キョウヤは頭パーじゃないわよ!!」

おっと、つい本音が。

いきり立つ二人をどうしようか考えてるとかサトウカズマが俺の前に出てきた。言葉は交わさなかったけど、任せろと言いたいのは分かったので引いとく。

「言いたい事は色々あるだろうけど、取り敢えずこれだけはハッキリさせておくぞ。俺の勝ちって事でいいな? それで、こいつ負けたら何でも一つ言う事を聞くって言ってたな? それじゃあ、この魔剣を貰っていきますねっと」

一方的な突き放した言葉に、取り巻きAが焦りを見せる。

「なっ!!? ば、バカ言ってるんじゃないわよ! それにその魔剣はキョウヤにしか使いこなせないわ。魔剣は持ち主を選ぶのよ。既に——」

自信満々に語るAを無視し、水色に視線をやれば当然だと言わんばかりに頷いた。

「そうよ。残念だけど、魔剣グラムはあの痛い人専用よ。装備すると人の限界を越えた膂力が手に入り、石だろうが鉄だろうがサククリ斬れる魔剣だけれど・・・カズマが使ったって普通の剣よ」

「だってよ、サトウカズマ」

聞こえているだろうが念の為に伝えると、サトウカズマは凄く残念そうな顔をした。

そこまで未練がある訳でもなさそうだけど。

それから取り巻きAとBが煩く言ってきたが、女の子相手でもドロップキックを食らわせられる真の男女平等主義者であるサトウカズマの必殺技『厭らしい手つき』を見せる事で完封。それは見事に撤退させた。

皆引いていたけど、あのままだと二人の興奮具合から誰かが怪我をするような事になっていたので、個人的にはフラインプレーだと思うので褒めておいた。

ついでに、その『厭らしい手つき』をエッチの時に使ってこいよ、とかも本気で思ったりした。

その後はギルドに檻を返却、水色にクエスト達成報告をさせてから皆でご飯食べて解散——という流れになる筈だったのだが、何故だか俺はサトウカズマに捕まっている。

がっちり掴まれた手はいつもより力強く感じ、いやに熱い。

不思議に思っただろうしたのかと尋ねれば、一言だけ返ってきた。

「ハハハ、ハ、この後、じ、時間あるか・・・？」

ほう？

ほほう？

成る程、成る程・・・。

エッチですね、喜んでっ！

俺は迷う事なく頷いた。

あそこをMAXに濡らして。

☆らぶらぶエッチしても良いじゃない。恋人じゃない。くてもさ。

昔、幼馴染の親が幼馴染によく言っていたある言葉を思い出した。いや、正確には歌だったか。

正直あんまり覚えていないのだが『男は狼なのくよく』っていう、それだ。

後で親友に聞いたらその歌は『男は性欲に支配される馬鹿だから、女の子は男の言う大丈夫を信じちゃ駄目だよ！迫られたらキンタマ蹴りあげて逃げるんだよ！』っていう事を簡単に歌った物らしい。

その当時はまた親友が馬鹿な事を言ってるなあ、と聞き流していたが・・・今になってそれは正しかったなあとか思っていた。

「・・・あの、サトウカズマ？」

後ろから抱き締めてくるサトウカズマに声を掛けるが言葉が返ってこない。返ってくるのはサトウカズマの煩いくらいの鼓動と、触れあう肌から伝わる熱い体温だけ。

いつもならつつかえながらでもピロートークに付き合ってくれるのに、今日のサトウカズマは沈黙したまま、ただ強く抱き締めてきていた。

きつといつもなら首筋に掛かる熱い吐息も、驚掴みされた乳房からくる刺激も、お尻の所にあたる硬い物も大歓迎だろう。寧ろガンガンおねだりした事だろう。

けど、今夜はそれが出来そうになかった。なんとなく、怖いと思っていたからだ。

「あ、あの、サトウカズマ？サトウカズマさーん？」

サトウカズマは言葉を掛けても返してこず、俺の首筋に顔を埋めたまま動かない。

どうしたものかと思っていると、少し湿った生暖かい感触が首を

伝った。ぞくつとする。

「んあつ!? な、舐めた?! いや、舐めるのは、別に、良いけどさ・・・一言くらい——っ、ひゃう」

急に胸を強く揉まれた。

乱暴な手つきで感じるより少し痛い。

さつきから何なのかと少し振り返り——浅はかにサトウカズマの誘いに乗ったことを後悔した。

だって僅かに髪の間から見えたサトウカズマの瞳が、今まで見たこともないくらいキラついていたから。

本当に狼なんじゃないか、そう思うくらいに強く、猛々しかった。それこそ恐くなるくらいに。

はい、乙女のピンチなんだけども。

サトウカズマの誘いに乗りやってきたいつもの連れ込み宿。部屋に入った途端、サトウカズマは後ろから抱き締めてきた。いつになく積極的な姿勢に内心ドキドキワクワクしていたの最初だけ。残念ながら、もうそれは感じない。

寧ろドキドキヒヤヒヤしてる。

というのも、何だか乱暴なのだ。

「んっ、んんっ、あう・・・」

無言で抱き着いてきてから暫くして、サトウカズマは胸を揉んできた。けれどそれが妙に力が強くて素直に楽しめない。何も感じないかと言えば嘘になるけど、おっぱいを解禁した日の不馴れながらも優しく触ってくれた時の方がずっと気持ち良かった。

他にも首筋に吸い付いてきたり、舐めてきたり、秘部を触ってきたりと、いつもより色々されてる気がするけど、今は何だか不安な気持ちの強い。

でも、押し退ける事は出来なかった。

何となくだけど、それだけはやっちゃいけない気がしたのだ。

そのまま我慢して付き合っていると、無理矢理振り向かされ強引にキスをされた。サトウカズマの舌が口の中に差し込まれる。でも、この前みたいなの舐め合うようなキスじゃない。一方的な舐められるだけのキスだ。

サトウカズマの舌が這いずっていく。

舌も、頬も、歯も、唇も、舌が届く全部。

そのキスは直ぐには終わらなかつた。サトウカズマは執拗に何度も、舌を這わせてきた。擦るように、押し付けるように……まるで口の中全部を、マーキングしてるみたい。

グチュグチュと厭らしい音が止まらない。

溢れた涎が口元から伝う。

それは乱暴なキスだったけど、俺のあそこは少しずつ熱くなつていった。

どれだけキスしたのか分からない。

息苦しさで気持ち良さで意識がぼーっとし始めた頃、俺はベッドに押し倒された。

股がるようにサトウカズマが乗っかってくる。

やっぱり目がギラついてて、なんか怖い。

いつものスケベな目とは少し違う。

体に力が入らなくて、その顔をぼんやり眺めていると、サトウカズマの手が動いた。

動いたそれは、自分の股間にあるそり立つモノを握る。

何をしようとしているのかなんて考えなくても分かる。

幸い開発してきたお陰であそこは十分に濡れている。

だから気持ちだけ準備しておく。

「っん、あっ！」

サトウカズマのそれが割れ目をなぞった。

敏感になつてるクリトリスが擦れ、小さな痺れが下腹部から走ってくる。焦らしてきたのかと思っただけ、サトウカズマの顔を見ればそうじゃない事が分かってしまう。

俺には見られたせい、サトウカズマの顔に羞恥が浮かんだ。また挿入しようとあてがってきただけ、ズルツと滑りまたクリトリスを擦っていった。

背筋がぞくりとする。

「っ——くそっ」

悪態をついてからの三回目。

サトウカズマのそれは俺の中に突き刺さった。

膣内を擦りながら深く、一番奥まで。

覆い被さるようのしかられピストンされる。

力任せに子宮口が何度もノックされる。

ズンズンと。

エツチな音が聞こえる。

好きな臭いが鼻をくすぐる。

触れあう肌の体温も、熱いモノがお腹の中を満すのも感じる。

なのに、不思議と気持ちよくなかった。

突かれる度に、何故か辛くなっていた。

「——っ、か、カナデ？」

サトウカズマが驚いたような顔をして動きを止めた。

酷く焦ったような顔でこちらを見てくる。

どうしたのかと思えば、サトウカズマの指が目元をなぞった。そつと離れていった指先に、少しの水滴が付いているのが見えた。

何となしに自分の目元を触って分かった。

汗かと思っただけ、涙だった事。

「……ごめん、カナデ」

そうとうとサトウカズマは俺から降りてベッドに転がった。あそこはすっかり萎んでる。俺もなんかそういう気分ではなくなっちゃった。

だからサトウカズマの隣に寝転んだ。

少し天井をぼーっと見た後、隣に寝てるサトウカズマを見る。すると丁度こつちを見たサトウカズマと目が合った。スケベで何処か優しい目をした、いつものサトウカズマと。

「……サトウカズマ、ちよつとこつちこい」

「なんだよ」

「良いから」

そう促すとモゾモゾと近づいてきた。

俺はサトウカズマの頭を掴んで胸に抱き寄せる。

ぎゅうつと、ちよつと強めに。

「な、何すんだよ!?!いきなり!?!」

「俺子供の頃さ、結構泣き虫でさ、よくお母さんにこうして貰ってたんだよ。俺。ぎゅうつてされると、なんか凄い安心出来たんだ」

逃げようとしてたサトウカズマの手から力が抜けた。

逆に持たれ掛かるように体重を預けてくる。

だからそのまま抱き締めて撫でておく。

「……大丈夫になったか?」

「少し」

「そっか」

サトウカズマが何を考えているのか、俺には分からない。でも何となく、不安だったんじゃないかなとは思った。だって思えば、あの時から表情が固かった気がするのだ。ミツルギが勧誘してきた、あの時から。

「なあ、サトウカズマ聞いてくれるか?」

「何をだよ……」

「俺は誰でも良いとは思ってないぞ」

ピクリとサトウカズマの肩が揺れる。

「始めはな、サトウカズマなら童貞っぽいし、簡単に誘えそうだったし、チンコ大き過ぎずに良い初セックス出来る相手かなって思ってた」

「なんて事思ってたんだ、お前」

「煩いな、茶々いれるな」

ぎゅつとすれば、サトウカズマは口をつぐむ。

「でもな、今はサトウカズマが良いと思ってる。俺はサトウカズマとエッチしたい。異性として好きかどうかと聞かれると、まだちよつと分からない。——でも、一緒にいたいって思うのはお前だぞ」

「だから、大丈夫。俺は何処にもいかないからさ」

腕を緩めるとサトウカズマの顔があがった。

捨てられた子犬みたいな顔が可愛くて、思わずおでこにちゅーしてしまう。

すると、サトウカズマがモゾモゾ動いて顔を近づけてきた。目を瞑って唇をちよつと突き出せば、触れるだけのキスをされる。

「もつとしたいなあ、って言ったらしくてくれる？」

「・・・お前、本当に男だったんだよな？」

「男だったぞ。がつつり生えてた」

「生々しい事言うな萎える」

そう悪態をつくサトウカズマにキスをする。

軽い触れるだけのキス。

啄むように何度も。

そうしたらサトウカズマがキスを返してくれた。

でも唇じゃない。頬だ。

ちゅつちゅつと、お返しのように啄むようなキス。

俺のキスとの違いは位置が少しずつ下へ下がっていく所だ。頬から首、首から鎖骨、鎖骨から乳房へ。背筋がゾクゾクしてしつとりあそこが濡れてくる。

「ふうっ、んっ、そこ、わ」

サトウカズマの唇が乳輪を啄み始める。

でも自己主張するそれには触れてくれない。

からかうようにその周りばかりにチクチクつついてくる。

「っん、っん、なん、れえっ」

懇願するようにつめてみたけど、サトウカズマは俺の視線を無視する。一番触って欲しい場所に触れずその周りばかりにキスを落とす。今度は一丁前に焦らしてきてるみたい。

頭がフワフワしてきて、我慢出来なくなり自分で触ろうとしたけど、サトウカズマに手を抑えこまれた。

「やらあ、とめちや」

「お前、本当に男だったんだよな？エロすぎだろ」

サトウカズマの吐息が胸の先っぽに掛かる。

熱っぽいエッチなその息が。

もうたまらない。

「お願いします、カズマ様って言ったら、やらない事もない
なんっっ」

「かずま様あ、おねがいつ」

「て……おふっ」

サトウカズマがそっぽ向いた。

お願いしたのに触ってくれないとはこれいかに。

足りなかったか。

呂律が回らなくて話すのも大変だけど、もう一回お願いしてみる。

「おれの、ちくびさわって？いつぱい、ちゅっちゅして？いつぱい、ちゅぱちゅぱして？いつぱい、ぺろぺろして？ねえ、かずま様あ、おねがいつ。さわってほしいのお」

頑張ってお願ひすれば、サトウカズマの喉がごくりと動いた。いつものスケベな目が俺を見つめてる。

「かずまあ——っああん！」

名前を呼ぶとサトウカズマが乳首を啄んできた。

我慢していた分敏感になっていたのか、触れられたそこから甘い痺れが全身に走る。その刺激は一回では終わらなかった。つつくようなキスが繰り返されて、ずっと体がゾクゾクさせられてしまう。お腹が熱くなって、割れ目から愛液が込み上げてくる。

沢山キスしてきた後、サトウカズマはぶっくり立った乳首に舌を這わせてきた。でも触れるか触れないかのソフトタッチ。沢山ぐりぐりされて弄ばれたのに、サトウカズマは優しくしか触ってこない。「いじわるっ、しないれえっ、かずゆまあ」

「——っもう、お前、本当につ」

「ふあっああっ、ああ！りやめえ!!」

急に乳首を吸われ、頭がチカチカするような衝撃が全身を駆け巡った。気持ち良すぎて何も考えられなくなる。体から力が抜ける。

達した心地よさに身を預けていると、不意に乳首を甘噛みされ、俺の体はまたはしたなくイッた。今度は股の所が勢いよく濡れる。感覚から潮じやなくてオシッコを漏らしてしまったのが分かって、なんとも言えない複雑な気分。

原因となつたサトウカズマを睨めば、申し訳なさそうに笑った。

「・・・うう、ばあか。いきなりは、だめえ」

「わ、悪い。でも、な、そんな顔で言われてもな」

「うるさい、ゆるさないからにや」

そう言うとサトウカズマが頭を撫でてきた。

顔を見れば反省してないのが丸分かりだ。というか、どっちが不利なのか分かってやってる確信犯の顔してる。

このまま放っておくともっと焦らされそう。

流星にいまそれをやられるのは辛い。

「・・・うう。で、でも、ちゅーしてくれたら、ゆるすかもしれ——」

言い終わる前に唇を重ねられた。

生温かいサトウカズマの舌が口の中に入ってきて、俺の舌と絡んでくる。グチュグチュと少しの間舐め合った後、サトウカズマの唇が離れていった。

「——つぶは、カナデ、これで良いか?」

「んーん。だあめっ、もっとして」

「はあ、お前も大概だよなあ」

とん、と股の所に硬いものが押し付けられた。

「俺のにも、付き合ってくれたら良いぞ」

グリグリとサトウカズマのそれが割れ目を擦ってくる。その刺激のせいで子宮が物欲しそうにキュンキュンしてしまう。普段の場所より、ずっと下に降りてきてる。

欲しいのは俺も同じだ。

だから返す言葉は決まってる。

「いいよ、いっぱいしよう？」

サトウカズマのそれがズブリと潜り込んできた。

グチュグチュに濡れて火照った、俺の大事な所に。

その日のサトウカズマとのエッチはいつもとちよつと違った。獣みたいに激しく絡むエッチじゃなくて、ゆっくりとしたのんびりエッチ。

いつもより肌を触れあわせるエッチだった。

サトウカズマの体温と鼓動を感じられるそれに激しさも痺れるような快樂もなかった。けど、いつまでもそうしていたい安心してしまう心地よい快樂があった。

そして何より、ポルチオ絶頂出来たので、またやりたいと思った。まる。

■世の中には、知らなくて良いことも、あるようだ（後悔）

殆どの者が枕に頭を預ける夜もふけた頃。

光が煌々と灯り、楽しげな声と人で賑わう場所がある。

俗にいう歓楽街と呼ばれる場所だ。

私はその歓楽街の光が差し込む路地裏で、自分の浅はかさを後悔していた。

何故、大人しく帰らなかったのかと。

「お、おい。クリス。やはり、止めておかないか？」

「何言ってるの、ダクネス。ここまで来て引き下がれる訳ないでしょ？噂の真偽を確認しないとっ！」

建物の影から通りを覗くクリスは何処か楽しげに言う。私はと言えば、罪悪感とかなにやらで一杯一杯だ。正直バレル前に帰りたい。騎士としてもどうかと思うし。

「あ、ダクネス、ダクネス!!こっちこっち！」

やたらとテンションの高いクリスに手招きされ仕方なしに覗いて見れば、歓楽街を歩く二人の姿が見えた。

仲間であるカズマとカナデだ。

「よしっ!いこう、ダクネス！」

「うわっ、ちよっ、クリス!?!——!」

始まりは数日前、クリスのほんの一言から始まった。

「ダクネス。噂聞いた？」

数日ぶりの再会でお昼を共にしていた時、不意にクリスが悪戯っ子のような顔で聞いてきた。

よく見知ったその顔で。

クリスは根は良いやつなのだが、隙あらば悪戯をしかけてくる茶目つ気が強い所もあるやつだ。実際親しくなつてから幾度もからかわれた経験があった。

最初こそ身近にそういう者がいなかった為、色々と躊躇う事もあったが、今ではもう慣れたもの。何か良からぬ事を考えていれば、何となく分かるくらいになっていた。

だから少しだけ警戒して、私は耳を傾けた。

何んの話なのかと。

「カナデとカズマが付き合ってるって話ー」

「ぶっはっ!!?はっ!!?はあああ!!?」

最大限警戒していたのだが、思わず飲んでいた水を嘔き出してしまった。対面に座っていたクリスから苦情がくるが———それどころではないので無視した。

「どういう事だ!!?カナデとカナデが———じゃなかった。カズマとカズマが———じゃなかったな。なんだ、えっと、カナズマが?カズマで?カナデがカナデで?」

「一旦落ち着いてよ、ダクネス。意味分からないこと口走ってるから。はい、深呼吸、深呼吸」

促されて深呼吸をし、もう一度言われた事を頭の中で整理する。サトウカズマが、カナデと、お付き合いをしている。成る程。

「いや、成る程ではない!!?どういう事だ!!?」

「だああーもう!声大きい!周りに聞こえるでしょ!あくまでも噂よ噂よ!はいはい、座って座って!」

促されて座り、水を勧められジョッキに注がれた一杯を飲み干す。それから二度三度と深呼吸をし、そうしてようやく落ち着いた。

それから詳しく話を聞くと最近そういう噂がたっているらしいとの事だった。曰く、連れ込み宿に入る二人を見たとか、二人でイチヤイチヤ飲んでる姿を見たとか、二人が恋人みたいな濃厚なキスをしている所を見たとか、そんな話だ。

ただ、どれも眉唾もので確証はないものらしい。

「それでさ、同じパーティーのダクネスなら、何か知ってるんじゃない

かなあつてさ。ねえ、そこんどこ、実際どうなの？ねえねえ？」

「と、言われてもだな・・・うーん」

「いやね、分かるよ。パーティー内の事だからあんま言いたくないのはさ。でもね、聞いて。私き前に——」

「いや、パーティー内の事だから言いたくない訳ではない。それにクリスの事は信用しているから、それなりに訳があれば教える事に抵抗もない。ただな、分からないのだ」

クリスがポカンとした。

そして小さく「分からない？」と首を傾げる。

「ああ、分からないんだ。カナデとそういう話をした事もなければ、二人にそう言った類いの関係性を感じた事もない。なんというか・・・男女のというよりは・・・男友達？とも言うのか？あの二人は割り」とそんな感じなんだ」

実際色々見てきた私としては噂が出ていること自体驚いている。あんなに雰囲気のない二人もないからだ。

同郷の繋がりで仲が良くつるむ姿は見ているが、それは気のおけない友人という言葉の方が余程あっている姿。噂にあるような体の関係があるのはしつくりこない。

「そうなの？でもあたし、前にカナデからカズマの童貞狙ってる話聞いたんだけど・・・」

「童貞を狙ってる・・・か。ふむ。それは・・・いや、待て、なんの話だ!?そしてそれは本当の話か!」

「本当だよー。だから余計に気になってるんだってば」

カナデ、カズマの童貞を狙ってるのか!?

「その様子だと、本当になにも知らないみたいだねー。まあ、ダクネスは鈍いし仕方ないかあ。あーあ、つまんないのー」

「わ、悪かったな!というか、つまらないとはどういう意味だ!クリス、やはりお前——」

「ははは、まあまあ、そんなに怒らないでよ。それよりさ、ちょっと提案があるんだけど——聞いてくれる?」

それからクリスが話した提案は簡単。

カズマ達を尾行してみないかというもの。

最初は断った。人の秘密を探るような真似はしない方が良いと。だが、クリスに色恋の拗れからパーティーが解散する事もあると聞かされ——結局は心配で見に行く事にした。良い関係を築いているなら何も言わず、もし悪しき関係であれば正してやろうと思ったのだ。

ほんの少し、そう言った事に興味があったから、というゲスな理由もないとは言わないが……。

そうして尾行すること数回。

湖の浄化クエスト達成祝いも兼ねた食事会を終えた帰り、ようやくその機会が訪れた。

訪れたのだが——正直、もう帰りたくて仕方なかった。

「ダクネス、ダクネス。見てみてっ！ほら、宿に入っていくよっ！ほらっ！」

クリスは声を抑えながら黄色い声をあげてはしゃぐ。

色恋沙汰になると途端に首を突っ込みたがる所は相変わらずのようだ。前に注意したのに。

「クリス、ここまで確認出来れば良いだろ。様子を見ていれば同意の上での事のようにだし……となれば、こちらから口を出すことはない。二人とも職もあれば酒も飲める歳、成人だ。だから後の事は二人に……」

言い切ろうとする前に、腕を引かれた。

視線を前にやれば目をキラキラさせたクリスがいた。

嫌な予感しかない。

「もうちよつとだけ」

「クリス」

「そ、そんな怖い顔しないでよっ！だって気にならない？二人が何するの？」

気にならないと言えば嘘になる。

だが、駄目だ。

騎士としてどころか、人としても。

だから止めようとした。
したのだ。

けど、その言葉が私を止めた。

「カズマって、スケベでしょ？だからほら、すつごいこと、されてるかも知れないし・・・心配じゃない」

すつごい、こと、だと・・・っ！

「ほら、カナデってダクネスと同じで・・・ちよつとあれだから、それもね」

私と同じであれ・・・っ！

私は幻視した。

怪しい赤の灯火に照らされた小さい部屋を。

転がる玩具達、悠然と佇む三角木馬、壁に掛けられた手錠に鎖、ゆつくりと雫を落とす蝋燭。

床には汗と愛液、それと白濁の液体がぶちまけられ、異様な臭気がそこに立ち込めている。

響くのは艶めかしい嬌声と、男の威圧的な罵倒の言葉。

私は思わず溢れた涎を拭いてクリスに頷いておいた。

「クリス、いこう。あと少しだけ」

「・・・多分だけど、ダクネスが想像してるような事は起きてないと思うよ。だったとしても止めるし」

「止めるな。二人に失礼だ」

「いや、絶対止めるから」

そうして二人の後を追いつれ込み宿へ入り、カズマ達の入った部屋の隣を借りて入室した。女二人で入るということに、何となく奇妙な気持ちを抱く。

それはクリスマスも同じだったらしく苦笑していた。

「さて——しかし、これからどうするんだ？聞く耳を立てようにも、防音加工がされていて聞こえないんだろう？」

家の関係で知っているが、連れ込み宿など風俗目的で使われる建物は国から正式な監査が入る。使われる目的が目的なので防音や防臭などといった、国から提示された幾つかの項目をクリアしなければ営業許可が降りる事はない。

勿論違法に営業されている場合ならその限りではないだろうが、この店は国から認可を受けて経営している。入り口にかけてあつた認可証の写しで確認しているので、それらは然るべき状態の筈だ。

私がそう尋ねると、クリスマスはバッグから妙なカチューシャを取り出した。

猫のような耳がついたカチューシャだ。

「なんだ、それは」

「いやあ、この間遺跡を探索してたら面白い物手に入れちゃってさ。はい、ダクネスの分」

さつと、兎のような耳のついたカチューシャを渡される。

「・・・なんだ、これは」

「取り敢えず付けてみなよ。ほら、ほら」

猫耳をピクピクさせるクリスマスに言われ、仕方なくカチューシャを頭に付けた。すると頭の中で何かが繋がった感覚が走り、次の瞬間たくさんさんの音が頭の中に響いてきた。

「おおおっ!?!なんだ、これは!?!」

「ははは、さつきからそれしか言っていないね。音を聞く魔道具らしくてね、これくらい壁だったら音が拾える優れものなんだよ。まあ、形はちよつと趣味悪いけど」

「成る程。しかし、こつも煩くてはな・・・」

「意識を集中してごらん。聞きたい場所に向けて。そうしたら拾う音をある程度指定出来るから」

アドバイス通り隣の壁に意識を向ける。

すると耳が連動するように動き、音がクリアになっていった。

『あ、んっ、んっ、ん』

艶めかしい女性の声が聞こえてきた。

グチュグチュと粘着性のある水を捏ねるような音も。

よく聞いてれば荒い呼吸音も聞こえる。

私は思わず隣を見た。

クリスも似たような心境なのか、顔を赤らめてこちらを見てきている。

「ど、どうだ？カナデだったか？それに声ではなかったが、女性とは違う呼吸音が……」

「わ、分からないよ。あたしも今聞き始めた所でっ、ていうか、ダクネスが分からないと駄目でしょ！」

そ、そんな事言われてもな。

私もいきなりで——

『っんあ』

——ふあっ!?

甘い声に胸をドキドキさせたしまった私は、取り敢えず落ち着くために深呼吸した。すると隣からも同じ様な音が。

私とクリスは互いに見つめあい、お互いの様子をよく確認すると、どちらとも知らず頷きあった。

そして、二人してそつと耳を隣の部屋に傾ける。

何がともあれ、もうちよつと聞いてみよう。

『らめえええ!!そんなにやにっひやら、いっひやうっ、いっひやうのお

「あーん！やらあ！まらっ、やらあ！かずゆまあ！！」

『わ、悪いっ！もう、限界なんだっよ！出すからなっ、カナデっ！』

『ひゃあっ、おくにしておっ！いひばん、おっくう、いっばいぐりぐりして、いっばいだひて！かずっ、まっ！あっいくっ、いっひやう！ああああ！！』

『ツツツツツ——！！』

一際大きな打ち付けるような音が鳴り、隣の部屋から聞こえる音は荒れた呼吸音が二つだけ。もうベッドの軋む音も、厭らしい水を捏ねる音も聞こえない。

聞き始めてから数時間。

結局私達は、二人の交わりを最後まで聞いてしまった。

『えへへ、さとうかずまあー』

幸せそうなピロートークが始まりそうだったので、私はカチューシャをとった。流石にそこまでは聞いていられない。色んな意味で。

「クリス、帰ろう・・・ん、クリス？」

ふと隣を見ると、クリスが完全に逆上させていた。

顔を真っ赤にし気を失ってる所を見ると、意外と初だったらしい。私も人の事言えないが。

私は鼻から溢れた鼻血を拭き取り、クリスを背負い外へと出た。

取り敢えず何も聞かなかった事にしよう、とそう心に決めて・・・いや、無理だな。どうしよう。どんな顔で明日会おう。誰か教えてくれ。

え、また面倒ごと？相手したくないので無視しておきましよう。あ、無理っぽいですね。

「うわああああん！なんでよおおおおお!!」

サトウカズマに子宮口を一杯グリグリされて、一杯中出しされた翌日の昼。

サトウカズマ達と遅い朝ご飯を食べていると、ドキドキワクワク湖ワニさんと半日一緒耐久チキンレースの報酬を取りに行った水色の嘆きの声が響いてきた。

サトウカズマは眉間をしかめ「また何かしたのか」と溜息混じりに呟く。助けにはいかないようだ。

めぐみんに至ってはいつもの事だからかほぼ無視。平然とした様子でアスパラをリスの如くカリカリ食べている。

俺は何となく原因が分かっていたが、下手に助けて信者認定化が進むと面倒なので、心の中で御愁傷様と憐れむだけに止めておいた。

ダクネスはというと――何故か水色ではなく俺をガン見してきていた。気になって声を掛けようとするにあからさまに目を逸らしてくる。何となしに頬が赤くなってる気もするのだが……何なのか。また変な性癖を目覚めさせた訳ではあるまいな。

「うわあああああん！カナデえええええ！」

暫くすると水色が涙を浮かべて帰って来た。

理由を聞けばやっぱり檻の修理費を報酬から差っ引かれたらしい。きっちり20万エリス減。命を張り、トラウマまで作って頑張った報酬は10万エリスという残酷なものになったようだ。

あまりに不憫に思い唐揚げを恵んでやれば「貴女を筆頭信者にしてあげるわ」とか調子に乗り出した。なので待てを覚えさせる所から始める。

誰が御主人様が覚えて貰おう。

「水色、よし」

「いただきーす」

「ナチュラルな犬扱いつ、くうつ、羨ましいっ！カズマっ！私にもあれをー」

「やらねえよ」

ダクネスよ、だんまり決め込んだなら、最後まで頑張っただんまりしてて。

ある意味いつも通りな雰囲気の中ご飯を食べていると、ギルドの入り口がけたたましい音と共に開かれた。

「サトウカズマはいるか!!」

男の大きな声が響き、次に女の子達と黄色い歓声が聞こえる。何だろうかとよく見れば、必死の形相を浮かべ肩で息をするミツルギがそこにいた。

ミツルギは周囲をキョロキョロした後サトウカズマを見つけ一直線に向かってきた。

「サトウカズマ！君の事はとある盗賊の女の子に聞いたら直ぐに教えてくれたよ。パンツ脱がせ魔だっけね。他にも、女の子を粘液まみれにするのが趣味な男だとか、色んな人の噂になっていたよ。鬼畜のカズマだっけね」

「おい待て、誰がそれ広めてたのか詳しく」

盗賊・・・クリスだろうか。確かに。パンツ脱がされてたな。粘液まみれは、まあ、色んな人に見られてるだろうしなあ。

「後は、そうだな、酒に酔わせた女の子にキスを迫ったり、酔わせた女の子を連れ込み宿に連れてくケダモノのカズマとかも言われているそうじゃないか。僕の仲間にも厭らしい手つきで迫ったそうじゃないか。手込めにするつもりだったのかい？この色情魔めー」

「つぶつ!!?ちよ、待てっ！誰だ、それ広めてんの!!詳しく!!」

あ、誰かに見られてたのか。

水色に餌付けしながら騒ぎを見守っていると、なんかこっちにミツルギが向かってきた。多分水色に用があるのだろう。あれだけ固執してたもんな。

そして、水色もこいつに用がある事だろう。あれだけ愚痴っていけばな。

そう思つて水色から一步離れば、水色が拳を握り締めて立ち上がる。握り締められたそれに、何かが集まっていく。

「アクア様。僕はこの男から魔剣を取り返し、必ず魔王を倒すと誓います。ですから……ですからこの僕と、同じパ——」

「ゴツドレクイエム!!」

「ああっ!?!キョウヤー!」

いきなりぶん殴られたミツルギは水色に胸ぐらを掴まれガクガクと揺らされる。突然の事に目を回すミツルギを恫喝。修理費30万エリスを無事むしりとる。

修理費は20万と聞いていたが……まあ、いいや。

「カナデ、さっきの唐揚げ分は返すわ。さつ、好きな物頼んで頂戴」

「いいよ。というか、食べたばっかだからいらない」

「そう?ならば、今夜のご飯奢るわね。あ、すいませーん! シュワシュワ一つと唐揚げの山盛り一つー!」

水色との話に一段落つくと、サトウカズマとミツルギの話し声が聞こえてきた。途中からしか聞いてないので全部の内容は分からないが、店で一番良い剣を買つてあげるから魔剣返してとの事だった。

ミツルギ自身も言っていたが、随分と虫の良い話だ。一応転生特典である世界に二つとない神器を、買える程度の剣で返して欲しいとは。

サトウカズマも気に入らなかつたのか、ムツとした顔をする。多分俺と似たような事を考えているのだろう。

サトウカズマはどうするのだろうかと眺めていると、後ろから「ちよつとー聞き捨てならない話を聞いたわよ!!どーいうことかしら!?!」と水色が騒ぎ始めた。

面倒なので水色の通り道をあけておく。

俺の空けてあげた道を通り水色はミツルギに詰め寄り、怒鳴り散らし始める。

どうやら景品にされた事を地味に怒っていたらしい。それだけな

らまだしも、先程のミツルギの言い分から自分を店で買える程度の価値だと思われれると思い、それについても怒っていた。後やっぱり、檻を壊された事を怒っていた。

「顔もみたくないのであっちへ行つて。ほら早く、あっちへ行つてー!」
止めのような拒絶の一言を受け、ミツルギの顔が絶望に染まる。流石にちよつと可哀想になった。かなりの勘違いから始まったとはいえ、ミツルギにとって水色は好意をもっていた相手だったろうし。

・・・というか、これ、追い討ちかけて大丈夫なのだろうか。魔剣がなあ・・・うん。

サトウカズマ、売っちゃったしな。
はした金で。

そうこうしてる内に、めぐみんがミツルギの袖を引つ張りだした。ヤル気だ。止めをさす気だ。流石、頭がおかしいともつぱらの噂のめぐみん。敵認定した相手に遠慮も優しさもない。

不思議そうなミツルギにめぐみんはサトウカズマを指差して言った。

「・・・まず、この男が既に魔剣を持っていない件について」

その言葉を切つ掛けに剣の行方をサトウカズマから聞いたミツルギが、ギルドを飛び出していったのは言うまでもない。まだ残ってたから良いな。

めぐみんとダクネスからの水色への評価が、女神になる夢を見た不思議つこちゃんになった頃。

ギルド内に警報が鳴った。

よく鳴るな、と心の中で思っていると『特に冒険者サトウカズマさんとその一行は、大至急でお願いします』と不吉なラブコールを受ける。

嫌な予感を抱えつつ準備を済ませ正門に駆けつけると、いつかの幹部様が大量のモンスターを引き連れてそこにいた。

幹部様はサトウカズマとめぐみんを見つけると、凄いい勢いで首を前に突きだした。

「なぜ城にこないのだ、この人でなしどもがあああああつ!!」

「……おお？」

「サトウカズマ、お呼ばれしてたのか？」

「いや、してないからな。なんだその、約束を守らなかった人を責める感じの目は!？」

「おお、よく俺の気持ち分かったな」

「その人を疑うような目を見れば嫌でも分かるわ。そもそもモンスタ―と友達みたいになってたまるか」

お前え、こんだけ珍妙な連中引き連れてよく言ったな。

ぶつちやけ似たようなもんだろうが……。

ギロツと俺を一瞥したサトウカズマは幹部様に事情を聞き始めた。

爆裂魔法は城に撃つの止めた、いく理由もないのになんでそんなに怒っているのかと。

すると幹部様は肩をワナワナさせながら言ってきた。

「爆裂魔法を撃ち込んでもいない？撃ち込んでもいないだ?!何を抜かすか白々しい!その頭のおかしい紅魔の娘が、あれからも毎日欠かさず通っておるわ!」

「えっ」

Oh……。

焦りの表情を浮かべたサトウカズマは隣で素知らぬ顔をしためぐみんに詰め寄った。結果、犯人である事が確定する。しかもその理由というのが、破壊の魅力に抗えなかったからという『頭のおかしい』という称号を冠するだけの事はある、破壊神もかくもやというとんでも理由だった。

ここで魔王軍幹部に一矢報いたかったとか、人類の為に倒そうとしたとかだったらまだ同情して貰えるというのに……というか、嘘でもそう言いなさい。どうすんの、この空気。

すっかり冷えきった空気の中、サトウカズマが何かに気づいた。そう、めぐみんは爆裂魔法を撃つと倒れてしまう。それは歩く事はおろ

か立つことすら出来ないレベルの消耗。

となれば、運んだ共犯者がいるということ。

探るようなサトウカズマの目が辺りを見渡す。

すると直ぐに水色が碌に音のしない口笛を吹き出した。

態々自白するとは。

当然サトウカズマは水色に制裁を加え謝らせようとしたが、幹部様は納得しなかった。なんでも、もっと許せない事があるらしい。

「この俺が真に頭にきているのは何も爆裂魔法の件だけではない！ 貴様らには仲間を助けようという気は無いのか？ 不当な理由から処刑され、怨念によりモンスターとして人の道を外れたが——これでもかつては真つ当な騎士のつもりだった。その俺から言わせれば、仲間を庇って呪いを受けた、騎士の鑑の様なあのクルセイダーを見捨てるなど……！」

そこまで言われて、前に幹部様が来た時にダクネスが死の宣告とかいう呪いを受けていたのを思い出した。水色が即効で解いてしまっていたから、すっかり忘れていた。サトウカズマも同じらしい。

俺は隣にいたダクネスの背中を叩いた。

「呼んでる」

「!?、この空気の中で行くのか!? カナデ、幾らなんでも、その、私も気恥ずかしいのだが……」

「良いから、はよ。行かないと尻蹴り飛ばすぞ」

「わっ、分かった……! いく、いくから、後で頼むぞ」

……ん?

いや、行ったら蹴らないからな?

なんでご褒美みたいになつてんの?!

蹴らないからな!?

ダクネスから手をあげて軽く挨拶すると、幹部様は暫く固まり……ダクネスの生存を確認すると奇声をあげた。

ううん、まだまだ長引きそう。

取り敢えずやれるだけはやってみましょう。ふあいとーおー。はい？勇者様が？あいつには期待するな。

『ターンアンデット』

「ぎゃあああああああああー!!」

話し合いの結果、水色がまさかの先制攻撃を果たし見事に決裂する。穏便に終わらなくなった。

何とかお帰り願おうとサトウカズマと相談していたのだが、ダクネスの呪いを解いた事で調子こいた水色が幹部様を挑発、挑発に乗った幹部様が軽口を叩くと水色が問答無用と攻撃してしまった。

そんな訳で開戦。

水色、頭はパーだが能力の高さはパーティー随一。

当然その攻撃力の高さも言うまでもなく最強クラスなのだが、水色のアンデット特効技を受けても幹部様は沈まなかった。ダメージはありそうだけど。

どういう事なのかと不思議に思っていると幹部様が態々説明してくれた。魔王様の加護というものが掛かっていて、神聖魔法に対して強い抵抗力を持っているらしい。それでもかなり効いてるみたいだけども。

幹部様はよろめきなから不敵に笑う。

「ク、ククク……。説明は最後まで聞くものだ。この俺はベルディア。魔王軍幹部が一人、デュラハンのベルディアだ！魔王様からの特別な加護を受けた鎧と、そして俺の力により、そこら辺のプリーストのターンアンデットなど全く効かぬわ！……効かぬのだが……。な、なあお前。お前何レベルなのだ？本当に駆け出しか？駆け出しが集まる所なのだろう、この街は？」

前言撤回、絶対効いてるな。

ちらっとサトウカズマを見れば俺の考えに察しがついたのか頷いてくる。

なので我が家の狂犬の尻を叩いておく。やっちゃいなよー。

「・・・まあいい。本来は、この街周辺に強い光が落ちて来たのだと、うちの占い師が騒ぐから調査にきたのだが・・・面倒だ、いつそ街ごと――」

『セイクリッド・ターンアンデット』っ！』

「――ぎやああああああああ!!」

二度目の水色の攻撃に幹部様に乗っていた馬が完全消失。幹部様自身も苦しみがきのたうち回る。

しかし耐性が高いのかまだ成仏しない。

その様子に心配になったのか水色がこつちを不安そうに見てきた。

「変よ！カズマ、カナデ！私の攻撃が効いてないわ！」

「大丈夫、効いてる効いてる。もつとやってみ」

「本当？分かったわ、やってみるわね」

俺の根拠もない言葉を簡単に信じた水色は幹部様に向き直り杖を構えた。

『ターンアンデット』『ターンアンデット』『ターンアンデット』『ターンアンデット』『セイクリッド・ターンアンデット』っ!!』

「ぎやあああああああああああつ!!ひあああああああ!!うぼおあああああ!!んんんんんんん!!ぬうふおおおおお!!」

成仏こそしないけど、やはりダメージはあるらしく、幹部様は悲鳴をあげながら地面を転げ回る。

しかし決め手には欠けてるみたい。

「水色、ちよつと効きづらいみたいだけど、めっちゃ効果あるから続けておいて」

「そ、そうなの? 『ターンアンデット』全然消えないんですけど? 全然大丈夫そうなんですけど? 『ターンアンデット』。ねえねえカナデ、私反撃されたりしないわよね 『ターンアンデット』」

「大丈夫。水色の攻撃が効かない訳ないじゃない。うちのエースの攻撃が、さ」

「エース!!・・・そうね! そうよ! カナデの言うとおりに、私はエースなのよ! 仕方ないわね、エースの私に任せて頂戴!! ナメクジの親戚な汚ならしいアンデットは私が葬りさるわ! 『ターンアンデット』!!」

はい、水色が時間を稼いでる間に、どうするか本格的に考えようか。取り敢えず近くにいたサトウカズマとうちのパーティー、それと比較的優秀そうな冒険者を集めて作戦会議しようと思う。号令をかければ殆ど常連さんなので凄く協力的に集まってくれた。

さてどうしようか。

幹部様の耐久力を目にした冒険者達の顔は険しい。魔王軍幹部という肩書きがなかったとしてもデュラハンというモンスター自体かなり強いやつらしく、それだけでも高レベルの冒険者がいないと討伐は難しいとの事だった。しかも今回は普通のデュラハンではなく、頭一つ抜けた魔王軍の幹部デュラハン。その耐久力を見た一番経験の長い冒険者の見解では、現在ここに居る冒険者を全投入しても討伐は難しいのでないかとの事だった。

尤もその戦力の中に、キチガイ染みた魔力を持つうちのアホ女神と、頭のおかしい破壊神が勘定されていないみたいなので、まだ可能性はありそうだ。

サトウカズマも気づいたのか頷いてくれる。

二人の力についてサトウカズマが軽く説明すれば、めぐみんの爆裂魔法で雑魚アンデット諸とも幹部様を一掃する作戦が決まった。しかしこれは言うは易し行うは難しといった作戦で、どちらもめぐみんの攻撃範囲に誘導しなくてはならない。事実、今幹部様と手下の間にはそれなりの距離が開いていて一撃の爆裂魔法では消し去れない状態なのだ。

これについて古参の冒険者達が厄介な幹部様を引き付けてくれる役を買って出てくれた。

今の所、雑魚アンデット達に動きはないので良いのだが、最悪こちらが動いてしまった場合は、俺達のパーティーを中心に他パーティーと協力し誘導する事に決まった。

上手くいけば一撃で殲滅。

そうならずとも爆裂魔法を受けて生き残れるのは幹部様だけだろうし、一人にさえしてしまえばタコ殴りに出来る。そうなれば水色のターンアンデットも効くようになるだろう。

え、まだ秘密戦力がある？

ミツルギ？ん？え？

・・・そいつは死んだ、期待するな。

「よし、それじゃ、早速作戦開始！」

手を打ち鳴らしてそう言えば全員が立ち上がった。

「カナデちゃんに勝利を!!」

やる気に満ちた声と共に奴等は走り出した。

その身に闘志を宿らせて。

「・・・妙に新参の話を聞いてくれる良い人達だなあと思ったら、カナデの手下か。今の」

「手下とかじゃないから。ただの常連さんだつてば」

「・・・ふーん」

なんだ、その疑うような目は。こちら。

私に変な事してるとか、思っていないよな？

失礼な。たまに時間がある時にお酌ぐらいはしてやるけど、それだけだからな。

まったく。

「まあ、いいか。その辺は後で聞かせて貰う。アクアーもう良いぞ。戻ってこーい。作戦変更だ」

サトウカズマがそう叫ぶと水色が戻ってきた。

「なになに、カズマなんの用よ？まだ倒しきって無いんですけど？」

「言つたる。作戦変更だ。このまま何度ターンアンドェットしてもあいつは消えない」

「えっ!? 本当なのカズマさん!? カナデ、倒せるって言ったじゃないの! 私頑張ったの!! 私いっばい頑張ったの!!」

文句を言ってくる水色の頭をよしよししていれば、幹部様の苦痛に満ちた声が聞こえてきた。

視線を向ければ右手をあげた幹部様が。

「このっ、この大馬鹿共!! セリフはちゃんと知らせるものだ!! 調子に乗るな!! もう怒ったぞ!! お前ら————街の連中を皆殺しにせ

よ！」

その言葉と同時に幹部様の手下が動き始めた。

背後から冒険者達の阿鼻叫喚の声が聞こえてくる。

何も準備してなかったらしい。

まったく心の準備くらしとけよな。

うちのアホが頑張ってるんだから。

「——まあいいか。めぐみん、爆裂魔法いつでも撃てるようにしとけ」
「分かりました！カズマとの特訓にて身に付けた究極を越える超究極、過去最強の超絶爆裂魔法をお見せしましょう！」

ダクネスに叱咤はいらない。

尻を蹴りあげてやる。

「ダクネス、作戦聞いてたな！よし、囹になってこいっ!!」

「ああん!!な、仲間を躊躇もなく足蹴するとはっ、はあ、はあっ、カナデは、本当に、そこら辺を分かっているな——ああ、喜んでっ!!」
「ご主人様!!」

「お前のご主人様はサトウカズマだ、よく覚えておけ。よしいけ」
デコイを発動しダクネスが駆けていく。

後ろ姿を見守っているとサトウカズマのジト目と目が合った。

「勝手にご主人様にするな。というか、割りと楽しんでるだろ」

「馬鹿言うな。俺は人の嫌がる事は極力しない主義だ。悲しんでるぞ」

「……本当かあ？」

「お前……あとでヒイヒイ言わせてやるから覚悟しとけよ」

あれがダクネスにとって一番気合が入るのだから仕方ない。命の掛かった場面。全力で向かって貰わなければならぬ。出来ることなら全部やる。

予定通りならダクネスは敵を引き付け、幹部様に弾丸特攻をかける手筈だ。それは言わずとも危険な行為。下手をうてば簡単に死んでしまう。

けれどやらねばやられる状況。ダクネスには堪えて貰わなければならない。幹部様の攻撃力がどれほどか分からないけど、ダクネスの

防御力が上である事を今は信じるしかないのだ。どのみち、出来ぬ無理と何もしないでいたら、やられるだけなのだから。

多少の無茶は気合いと根性で乗り越えなければ。

「サトウカズマっ、ダクネスが引き付け洩らした奴は、全部ここで仕留めるからなっ」

「分かってる！あんまり前に出過ぎるなよ、バーサーカー!!」

「誰がバーサーカーだ!!」

モーニングスターを構え、ダクネスが敵と接触する瞬間待つ。接触するまで、後5秒。

4 ————— 3 ————— 2 ————— 1つ。

「サトウカズマっ！集中！」

ダクネスが敵の中央を突破する。

防御力と筋肉だけが取り柄のダクネスは鬪牛の如く走り、目の前にあった敵の波を掻き分けて進む。これでデコイの効果があればダクネスに引き付けられて駆け出すのだが———結果はただの一人もダクネスに向かないという予想外の事態になった。

面白いくらいにダクネスはスルーされた。

デコイすら出来ないとは。

あいつ、いよいよなんの役に立つんだ。

「カナデ、あの数は流石に無理だ！下がれっ！」

「下がってどうなるもんでなし。殴り殺す」

「そういう所がバーサーカーなんだろうが！俺に考えがある、下がれ！」

言われた通りに下がるとサトウカズマがクリエイトウォーターを足元に撒き散らした。何をするのかと思っただけで見れば、手下達がその水に足を踏み入れた瞬間を見計らいフリーズの魔法を放つ。

足を凍らせた者、氷に足を滑らせる者、手下によって受けたダメージの違いはあるものの足止めとしては完璧だった。

「よしっ、遠距離攻撃出来る皆さーん!!お願いしまーす!!」

サトウカズマの声に、後ろに控えていた冒険者達が攻撃を始めた。礫の雨が身動きの取れなくなった手下達に降り注ぐ。かなりの数が

倒れたが、遠回りし氷を避け手下達がまだかなりの数残っていた。

「サトウカズマ、俺が殴り飛ばしてくるか？」

「戦いが始まるとお前は本当にバーサーカーだな！落ち着け、あの数は無理だろ！というか、あいつら何に向かって……ん？」

よく見れば遠回りして走っていた手下アンデット達は街ではなく別の方向を目指しているように見えた。それは冒険者達でもなく、それより前。

「え、え？ちよつと、え？なんか私に向かってるようには見えませんか？！ちよ、えつ!?なんでよおおおおお!!」

逃げる水色に釣られて手下アンデット達は列を為して走っていた。

「……なんだあれ」

「そーいや前のクエストの時も、やたらとアンデットに絡まれたな、あいつ」

「そういう事は早くいえよ」

「その後、色々あつて忘れてたんだよ。大体お前のせいだぞ」

「……?」

「あ、いや忘れてくれ」

そうこうしてる内にダクネスが水色の様子に気づき悔しそうな声をあげた。

「ああっ!?ずるい！なんでアクアばかり！」

「だったら代わってよおおお！なんで私ばかり狙われるの!?ダクネスが囷なのに！私女神なのに！」

あまりに酷い光景に送り出した幹部様から焦った声が響いてくる。冒険者達の相手をしているせいで、上手く新しい指示が出せないように見える。いや、仮に出せたとして、果たして言うことを聞くのかどうか。

しかし……言うこと聞かない部下。振り回されるリーダー。あいつサトウカズマと仲良くなれるのではないだろうか。

水色の逃走劇を眺めているとUターンしてこっちに向かってきた。なんか言ってる。名前呼んでる。

「かつ、カズマ、カズマさーん!!お願い助けてええええ!!」

「げえっ!?こつちくんなん!!そのままベルディアんとこいけよ!」

「いやよ!あんな危なそうな所一人でなんていやああああ!!カズマが
いってよお!!」

「お前が追われてんだよ!!」

水色に幹部様の方へと向かう気は見られない。

真っ直ぐこちらを巻き込む為に走ってくる。

こうなつては仕方なし。

「サトウカズマ、水色フオローしてやれ」

「はあああ!?!お前、マジか!?!死んでこいつてか!?!」

「馬鹿言うな。ちゃんと生きて帰ってこい。そしたら、後ですんごい
事してやるから」

「すんごい事・・・!?!つて、おい、カナデ何処いくんだ!?!」

「時間稼ぎ」

迫る手下アンデットに狙いを定め、モーニングスターを構えダツ
シュする。

「水色っ!死にたくなかったら、頭下げろっ!!」

「カナデさん!?!私味方なんですけど——ひい!?!」

渾身の一振り。

水色の髪を掠めていった俺のお星様は、先頭にいた手下アンデット
を始め、その背後にいた五体の手下アンデットも巻き込み吹き飛ば
す。

クリーンヒットしたのか頭が二つ空に飛んでいった。

けれどやつぱり、手下アンデット達は俺に目もくれない。態々避け
て水色の方へと駆けていく。

後続の何体かおまけにぶちのめした後、サトウカズマの無事を願っ
てめぐみんの元に向かう。

サトウカズマはやれば出来る子。

必ずやってくれる。

「めぐみんっ、いけるか!」

「カナデ!良いところに来ました!カズマが上手く誘導してくれまし

た!!ぶちかましますよ!!」

めぐみんはいつもより詠唱を簡略化し、いつでも撃てる状態にシタ
イミングを見計らう。

サトウカズマ達が幹部様の接近するのを見計らい冒険者達が下が
り、幹部様も何かを察したのか静かに身構えた。

「やれっ、めぐみん!!」

サトウカズマの声が響く。

それと同時にサトウカズマ達が幹部様の側を通り抜けた。ガード
するように剣を構えた幹部様はただ横を通り過ぎていったサトウカ
ズマ達に呆然とする。

そしてその直後、幹部様は迫る手下アンデット達を確認し、弾ける
ように顔をあげ空を眺めた。

空にあるのは禍々しい赤い光を放つ魔法陣。

『『『エクスプロージョン』』ツツツ!!』

めぐみんの怒号と共に光が落ちた。

人類が扱える最強魔法。

無慈悲なまでの破壊力をもつ、全てを砕くその一撃が。

やれば出来る子、やれば出来る子、YDK。はい、それが彼ですよ？

爆炎が幹部様達に落ちるのをみて、冒険者達から大きな歓声があった。普段迷惑でしかない騒音の原因も、今日ばかりは手放しで喜ばれているようだ。

感謝の滲む頭のおかしい子コールが降り注ぐ中、俺に背負われためぐみんが忌々しそうな視線を辺りに向け「後で殴ります」などと悪態をつくが、その顔には言葉とは裏腹な表情を浮かべていた。

口元がニヨニヨしてる。照れているのか頬は赤く染まっていて、それに何処か誇らしげでもある。

普段爆裂魔法の事はサトウカズマくらいしか褒めてくれないから、皆に褒められて普通に嬉しいのだろう。

正直言えば、結果がはつきりするまで気を引き締めてて欲しいのだが・・・まあ、今は許してやろう。

現実を突きつけるには、あまりに忍びない顔だからな。そんなに嬉しかったのか、めぐみん。

ふと顔をあげるとサトウカズマが手を振ってこちらに向かってるのが見えた。なので同じように振り返そうとしたのだが、サトウカズマが浮かべていた焦るようなそれに嫌な予感を覚える。

「カナデ、めぐみん！走れ！」

「——爆裂魔法とは驚いた。こんな所に、これ程の魔法を操る者がいようとは思わなんだ。まさか部下を全滅させられるとはな」
いまだ煙立ち込めるその場所から、聞き覚えのある低い声が響いてきた。

警戒し身構えると突風が吹き荒れた。

視界を塞いでいた煙が散らされ、いまだ火が燻る巨大なクレーターが目の前に現れる。

そしてその中心には、大剣を握りしめた漆黒の鎧を纏う幹部様の姿があった。

「駆け出し程度に本気を出すのも馬鹿らしいと思っていたが……興に乗ったわ。魔王軍幹部であるこのベルディア、直々に貴様らの相手をしてやろう。無論、本気でいくぞ」

やる気満々と言った様子で歩き出した幹部様は、先程までとは違う危険な雰囲気纏っていた。見ているだけで背筋がゾクゾクしてくるような威圧的な雰囲気だ。

口にした言葉は冗談ではなさそう。

「あの魔法受けて無傷な訳がねえ！てめえら行くぞ！あと一押しだ！！」

囷を買ってくれた冒険者が中心になり、幹部様へ駆け出していく。一見するとバラバラな動きだが、それぞれが自分の役割を踏まえた、ある意味で統率のとれたプロの動きだ。

一瞬にして囷まれた幹部様だが、その余裕は崩れない。寧ろ楽しみに辺りを見渡している。

「ふんっ、くだらん」

吐き捨てるようにそう言った幹部様は自分の頭を空へと放る。両手が自由になった幹部様は片手で振り回していた剣を両手で握り――一瞬で囷んでいた冒険者を斬り伏せた。それも囷まれていたにも関わらず、まったくの無傷のまま。

あまりの早さに目が追い付かない。剣をふったという事を辛うじて認識出来る程度だった。

ただ、地面にジワジワと広がる赤い水溜まりや倒れてからピクリとも動かない冒険者の様子をみれば、それが一撃必殺の剣であったのは嫌でも分かった。

幹部様は落ちてきた自分の頭を自らの手に納めると、再び歩み始めた。一歩一歩と。

その歩みを邪魔をする者はもういない。

その強さを目の当たりにして誰も彼もが動けなくなっていたのだ。だがそれを責めようとは思わない。かくいう俺もちよつとチビって

しまったくらいだから。じゅんじゅわああって感じだ。まあ、逃げ足は止めないけども——ん？

「——ん？貴様」

俺と同じような反応をした幹部様が足を止めた。

理由は幹部様の道を遮るようにうちのドM騎士ダクネスが立ちただかっけていたからだ。

ダクネスは腰の大剣を引き抜き構える。

「おいっ！ダクネス！自棄になるな！！足遅いのは分かるけどなっ、頑張っけて逃げる！！」

そんなダクネスの姿にサトウカズマが逃げるように指示を出した。優しさから出た言葉なのだろうが、ダクネスが顔を赤らめながら「逃げられなくて自棄になった訳ではない！」と憤慨する所を見ると上手く受け取って貰えなかったようだ。

「……ふん、まったく。安心しろカズマ。私は頑丈さでは誰にも負けない。ベルディアの剣は確かに恐ろしく鋭い。攻撃スキルも乗った一撃必殺の剣だ。生半可な防具では受け止め切れぬだろう。——だが、私の防御スキルの乗った防具ならばそれも可能だ」

ガンっ、と自らの鎧を叩き、ダクネスはサトウカズマに笑顔を見せた。けれどサトウカズマの不安そうな顔色をみて、その表情を苦笑に変えた。

「言いたい事は分かる。それは、私自身分かっている事だ。だがな、聖騎士として……守る事を生業とする者として。一人の冒険者として。お前達の仲間として。どうしても譲れない物があるんだ。任せとくれ」

さっきまでポンコツ・オブ・ポンコツだと思っていたダクネスが、少しでもだけ輝いて見えた。

まるで一端の騎士みたい。

対する幹部様は騎士が相手という事で、ただでさえやる気だったが更にやる気に。凄く燃え上がってる。楽しみにダクネスを挑発もしてきた。「是非もなし！」とか格好つけてる始末。

「いくぞっ、ベルディア！！」

怒号と共にダクネスが武器を構え駆ける。

「こいつ、聖騎士!!お前の輝きを見せてみる!!」

それにこれ以上なく応える幹部様。

まるで物語に出てくるような伝説の戦いが始まりそうな雰囲気である。

俺はその先を見ていられなくて目を瞑った。

恐ろしくて見ていられなかったのだ。

ここまで気分高めておいて、恐らくスカルであろうダクネスの剣の行方が。

それから間もなく、幹部様の気の抜けた声が聞こえたのは言うまでもない。

ごめんな、幹部様。

うちのノーコン騎士が迷惑かけて。

盛大な肩透かしを食らいぶちギレた幹部様。

当然の怒りと共にぶった切られたダクネスだったが——やはりというか、何というか。ダクネスは頑丈だった。

「本当、なんなんだお前は!!先程のアークプリーストと違って、アークウィザードいい!!ふぎけるなっ!!駆け出しが集まる所ではなかったのか!?!ここは!!なんだこの硬さは!?!馬鹿か!」

「くっ、やるな!ベルディア!!」

「よく言ったな!ノーコン騎士が!!やるなも糞も、お前の攻撃は一度も当たってないどころか、掠りすらしておらんわ!!」

幹部様の言うとおり、如何にも死力を尽くして戦ってる風なダクネスの攻撃は空を切り続けている。初対面の頃、不器用で攻撃が当たらないとか言っていたが、最早そんなレベルではない気がするの俺だけなのだろうか。もうそれ、呪いレベルだろう。なにこれ。

「——それと、さっきから騎士もどきの後ろからチクチク攻撃してくる小娘え!!お前だお前——後ろを振り向くな!鬱陶しいわ!!止めろっ!そんなに効かぬが、妙に嫌らしい所ばかり狙いおって!!性

格の悪さが滲み出ておるわ！」

「多額の借金を残して夜逃げした父親から『人の嫌がる事は積極的にしていけ。でもお父さんにはするな。お父さん以外だぞ？ね、お父さんと約束だぞ』と、そう教わりましたので」

「碌でもない父親の言葉など無視しておけえ！真つ直ぐ育て!!馬鹿者が!!」

ダクネスを盾にして盾チクしてたらめちや怒られた。

こんなチャンスあるまいと思いい、めぐみんを冒険者達に預けて飛んで来たんだが、どうも駄目らしい。

まあ、他に攻略法考えつかないから、言われて止めるつもりもないが。

しかし、幹部様の言うとおり俺の攻撃があまりにシヨボい。これで痛み分け程度にダメージを与えられれば一番良いのだろうが、悲しいかなダクネスに溜まるダメージの方が遥かに高い。じり貧とは正にこの事だろう。

サトウカズマが何か考えているようなので、それに期待したい所だが・・・あとどれくらい持つか。

なのでダメージを確認しようとする盾役のダクネス軽く声をかけたのだが、返ってきたのは悲壮とかけ離れた興奮したような声だった。

「ああっ！カナデー！このデユラハンやはりやり手だぞ！さつきから鎧を少しずつ削りとってくるのだ!!全裸に剥くのではなくっ、中途半端に一部だけ鎧を残し、私を公衆の面前で、裸より扇情的な姿にして辱しめようとしてくる!!・・・くうっ、はあ！たまらん!!」

おう、心配して損した。

後一時間はいけるな、お前。

幹部様もそのDMぶりにびっくりしたのか、手を止めて体をのけ反った。すかさず玉金目掛けてモーニングスターを突きつけたが回避される。くそう。

「時と場合ぐらい考えろ、この筋金入りのド変態が!!」

不意にサトウカズマの罵倒が聞こえた。

振り向けば掌を突きだしたサトウカズマの姿がある。

「カナデ退けっ!!」

声に従いダクネスの襟首を掴み、サトウカズマの攻撃射線外へ自分の体ごと引き摺り出す。

その後、サトウカズマの掌から水流が噴き出した。

放たれた水流は真っ直ぐ幹部様に向かって飛ぶが、あまり速いと言えない水流は容易く避けられた。

辺り一面を濡れた様子を見て、サトウカズマが何をしようとしているのか分かった——が、同時に理解出来なかった。一度見せた物が魔王軍幹部などと大層な肩書きを持つてる奴に通用するのか?という事が。

サトウカズマは悪知恵だけは働く。

だから周囲をよく見て——漸く理解した。

こちらにも準備する為に、未だに地べたに這いずる盾の尻を蹴りあげる。

「ダクネスっ、走るぞ」

「ひゃうん!なんて遠慮のないキツク!」

◇◇◇

『『フリーズ』っ!』

俺の声が響くと同時に、再び地面が凍りつく。ベルディアの元は氷の床へと変わった。

それはベルディアにとって不利な状況——にも関わらずベルディアは逆にその光景を鼻で笑った。

「はっ!先程見たわ!二度同じ手を通じると思うな小僧!!それ以前に

——!!」

ベルディアが踏み出す。

碎けるようなバキィっという音が鳴る。

その一歩は氷を容易く割り、地面を踏みしめた。

「——俺に、このような小細工は効かぬ!!」
わかっていた。

何となく。

これで足止め出来るなら、こんなに簡単な事はない。

仮にも人類最大の敵組織の幹部が、初心者に毛が生えた程度の冒険者に止められる訳がない。

けど、諦める訳にはいかない。

「畜生！かっこよく終わらせろよな！・・・でもな、だろうとは思ってたよ!!完全には封じれなくてもっ、動きは鈍ってるだろ!!回避が鈍ればそれで十分なんだよ、武器取らせて貰うぞ——『ステイール』!!」
窃盗スキルが発動し手が光った——が、光が消えた時その手には何も掴まれていなかった。

指先は虚しく空振りするだけ。

その様子を見たベルディアが「悪くない手」だと言いながらも落胆の色を見せる。

「見たところお前はあの妙な連中の仲間だろう?故に少しは期待したのだがな——ふう、世界はいつも残酷だ。俺にもお前にも等しく、な。レベル差というヤツだ。小僧」

この世界のルール、レベルという特別な概念。

未だにそれが何なのか分からないし理解出来ないが、その数値の高さで生物の強さが決まるのは痛いほど理解している。何度も信じられない物を見てきた。

この世界はまったくもって理不尽で、どうしようなくメチャクチャだ。

けれど、それがこの世界なのだ。

「知ってるよ」

だから俺は勝てない。

「世の中上手くいかない事も、俺が何処までも凡人な事も」

だから俺は燻っていた。

「お前に言われなくても分かってる」

でも、だからと言って何もかも簡単に諦められる程、大人でもない。

「誰よりもなっ——アクア!!」

その叫びと同時に光が空に走った。

光の発生源には霧の様な物が漂う中、爆裂魔法発射前のような雰囲気放つアクアの姿。

「なんのつもりだ、小僧!!」

「こういうつもりだよ、やれえ!!」

その声を聞いたアクアは光を増した。

髪が眩しいほど青く輝き、霧のようだった水の粒達は肉眼ではつきり分かるほど大きな水玉となって髪と同じように輝いた。

「この世に在る眷族よ……水の女神、アクアが命ず……」

レベルが、スキルが、ステータスが全てだというのなら。うちにはとびきりの奴がいる。掛け値なしで本物の神様が。

何かを察知したのか、ベルディアが弾かれるように逃げ出す。だが、氷に足を取られ歩みは鈍い。加えてその先にはカナデとダクネスが道を遮るように立ちはだかつていた。

「機動騎士ドMン、ごー」

「魔王軍幹部の辱しめという物を、私に見せてみるベルディアああ!!」
「こつちにくるな馬鹿共!!くっ!!」

ベルディアの足が止まる。

『セイクリッド・クリエイトウォーター』

ターンアンドデットはあくまでも癒しの聖魔法。アンドデットに対して特効能力を持っているが厳密には攻撃魔法ではない。だからこそ、対策しているベルディアにその一撃は致命傷足り得ない。

ならば、他の魔法なら？アクアの馬鹿魔力を攻撃力に換算出来る、単純にして明快なそんな魔法であれば？加えて聖魔法同様の効果すら備えた女神の攻撃であれば？

答えはきつと、この先にある。

「うおおおおおおお!?馬鹿か貴様らああああああ!!」

ベルディアの絶叫が響いたそこへ濁流が押し寄せた。

予想よりずっと強力だった一撃は、周囲の人間も土地も巻き込み大蛇の如く荒れ狂う。

ベルディアの近くにいたカナデ達の心配が頭を過ったが、水が落ちる寸前ダクネスが見せたガッツポーズを信じ、俺は俺のやるべき事を――。

「――つて、アクア!!もう良い!門まで届いてつ、うおおおおおおお!馬鹿ああああ!!」

調整ミスなのか、やる気にさせ過ぎたのか、それとも俺の「なんちやつて女神」と呼んだ事への報復なのか。

うちの馬鹿女神はその洪水クラスの濁流を更に暴れさせ、正門を巻き込むほど攻撃範囲を広げ何もかも一切合切水に流した。当然俺も。

「――んあつ、は?」

少しの意識の混濁の後、意識を取り戻した俺は水に濡れて重くなった体を持ち上げた。周囲を確認すればぐったりとした冒険者達の姿が見える。

そして、片膝をつくベルディアの姿も。

相当効いたらしくフラフラしているように見える。

立ち上がって虫の息のベルディアの元にいくと、アンデット特有の生気のない瞳と目があった。

「お前つ、仲間ごと、普通やるか・・・?」

「普通にやったら、勝てないだろ。だから賭けたんだよ。俺の運と、あいつらの優秀さを。お前の言うとおり、俺は凡人も凡人でつまらない奴だからな」

ふとベルディアの後ろの方を眺めると、ダクネスとその背中に背負われたカナデの姿が見えた。

カナデは俺の視線に気づくと、いつものように柔らかい笑みを返してくれる。

「ふざけたやつだ。メチャクチャだったのだな、お前も。——だが、悪くはない。人間達への怨嗟にまみれ異形の物になり果てた俺の最後が、貴様のような人を信じ絆を重んじる人間で終わるのなら。元騎士として、この上ない最後だ。……冒険者、冥土の土産に貴様の名前を聞かせろ。俺を打ち倒した、貴様の名を」

ベルディアは酷く落ち着いた声で聞いてきた。

「……ああ、俺はサトウ——」

『『セイクリッド・ターンアンデット』ツ!!』

「ぎゃああああああああ!!」

聖なる魔方陣の光に包まれたベルディアは、悲鳴をあげながら消失していった。

憎しみの視線をこちらに向けながら光になり空に消えていったベルディアを送った後、後ろで「どうよ！これが女神の力よ！」と自身満々に言うアクアへと視線を向けた。

「なにになに？カズマさん、私の顔を見て。ああ、私の力をみて、これまでの無礼な所業を詫びたいというのね？しょーがないわね、さあ好きに懺悔なさい！女神である私が直々に貴方の罪を聞いてきあげるわ！——ただし、簡単には許してあげないわよ。散々無礼な事言ってきたんだもの。何を言われたのかあんまり思い出せないけど……兎に角よ！今晚のご飯はカズマさんのおごりよ！シユワシユワの飲み放題を所望するわ！」

「いや、格好つけさせろよおおおおお!!」

俺の慟哭が空に響いた。

お出かけですか？連れ込み宿なら大歓迎ですが……え、違うの？ちよつと考えさせて。

魔王軍幹部討伐という偉業を達成して早一週間。

仕事を休ませて貰った俺は、ちよつとだけお洒落をして街の中央広場でサトウカズマと待ち合わせしていた。

「なんか、違和感が凄いなあ」

周りの視線やらスースーする感じが気になって視線を落とせば、違和感の正体が風に揺れていた。

そうスカートである。

別に今日初めて穿いた訳ではない。ウェイターの時は常にスカートだから穿き慣れてはいる。穿き慣れてはいるのだが……それはあくまで仕事の時だけという話。普段着は普通にズボン派なので、外でスカートを穿いたのは何気に初めてだったりするのだ。え？連れ込み宿で、コスプレ御奉仕したじゃないかって？あれは室内だったのでセーフ。

何がともあれ違和感が凄い。

改めて自分の姿を見下ろして思う。

うーむ、なんだこれ。

「自分の格好見て、何顔しかめてんだ？」

聞き慣れた声に顔をあげるとサトウカズマがいた。

俺と違っていつもの冒険者の格好だ。

なんだ、なんか悔しい。

「お前も着替えろ……こう、パリツとしたスーツとか着ろ。七三で」

「何でだよ。着ねえし、七三にもしねえよ」

「なんか、俺一人で馬鹿みたいだろうが。おのぼりさんみたいだろうが。お前も馬鹿になれよお」

恨めしげに伝えると溜息を吐かれた。

「だったらそんな格好して来なきや良かったろ」

「好きでこうなったんじゃないわ。同僚に着させられたんだよ。お前

と出掛けるって言ったたら。意味わからん」

「——ぐふっ!?!」

サトウカズマは急に咳き込んだ。
なんか死にそうな勢いで。

ちっさい声で「あの人は……」とかもぼやいてる。

「……大丈夫か?」

「だ、大丈夫だっ! それより行くぞ! アクアとめぐみんは簡単に撒けたんだけど、なんかダクネスか妙にしつこくてな」

「ダクネスが? そう言えば昨日も飯食ってる時、やけに見てきたな……まったく何なんだか」

サトウカズマの歩みについて俺も足を踏み出す。

行き先が決まってるのか、迷いのない歩みだ。

ふむ。

「なあ、何処行くんだ?」

「まあ、少しな……」

「ふうん?」

内緒とは生意気な。

まあ、楽しみにしておくでしょう。

それにしても——。

「今日、本当に良かったのか? せっかく色々用意してたのに……別に買い物くらい普通に付き合うぞ? 態々ご褒美の代わりに頼まなくてもさ」

「い、良いんだよ。——と言うか、それもうお前のご褒美になってるだろ」

「うーん? あはは」

「笑って誤魔化すな」

まあ、何がともあれ今日は付き合ってやろう。

これがサトウカズマへのご褒美なのだから。

「……あーカナデ。いや、その、割りと良いと思うぞ。そういう格好も」

「おう? そうか? 俺的にはスカートの違和感が凄いんだが……ま、

ありがとな」

感謝を伝えるとサトウカズマが首を傾げた。

「でもお前、スカートなら仕事の時も冒険者の時もしてるだろ。何が気に入らないんだよ」

「仕事は割り切ってるからな。で、冒険者の時のあれはスカートって言ってもキュロットだから、そこまでなんだよ」

「……うん？　そうか、成る程なあ」

「……分らないなら分らないって、言っただけいいんだぞ？」

約束通り凄惨な事をしようといそいそ準備していたそんな時、サトウカズマからある提案が来た。それが「ご褒美として1日買物に付き合ってくれ」という物だった。

あまりに真剣な顔でお願いしてくるので、思わず頷いてしまつて――
――まあ、今に至る訳だ。

本音を言えばご褒美にかこつけて色々オプションつけて、死ぬほどエッチするつもりだったのだが……まあ、それは胸の内に留めておこうと思う。俺の企みはバレてるみたいだし、そういう雰囲気ではないしね。

それにあの時は特に何も考えず勢いに負けてOKしたけど、今となつては良かったような気がしてるのだ。

「……ん、なんだカナデ？」

「んーん、別にいい」

サトウカズマが嬉しそうなら、ご褒美としてそれが一番だからな。

サトウカズマについて行くと、レポート屋と書いてある旗を背負うお兄さんの元に着いた。レポートとは移動魔法の事だ。噂通りならお金を払えば術者が行き先を登録してる場所に連れていって貰

える。

サトウカズマは慣れた感じでやり取りを済ませお金を払った。安くない額だ。

だから自分の分は出そうとしたのだが、それは断られてしまった。自分が無理に連れ回す訳だから、これくらいは自分が持つ——という事らしい。

”例の件”もあって心配したのだが、サトウカズマに無理してる所がなかったので遠慮なく甘えさせて貰う事にする。折角だからね。

そうしてサトウカズマに続いて初テレポート。
気がつくと賑やかな街に着いていた。

街の中央付近になんかでっかい城まで見える。

「何処(どこ)？」

「王都……えっと、ベルゼルグ王国の首都だな」

「へえ……また随分遠くに来たねえ」

アクセルの街からかなり離れた場所にある土地の筈だ。実際訪れたのは今日が初めてなので、どれぐらい遠くなのかは分からないけど。しかも魔法で来ちゃったから、まじでさっぱりだ。

「それでお買い物の方はなんで御座いますか、サトウカズマさん？」

「妙な敬語使うな。なんかゾクツとする」

「プフフ、悪い悪い。でもほら、なんか、今日の俺の立ち位置って付き人みたいな感じだろ？」

「……」

軽い冗談のつもりだったのだが、サトウカズマが眉間にしわを寄せたままジト目で見られてしまった。

「ん？どした」

「なんでもない——行くぞ」

「あいよー」

街の風景を眺めながら少し、サトウカズマが屋台の前で足を止めた。目的地かと思ったが、屋台は普通の食べ物屋。態々テレポート屋を使ってくるような店には見えない。疑問に思っていると、サトウカズマがこちらに振り返ってきた。

「カナデ、昼まだだろ。少し買い食いしていこうぜ？好きな選べよ」「いいよ、別に。朝御飯遅かったから、そこまでお腹減ってないし：：てか、余裕そんなないだろお前。買う物もあるんだから、それまでお財布はチャックしとけ」

「大丈夫だっつの。あのな、アクアじゃないんだから、後先はちゃんと考えてある。それにこれは、先行投資みたいなもんだよ」

「先行投資？」

サトウカズマから改めて今日のお買い物目的を聞くと、どうやら金策を求めて王都にきたらしい。

全ては抱えた借金を返す為に。

魔王軍幹部の討伐という偉業を成し遂げたサトウカズマパーティーには当然多額の報酬金が出た。その額なんと三億エリス。降って湧いた幸運にサトウカズマ達は多いに喜んだ——喜んだのだが、続いて告げられた言葉に絶望する事にもなった。

『門の修繕費・・・三億四千万エリス？え？誰が？俺が？払うの？ええ！』

ギルドから突き付けられたのは水色が壊した門の修繕費の見積書。確かに壊したのはうちの駄目神であるし、弁償する事はなんら可笑しくはないのだが・・・どうもおかしな請求に思えてならなかった。仮にも魔王軍幹部の討伐という、近年誰も成し遂げなかった偉業を成したパーティー。魔王軍討伐に力を入れてる王国にとって手離したくない人材の筈だ。それこそ褒めて煽って良いように働かせて使い潰す事はあつても、何もさせない内からパーティーを解散に追い込むような圧力をかけるだろうか。

疑問に思つてギルドの偉い人にも聞いたが『領主様が決めた事だ』と取り合つて貰えなかった。ムカついたから脛蹴つてやって辞表叩きつけてやったのだが、何故か時給が三割上がったうえに有給休暇を貰えたので、まだギルドで住み込みで働いてたりする——おつと話が逸れた。

まあ、そうしてサトウカズマパーティーは多額の報酬金と、多額の借金を同時に背負う事になってしまったのである。

冒険者の報酬金は決して高い物ではない。確かに高レベル専用のクエストであればそれなりの報酬金が貰えるが、大抵そういう物は支度金が結構掛かったりする。無事にクエスト達成しても手元に残るのは危険と見合わない小金。加えてクエストは生物で安定して受け続ける事も出来ない。冒険者はあまりに浮き沈みが激しい仕事なのだ。そんな職で借金返済など夢のまた夢、現実的ではない。

そこでサトウカズマは考えたらしい。

自分の特性を十全に発揮でき、安定して稼げる方法を。

「それで商売かぁー、なるほどなあ」

買って貰ったお焼きの何かを齧りながら、俺は普通に感心した。俺と対して変わらないというのに、もう起業を考えてるとは・・・いやはや、恐れいった。というかこいつ、このフットワークの軽さを持つていながら、なんでヒキニートなんてしてたんだけ？道楽？

「まあ、まともによって返せる額じゃないから、それなりのもの考えなきゃいけないけどな・・・不味くは無んだけど、これで四千万は無理だな」

「なん万个作るんだって話だもんなあ——ん、ごち」
「おう」

サトウカズマが食べ終わるのを待つて次の目的地に向かう。大通りにある屋台を中心に回って回り、良さげな物を見つけては食べたり、手にとってよく見てみたりした。食べ物系とか工芸品とか装飾品などが定番らしかったが、魔王軍との最前線の街だけあって露店にも武器・防具屋など多く見掛けた。まあ、それでも一番儲かっているのは結局の所観光客相手に商売してるお土産屋のようであったが。

何処にでもあるもんだな、ペナントみたいなの。

え、ペナントなの？昔の勇者が？ふうん。

なんだ・・・王都饅頭とかもありそ——あ、あるのね。

ある程度露店を見終わった後は、通りに並ぶ店を冷やかしのいつた。もうこっちは参考がどうのとか関係ない。完全な観光である。折角来たのだからね。仕方ないね。

そうして入った数件の武器防具店。

立派な店構えから分かつていたが、やはり都会の店は高級嗜好が強く、どの店も目が飛び出るほど高い物で埋め尽くされていた。高い物は剣一振り、鎧一つで一千万。一番安い投げナイフ一本とっても高級品で、それはサトウカズマの今使ってる剣より高かったりした。

サトウカズマは泣いた。

お店の人にお願ひし、御試しで百万エリスの剣を振らさせて貰った。一気にご機嫌にはなつたけど。

目が凄いキラキラしてた。

ん？うんうん、せやな。

いつか買おうな。

うん。

え、他にも見て回る？市場に？掘り出し物があるかも知れないからって？うん、せやな。

行ってみようか。

うん。

うん、せやな。

なんだ、こいつ。

可愛いか。

ギヤツプ萌えは止めろ。

疼くだらうが。

□詮索してはいけないのは分かるが、気になるものは、気になるものだ。だってにんげんだもの

「——かずまあ」

窓のない薄暗がりの部屋の中、熱の籠った声が響く。

声に応えるよう蠟燭の頼りない光がゆらゆらと揺れる。そしてそれは光に照らされた影も同じように。

碌に調度品もないその部屋に照らされる物は数える程度しかない。黒褐色の壁に映されるのは、部屋に備え付けられた大きめのベッドの影と、その上で絡み合うように寄り添う二つの人影だけ。

「——んっ」

不意にその人影が重なり合う。

それはまるで壊れ物に触れるかのように。

優しく。

つつき合うような触れるだけのそれが幾度か続いたが、それは次第に深く重なり合うようになっていく。

「カナデ、舌出してくれ」

囁くような声に影の一つであったカナデは何処か気恥ずかしそうに赤い舌を出す。カナデに向き合うもう一つの影、サトウカズマはカナデの両肩を掴み引き寄せ、誘うような赤にしゃぶりついた。

サトウカズマは音を立てカナデの舌をねぶる。

彼にとって果実のように甘く感じるそれを。

伸ばされた赤に自らの赤を絡ませなぞる。

労るように撫でるように這わせる。

溢れ出す彼女の唾液を蜜のようにすすする。

「んっ、ん、うん」

サトウカズマの執拗なそれに、カナデは声に鳴らない音を漏らす。その頬の赤みを濃くさせながら、その息を更に荒くさせながら、その目を熱に浮かされたように蕩けさせながら。

カナデの様子を伺いながら、サトウカズマは肩に置いた手を滑らせ

るように動かす。肌をなぞる掌の感触に、カナデの体は小さな電気が走っているかのようにビクリと肩を跳ねさせる。

サトウカズマはその反応を楽しむように肌に指を伝わせる。羽のように軽く。うつすらと。あくまでさするように。

それは強く触れられるよりずっとカナデを疼かせた。

クモが這うような指の感触に何とも言えない刺激が走り、思うより早く体が熱くなっていく。

カナデの呼吸は更に荒れていく。

性的な興奮から心臓が激しく脈をうつ。

そして凶らずもその刺激はカナデの陰部から、蠱惑的な香りを伴う蜜を溢れさせた。

目敏くそれに気づいたサトウカズマはねぶっていた舌から唇を離し、惚けたカナデの目を見つめる。

言葉より多くの事を語るサトウカズマの視線に、カナデは目の前の彼が何を求めているのか察し領いた。

サトウカズマの指がカナデの陰部へと伸びていく。

カナデが息を飲んで見つめる中、指先は艶めく割れ目を撫で付けた。

「あつ、うん」

サトウカズマの指は優しく割れ目の周りをなぞる。

幾度か焦らすように這っていた指だったが、次第にその触れる位置は割れ目に寄っていき、ついには蜜の滴るそこへその身を沈めた。

ニユプという音と共に、サトウカズマの指が蜜に満ちた割れ目の奥へ進む。その侵入を喜ぶように、膣壁はウネウネ動きながら何かを絞りとうと強く締め付けてくる。きゆう、きゆうと。

その度にカナデの肩は跳ねた。

顔を赤くして何かを堪えるように口元を抑えるカナデから、何度もくぐもった声が漏れる。

その彼女の姿に、彼女の声に、彼女の出す淫靡な空気に。サトウカズマの股間で反り立つそれは、更にその硬度をあげ大きく膨らんでいく。

サトウカズマは指先を軽く折り曲げ、締まる肉の壁に押し付けた。
「——ひゃっ、あああん！」

グリツと押し付けられる感触に、カナデの体はビクリと大きく跳ねる。膺はその刺激に応えるよう、それまで以上に強く指を締め付けた。

腕を伝い愛液が滴る。

噎せかえるような雌の臭いに釣られ、サトウカズマがカナデの体を押し倒す。

「カナデ、そろそろ……」

「……うん、きて」

短い言葉を交わし、二人は一つに——。

「ダクネス！私のお話聞いていますか！」

「ひゃううん!!？」

突然の大声に心臓が飛びはねた。

冷や汗が噴き出し、バクバクと心臓の音が耳に煩い。

声に視線を向ければめぐみんが膨れていた。

「何をぼーっとしてるのですか？まったく」

「す、済まない……」

カズマに物の見事に撒かれた後、めぐみんに捕まった私は彼女の日課の爆裂魔法撃ちに付き合わされ街の外までやってきていた。

めぐみんが今日の目標を決めるまではちゃんと付き合っていたのだが、前口上を考え始めたところで暇になり、つつい二人の事を考えたら妄想が止まらなくなってしまう……ふう。情けない。

『我が深紅の流出を似てー』と、『我が赫灼の瞬きを似てー』と、どちらが良いと思いますか？私的には、やはり赤を強くイメージさせるシ

ンプルな深紅が良いと思うのですが・・・しかしですね、爆裂魔法のあの爆発を表現する赫灼も捨てがたいと言いますか・・・」

「私にそういうのは聞かれても分からね。後でカズマにでも聞いたらどうだろうか?——あ、いや、べべべ別につ!今、カズマの事を考えていた訳ではないからな!?!」

「?何を言っているんですか、ダクネスは。しかし、そうですね。後でカズマに聞いて決める事にします。カズマも今や、私に次ぐ爆裂魔法ソムリエですからね!」

爆裂魔法ソムリエ。

いつからあいつはそんな人に自慢出来なさそうな称号を得るようになったのだ。

「ん?なんですか、その目は。もしかして疑っているのですか?」

「いや、そんな事ないが・・・」

自分でもどんな目をしていたのか分からないが、めぐみんの膨れ具合からそれ相当の顔をしていたのだろう。

めぐみんは杖を突き付け口を開いた。

「いーえ!その目は疑っている目です!良いでしょう!カズマが帰ってきたら確認して下さい!カズマがどれだけ爆裂魔法に傾倒しているか、知ることになるでしょう!」

「カズマがか?少しイメージが湧かないんだが」

「そんな事ありませんよ。この間——まあ、習得ポイントを聞いて、少し言葉は濁しましたが・・・爆裂魔法をとってみたいと言っていました。それに、カズマは爆裂魔法の採点も出来る程の審美眼を持っているのですから、取らない訳はありません!絶対です!」

その言葉を聞いてカズマが頭を抱えながら「爆裂魔法の出来より、お金の稼ぎかたを知りたい」と嘆いていた姿が頭を過った。——
過ったが、まあ、それは言わないでおこう。

「ふふふつ、今から楽しみです。二人で爆裂魔法を撃ち込む、その時がっ!!ああ、きつと、きつと、凄い爆裂が起きるのでしよう!大地を砕きつ!海を割りっ!空を切り裂くような!!空前絶後の最強魔法!!
くううう!!」

楽しそうだから放っておこう。

水を差すこともない。

少しして落ち着いためぐみんが「そういえば」と口にした。

「カズマは今日何処にいったのでしようか？探したのですが宿にもギルドにもいませんでした・・・アクアに聞いても分かりませんでしたし。折角、パワーアップした爆裂魔法を見せてあげようと思ったのですが」

「ふあっ!?あ、いや、かず、カズマは、うん、そ、そう、そうだなあー私にも分からないなあー」

「・・・ダクネスは何か知っているのですか？」

「ぜっ、全然！私は知らないなあ！いきなり何を言うんだ？おかしなめぐみんだ」

めぐみんのジト目がちちらを見つめてくる。

完全に怪しんでいる目だ。

暫くこちらを見つめたためめぐみんだったが、諦めたのか小さく溜息をついた。

「・・・まあ、良いでしょう。もうすぐ冬ですからね。きつとお金を稼ぐ方法でも探しにいったのでしよう。今年の冬越えについて、随分と頭を悩ませていたようですし」

「そ、そうか」

めぐみんは目標に視線を向け、杖を高くかかげる。

「今日は気持ちよく一発撃って、カナデの所でご飯食べて帰りましょう！きつと唐揚げの一つもサーブスしてくれる筈ですから！」

「ぶほっ!?カナ、ごほっ、ごほ、ごほっ!!」

「ダクネス、さっきから何なのですか!?気が抜けるのですが!!」



「——ふえっ、ぷしょん!!」

鼻がむず痒いと思っただらくしやみが出てしまった。

勢いよくやったせいで鼻水が垂れてしまう。

「なんだ、その可愛いくしやみは。風邪か？」

「可愛いか？初めて言われた。ううん、風邪って訳じゃなさそうだけど・・・噂でもされて・・・ああ、スカートなんて穿いてるから」

「自分で言うなよ。はよ、ふけ」

「分かってるっの」

ポシエットからハンカチを引つ張りだしさつさと綺麗にする。念の為に手鏡を出して確認したが、特に問題は見当たらない。

「うん、よし。我ながら男前だ」

「いや、男前だけはないだろ。そんな女顔で」

「なんだよお、そんな速攻で突っ込まなくて良いだろ。TSジョークだぞ。TSジョーク。一回くらい乗ってからにしろよ」

「ツツコミの質求めんなよ。芸人じゃねえんだからな。てか、なんだその、使いがったの悪そうなジョーク」

サトウカズマには風情がないな。まったく。

しかし、TSした者だけが使える必殺ジョーク。俺はなんて素晴らしい物を作り上げてしまったのか。センスの塊だな。ふう・・・いつかTSした奴がいたら教えてやろ。

「それはそうと、もう日が暮れる訳だが・・・本当に帰るのか？一発やってみて？」

ぐーにした人差し指と中指の間に親指を突っ込み、嵌めようぜアピールをしたが、アピールはあえなく失敗。代わりにチョップされた。

「一発やってみて？じゃねえーよ。もちっと、雰囲気とかあるだろ。最近まで童貞だったとはいえ舐めんなよ。発情期の猿じゃねえんだからな」

「猿で良いだろお、別に。てか、雰囲気とか贅沢だなあ。俺は早々に諦めたぞ？それにな、こういうのは、やれる内にやっという方が良いぞ。

——ほら、例えばさ、子供とか生まれたりしたら、そういう事してる時間とかないじゃん？世話とか——」

がつつと、サトウカズマに両肩を掴まれた。

酷く焦った顔が迫ってくる。

「子供出来たのか!?!いつ!?!なんでもっと早く言わねえの!?!」

「おお? いや、例え話だって。出来てないから」

「は? ん、あ、そう。そっか。びつくりした」

そんなにびつくりしなくても。

そら、やることやってる訳だから、出来る時は出来るだろ……

おおう、なんだ。サトウカズマがこっち見てる。

「……なんだよ?」

「今更ではあるんだけどさ、その、お前避妊とか、してるんだよな?」

「一応。ピルみたいなのあるから飲んではいらざる。魔法薬なんだけだな。ギルドで知り合った元娼婦のおねーちゃんからオススメされた奴。効き目は超保証するってさ。だから、安心して中出ししろ! 中出しされてイクの凄い気持ち良いからな!」

「セリフがど変態そのものじゃねえか……いや、まあいいか。で、その薬高くねえの? それに、絶対って訳でもないんだろ?」

疑うような目に少し困ってしまう。

そう言われてもって感じた。

「高いのは高いけど、それなりにサービスして貰ってるから大丈夫。それにその薬頻繁に飲むやつでもないから、そんなに財布に負担掛かってないんだよ。子供は……まあ、よっぽどの事ないと出来ないと思うけど……どうだろうな」

前に避妊薬を買う時、お医者さんに軽く体を調べて貰ったから分かってるのだが、俺の体は初潮的な物は来た覚えはなかったのだが、既に子供を産める状態らしい。生理も来てんじやないかと言われたけど、そこら辺はあんまり覚えがない。血便的なのがあったけど、と言ったらお医者さんに「それじゃあないかなあ」と呆れた顔された。

なので調べる前まで、てつきり初潮はまだで中出しし放題かと思っていた。まあ、そういう訳で、最初の一発目は実はかなりヤバかったりしたのだが……大丈夫、その後も、最近も生理きたし。

「まあ、仮に出来たとしても、何とかなるだろ」

「お前な、そんな軽く言うなよ。お金も掛かるし、子育てとか大変だつて聞くし・・・おろすつもりはないんだろ？」

「ないなあ。ぶっちゃけて言うとき、俺、お母さんになりたかったからな。別にそれはそれで良いんだ」

「何処まで変態なんだよ。男の癖にガチで子供産みたかったとか・・・中々いないぞ」

「はははっ、そうだろうな」

——でもなあ、それも夢だったからな。

「ふふっ」

隣を歩くサトウカズマの肩にちよつと頭を預ける。

上目遣いで見上げてやれば、童貞臭さの抜けないドギマギしてるサトウカズマの顔があった。

「ねえ、本当に今日は、何もしないで帰るの？」

「きゅ、急に美少女ムーヴしてんじやねえよ。帰るんだよ、今日は」

そんな事言うサトウカズマの股間は少し膨らんでる。

ちよつと撫でてやればビクリと反応した。

「ふうん？」

「っ!!おまつ!道端では止めろっ、マジで!」

「道端じゃなければ良いんだ?ん?」

「お前なああ・・・」

声が荒くなつたけど、はね除けたりしない所を見ると満更でもないらしい。相変わらずのスケベな目がそこにあつた。

なので腕に抱きついて胸を押し当ててやる。

ぎゅつとすれば、サトウカズマのズボンに綺麗なテントが出来上がる。

「——ふっ、お猿さんじゃねえか」

「う、うるせええ・・・!!仕方ねえだろ!?経験少ないんだからっ——」

「っ!?!」

煩い口を塞ぐように唇を重ねる。

勿論、がつつりのディープキスだ。

サトウカズマも慣れたもので、最初こそびっくりしていたけど舌を差し込めばちゃんと絡めてくれる。グチュグチュと舌を舐め合った後、そつと口を離せば唾液が糸を引いた。

それがなんか、凄いエッチい。

「今日、もう帰るの？本当に？折角の王都なの？」

「・・・お前なあ」

なんかもう揺らぎそうになっているので、そつと耳に息を吹き掛けながら、もう一回言ってみる。

「エッチしたいなあ、カズマくんと。お腹の所がね、きゆうきゆうってしてるの。カズマくんの熱いのが欲しいって。・・・ねえ、しよ？」

「くくくっ!!くっ、俺の馬鹿!!しよすがねええな、一回だけだからな!!」

「わーい」

一回って何が一回なのか分からなかったけど、OKを貰えればこつちの物。そのまま目を付けていた連れ込み宿に直行。結局テレポト屋が閉店するギリギリまで嵌めまくり、お腹タポタポにして貰った所で帰宅した。

いやあ、エッチって良いものですね。

☆甘やかしたって良いじゃない。死ぬくらい頑張ったのだし。

霜が当たり前のように降りる、冬も本番な今日この頃。

冷たい風が吹きすさぶ冒険者ギルドの裏庭で、俺は腕を組みながら正座するトンチンカンの三人組を見下ろしていた。

「何故、正座させられてると思う……」

俺の言葉に水色が小さく悲鳴をあげた。

「あ、あの、カナデさん？キヤラが少し違くないかしら？いつもなら――

――」

「はあ？」

「ははああ!!何でもありません!!ごめんなさい」

水色が女神らしさの欠片もなしに見事な土下座を披露すると、めぐみんが小さく手をあげた。

「あの、か、カズマを――死なせてしまった事ではないかと」

めぐみんに続いてダクネスも小さく手をあげる。

「いや、あのだな、元はと言えば私が意地を張って立ち向かった事が原因であって、アクアとめぐみんは――ひゃうん!？」

「豚が人の言葉を話すな」

ダクネスが悪いのは死んだサトウカズマから聞いている。聞くまでもないので鞭で黙らせる。

ダクネスの表情を見ると、褒美にしかなくてない気がするが、黙らせるのにこれ以上手っ取り早い物もないので良しとしておく。

「……なあ、カナデ。俺が言うのもなんだが、許してやってくれよ。こいつらだって、別に俺を殺したくてやってた訳じゃないからさ」

そう言うのは生き返り立てホヤホヤのサトウカズマ。

水色の迅速な蘇生魔法で生き返ってはいるが、だからといって今回の件を簡単に水に流す訳にはいかない。例え死んだ本人が言ったとしても。

「駄目だ。こいつらできっちり教えておく。じゃないと――今

度は俺が死ぬかも知れないからな」

「おう、お前はそういう奴だよ。てか、少しは俺のために怒ってくれ」

「それもある」

「ついでか」

この発端は今朝にまで戻る。

いつも通りウェイターとして出勤した俺はサトウカズマパーティーを発見した。他の冒険者のようにグータラしてくのかと思えば何やら武装しているではないか。不思議に思っただけを掛ければ『雪精討伐』に行くという。

それを聞いて俺は一応止めておいた。冬場は危険なクエストが多いと仕事仲間から聞いていたし、大半のクエストがボードに張り付いたまま現状の様子をみれば推して知るべしなので。

とはいえだ、例の借金の件もあつてサトウカズマ達にお金がないのも知っている。他の冒険者のように食って飲んで寝て、悠悠自適に冬場を越える蓄えがないのも。

俺は住み込みで働かせて貰っているし、最近内職にも手を出し始めたので借金返済生活も大分楽になったが、基本馬小屋生活なサトウカズマ達はそうも言ってもらえない状況。冬場の馬小屋とか自殺と同意義だから是非もなし。

なのでそういう事ならと、せめて冬場だけ倉庫でもなんでも良いので住み込みで働かせて貰えるように口利きすると提案したのだが、サトウカズマはこれを断ってきた。

何でも、いつまでも甘える訳にはいかないらしい。

結局クエストの内容やら討伐対象の事をやら報酬と労力の割合やら説明され、「大丈夫だ」と言い張るサトウカズマに丸め込まれる形で見送らされたのだが――――数時間して帰って来たサトウカズマは一回死んでいた。

理由を聞けば雪精討伐には裏があった。

一匹倒せば春が1日早くやってくると噂の、棒で叩いても霧散する討伐報酬一匹10万エリスな雑魚雪精。実はヤバいおまけがいたらしい。それが国から高額の賞金首を掛けられた化け物、雪精達の主『冬將軍』である。

冬將軍は雪精の上位の存在で、雪精の守護者的役割を持つていらしい。雪精が傷つけられれば東へ西へ何処へでも現れ、不埒ものを無礼千万と切り捨てるのだからか。

そんな冬將軍にサトウカズマは首をスパツといかれたらしいのだ。それから水色が生き返らせてなんとか事なきを得たが、今回のそれはそもそもが避ける事の出来た死。

だからこそ、俺は怒っていたのだ。

水色でも、めぐみんでも、ダクネスでもいい。

誰か一人がサトウカズマに冬將軍の事を教えていれば、恐らく誰も死なずにそれなりの報酬を受け取れただろう。

それは確かに、全部教えたらサトウカズマが依頼を受ける事を渋るかも知れないが、それでも命が掛かっているのだから仲間内でのそういった情報の出し惜しみは避けるべき事。

特に今回は、サトウカズマ以外皆知っていたのだから余計だ。

「———というように、俺はお前らのそういう所を怒っているんだ。分かったな」

一通り説教をしそう締め括れば、トンチンカンなショボくしながら返事をしてきた。これ以上責めても仕方ないので取り敢えず許しておく。

ダクネス以外は。

「え!? な、何故だカナデ!? 私もだな、反省をして———うひょう!? あだだだだっ!」

ダクネスの正座してる膝の上に石を積んでやる。

その重さで地面の砂利との間に挟まれた足が痛むのだろうか・・・知った事ではない。

「今回、一番悪いのは言うまでもなくお前だ。よって寒空の下で正座

の刑に処す。自分の趣味を優先して仲間を危機に陥れたその罪、しかと心に刻み深く反省しろ。反省していると俺が判断するまで、そのままな」

「な、なんだと!? こゝ、この寒空の下で、か!? それは流石に……はあ、はあ、くつ、なんて、最高のお仕置きシチュエーション!! 拷問した上で放置プレイなど、どんなご褒美……はっ! いや、駄目だ! 喜んではっ! 反省せねば——しかし、この痛み、この冷氣! 堪えるっ!!」
おまけに正座してる足の裏を棒でひっぱ叩いておく。

何故だか甘い声が漏れた。

「ダクネスは暫く放置するとして、水色とめぐみんは風呂にでも入ってこい。クエストの完了手続きは済んでいるんだろ?」

そう尋ねればめぐみんが頷く。

「はい、先程済ませてあります」

「よし。テーブル一つ予約しておいてやるから、さっさと風呂入って戻ってこい。夕飯は俺が奢ってやるから」

「え、良いのですか……?」

「忙しかったからとはいえ、一緒に仕事いかなかったお詫びだ。悪かったな、冬場のクエストはただでさえ危ないのに」

安易に見送ったのがそもそも間違いだしな。

「うぐうう、こゝ、心が痛いです。ちよ、ちよつとでも、いなかった癖にと思つてすみませんでした」

「私はちゃんとごめんなさいしたけど、何となくもう一回言っておきたくなったから言うわね。ごめんなさい」

おう、気にするな。

ダクネスは喜んでないでもっと気にしろ。

そうだよ、気にしろ。

それから暫く。

皆で夕飯食べて解散した後、俺はサトウカズマを連れていつもの宿——ではなく、住んでいる寮の部屋に連れ込んでいた。二人一部

屋で宛がわれている部屋なので、当然就寝時間には同僚の姿があるのだが、今夜はその姿はない。同僚には金を握らせて、今晚だけ外泊して貰っているのである。

持つべきものは同僚だよね。

「なあ、なんで俺はカナデに膝枕されてるんだ？」

膝の上にあるサトウカズマの頭を撫でていると、怪訝そうな声が聞こえてきた。

理由は特にないのだが・・・はて、どう答えようか。

「俺がそうしたかったから・・・？じゃ駄目か？」

「そ、そっか。いや、別に駄目とかじゃないんだけどな。気になっただけっつーか」

サトウカズマの髪は少し固い。

男だった頃の俺よりツンツンしてる。

だから手触りが良いかどうかと聞かれれば、そうでもないと言えない。

でも、個人的には好きだ。こうしていると凄く落ち着く感じがするのだ。

「あのさ・・・楽しいか？」

「それなりに。サトウカズマは嫌か？」

「・・・嫌じゃねえけど、まあ、悪くないというか、なんと言うか」

ゴニョゴニョと言葉を濁してるけど、横顔は満更でもなさそうなので続ける。嫌がったら止めるつもりだったので良かった。

ふとサトウカズマの横顔を眺めていたら、何となく耳に目がいった。

「耳搔きでもするか？」

「耳搔き？耳搔きなあ、そう言えば最近・・・はっ!?いきなりなんだよ!？」

「だから耳搔きしてやろうかって。お前こういうの好きだろ」

「そ、それは、そういうシチュに憧れるのは、そうだけだ・・・：：：：：お願いします」

「はいよ」

ちよつと手を伸ばして枕の近くにある棚を手探りで探す。直ぐに綿毛のついた耳搔きを見つけ、汚れを軽く拭いてからサトウカズマの耳に当てた。

「痛かったら言えよ」

「お、おう」

そつと耳の穴を覗いて見ると割りと綺麗だった。

掃除する程でもないと思つたけど、ここで止めるのは期待してそうなサトウカズマが泣くかもしれないので、やれるだけやる事にする。

耳かきをそつと穴に入れ、壁を引つ搔くように軽く擦つていく。傷つけないように優しく。耳垢なんてあつてないような物だから予想通り直ぐ終わった。現実なんてこんな物。眠る暇さえありやしない。

——とはいえ、ここで終わりにしたら本当に泣くかもしれないので綿毛でお茶を濁す事にした。

コスコスコス。

綿毛でただひたすらにコスコスコス。

あ、ちよつと愉しくなつてきたかも。

「・・・なんか、気持ちいいかも」

綿毛で遊んでるとサトウカズマがそんな事を言った。

ぶつちやけ掃除は終わつてるので、それは違う気持ちよきさんだけど・・・頼むから、幼馴染みたいに目覚めないでくれよ。あんなに溜め込んだ耳垢、もうみたくない。業者じゃないんだからな、俺は。

「はい、終わり。反対側な」

「——え、まじか」

「まじ、まじ。ほら、反対向いて」

こつちに顔を向かせると、サトウカズマが何故か顔を赤らめた。何を見てるのかと思えば、視線がおっぱいに釘付けになつてる。いつまでこいつは童貞仕様なのか。幾らでも生で見てるだろうに。

乳の下に何を見てるのか気になるけど、それは気づかなかつた事にしておこう。突っ込んだ際のサトウカズマの反応は容易に想像がつくし。そこら辺のロマンとかは教えられても共感出来そうにないし。

反対の耳も概ね同じで綺麗だった。

開始二分くらいで終わったのだが、サトウカズマの緩んだ横顔を見てると嫌な気もしないので、また綿毛でコスコスしてやる。

「・・・なあ、カナデ」

不意にサトウカズマが声を掛けてきた。

顔を見ればトロンとした目がこつちを見てる。

「どうした？」

「お前、さつき割りと怒ってたろ・・・？」

「・・・ちよつとな」

日頃から自由なメンバーの行動にある程度慣れてはきてるし、そういう個性なのだからとある程度許容しているが、こうして何か起きると少し思う所はある。

「でも、もう済んだ話だからな。ガミガミ言っても仕方ないだろ。無事だったらそれで良いよ」

「・・・悪かったな。心配かけて」

「いいよ、ちゃんと帰って来たからな」

それからもう少しコスコスしてやって、俺は耳かきを終わりにした。

また撫で撫で天国に戻ろうと思ったけど、サトウカズマのエロ視線が目につく。仰向けに膝枕されてるサトウカズマの視線は、もう堂々とおっぱいを見ていた。

いきなり吹っ切れるなよ。

びっくりするだろうが。

「・・・触る？」

「え、い、いや、別にいい」

「誤魔化すなら見るのを止めてからにしろよ。良いよ別に。というか、今更だからな。ぶつちやけ、そういう事期待して連れてきたし」

「それはぶつちやけ過ぎだろ」

寧ろ何で手を出してこなかったのか聞くと、寮である事を気にしていたらしい。何のために人払いしてると思っているのか。鈍いな、まったく。

「どうするっこのまま触るっ生っ」

「触るといふか、その……」

触りたい訳ではない？そんな事ないよな？

ちよつと考えてみて、ふと思いついた。

「ああ、何となく分かった。授乳プレイっていうんだっけ？あれだろ」

「!?そ、そんな事ねえし!?」

面白いくらいキョドってる。

ドンピシャだったらしい。

上着を捲り上げておっぱいを出せば、分かりやすいくらい反応した。

「まだ出ないけど、それでも良いならどうぞ?」

「出たら出たで死ぬほど焦るわ」

「ふふつ、俺はそういう体質でもないからな。自動的にそうなっちゃうもんなあ」

そつと前屈みになって、鼻息の荒いサトウカズマの口元におっぱいを押し付ける。

「カズマくん、一杯おっぱいしようね?」

そう言つてやれば、サトウカズマが突起に吸い付いてきた。

「んっ」

エッチの時も舐めたり吸つてきたりするけど、今日はいつもよりがつついてる感じがする。なんていうか吸い付きが強い感じだ。

痛い程じゃないけど刺激もそれに比例して強く、チュウチュウと吸われる度に体が反応してしまう。

「ん——ふあっーん、あ、おい、いきなり揉むなあ」

大人しく吸つてると思えば、いつの間にかもう一つの乳房を弄り始めた。捏ねたり、揉んだり、突起を摘まんでみたり。授乳プレイの筈なのに、もう全然赤ちやんらしくない触り方をしてくる。

油断していたせいか余計に感じてしまつて、体が跳ねてしまう。

「んあ、カズマくんっ、こら、もうっ!」

悪戯つ子な手を捕まえて顔を覗けば、何食わぬ顔で明後日の方向を見ていた。可愛くない行動なんだけど、その顔が何処か憎めなくて言葉が出てこない。そのまま引き下がるのもあれだったので、御返しに

サトウカズマの頬をつついてやる。

「もう、赤ちゃんはそのんな事しないんだからな？めっ、だぞ」

言い聞かせるようにいうと、サトウカズマはジト目を返してきた。その目に反省の色なし。

そう、まさかの俺悪くないもんである。

サトウカズマの視線は相変わらずおっぱいに釘付け。

押さえていた手がワキワキと物欲しそう動いてる。

どれだけ触りたいんだと、心の中でちよつと笑った。

こういう所を可愛いと思ってしまうから、俺は駄目なのだろうな、とも。

「しようがないな。ちよつとだけだぞ？」

そつと、掴んでいた手を離すと迷う事なくおっぱいを掴んできた。さつきよりずつと触り方がねちっこい。擦るような突起を弾かれて、あそこが熱くなる。

「にやあつ!?んんんツツツあつ!!」

吸い付かれていたソレが急に噛まれ、軽くイッテしまった。目がチカチカする。

いきなりは駄目だと言ったのに、そう恨み言を込めてサトウカズマを見つめたが、この野郎また明後日の方向を見ていた。

それならと、俺は膨らんできたサトウカズマの息子様を握りしごいてやった。

「つぶぽぽぽ!?——ぱっはあ!?おまつ、いきなりは駄目だろ！出ちやっつたろうが!？」

「そんなにカナデママのお手てが良かったんでちゆか？ぷぷぷ、なんならおかわりしまちゆか？」

「ほ、ほほう……良い度胸だな、カナデママ。言つとくが、もう俺は童貞だった頃の、犯されるだけの存在ではないぞ」

サトウカズマの厭らしい手つきが目の前でウネウネ動く。

「それが何処まで俺に通用するかな？見せかけだけの、スケベハンドが」

「試してみるか、おいっ」

どちら途もなく手を動かし始めた。

始めて分かった事なのだが、体勢的に俺のが圧倒的に不利だ。サトウカズマは両手を使える上、口も使って責められる。けれどこっちは片手しか使えない。もう片方の手はフリーではあるけど、位置的に肝心な所へ手が届かない。

「んふっ、ふうっ、ふっうん」

悩んでいる内にも、サトウカズマの攻勢が続いてく。

一回イツテ敏感になっているせいで、何処を触られてもビリビリと刺激が走ってくる。股はもうビチャビチャ。何とかギリギリ耐えているけど、もうイキたくて仕方ない。辛い。でも負けたくもない。

あつ、やつぱ無理。

「——ツツツツツツああつん!!」

両方の突起を強くしごかれた瞬間、全身にバチバチするような刺激が走った。頭が一瞬真っ白になって、胸がフワフワする。それは気持ちいいなんて表現じゃ納まらないほど刺激的な感覚だった。

サトウカズマ、胸だけでこれとは。

恐ろしい子っ!!

力が入らなくてベッドに倒れると、直ぐに顔に固い物が当てられた。

「カナデ。後少しなんだけど、一回口でやって貰って良いか?」

少しは休ませて欲しいのだけど、捨てられた子犬みたいな目をさせたら断れなかった。

頑張って起き上がって啜えてあげる。

「いつでも、出して良いからな?んっ——」

「つく、うおっ」

舌を絡めながら前後に動かす。

本当は喉まで飲み込んだ方が良いらしいのだけど、まだ俺には無理そうだった。代わりに先っぽのカロの所まではちゃんと啜えて刺激してやる。

「んっ!!カナデっ、出る」

「——っんんん!!」

喉にドロドロした物が一気に流れ落ちていく。
鼻から抜ける精の臭いに頭がクラクラする。

臭い筈の臭いだろうけど、今は何より心地良い香りに思う。

「んほっ!? あ、馬鹿、それはっおおう!？」

サトウカズマの情けない声を聞きながら、竿の奥に溜まった精液を
啜り出す。

そして竿を汚す白濁も綺麗に舐めとってから口を離した。

「はぁ・・・二回目なのに、濃いなぁ。すごい」

「どんだけ、がつつくんだよ」

「人の事言えるか?」

そう言ったサトウカズマのソレはまだビンビンに立ったまま。萎
れる気配を見せない。

「これは、仕方ないだろ・・・男はなぁ」

「ん?別にせめてないだろ?寧ろ嬉しいくらいだ」

股を開いてサトウカズマに見せる。

ぐちゃぐちゃに濡れた、俺の大事な所を。

物欲しそうにヒクヒクと動いているのが見なくても分かる。

「まだ、いけるよな?」

「しよ、しよーがねええなぁ!」

それから朝方までサトウカズマとズッコンバツコンした。例の如
くお腹タップタプである。

そして俺は新しい事を一つ学んだ。

シチュエーションプレイって燃えるわ、ってこと。

凄い良かったもん。まる。

あ、ダクネス許すの忘れてた。

何を騒いでるんで——はい？パーチーチェンジで
すか？あれ、急に、行きたく、なくなつて、きたよ。

「おい、もう一度言ってみろ」

サトウカズマがぼっくりいってから数日後の事。

ウェイターの仕事を休み、サトウカズマ達とクエストに行くために
待ち合わせ場所であるギルドの扉を開けると——怒りに満ちたサ
トウカズマの声が聞こえてきた。

いつも賑やかなギルド内がやけに静かになつてる。

こういう時、大体一人くらい茶化したり嘔し立てたりする奴がいる
ものだが、サトウカズマの声に含まれた険に圧されたのか誰も何も言
わない。

取り敢えず現状を把握する為に人混みを掻き分けて進むと、サトウ
カズマとダスト^{ゴミ}が向かい合っていた。サトウカズマの後ろにはうち
のメンバーの姿もある。それに対するダスト^{ダニ}は頬を赤くして何だか
酒臭い。多分酔ったいきおいで絡んだのだろう。酔っぱらいの面倒
臭さは理解出来るので、怒るのも分からなくもない。

でも、だ。

サトウカズマは俺と違つて慰謝料をむしりとつたり、しばき回した
りしない。そこら辺の事は、いつもは上手くかわすのだ。争うのがめ
んどいらしい。

そんなサトウカズマが何故と、不思議に思う。

「何度だつて言つてやるよ。荷物持ちの仕事だと？上級職が揃つた
パーティーにいなながら、もう少しマシな仕事に挑戦できないのかよ？
大方お前が足を引っ張つてるんだろ？なあ、最弱職のカーズマさんよ
？」

「おお、把握した。」

カス^{ダスト}は触れてはいけない禁忌に、愚かにも手を出したらしい。

サトウカズマが頑張つて怒りを押さえ込んでいると、何を勘違いし
たのかゴキブリ^{ダスト}が厭らしい笑みを浮かべて続けた。

「おいおい、何か言い返せよ最弱職。まったく、いい女を四人も引き連れて、ハーレム気取りか？しかも、カナデちゃんを除いて全員上級職ときてやがる。さぞかし毎日、このお姉ちゃん達相手にいい思いしてんだろうなあ？」

まあ、良い思いはさせてやってるつもりだが。

この間は朝までエッチしたし、プレイにも付き合ってたし：いやまあ、俺もその分楽しんだけど。そう、winwinな関係だよ。うん。

そんな事を思っているとギルド内に爆笑が巻き起こった。

産業廃棄物の仲間であり、俺の友達でもあるリーンが困った表情でオロオロしてる。眺めていたら偶然目が合い、物凄く申し訳なさそうに頭を下げてきた。

良いよ、許す。リーンは。

リーンの他にもサトウカズマが笑われてる事に対して、顔をしかめてたり、注意しようとしてる連中の姿も見る。どうやら節穴ばかりでもないらしい。

そうこうしているとトンチンカンが止めに入ってた。何か囁いているが、ここからだと言えない。サトウカズマの反応からフォローしてる気はするけど。

俺も交ざりにいこうかなと足を踏み出した時、また粗大ゴミが口を開いた。

「上級職におんぶに抱っこで楽しやがって。苦労知らずで羨ましいぜ！おい、俺と代わってくれよヒモのカーズマくんよ!!」

「大喜びで代わってやるよおおおおお!!」

あーあ。

やつちやったかあ。

すっかり静まり返った冒険者ギルドの中で、怒鳴り声をあげながらサトウカズマは続けた。

「代わってやるって言ったんだ！おいお前、さっきから黙って聞いてりや舐めた事ばっか抜かしやがって！ああそうだ、確かに俺は最弱職だ!!それは認める。だがなあ、お前！お前その後なんつった！」

サトウカズマの迫力に不燃物^{ダスト}がたじろぎ、

フオローしてた三人が面白い顔してる。

「そ、その後？その、いい女四人も連れてハーレム気取りかって……」
「いい女！ハーレム！お前っ、ハーレム舐めんな!!てめえのハーレムはどんだけお安く出来てんだおい！いい女のハーレム!?!ほわい!?!何処見て言ってるんだ！おら、言ってみろごら！その目玉で、何処見て言ってるんだよ！なんだ、その目玉ビー玉かなんかなのか？いいなあ！世界が楽しく見えてそうで！交換してくれよ！俺の濁った目玉と、お前の綺麗なビー玉と交換しろよお!!」

胸ぐらを掴みあげて怒鳴る姿は何処か悲しい。なんか煤けて見える。まるで仕事に追われるサラリーマンのようだ。

まあ、実際それなりに苦労してるから、その反応も仕方ないんだけど。一回死んでるくらいだしな。

たまにはストレス発散させてやるべきだと思うので、サトウカズマは好きにやらせ、きよとんとしてる三人の元に向う。

「よつす。おまた？」

そう言うと、三人が焦りの表情を浮かべこちらに振り向いた。中でもめぐみんが一番反応が強く、こちらに小走りしてきた。

「カナデ！遅かったじゃないですか！カナデを待っていたら、何やらおかしい事になってしまいました……」

「途中からだけど聞いてたから知ってる。ま、大丈夫、大丈夫」
「そうでしょうか……」

めぐみんは爆裂魔法の事となると完全に狂ってるけど、基本的には仲間思いの優しい子だ。サトウカズマの反応に寂しさを覚えたのだろう。

取り敢えず一回撫でておく。

「売り言葉に買い言葉で、サトウカズマも本気で言ってる訳じゃないから大丈夫。流石にこんなんで解散とかにはならないから」

「そうですね。すみません、変な事を言って」

「おう。気にするな」

俺の言葉に安心したのか、今度は三人でサトウカズマを上から目線

でデイスリ始めた。やれ私達のありがたみが分かってないとか何とか。果てしなく巨大なブーメランな気もするけど、そこについては突っ込まないでおく。

それからサトウカズマと排泄物ダストとの話し合いに聞き耳を立てていると、1日だけパーティーメンバーを交代してクエストを受ける事になったようだ。

あれがリーダーとか気が進まないの、今日は大人しくウエイターに戻ろうかな?とか思ってたなら、サトウカズマに腕を掴まれた。

「行くぞ、カナデ」

「ん?おう」

「あ、おい!カズマ!カナデちゃん何処連れてくんだよ?!」

俺を連れて歩き出したサトウカズマに、老廃物ダストのもっともな言葉が刺さる。

けれど、サトウカズマは眉間にしわを寄せながら直ぐに返した。

「上級職の、女子に囲まれて、チャホヤされながら、楽なクエストがしたいんだろ。生憎こいつは俺と同じ最弱職の冒険者様だ。何だよ、いらないだろ?それとも何か?負担にしかならない、俺と同じ最弱職の冒険者様を、態々お連れ遊ばせたいのか?ええ?」

「...お、おう。いや、でもなあ、いや、そうなんだけど...
ううん、カナデちゃんはあ...くそう」

「——はっ!行くぞ」

サトウカズマにドナドナされながら、寂しげな目で見てくるめぐみん達にガッツポーズをしておいた。

今日1日だけ皆で頑張れよ、と気持ちを込めて。

「カナデちゃあああん、かむばっ—く!」

「死ね」

「カナデ、うちの馬鹿がゴメンね」

リーン達と臨時パーティーを組みクエスト目的に向かっている途中、リーンがそんな事を言ってきた。別にいつもの事なので許しちゃう。ん？いやまあ、またあいつの財布から慰謝料はとるのは止めないけど。

「なんやかんやサトウカズマが乗ったのも原因だしな。そこまで気にするなよ。というか、なんであんな害虫の親戚とパーティーなんて組んでんの？脅されてたり、弱み握られてるのか？うちくるか？」

「誘ってくれるのは嬉しいけど、ゴメンね。脅されてたりとかそういうのじゃなくて、このパーティー普通に気に入ってるからさ。それにしても、害虫の親戚かあ・・・あははは。ダスト聞いたら泣くだろうなあ」

「？」

いつも泣かしているが？

何を今更。

「おい、お二人さん。もちよつとペースアップしてくれないか？」

声に視線を向ければ臨時パーティーのリーダーであるテイラーがこつちを眺めていた。そして前を進んでいた男衆と若干離れてしまっていることに気づく。

小走りで合流するとテイラーが溜息をついた。

「お前らなあ・・・」

「ゴメンゴメン。つい、話込み過ぎちゃって」

「リーン。一時的とはいえ女の子の仲間が出来て浮かれるのは分かるし、仕方ないと思うぞ。でもな、目的地までまだ距離があるとしても、ちっと気を抜きすぎだ。警戒は怠るな————カナデちゃんもな」

テイラーに向けられた視線に素直に頷いておく。

「でもな、大丈夫だと思うぞ。サトウカズマが警戒してるんだろ？」

「ん？ああ、まあそうなんだが・・・」

サトウカズマは冒険者という職を生かし、色々なスキルを持ってい

る。今は敵感知スキルを使って周囲を警戒してくれている筈だ。

自分が能力的に戦闘に向かない事を知っているサトウカズマは、それ以外で役立ちそうなスキルを習得する傾向がある。主には盗賊系だけど、初級魔法はほぼ全属性習得してるし、最近では鍛冶スキルもとったとか。

出発する前その話をしたらリーン達に驚かれた。

才能がないと分かってても冒険者という肩書きが邪魔をして、そこまですりきってスキルを割り振りする奴は稀なんだそうさ。

そんな訳で今はサトウカズマを先頭に、敵を索敵しながら進んでいる状態なのである。本来俺達二人は荷物持ちなのだが、その有用さからサトウカズマの背には自分の荷物しかない。荷物は各自持ちだ。

またサトウカズマの背中を見ながら歩き出して少し。

テイラーに肩をチョンチョンされた。

「なあ、カナデちゃん。カナデちゃんらって、いつもこんな感じなのか？」

「こんな感じ?」

「いや、なんつーかな、カズマの歩みに淀みがないっつーかさ。ああやって歩くのが普通みたいさ。つか、さっき聞きそびれたんだけど、もしかしてカズマって参謀的な立ち位置なんじゃねえか?」

そんなテイラーの言葉にリーンが目丸くした。

「え?! そうなの? だって冒険者でしょ?」

「そうはいってもな、あれは普段からそうしてる奴の動きだからな。手際が良いすぎんだよ。冒険者って先入観とって見りゃ、まだ未熟な所はあるが良い線行ってるよ」

「へええー、そうなんだ」

いや、あいつリーダーなんだけど。

訂正しようか迷っているとサトウカズマの静止を求める声が響いてきた。流石にリーン達の冒険者としての経験値は高く、一瞬で話すのを止め戦闘体勢を取ってる。

うちのパーティーならこうはいかないだろう。

「どうした、カズマ」

「敵感知に反応があった。……でもな、一つなんだよ。この辺は群れるモンスターが多いんだよな？なんか心当たりはあるか？」

「一つ？……この季節にか？妙だな……」

テイラーは少し考え、様子を見る事を決めた。

カズマの潜伏スキルに便乗して全員で物陰に身を潜め待つこと少し。

それが目的地の方向からやってきた。

リーンが声なき悲鳴をあげる。

他のメンバーも軒並み息を飲んだ。

勿論サトウカズマも。

と言うのも、俺達の前に現れたのは鋭利な長い牙を持つ、ライオンより遥かに大きなサーベルタイガー的な四足獣だったのだ。

冬場のモンスターは強いのが多いと聞き、念の為にギルドに飾ってあったよく切れるハルバードを持ってきたが、こいつ相手ではその切れ味も何処まで通用するか怪しい。隠れて本当に良かったと思う。

暫く隠れていると、そのサーベルタイガー擬きは臭いをかきながらズンズンと何処かに行ってしまった。

誰から途もなく安堵の声が漏れる。

「あつ、ぶなかつたあー初心者殺しかよ」

キースの言葉にサトウカズマと一緒に首を捻るとリーンが説明してくれた。先程目の前を通った化け物は初心者殺しと呼ばれるモンスターらしい。今回の討伐対象であるゴブリンやコボルトなどを利用して、それらを狩りにきた冒険者などを捕食する、冒険者を殺すために生まれたようなモンスターなのだとか。

なんだろうな、その理不尽の塊みたいなモンスター。

普通に怖っ。

「私らでも、あのモンスターは手に負えないから、やり過ぎせて良かったよ。カズマには感謝しなくちゃね。ありがとう」

感謝の言葉と共にリーンから笑顔を向けられ、サトウカズマは照れ臭そうに頬を掻いた。そしていつものようにぶつきらばうな返事を

してしまう。相変わらず褒められたり、頼られたりするのに弱いなあ。こういう所でもう一つ気の利いた台詞を言えればモテるだろうに・・・ふっ、残念なやつだ。

そのままへたれっぷりを眺めるのも良いが、俺は友人を大切にする女。友人の幸せの階段を踏み外そうとするなら、スルーは出来ない仁義の女。

だから軽くだが、アドバイスしてあげようと思うのだ。

手招きしてサトウカズマを呼び出し、そつと耳打ちしてやる。

「リーンとお近づきになりたかったら、格好つけるくらいじゃないと駄目だぞ。あれでいて、王子様待ってるタイプだから」

そう教えてやると、サトウカズマから何か言いたげな視線が返ってきた。

「?何だよ」

「・・・何でもねえよ」

「んー?それなら良いけど?」

それだけ言うとサトウカズマは男衆に交ぎってクエストについて相談を始めてしまう。

何だか素っ気ない態度にモヤモヤした物を感じてると、リーンに肩ポンされた。

「何言ったか知らないけど、まつ、どんまい。男心もわりと繊細みみたいだからさ」

リーンは凄いドヤ顔でそう言い切り、そつと水筒を差し出してきた。

よく分からないまま水を飲み、一呼吸ついた所で思う。

いや、分らないでか!と。

あれだからね。

大きい声で言えないけど、元男だかんね、俺。
ちんこ生えてたからね。

サトウカズマよりでつかいのつ。

．．．。

．．．．．。

．．．．そうなんだよ、”元男”なんだけどなあ。

むむむむ、分かん。

何だっけ言うのか。

やる時はしつかりやりますが？え？はい、喧嘩は継続中です。

初心者殺しを上手くかわして暫く。

山道を進んだ俺達は討伐目標であるゴブリン達の元へと着いていた。ゴブリンというモンスターの中でも雑魚の部類に入る存在。駆け出し冒険者の多くにとって、それは糊口しのぐ糧でしかない奴等。とはいえ、世の中とは何が起こるか分からないもの。

油断は禁物という事で、討伐は偵察する所から始まる。

目標地点近くで調子に乗りそうだったがキースとテイラーを一度締めた俺は、偵察に出掛けたサトウカズマと今度こそ慎重になったキースの帰りを大人しく待っていた。

「……お、おい、リーン」

「分かってるって……ねえ、カナデ」

「ん？どうした」

いきなり声を掛けられリーンへと視線をやれば、若干怯えたテイラーと困ったような顔をしたリーンがいた。

「足、止めない？」

言われて見下ろすと、足が地面をリズムカルに叩いている。タンタンタン、と。

「これ？」

「うん、それ。もうかれこれ10分以上それしてるでしょ。カズマの事でイライラしてるのは分かったから、もう止めよ？テイラーが怯えてるし」

「意味わからんし」

「カズマが帰ってきたら、私がバシツと言つとくからさ〜！」

「必要ないし」

「……はあ、もう」

別にイライラとかしてないし。

全然気にしてないし。

そもそも怒る理由ないし。
いみふだし。

何を言ってるのか、リーンは。

そもそもクエスト中にそういう集中をかくような事しない主義だからね。仕事は仕事でちゃんと割りきるしね。俺はね。

それからもう少し待つとサトウカズマ達が帰って来た。

サトウカズマは俺と目が合うと直ぐに目を剃らしテイラー達の方へと向かってしまう。

別になんとも思っていないが、本当に何も思っていないが、一言何かないのだろうかと思う。

このヘタレ野郎は、と。

サトウカズマ達の報告により、ゴ布林達が予想以上に沢山いる事が分かった。それにより『戦士連中がさつと行って、パパツと片付ける作戦』は見送らなくてはいけなくなった。

それで別の作戦を考える事になり——全員での話し合いの結果、最も成功確率が高くリスクが少ないサトウカズマの作戦が採用された。

本来ならサトウカズマが評価された事を仲間として喜ぶべきなのだろうが、どうにも癪に思ってしまう。したり顔がむかつく・・・いや、何とも思っていないし。別にいい。んだよ、こつち見んなよ。

「なあ、カナデちゃん。カズマと仲直りしようぜ？」

作戦の為に崖っぷちを摺り足で進んでいると、同じく摺り足で着いてくるテイラーが呟いた。

「別に喧嘩してないし」

「そりゃねえよ。カナデちゃん分かり易すぎだから」

サトウカズマの出した作戦は地形を利用した二点攻めによる殲滅作戦だ。

サトウカズマとキース、リーンは高所に陣取り敵の陽動と遠距離攻

撃により敵にダメージを与える。なるだけ敵の注目を集め、敵の動きを乱すのが目的だ。数を減らせればなおよし。

ある程度敵の数が減り隊列が乱れたら、サトウカズマ達の反対方向から近距離主体の俺達が切り込み、迅速に殲滅——といった具合だ。

サトウカズマのスキルにより、敵の数や状況がきちんと把握出来たからこそその作戦。

はつきり言って文句はない。

ないのだが……。

「ちっ」

「あ、今舌打ちしたろ」

「してないし」

でも何か釈然としないものがあつた。

予定位置に辿り着いた所でサトウカズマ達に合図を送ると、早速作戦が始まった。サトウカズマ達による遠距離攻撃が始まる。

サトウカズマ達に気づいたゴ布林達は、受ける攻撃に対抗するよう矢や石を飛ばし返す。けれど、リーンの防御魔法により攻撃は通らない。

仲間達が落ちる矢に血を流し始めると、破れかぶれに特攻を始める。

しかし、それはサトウカズマがやらせない。

サトウカズマはゴ布林達が登ってくる足場に水を撒き散らし、かさずそれをフリーズの魔法で凍らせた。

そう、あの幹部様ですら動きを鈍らせた氷の床である。足を取られゴ布林が転び、立ち止まり、たじろぐ。

サトウカズマ達が陣取る高台に踏み込むのは容易ではなくなった。そしてその光景を前に、ゴ布林達の動きは明らかに悪くなっている。

「行くか、カナデちゃん」

「あいよ」

テイラーが駆け出すのと同時に、俺も武器を構え続く。

短く息を吐き振り払われたテイラーのショートソードは、豆腐でも切るかのようにゴブリンの首を撥ね飛ばす。

奇襲は成功したが、完璧とはいかなかった。

首を跳ねた瞬間、ゴ布林が短い悲鳴をあげたのだ。

仲間に来た悲劇に気づくと、ゴ布林達は混乱しながらも武器や盾を構えた。

「関係はないけどっ——」

ハルバードを構えたまま、全身をしならせるように一回転。重さ、遠心力、腕力、速度。全て乗せたハルバードの切っ先を、ゴ布林達目掛け振り抜く。

鋭い風切り音が響く。

振り抜かれた剛の一閃は、構えられた盾も棍棒も肉も関係なく両断した。赤い血飛沫がゴブリンの傷口から噴き上がる。

唾然とするゴ布林達に、振り抜いた勢いを殺さず回転。もう一度さつきと同じようにハルバードを振り抜き、その数を更に削り切る。

二振りもすれば流石に余裕が出てきたのか、ゴ布林達も襲ってきた。

ハルバードの石突きで目前まで迫っていたゴブリンの眉間を砕き、ふらついた所を体重込めて蹴飛ばす。

邪魔なゴ布林を退けると次のゴ布林が迫っていた。

けれど、まだ距離がある。

なのでハルバードを両手で握りしめ直し、渾身の力を込めて薪割り
の斧のように振りかぶる。

弧を描くように落ちる銀の軌跡は、緑の小鬼の頭を叩き割り赤い噴
水を作り出す。

「カナデちゃんって、冒険者なんだよな……?」

不意にそんな声が聞こえてきた。

忙しいというのにだ。

「そうだけどっ!!」

ゴブリンの頭を切り飛ばしながら答えれば「うわあ」という声が聞こえてくる。

「……本当は、噂に聞くバーサーカーとかって職だったりしない？俺の知ってる冒険者の動きじゃないんだけど」

「んな訳あるくうあああ!!」

ゴブリン殲滅作戦開始から10分程。

沢山のゴブリンに溢れていたそこには、もう身動きしない緑の塊と鉄の臭いがする赤い液体しかなかった。

レベルでも上がったのか、なんか力が強くなった気がするけど……まあ、それはおいておこう。今やる事ではない。

殲滅を確認した後は余韻に浸る事もなく、とつと帰り仕度を進める。何故かと言えば初心者殺しが来る可能性があるからだ。

狩りに使用していた食いつかせるつもりのない撒き餌が殺された以上、その罫の仕掛け人ならぬ仕掛け獣が帰ってくる可能性は非常に高い。生活が掛かった狩人ほとしつこい連中もいないのだから、警戒は緩めない方が良さだろう。

——とは言えだ。

最前線で戦っていたのだから一言くらい労ってくれても良いだろう。

そう思つてサトウカズマを見たけど、また目を逸らしてきた。

「なあ、サトウカズマ。さつきからなんだよ。言いたい事があるならはつきり言え。なんか、こう、気持ち悪いんだよ」

「……別に、何でもないが?」

「なら、こつち見て言えよお」

そう言うとサトウカズマはこちらを向いた。

そしてゆつくり口を開く。

「ゴ立派な、ゴ活躍で……まるでゴリラだな」

……むかあ!誰がゴリラゴリラゴリラか!

流星に腹に据えかねる物があつたので、思い切りボディブローかましてやった。のたうち回ってるが、まったく心が痛まない。ざまあである。けっ。

「……私ら何に巻き込まれてるんだろ。ねえ、テイラー、キース」
「俺に聞くなよ。リーン。俺はな、自慢じゃないが生まれてこの方、彼女どころか女の子と手を繋いだ事もない男だぞ」

「そうだぞ、リーン。俺もテイラーも彼女のかの字もない青春を過ごした男だぞ。アクセルに来るまで、女体すら拜んだ事無かつたんだぞ」

「気持ちわる」

「うぐっ」



殴られたボディを擦りながら帰路を進んでいると、テイラーとキースに肩を叩かれた。

「悪い事は言わねえ、仲直りしろ」

「そうだカズマ。仲直りしろ。あともげろ」

「……分かってるよ。あともげねえわ」

どうせそんな事言われるだろうと思っていたので驚きはない。それにそれは言われなくても俺自身が一番分かっている事だ。こんな不毛な事止めるべきなのは。

そつと背後に視線を向ければリーンに宥められるカナデの姿が見える。さつきはゴブリンの血飛沫を浴びてさながらバーサーカーだったが、リーンの魔法で汚れを落としたカナデは可愛い女の子に戻っていた。

怒りに頬を膨らませてなければ、もつとよかったと思う。

怒ってる理由は分かる。

だからさつきと謝れば済む話なのは分かる。

分かるが……どうにも納得出来ないのだ。

『リーンとお近づきになりたかったら、格好つけるくらいじゃないと駄目だぞ。あれでいて、王子様待ってるタイプだから』

「ああ……まさか俺が、ここまでカナデの眼中に入っていないとは思わなかった。あいつの言動から俺がそういう対象に見られてない事は分かっていたが……リーンをお薦めされるとか流石に笑えない。」

「なあ、カズマ。やっぱお前らデキてる?」

「なにい!?!デキてる!?!」

テイラーの疑問符のついた言葉に、キースが目を見開く。キースは面倒臭いのでスルーし、テイラーに視線を向けた。

「……まあ」

「男女のトラブルかあ……面倒だなあそりや。俺にはそういう経験がないんで、悪いが気持ちは分からん。だが、パーティーを率いるリーダーの先輩としてアドバイスしとくぞ?」

「……リーダーだったっけか?」

「舐めるなよ、見てりや分かる……つても、最初は頭脳担当かと思っただけどな——カズマ、引けなくなる前に謝っとけ」

「分かってる……」

そう返せばテイラーが大きく頷いた。

「分かってるなら良い。冒険者なんて、いつ死んでもおかしくねえ仕事してんだ。実際お前みたいに仲間と仲違いして、そのまま死に別れた奴も俺は知ってる。そういう奴等がどうなったのかもな。あの時ああしてれば、なんて事言いながら朝から酒かつくらうような生活したくなきゃ、さっさと謝ってこい。理由は分かかってんだろ?」

「まあ……」

「よし、ならいけ」

押し出すように背中を押され、仕方なしに振り向いた。

すると膨れ面のカナデと目が合う。

まだ機嫌は悪そうだが、何処か期待するような目に謝罪の余地は残されてそうに見えた。

流石にこれ以上テイラー達に迷惑を掛ける訳にもいかないので一言謝り終わりにしよう——そう思い足を踏み出した時、敵感知スキルに反応があった。

視線をそこへと向ければ山道からこちらに向け、真っ直ぐ駆ける影が見える。

一瞬それが何か分からなかったが、覚えてたの千里眼スキルを使い調べれば、直ぐにそれが何か理解した。

そして自然に、その言葉が口から飛び出していった。

「全員走れっ!!初心者殺しだ!!」

狩人がそこにいたのだ。

その顔に怒りを滲ませた、獣の狩人が。

もう駄目だあーそんな時、それでも勝つのが主人公の役目ですが？

サトウカズマの声で弾かれるように逃げ始めて少し。

まだアクセルのAの字も見えないようなその場所で、怒れる初心者殺しに早くも追い付かれそうになっていた。

悲しいことではあるが、獣の本気に人が敵わないのは当然ではある。レベルなんて物があるこの世界でも、それは変わらない。人は基本的に、食い物にされる弱い存在なのだ。

でもだからと言って、それを受け入れるかどうかはまた別の問題。

ふと見渡して見れば、悲壮な表情を浮かべていても、諦めて走っている者は一人もいない。

皆生き残る為に必死に走っている。

けれど、前を走っていたテイラーが一度振り返り初心者殺しの位置を確認すると、その目の色が雰囲気が変わった。

覚悟を決めたそれに。

「——カズマ！カナデ！リーンを連れて街まで走れ!!ここは俺とキースが食い止める!!ギルドにだって応援連れて戻ってこい!!」

「ちよ、マジかよテイラー!? ——でもまあ、リーダー様の命令なら仕方ねえな!!それによ!一度ヒーローってやつになって見たかったし、丁度良いぜ!!」

覚悟を決めた男達の言葉。

それは力強く、けれど何処か儂い。

本来ならその言葉に、男達の覚悟に、涙の一つでも流してやって任せるべきなのかも知れないのだが——俺の目には別の物に見えていて、もうそれどころでは無かった。

だって降って湧いたような、突然の死亡フラグ乱立なのだ。そつちに気がいってしょうがない。

くつきりはつきり見えるフラグに俺は動揺を隠せない。生まれてこの方色んな経験はしてきたが、こんなにはつきり見える死亡フラグ

は俺も初めてなのだ。こんなに?!こんなに分かるもんなの!?!と心からびっくりしてる。

サトウカズマも思いつきり顔をしかめてる。考えてる事は恐らく同じのようだ。

そんな別の事を気にしてる俺達とは違い、武器を手にした二人にリーンが目を見開く。けれど直ぐ気持ちを切り替えたのか、唇を噛み締め俺とサトウカズマの袖を掴んだ。

「二人とも、私がつ、風の補助魔法かける!だから走って、二人の気持ち、無駄にしないでっ!」

声に含まれた真剣さに、俺は漸く現実に戻された。

フラグがどうのと言ってる場合ではない。

これは現実なのだ。

意味もなく当たり前のように誰かが死ぬ。

そんな残酷な現実なのだ。

リーン達は自分達でも初心者殺しは相手に出来ないと言口にしていく。そんな相手にフルパーティーの半分、メンバーたった二人でどうにか出来る訳がない。

これは死ぬことも計算に入った囮作戦。一人でも多く生き残らせる為を選んで方法。

だから、二人はほぼ確実に死ぬ。

辛うじて助かったとして、五体満足はあり得ない。

このまま、二人に任せてしまえば。

「サトウカズマ!」

名前を呼べば振り向いたサトウカズマと目があつた。

そう長い付き合いではないが、俺のやろうとしてる事が分かったのか眉間にしわが寄つた。

「リーンと先に行け!!」

恐らくそれが最も時間を稼げ、最も生き残る可能性が高い。サトウカズマが何か言おうとしたが、それより速くリーンが口を開いた。

「何言ってるの！駄目だって！二人が——」

「二人に任せたら間違いないで死ぬぞ。絶対応援は間に合わない」「でもっ」

「二人が死ぬだけならまだ良い。最悪なのは、二人を殺したあいつが、逃げる俺達を追い掛けてきた場合だ。そうしたら誰も助からない。アタツカーの俺一人じゃ、初心者殺しの猛攻は押さえられないからな」

リーンは目に涙を浮かべながら、言葉に迷いながらも続けた。

「じゃ、じゃあ！皆で戦えばっ！」

「それが出来ないから、テイラーは撤退を選んだんだ。そうだろ、テイラー」

テイラーに視線を向ければ肩を竦めた。

「初心者殺しの皮は厚い。俺達の武器じゃ刃が通らねえし、魔法抵抗力もあるって話だから無謀過ぎる。勿論弱点もあるが、敵も馬鹿じゃねえんだ。簡単には攻撃させてくれねえだろうさ。戦うのは現実的じゃねえ」

テイラーの言葉にリーンは口を告ぐんだ。

その姿を見れば『一応リーダーだ』と自分の事を紹介してきたテイラーが、ちゃんと仲間から信頼されてその位置にいる事が分かる。

「確かに、カナデちゃんが残ってくれりやかなり時間は稼げる。実際やって見なくちゃ分からねえが、応援が駆けつけるまで間に合う芽も出る。正直いつちまえば助かる。けどな——」

「？なんだよ？」

テイラーの視線がサトウカズマに向いた。

「それを決めるのはカズマの仕事だ。俺は自分のパーティーメンバーでもない奴に、分の悪い賭けに命を張らせるような真似させる気はねえからな」

サトウカズマは頭が回る。

だから俺の言った事を理解して直ぐに頷く———と思っていた

のだが、サトウカズマは首を横に振った。

「サトウカズマ、俺の話聞いてたか?!」

「聞いてたよ、バーサーカーか。つーかお前は基本的に頭馬鹿なんだから、無駄に頭を使って考えるな。どうせ碌な事考えないんだから」「んだと、のらあ!!誰が馬鹿だあ!俺は馬鹿じゃない、エツチな事考える時間が人よりちよつと多いだけだああ!!」

「そういう所が馬鹿なんだよ」

そう吐き捨てたサトウカズマは俺から視線を外し、背後に迫る初心者殺しを見た。

そして何かを考えるよう顎に手を当てブツブツと小さく何かを呟き始めた。

「カズマ、何かあるなら言ってくれねえか?もうじき追いつかれちゃう」

焦りを滲ませたテイラーの声にサトウカズマは人差し指を立てた。

「一つだけ良いか。あいつの弱点知ってるって言ったな?何だ?」

「ん?ああ、初心者殺しのって訳でも無いんだが・・・『目』だよ。目だけは他の獣と変わらない程度の強度しかないらしい。倒した奴の話、目に剣を突き入れたら脳みそまでスルツと貫けたとか言ってたぞ。でも言うは易しってやつだ。暴れる獣の目玉貫くなんて、そんな芸当出来る奴早々いねえ。キースも無理だ」

「・・・」

それを聞いたサトウカズマは俺を見てきた。

悩むような素振りに、俺は直ぐにピンとくる。

だから言ってやった。

「任せろ」

背中を押す、その言葉を。

俺の言葉を聞いたサトウカズマは溜息をつく。

そして頭をガシガシとかいた後、皆の顔を見て言った。

「俺達で倒そう」

らしくない、男らしい顔つきで。

必要最低限の説明が終わった後、全員がそれぞれの役目を果たすために走る。

迫る初心者殺しに真っ先に向かったのはタンクであるティラー。リーンによる補助魔法を受けたティラーの回りには風が吹き荒れる。

「掛かってこいやああああ!!」

剣で盾を打ち鳴らし、吼える。

デコイのスキルも併用されてるせいか、初心者殺しの視線はティラーに集中していく。

目と鼻の先まで初心者殺しが迫ると、ティラーの背後にいたサトウカズマが顔を出した。サトウカズマの手にはクリエイト・アースで作ったサラツサラの土と、リーンが洒落つけ出して買った香水の水溜まり。

『ウインドウブレス』っ!!」

突然吹き荒れた土埃と甘ったるい香水の臭い。

妨害攻撃と受け取った初心者殺しは、その臭いと周囲を囲む土埃に混乱しながらも怒りを込めて吼える。

戦意はまだ高い。

「——シッ!!」

短く息を吐く音と共に空を切る音が鳴る。

キースが矢を放った音だ。

何処に当たったか、こちらから見えないが初心者殺しの意識がそこらに向いたのは感じた。

「貧乏店主さんから教わった、とっておきよ『ボトムレス・スワンプ』!!」

矢が放たれた方向からリーンの声が響く。

それと同時に初心者殺しの足が沼に変わった地面に沈む。

そこにすかさずティラーが怒鳴り声をあげながら剣を振るが、それ

は初心者殺しの剛脚に容易く払われた。

けれど、それで良い。

息を殺したまま、俺は駆ける。

武器を構え、全速力で。

テイラーが体を張り敵の選択肢を減らした。

サトウカズマの機転で視界と嗅覚を封じた。

キースの攻撃で意識を背けさせた。

リーンの魔法で動きを鈍らせた。

お膳立ては十分。

俺がサトウカズマから言われた事は一言。

それをやる為に、それだけの為に。

走る。

『倒していい——任せたぞ』

加速した勢いと全体重も乗せる。

体のバネも腕力も脚力も体力も全部注ぎ込める。

そして後も先も何も考えず、ハルバードの切っ先を初心者殺しのが

ら空きの横顔に——金色に輝く獣の瞳に突き入れた。

何かが潰れるような、何かを砕くような。

そんな得体の知れない音が響き、感触が手に伝わる。

初心者殺しは絶叫をあげ体を暴れさせた。

あまりの激しさに武器を握っていられず吹き飛ばされた。衝撃が肩に走った後、体中に小さい衝撃と痛みが走り回り視界がぐるぐる回る。

漸く視界が定まり体を起こした頃には、ぐったりと横たわる初心者殺しの姿が見えた。

ついでに初心者殺しの生死を確認しているテイラー達の姿も。

「――カナデ!!」

大きな声に振り向けばサトウカズマが駆けてきていた。

何処か不安そうな顔が気になって、大丈夫だとアピールする為に手をあげようとしたのだが、どうにも上手く上がらない。

ちよつと見てみれば腕がダランとしてる。

興奮してるせいで痛みがなくて気づかなかったが、どうやら骨折か骨が外れてるっぽい。

それによく見たら全身擦り傷だらけ。

一言でいうなら赤かった。

「あー、成る程」

これはあんな顔するわ。

呑気にそんな事を思っていると、ふうつと意識が遠退いていった。目の前が暗くなって力が抜ける。

倒れるなあと他人事みたいに思ったけど、何か固い物に引っ掛かって倒れる事はなかった。

それは何処かほんのり暖かくて、良い匂いがした。

そして聞こえた。

最近ずつと側にいる、その声。

近くにいる事が当たり前に思えてきた、その声。

「カナデっ!!」

☆語り継がれてみますかって？ いえいえ、結構。凡人上等です。

かつてアクセルの街に駆け出し冒険者でありながら、初心者殺し討伐という偉業を成し遂げた女戦士がいた。

彼女の名はカナデ。

魔王軍幹部ベルディア討伐の際、最も活躍したとされるサトウカズマパーティーのアタツカーを務めた、類い稀な才能を持つ少女であった。

しかし、その彼女はもう何処にもいない。

初心者殺し討伐という偉業を成し遂げたその時、誰よりも前に出た彼女は敵の攻撃を受け、二度とその目を開けることはなかった……。

——とかはなく、俺は普通に生きていた。

「はい。カナデ、あーんですよ」

「あーん」

そんでめっちゃ甘やかされていた。

プリン旨い。

一度意識を失った後、次に目を開けると見知らぬ天井をぼんやり眺めていた。妙な体の重さを感じながら、訳も分からず周囲を確認すると、俺にのし掛かるように突っ伏して眠る水色の姿を見つける。

叩き起こして話を聞けばサトウカズマが傷だらけの俺をギルドまで運んできたらしい。それで治療する為に控え室の一室を借りて、水色が治癒魔法をかけたのだと。

古傷まで綺麗に治したのだから感謝しろと横柄な態度をとる水色にやんわり感謝していると、サトウカズマ達がやってきた。早速事情を聞こうとしたのだけど、涙目のめぐみんに抱き着かれたり、出来るお姉ちゃんムーヴでダクネスが労いの言葉を掛けてきたりとゴチャゴチャ祭り。

暫くして落ち着いた頃合いを見計らい、サトウカズマから事情の説明がされた。まずはサトウカズマを含めリン達が無事であること。次に初心者殺しは討伐出来たこと。――それと俺の体調のことだ。

水色の治癒魔法で全快したものの疲れ自体はまだ体に残っているらしく、暫くはウェイターの仕事もお休みしろとの事だそうだ。

なのでお言葉に甘えて寮で休養中なのだが・・・日替わりで皆が訪ねてきて、思った以上に甘やかしてくる事態になっていた。

「カナデ、飲み物も飲みますか？」

「ありがと。でも大丈夫。というか、水差しくらい自分で取れるからお構い無く」

今日はめぐみんがやってきていて甲斐甲斐しく世話をしてくれている。昨日は水色で、その前がダクネスだったか。リンとかクリスも顔を見せにきてくれたので暇だけはしてない。

していないのだが・・・。

「めぐみん、サトウカズマは？」

俺の言葉にめぐみんは苦笑した。

「元気にしていますよ。今日もこれから一緒にお仕事に行ってきます。魔道具店の貧乏店主――ウイズっていつて分かりますかね？前に話したリッチーです。そのウイズの所から貰った仕事みたいなのですが、何でもお屋敷にいくとかなんとか」

「そっか。なら良いけど」

あの日からサトウカズマはクエスト漬けの毎日で、こっちに顔を出しにこない。

それは確かに、女子寮だから来づらいのは分かる。連れ込まれるならまだしも、あいつから来るのはちよつと勇気がいるだろう。

けど、ちよつと顔を見せに来るくらい——と思わずにはいられない気持ちもある。別に彼女面するつもりはないが、エッチするくらいの仲なのだし。

「なんか言ってたか？」

「カズマがですか？いえ、特には。まあ、心配そうにはしてましたよ。いつそ自分で見にければ良いと思うのですが・・・なにか意地になつてみたいで」

「ふうん？」

喧嘩したのが尾を引いてて会うのが気まずい、とかなら別に良い。後であいつが折れやすいように水を向けるだけだ。それよりも俺が怪我した事とか、そういうのに変に責任とか感じてなければ良いけど・・・あれは俺の責任でもあるし。

ぼんやりそんな事を考えてると、面白そうにこちらを見てるめぐみんと目があつた。

「——ふふ、カズマはしようがないですね。療養中のカナデに心配させるなんて」

「別に心配してる訳じゃないぞ？サトウカズマなら無茶はしないだろうし——」

『心配するほど、弱くないから大丈夫だろ』ってカズマがカナデのこと言つてましたよ。その癖、私達がカナデの話をしてると、気になるのかずつとソワソワしてましたが。ちやうど、今のカナデみたいに・・・むう。

「別に・・・」

「二人とも素直ではありませんね」

取り込んだ洗濯物を綺麗に畳み終わると、めぐみんはクエストの為、日が茜に染まる前には帰つていった。

やる事もないので同僚から借りた小説を読みながら過ごす。小説は良い。とても時間潰しになる。尤も同僚はラブロマンス好きなので、そういう系統ばかり読む羽目にはなつてしまったが。

はあ、冒険譚とか戦記物とか読みたい。

私的にはラブロマンスとかはそんな————なにい!!そんなつ、

急展開過ぎるぞ!! ジョナサンが兄妹だったなんて!! ユリコは、ユリコはどうなるの!? 続き、続き・・・同僚おお!! ユリ×ジョナの続きが無いぞおお!!

——え、買ってないの!? 面白くなかったから? 馬鹿野郎! これからだろうが! 俺買ってくるけど!

「ユリコおお、良かったなあああ」

なんやかんや休憩中だった同僚にユリ×ジョナの続きを買ってきて貰い読書に耽ること暫く。帰って来た同僚がイビキをかき始めた辺りで漸く全巻読み終えた。

魔神が降臨して世界の四分の一が海に沈んだり、百年前にワープしてご先祖様と共闘し悪魔王と聖戦したり、魔法大神官ジャツジメントの人類淘汰計画にジョナサンが巻き込まれたりした辺り、急展開過ぎてついてくのが大変だったが何とか読み終えた。

ラストはすっかり忘れさられていた兄妹設定が二人の邪魔をするんだけど、結局血が繋がっていない事が判明して結婚して終わるといふ、世界と時空を股にかけて壮大な冒険の終わりとしてはなんとも言えない尻窄みな話幕切れだったが・・・トータルとして見ると割りと面白かったので良しと思う。

何より頑張ったユリコが幸せになるのが良かった。ジョナサンは一生ユリコを幸せにする製造機であって欲しい。ほんと、あいつ基本何もしていないから、それくらいはして欲しい——。

「んがっ!!・・・があ、んが、ギギギギギ」

心の中で感想を言っていたら、同僚がいつものように歯軋りし始めた。同僚は大体決まった時間にこうなる。これが始まるのはもう夜

も更けた頃なので、俺も眠った方が良い時間ということだ。

読み終えた本を棚にしまい、抱いていた枕を定位置に置き直す。同僚を起こさないように静かに。掛け布団も軽く敷き直したら、手元を照らしていたランプの火を落とし、小説の余韻に浸りながら横になった。

頭に浮かぶのは波乱万丈過ぎるユリコの物語。

紆余曲折あったものの望んだ相手と幸せになった逞し過ぎるユリコ。ユリコが二人いたら、きつと世界は滅んでいただろう。やべえなユリコ。

「……そう言えば、サトウカズマ達は今頃仕事中かあ」

ふと、皆の顔が浮かんだ。

調子に乗って暴走する水色とか、直ぐに最強魔法をぶっぱしようとする好戦的なめぐみんとか、敵と認識するやいなや見境なく突撃するドエムネスとか。

そんな三人をなんやかんや面倒見ちやう、スケベな視線がデフォのサトウカズマとか。

「泊まりの仕事って言ってたもんなあ」

泊まり。

泊まりかあ。

泊まり……。

「……あいつ、誰かに手だしたりしないよな」

大丈夫か、あいつ。

よく考えたら俺は一週間は会ってない。

つまりそれは、あいつが性処理出来てない日数と比例する筈だ。

俺とおいたする前、禁欲生活を営んでいた頃のあいつなら大丈夫だろう。何とかしただろう。他に手段がないし。水色では立たないと悲しげに言ってたし。

でも今はどうなんだ。

エツチの味を覚えたエロ猿なサトウカズマは。

穴があれば良いとか言うのではないか。
少なくともサトウカズマはスケベだ。

人よりちよつぱり、ほんのちよつぱり性欲の強い俺が満足出来るまで付き合えるくらいのスケベ力がある。

そんなサトウカズマが、性格は別として見た目のいいあいつらを前に我慢出来るのだろうか。

いや、我慢出来る筈がない。

「……でもまあ、いつか」

だからと言ってどうという事もないか。

サトウカズマが誰と宜しくしようとか何か変わる訳でもない。性処理だけ付き合ってくれるなら——くれるのか？

よく考えたら、もし仮にサトウカズマが誰かとそうなったとしたら、もう俺の相手はしなくなるのではないだろうか。俺と違ってめぐみんもダクネスもあんなにただけど貞操観念はしっかりあるみたいだし、一発やったら最後責任を取らせて結婚とか……そこまでいかなくても恋人くらいはあり得るのではないか。

何かとてきとーな水色は兎も角として。

「……」

何となく枕を抱いてみた。

ちよつと落ち着く。

ぎゅつとすると、少しだけサトウカズマの匂いがした。

「ちゃんと洗ったのになあ」

サトウカズマとここでエッチした次の日。

シーツやら枕やらに匂いが染み付いてえらい事になった。それこそ何かと寛容な同僚が、部屋に入ってくるなりぶん殴ってくるレベル。

だから二人でめっちゃ洗濯して、掃除して、消臭剤とか撒いて——

もう一回抱き締めた。

ぎゅつとすると、やっぱりサトウカズマの匂いがする。

良い匂いかと聞かれればちよつと違うけど、嗅いでると落ち着く好

きな匂い。

「サトウカズマあ・・・」

匂いを嗅ぎながらそつと胸に手を当てた。

覆うように当てた掌に突起の感触が伝わる。

サトウカズマの触り方を思い出しながら揉んでいると、先つぽがど
んどん敏感になっていくのが分かる。それが服に擦れるだけで甘い
刺激が生まれる。

きゅつとそれを摘まめば、痺れるような刺激が全身に走っていたつ
た。

片方の手を胸から離しアソコに触れる。

パンツの上から谷間をなぞれば、うっすらと濡れてきていた。繰り
返しなぞれば、湿りは更に広がってく。

堪らなくなつてパンツをズラして指を潜らせた。

ニユプニユプと指が奥へと沈んでいく。

奥へ、奥へと沈む指を、膣壁がきゅうきゅうと締め付ける。何かを
欲しがるように。

根元まで入れた二本を外へと引き出す。

そしてもう一度奥へと押し入れる。

ぐちゅぐちゅ。

そんな音が鼓膜を揺らす。

自然と息が荒くなる。

何度も何度も、指を出し入れしていく。

時に広げたり、折り曲げたり、壁を押しながら。

サトウカズマの指の感触を、サトウカズマのそれを思い浮かべなが
ら。

何度も。

「かずまあ、かずまあ」

お腹の下の所が熱くなってきた。

いつもサトウカズマのそれを受け入れるモノが、下へと下がってき
てるのが分かる。

もうすぐ、あの感覚がくるのも。

「かずまあ——ツツツんあ」

サトウカズマの力りがいつも擦ってくる所を指で思い切り押し、胸の突起を強くつねる。

瞬間、腰の所から、胸の先から思わず身を振ってしまうような大きな快感が走ってきた。体が大きくビクつき、股の所から暖かい物が溢れる。

休養の為、自慰も控えていた。

一週間ぶりのオナニーは気持ち良かった。

でも、何故か物足りなかった。

ふとタケシくんの事を思い出したけど、何だか使う気にはなれなくて、そのまま少し余韻に浸ってぼーっとする。

「……寝よ」

あそこはまだ熱い。

でも気分が萎えてしまった。

だから枕元に置いてあるタオルで濡れた所を拭き、ささつと着替えてまた横になる。

そして同僚のいびきを聞きながら目を瞑った。

胸の中にある、よく分からないモヤモヤする物を感じながら。

その日はいつもと違って、少しだけ寝付けなかった。

お引越しするらしいですね、おめでとうございませす。良かったですね——え、俺もですか？

相も変わらず陰鬱とした雲が漂い、寒々とした風が吹きざさむ冬の日の今日この頃。

水色達に急かされ色々着込まされた俺は、皆に手を引かれとある屋敷の前に来ていた。

「ふふん！今日からここが、私達のお家よ！カナデ！」

そう言つて屋敷を見せつけるように両手を広げた水色は、ダクネスに何かを催促するような視線を送る。

ダクネスは頬を朱に染めながら「ジャジャーン……」とちつちやな声で効果音をつけた。

「うん、意味が分からん」

「カナデ、ここからは私が説明します。実はですね、この間話していた仕事で——」

めぐみんが言うことにや。

先日聞いていた仕事の色々トラブルもあつたものの上手くいき、屋敷を安く借りられる事が決まったそうだ。

おかしな条件のオマケつきらしいが。

「ふうん、成る程な。サトウカズマ、冬越えの心配してたもんな。良かったな」

「はい。……つて、良かったなではありません！なんで他人事なんですか？カナデも一緒に住むのですよ」

「そうなの？」

「そうですよ。カナデの部屋の掃除は済ませてありますよ。後は荷物を入れるだけです。……それとも、一緒に住むのは嫌なのですか？」

めぐみんが捨てられた子犬みたいな目で見てきた。

女の子に対して特別好意は抱かない俺だが、これには胸がキュンキュンしてしまう。可愛い。撫でたい。

「そうじゃないって。でもな、俺何もしてないし」

「何を言ってるんですか。水くさいですね、カナデは。こういうのは持ちつ持たれつですよ。仲間じゃないですか、寂しい事言わないで下さい」

むくれるめぐみんに水色が「そうよ」と続いた。

「そんな細かい事気にしちゃ駄目よ。寮のお部屋よりずっと良いお部屋を用意してあるんだから、遠慮なんてしないで引越しちゃいなさいな。それで今日は皆揃ってお引越祝い祝いの宴会するんだから！最高級のシユワシユワでパーッとやりましょう！」

「アクアの何処にそんな金があるんだ・・・まあ、そういう事だ。兎も角、部屋を一度見てきたらどうだ。それから決めても遅くはないだろう？」

別に悪い話ではない。

寮に留まりたい特別な理由もないし、同僚も常々出てけー出てけーと呪いの言葉を吐いてくるし。

でも、少しだけ気がかりな事があった。

まだ仲直り出来てないサトウカズマの事だ。

別に拒否されるとも思わないけど、もしかしたら良い顔されないかも知れない。

どう聞こうか迷っていると「大丈夫ですよ」とめぐみんが言ってきた。

「カズマの事を心配してるなら大丈夫です。さっ、部屋を見に行きますよ」

「あつ、ととっ!?押すな押すな、分かったから！——はあ、まったくめぐみんに背中を押され屋敷の門を潜る。

元々貴族の屋敷だけあって庭から立派だった。

綺麗に並べられた石畳とそれを挟むよう左右に置かれた植木は、門から真っ直ぐ屋敷に伸びている。門と屋敷の丁度中央辺りには噴水があつて、その近くには大層な花壇も。どれも手入れが行き届いていないのでちよつとあれだが、ちゃんとすればさぞ見栄えするだろう。

重厚感のある扉を開け屋敷の中へ入ると、石造りの屋敷らしい灰色が目に入ってきた。綺麗に重ねられた石の壁は安心感に満ちていて、

飴色に染まる木の扉や柱は暖かみが漂っている。置かれた調度品もそれらに合わせるように落ち着いた色合いが揃っていて目に優しい。めぐみんに引きずられるように屋敷内を見て回る。

暖炉のある部屋やら、台所やら、トイレやら、お風呂やら何やら沢山。

グルグルと色々見て回った後は、俺に用意した部屋だとある一室に案内された。大きめのベッドが置かれたその一室にはダンスや机など最低限の家具が揃っていて、それこそ荷物を持ち込んだらそのまま住めそうな状態にされていた。掃除したてらしくどこもピカピカに輝いてる。クモの巣の一つや二つくらいと探したが埃すら見当たらない。ついでにベッドもフカフカだった。

めぐみん達に聞くと掃除は大体水色がやったらしい。

素直に褒めてあげたら鼻が際限なく高くなっていった。

放っておくと面倒臭くなりそうだったので、頃合いを見計らって高くなったソレをへし折っておいたが。

それで結局断る理由が見つからず、俺は引越す事になった。

寮を出る旨を職場に伝えると、前に俺を引き留めた偉い人が出てきて「仕事も辞めちゃうのか!？」と涙目で迫られた。これを機に冒険者としての活動を優先しようと思っていたのだが、提示された時給がかなり良かったので暇な時は顔を出す事にした。

こんなテキトーな雇用形態で良いのか?と思わない事もないが、偉い人がそう言うならそれで良いのだろう。気にしない事にする。

同室だった同僚に出ていく旨を同じように伝えると「やつとか、おめどう」とお腹を優しく撫でられた。

寿退社でもないし子供を身籠った訳でもない事を伝えれば「あのへタレが」と呆れた顔で溜息を吐かれる。何の事かと尋ねたが教えてくれず、代わりに「何かあったら頼りにきな」と頭を撫でられた。

同僚には色々とお世話になったので、感謝の言葉と一緒にローション付きで相棒のタケシくんを譲っておいた。俺の宝物だからさぞ喜ぶ事だろう——とか思ってたけど、同僚からは本気ビンタしか貰えなかった。解せぬ。

それからめぐみん達に手伝って貰いお引越し。

荷物はそんなに無かったが、急な話だったのでバタバタしまくり――全部が終わったのは日が沈み出し頃だった。

「おーい、誰かいないかあー」

片付けを済ませ汗でも流そうかと皆で話していると、サトウカズマの声が玄関の方から響いてきた。買い出しに行っていると聞いているので荷物運びを手伝うため顔を覗かせれば、大荷物を抱えるサトウカズマが玄関の所でへたり込んでる。

「おかえりなさい、カズマ。一杯買ってきましたね。はっ！お肉がこんなに！あわわわ!!」

「カズマ！これ凄い良いお酒じゃない！シユワシユワも一杯！おつまみまで！よっ、カズマ様のお大尽！私一生ついてくわ！ふふふふー」
「アクア、酒ばかり持つていくな！荷物は他にもあるんだぞ！まったく。台所には私達で運んでおくから、カズマは少し休んでいろ――」
「カナデ、カズマを頼む」

荷物を抱えた皆は俺とサトウカズマをおいて台所へと向かった。

ふとサトウカズマを見れば目が合う。

「・・・あつ、えつと、おかえり？」

「た、ただいま」

思わず出た言葉にサトウカズマが苦笑混じりに返事を返してくれる。嫌な顔されたり、無視されるかも知れないと思っていたから、いつものサトウカズマらしい反応が素直に嬉しい。

それから少しサトウカズマは黙っていたけど、「この間は悪かった」と小さく呟いてきた。

偉そうに許すと言う気にもなれず、なんて返そうか悩んだが取り敢えず頷いておくだけにする。

「見舞い、いかなくて悪かった」

「良いって、別に。忙しかったんだろ？」

「……まあ」

俺の言葉にサトウカズマはそっぽを向いて頬をかいた。

その横顔が少しだけ憎たらしく見え、悪戯に隙だらけの頬つぺにちゅーしてやる。

びっくりして振り向いたサトウカズマとまた目が合った。

「——っ!?お、おい!!なにすんだ、いきなり!」

「うるさいわ、嘘つきめが。お前がそういう顔するのは誤魔化す時だけだって知ってるんだからな。……でもまあ、そういう事にしといてやる。この間は心配かけてごめん。それと運んでくれてありがとう」と

「お、おう……あのな——」

サトウカズマが何か言いかけた所で「カズマーお風呂に入っちゃいなさいよー。アクア様が特別に用意してあげるわ!」と元気な水色の声が響いてきた。

お酒の件で機嫌が良いのだろう。声が楽しげだ。

「だって。取り敢えず入ってこいよ」

「そうする。——ったく、あの駄女神ほんと間が悪いな……」

頭を乱暴にかいたサトウカズマは立ち上がり風呂場へと歩き出す

——が、途中で立ち止まった。

どうしたのかと思えばこっちへ振り返ってくる。

「どうした?」

「いや、別に大した事じゃ……その、おかえり」

「……あ、ああ。ただいま」

風呂場へ向かうサトウカズマの背中を見ながら、俺の心臓は妙に高鳴っていた。いつものギャップ萌えかと思っただけど……今胸の所にあるそれは、少しだけ違うような気もしてる。ドキドキというより、ポカポカしてる感じなのだ。

「ただいま、か」

随分と言つて無かったその言葉が。

特別言いたかった訳でもないその言葉が。

何故だか今は、とても心地好かった。

「カナデー！手が空いたら準備手伝って下さい！」

「はいよー」

めぐみんの声に、俺は足を踏み出した。

いつもより軽い足取りで。

◇◇◇

シユルシユルシユル、と。

銀の輝きが淀みのない旋律を響かせながら、色とりどりの皮のベールを宙に舞わせる。

スタタタタンツ、と。

銀の軌跡がリズムカルな音を立てながら、均等に刻まれた瑞々しい野菜が転がっていく。

魔法のような銀の煌めきと、耳に楽しい音が奏でられるそこは音楽会場ではなく台所。行われているのは調理。

指揮者ばりに腕を振るうのは、ギルドのコックも泣き出すような鬼の如き包丁捌きを見せるご機嫌なカナデ。

そんな鼻歌混じりに料理を量産していくカナデを横目に、私とダクネスはほっと胸を撫で下ろしました。

「仲直り出来たようですね」

「だから言っただろう。二人なら大丈夫だと」

カナデが怪我をしてから何処なくギクシヤクしていた二人。様子を見ていればお互いがお互いを心配してるようなので、ちゃんと話す機会を作れば大丈夫だとは思っていました。けれど、やっぱり実際会わせるまで不安はあって……。

「~~~~ん、よし♪……?どした?」

「いえ、何でもありません」

でもまあ今となっては、それが杞憂だったのはよく分かりました。仲良し、大変結構です。

「それにしても、カナデは料理出来たんですね？」

何となしに尋ねるとダクネスも頷きます。

するとカナデから「まあなあ」と間延びした返事が返ってきました。「ここに来る前はずっと自炊してたからな。バイトでも人足りない時とかたまに厨房入ったりしてたから——それに、まあ、料理する事は好きだし、自然となあ」

「そうなんですなあ……」

「ほ、ほう……」

私とダクネスの視線は釣られるようにそこへと行きました。話しながらだと言うのに尚も高速で動く、野菜の下拵えを電光石火と済ませていくカナデの手を。もうそれは芸術の域に達しているといつて良いほど見事な手つきで、見るなど言う方が無理というものでした。

「ダクネス、これは自然と身に付く物なのでしょいか」

「これが自然に身に付くなら、世の中に料理屋など存在しないさ。というか、あの口ぶりからするとスキルですらなさそうなんだが……」
そつとダクネスに耳打ちすればどうやら私の意見に同意なようです。料理スキル無しでこれなら、料理スキルなんて取った日にどうなるのでしょうか。未恐ろしいものを感じます。

カナデは男みたいな話し方をしますが、存外女の子らしい技術を沢山持っています。以前服が破れてしまった時は継布までして綺麗に縫ってくれましたし、カエルの粘液まみれになった服を洗濯してくれた事もあります。ウェイトレスとして働いてる姿を見ると掃除もそつなくこなしていました。

だから正直引つ越しの時、色々指摘されるのではないかとヒヤヒヤしていたくらいなのです。

「時々思うのですが、カズマ達の故郷ってなんなんでしょう。スキルを多用しない文化みたいですが、色んな事を出来たり知ってますし。聞くところによると、カズマは何十人も冒険者を纏めあげていた経歴があるとか」

「それは私も思う。もしや、カズマ達の故郷、皆が皆こんな感じなのだろうか？」

二人でそつとカナデを見ると瞬く間に料理が増えていきます。いつの間にか私達が下拵えしていた食材すら切り分けられ香辛料を振り掛けられ火に掛けられています。

というか、手伝う事が消失しました。

「・・・取り敢えず、運ぶか?」

「なんか今日は運んでばかりな気がします」

「そういう日もあるさ——」

料理の皿を手にした所でアクアの大声が響いてきました。

「皆ー!! 暇な人がいたらこつち来て手伝って欲しーんですけどー!! 一人でお皿並べると寂しーんですけどー!!」

ここまではつきり寂しいと言われると、何とも言えないものがあります。ダクネスもそう思ったのか苦笑いです。

「それじゃ私は料理を運ぶとしよう。めぐみんは調理場の片付け—— は殆んど終わってるな。うん。アクアの手伝いでもしてくれ」

「分かりました。というか、どうしてあの調理速度で片付けまで平行して出来るんでしょうか・・・」

「いちいち突っ込んでいると疲れるぞ。そういう物だと思っんだ」

ついに投げましたね、ダクネス。

まあ、考えた所で徒労に終わりそうですし、それはそれで別に良いのですが。

それからカナデにアクアの元に行く事を一言伝えてから、私とダクネスは盛り付けられた料理を手にリビングへと向かいました。

途中鼻を擽る良い匂いに振り返ると、料理を味見するカナデの横顔が見えました。

本当に楽しそうな表情を浮かべる、その横顔が。

☆お風呂でしても良いじゃない。掃除もちやんとすましておきますし。

引っ越しパーティーも終わりを迎えた夜。

騒ぎ疲れて眠ってしまった水色とめぐみんをダクネスに任せ、俺とサトウカズマは散らかる食器を後片付けしていた。

「カナデ、これで食器は全部だ」

「おう、ありがとな。そっち置いといてくれ」

ガチャン、と食器の山が近くのテーブルに置かれた。

「洗い物手伝うか？」

「向こうは片付いたのか？」

「終わってる」

「そっか、ならよろしく」

それならばと、サトウカズマに洗い終えた食器の乾拭きをお願いし、俺はそのまま洗い物を続けた。

隣からきゅきゅと気持ちの良い音が鳴り始める。

「今度水切り棚買わないとなあ」

「水切り棚？」

「なんで知らないんだよ。ニートだったんだろ？手伝いくらいした事ないのか？」

「ニートは働かないからニートなんだよ」

「成る程、それもそうか——ほい」

泡を流した食器重ねてを差し出すと、直ぐにサトウカズマが持つていった。

またきゅきゅと音が鳴る。

「水切り棚ってあれだよ、あみあみのヤツ」

「あみあみ？…ああ、分かった。あれか。でもこの世界にあんのか、あれ？」

「ギルドで見た。っても木製のやつだけど」

「へえ…後で買っとく」

「良いよ、自分で買うから。多分俺が一番使う事になるだろうし、色々みたいから——ほい、これラスト」

さつきと同じように食器を差し出した。けれど、今度は中々持つていつてくれない。どうしたのかと見れば、サトウカズマがじつとこつちを見ていた。

「なんだよ」

「お前こそ財布閉じとけ。俺が買う、いいな。明日にでも見に行くぞ」
「そう？サトウカズマが良いなら、それで良いけどさ。じゃあ明日いこーな」

「おう。明日な」

約束を取り付けた所でサトウカズマが俺の手から食器を持つていき、ようやく手の空いた俺はシンク回りを軽く掃除する。そう時間も掛からずに終わり手が空いたので、サトウカズマの食器拭きに参加。きゅきゅと音を鳴らせながら一緒に磨く。

「そういえば、夕飯大丈夫だったか？」

何となく気になったそれを口にする。

サトウカズマが怪訝そうに片眉をあげた。

「なんの事だよ？」

「なんの事って、ほら、味とか、嫌いな物だとか。そういう事。今日は全部俺がテキトーに作っちゃったからな。希望があつたりしたら聞くぞ。少しだけな」

好みというのは誰にでもある。

全部が全部合わせてはやれないけど、どうしてもこれだけという物があるなら、其ぐらいは配慮してやる気はあるのだ。食べれない物を出されても可哀想だし。

「少しかよ・・・俺は別にないな。普通に、その、旨かったし・・・」
「なら良いけどさ」

サトウカズマが一番好き嫌いありそうだったので、その言葉は嬉しい誤算だ。トンチンカンな嫌いなもの無さそうだし、献立で変に頭を悩ませずに済みそう。

適当な所でサトウカズマに食器を拭くのを任せ、綺麗に拭き終えた

食器を棚にしまっていく。

それからそう時間も掛からず、パーティーの片付けは終わった。

後はお風呂にでも入って寝るだけかなあ。

そうぼんやり考えながらエプロンを外していると、サトウカズマが後ろからくつついてきた。

「なんだよ、いきなり。びっくりするだろうが」

「びっくりしてるようには見えないんだが」

うん、まあ、そんなに。

近寄ってくる気配は感じてたし。

どうしようかなあと思っていると、首のところにサトウカズマが顔を埋めてきた。

熱い吐息がかかり、背筋がゾクゾクしてくる。

「サトウカズマ？んツツ．．．！」

首筋を軽く食まれた。

突然の刺激に思わず声が漏れてしまう。

「んっ、ちょ、駄目だつて、こんな所でっ、あう」

サトウカズマは首筋をしゃぶるように食んでくる。

ぴちやぴちやとエツちな音が響き、溢れた唾液が首を伝って背中や胸に落ちていく。生温い唾液の落ちる触感にまたゾクゾクしてしまう。

「カナデ——」

「あっ、ん」

サトウカズマに顔を振り向かされ、キスを落とされた。

舌こそ入れられなかったけど、思い切り吸われてしまい興奮で頭がぼーっとしてくる。

「——っふう、あ」

サトウカズマの唇と俺の唇に唾液の糸が伝う。

それを見たサトウカズマがまたキスをしてきた。

今度は舌を絡めるディープなキス。

ぐちゅぐちゅと音が響く。

舐められる度に、絡み合う度に。

心臓の鼓動が加速していく。

意識が遠くなっていく。

ふいに唇が離れた。

サトウカズマと視線が重なる。

反省の色は見えない。

「——ん、もう、らめだつて、言ったのに。二人は寝てるかも知れないけど、ダクネスがいるんだからなあ」

「・・・それは、ちよつと頭から抜けてた」

「ばあか」

そうはいっても、もう抵抗とかする気もないんだけど。

一週間ぶりのキスの刺激が強すぎて頭がぼーつとして力はでないし、何よりずっとサトウカズマとこれがしたかったから。

大人しく抱きしめられていると、サトウカズマが俺の髪に顔を埋めてくる。

「そう言えば、まだ風呂入ってなかったよな。カナデは」

「うん。お前が風呂あがって直ぐパーティー始めたからな。本当はお前が帰ってくる前に入るつもりだったんだけど、時間がなくて・・・」

俺の言葉にサトウカズマが唾を飲んだ。

「・・・なら、一緒に、入るか」

緊張した声に思わず笑ってしまう。

今更拒否する訳もないのに、と。

俺はサトウカズマに体重を預け、抱きしめてくる手を握る。そうしたらサトウカズマの抱き締める力が強くなった。

「うん、入ろ」

そう返した言葉に、キスの返事が返ってきた。

お風呂場に辿り着くとサトウカズマは、まず最初に湯船近くにある

箱みたいなものに触れた。不思議に思って聞けば魔力でお湯を沸かす給湯器的な魔道具らしい。ギルドでも見たことないから、きつとお高い物なのだろう。

台所にその小型版がある事を考えると、ここを安く借り入れられたサトウカズマは相当運が良いと思う。

冷めたお湯を入れ直している間は体を洗う。

勿論洗いつこしながら。

「あ、あう、ちよ、ちゃんと洗えよ」

「んー？んー。んん？」

「ごまかすツツ、んにゃ」

サトウカズマはおっぱいばかり触ってくる。

一応洗うという名目があるのにお構い無し。

揉んだり、つねったり、擦ったり、本当に自由だ。

俺は一応洗ってやってるのに。

「カナデ、少し大きくなってないか？」

「んっ、ちよつとだけな。でもブラのサイズ変える程じゃな——んんッ。こらあ」

急に乳首を強目につねられ、肩がビクついてしまう。

「カナデ」

「あつ、もう、っん」

求めるような視線に、俺は目を瞑る。

すると少しだけ突き出した唇に柔らかいものが触れた。

少し湿ったそれは何度かつつくように触れた後、強く押し付けてるように触れてくる。温かく濡れた物が口の中に入ってくる。それは自由に口の中を撫でていき、口に溜まってしまった唾液を絡めとっていく。

一方的にやられるのが少しだけ恥ずかしくて身を振ったけど、体はサトウカズマに捕まってしまつてて動けない。

「やつ、あ、んん」

「ん、カナデ」

甘い声と口の中を蹂躪する刺激にまたぼーつとしてくる。蕩けそ

う、そう思ってしまった。

キスをされながらゆつくりと体を倒される。

少しヒンヤリする床に背中が触れたけど、それに驚きはしない。

今はサトウカズマの体温を感じるだけで、いっぱいいっぱいだから。

濡れた指の感触がお腹を撫でた。

それは少しずつ下に向かっていって太股を撫でる。

優しく、擦るように。

「――あつ、かずま、そこはらめ」

サトウカズマの指がアソコの側を撫でてきて、思わずそんな言葉が出てしまう。

別に本当に嫌だった訳じゃない。心の準備が出来てなかっただけで。

だから寧ろ触って欲しかったんだけど――

「分かってる。洗ってるだけだからな」

――そんな事を言ってきた。

目を開けて見れば、凄く意地悪そうなサトウカズマの顔がそこにあっただ。

それからずっと。

サトウカズマは刺激に弱い所を避けて撫で回し続けてきた。乳房には触れても乳首には触れず、太股を撫でてでも直ぐ側にある濡れた秘部には触れない。

ただずっと、そこ以外の場所を撫で回してきたのだ。

「やらあ、やあ、しゃとうかずゆまつ」

そのせいなのか、触られないそこが異様に疼いしまう。

なのにサトウカズマは触れてくれない。

自分で慰めようとしたけど、腕を押さえられてしまった。

「洗ってるだけだからな」

サトウカズマの口から出るのはそればかり。

思わずむっとして睨みつけてしまう。

「うう……いじわるう」

「——つつーそ、そんな顔するなよ馬鹿っ」

まさぐつていた手を自分の鼻に当て、サトウカズマはそっぽを向いてしまった。

指の間から赤い物が見えた気がする。

「?らいじょーぶ?のぼせた?」

「だっ、大丈夫だっって『ヒール』」

治療魔法使うなら大丈夫じゃないんじゃないか?と思ったけど、そんな考え一瞬で飛ぶ。突然甘い痺れが腰元から走ってきて、頭が真っ白になったのだ。

「気持ち良かったか、カナデ」

そんな声に視線を向けると、サトウカズマの指が股の所へ伸びていた。指は臍ではなくその入り口近く、少し膨らんだ突起を撫でていた。

「そこはあ、らめえ」

止めようと声を掛けたけど、撫でていたサトウカズマの指はそれを挟むように動いていつてしまう。そしてまたぎゅつと締め付けられ、さつき感じた刺激が腰元から一気に走ってきた。

「あああああん!!」

大きく体が跳ねた後、腰から力が抜けきってしまう。

目がチカチカして頭がクラクラする。

でも凄く気持ちが良い。

いった余韻にぼーつとしてると体を持ち上げられた。

俗にいうお姫様だっこ、なんだか照れ臭い。

「おふろ、はいりゆの・・・?」

今は起き上がってられない。

御風呂に入っけいられる元気もない。

だから聞いたんだけど、サトウカズマは笑顔を見せた。

「大丈夫、俺が支えておいてやるから」

それならと頷いてみせた。

チャポ、と体がお湯に沈む。

程よく暖められたお風呂は心地良かった。

サトウカズマは壁際に腰掛け、俺をヌイグルミのように抱える。

「ふう・・・きもちいい」

「ああ、ちよつと前の馬小屋生活が嘘みたいだ」

「ふふ、だよなあ。おまえら、たいへんだったもんなあー。ごめんな、おればかりらしくしてて」

「良いんだよ、そういうのは・・・。それにな、アクア達がお前みたいにやろうとしても、多分追い出されてると思うぞ」

「そーか？」

「そうだろ・・・どれだけ俺がやきもきしたと・・・いや、何でもない」
そんな話をしていると雲が晴れたのか月光が窓から差し込んできた。ステンドグラスの窓から溢れた光は、湯船や湯気を色とりどりに染めるあげる。

それはなんとも言えない綺麗な光景で、思わず溜息が零れてしまう。

「かずまの運がいいのって、ほんとなのな」

「どうだろうなあ・・・その割には苦労してる気がする。まあ、それだけでもないけど・・・カナデ」

「・・・ん？うん、ん」

唇がまた重なった。

触れた場所が熱くて、甘い。

「かずま、きすばっかり」

「何だよ・・・嫌か？」

「んーん、すき。かずまとのきす、だいすき。ずっとしてたい——
ん」

言葉を塞がれるように唇がまた重なる。

長いキスの後、唇を離れたサトウカズマはじつと俺の目を見つめてきた。

火傷しそうな熱の籠ったその目で。

サトウカズマの目を見つめ返していたら、ぐりつと硬い物が割れ目に押し当てられた。それはつぶつぶと入り口を刺激して、中へと押し入ろうとしている。

「カナデ、良いか？」

「いいぞ——でもこうかいするなよ？すごいたまってるから、いっぱいつきあってもらうぞ」

そう言ったらまたぎゅっと抱き締められた。

「それ俺の台詞な。今日は寝かさないから」

「たまってるのか？・・・ふうん、そっかあ」

「なんだよ？」

「べつにい・・・それより、ねえ、しよ？」

ぐつと体重を掛ければ、それが俺の中に潜り込んできた。サトウカズマが変な声をあげる。

「つたく、この変態、少しはっ！おう!?」

「はあああっ！かずまつ、すごい、いい、おく、とどいて、きもちいい！」

「いきなりエンジンかけんじゃねえよ！あ、やばいっ」

「んんんんツツツツ！ああん!!でてる！いっばい！」

それから沢山サトウカズマとエツチした。

湯船につかってやってると直ぐ頭がぼーつとしてしまうのでたまに洗い場に戻ってエツチして、寒くなったらまた湯船に戻ってエツチして。そうして何度も場所を変えて体位を変えて交じりあった。

朝日がお風呂場に差し込むまで。

たくさん。

*私の名前は同僚じゃないと言っている&俺の友人の恋路が茨なのだが

「同僚ーこっち手伝ってー」

ふいに聞こえた声に、私はテーブルを拭く手を止める。

声の方へと視線を向ければ、同僚の一人がニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべていた。

「はあ、まったく。ぞつとしないから変な呼び方止めて。ピンタくれるわよ」

「あはは、ごめんごめん。ていうか、そんなに怒らなくても……でもさ、そういう割には元気ないじゃない？だからね？」

「まさか。せいせいしてるわ」

「そう〜？」

疑うような眼差しを向けてくる同僚からテーブルへ視線を戻し、私は再び布巾を手に掃除を始めた。

あの子が初めて私の前に現れた、あの時を思い出しながら。

「今日だけですか？」

すつとんきような声をあげた私にルナ先輩は「そうなのよ」と申し訳なさそうに言った。

「田舎から冒険者になりたくてやってきた子がいるのだけど、登録料も持つてなくて……それでチーフに相談したら払えなかった分は働いて返せば良いつて事になってね？面倒みて貰えないかしら？」

ルナ先輩には新人の頃お世話になっている。

だからそのお願いを聞くのは良かったのだけど、少しだけ気に入らなかつた。

「追い返せば良くないですか？」

「まあ、そうなんだけど……」

言葉を濁したルナ先輩に嫌な物を感じた。

手招きされ耳を近づければ「ご隠居が気に入ったみたいなのよ」と小さな声で告げられた。

その言葉に思わず「うへえ」と声が漏れる。

ご隠居と呼ばれる人はギルド職員の一人なのだが、少し微妙な立ち位置の老人だ。職員という事になっているが基本的に仕事はせず、いつも端っこの方でお茶を啜ってる。お給料は貰ってる様子はないし、特に何かしてくるような人でもない。基本無害なのだが、時々まこうして気に入った人物の肩を持ち何かしらの便宜をはかったりしてくるのだ。

老人の戯言だからと流せれば良いのだが、このご隠居権限だけはある。聞いた話によるとご隠居は元凄腕の冒険者で、当時一職員だったギルド長は返せないだけの恩があつて頭があがらないのだとか。

まあ、それもあくまで噂なので、本当の所は分からないが。

「何でも、生き別れた妹にそっくりだからって」

「私が聞いただけでも、妹十人くらいいるんですけど」

「お兄さんと弟さんもいっぱいいたものね」

それから直ぐルナ先輩はその子を連れてきた。

だぼつく男物の服を着こんだ、背は私より一回り小さい、目をくりくりさせた黒髪の可愛い女の子を。

ルナ先輩から私を紹介されたその子は笑顔を浮かべて頭を下げた。今日1日お願いしますと。

第一印象は良かった。

だって田舎者と聞いていたのに礼儀正しく敬語も使えるのだ。教養もありそうだし。それに顔も良いし、何より人当たりが良さそうに見えた。

だから思っていたより楽な仕事になりそうだなあ——なんて思っていたのだが、実際仕事を始めるとこれがまた曲者だった。

いや、仕事は出来た。出来すぎたくらいだ。

ベテランと交ざっても違和感がないくらいなのだから。

人をいつまでも同僚呼ばわりするのも思う所はあつたが、何よりの問題は別の所にあつた。

『自慰の道具って、何処に売ってます?』

ようやく何かを尋ねてきたかと思えば、その子はそんな事を聞いてきた。真顔で。

思わず悪態をついた私は悪くないと思う。

その後も仕事中にも関わらず、その子はしつこく聞いてきた。何度も。切実に。どんだけ欲しいんだよ、こいつは何しにきたんだよ、と思わない人でツツコミしない人いたら教えて欲しい。ツツコミ疲れて先輩達に聞いたお店をついつい教えてしまうと、その子は満面の笑みを浮かべて買う道具に思いを馳せ始めた。そして今度は何をかうかと相談されたので――遠慮なく頭ひっぱたいてやった。

けれど一日もそんな馬鹿の相手をしてると馴れてくるし、少しだけ情も湧いてしまった。

変態で馬鹿だけど、基本的に良い子だったからだ。

だから、あの時引き留めた。

アクセルの街は他の都市と比べて比較的平和だけど、だからと言って女の子一人で夜歩き出来るほど安全でもない。下手な宿に泊まれば犯罪に巻き込まれるし、道中おかしな奴等に悪戯されなくても限らないから。

事後承諾の形でチーフから許可を貰い、それからあの子はルームメイトで後輩になった。仕事の事では特に面倒をみなかったけど、他が酷くて毎日教える事だらけ。しんどい日々だった。下着の選び方は知らないし、スカートだっていうのに無防備に走り回るし、男みたいな話し方するし――自分を俺というなど何度教えたか・・・結局直らなかつたけど。

それにエッチな事に積極的過ぎる事もあれだった。

あの子は口だけでなく行動力も半端ではなく、仕事始めた翌日には全財産はたいして自慰の道具を購入しにいった程だった。下着より早く道具を買ったことには心底呆れたのは言うまでもない。

その晩、泣いてる声が聞こえて、早速買った事を後悔して泣いてるのかと思いい心配して覗けば、買ったそれを股に押し当て「入らない」「いたい」と言ってる様は本物の馬鹿だと心の底から思った。

道具を使えるようになったらなつたで毎晩毎晩馬鹿みたいにオナニーして私の安眠を著しく損なわせてきたり、隙あらば仕事中にオナニーしたり。

本当迷惑極まりない奴だった。

それだけだった、筈だった。

「ふ、これじゃあいつの言うとおりじゃない。焚き付けたのは、私なのになあ」

朝起きた時、夜眠る時。

少しでも空いたベッドを寂しく思ってしまった。

あれだけ早く追い出したかったのに。

「上手くやってくれば良いけど・・・ふふ」

いざとなつたら貫い手くらいは用意してやろう。と言っても紹介出来るのなんて故郷の兄弟か親戚くらいだけど。でもまあ、下手な奴に預けるくらいなら田舎のヘタレ達に預けた方がずっと良いだろう。あのヘタレ共なら可愛い女の子を無下には扱わないだろうし。

まあ、恐らくそんな世話焼かなくて済むだろうけど。

昨日あの子を見たから。

鬼畜だ何だと言われるヘタレと一緒に歩く、楽しそうに笑うあの子を。

「すいませーん、注文いいですか」

少しだけ遠いそこから聞こえる声に、私は振り返り返事をかえす。

そして掃除していた手を止めて、注文票を手にし声をあげた冒険者達の元に向かった。

少しでも静かになつたその場所で。

いつものように。



「カエルの唐揚げ、それとネロイド二つですね」

そんなウエイトレスの言葉に頷くと、笑顔と一緒に「少々お待ち下さい」と元気な声が返ってきた。別に自分だけが特別ではないのだろうが、彼女の丁寧な対応に勝手に特別を感じてしまう俺は思わず顔がニヤケてしまう。

去っていく彼女の背中を眺めていると、正面の席に座る相棒から呪いのようなうめき声が聞こえてきた。

「何にやついてんだ、クソが。死ねよ」

呪いのようじゃなくて、呪いだっただ。

「良いだろうが、別によ」

「はっ、そうやって現実から目を逸らして生きていくのか、お前は。お前は絶対に彼女とは付き合えない。所詮は客と店員でしかないんだよ。何ちよつと夢見てんだ寂しい奴め。死ねよ、本当死ねよ、一緒に死ねよ、頼むから一緒に死んでくれよ」

「どんだけショックだったんだよ。別にもう二度と会えない訳でも——」

「お前に、分かって、たまるかああああ!!死ねよおお!!お願いだから、僕と死んで来世は上手くいくように願ってよお!!」

「お前の方が夢満載じゃねえーか」

十年來の付き合いのこの相棒様は、普段はこんな狂人ではない。寧ろ大人しいタイプの人間で、ちよつと不器用だが心根の優しい良い奴だ。

こいつがこんな事になったのにはちよつとした理由がある。

「うっとうっ!!カナデちゃんやあああん!何で辞めちやっただああ!うああああん!滅びろおお——カナデちゃん以外——うわああああん!!」

つい最近まで働いていた新人のウエイトレス兼冒険者だったカナデちゃんの寿退社である。

いや、厳密に言うとう冒険者稼業を優先するとかで住み込みのウエイトレスを止め、パーティーメンバーと同じ場所に移り住んだだけなのだが・・・知ってる奴は知ってる。これがほぼ寿退社と同義である事を。

彼女が最初に現れたのは数ヶ月前、夏も終わって少し経った頃だった。

ギルド職員は基本的に春にしか新人を入れない。その為季節外れに現れた彼女はそのルックスも相まって、かなり注目を集める存在だった。

当初はその注目も話題ありきの一過性の物だと思ったのだが――
―予想は大きく外れ彼女の人気は鰻登りに上がっていった。
その理由は直ぐに分かった。

彼女はウエイトレスとして優秀である以上に、真性の人たらしだったのだ。

ある者は男女分け隔てなく振り撒かれる笑顔に。

ある者は然り気無い気づかいに。

ある者は丁寧で親切な接客態度に。

ある者は不意にかけられた優しさに。

ある者は真摯な姿勢に。

ある者は似つかわしくない男前さに。

理由は人によって様々だが、兎に角、彼女は無自覚に人を落としまくっていたのだ。

それこそ老若男女問わず。

因みにウチの相棒様は破れた服を縫って貰って即撃沈した。俺の天使とかほざき始めたのがその頃だ。

俺が記憶する限りがつつり有料だった気がするが、相棒様の目には無償で修繕してくれる天使に見えていたらしい。

そんな訳でたった数ヶ月で人気ウエイトレスになったカナデちゃんだが、ちよつとした噂が流れていた。

それが、彼氏がいるという噂だ。

曰く、夜の街に男と二人きりだったとか。

曰く、飲み屋で男とキスしていたとか。

曰く、連れ込み宿に入っていく姿を見たとか。

あれだけ可愛ければ男の一人二人いても仕方ないだろ。

個人的にはそう思ったのだが、ファン連中はそうもいかなかった。

相手を見つけ出し血祭りにあげると、武装した馬鹿連中が街に繰り出していったのは記憶に新しい。

あの時は大変だった。

相棒様まで行こうとするから、止めるのマジ大変だった。

だが結局、それが実行される事はなかった。

カナデちゃんの相手が一枚上手だったのか、全然尻尾がつかめなかったのだ。目撃されているにも関わらず、本当に全然情報が出てこないのだ。分かっているのは男という事だけ。ある盗賊が隠蔽系のスキルを使っているのではないかと憶測を立てたが、やっぱりはつきりしなかった。

それで正体が掴めなかった野郎共は皆都合の良いように解釈していき、結論そんな奴はいなかったという事になっていった。

「んなわけないが・・・」

色眼鏡なしで、ちゃんと見てた奴等は知ってる。

同じパーティーメンバーであるサトウカズマに対するカナデちゃんの態度が、あからさまなまでに好意的だった事。やけに世話を焼いていた事。笑顔が客に向けるものと全然違う事。二人が同じ匂いを漂わせている時がある事。

何よりたまに見せる熱っぽい視線が、全てを物語っていたという、その事を。

「くそおおお!!許せん、サトウカズマああああ!!カナデちゃんを独り占めなんてえ!!鬼畜のクズマのくせにい!!なあ!今から誘ったらカナデちゃん僕達のパーティーに入ってくれないかなあ!!」

「合同でクエスト受けるとかならまだしも、うちのパーティーには来ないんじゃないか?サトウカズマパーティーつつたら上級職が三人もいるパーティーだぞ?」

「上級職になれよお!!僕もなるから!!」

「せめて自分がなってから言ってくれ」

まあ、仮に上級職になったとしても靡かないと思うのだが・・・。

一人泣き喚く憐れな相棒様を見ながら思う。

相棒様はいつ気づくのだろうか、と。

今現在、抱いた恋心の叶う見込みが限りなく0である、その事に。元気に歩んでる道がゴールのない茨の道である、その事に。

「まあ、カナデちゃん冒険者として活動するみたいだし。たまにギルドの手伝いにも来るらしいから、まあ、なんだ、頑張れ。程々に・」
「な、なに！本当か!?まだ、チャンスが!!よしっ!!やるぞ、友よ!!僕は上級職になる!!」

「・・・程々にな、程々に」

お前が気づいた時、ショックで死なない程度に。

というか、こいつが気づく前に子供とか出来てそうだな・・・。

エリス様。

どうか憐れなこいつに祝福を。

通常のカニより三倍赤く、三倍大きく、三倍は旨い。それが霜降り赤カニ様ですが？知らない？奇遇だな、俺も知らなかった。

同居したら四六時中ズツコンバツコン出来る。

そう思ってた時期が俺にもありました。

屋敷に引越してから数日。

洗濯物を干しながら俺は引越してから今日までを振り返っていた。

「のーえつちだったなあ・・・」

のーえつちだった。

ただ、ただ、のーえつちだったのだ。

初日こそ朝までズツコンバツコンしたが、それっきり機会に恵まれません今日まで致す事が出来ていなかった。——と言うのも、この数日凄くなつてきたためぐみんが寝る前になると部屋にやってくるのだ。

寂しそうな目を見ていると邪険に扱う事も出来ず、つつい甘やかしたくなつて一緒に寝てしまう。服の袖を握ったまま小さくなって眠るめぐみんは可愛いし、頼られる事も悪い気はしないので、それ自体別に嫌ではないのだが、サトウカズマと致す機会が削がれてしまうのは何とも言えなかった。

それならば、めぐみんが爆裂魔法を撃ちにいってる昼間とも思っただが。そもそもサトウカズマは爆裂デートに大体引つ張られていってしまう。仮にダクネスに任せても、昼間は昼間で水色が家に籠っている為その隙もないのだ。

水色は妙に勘が良いし、何より間が死ぬほど悪いので、どう頑張つてやろうとしても何かと邪魔されてしまうし。

洗濯物のシワを伸ばしながら、どうした物かと俺は考えた。

「・・・はあ。エッチしたい」

この際、オナニーでも可・・・いや、思いつきりぶちこまれた

いなあ。

洗濯物も済ませお昼ご飯を作っているとサトウカズマが台所にやってきた。

随分と眠そうな様子に徹夜したのであろう事を察する。

「おはよ、今日は大分遅かったな」

「ふあああ……おはよう。色々な……後少しなんだけど……ちよつと機構がな」

「機構？ああ、昨日何か工作してるって言ってたな。お疲れ。手伝う事あるか？」

「今の所はない」

サトウカズマはそう言うのと俺の肩に顎を置いて、寄り掛かるように手元を覗き込んできた。

「こら、危ないだろ」

「何作ってんだ？」

「野菜多目のカルボナーラ」

「野菜……あの跳び跳ねてるやつ？」

「そうだぞ、跳び跳ねてたやつ。なんだよ、嫌な顔しても駄目だからな。気持ちちは分からなくはないけど、お前は野菜食べなさすぎだ。ちゃんと食え」

相変わらずサトウカズマは野菜が苦手なのか、分かりやすいくらい嫌な顔を浮かべたまま「うわあ」と呟いた。

「踊り食いしろってんじやないんだぞ。ちゃんと火も通してシメたし……それでも駄目か？」

「……いや、分かった、食べる」

「それで良いんだよ」

頭を撫でてやりたい所だがあいにく手は塞がってる。

なのでその代わりに仏頂面な横顔へ頬を擦り寄せてやる。スリスリすると、少し汗臭いサトウカズマの匂いが鼻を擽った。

「……んー」

応えるようにサトウカズマが擦りついてきた。

そして徐にサトウカズマの手が胸に触れる。

ちよつと横へと視線を向ければ、熱っぽい瞳が俺を覗いていた。

「カナデ——」

「サトウカズマ——」

「なにになに——？ 凄いい良い匂いじゃないの。アクア様に内緒で何作ってるの？」

「……」

どちらともなく離れた。

ジユウウというパスタの炒められる音だけが響く。

ひよっこり顔を出した水色は俺達二人に首を傾げた後トコトコやってきて、そのままフライパンを覗いて感嘆の声をあげた。

「わあ、もしかしてこれ、カルボナーラじゃないの!?! カナデ凄いわ! こんなのも作れるのね!」

「ん、ああ、うん。まあ」

「ねえ、これもう出来るの? ううん、出来るわよね。こんなに美味しそうなもの。私お皿出してくるわっ!」

そういつてガチャガチャ準備を始めた水色。

俺達はその様子を横目に見ながら軽いキスを交わした。

取り敢えずこれで我慢しておこうと思う。

爆裂魔法をぶっぱなしにいったためぐみんとダクネスは放ってお昼を食べた後、サトウカズマは工作の材料を買いに出掛けるというって屋敷を出ていった。俺も行こうか迷ったが、いい加減庭の手入れもしたかったので水色とお留守番。

植木の手入れを一人チャキチャキしていると、「ただいま帰りましたー」というめぐみんの声が聞こえてきた。

「おかえりー……って、おお? どしたん?」

出迎えようと顔を覗かせたら、荷物を抱えたためぐみんとダクネスがいたのだ。

「ただいまです、カナデ。これはですね、ダクネスが貰ったのです」

「ダクネスが？」

「はい。ね、ダクネス」

めぐみんに見つめられたダクネスは頷く。

「ギルドに立ち寄った帰り丁度家の者と会ってな。うちの実家から送られてきた引越祝い、カニと酒だ。パーティーメンバーの皆と食べてくれと」

「日頃、うちの娘が迷惑をかけているだろうからそのお詫びと、そんな娘と付き合ってくれてる事への感謝の印に」だそうです」

「こ、こら、めぐみん！余計な事を言うな！父様も余計な事を伝言にかけて……まったく」

プリプリと怒るダクネスから一つ箱を受け取る。

ちよつと蓋を開けてみると大きなカニが入っていた。

どの足も太く立派で重さもズッシリしてる。

「良いのか？これ高いだろ」

「遠慮せずに食べてくれ。今更返せる物でもないし、それに、私ごとになつてしまうのだが……父様の気持ちを無下には出来ないしな」

「あいよ、分かった。じゃせめて美味しく頂きますか」

俺の言葉にめぐみんがパアアと笑顔になる。

「今夜はカニパーティーですね！」

「うん？そうなら、結構量あるし色々やってみるか」

「茹でるだけではないのですか？」

「新鮮そうだから色々出来るぞ。流石に生は怖いから無しとして……脚とかハサミとかは網焼きにしたり、しゃぶしゃぶにして、タレとかで食べるのも旨いし——」

めぐみんとダクネスの喉が鳴った。

「——カニ味噌はほぐした身と混ぜて味付けすれば酒の肴になるだろうし、足の付け根の身なんてどうせ残るんだろうから取っておいて後で雑炊にするのも良いよな。ああ、殻を煮込んでスープとか作っても良いな。あつ、雑炊といえば鍋も良いな。ああ、でも流石に足りないかあ——」

「ただでさえ高級な霜降り赤カニ。その名前だけでヨダレが出そうだ

と言うのに・・・カナデは悪魔ですね。果てしなくお腹が減って来ましたよ」

「本当だな。それにしてもよくまあポンポン思い付く物だ」

それから水色も加えて少し早かったが夕飯の準備を始めた。カニの調理は俺に任せて貰い、めぐみんとダクネスには食器の用意を任せ、水色には風呂の用意とリビングの掃除をお願いした。水色が何故自分は料理と全然関係ない事なの?!と文句を言ってきたが、掃除の手腕についてめちやくちや褒めて、夕飯にお酒を沢山飲ませると言ったら喜んでブラシ持って飛び出していった。ちよろい。

カニの調理に入ってから分かった事なのだが、貰ったカニの内約半分はまさかの活力ニ様。シメられてるカニ達も長持ちするように魔法が掛かっていたようで、殻を割って身を出せば新鮮のプリップリ。海産物と聞いていたので、そのままちよつと味見したらめちやくちや旨かった。

刺身も用意しようと心に決める。

そうして準備をする事二時間程。

いつも皆で囲むテーブルには、出来上がった沢山のカニ料理が並んでいた。

皆でお風呂をさつきと済ませた後、サトウカズマの帰りをめぐみんとソワソワしながら玄関で待っていると、「ただいまー」という声と一緒に少し疲れた様子のサトウカズマが帰ってきた。

「おかえりー」

「おう!?なんだよ、二人で!?!」

妙にビクついたサトウカズマはこちらの様子を窺ってきた。まるで何か悪い事でもしてきたかのようだ。

「遅かったですね? 何処かで悪さでもしてきたのですか?」

めぐみんも同じ事を思ったらしい。

しかしまあ、ズバッといくなこの子は。

それに対してサトウカズマは視線を明後日の方へと向けて「別に」と呟いた。またしても自ら白状するかのような仕草を見せるサトウカズマに、思わず笑ってしまう。

サトウカズマのジト目に気づき、頑張って押さえ込んだ。

「……お前なあ」

「はー、ごめんごめん。まあ、何でも良いけどさ、犯罪とかじゃないよな？」

「んな訳あるか……まあ、色々あるんだよ」

「カズマの事ですから、大方また誰かのパンツをステイールしたとかでしょう。ふっ」

「おい、こら。めぐみんにとっての俺は何なんだ」

「私のパンツにも興味を示す、本物の変態ですが？」

「あれは謝っただろ!!」

二人のじゃれ合いを眺めていると、食堂から水色のお腹減ったコールが響いてきた。そろそろお腹と背中がくつつくそうさ。それじゃ仕方ないかとサトウカズマをからかうのを止め、三人で食堂へと向かった。

案内されるがまま席についたサトウカズマは目の前に並ぶカニに目を丸くした。こんな贅沢する余裕などあるわけがない事を誰よりも知っているからだろう。

何故かサトウカズマから本日二度目のジト目を貰った俺は、これがダクネスの実家からの引越祝い祝い品である事を伝えた。かなり半信半疑ではあったが、ダクネスが騎士の誇りに誓って本当だと告げれば、サトウカズマに肩を掴まれ「カナデ、本当の事を教えてくれ」と何故か疑いが増した様だった。

泣くな、ダクネス——あ、ダメだ。こいつ喜んでやがる。

そんなこんなもあってカニづくしな夕飯が始まった。

カニ料理は概ね好評で茹でた物も焼いた物も、皆美味しそうに食べてくれた。一応大丈夫そうなので用意したカニ刺はめぐみんとダクネスから眉を潜められたが、サトウカズマと水色には三星判定を貰え

た。その様子を見て二人も挑戦したが——ちよつと口に合わなかったようでした。やぶしやぶ鍋につっこまれてしまった。惜しい。

「ねえねえ！皆見なさい！私が美味しいお酒の飲み方を教えてあげるわ！」

夢中でカニを食べるサトウカズマを眺めていると、突然水色がカニの甲羅と酒瓶を手に騒ぎ出した。何をするのかと思つて見ていると、逆さまにした甲羅を網焼きする時に使つたミニコンロの上へ置く。熱せられる甲羅から水気が飛んだ頃、貫い物のお酒を注ぎ入れた。

甲羅が少し焦げた辺りで水色はそれを手にして、湯気のたつそれを口に含む。

「ほう……」

おっさん臭さはあつたものの、凄く美味しそうに飲む水色の姿に全員が喉を鳴らした。

直ぐにダクネスが真似をして同じようにおっさん臭い声をあげたが、サトウカズマは何かを悩んでるようで中々動かなかつた。——

「俺はというと、めぐみんからお酒を取り上げるのが忙しくてそれどころではなかつた。

はい、ぼつしゅーとします。

「ケチな事をしないで下さい、カナデ！今日くらいは良いじゃないですか！私も飲んでみたいのです！ダクネスからも言つて下さい！」

「若いうちから飲むと頭パーになるといふしな。めぐみんはまだ止めておいた方が良いでしょう」

「そん……な……ん？」

パーになる。

その言葉に俺とめぐみん、ダクネスは息を合わせたようにご機嫌で酒を飲む水色を見てしまった。

「……？何かしら」

いや他意はないんだ。

つい。

大人しくなつたためぐみんは芸を披露し始めた水色に任せ、俺は妙に大人しいサトウカズマの所へと向かつた。

「やらないのか？やりたそうにしてたろ？」

めぐみんから奪取した酒瓶を見せるとサトウカズマは迷いを見せた。何を迷ってるのかは知らないが。

「？知らないなら別に良いけど・・・」

「ま、いや、違う、違う、いや、違わないんだけど、違うというか、なんつーか、こういう付き合いは必要な時があつて、冒険者なら仕方ないというか・・・情報って生きる上で必要だし、人付き合いも出来るだけした方が良いから、だから悪くないというか、いや、悪いんだけども・・・」

「？よく分からないけど、迷うくらいなら飲んじゃえよ。この後予定がある訳でもないだろ。こんな良いカニ滅多に食べれないんだからな」

サトウカズマの所にあつた甲羅を取りコンロの上へと置く。すると直ぐ、甲羅の焦げた芳ばしい香りが漂ってきた。もうすぐお酒の入れ頃だろう。

「カナデ・・・」

「ん？」

ちようどお酒をいれようとした所で声が掛かった。

振り向けば意を決したような男の顔をするサトウカズマがいた。

「俺は、いらぬです」

「分かった。・・・なんでちよつと泣いてんだよ」

結局その後、サトウカズマは涙を流しながらお腹と胸が一杯だと部屋に帰ってしまった。

何があつたかは知らないけど、そういう時は誰にでもあるので放つて置こうと思う。

俺は飲むけど。

「——ほうっ、これは中々・・・」

◇間違える事は誰にでもある、魔が差すことだって、だから勘弁して下さい。エリス様。

寝れない。

ベッドに入って暫くして。

俺は両の目を見開いて天井を眺めた。

この数日眺めてきた代わり映えしないそこを。

言われた通りお酒は飲まなかった。

ご飯を食べて布団に飛び込んだ。

されど眠れない。

いつもなら良い感じにウトウトしてくるのに、本当に面白いくらい、全然、まんじりとも、一つ欠片さえも、眠れなかった。

「……あの時、あの時断つてさえいれば」

数時間前の自分に腹が立つ。

つい釣られて、性欲と興味に負けて、あの変態達について行ってしまった自分が情けない。

それは遡ること数時間前。

販売目的に作っている商品の材料を探しに街をふらついていた時、怪しい動きをする二人組の男を見つけた所から始まった。

怪しげな路地裏を覗く二人の男。

はつきりいつて関わりたくなかったが、一応知り合いだったので捕まる前に注意してやろうと親切心から俺は声をかけた。

そこにいたキースとダストの二人に。

そして聞く事になったのだ。

この街の男冒険者達の間にはひっそりと伝わる、その存在を。

『はあ、サキュバスの淫夢サービス?』

『しっ! 声がでけえ!! マジで男冒険者達の間だけの秘密なんだぞ!!』

『馬鹿ダスト、お前も大概でけえよ』

詳しく話を聞いていくとそれはそれは素晴らしいサービスだった。

この街にひっそりと住むサキユバス達は生きる為の糧である精気を分けて貰う代価として、日頃上手く性欲発散出来てない男冒険者達にすんごい淫夢を見せて色々とすつきりさせてくれるサービスを行っているらしいのだ。

そしてその淫夢サービス、かなり細かく淫夢の内容を設定出来るらしく——近所のあの子や、ちよつと気になるその子、高嶺の花なアイドル、果ては二次元嫁まで相手として選べ、本当に思うがままのシチュであんな事やこんな事が夢の中だけ出来るというのだ。

もうそんなの聞いたら引けない。

男として一度は体験せずにはいられない。

どうせ夢だし？ノーカンノーカン。

そんな軽い気持ちで俺はキース達と共に、サキユバスの淫夢サービスを受けにいった。

その結果がこれであつた。

思った以上に良心の呵責が凄い。

どうしてもカナデの笑顔がちらつて全然眠れない。

もうあれだ、死にたい。

たかだか夢、されど夢。

きつとそういう事なのだろう。

「素直に酒飲んでおけば良かった」

楽しかっただろう。

お酌されるの。

カナデも飲むと言っていたし。

飲むとまた可愛いんだ、あいつ。

目がとろんとして、色っぽくて、甘えてきて。

・・・はうつ、胸が痛いいいい！

ゴロゴロとベッドの上で悶えた後、俺は起き上がった。

このまま横になつても良いことなさそうだし、もういつそ寝ない事選択しよう。そう思った。それで、やってきたサキユバスさんに謝

ろう。無償で帰すのは悪いから、料金分の精気は払って、それで帰って貰おう。

もう無理、胸が痛いもん。

目覚ましに乾布摩擦でもするか、とか思ったが窓を開けたら予想以上に寒く、風邪引いたらアホ臭いのでそれは保留。色々考えた結果、風呂でさっぱりしようという考えに到った。

着替えを持って風呂場に行くと、浴槽にはまだお湯がはってあった。若干温かったので少しだけ入れ直す。

さつさと体を洗った後、入れ直した湯船に体を沈めた。

「——はあ、いい湯だ」

浄化される気がする。

重たかった十字架が今は少し軽く感じる。

というか、よくよく考えたら付き合ってる訳でもない相手に、これはどうなんだろうか。重すぎないだろうか。

いや、でも考えても見て欲しい。

自称元男とはいえ可愛い女の子がだよ、あれこれ世話を焼いてくれて、凄いい気遣ってくれて、キスやらエッチやら求めてきてさ、しまいには大好きと言ってくるんだよ。

そら、その気にもなるじゃないですか。

「そろそろ、どうにかしないとな……」

あいつはフワフワした今の関係で満足なのか何も言わないけど、俺はそろそろはつきりさせたい。

ぶっちゃけちゃんと彼女になつて欲しい。出来れば結婚したい——

あ、いや、結婚は借金なんかかしてからが良いかな。あいつ無理して協力してきそうだし。

「——ふあああ、あ、マジか」

湯船に浸かって色々考えていたら眠たくなってきた。

ついついぼーつとしてしまう。

そろそろ出るかあ、という考えが頭に浮かんだ時、洗面所の方から声が響いてきた。聞き覚えのあるその声が。

「だくにえす、ほらっ、いつまれ、ふくきてるんりゃ！はやくうぬげえ

〜!」

「お、おい!少し酔い過ぎだぞ?!大丈夫か!」

「だあいじょーぶらあ!!」

騒がしい話し声。

バタバタとするそれに、何が起きているのか分からず混乱した。一瞬実は今俺は眠っていて、サキユバスの淫夢サービスが始まったのかと思っただが、俺のリクエストとあまりにも違い過ぎる。

「大丈夫な人間の言葉とは思えないのだが!?!いつもの冷静なカナデはどうした!?!いきなりグデングデンになって・・・カナデは強いのか弱いのか分からんな。なあ、やはり風呂は止めておいた方が——ひゃうん!?!ちよ、カナデ、そこは、ふあん!」

「うーさいじよ!!ぶらんぶらん、ゆやしへえ!しやつしやつとにゆげえ!こによ、どえむうしおんにやあ!!」

ペシンペシンと何かを叩く音と、快楽に喘ぐ声が聞こえる。扉の向こうで何となく起きてる事が想像出来て、不覚にも興奮してしまう。おつきしてしまう。

あ、やばい、鼻血が——。

ヒールで鼻血を治していると、扉がガチャリと音を立てた。一気に血の気が引く、そんな事やってる場合じゃない事を思い出したからだ。

そうこうしてる内に扉が開かれてしまった。

喉から出掛けた静止の言葉を思わず飲み込んでしまう。

その飛び込んできた光景があまりにもあまりにだったのだ。

扉の先から現れたのは一糸まとわぬ二つ女体。

普段から見てるカナデは勿論、カナデに押されるように現れたダクネスの裸体も視界の中に入る。服の上からでも分かっていた事だが、ダクネスの体は半端では無かった。ぶるんぶるん揺れる大きな乳房、腰はきゅつとくびれ、しまった大きめの臀部。

どれをとってもエロの人だった。

思わず息が止まる。

状況に混乱し小さくなりかけていた息子様が、再び挨拶せんと立ち

上がってしまおう。

「お、おい、押すな！危ないだ、ろ……お」

ダクネスと目が合った。

ダクネスは動きをピタツと止め目が点になる。

「よ、よお」

「あ、ああ」

いたたまれなくて声を掛けると、ダクネスも返事を返してきた。それからお互いじつと見つめた後、ダクネスは咄嗟に胸と股間に手を当て、顔を真っ赤にさせ震え始めた。今ダクネスの気持ちが手に取るように分かる。何故なら俺も同じ気持ちだから。どうしよう、この息子。

「なあに、とまってりゆのりや？」

「いや、カナデ、そのによつ、説明が、出来ない、どうか、その、あれ、由々しき事態になって……」

「ん……？」

ダクネスの後ろから頬を赤らめたカナデが顔を出した。

カナデは怪訝そうな目で辺りを見つめ、湯船に浸かっている俺を見つけた。

「しゃとうかずゆまー！」

舌つたらずな声でそう言うと、カナデはトテトテと小走りで近寄ってきた。ポヨンポヨン揺れるおっぱいに目が釘付けになって、息子様が湯船から出ようと限界まで立ち上がる。

カナデは躊躇う事なく浴槽へ入り、そのまま近寄ると徐に抱き締めてきた。

おっぱいに埋もれた顔面が幸せになる。

「しゃとうかずゆまあ〜・にやにしてるんりや！おふりよにはいりゆなら、よんれくれればいいに！もう、みずゆくしやいにやあ〜」
「かかかか、カナデっ、カナデさん！ちよ、今は止めようか！ダクネスがいるっ！ダクネスがいるから！」

不意におっぱいが顔から離れた。

分かってくれたのかと思えば顔が近づいてきて、そのまま唇が重な

る。ちゅちゅと、小鳥が餌を啄むような軽いキスが何度も落とされていく。

「んっ、んっ、ん、かずゆまあ」

「ちよ、本当に、待てっ、お願いだからっ」

視界の端にこちらを真っ直ぐに凝視するダクネスが見える。もう自分の体を隠す事すら忘れてじっと見てきてる。

そののせいか、変に興奮してしまつて股間の息子が反応しまくつてしまう。

射精するのは流石にと思い、一番の原因となつてるキスを迫つてくるカナデの顔を止める。

カナデはそれが気に入らないのか頬を脹らませた。

「むう！かずゆまあ、きすう」

「分かつた、するからちよつと待て、本当に。限界なんだよ。流石にダクネスの前じゃ」

「——げんかい？」

俺の言葉を聞いたカナデが厭らしく笑つた。

背筋に嫌な汗が流れる。

「ふふっ、えいっ！」

カナデの柔らかい手が息子をぎゅつと握つた。

限界まで高まつたそれが飛び出す。

湯船の中に白濁の塊が漂う。

「馬鹿っ、お前っ、本当馬鹿」

「きもちよかつたあ？」

「良かったけども」

カナデは息子を扱きながらキスしてくる。

ダクネスの存在100パー忘れてるんだろう。

もう完全にいない子扱いだ。

「かずゆま、おそうじ、してあげる。おふりよ、でて」

「そこにダクネスがいるんだが」

「だくねえー？んー？——ねえ、それより、でよ？おちんちんぺろぺろしたいの」

「ふぐう、おまつ、だからダクネスが……」

「……いや？」

うるうるした上目遣いで見つめられ、もう首を縦に振るしかなかった。

一緒に浴槽を出て直ぐカナデが床を叩いてきた。ここに座れと言
うのだろう。

ダクネスの目の前で。

床に座り込むと「わ、私見えてるよな？」と小さな声が聞こえてき
た。見えとるわ、と本気で返したい。というか、空気を読んで出て
て下さいと言いたい。

カナデのエツチ過ぎる雰囲気におされて、ちよつとその言葉は出な
いんだけど。

「ちがうっ！」

言われるがまま座りギンギンにたつた息子をダクネスに覗かれて
いると、カナデが俺の様子に憤慨した。何をしたいのかと思ったら、
また床をパシパシ叩いてくる。

何となく分かった、横になれと。

ダクネスの目の前で。

カナデ、見えてないの？本当に見えてないの？そこに寝転がると、
恐らくダクネスのあんな所やこんな所が見えてしまうんだけど。
ダクネスが逃げてくれれば良いが、この様子だとそれも期待出来な
い。このドM変態騎士、一見恥ずかしそうにしているが、それ以上に
嬉しさが顔に滲んでやがる。見せる気満々だ。

ダクネスは俺の視線に気づくと唾を飲み込み、何を思ったのか股を
開いてきた。そしてちつちやい声で「お、お構い無く」とか呟いてく
る。

こいつは本当の変態だったようだ。

「かずまあ!!」

「うおっ!」

カナデに押し倒される形で床に転がった。

目を開けると興奮したダクネスと、ヌラリと艶めく割れ目が見えて

しまう。

あまりのエロさに目を奪われていると、カナデの足が顔を跨ぎ、ダクネス以上に濡れた割れ目が視界の中に入ってきた。

「かずま、いっしょにペろペろしよ？」

甘えるような声でそう言うと、カナデはゆっくり腰を落としてきた。濡れたそれが顔面に押し付けられる。

それと同時に息子に柔らかいものが這いずっていく。

その瞬間、ぷつんと、俺の中で何かが切れる音が聞こえた。

それからは何も考えずカナデのあそこにしゃぶりついた。美味しそうに艶めく、そのまん肉に。

直ぐに割れ目の奥へ舌を入れようと考えていたのだが、マシユマロのようにフワフワなまん肉を弄るのが堪らなくて、立ち込める匂いを嗅ぎながら、溢れる愛液をすすりながら、俺はしゃぶり味わい続けた。

それに応えるように俺の息子へしゃぶりついてたカナデだったが、その動きは段々と緩慢になっていき——気がつけばその手は止まっていた。

くったりと俺の股間付近に倒れこんだカナデは、俺が与える刺激に喘ぎ、体をビクつかせるだけの存在になってしまった。

「あつ、や、やらあつ、かずゆま、かずゆまあ、あう、ん、あああツツツツ!! あんん」

舌でクリトリスを押しつけ、溢れた愛液を思い切り啜りあげると、カナデの体が大きくビクつき痙攣したように震える。

そして力が抜けた股から液体が溢れた。

「あつ、かずゆま、ごめんや、しゃ、いん——んんんあつ!? にや、やあ! らめっ! かずゆまあ!! らめっ、ふああん」

それが何であるかは分かったが、そのまま啜り続けた。

別にそういう趣味がある訳ではなかったのに、今はこうしてあげたくなっただ。

カナデの喘ぐ声を聞きながら、お尻を揉みながら勢いよく溢れるそれを飲みほす。

全部だし終わったカナデはコテンと横に倒れた。

頭を撫でてやると恨めしげな視線がこちらに向いた。

「らめつ、て、ひっひやのに……かずゆまあのお、へんはい……えっちい……しゅけべえ」

朦朧とするカナデは文句を言うが、表情は幸せそうに蕩けている。満更でもなかったようだ。

「カナデ、もう止められないからな」

「……うん、きて、たくさん、してえ」

倒れたカナデの股をM字に開く。

物欲しそうヒクヒクとあそこが動いていた。

さつきまで口で味わっていた、あそこが。

そつと反り立つその頭を差し込むと、まるで飲み込まれるように奥へと入っていった。

壁が強く締め付けてくる。

何かを欲しがるようにぎゅつと。

「カナデ、動かすぞ」

「うん」

頬を更に深く赤に染めて。

柔らかい笑みを浮かべて。

カナデは嬉しそうに言ってきた。

胸にドキユンときた俺は今日こそ孕ませようと心に決め、深く息子をカナデの奥に突き立てた。

「……私、死んでる訳ではないよな？おーい、カズマ、カナデ、私
のこと見えてるかー？あれ？おかしいなあ、おーい。……くう

ん
ツ
ツ
ツ
！
ま
さ
か
の
完
全
放
置
ツ
ツ
ツ
！！
」

諦めないで、希望はきつと残ってる。そう、頑張れ。．．．私は取り敢えず、先に逃げときますね？いや、離して！巻き込まないで！

「う、うううん．．．ん？」

小鳥の囁ずりに重たい瞼を開けると、目の前に寝息を立てるサトウカズマの顔があった。気持ち良さそうに寝る姿に胸がポカポカする。

そのままずっとそうしていたかったけど、これは明らかにおかしい状態だ。サトウカズマと寝るなんてエッチした時くらい。それで状況の確認をする為に顔をあげて辺りを見渡したら、サトウカズマの部屋で一緒に眠っている事が分かった——やっぱり全裸で。

体に巻き付くサトウカズマの腕。絡み付く足。

そこから伝わる体温がくすぐったくて、心地よくて、でもなんか恥ずかしくてドキドキが強くなっていく。

とてもじゃないけど、心臓が持ちそうにない。

だから離して貰いたくて、起こす事にした。

「サトウ——」

「んんっ」

「——ふぁ」

サトウカズマの腕がぎゅつと体を抱き締めてきた。

起きているのかと思っただけど、穏やかな寝息にその様子はなさそう。子供のような寝顔を見ていると、もうこれ以上何もする気になれなくて、そのまま力を抜いてサトウカズマに体を預けた。

「もう．．．」

よく分からないけど、お腹に残る暖かさがエッチした事を教えてくれる。昨日までであったムラムラっとしていた感じが残ってなくて、何処と無く気分がすっきりしてるから多分間違いないと思う。

そつとあそこに指を沈めれば、温かい感触に触れる。それは熱くてドロツと粘っこくてヌルヌルしてた。

指を引き抜いて見てみれば、白いネバネバした物が指に絡まって

る。

「っん、ん」

舐めて見れば苦味が口の中に広がった。

良く知ってるサトウカズマの味だ。

「あつたかい・・・また、いっぱいしてくれただあ。すごい、まだこんなに」

覚えてないのがちよつと残念。

お酒を飲み始めた頃の記憶はあるんだけど、果たしてその後何があつたのか。気持ちよかつたのはぼんやり覚えてるけど・・・。

「あかちゃん、できちやうよなあ、これは」

薬は飲んでるとはいえ、これだけ出されて大丈夫なものなのだろうか。娼婦のおねーちゃんから聞いた話だと、用法を守って飲んでる限り子供は出来ないって話だけど・・・これだけ出されるとそれも意味が無いんじゃないかなつと思ってしまう。

そつとお腹に触れた。

そこは温かくて、ちよつと水つぽい。

でも何となくだけど、まだ何もいない気がする。

でもいつか、きつと出来る。

こんなに沢山されているのだから。

きつと。

その時、サトウカズマはどんな顔をするだろうか。

嫌がるだろうか、驚くだろうか。

以前責任を持たなくていいなんて言ったけど・・・認知くらいはして欲しいかな。

それで――

「出来たら、喜んで欲しいなあ・・・」

――まあ、元男との子供なんて喜ぶとは思えないけど。流石にそれはサトウカズマに甘え過ぎだもんな。

その時はちゃんと――。

コンコン。

そんな音がドアから響いてきた。

「カズマ、おはようございませす。ちよつと聞きたい事があるのですが――」

その声に心臓が飛び跳ねた。

不味いつ、そんな思いが頭の中を駆け巡る。

何が不味いつて？何もかもだ。裸でいる事もそうだし、サトウカズマと一緒に寝てる事もそうだし、体に染み付いてる精液の臭いもそうだ。

流石に子供のめぐみんに、こんな姿は見せられない。

再びノック音が響き「カズマー」と可愛い声が聞こえてくる。扉を開けようとしているのかガチャガチャとドアノブを回す音も聞こえたが、鍵が掛かっているのか開く気配はない。

「カズマーまだ寝てるのですかー？起きてください。聞きたい事があるのです」

繰り返されるノック音と声に、サトウカズマは眉間にしわを寄せながらうつすら目を開けた。

「・・・朝からなんだよ、めぐみ・・・ん」

不機嫌そうにめぐみんに言葉を返したサトウカズマだったが、直ぐ隣に俺の姿がある事に気づき、寝惚けていた目を見開いた。

「おはよ」

めぐみんに聞こえないよう小さく声をかけると、一気に顔を青ざめさせる。状況を把握したらしい。

「あ、起きましたか。カズマに聞きたい事があるのです」

「あつ、はあ!?え!?聞きたいつ、ほお!!?どうした!!めぐみん!!」

「わっ!!?何ですかいきなり!叫ばないで下さい!心臓に悪いです!!」

多分サトウカズマの方が心臓に悪い状況だろう。

ちよつと前に起きてて状況を把握してる俺でも、冷静とは言い難い程ドキドキが止まらないのだから。

サトウカズマを落ち着かせる為にそつと口元に指を押し当ててや

る。そうすると直ぐに落ち着きをみせた後、強く頷いてきた。任せろ、らしい。

「——あ、ああ。めぐみん君、どうしたのかね？話したまえ」

「いきなり対応変わり過ぎです、何処の紳士ですか。いえ、まあ、それはどうでも良いのですが……カナデが何処に行つたのか知りませんか？昨日ダクネスと遅くまで飲んでた筈なのですが、部屋に帰つてきてないみたいなのです」

ここにいるからな。

ついでに言うのと恐らくここでセックスしてたからな。

サトウカズマは何とも言えない顔で「ソウカ」と呟いた。

「そうなのです。ダクネスの部屋にも行きましたが『ナニモシラナイ、ヨ』とカズマみたいに片言で話すばかりで……」

ダクネスと飲んでいた……？

その言葉に頭痛がした。

何か大切な事を忘れてる気がする。

いや、忘れていた気がする。

パンドラの箱を前にしたような気分な俺を放つて、サトウカズマはサトウカズマで「頭痛が痛い」とか訳の分からない言葉を呟いていた。

「カズマ？聞いていますか？」

「き、聞いている！聞いている！えつとだな！カナデは、そう、出掛け——」

「出掛けてはいないみたいです。門が閉めっぱなしでした。ついでにいうと、裏口も中から鍵が掛かってました」

カズマの額に脂汗が滲む。

「庭の掃除でも——」

「物置小屋も見に行きましたが、ホウキや植木ハサミは置きっぱなしでした。ついでに、軽く庭を散策しましたが人影もありませんでした」

カズマの呼吸が乱れる。

「ほ——」

「他の部屋も一通り見ました。何処にもいませんでした。念の為に屋

根裏部屋も覗いてみましたが、床には埃が被っていて人が歩いた痕跡もありません。地下室も同様です——探してない部屋はもうここだけです。カズマ」

カズマの体に触れているから分かる。

心臓が面白いくらいにバクバクしてる。

ふとカズマから目を離しもう一度部屋を確認すると、部屋の隅に畳まれた服を見つけた。

俺のパジャマだ。

「カズマ、もう一度聞きます。カナデが何処にいるか、知りませんか？」

確信を持った台詞と共にジャラっという金属音が聞こえる。それが何か察した俺はベッドから転がり落ち、そのまま音もなく着地、流れるように服へダツシユする。

カチャリ、カチャリ。

鍵を合わせる音が聞こえる。

サトウカズマがガタガタ震える。

俺はささっと着替え窓を開ける。

サトウカズマの部屋は三階、地面まで一気に降りるには流石に高い。

真下を見れば下階の部屋に備え付けられた、石で縁取られた頑丈そうな窓が見えた。

「おいつ、カナデ!？」

「直ぐ助けにくる、頑張れ」

窓から飛び降り、下の部屋の窓に手を掛ける。

開いてれば良かったのだが、残念な事に窓には鍵が掛かっている。仕方がないので予定通りそのまま地面に着地。

上から「マジか、カナデ」とサトウカズマの声が聞こえる。

入り口に走り出すとほぼ同時、勢いよく扉を開ける音と「カズマ!! 御用です!!」というめぐみんの怒号が響いてきた。ついでにカズマの野太い悲鳴も。

「——って、あわわわっ!?か、カズマ!!なんて格好しているんですか

!!本当に変態にジヨブチェンジしたのですか!？」

「うるせえええ!!色々あるんだよ、ジロジロみるなあ!!スケベえ!」

.....頑張れえ!

それから五分程。

入り口から屋敷に戻った俺は、さも悲鳴を聞きつけやってきましたという体でサトウカズマの部屋を訪れていた。水色とダクネスのおまけつきで。

「カズマ、いいえ、クズマさん。同じ一つ屋根の下に住む身として、いくら慈悲に満ち溢れた私でもそんな趣味は看過出来ないわ。麗しき女神である私に劣情を催して、一人寂しく裸で慰めているなら——それはそれで断罪するけど—————ただし『冬の寒さを全身で感じたかったんだ』なんて理由で真っ裸になる変態はいやよ、無理よ。えんがっちよよ、えんがっちよー!」

「まあまあ、カズマも出来心だったんだ。寒さを感じたくなる気持ちも私も分かる。あれはあれで良いものだ。・・・それにカズマは自分の部屋で裸になったただけだろう?その後、裸でめぐみんを取り押さええたのは褒められた事ではないが、あんな状況なら混乱もするし間違えもする。それにまだ初犯だ。長い目で見ていこう」

「変態を長い目で見てどうするつもりなの!?!ダクネスみたいな子が増えたら困るんですけど!?!」

「それはどういう意味だっ!?!」

よく分からない会話をする二人の前で、サトウカズマがタオル一丁で正座してる。なんか、とてもシユールな絵だ。

サトウカズマが変な言い訳してめぐみんを取り押さえるから、凄いい混沌としてしまった。『俺は冬を感じたかったんだああ!!』は流石に無理がある。大人しくして待っててくれれば良かったのに.....。

俺はというと、怯えた様子で抱き着いてくるめぐみんの背中をポンポンしてる。余程びっくりしたのだろう。可哀想に。よしよし、びっくりしたねー。いきなりあんなブーメラランちんちん間近で見たら

びっくりするよねー。

ポンポンしながらサトウカズマ達を傍観していると、何を思ったのかめぐみんがすんすんと臭いを嗅ぎだした。さっきのサトウカズマのような、嫌な汗が俺にも滲む。

「カナデ、なんか臭いです。何ですか、この臭い……ん？ 嗅いだことがあるような？ カズマの——」

「サトウカズマの洗濯物触ったからか？ あいつの洗濯物たまに凄い臭いするからなあ」

これは嘘だけど、丸つきり嘘でもない。

一番最初サトウカズマを襲った時、あの時はまだパンツ超精液臭かったもん。むおおおって、したもん。むおおおって。

「……そーいう事にしておきます」

そう言つてめぐみんは、グリグリと頭を押し付けてきた。その何処となく犬っぽい仕草に、昔近所で飼っていた妙に人懐っこい犬を思い出してしまう。誰にでも尻尾をふる馬鹿ワンコだったけど……そんな馬鹿ワンコを撫でるのは日課で、好きな事だった。

ワンコを思い出しながらめぐみんの頭を撫でてみたら、そんなに嫌そうじゃなかった。寧ろもっと撫でろと言わんばかりに頭をグリグリされてしまう。

なので一杯撫で回してあげた。髪の毛がグシヤグシヤになるまで。

サトウカズマがなんやかんや許された頃、バカデカイ警報音が鳴った。すわ、やっぱりゴジ●がいるのか!？ と思ったけどそうじゃないよ
うで——

『デストロイヤー警報！ デストロイヤー警報、機動要塞デストロイヤーが、現在この街へ接近中です！ 冒険者の皆様は、装備を整えて冒険者ギルドへ！ そして、街の住人の皆様は、直ちに避難してください！』

——そんな悲鳴のような声が響いていた。

機動要塞があるなら、機動戦士とか機動天使とか出てきそうですね。え？出てこない？そうですか。

「デストロイヤーと戦うなんて無謀過ぎます」

機動要塞デストロイヤー。

ギルドの酔っ払い達やら街の子供達からよく聞くその名前に、魔王軍幹部相手にですら噛みつく、頭のおかしいを通り名とする喧嘩っばやい事この上ないめぐみんが、珍しく深刻そうな顔つきで反対してきた。

水色に関しては論議する間もなく荷造りを始め、ダクネスも何やら大急ぎで部屋に走って行ってしまおうそんな状況。いつもより不穏な何かを感じていたが、よもやめぐみんがそんな事言うとは思わなかったので、正直びっくり。

俺は防具を取り付ける手を止め、心配そうにこちらを見つめるめぐみんに視線を返した。

「カナデ、ギルドに行くなんて本気ですか？」

「うん？まあ、呼ばれたし」

「カナデは知らないかもしれませんが、機動要塞デストロイヤーは本当に凄い兵器なのです——」

めぐみんによれば機動要塞デストロイヤーはかつてとある魔導国が造り上げた対魔王軍決戦兵器らしい。クモを模した超大型のゴレムであるデストロイヤーは魔法金属がふんだんに使われており、見掛けの重厚感とは裏腹にかなり軽く造られていて、馬より速く駆ける事が出来るそうだ。軽いといってもそれは見掛けに比べてというだけで、その驚異的な速度と質量からなる突進は大型モンスターを容易く挽肉にする程だとか。

その上デストロイヤーの巨体には常時強力な魔力結界が張られていて、魔法攻撃のその殆どを無力化してしまおうらしい。

弱点がないのか？と言われれば物理攻撃が比較的有効ではあるらしいのだが・・・先にめぐみんが教えてくれた通り近づけば挽肉の刑

に処されてしまうのでそれも難しく、遠距離攻撃も個人が扱うような弓や投石武器では魔法金属の装甲に弾かれてしまうのだと。攻城用武器ならまだ成果を見込めるらしいが、その機動性が故に命中させるのが至難らしい。

仮に何とかして乗り込み内部から破壊を試みたとしても、デストロイヤー内部には防衛用の自立機動するゴーレムが多数存在していて、それも難しいのだとか。

「・・・ふうん。てか、やけに詳しいな。なんか因縁とかあったりするの？」

何とはなしに聞いてみると、めぐみんが顔を曇らせた。

「・・・そうですね。カナデには教えてませんが・・・私の故郷である紅魔の里は、ヤツに滅ぼされたのです。私の家族も・・・」

「滅ぼされた・・・」

「はい、この右目にはその時犠牲になった里の者の意思が、膨大な魔力と共に込められているのです。魔力は多くの意思が混ざりあった結果その形をかえ魔獣となりました。普段眼帯をしているのは、その強大過ぎる魔力を、魔獣を封印する為。天才たる我でさえ、日に一度十秒解放するのでやっという代物——ふあっ!？」

物憂げな表情で語るめぐみんに思わず体が動いて、気がつけばその小さな体を強く抱き締めていた。急にそうしたせいで驚いたのか、めぐみんが戸惑いの声を漏らす。

普段からちやらんぼらんな事ばかり言うから、家出同然でアクセルの街にやってきた破天荒娘だと勝手に思っていた。それが、そんな重い過去があるなんて——。

「かなっ、カナデ？あの、あのですね・・・その」

夜にやってくるのも、妙に甘えてくるもの。

やっとその理由が分かった。

少しでも邪険に思っていた事、情けなく思う。

「俺で良かったら、幾らでも甘えてきて良いからな。本当の家族だと思つて遠慮なんてするな。大丈夫、ちゃんと受け止めてやるから。約束する。——だから一人で頑張ろうとしちゃ絶対駄目だぞ」

抱き締めためぐみんの体温が伝わってくる。

ドキドキと脈うつ鼓動の音も。

故郷を滅ぼされた事なんてないけど、家族を失う悲しさも、いない寂しさも少しだけなら分かる。あんな父親だったけど、いない方が良かったなんて思った事はなかったし。

「めぐみんの気持ち、ちゃんとは分かかってあげられない。けどな、少しだけなら分かるよ。俺もさ、お母さんがいなかったから」

「えっ!?あのおっ——」

「少しだけならなら覚えてるんだ。小さかったから、あんまり覚えてないんだけど・・・でも悲しかった事は覚えてる。沢山泣いて、それでも悲しくて——」

抱き締めためぐみんを撫でていると、少しだけ思い出した。昔のこと。お母さんのこと。撫でられたこと。いなくなってしまったこと。冷たくなったお母さんの前で、父さんが手を握りしめてくれたこと。

「——もう大丈夫だからな。よく一人で頑張ったな。めぐみん」
ぎゅつと抱き締める。

あの時、最後にお母さんがしてくれたみたいに。

「——かかかかつ、カナデっ!!ごっこ、ごめんなさいっ!嘘なのです!!ちよつと格好つけたくて、その、ごめんなさい!!そんな顔しないで欲しいのです!!」

「——おうっ..」

思っていた反応とあまりに違い、しかもいきなり謝ってきたので不思議に思つて事情を聞いたら大体嘘だった。故郷に被害が出た事はあったものの何十年も前の話な上、当時大した被害もなかったらしい。あと右目には何も封印されてないのだとか。

妙にデストロイヤーに詳しくかった理由を聞けば「紅魔の里の人間なら割と常識です。それにあんなカッコいい兵器、調べない方がどうか

していると思いますが・・・」らしい。

何がともあれ、何もないならそれに越した事はない。

嘘をついた代償としてめぐみんにはデコピンの刑に処して、俺は準備を急いだ。

「地味に痛いのですが・・・カナデ、本当にいくのですか？故郷うんぬんは嘘ですが、本当に滅ぼされた国も街もあるのですよ？私の爆裂魔法でも倒せない相手なのです」

「まあ、何とかなるでしょ」

「何とかなるとは思えません。何を根拠に言っているのですか？」

何を根拠って・・・それは決まってる。

「あのサトウカズマがやる気になってるし、だから大丈夫でしょ」

迷いなく戦闘準備を始めたあいつの背中を思い出しながらそう笑ってみせると、めぐみんは深い溜息を吐いた後「カズマを説得するのが先そうですね」と小さく呟いた。

それからなんやかんや全員でギルドに行くと、思っていた以上の冒険者達が集まっていた。皆事態を重く見てるのか重装備が多く、覚悟を決めた険しい顔つきをしている。トンスラこいただろうなと思っていたダストが戦闘準備して来ている事には驚いた。あのチンピラにも人の心はあつたらしい。眺めていたらウインクされてしまい、心が何かに蝕まれた気がするのので後で感謝料を請求しようと思う。

ある程度冒険者が集まったのを確認すると受付のルナさんから機動要塞デストロイヤーについて説明が始まった。概ねめぐみんから聞いた話と同じで倒すのは勿論、動きを封じたりも難しいようだ。

ルナさんの話を聞いて冒険者達が暗い雰囲気になるも、何とか打開策はないかと議論を始める。

そんな中、サトウカズマが水色に何か確認し始めた。「魔王軍がー」
とかなんとか――って、水色。話ガン無視で何してるのかと思え

ば、その水だけで机に描いてる絵はなんなん？こんな時に何新しいジャンル確立してるの？地味に凄いなけど。

水色の芸術作品を眺めていると、「魔力結界を破るの？」という間の抜けた水色の声が聞こえてきた。

周りにいた冒険者達が一斉に水色へ振り向くが、水色はそれに気づかずウーンと唸り声をあげてから続けた。

「やってみないと分からないわよ？結界を破れる確約は出来ないわ。麗しくも気高いアークプリーストな私とはいえ、ここに来てから大分力が弱くなっちゃってしまってるし——」

独り言のようなそれにルナさんがダツシユしてくる。

そして水色の手をがつつり掴むと息を荒らげながら「出来るんですか!？」と大声をあげた。

「だ、だから、やってみないと分からないわよ!？」

「それでもっ！可能性があるならお願いしますアクアさん！魔力結界さえなければ、遠距離からの魔法攻撃が仕掛けられます——あ、

いや、でも、駆け出しの街に、魔法金属を通す程の火力持ちなんて」
光明が見えてきたと思ったら、また暗くなっちゃった。忙しいことだ。暗くなるにはまだ早いだろうに。

「な、めぐみん?」

「ええ!?!私ですか!?!はっ!?!」

めぐみんの声に視線が集まってきた。

いつもの危険物を見るような視線ではなく、期待こもったその眼差しにめぐみんは顔を赤くしてモジモジする。ついでに口元がニヨニヨしだした。

「い、いえ、それは確かに、我が爆裂魔法は最強の魔法ですが……さ、流石に一撃では仕留めきれない……と、思われ……うう、カナデえ」

集まる視線に堪えきれなくなったのか、顔を真っ赤にさせためぐみんは俺の後ろに隠れてしまった。照れてるのか、グリグリと背中に顔を押し付けてくる。

もう一人。

もう一人、強力な魔法の使い手が入れば。

そんな空気が漂う中、ギルドの扉が元気に開かれた。

「すいません、遅くなりました．．．！ウイズ魔道具店の店主です。

一応冒険者の資格を持っているので、私もお手伝いに——」

そこに現れたのは黒のローブの上にエプロンをつけた、以前録音機を売ってくれた、魔道具店の太っ腹な幸薄店主さんだった。

店主さんの登場は冒険者達にとって喜ばしい事のように大歓声があがった。「これで勝てる！」とか「貧乏店主さああん！」とか「夢でお世話になってます」とか、あがる声はそれぞれ内容が違うけど、歓迎してる事には変わりはないようだ。

しかし貧乏魔道具店の店主一人になぜ？

少しだけそんな疑問を抱いていると、サトウカズマも気になったのかその事をキースに尋ねていた。

俺もまぜてもらい話を聞くと、今でこそ引退しているものの、店主さんが元は高名な魔法使いだったらしい事が分かった。どうやらただの貧乏店主ではないらしい。

ぼやーっと眺めていると店主さんと目があつた。

俺は久しぶりの再会に手を振ったのだが、店主さんは何故だかこちらを見て震え出してしまふ。

「ひいっ！！いつかのウエイトレスさん！！」

ずざああつと、勢いよく避けられた。

解せなかつたので近づいたのだが、もっと後ずさられた。

どうしようか悩んでいたらサトウカズマに肩ポンされてしまふ。

「何してんだ、お前は」

「別に何もしてないけど．．．」

「何もしてなかったら、こっちはならないだろ」

そう言われても困ってしまう。

別に大した事はしてないのだから。

「といってもなあ．．．ちよつと話し合いして、買ったかったヤツを定価の九割引で売って貰っただけで．．．何も無いぞ？」

「値切りに値切ってんじゃねえか。思った以上にあげつないわ。鬼

か」

「だって、いけるかなっ？って思ったらっい」

サトウカズマに促されごめんなさいする事になった。

ごめんね、店主さん。

今度は手加減して、五割引くらいを狙うから。

「ひいっ！」

「また怯えさせてどうすんだ！」

「あたっ！」

強大な敵に半分義務で挑みますが、保険は聞きますか？聞かない、ほほう。帰って良いですか。

店主さんことウイズの合流により、非現実的と思われていた機動要塞デストロイヤーの討伐作戦は一気に進んだ。職員が中心によって行われた会議によって怒涛の如く作戦内容が具体的になり、各員の配置と役割が決まり、作戦の責任者が決まり——とんとん拍子という言葉の見本のような様子がそこにあつた。

そして今、決まった作戦を実行する為に、俺達はデストロイヤーを迎え撃つ決戦の場所、街の正門の前に広がる平原にて、敵の到着を今か今かと待ち構えていた。

「たく、ダクネスはしゃーねーなあー……てか、なんで俺が……指揮者なんだ」

作戦の指揮者であるサトウカズマと共に。

最後防衛ラインへ張り付いたダクネスに離れるよう説得しにいったサトウカズマは、結局一人で俺が待機してる元の配置に戻ってきた。ぶつぶつと呟いてるその内容を聞けば、ダクネスの意地が勝ったらしい。

「おかえり。俺は、サトウカズマが指揮者は適任だと思っただけだな？」

「おまつ、聞いてたのかよ。つか、他人事だと思っただけ……」

弱音を吐くサトウカズマの撫で撫でしながら、俺はデストロイヤーがやってくると言われた地平の彼方を眺めた。まだ姿は見えないのでピンと来てない所があるが、周りの雰囲気を見れば冗談だったり嘘だったりの可能性はない。必ず来るのだろう。これだけの冒険者がいて、匙を投げてしまうような化物が。

「——なあ、カナデ」

ぼんやり風景に散らばる冒険者達の姿を眺めていたら、サトウカズマの声が聞こえてきた。視線を向ければこちらを見つめるサトウカズマと目が合う。

「どうした？」

「……いや、やっぱ止めとく。フラグになりそうだし」

「何言う気だったんだよ……まったく」

ピイツと前を向いてしまったサトウカズマの様子に、少しだけムツとした物を感じる。だからサトウカズマの横へと並んで顔を覗いてやった。

覗いた横顔は、なんか少しだけ赤い。

「もしかして……エロい事頼もうとした？フェラとか……ああ、おっぱいする？」

「こんな場所で、んな事頼むかああ!!公衆の面前でんなこと頼んだら、俺本物の鬼畜になっちゃうだろうが!!——てか、お前の中での俺は、どれだけ節操なしなんだよ!？」

ううん？二人きりだと結構遠慮なくなつて気がするけど……でもまあ、それもそうか。

ふと周りを見渡すと少し離れた位置に冒険者達が点々としているのが見えた。デストロイヤーが進行方向を変えた時、纏まっていると直ぐに行動出来ない為、戦力を分散して対応出来るよう配置されているのだが——各員それほど離れていないから、やることやったら丸見えになってしまうと思う。

サトウカズマはあんまり青姦とかには興味なさそうだったし、基本的に人に見られるの好きじゃなさそうだしね。俺は興奮するけど。

外エッチ、いつかしたいなあ。

妄想していたら、ぎつと頬つぺたをつねられた。

あんまり痛くないけどちよつと驚いてしまう。

つねってきたサトウカズマを見れば、物言いたげにこっちを見つめてきていた。

「何考えてんだ……顔に滲んでるぞ、ド変態」

「ちよつと意味が分からないなあー何が滲んでるって?」

「碌でもない事考えてたろ。どうせ」

そう言うと、サトウカズマは俺の後ろを見た。

つられて見るとめぐみんが何かを呟きながら俯きプルプルしてる。

この後の大役を任されたプレッシャーに、まだ心が吹っ切れてない

らしい。めぐみんのフォローが俺の役目なので何としないといけないのだが・・・どうしよっかなあ。

「カナデ」

囁くような声に振り向くと唇が重なった。

ほんの少し、触れるだけのキス。

なのに触れた所が凄く熱い。

いきなりの事に少しぼーっとしたが、直ぐに状況を思い出してサトウカズマを睨んでやる。

めぐみんに見られでもしたらどうするのかと。

すると、真剣な目がそこにあつて——出掛かった文句を思わず飲み込んでいた。

「映画とか漫画とか・・・そういう物の中で、フラグになりそうな事言うやついるだろ。いつもさ、あーいうの見て何で言っちゃうかなあとか思ってたけど・・・今なら分かる気がする。理屈じゃないんだろうな・・・」

その目に灯る熱に、何故か胸が高鳴る。

バクバクと心臓の音が聞こえてきて、顔が熱くなっていくのが分かる。

目を合わせているのが辛くなって、気がついていたら目を逸らしていた。けれど、いつまでもそうしていられなかった。そつと頬に添えられたサトウカズマの掌で、顔を振り向かせられたから。

その手つきはエッチの時みたいに・・・いつもするみたいに・・・

優しく、温かくて、くすぐったくて——心地よかった。

「カナデ、俺な——」

「かずつ、かずかずかず、カズマさああああん!!なんか来たっ!!ねえ!なんか来たんですけどおおお!!」

サトウカズマの言葉を遮るように水色の声が響いてきた。不機嫌そうにあたり視線をやったサトウカズマは、ある方向を見て目を見開く。

サトウカズマが何を見たのか気になってそつちに振り向くと、地平線の彼方から現れた大きな影な目に留まった。

その影は少しずつ大きくなっていく。

近づくに連れて、少しずつ。

そして距離が縮まるその様子に理解する事になった。

どうして誰もが逃げる事をいの一に考えたのか。

分かってしまった。

小山の如き圧倒的な巨体を揺らし、地響きを鳴らしながら高速で近づいてくる化け物を見てしまえば。

いやでも。

冒険者達の動きに戸惑いが混じったその時、大きなアナウンスが響いてきた。

ルナさんの声だ。

『機動要塞アストロイヤーを目視で確認!! 冒険者の皆さん準備をお願いします! 最悪を想定し、街の住人の避難は完了していますので、いざというときは迷わずに撤退してください!!』

響くルナさんの声には震えが混じっている。

けれどその声はそれでも続いた。

勇気を振り絞るかのように力強く。

『——ですが、ですが! この街の住人の一人として、いえ、私個人の手を言わせて頂ければ! 私は、この街で、また皆さんと会える事をつ、切に願っております!! また、あの場所です、皆さんとお仕事出来る事をつ、願っております!! ——ご武運を!!』

その言葉に声にどれだけの意味があったのか分からない。所詮はただの言葉。

でもそれはここにいる皆の耳に響いて。

誰かの足を確かに動かした。

「第一陣つ、出るぞ!!」

男の野太い声に何人もの声が続く。

それぞれがそれぞれの役割を果たす為に動き出す。

それはまるで一つの生き物のように。

「サトウカズマ」

促すように声を掛ければ、サトウカズマは大きな溜息をついた。そしてゆっくり顔をあげる。今日一番の引き締まった表情を浮かべて。

「やるかつ」

その声に俺は頷いた。

作戦が開始されてから少し。

デストロイヤーとの戦いは早くも佳境に来ていた。

防衛ライン第一陣、第二陣、第三陣と突破され、残す所後二つとなった防衛ラインを前にして最後の徹底抗戦が行われていた。

度重なる妨害によって速度を落とされた鉄の巨体を目掛け、魔法職の冒険者達から攻撃魔法が発せられる。何十人も人間によって放たれた攻撃魔法は煌めきながら、雨のように鉄の巨体へと降り注ぐ。

豪雨のように落ちる魔法。

甲高い音が短く幾度も鳴り響いていく。

しかし、鉄の身には未だ一つとして傷はない。

何故なら傘のように展開された魔力結界が、降り注ぐそれを弾いていってしまったからだ。

だが、その光景を前に悲壮な顔を浮かべる者は少ない。

何故ならそれも作戦の内、この後の水色の攻撃を通しやすくする為、少しでも魔力結界を消耗させるのが目的なのだから。魔力結界も所詮は魔法。魔法は魔力によって発動するもので、無限にだし続けられる訳ではない。

攻撃を受けながらもデストロイヤーが第四陣を突破した所で、サトウカズマが怒号をあげた。

「アクア!! 今だ、やれっ!」

その声に配置について水色がその身を輝かせる。
珍しく女神様みたいに神々しい。

『セイクリッド・ブレイクスペル』ツ!」

周りに巨大な魔方陣が浮かび上がり、小さな白い光の玉が水色の周囲に漂う。それは水色が手を翳すと掌の先に集まっていき、一つの大きな光の玉へと変わり、デストロイヤー目掛け飛んでいった。

光の玉がデストロイヤーにぶつかると一瞬光の膜が現れて抵抗したが――直ぐにヒビが入りガラスのように割れ粉々に砕け散っていく。

歩みは止まらないが問題はない。一番の問題をクリアした以上、あとはめぐみん達の攻撃で仕留められる。

「めぐみん! ウィズ! 頼むぞ!!」

サトウカズマの掛け声に店主さんは頷いたが、めぐみんはまだ緊張して震えていた。

敵に向けた杖がプルプル震え、詠唱も噛み噛みで危なっかしい。

ちよつと前に励ましておいたんだけど、まだ立ち直つてなかつたよ
うだ。

「めぐみん、めぐみん」

「あっ!?! はふあ!?! はい!?! めぐみんです!」

「緊張し過ぎだろ」

引き寄せてぎゅつとしてやれば、少しだけ震えが小さくなった。

「深呼吸しな、めぐみん。大丈夫だから」

「は、はい……」

「そのまま、深呼吸しながら聞いてくれな。成功とか失敗とか、そういう事は気にしなくていい。めぐみんはいつも通り爆裂魔法を撃てば良いんだ。サトウカズマと撃ちに行った時みたいに」

「ですが――」

「大丈夫。力一杯撃つてこい。いつもみたいに。あとの事は俺達が何とかしてやる。だからな、めぐみん、気持ちの良い一発頼めるか?」
めぐみんは俺の体から離れ、マントを翻し杖を掲げた。

「かつ、カナデに言われるまでもありません! ……我が名はめぐみん

!!アークウィザードにして爆裂魔法を愛し、極めんとする者!!見せてあげますよつ、取って置き、渾身の、最強の爆裂魔法を!!」

煌々と輝き出した瞳でデストロイヤーを見つめたためぐみんはいつか聞いた詠唱を口にした。

『黒より黒く、闇より深き漆黒に』

めぐみんの様子に遠目から見ていた店主さんが続く。

『我が真紅の混交に望み給もう』

急速に二人の元に魔力が練り上がっていく。

『覚醒の時来たれり、無謬の境界に堕ちし理、むぎよの歪みと成りて現出せよ!』

杖の先端についた玉が光を灯す。

『踊れ、踊れ、踊れ——我が力の奔流に望むは崩壊なり。並ぶ者なき崩壊なり』

巨大な魔方阵が現れ、大気が大きく揺らぐ。

『万象等しく灰燼に帰し、深淵より来たれ!これが人類最大の威力の攻撃手段!!これこそが!究極の攻撃魔法—————エクスプロオオージョンツ!!』

爆風と共に二つの火炎の塊が、鉄の巨体へと落ちる。

まるで流星のようなそれは、轟音をあげながら熱と風を撒き散らしながら鉄の巨体より伸びていた脚を穿ち、一つ残らず粉碎していった。

脚を失ったデストロイヤーは地面に落ち、走っていた勢いそのまま地面を滑る。地響きを起こしながら滑っていったデストロイヤーの巨体は、最終防衛ラインに立つダクネスの目前まで迫ったが———そこでようやくやく止まった。

きりつとした顔でデストロイヤーを見つめ続ける、実際何もしてないダクネスは放っておいて、俺の背中の上で爆裂魔法の反動によってぐったりしてるめぐみんの様子を見た。

めぐみんは動かない体で何とかデストロイヤーの様子を見ようとモゾモゾしてる。見易いように体を傾けてやれば、デストロイヤーの姿を見て「くっ」と悔しそうな声を漏らした。

よくよく見ればめぐみんの攻撃が当たった所と、店主さんの攻撃が当たった所ではダメージの大きさが違っていた。店主さんの方は根元までバツカーアーンなってるが、めぐみんの方はチョロツと脚の根元が残ってる。

差はそこまでないように思うが、めぐみんには気に入くないポイントだったようだ。

「まあまあ、凄かったぞ？お疲れな」

「うう、そういう問題ではないのですが・・・カナデには、一番凄いのを・・・いえ、何でもありません」

少し頬を膨らませ、めぐみんは背中にグリグリしてきた。どうしても納得出来ないらしい。うんうん、今度頑張ろうなあー。

それにしても、これで本当に終わったのだろうか。

ふとデストロイヤーを見ると、俺と同じ様にサトウカズマが沈黙したそれを眺めていた。

状況を理解した冒険者達が喜びの声をあげ始めた頃。

呑気な声が響いてきた。

「やったわ！何よ、機動要塞デストロイヤーなんて大袈裟な名前しておいて、期待外れも良いところだわ。さあ、帰ってお酒飲みましようか！なんとたつて一国を亡ぼす原因にもなった賞金首よ。報酬は、一体お幾らかしらね!!」

「あつ、おまつ、馬鹿っ!!」

——ピキーン。

俺の頭の中で何か光みたいなのが走った。知ってる、俺こういうの知ってる。

サトウカズマがさっき言ってた、あれだ。

「——フラグ」

急に地鳴りが始まった。

震源は沈黙した筈のデストロイヤー。

果てしなく嫌な予感がする。

ビービーと如何にも警告音くさい音がなり、ひび割れた感情の籠ってない声が響き始めた。

『この機体は、機動を停止致しました。この機体は、機動を停止致しました。排熱、及び機動エネルギーの消費ができなくなっています。搭乗員は速やかに、この機体から離れ、避難してください。この機体は』

難しい言い回しだが、ようは消費出来ないエネルギーが溜まって、その内爆発しますよって事じゃないのだろうか。これ。

ふとデストロイヤーからサトウカズマを見ると、水色の両肩を掴み激しく揺すっていた。

その顔に怒りを浮かべて。

「ほら見た事か！お前って奴は、一つ役に立つと、二つ足を引っ張らなきや気が済まないのか！」

「待って！ねえ待って！これ、私のせいじゃ無いからっ！私、今回まだ何もしてない！！濡れ衣よおー！！」

不吉な事は言っただけ、流星に今回は水色のせいじゃないから離してやれ。サトウカズマ。

今回は、そいつのせいじゃないから。

今回は。

なんやかんやいっても適材適所ってありますよね？
はい、頑張れる所で頑張りましたよ。

拝啓、父さん。

冬將軍の到来により寒さも本番になってきました今日この頃、如何お過ごしでしょうか。相変わらず寒いのは苦手だと、南半球の何処かに逃げていますでしょうか？オーストラリア辺りでしょうか？カンガルーと殴り合うのは程ほどにしてください。あとご機嫌とりにお土産買って帰っても、借金取りしかないので気をつけて下さい。一円も返済出来ていないので、ひやくぱー捕まります。またインド洋でマグロ漁かベーリング海へ蟹漁行きですよ。

さて、色々あつてぽっくりいった俺ですが、今はアクセルの街という所で冒険者という仕事をして、なんやかんや元気に楽しく過ごしています。念願の女の子にもなつて、今はサトウカズマという男友達と楽しいセックスライフを送る日々です。エッチって、本当良いものですね。ズッコンバツコンはとても素敵です。子宮口をグリグリされるのがたまりません。中出し最高です・・・と、少し話が脱線しましたので戻します。

こちらに来てから色々ありました。最近では冒険者仲間であるパーティーメンバーと大きなお屋敷で同居しています。水色という頭のネジが幾つか外れたお酒好きな宴会芸マスターの女の子、何処か頭のおかしいけれど子犬系で可愛いめぐみんという女の子、ドMノーコンメス豚むつつり騎士——それとさつき言つてたサトウカズマもその一人だったりします。

同居という事もあつて色々ありました。それも皆で協力して解決し毎日楽しく過ごしていた・・・のですが、少しだけ見逃せない問題が起きてしまいました。せつたく住み着いたお屋敷を壊そうとするゴジ●的な何かが来てしまったのです。

ですから俺達は——。

「っうだらあ!!!」

ゴジ●的なそれと元気に絶賛戦争中です。

停止したデストロイヤーに乗り込んだDMを追いかけて少し。俺は自前のモーニングスター先生を立ちはだかるゴーレムの顔面に叩きつけていた。

砕け散る顔面に浮かぶ光の瞳。

輝きが消える気配はない。

だから再び振りかぶり、思い切り振り下ろす。

バキヤツと石が飛び散り頭が粉碎。

今度こそゴーレムの体から力が抜けていく。

「カナデさんっ!」

声に振り返ると死角となっていた通路からゴーレムが腕を振り上げてやってきていた。

身を屈め振り回された攻撃をかわし、がら空きになった脇腹へトゲトゲしい鋼鉄の塊を叩き込む。鈍い音と共にゴーレム装甲が歪み、ゴーレムは目の光を揺らしながら僅かによろめく。

その隙を逃すまいと大剣を構えた男が滑り込んできて、ゴーレムを頭から幹竹割りに一刀両断する。

見事な一振りに少しだけ感心した。やったのがそいつじゃなければ見惚れたかもしれない。

「大丈夫だったかい?」

そう言つてギザつぽい笑顔で振り返ったのは、いつかの気持ち悪い奴。名前は忘れた。ミタラシとか、そんなだった気がする。

「ま、大丈夫。ありがとミタラシ」

「いや、気にしないでくれ。同じ冒険者、いざという時は助け合わねば……ミタラシ?——はっ!またかつ!」

ミタラシが見つめる先に視線を向ければワラワラと現れるゴーレムが見える。俺は一緒にゴーレム討伐に残ってくれた冒険者達へ号令をかけ再び迎撃を開始。手当たり次第に力一杯ぶっ叩いていく。

「しかし、このゴーレムの数は辟易するね。先に進んでいった皆が心配だ！女神様——いや、アクア様達も無事だと良いが！」

ミタラシがゴーレムを撫で斬りにしながら声を描けてきた。まだまだ余裕があるらしい。

「大丈夫だっ、ろお!!この集まり方なら、こっちに大半引き付けられるだろうしっ!!それにあっちにはサトウカズマがいる——あっ!!先生え!?!」

ゴーレムの頭を叩き飛ばした瞬間、モーニングスター先生の柄が崩御されてしまった。気持ちが良いくらいにポツキリだ。

まさかの状況にびっくり、せめて向かってくるもう一体分くらいは生きてて欲しかった。

「カナデさん、これをつ!!」

ガンっ、という音が聞こえる。

声に顔を向ければゴーレムが持っていた大きめのメイスが飛んできていた。体勢を考えれば蹴り飛ばしたのだろう。人が蹴り飛ばせるサイズじゃないだろう、とか心の中でツッコミつつそれを掴み——

「——どおおっ、せえい!!!」

轟音が鳴り、衝撃が手に走り、粉碎したゴーレムの欠片が飛び散る。頭を潰されたゴーレムはよろめきながら後ろへと倒れていった。立ち上がってくる様子はない。

メイスの感触を確かめていると、ミタラシが親指を立てて見せてきた。

「ナイス、カナデさん」

「さんきゅ、ミタラシ」

「・・・ミタラシ?」と首を捻るミタラシは放置し、俺はまだ動いているゴーレムへと向かった。先にいったサトウカズマの道が少しでも開けるように。

少し前、ダクネスを追い掛けて中に侵入すると、ゴーレムの群れにリンチされる恍惚の表情を浮かべたダクネスに遭遇し——あ、いや、沢山のゴーレムと遭遇した。

その数は数えきれないほど多く、また中々に頑強揃い。それでも全員で戦えばなんなく倒せる相手だったが、生憎と全員が戦うスペースはなく、その上のデストロイヤーの自爆を阻止する為の時間も限られていた為に断念。結局、戦闘班をデストロイヤーの動力源を壊す突入班と、敵を引き付ける囷を兼ねた迎撃班の二つに分け行動を開始する事になった。

サトウカズマは水色と突入班に。

俺はダクネスと共に迎撃班に。

サトウカズマは俺が迎撃班として残る事を最後まで納得いつて無さそうだったけど、そこは適材適所という事で納得して貰った。一緒についていった所で魔道具の事なんて分からないから手伝える事はないし、俺がいなくてもフオローしてくれそうなメンツが揃っていたし——何より、あの変態を野放しにしとくのは憚られるものがあった。

そうしてなぶられるダクネスをささっと助け、俺は戦い始めたのだ。

戦い始めて暫く、ゴーレムの数が数える程度になった頃。鼓膜を揺らし続けていた警報が止まった。突然の事に何人かゴーレムに不意を打たれていたが、しっかり者の俺はそんなドジしない。目の前の奴を殴り倒してから様子を窺ったので全然大丈夫だ。

「危なかったね、カナデさん」

助けられてなどいない。

経験値を譲ってやっただけだ。

そんな事よりサトウカズマ達は大丈夫だろうか。

警報が止まった以上動力源の暴走は止まったのだろうか……。

「……そこまで無視されると、流石に僕も傷つくんだけど」

「うるさいなあ、何だよ」

喧しいので見てやれば、ミタラシが苦笑いを浮かべ頬をかいていた。

「戦闘中、中々息合っていたし、その、悪くない感じだったような気がしてただけど……大分嫌われちゃってるみたいだね。僕」

嫌いというか、なんというか……。

「嫌というより、生理的に受け付けないというか」

「ああ、うん、聞かなければ良かったかな」

ミタラシは酷く落ち込んだような顔になった。

それでも油断はしてないのか、背後からきたゴーレムを一太刀で切り伏せる。戦闘中ソードマスターがどうか言っていたけど、腕は確かだよ。不意打ちとはいえ、サトウカズマよくこいつに勝てたな。

「——ふう、あとは大丈夫かな。……あー、僕の話聞くのも嫌だとは思うんだけど、少し聞いて欲しい事があるんだ。あの時、そう、サトウカズマと勝負した時の事さ」

「今更……？勝負についてだったら、もう終わってる事だろ？」

「あ、違うー怒らないで聞いてくれ……勝負は僕の負けだ、それは間違いない。油断していたとはいえ、ソードマスターでありながら駆け出しの冒険者に負けるなんて言い訳も出来ないよ。そうじゃないよ……その、あの時の言葉を撤回したくてね」

撤回という言葉に首を傾げるとミタラシが頭を下げた。

「すまなかった。君達のことをよく知りもしないで、貶めるような事を言ってしまった——本当にすまなかった」

その言葉にはただただ誠実さが滲んでいた。

顔をあげたミタラシの目もまた馬鹿みたいに真っ直ぐで、駆け引きとか苦手なんだろうなあとか、女の子関係で知らず知らずのうちにやらかしてる系なんだろうなあとか思ってしまう。

「女神様——いや、君達がアクアと呼んでいる彼女は僕の大切な恩人なんだ。あまり詳しくは言えないんだけど……本当に大切な人なんだ。だからあの時、檻に閉じ込められてる姿を見て、ついカツと

なつてしまつて……あ、いや、すまない。言い訳したい訳じゃなかつたんだけど」

「いいよ、もう別に。そもそも俺は怒つてないし。いうならサトウカズマに直接言つてくれ」

「ああ、サトウカズマにもいずれ。……というか、怒つてないのか。じゃあ、その、本当に？」

「おう、生理的に受け付けないだけだ」

うめき声をあげながらミタラシは胸の辺りを擦つた。

凄く苦しそう、なんか効いたようだ。

「ぼ、僕、その……アクア様にも毛嫌いされてるみたいなんだけど……何でかなあ？」

「その理由に気づいてない所とか、もう既にアウトだと思ふんだが」
「……自分で考えてみるよ」

項垂れるミタラシを眺めているとその声が聞こえた。振り返ればちよつと枯れたサトウカズマの姿が見えた。

手を振れば弱々しくだけど手を振り返してくる。

おや？なんか手がちよつと赤いような気がする。

何をしたんだか？

「……サトウカズマが羨ましいよ」

「ん？なんか言つた？」

「いや、こつちの話さ。それより僕なんて放つて行つた方が良いと思うよ」

「んん？まあ、言われなくてもそうするけどさ。じゃ、またな」

「ああ、また」

それからサトウカズマと合流し、分かれていた間に起きた出来事を教えあつた。何故だかしきりにミタラシの事を聞いてきたが、あれはなんだつたのか？もし変な勘違いして嫉妬してるのだとしたら心外としか言えない。俺にも相手を選ぶ権利がある筈だ、と。そう言いた

い。

途中いなくなっていたダクネスとも再会し一件落着——となれば良かったんだけど、そうは問屋が卸さずデストロイヤーまさかのリベンジ暴走。すっかり勝ちムードに浸っていた冒険者達の間でパニックが起きた。

「『エクспロージョン』ッ!!」

まあそんな一混乱も、サトウカズマのスキル・ドレインタッチによつて水色から大量の魔力を貰ったうちの頭のおかしい破壊系魔法女子が、笑顔と共に木っ端微塵にしてくれたんだけど。

ん？デストロイヤーの更なるリベンジ？

無かったよ。ほんこれで、終わり。

報奨金幾らになるんだろうか。

借金返し切れたら良いなあ。

☆居酒屋でこっそり悪戯してても良いじゃない。バレないようにやるからさ、ね。

「デストロイヤー討伐を祝してーっ、かんぱーっい!!」

何度目になるか分からない乾杯だが、飽きもせず一斉に何人かの手が上がる。酔った勢いで上がったジョッキからはお酒の飛沫が飛び跳ねてしまい、周囲はさらに酒の匂いで満たされていく。

ギルド職員と冒険者全員参加の祝勝会も終わり、近場の酒盛り場での二次会へと移行した今現在。時刻は既に深夜をぶち抜き『朝ですか？夜ですか?』と言われたら『朝かなあ』と言ってしまふような時間だというにも関わらず、死屍累々の飲み屋の中では水色とクリスを中心としたウワバミ達の酒盛りが、まだまだテンションマックスで行われていた。

「何よっ！クリスも中々飲めるじゃないの！今日は気分が良いから特別にお酌してあげるわ！感謝なさい！ほら、飲みなさい、じゃんじゃん飲みなさい。カズマの奢りよ」

「しよ、しよんにやあくえへへ、いいんれすかあ、にゃんかしゅみましえんアクア先輩。じゃあ、ちよつとだけえ」

「先輩・・・？まあ、何でも良いわ。さ、また乾杯よ!!かんぱーっい！」

ガチインとジョッキがぶつかり合う。

その様子にクリスはケタケタ笑い声をあげ、ジョッキの中の酒を一気に飲み干す。続いて「ぶはあ」と可愛い声が漏れた。それに負けずと他の冒険者達と水色も続き、「ぶはあー」という親父臭い声がシンクロしながら部屋に響いていった。

「アクア先輩、ちゆぎはわらしがあく」

「良いわよ、そんな気を使わないでも。それに私は自分の分は自分でつく派なの。クリスは気にせずジョッキ出しなさいな。今日は特別よ、特別」

「えええ〜いいれすかあくえへへへ〜がんばってる〜いいことある

んって、ほんとうなんれすねえくえへへ、えへへへくくアクア先輩しゆきいでえす」

デロンデロンに酔った二人やまだまだ飲み足りない酔っ払い達をぼんやり眺めていると、突然ビリビリとした刺激が背筋を走っていた。

「あつ」

視線を落とすと股の隙間に手が差し込まれてる。

「んんっ・・・んあ」

差し込まれたそれは服の上から秘部を撫でていく。服の上からだというのに、その手はあまりに的確に筋をなぞり、少しだけ膨らんだ突起を刺激してきた。

断続的に走る刺激にテールへ顔を埋め堪えていると、急にその手が撫でるのを止めた。どうしたのかと思えば、カチャカチャという金属音が聞こえてくる。顔をあげて様子を見れば、その手が器用にベルトを外していた。

締め付けていた感覚がなくなり、緩くなったそこへ手が潜り込んでくる。そしてすっかり濡れたパンツの上を、少しひんやりしたそれが這うように下を指していった。

指が体に触れる度、ゾクゾクしたものが触れられた場所から全身に走っていく。その刺激につられて俺のそこから熱い物が滴っていて、これからだというのにもうぐちゃぐちゃ。

「はうっ、んふう・・・んっ」

生き物のように這っていったそれが、熱くなっていたそこへ触れた。甘い痺れに声が漏れそうになるのを手で押さえた。くぐもった声が出てしまう。

それを聞いたせいなのか、潜り込んだそれは布一枚ごしに執拗に秘部をなぞり始めた。

ふと隣に視線を向けると寝息を立てるリーンの横顔があった。酔い潰れてからどれくらいになるのか。まだ目が覚める気配はないけど——いつ起きてもおかしくない状況でもある。

それなのに俺はこんな事をしてる。

見られたら流石にバレる。

きつとバレる。

だって今、絶対にエツちな顔になってるから。

突然、なぞつていただけの指が、そこを覆っていた布を搔き分け割れ目の中に潜り込んできた。止める間もなくその指は膨らんだ突起を掴まんでくる。ぎゅう、と締め上げられる感覚と、それと同時にやってきた甘い痺れに思わず体が跳ねてしまい、椅子が大きな音を立ててしまった。

隣で酔い潰れて眠るリーンがその音に眉をしかめるが、起きる気配は相変わらずなさそうで、俺は胸を撫で下ろしながらリーンの反対側に座るサトウカズマへと視線を向けた。悪戯してくる、サトウカズマに。

「・・・どうした？カナデ」

「どうしたって、お前っ、んん。こ、こらあ」

じつと見つめてやれば、サトウカズマは手を引き戻すと目を反らし白々しく口笛をふきだした。ひゅーひゅーと口笛と呼ぶにはあまりにあまりな、そんな乾いた音が聞こえてくる。

「むう・・・下手な誤魔化ししやがって。あのな急に敏感な所は止めるお。声が出ちやうんだよ。バレたらやばいだろうが」

「・・・そっちかよ。悪戯についてはなんかねえの？」

「おう、じゃんじゃんやれ。人前とか、やばい。まじ興奮する」
「気持ちいいくらいにど変態だな、お前は」

二次会が始まってから、お酒がそこまで好きじゃない俺達は上手いこと端っこでやり過ごしてきた。めぐみんという見張らなければいけない対象も家に帰り、特にやる事のなかった俺達は故郷の事を話したりして時間を潰してた。懐かしいそれに話も弾み、それなりに俺達は楽しんだ。

しかし所詮は男と女。

二人の異性が酒を共に付き合わせて、それで終わる訳がない。

激しい戦いの後ということもあって、必然的にムラムラしてしまうもの。酒も話もほどほどに、俺達はどちらともなくお互いに悪戯し始

めた。

最初は太股とか撫でたり、指を絡めて遊んでたりと可愛いものだったんだけど——もうすっかり、エッチ気分でエッチな事をしていた。

ふと視線を落とすとサトウカズマの膨らんだズボンが見えた。さつき軽く撫でた時より大きくなってる。

「一発抜いてやるーか？」

そつと耳元に囁いてやると、恥ずかしさや戸惑いが混じっていたものの、何処か期待するような視線が返ってきた。

周りの様子を窺ってから、俺は机の下へと潜り込む。

驚きに満ちたサトウカズマの声を聞きながら、サトウカズマの前へ這っていく。膨らんだズボンに顔を近づけると雄の臭いが鼻についた。

「お、おい、カナデっ」

「だいじょーぶ、しー」

「お前なっ」

慌てるサトウカズマを無視して膨らんだズボンに触れた。ビクンとソレが跳ねるように動く。擦るように撫で撫ですれば面白いくらい反応を返してくれる。サトウカズマの情けない声も聞こえてきて——それがなんか可愛い。

愛らしく思っ、服ごしにキスした。

また応えるようにビクビクと動いてくれる。

その様子が楽しく嬉しくて、そのまま両手で愛でているとズボンがうっすらと湿ってきた。

ちよつと臭いを嗅いでみれば、いつもの臭いが鼻についた。

「ちよつと、出ちやった？」

「ばっ、馬鹿。んなわけないだろ——ってベルトに手をかけんな」

「まあまあ」

「まあまあじゃねえ」

声を押し殺しながら器用に怒鳴るサトウカズマをスルーして、ベルトを外してズボンをちよつと下ろしてみた。

するとブルンと目の前にサトウカズマのソレが現れる。間違つてパンツごと下ろしてしまつたみたいだ。

相変わらずのギンギン具合に、思わず唾を飲んでしまう。これが突っ込まれる事を考えると、あそこが熱く滾つてしまう。

よく見るとソレの頭に透明な汁が滴っていた。

きっと我慢汁だろう。そう思つて舐めとつてみれば、しょっぱさが口の中に広がる。

「カナデっ、いま——」

「まあまあ、ちよつとペロつてして、パクつてするだけだから」

「——それ言つとけば良いと思つてるだろっ」

反りたつそれに舌を這わせる。

軽く優しく溶けかけのアイスを舐めるみたいに、頭の部分を重点的にペロペロしていく。びくびく動くそれからは沢山の汁が溢れてくる。

舌を伝つて口の中に入ってくる汁は、やっぱり美味しいとは言えない。それにねちよねちよしてピリピリして口触りは良くない感じだ。

でも、やっぱり嫌いじゃない。

凄く興奮するのもあるけど、きつと違う。

もつと別の気持ちなんだと思う。

上手く言葉に出来ないけど。

「うっ、カナデ、拙い」

そんな苦しそうな声が聞こえて、俺は反りたつそれを頑張つて啜える。啜えた途端それは大きく膨らみ、熱い物を口の中へと流し込んできた。

熱くてドロドロとした物が口の中に溢れる。

量が多くて溢しそうになつたけど何とか飲み込む。

喉を通り胃へと熱が落ちていく。

注がれたそれを何とか飲みきり口を放すと、粘着質な白濁のそれが糸を引いた。

少しだけ余韻に浸りながら息を整え、サトウカズマのそれを舐めて綺麗にしてあげる。ただ奉仕してるだけなのに、何故だか胸の所が

きゅんきゅんする。

「そ、それ以上はいい。じゃないと、また」

何だろうかと聞いていると、ぐったりしていたそれがゆっくり起き上がっていく。サトウカズマのそれは堪え性こそないけど、回復力はやっぱり凄いなあとと思う。少なくとも男の時の俺にはこんな事出来なかった。俺のはいつも直ぐしよんぼりしてしまっていたから。まあ、俺のがおつきかったけども。

「——あっう、サトウカズマ？」

不意にサトウカズマの手がある頭を撫でてきた。

乱暴だけど優しい手つきに目が細まる。

「ダクネスのやつまだ余裕そうだし、アクアの事は任せて……ぼちぼち切り上げるか」

頭から頬へとやってきたサトウカズマの手を掴み、固くて大きい掌へ頬を擦り付けた。

伝わる体温が気持ちいい。

「ふふ、この状態で？」

指で突つつけば間抜けな声が聞こえてきた。

この様子だと、きつと家どころか宿に着くまで持たないだろう。暴発必死だ。

「……持たせる」

「本当にいーだいじょーぶかなあ？なんなら——」

「持たせるって言ってるだろ」

啞えようとしたら顔を押しさえつけられた。

頑張って伸ばしても舌先すら届かない。

「サトウカズマあー」

「甘えた声出すな、この野郎。良いから出てこい」

意志が固そうなので諦めて這い出ると、ギラギラした目付きのサトウカズマと目が合う。もはや野獣の目である。これで我慢とかよく言えたな。鏡を見て欲しい。

「なあ、ここではやんないから、ちよつとトイレとかでさ——」

「一回やったら止まらなくなるから駄目だ。それに今度はちゃん

と……んでもない。取り敢えず行くぞ。ダクネスー、悪いけど俺ら先に帰るからなあー」

そうサトウカズマが叫べば「お、お構いなくー」と顔を真っ赤にさせたダクネスが返してきた。さっきはそんなでも無かったと思ったのだが……ううん？ 案外酒が回ってそうだな。本当に大丈夫か？

「ふううんっ……ふぬううん」

こつちもこつちで大丈夫か？ しまえる？ サトウカズマ、マジでそれしまえる？ 抜いとくか？ もう一回だけ。え、大丈夫？ 大丈夫に見えー—— おお、しまった。人間やれば出来るもんだ。ズボンパンパンだけども。

ダクネスについて不安はあったが、サトウカズマが大丈夫だと言うので後の事は任せて二次会を抜ける。水色辺りが阻止してくるかと思っただけど、ちやつかり参加してたらしいミタラシが悪目立ちしてくれたお陰ですんなり帰れた。

女神のゴッドブローを二回受けたのは、世界広しと言えどミタラシくらいなものだろう。え？ 一回じゃないのかって？ 今殴られたよ。二回目。何してるんだろうか、あいつは。

サトウカズマに手を引かれていくと、見慣れた建物が見えてきた。

「結局ここなのなあ」

「家だともぐみんがいるだろ」

「いやな、別にここがヤダって訳じゃないんだぞ？ でも、な、なんつーか、こう見慣れた場所にくるとさ普通というか……やつぱりさっきのシチュに心残りが出てくるというか。一回くらいトイレでも良かったんじゃないかと」

「そつちかよ。お前はどうしようもないな、本当に」

そんな事話ながら、俺達はいつもの戸を潜った。

何をするって？ そりゃ勿論、ナニする為によ。

☆ありったけをぶつけられても良いじゃない。減るもんじやないし。

二次会を抜け出してきた俺達はいつもの宿に来ていた。

家で出来るなら一番安上がりだけど、先に帰つたためぐみんの事もあ
るし、仮にめぐみんがぐつすり寝ていても、いつ水色達が帰ってくる
かもわからない以上、よそでするしかないから仕方ない。最近ちよつ
と不注意な時があつたけど、それは、まあ、ね。うん。

そうしていつものように受付を済ませ借りた部屋に入ると、直ぐサ
トウカズマが後ろから抱き着いてきた。

以前その流れで無理やりされた事があるので少し体が強張つてし
まったが、今夜のサトウカズマのそれは力強いけど優しく、何処か
安心するような抱擁だった。

俺は抱き締めてくるサトウカズマに体重を預けながら、伝わってく
る体温とその鼓動に意識を向けた。

静かな時間が過ぎていく。

「サトウカズマ、お風呂どうしよっか」

いつまでもそうしていたかつたけど、時間は限られてる。だから惜
しい気はしたけど先を促した。

するとサトウカズマは腕の力を緩め離れた。

「……悪い、ちよつと先に汗流してくる」

「そう？分かった。待ってる」

一緒に入る気だったので意外だ。

まあ、一人で入りたい時もあるだろうから無理強いはしないけど
も。

ベッドに腰掛け待っていると、そう時間も掛からずサトウカズマが
お風呂場から戻ってきた。さっぱりした顔してる。ちよつとほろ酔
いだったそれも、今では綺麗さっぱり覚めてるようだ。

気分が盛り下がったりしてないか心配だったけど、股下を見て安心
した。全開でないものちやんとしてる。

入れ替わるように風呂場に入り汗を流す。
せつかく入るのだからとよく洗っておく。

どうせなら石鹸の匂いを漂わせていこうと思ったからだ。

男はふとした時に香る、そういう匂いが好きらしいし。女性に性的な興奮を殆んど覚えなかった俺としてはイマイチピンとこない話だけど、前の親友がそう力説してた。童貞のいう事だから、何処まで信憑性があるのか謎だけど・・・いや、サトウカズマも似たようなものか。とつくに童貞やめてるのに、変なやつだ。

「・・・嗅がれるのか」

なんか臭いを嗅がれる自分の姿を想像したら、今更ながら恥ずかしくなってきた。今までもエッチの時そういう仕草をする事はあったけど、改めてされるのではやっぱり違うものがある。

「もうちよつと、洗つとこ・・・」

念入りに洗った後、タオルを巻いて風呂場から出るとサトウカズマがベッドに腰掛けていた。

隣へと座ればサトウカズマの顔がこつちに向く。

その目に宿った物に気づいた俺は目を瞑る。

「っん——」

サトウカズマの唇が、俺の唇に押し付けられた。

しっとりした柔らかい感触と、ほんのりとした温かさが伝わる。

ふと、唇が離れた。

思わず目を開くと、熱の籠った目と視線が交差する。

サトウカズマは何も言わずと俺の体を引き寄せ、またキスをした。舌を潜り込ませるような激しいキスじゃない。さっきのような優しいキス。

サトウカズマとのキスは嫌いじゃない。

伝わってくる感触も温かさも。

肌に触れる吐息も、荒い息づかいかいも。

好きだと言っても良い行為だ。

でも、今は何とも言えない違和感を感じていた。
今押し付けられてる唇に。

交わした眼差しに。

肩に触れた掌に。

キスされたまま、ゆっくりベッドに押し倒された。

唇を離れたサトウカズマは首筋に顔を埋め、覆い被さるように抱き締めてくる。

サトウカズマの体は酷く火照っていて、触れ合った肌がいつもより熱く感じる。脈うつ鼓動の音も。

何となく甘えられてる気がして、頭を撫でてやる。

「・・・お前は俺のお母さんか」

「ふふっ、悪いちよっとな」

ちよっと笑ってしまおうと抱き締める力が強くなった。

怒ったのかと思っただけ、そんな感じではない。

そのまま撫でてると肌に触れているサトウカズマの唇が動いた。

「テストロイヤーと戦う前、言いかけた言葉があるんだが・・・お前覚えてるか？」

「なんだよいきなり。まあ、うん？そんな事あったかもな」

「あつたんだよ・・・」

そう言うと、サトウカズマの顔が上がった。

さつき見た目と視線が交差する。

「カナデ、お前の事が好きだ。俺とちゃんと付き合ってくれ」

「へえ・・・」

好きなのかあ・・・へえ。

ふうん、成る程なあ。

へえ。

それで付き合ってくれと、成る程なあ。

「ええええ？」

なんつったこいつ?ん?
んんんん??
んーんーんーんー?

俺の理解が追い付いてない。
それは分かった。

分かったが、それから分からない。

取り敢えず頭を疑った方が良いのか、それとも耳を疑った方が良いのか。まずはそこからだと思う。

「サトウカズマ」

「あ、ああ」

俺は自分の頭を指差した。

「取り敢えず、俺の頭を叩け」

「分かった・・・いや、何で!?!」

「まずはそこからだと思っんだ」

「俺が告白すると何が起きるの!?!いや、何が起きてんの!?!どうなっ
ちやうの!?!」

どうなる?それは俺が聞きたい。

何がどうなってそうなるのか。

「いや、だって、なあ、意味が分からないと言うか。成る程、ここは夢
の国では?」

「生憎ここは千葉じゃないぞ。で、意味は分かるだろ・・・難しい言葉
言っていないぞ」

「言葉の意味は分かる。けど、そうなるとますます分からないんだ
が・・・その、自分で言うのも何だけど、俺元男で、しかもお前
の事襲った犯罪者予備軍ぞ?」

「・・・そういう自覚はあったのか」

「それは、まあ、流石に」

告発されたら一発だという自覚はある。

幸いサトウカズマが性欲に流されてくれたから大丈夫だけど、相手

によつてはそくお縄物だ。まあ、そういうのも含めて人選し、サトウカズマを狙つたんだが。

「はっ！ストックホルム現象……！」

「その確信したみたいな顔止めろ。違うからな」

「他はちよつと思いつかない。俺精神科医ではないから……」

「病名を引つ張りだそうとするなあ！精神疾患とかないからあ！！人が頑張つて告白すればこれかあ！！この野郎！！」

真上にあるサトウカズマの顔を見てると、嘘をついてるようには見えない。ハーブキメてるような、虚ろな目でもない。そうなつてくると俺の頭が……はっ。

「ああ、好きつてあれか、家族としてとか？」

「お前は家族とこんな事すんのか？」

少なくとも父親とした事はない。

親戚付き合いも碌に無かつたから、近親者とは縁すら一切ないな。

「いや、ないな。した事ない……」

「異性として、好きなんだよ。流石に愛してるとか、そういうのはまだ言えないけど……ちゃんと、こう、色々考えて出した答えなんだよ。信じてくれよ」

サトウカズマの目はわりと正直だ。

嘘をついてると直ぐ分かる。

そんなに長い付き合いじゃないけど、もうどんな時でも、それを見破れる自信はある。

なのに、その目は少しも揺れて無かつた。

照れは浮かんでも、真つ直ぐで。

ちゃんと、こつちを見るのだ。

そんな筈がないのに。

『いめん、奏ちゃん』

そんな事ある訳がないのに。

『ごめん、奏太』

だってそれは、おかしい事なのだから。

◇◇◇

「——ごめん」

酷く弱々しい声が聞こえた。

情事の時によく聞く艶めかしい声でも、普段の明るく楽しげな声でもない。

カナデから聞こえたのは掠れた弱い声だった。

「俺、お前と、そういうのは考えられない」

フラれた、と。

こいつと出会う前の俺なら、きっとそう思っただろう。

「あのさ、このままの感じじゃ、駄目か？」

辿々しく語られる言葉の、その震えに気づかないで。

ほんの少しだけ見せた、嬉しそうな顔に気づかないで。

「別に責任とか取って欲しいとか、そういうのはないんだ。それは俺が自分で何とかするから。良いだろ？だって、今もそれで上手くいってるし。Win Winじゃん。だからなっ——ん、あっ、ん」
塞ぐように唇を重ねた。

少しだけ動揺していたけれど、カナデはただそれを受け入れてくれた。そして差し込んだ舌に、ちゃんと応えてくれる。

何度か舌を絡め合った後、唇を離すとカナデの目に俺が映っていた。

「カナデ、好きだ」

「それは・・・聞いた」

「お前とちゃんと付き合いたい」

そう伝えるとカナデは顔を曇らせて黙った。

どうしてかは分からない。

でも、何となく本当に嫌な訳じゃない気がした。

「カナデ、好きだ」

だからキスを落とした。

唇に、頬に、首筋に、胸元に。

唇が肌に触れる度、手で押さえたカナデの体は小さく震える。

耳には小さいけれど、可愛い喘ぎ声も聞こえてくる。

そのまま胸を覆っていたタオルを取り払えば、大きく膨らんだ二つの乳房が露になった。カナデの呼吸に合わせて二つの乳房は僅かに揺れる。

キスしようと顔を近づければ石鹸の良い匂いがした。

風呂場にいる時間が長かったから一回くらいオナニーでもしてたのかと思っただけど、念入りに洗っていただけらしい。カナデのならばそのままでも良かったのだが、それは言わないで置こうと思う。怒られる気がする。

乳輪には触れないよう、キスしていく。何度も。

本音で言えば立ち上がったピンクのそれにむしやぶりつきたい所だが、ここは我慢してじっくり攻めていく。

別にいきなりでも怒りはしないが、M気質のあるカナデは焦らした後だと凄く良い反応をするのだ。

抵抗する様子がなさそうなので体を押さえていた手でそのままカナデの肩を撫でる。柔らかくてスベスベした肌には、じんわり汗が滲んでいた。

顔を少し覗けば、カナデの頬は赤く染まっていた。肌の感触を味わいながら肩から鎖骨へ指を滑らせ、乳房を避けて脇をなぞり、細く引き締まった腰に触れる。

触れた腰から臀部に掛けてゆっくり撫で下ろせば、びくりと大きく跳ねあがった。

「っひゃ」

小さい悲鳴が聞こえる。

けれど、そこに本気の拒絶は感じない。

「カナデ、触るぞ」

「っ——ん」

カナデの秘部に指を押し当てる。

温かくぬるりとした感触に誘われるように、指を愛液にまみれたそこへ潜り込ませた。

ズブリ、と。

抵抗もなく指が沈んでいく。

まるで飲み込むように。

俺は指を肉壁に押し付けながら外へと引き抜いた。

カナデの閉じられた口から甘い声が漏れる。

頬は更に赤く、目は潤む。

それを繰り返す度、カナデの口から止めどなく甘い声が漏れていく。告白してから強張っていた体から、段々と力が抜けていくのが分かる。

カナデの声を押さえきれなくなった頃。

立ち上がったピンクのそれを口に含み一気に吸い、カナデの中には潜り込ませた指で弱い所を強くなぞる。

「ふあ、あああん!!」

瞬間、カナデは嬌声をあげながら大きく腰を浮かせた。

股の割れ目から熱い物が滴っていく。

ビクビクと小刻みに震えるカナデの体を持ちあげ、蕩けた顔のカナデと唇を重ねる。少しだけあいた唇に舌を潜らせ、舌と舌を絡ませる。カナデの口から溢れる唾液も溢れる吐息も、どうしようもなく甘

い。

「つず、ま」

小さな声にハツとし唇を離した。

夢中で貪っていた事を反省したが、直ぐに意識は別の事に捕らわれた。

カナデの熱の籠った目がこっちを見ていたから。

「したい、かず、まと、したい」

濡れた唇から声が漏れていく。

「かずまと、したい」

カナデの手が俺の頬に触れる。

触れたそれは思っていたより冷たい。

でも嫌じゃ無かった。

「俺もしたい、カナデと」

そう答えると見つめた先、カナデの目からまたボロボロと滴が零れていく。頬に伸ばされたその手を握ってやれば、カナデの艶やかかな唇がゆつくり開いた。

「・・・おれも、すきでいい?」

それは弱くて。

「おれ、こんなだけど」

不安に満ちていて。

「へんだけど」

酷く痛々しくて。

「……かずまのこと、ちゃんと、すぎでいい？」

でも、懸命な言葉だった。

気がついたら抱き締めていた。

柔らかくて抱き心地の良いその体を。

カナデの泣きじやくる声が鼓膜を揺らす。

頬を伝い落ちる熱いそれが肌に触れる。

聞きたい事がある。

きつと沢山。

でも、それは後だ。

「カナデに、好きでいて欲しい」

返事は聞かず、また唇を重ねた。

今度は離してやらない。

その顔から曇りが消えるまでは。

☆しつぽりしまくっても良いじゃない。同意の上なのだし。

ぼんやりする頭で俺は考えた。

噎せ返る熱気と匂いに包まれながら、火照りきつた体を強く絡め合
いながら。

一体どれほどの時間、そうしているのか。

けれど、いつまで経っても答えは出なかった。

「っん、んん、かずまぁ」

唇を重ねた数が、囁かれた好意が、優しい愛撫が。

数えきれない程沢山貰っているそれが、頭を酷く鈍らせていくから。一つ与えられる度、頭がポワポワして気持ち良くて、何も考えられない。

「ひゃあん」

キュツ、と胸の二つの先端がつねられた。

甘いそれが走り、体が跳ねてしまう。

重ねていた唇が離れ声が漏れる。

カズマは俺の反応を見ると、固くなった赤く充血したそれへと唇を近づけた。熱い吐息がかかり、触られてもいないのにビクビクしてしまう。

レロっと、先端を舌が這っていった。

背筋がゾクゾクして、唾液に濡れたそこが熱い。

「可愛いな、カナデのこっちは」

そう言うとカズマは先端の一つを弄るのを止め、立ち上がったそれを口に啜えた。

そして味見でもするように舌が膨らんだそれを舐めていく。押し付けたら、這わせるだけだったり、つつくようにしたり、吸い付いたり。

時折、もう一つの膨らみも口にして、交互に刺激しされて体はどんどん熱くなってしまふ。もう股の所がぐちゃぐちゃになってるのが

分かる。

胸の刺激に集中していると太腿をゆっくり動かされ、股の所に熱い物が押し付けられた。体を持ち上げ覗いて見れば開かれた股の間に、はち切れんばかりに大きく固くなったソレがビクビクと脈をうっている。

カズマのソレは愛液が溢れる谷間へと、キスするかのようにつつかってきた。

くちゆり、くちゆり。

入り口の所に何度も頭を押し付けてくる。

もどかしさと僅かな快感が走ってくる。

胸に吸い付いてるカズマを見れば、ギラギラした瞳と目が合った。

「うん」

そう頷くと、カズマのソレが濡れたそこへと侵入してきた。反り返ったソレがグリグリと壁をなぞっていき、俺の弱い所を強く刺激していく。

ソレは深く深く俺の中へ沈んでいって、行き止まりの部屋を小さくノックした。

「カナデ」

不意に耳元で囁かれた。

甘ったるい声に背筋がぞくりとする。

少し恥ずかしくなって顔を背けると吐息が耳に掛けられて余計にぞくりとしてしまう。

「カナデ、好きだ」

そう一言発するとカズマはゆっくり腰を引いて、強く突いてきた。膣壁を抉られるような感覚と共に、痺れるような刺激が腰から走ってくる。

「カナデ」

カズマは甘えるような声を出しながら、腰を何度も打ち付けてくる。鼓膜を揺らす声に、俺の中を蹂躪する刺激に頭が蕩けそうに熱くなっていく。

「かつ、ずまつ、あつ、あっん」

ふわふわした意識の中。

何となく不安を感じてカズマの腕を掴んだ。

カズマはそれに応えるよう、俺の体を引き寄せてくれる。触れあう肌から伝わる体温が嬉しい。

「出すぞ、カナデ」

「うん、きてえ——んんんあ!!」

力強い腕に抱き締めながら、腰が深く強く打ち付けられた。カズマのソレが大きくビクつき、俺のあそこはその動きに合わせて収縮し、差し込まれた物を締め付ける。離してしまわないように強く。

カズマのソレから吐き出された熱がお腹を満たしていく。じんわりと伝わってくる温かさを感じながら、覆い被さるように密着するカズマの鼓動に耳を傾ければ、なんだか心地よかった。

「はあ、はあ、はっ——んっ、んんーっん」

呼吸を整えていたら顔を上げさせられキスされた。

小鳥がじやれるような軽い物じゃない、舌が絡み付く濃厚な厭らしい深いキス。

混ざり合う唾液は甘くて、二人で沢山啜り合う。

じゆるじゆると厭らしい音が聞こえる。

それがまた気持ちを興奮させた。

俺も、きつとカズマも。

だって感じるのだ。

沢山熱を吐き出し柔らかくなっていたそれが、大きく固くなっているのが。

「——カナデ、良いか？」

切なそうな顔に。

一度離れたその唇に。

俺はキスを返した。

そのまま起き上がりながら押し倒し、体の上に股がれば驚いたような瞳と目が合う。

「んふふ、こんどはあ、こっちのぼんらのお」

「・・・正直、この体位な、お前に襲われた事思い出すから止めて欲し

いんだが。こわい」

嫌そうな顔をしているけど、俺の中に差し込まれてるそれはビクビクと気持ち良さそうに反応してる。腰を回すように動かせばカズマが肩を揺らした。

「ほんとーに、いやあ？ねえ、あんっ」

「んん、ちよっ、あふっ、あかん」

カズマの間抜けた声を聞きながら腰を動かしていると、反り返ったソレが気持ち良い所を擦っていった。背筋を走るその快感が欲しくて、気持ち良いそこを重点的に擦りつければゾクゾクした快感が腰から昇ってくる。

気持ちよさに頭がぼんやりしてく。

不意に膣壁を擦っていたソレが奥へ滑り込み、一番奥、子宮口を強くノックしてきた。

その刺激に思わず嬌声が漏れ、体が跳ねてしまう。

視線を下へと下ろせば、悪戯な笑みを浮かべたカズマの顔があった。

「・・・もう、かずまあー」

「お前も人の話聞かなかつたろ。お返しだ」

そう言ったカズマは両手をあげ胸に触れる。

壊れ物を扱うみたいにとつと撫で、やわやわと揉みしごく。たまに先端を指で弾かれ、嬌声が出てしまう。

「カナデ、動かないのか？」

挑発するような言葉に俺は腰を落とした。

きゅっと膣が締めつけ、ソレの先端を子宮口で刺激してやる。俺もつかれると弱い所だけど、カズマにとってもそれは同じ。締めながら腰を上げ下げし、ソレの先端を子宮口に何度もキスさせてやる。繰り返し、何度も。

愛液と注がれた精子が混ざった熱い物が、繋がったそこから少しずつ溢れていく。粘着な水をかき混ぜる、厭らしい音が部屋に響いてく。

蕩けそうな快感に耐えながらカズマの顔を見れば、我慢してるのが

良く分かる顔になっていた。

止めにと腰をそれまで以上に深く落とし、子宮口に強く押し付けてグリグリする。

情けないカズマの声が聞こえる。

言葉に出来ない刺激と共に、熱い物が注がれる感覚がお腹の所から這い上がってくる。

「……………んっ、んふう」

俺の中に入ってるカズマのソレを抜けば、ドロリと白い液体が溢れていった。

沢山溢れてくるそれを見てると、今すぐにも妊娠しちやいそうな気分になってお腹がきゅんきゅんしてくる。

下を見れば少しだけ悔しそうな顔をするカズマがいたけど、覆い被さるように抱き着けば笑みを浮かべながら抱き返してくれた。

「かずまあ、もっと、ぎゅうっしてえ」

「っ、おまつ……………おう」

お願いすればさつきより強く抱き締めてくれる。

伝え合う体温も温かくて気持ち良い。

カズマの鼓動と自分の鼓動が重なるみたい聞こえる、密着するこの距離が凄く心地良い。

「しゅきい、かずまあ」

カズマの胸元にキスする。

強めに吸い付けば赤い跡がついた。

なんだかそれを見てるといい気分になって、沢山つけようと思っ

た。

「んう、んっ、んっ」

「カナデっ、それ、どっちかって言う俺がつ、ああもう！お前も大概

だなっ！」

ぐっつと体を離された。

どうしたのかと思えば、今度はカズマが胸元にキスしてきた。ちゅっつと吸い付かれれば、その場所が赤くなった。少し痛いくらいなのに、それを見てると何故か胸の所がポカポカしてくる。

「カナデ、カナデ——」

小さな痛みが走り、赤い跡がついてく。
少しずつ増えてくそれに嫌悪感はない。

あるのは不思議な高揚感と安心感。

それが嬉しくてカズマの頭をぎゅつとした。

肌に触れたままモゾモゾ動く唇の擦ったさに身を振りながら、いとおしくて堪らないその頭を撫でる。

言いたい事が一杯あるのに、言葉が考え付かない。

手も足も動くのに、出てくるのは簡単な言葉ばかり。

けれど、そんな言葉が自然と口から溢れていった。

「かずま、すき。かずまのこと、いっぱいすき。だいすき」

拙くて恥ずかしい。

「いっぱいほしい、かずまと」

馬鹿みたいな言葉。

「いっぱいぎゅつてされたい、いっぱいちゅーしたい、いっぱい、いっぱいほしい。いっぱいされたい。それで——」

でもきつと、本当の言葉。

「——かずまの、あかちゃんがほしい」

カズマの手が頬を撫でた。

抱き締めてた腕の力を抜けば、カズマの顔がこっちを向く。なにかを確認するかのような熱い視線。体が自然と火照っていく。

暫く見つめ合った後、カズマがゆっくり口を開いた。

「・・・悪い、わりと、そのつもりは、あるんだけど、まだお金の事と

かあるし、待つて欲しいというか、いきなり結婚とかも、その、彼女とか作ってみたい願望もあつてだな――」

ちっちゃい事言い始めたカズマの口を唇で塞いでやる。少し呆然としてたけど、舌を差し込めば直ぐに絡めてくれた。

「――ばーか。そこは嘘でも、領いとけよ」

「……悪かったな、気がきかなくて」

「ふふっ、別に良いけどな?知ってるし」

まったく格好つかない奴だ。

気持ちがちよつと冷めちやつただろうが。

馬鹿めが。

でも仕方ない。

こういうカズマだから良いと思つたんだから。

格好悪くて、素直じゃなくて、いまいち決まらないけど――

優しくて、お節介焼きで、やる時はやってくれる。スケベだけど真面目な、サトウカズマならつて。

「なあ、カズマ?」

「なんだよ……つうお!?ちよ!?」

すつかり萎んだソレの裏筋を指でなぞつてやる。

耳たぶを食みながら乳首も刺激してやれば、また元気に振り返つた。

「薬飲んでるから、多分大丈夫だけどき」

振り返つたソレに割れ目を押し当てる。

軽く当ててるだけなのに、簡単にソレの頭が沈んでく。

「んっ……赤ちゃん出来そうなくらい、いっぱいしような?」

「……おう」

顔を赤らめたカズマにキスをして、ゆっくり腰を動かした。カズマのソレが一番奥に届くように。

どれ程の時間そうしていたのか分からない。

気がついたら汗だくの精液まみれで、カズマとベッドに転がっていたから。

起き上がってドアの所に行く、ドアポストの下に延滞料金の請求書が落ちていて、その請求書の内容を見ればお昼を過ぎた辺りなのは分かった。同時に請求額が過去最高であることも。

これ以上延滞料金があがっても堪らないのでカズマを揺り起こすと、目を覚ましたカズマに何故か押し倒された。

「ちよっ、カズマっ！っあん！ばかつ、なんでまた！」

「悪い、ちよつとムラつとして」

「ちよつとくらいなら我慢しろ！あのな、料金えらい事になっ——
——ひやつん!?あう、ばかあ！」

それからまた、盛ったお猿なカズマとエッチした。

馬鹿みたいにならずと絡み合った。

頭の中が蕩けちゃうんじゃないかと思えるくらい。
たくさん。

俺達の冒険はまだまだ続きますか？エンディングじゃないんですか、そうですね。

延滞につぐ延滞。

多額の料金を請求されたものの、何とか支払いを済ませた俺達はギルドに向かっていった。

「――流石に体がダルい・・・腰いったあ」

本当に丸1日もエッチした訳で、疲労感が半端じゃない。じんじりする腰に手を当て動かすとボキボキ鳴った。

同じ姿勢が多かったからか体が固まってるみたい。後は筋肉痛といった所か。

それにしても宿のオバサンには助かった。

常連さんだからって割安にして貰えて。

じゃなかったらヤバかったなあ。それでもヤバかったもんなあ。

「んっ、なんだよ、カズマ」

手に触れた感触に振り返ると、カズマが手を握っていた。しかも恋人繋ぎ。素面な今だと、ちよつと照れてしまうやつだ。

「わ、悪い。やってみたくて」

捨てられた子犬みたいな顔に胸がきゅんとする。

そういう顔はズルい、駄目だつて言えなくなってしまう。絡み合った指にちよつと力を込めて握り返すと、カズマがニヨニヨ嬉しそうな顔をした。

もうっ、可愛いやつめ。

「それに潜伏使ってるし」

こすいなあ、流石カズマは。

恥ずかしいならやらなきや良いのに。

宿を出てからカズマとは色々と話し合った。

めぐみん達パーティーメンバーになんと説明しようかと。パーティーメンバーの色恋沙汰とか、基本的に御法度なのだ。絶対碌な事にならない。事実、それが理由でパーティーが解散したり、険悪に

なったりする事が多々ある。この街の冒険者ギルドではあまり聞かないけど、それでもゼロではなかった。痴話喧嘩なんてギルドでウエイターしてた時はよく聞いたし。

色々と検討した結果、やっぱり一か八か正直に話そうという事になった。下手に隠して後で拗れる方が面倒だし、カズマに考えがあるらしい。

それで最初は家に向かっていたのだが・・・その途中である事を聞いて行き先をギルドに変えた。

というのも、何やら王都から騎士の集団がギルドに向かったとこの事を聞いたからだ。この何もない冬の時期、田舎なアクセルにやってくる王都の人間なんてそうはいない。特別に何かあるのだろうか。

それで直ぐデストロイヤーの件を思い出し、もしかしたら例の報奨の件じゃ無かろうかとカズマとギルドに向かっていたのだ。例の件についてなら、めぐみん達と来てるだろうし丁度良いだろうし。

「良い報せだといいいんだけどなあ」

「おい、止めるカナデ。変なフラグ立てんな」

「あのな、歴史を紐解いても、王族とか貴族なんて基本碌でもないのがデフォだぞ？かの有名なルイさん一家も革命されちゃうくらい酷かったんだぞ。警戒しない方がどうかしてるってもんだ」

「ルイさん一家は、あれはあれで複雑な話だろ。別に浪費が酷かっただけじゃないってなんかで聞いたぞ」

「カズマは変な所で知識あるんだよなあ・・・」

駄弁りながら歩いて暫く。

いつものギルドへと辿り着いた。

入らなくてもガヤガヤと賑やかな声の中から聞こえてくる。

「もうやってるみたいだな」

「そうだな」

カズマは手を離しスキルを解除した。

ぼやけてた姿がくつきりする。

扉を開けて中に入ると全員の視線がこちらに向いた。

まさかここまで反応されると思わなかったので、心臓が必要以上に

ドキドキしてしまう。

「カナデー！」

大きな声と共に人混みを掻き分け、めぐみんがダツシユで駆け寄りそのままの勢いで抱き着いてきた。

その後に続いて水色とダクネスも顔を出す。

「カナデー！何処をほっつき歩いていたのですか！心配しましたよ！もう！お金に困ってるのは分かりますが、泊まりかけのクエストならちゃんと話してくれないと駄目です。今度からはちゃんと一言下さい」

「おや？」

隣のカズマを見ると首を横に振った。

知らないらしい。

「そうよ、働き者なのは別に良い事よ。でもパーティーメンバーにちゃんと言うのが常識でしょう？よって勝手な事した二人は罰として、今晚のお夕飯を奢って頂戴ね！いっぱい稼いできたんでしよう？私、高級シユワシユワを所望するわ！」

アホの水色が何か言ってる。

昼間から酔っぱらうなんて、本当アホだな。

あいつには暫く酒を控えさせた方が良いかも知れない。いくら女神とはいえ、急性アルコール中毒には負けるかも知れないし。

すりついてくるめぐみんの頭を撫で撫でしながら、ふとダクネスを見ると良い顔で親指を立ててきていた。

意味が分からず隣のカズマを見れば、額に手を当てて溜息をついてる。何か二人の間に秘密がありそう。

・・・まさか。

「カズマ、お前まさか、ダクネスにも手出してないよな・・・？」

そつと耳元で呟くとカズマは全力で首を横に振った。

けれどその目には焦りが滲んでる。

エッチしないまでも、何かあったっぽい。

まあ、俺のこと好きでいてくれるなら、別に何処で遊んでようと追求するつもりはないけど。元男と美人でボインのおねえちゃんなら、

後者を選ぶのが普通だと思っし。

「サトウカズマさん、あの、ちよつと良いですか？」

不意にルナさんの声が聞こえた。

視線を向ければ申し訳なさそうな顔したルナさんと、その背後に鎧兜を身に纏った騎士達の姿がある。

何だろうかと見ていると騎士達の間を割って、長い黒髪を流す切れ長な目をした女の人が向かってきた。

カツカツと床を鳴らし背筋を真っ直ぐに歩く姿は、ブレザー的な服も相まつての高校にいた風紀委員長を思い出させる。

「冒険者、サトウカズマ！」

女の人は丸め込まれていた羊皮紙を封をきり、こちらに内容が見えるよう、これでもかと思せつけてくる。

俺はそれを読んで——カズマと羊皮紙を二度見した。

「貴様には現在、国家転覆罪の容疑が掛けられている！自分と共に来てもらおうか！」

何をしたんだよ、カズマ。

それからセナさんというその女の人の話を聞くと、どうもデストロイヤーの時にカズマがウイズにやらせた事が問題になったらしい。

コロナタイト、それはデストロイヤーを動かしていた伝説級の秘宝の名前だ。自爆しようとするデストロイヤーを止める為、カズマは機関部からそれをステイールで外し強制的に起動を停止させた。

所がだ、エネルギーの塊みたいなのはデストロイヤーの心臓部から取り外された事により暴走した。

そのまま放っておけば爆発し、街ごと吹き飛ばす大惨事になっていたかもしれないらしい……のだが、カズマの機転でウイズのランダムテレポートで危機を回避。街を守り抜いたと聞いていた。

けれど、そのランダムテレポルト先が不味かったようだ。どうやらコロナタイトが飛んでいった先は、この地を治める領主の屋敷だったらしい。それで、ぼーんと爆発。綺麗さっぱり吹き飛んだと。

幸い使用人は留守。

領主も地下室にいた為無事。

人的被害はないそうだ。

カズマを罪人のように扱うセナの言動にイラツとしてると、くつついていためぐみんが顔をあげた。

「さつきから聞いていれば失礼な。カズマはデストロイヤー戦において功労者ですよ？確かに石の転送を指示したのはカズマですが、あれだって緊急の措置という事で仕方なくやった事です。カズマの機転がなかったら、コロナタイトの爆発で死者だって出ていたかもしれない。褒められはしても、非難されるいわれはありません」

そう言ってフンスと鼻息を吐くめぐみん。

流石は利口で魔力値の高いと噂の紅魔族。弁がたつ。

普段は「爆裂ー爆裂ー」と口ずさむ爆裂狂の変態だけど、ちゃんと庇う辺りただの変態じゃない。良い変態だ。

そんなめぐみんをセナさんが睨んでくる。

「ちなみに、国家転覆罪は、犯行をおこなった主犯以外の者にも適用される場合がある。裁判が終わるまでは、言動に注意した方がいいぞ。この男と共に牢獄に入りたいというのなら止めはしないが」

吐き出された冷たい言葉にギルド内が静まりかえる。

めぐみんも渋い顔をした。

水色がアホな事言いそうだったので蹴りを入れて止め、セナさんを見返してやる。

「繰り返すようだけど、めぐみんの言うとおり、カズマは今回の件において功労者であって犯罪者じゃない。だから身柄を渡すつもりはない——分かりましたか？」

返した言葉にギルドの空気が悪くなった。

騎士が少しだけ身構え始める。

分かつてはいたけど、厄介。

「庇うつもりなら、こちらにも考えがありますが？確か、サトウカズマパーティーのカナデさんでしたか？」

「庇うつもりもなにも、当然の事を言ってるだけですけど？お役所仕事をしたくないなら外に出ないで、大人しく引きこもって手紙だけ送っていた方が良いんじゃないですか？態々こちらにいらつしやらなくても結構ですよ。こちらでも日々の生活に追われて時間もありません。おままごがしたいなら、他を当たって頂きたいのですが」

「・・・なっ！」

青筋が浮いたセナさんとやら。

こんな事で表情を出すなんて随分と若い。

少なくとも、昔あった詐欺師よりヘツポコ感がある。

「こちらは王家より正式に——！」

「今回のデストロイヤー襲来に関して、国からは勿論、領主様からもなんの対応もありませんでした。騎士の派遣もなければ、領主様からの声明の一つも出ていません。確認出来たのは、冒険ギルド同士で共有された情報だけです。——まずは、国民に対する責務の放棄をした王家と領主様の罪から調査するべきだと思いますが？」

「王家に罪だと！貴女何を言ってるのか——！」

「こういった場合、アクセルの地を治める領主様が、国の必要な機関への報告を当然行っている筈ですが、それはどのようになっていきますか？王家には当然報告がいつている筈ですけど・・・まさか、最初の報告が領主様自身の屋敷が損失した話ではありませんよね？事前に被害予測や補助金について話し合いがあった筈です——その中には当然、領主様がとる対応についても報告があった筈ですけど・・・違いますか？」

当てずっぽうにテキトーぶっこいたけど、セナさんの顔が明らかに曇った。

「領主様の、ひいては国家運営の一助を担う、貴族様に対する攻撃的な行動の事実が問題であるなら、そちらにも確認しておきたい事があります。ランダムテレポートによる転送である事を把握していらつしやるのであれば、当然その転送に誘導を是とする調査結果があるの

「ですよね？」

「そ、それは、いまの所は……」

「でしたら今回の件について国家転覆罪は些か過ぎるのではないのでしょうか？流石に一切の責任がないとは言いませんが、それを言ってしまうえば今回の件に関わった冒険者ギルドも責任を取るべきではないですか？何故なら、サトウカズマに作戦の指揮権を与えたのは冒険者ギルドです」

見守っていた元同僚達が目を反らした。

「で、ですが、屋敷を消し飛ばした責任が」

「街を守る義務のある領主様は一切の責務を放棄している事実もあると思いますけど？そちらは？地下にいらつしやったんですよね？先ほど聞きましたよ？街の危機を知りながら何一つ行動せず、自身は身を隠していたのですよね？王家より与えられた領地に対する責務を放棄していらつしやいますけれど、それこそ国家転覆罪ではありませんか？——ああ、これは流石に言葉が過ぎました。想像で語るなんてお恥ずかしい。さぞ、特別な理由があつたのでしょうか。王家より賜った街を放り、やらなければならぬ特別な事」

一步セナさんに向かって進む。

「法を盾にカズマを捕らえるつもりなら、事前調査が少し足りないように感じます。出直された方が宜しいのでないでしょうか？」

一步、一步、進む。

「それとも王家は罪があるかもどうかも定かではない冒険者を——
——魔王軍幹部撃退やデストロイヤー討伐において多くの功績をたてた冒険者を——
——大した調査もなく罪に問うような方々なのでしょうか？」

歩み続けセナの前に立てば、セナさんが少しだけ後ろに引き下がった。

俺はもう一步進み、セナさんの耳元に口を寄せた。

「魔王軍との最前線を張る賢明で勇敢な我が国家が、魔王軍幹部を撃退出来る人材を、みすみす手離すような真似をして——
——本当に大丈夫ですか？ここ数十年、魔王軍に対して幹部撃退などの戦果をあ

げたのは、アクセルの街の冒険者のみ。その作戦において重要な位置にいたサトウカズマを罪にとう意味が分かっていますか？ここは始まりの街ですよ？冒険者が生まれる街。良いんですかね、そんな所で戦果をあげた人を、こんないい加減な罪にとうて。そんな事して、大丈夫ですかね。今後、冒険者になろうなんて奇特な人間が、生まれるでしょうかね？」

ぱつと、セナさんが目を見開いてこちらを見た。

気づいたのだろう。

この国の現状。

この国に生きる為、俺は色々と情報は集めていた。

簡単な法律や理念、歴史も軽くなら知ってる。

魔王軍との戦いにおいて、冒険者達の力が重要視されてる事も。

「一旦お持ち帰りなさった方が宜しいと思いますけど。どうでしょうか？話が聞きたいのであれば、後日こちらからお訪ねしますよ」

「……一度、上層部と事実確認を取らせて頂きます。明日、警察署にきて下さい。任意での事情聴取です。断って貰っても構いません」「いえ、必ず明日お伺いします」

顔を青くさせて帰ってくセナさんを笑顔で入り口まで見送る。騎士達も去っていき扉が閉まると、歓声があがった。少し悲鳴も聞こえるけど。

「まったく、また面倒な事になりそうだなあ。なあ、カズマ……カズマ？」

ふと振り返るとうちのパーティーメンバーが身を寄せあつて震えていた。

「カナデが、怖いです」

「ごめんなさい、いつもごめんなさい」

「責務を果たせずに済まない……」

トンチンカンの良く分からない言葉の後、カズマが重々しく口を開いた。

「早まったかも、しれない」

どういう意味だ、こらあ。

◇名前：サトウカズマ。職業：冒険者。住所：○○区
○○通り旧○○邸。ご利用お客様以外の世帯者（及び
続柄）：パーティメンバー三人と彼女一人。注意事
項：アークプリースト在中。夢の希望：――

「和真、和真」

聞き慣れた声と肩に触れる柔らかい感触に重い瞼を開ければ、カー
テンの隙間から射し込む光が目に入る。

それとその光に照らされて、長い髪を艶めかしく輝かせる彼女の姿
も。

「あつ、やっと起きた。おはよ」

彼女は俺の顔を覗き込み、花が咲いたような笑顔を浮かべた。

「おはよ、お前も飽きないな」

「飽きないなって、別に好きで起こしにきてる訳じゃないから？お
前のお母さんに頼まれてるから・・・ああ、もう、二度寝しようと
するなっ！」

彼女の細い指が布団を掴んだ俺の手を止める。

細い指は男のそれとは違い柔らかい。

もう一つの手でその彼女の指に触れた。

すべすべとして柔らかい。

少し冷たいけど、今はそれが心地良い。

思わず頬擦りすれば石鹸の匂いが薫る。

「くすぐったいってば、なあに？」

「・・・何でもない。起きる。なあ、朝飯は？」

「何で俺に聞くかな。いや、まあ、今日はそうだけどさ」

彼女は少し照れ臭そうにしながら俺の顔を見た。

「悪いけど、普通だぞ？ベーコンエッグとお味噌汁。あとはお新香と
かもあるけど」

「お弁当は？」

「はあ・・・あるよ、ちゃんと。まったく、大変なんだからな。早

起きして、朝ごはん作って、お弁当作って・・・なのに、お前は起きてこないとか――」

プリプリ怒る彼女の口を唇で塞ぐ。

彼女の口内をたっぷり味わう。

唇を離す頃には頬を赤らめながら眉を下げていた。

「――たく、もう。いつまでも騙されてやると思うなよ?」

「分かっているって。いつもありがとな、カナデ」

感謝の言葉を告げると彼女は嬉しそうに笑った。

俺にしか見せない、その表情で。

高橋カナデ。

彼女は隣に住んでいる幼馴染だ。

カナデの家は両親が共働きしていて、よく家に預けられていた。だから小さい頃からいつも一緒にいるのが当たり前で、殆ど家族といってもいい付き合いで、つい最近男女のお付き合いを始めた相手でもある。

言葉だったり態度だったり、少し男みtainな所はあるけど、俺にとっては二人といたない大切なやつだ。

朝ごはんを食べた後は一緒に登校する。

とりとめのない、他愛のない話をしながら。

「カナデー!おはようございます!むむつ、また和真と一緒になのですか?」

「おー、おはよー。相変わらず伸びないねえー。よしよし」

校門をくぐった所でカナデがクラスメートと出会い、そのままそれぞれクラスに別れた。小中高と同じ学校に通っているが、クラスは大体違うので珍しくもない事。とはいえ、付き合い始めた身としては微妙な気分になる。

あとなんだ、今のクラスメート。

果てしなく既視感がある。

いや、ほぼ毎日見てる訳だから既視感があるのは当然なんだが……
なんだ。

ぼんやりしながら授業を受けて、迎えたお昼休み。

ラノベ片手に朝に手渡された弁当を食べていると、カナデがひよっこり顔を出した。

「食べてるー?」

そう言つて近づいてくるカナデに食べ掛けの弁当を見せれば満足そうに鼻息を漏らす。擬音がつくならフンスとかそんなだろう。

なんの用かとカナデの様子を眺めていると、俺の机に弁当箱をおいて空いている前の席に腰かけた。

「え?なに、一緒に食べる気か?」

「悪いか?良いだろ、別に。——それとも何か、駄目な理由でもあるのか?」

「そ、それはないけど」

はつきり言つて気恥ずかしいだけで、嫌なわけではない。寧ろこういうシチュは……ん?シチュ?なんだ、凄く引つかかる言葉だな。何か大切な事を忘れてるような——。

「——でき、あのトンチンカンときたら……つて聞いている?」

「んっ?ああ、聞いている。トンチンカンがつて話だろ?」

「そうそう。でき——」

何か引つ掛かる物を感じながらも、カナデの話を聞きながらご飯を口にしてると廊下から何かが聞こえてきた。

「カナデー、ちょっとカナデさーん。何処にいるの?私が呼んでるんですけどー、お返事して欲しいんですけどー。麗しくも気高いアク——」

うっすらと聞こえた声に、俺は即行で教室のドアを閉めた。ついでに鍵も。

「どうした?」

「ん?いや、こうした方が良い気がした」

「ふうん？そつ」

悪夢を見そうだったからな。

なんだ、今のは。

終業のチャイムも鳴り、生徒達が下校を始める放課後。

下駄箱の所へいくとカナデが待っていた。いつもバイトの都合で早く帰ってしまうので珍しい。

なので声を掛けて事情を聞けば、バイト先でトラブルがあったみたいで急遽お休みになったそうだ。

そういう訳で一緒に下校していると、カナデのバイト先の喫茶店が見える所に差し掛かった。なんとなしに見れば喫茶店の前に赤ランプを光らせるパトカーが止まっていて、それを囲むように野次馬の姿がある。

カナデのバイト先で事件でも起きたのかとよく見れば、喫茶店に何かあった訳でなく、その向かいにある銀行に皆の視線が集まっているのが分かった。

「どうしたんだろ？まさか強盗？」

「怖いこと言うなよ・・・でも何だろうな。少し見てくる」

「そう？じゃあ——」

「いや、俺だけでいく。カナデは待ってる」

何となく嫌な予感がしてカナデを待たせて、野次馬達に混じり覗き込む。

するとメガホンを持った金髪の女性警官と、ナイフを手にしたガタイのいい赤い目をした男が目についた。

「犯人につぐ！馬鹿な真似はよせ!!今すぐ人質を解放しろ!!人質なら私が代わろう!!」

どうやらカナデの勘は当たっていたらしい。

恐らく銀行強盗でも入って人質でもとったのだろう。

きつと今、犯人を説得している所で——。

「いや寧ろ、私を人質にしろお!!なんだこの燃えるシチュエーション

は!!市民を守る為、その身を差し出し私は人質につ!貴様は捕らえた私の手足を拘束し殴りつけるのだ!『国の犬畜生が、いきがつてんじゃねえぞ!』と!!手にしたナイフで服を切り裂かれ、私は柔肌を晒してしまふ!屈辱に耐え声を押し殺す私に、貴様は重ねてこう言うのだろ!!『俺がお前に本当の快樂つてやつを教えてやるぜ』となああああ!!」

俺は直ぐ様Uターンしてカナデの元に戻った。

不思議そうな顔をするカナデの手を掴み帰宅を再開する。戸惑うカナデの声が聞こえるが、今だけは無視させて欲しい。

「言わねえよ!?!」

「言ってみせろお!!その劣情をぶつけてこい!!犯罪者だろうが!!なんの為に犯罪者になつたんだ!!」

「少なくともお前になんかする為じゃねえよお!!ちよつ、誰かあああ、警察の人呼んでえええ!普通の警察の人呼んでえええ!!」

聞こえない。

俺は聞こえない。

聞こえないぞこの野郎!!

一心不乱に家に駆け込み、ドアの鍵を閉めた。

普段はあまり使わないドアチェーンも掛けておく。

これでどうにかなるとは思えないけど。

いや、何がどうなるか分からないんだけども。

「どうした?・なんか今日の和真変だぞ?」

心配そうに顔を覗き込んでくるカナデに心臓がドキリとする。吐息が掛かるほど顔の近さに、鼻腔を擦るシャンプーの匂いに、屈んだせいで強調された胸に。

何処なく感じていた胸の中にあつたモヤモヤしていた不安が和らいで、不謹慎にもムラムラしてきた。

「・・・大丈夫だ。少し疲れてんのかも知れない。昨日遅くまでゲームしてたし」

「ああ、朝言ってたな。夕飯まで時間あるし、ちよつと寝とけよ。起こしにいくから——」

そういつて台所へ向かおうとするカナデの腕を掴んだ。

首を傾げたカナデだったけど、俺の顔を見ると困ったように眉を下げた。

「お前な・・・お母さんいないみたいだけど、いつ帰ってくるか分からないぞ？」

やんわりと断られた。

けれど諦め切れずそのままじつと見つめれば、頬を赤らめたカナデは溜息を吐く。

「・・・ちよつとだけだからな？」

了承を得て部屋に連れ込むと、カナデは直ぐ服に手を掛けた。行為による汚れを気にしてだろう。気持ちは分かる。

けれどだ・・・健全な男子高校生として、やっぱりセーラー服のままやりたい。

「んっ、ちよつ、和真！」

脱ごうとするカナデを後ろから抱き締める。

そのまま片手で胸を揉みながら、首筋に舌を這わせれば甘い声が漏れた。

「やつ、駄目だってばっ、んんっ！あっん」

抵抗する素振りは見せるけど、その力は弱い。

カナデが本気で拒否する気ならもう張り倒されている頃なので、これはある意味のOKサイン。試しに体を押さえていた手をから力を抜いても逃げようとしな。

遠慮なくやらせて貰うとしよう。

「かずまぁ——んんっ、ん」

あいた手でカナデの顔を振り向かせ、何か言葉を発しようとしていた唇を奪ってやる。

ふつくらとした桜色のそれは、見た目を裏切らず食めばマシユマロ

のように柔らかい。感触を楽しみながら桜の隙間に舌を突きいれると、やわく温かさに満ちた物が絡み付いてきた。

それはひどく甘い刺激だった。

そこから溢れる唾液も、声も、吐息も。

何もかもが堪らない程に甘い。

時間が経てば経つほど。

絡ませれば絡ませるほど。

カナデの瞳は熱を増し、蕩けていく。

カナデにキスし続けながら、服の下に手を潜り込ませた。そして二つの乳房の中央に位置するブラジャーのホックに指を掛ける。

カチっという小さな金属音が鳴り、押さえ込まれていた二つのたわわが揺れた。そのまま露になったそれに指を当て、ゆっくり力を入れていく。張りのあるすべすべとしていて柔らかい肌に、指が飲み込まれるように沈む。

それに合わせるよう、カナデの肩も揺れる。

「あう」

重ねた唇から、甘ったるい声が漏れた。

気持ち良さそうな声が。

カナデの耳を食みながら、二つの乳房をゆっくり揉んでいく。手に伝わる柔らかな感触や、張りのある弾力を味わいながら。ぷっくりと立ち上がった乳首を指でしごきながら。何度も、ゆっくりと。

「やめえ、かじゅまつーやめなのおっ、いっひゃうっかりやああ」

切なげな声が聞こえてきた。

カナデの顔を覗けば物欲しそうな表情を浮かべてる。

艶っぽい、エッチな顔だ。

「カナデ、舌出して」

出来るだけ優しく言うと、恥ずかしそうにカナデは舌を伸ばした。俺は伸ばされた赤いそれに吸い付き、同時に膨らんだ乳首をつねりあげる。

「ツツツツツツツ!!」

目を見開いたカナデは声にならない声をあげ、体を強く震わせる。

そして立っていられなくなったのか俺の体に寄り掛かってきた。蕩けた顔で荒い息をするカナデの口からは、だらしなく涎が垂れた。ひどくエツチな表情に股間が痛いほど大きくなる。

「カナデ」

「んっ」

垂れたそれを舐めとりキスをした。

甘い唾液に満ちたカナデの口を、たっぷり時間を掛けて堪能する。歯も、歯茎も、舌も、舌の裏も。カナデのキスの全部を、俺の物にする為に。

もう何度もこんなキスをしてるから、きつともう新しい場所なんてないとは思ってるけど。

深いキスの後、口を離せば俺達の口から唾液の糸が引いた。力尽きるように切れた糸は制服に落ちる。

けれどカナデから怒りの言葉はない。

ただただ、熱っぽい視線を送ってくるだけ。

ズボンのチャックを開け、振り返った息子を取り出す。

我慢汁どころか白濁の液体まで若干漏れていた。

それを見たカナデは静かにスカートを捲りあげた。

用意しておいたゴムを付けようとする、カナデの細い指がそれを止めた。

「……今日、その、大丈夫だから」

小さな声で出された生挿入許可。

限界まで大きくなっていったと思っていた息子は、その姿を一回り大きくさせた。

カナデはあげていたスカートの端を口に咥え、あいた手でパンツを横にずらし、もう一つの手でグチャグチャになった綺麗な割れ目を指で押し広げた。物欲しそうに穴がひくひくと動いている。

「ひょーらい、かじゅまの、おちんちん」

思わず出そうになった鼻血を根性で押さえ込み、息子を穴に宛がう。触れているだけの息子の頭へ、濡れたあそこはキスするようにチュポチュポと吸い付いてくる。

「いれるぞ、カナデっ」

「うん、きへ」

俺は腰に力を込めて――。

「カズマーーーーー!!ちよつとっ!!いい加減に起きて欲しいんですけどーーーーー!!お部屋の掃除が出来ないんですけどーーーーー!!お布団持ってかないと、私がカナデに怒られるんですけどーーーーー!!」

……わあ、知ってる天井だ。

けたたましいノック音が響く部屋の中。

アクアの声を聞きながら、ゆっくり整理した。

色々と。

そして確信を持つて思った。

さっきの夢だな、と。

「うおおおおおおお!!馬鹿やろおおおおお!!」

「ひいつ!?な、何よいきなり!?急に大声出さないでよ!びっくりするじゃない!!」

「うるせえ!!この駄女神がっ!!タイミング悪いにも程があるだろ!!ちよつとは空気を読め!!」

「はああああ!?この麗しくも気高い女神である私がっ!なんでヒキニートの空気なんて読まないといけないのよ!!冗談じゃないわ!!謝って、女神の私に、ヒキニートの空気を読めなんてふざけた事言ったの謝って!!」

おかしいとは思ってたんだ。

うん、分かったた。

いや、だつておかしいもん。

知ってた。

でも、でもなあ!!

続きが見てえなあああああ!!

幼馴染シチュ、素敵過ぎるんですけどお!!

うわああああああ!!

数日後。

とある路地裏。

「・・・さつき、キースが言っていたやつ、マジですか。どんなシチュでもいけますか?!」

「マジです。どんなシチュでも大丈夫です。性格や口癖、外見やあなたへの好感度まで、何でも、誰でもです。實在しない相手だろうが、何でもです」

「続きからとか、大丈夫ですか?」

「なんの続きか分かりませんが、大丈夫です」

「・・・」

「お世話になりますっ!!」

「ではこちらの書類に必要事項ご記入の後サインをお願いしますね」

え？戦いの準備ですか？しませんよ。夜逃げの準備します。

「徹底抗戦です!!私の頭脳を持ってすれば、あの程度の検察官などちよちよいのちよいで言い負かせてあげましょう!!その為にも無実である事の証拠を集めるのです!!」

屋敷に帰ってきてから始まったパーティー会議。

めぐみんはテーブルをひっぱたいて立ち上がった。

力強い握り拳が天井に突き上げられる。

「ああ、勿論私も協力しよう。こんな言い掛かりのような罪状認められる物か。カズマは最善を尽くした。屋敷こそ消し飛ばしてしまっただが、結果的に誰一人犠牲者は出ていないのだ。寧ろ褒めてしかるべきだ。情状酌量の余地はある。受けてたとう!」

追従してダクネスも立ち上がる。

目に闘志が宿ってる。

「そうね、そうよね!私達何も悪くないものね!こうなったら、皆でカズマの無実を徹底的に訴えましょう。そして壊した屋敷の件はチャラにするわよ!!勝つぞー!おー!」

当たり前のように調子の良い方に流される水色も拳を天井に突き上げた。あれは考える事を放棄した顔だ。

カズマはまだ思案顔だったので、全員が俺の顔を見てきた。流れを見れば求められる言葉も分かる。完全にもうそういうムードだし。

「いや、夜逃げするから準備しよ」

まあ、何処の誰がなんと言って、どんな聞こえの良い事を言おうと、それでも俺はガン逃げするつもりだけど。

俺の言葉を聞いてカズマも含めて目を点にした。

そこまでおかしい事言っただつもりもないので、ちよつと心外である。

少しして、最初に口を開いたのはやつぱりめぐみんだった。

「あの、カナデ。そもそも、最初に言い出したのは、その、カナデだっ

たと思うのですが……」

「そうだな。間違いないぞ」

「それならばどうしてなのですか？夜逃げなんて、罪を認めるようなものではありませんか」

めぐみんの言葉にダクネスと水色が頷く。

カズマは様子を窺ってるのか、じっとこつちを見てきていた。まったく。

「まず一つ、ギルドでも言ったように、今回の件についてカズマには殆ど非はないと言っておく。現場の指揮官であったから、流石に無罪放免とはいかないけど、あんな罪状を押し付けられるのは間違ってると思う」

全員が納得したように頷く。

「それを踏まえた上で言うておく。絶対に勝てないからこの話には乗らないでトズブラをこきます。どうしてか分からないだろうから先に言うておくぞ。それは命令を出した王家は勿論、貴族も信用に足らない馬鹿だからだ」

その言葉に何故かダクネスが体勢を崩した。

なんか言いたげな目をしてる。

「か、カナデ。馬鹿は言い過ぎじゃなかろうか。私達の国なのだ、その、もう少しなにか……」

「ない。検察がそうであるように、司法にすら貴族の息が掛かっている可能性もある。セナさんが馬鹿みたいに良い人だったからあの場は何とかなったけど、他の話を聞かない連中だったら令状突きだして強制連行待ったなしだ。そんな中裁判なんてやってみる。どんな証拠を引っ張りだそうと、出たら最後間違いなく、これだっ」

首をきるジェスチャーをすれば水色が小さな悲鳴をあげた。

「元より頭に王政が乗っかっていたから期待していなかったが、今回の件ではつきりした。この国に、もとい王家の統治機構に、そこら辺は一切期待出来ない。始まりの街と呼ばれる程、冒険者が生まれるこの場所に対してなら援助もしなければ、大きな戦果をあげた冒険者に報酬金も渡さない。それどころか罪人にしたてあげ、全責任を押し

付けようとする。――冒険者という、魔王軍と戦う為の対抗手段の一つ。国が最も重視すべき連中に対しての配慮が無さすぎる。その内、内側から崩壊して、隙をついた魔王軍に攻め滅ぼされるのが落ちだ。今の内に有力そうな強国にいつて一からやり直そう。カズマの運があれば商売しても上手くいきそうだし」

「あ、うう、思った以上に言われた・・・」

何故かダクネスが泣きそうな顔してる。

さつきからどうしたと言うのか。

落ち込んでると思えば、今度はキリツとした顔をしてこつちを見る。不思議に思っつて話を促せば『ダステイネス家』という貴族の名前が出て来た。

「ど、どうだろうか。ダステイネス家は王国の懐刀と呼ばれる程だ。評判だつて悪くない。ちようどこの街に邸もあるし、話だけでもしにいかないか？実は私はな――」

「あー、それは駄目。はつきり言つて使えない」

「――何故だ。私は何かしたか？カナデ？寧ろ応援している位なのに・・・」

意味が分からないけど、説明して欲しそうなので説明してあげた。どれだけダステイネス家とやらが駄目なのか。

実は俺、前回の魔王軍幹部戦後の借金騒動の一件以来、色々調べ回っていた。借金の件がどうしても納得いかなかったのだ。

その結果分かったのだが、門の修理費の出所がダステイネスという貴族である事を知った。ダステイネス家は王国の懐刀と呼ばれるだけあつて財力も影響力も大きい。とはいえ、門の修理費は馬鹿にならずかなりの負担になったらしいが。

「取り敢えず、そこまではいいか？」

「あ、ああ。今の所・・・その、貴族としての務めを果たしてると思うのだが」

「見ようによつてはな」

だがダステイネス家は今回また盛大にやらかした。

あろう事かデストロイヤー進行で被害にあつた農村に援助金を出すそうだ。それも自分の領地でもない場所に対してだ。聞く所によると借金までする予定だとか。

「——よつて今のダステイネス家は火の車。何かを相手してる余裕はない。こんな些細な一般市民の話を聞く時間はない」

「そ、そんな事はないと思うぞ！取り敢えず行つて」

「そもそもだ、ダステイネス家は勘違いしている」

「勘違い・・・？」

「そう、勘違い」

そもそもこれは、ダステイネス家が介入する話ではなく、この地を治める領主の責任の元行われるべき事なのだ。

ダステイネス家は下手に修理費を払うべきでは無かつたし、農村への援助金も支払う姿勢をみせるべきでは無かつた。何よりも早くその件についての責任を追求し、対応をとろうとしない領主を王国の懐刀として正式に糾弾するべきだったのだ。

そして正式な形で領地に関知出来る立場を作るべきだった。監査機関を設けるなりなんなりすれば良かったのだ。本格的な援助はそれからが良い。

「・・・あ、いや、でもな、貧困に喘ぐ人々にとつては——」

「万を助ける為に百を殺すのが、人を治めるやつの仕事だろ。個人的にはそういうの好かないけどな。でも場当たりに人助けして自滅するやつよりは信用出来るぞ」

「・・・」

ダクネスは口を真一文字に閉じた。

「王国の現状を考えれば、魔王軍の討伐がどれだけの影響力があるかは、言わなくても分かるだろ。それに比べれば門の修理費程度、はつきりいって端金だ。報酬もさつきと払ってやって、功績の大きい冒険者には勲章の一つでもくれてやれば良い。王都で軽いパレードでもしてやればもつと良いかもな。そうやって評価される事を知れば、冒険者の士気は勝手にあがる。あとは噂が噂を呼んで、冒険者達は魔王

軍幹部は倒せる相手で、討伐すれば国がその実績を認めてくれると認識する筈だ。そうならこつちのもんだ。冒険者は競うように勝手に強くなって、勝手に挑んでいく事になるだろ——そんな簡単な事も分からない王家とダステイネス家、及びアクセルを治める貴族に期待など欠片もしてはいけない・・・という事だ」

「・・・そうかも知れないがあ、うう、そんな、そんなに言わなくても・・・ひつぐ、くう、お父様はべつに、そんな・・・うう」
何故かダクネスが泣いた。

しかも結構な泣きが入ってる。
貴族の知り合いでもいるのだろうか。

「兎に角な、短くまとめると、もうこの国駄目だから別の所にいこう——つてこと」

一通り言い終わるとめぐみんが手を挙げた。

「はい、めぐみん」

「カナデの思い切りの良さはたまに怖いくらいですね。えつとですね、カナデに一つ確認です。夜逃げした後、再び冒険者になって活躍する機会がありますか？」

「ほとぼりが冷めたら良いと思うぞ。多分、この国管理ガバガバだから、その内指名手配とかいい加減になると思うし、活動場所もある程度選べるだろ」

「それなら別に良いです。夜逃げしましょう」

「我が王国はそこまでガバガバじゃない！」

何故かダクネスが怒った所で「いいか？」とカズマが手を挙げる。
話を促せば決意した眼差しでカズマは口を開いた。

「俺は戦おうと思う」

場がまた静まりかえった。

カズマなら俺の意見に乗っかると思っていたので、少し意外に思う。そしてそれはめぐみん達も同じだろう。

明らかに今回の戦いは不利なのだ。

「カズマ、さつきも言ったけど」

「分かってる。ちゃんと聞いてた。勝つのが難しい事も。——けど

な、俺はゴソゴソ逃げ回って生きるのはごめんだ」

「それは・・・まあ、いい気しないのは分かるけど、命には変えられないだろ？俺は嫌だぞ、カズマがそういう事になるの」

「・・・ありがとう。大変嬉しいです」

頬を真っ赤にしたカズマは、一旦顔を叩き仕切り直してから続けた。

「ごほん・・・兎に角だ。俺は罪人として生きるつもりはないし、おかしい罪状背負うつもりもない。真つ当な経歴で、真つ当に生きるつもりだ。いつか、その、けっ、けっけ、けこっ、結婚する相手とかに、変な醜聞とか掛かるのは嫌だからな。ここでキツチリ、完全無罪を証明するっ——!!」

「まあ、世の中何が起きるか分かりませんので、カズマの結婚がどうなるか分かりませんが——完全無罪は無理だと思えますよ。指揮官でしたから。多少のペナルティーはあります」

「うるさいめぐみんっ！そういう意気込みって事だ!!」

結婚・・・結婚かあ・・・ほう。

べ、べつに、結婚式とか、そんなのは興味とかないけど、結婚かあ・・・結婚はうん、良いなあ。

個人的には子供三人くらい欲しいかなあ。

チラつとカズマを見たら目が合った。

エツチの時とはまた違った熱の籠った目・・・ちよつとは期待しても良いのだろうか。

「えーまあ、そうは言ってもな、現実問題、色々と問題は山積みだ。策がないわけでもないけど、いかんせん情報が足りないし、現状だと勝率だつて高いとは言えない。それに一人じゃどうにもならない」
そういうとカズマは頭を下げた。

「頼む。情けない話なんだが助けてくれ。勝つ為には、お前らの力が必要なんだ」

確かに情けない話だ。

格好悪い。

でも————周りを見れば皆が真剣にカズマを見ていた。断る雰

困気は少しもない。

「しようがないなあ・・・もう」

思わず呟いた言葉に「ですねえ」と返ってきた。

「やりましょう、カナデ」

「仕方ないわねえーカズマさんったらー」

「・・・え？ああ、うん。私もやるぞ。勿論だとも、やるとも、仲間の、為だ」

最後のやつがちよつと心配だけど、パーティーとしての方向性は決まった。

「皆でえ！王家と領主を！叩き潰すぞー!!」

「「おおおー」「」

「いや、待てえ!!それこそ国家転覆罪ものなんだが!？」

ダクネスのツツコミが炸裂した所で話し合いは始まった。

喧嘩を売ってきた奴等をコテンパンにする為の。

はい？ 戦闘開始ですか。 ええ、 勿論、 手加減とかしませんけど。

「本日はようこそおいで下さいました。 任意での出頭ご苦勞様です。 サトウカズマさん——えつと、 カナデさん」

微妙に顔をひきつらせるセナさんを眺めながら、 オレは肩に掛けたバッグを背負い直し、 度無しの眼鏡に指を掛け——見せつけるように少し下がったそれを直した。

「おはようございます。 今日サトウカズマさんの付き添いで来ました、 臨時弁護人のカナデです。 本日の聴取についてサトウカズマさんの権利と主張、 尊厳を守る為に、 同行及び立ち会いの許可を頂きたいのですが……よろしいでしょうか？」

「……王国法に基づいて、 許可致します」

「ありがとうございます。 ——つきまして、 聴取内容について音声と映像による記録、 及び聴取内容の文書化を行うのであれば、 不正防止の為にその写しと、 それが本物である事の証明書も頂きたいのですが……問題ありませんでしょうか？」

「映像と音声については、 こちらも魔道具の用意がありませんので了承致しかねます。 ですが、 文書等の記録を行いますので、 そちらの写しを証明書と合わせてご用意致します。 よろしいですか？」

「はい、 ありがとうございます。 本日はお互いにとって良い一日にしましょう」

「ええ、 本当に」

徹底抗戦を決めた翌日。

冬の陰鬱とした雲が晴れた、 絶好のお洗濯日和。

オレとカズマは最初の関門と向かいあい、 熱い握手を交わした。 晴れ晴れとした笑顔で。

「……えつ、 なに、 この笑顔、 コワイ」

おい。 カズマ、 おい。

もっぺん言ってみろ、 こらあ。

ゲロ吐くまで付き合わせるからな、今夜。
なにつてナニだよ。ごらあ。

徹底抗戦を決めた日。

サトウカズマのアイディアを中心にこれからの計画を練り、そして一連の流れを決めた。

その第一歩目が、今日この日行われる事件聴取である。

国が一度認めた以上、それがどんな言いがかりであれ取り消すのは至難を極める。それは証拠があれば撤回されるような物ではない。王家がゴーサインを出した以上、白でも黒となり黒でも白となる決定力があるのだ。

現在は今回のことの責任者であるセナさんの理性と倫理が勝っている為、疑いを掛けられてる段階で何とか止まっているが、僅かにでも疑いが強まれば持ちうる権利を行使して強制収監もあり得る状況。作戦を遂行する為には時間と手間と暇が掛かる。人手を得る事が出来ればもつと早く済むが、それは秘匿性をかく可能性がある為出来ない。

私達がやるべきそれは、誰にも知られずに行う事が一番望ましいことなのだ。

監視の目が薄くなる、もしくは無くなる事が理想。集めた勝利の鍵も、敵に知られては意味がないからだ。対策されるような事があつてはいけない。

流石に全部が全部隠し通せるとはオレも思わないが、一つでも二つでも多くの隠し武器を用意しておきたい。

何せ敵は国という後ろ楯をもった組織。

武器は幾らでもあつて足りないし、油断は少しも出来ない相手なのだから。

セナさんに連れられ取調室へと着いた。

密室になる事を避けて貰う為、扉は開け放ったまま聴取を始めて貰う。

テーブルを挟んで座るオレ達に、セナさんは小さい鐘のついた機械を取り出して見せた。

「——では早速ですが、これが何か知っていますか？この様な場所や裁判所でよく使われる、嘘を看破する魔道具です。この部屋に掛けられてる魔法と連動し、発言した者の言葉に嘘が含まれて入れば音がな——」

「魔道具停止の要求を致します」

オレの言葉にセナが睨みを効かせた。

「それは、今から嘘を口にする可能性があるか？」

「いえ、セナさんを含め、魔道具に対して信用していないからに他ありません。先日のように碌に調査も行わず、強制連行を実行しようとした方々の使う道具にどれ程の信用をおけと？設置された魔法に不備がない証拠の提示をお願いします」

「専門家は生憎在籍していません。——が、こちらに魔道具及び魔法に関しての保証書がございます。どうぞ手にとってご確認下さい」

ちっ、昨日やり過ぎたか。

一応手にとって見たけど、用意されたそれは本物の証明書っぽい。念の為に写しを貰う事を約束の一つに取り決め、セナさんに話を進めて貰った。

「サトウカズマ。年齢16歳で職業は冒険者。就いているクラスも冒険者、か。……ではまず、出身地と冒険者になる前は一体何をしていたのか聞かせて下さい」

「出身地は日本です。そこで学せ——っつおっ!」

口を滑らせそうになったカズマの脛を蹴りとばす。

涙目でこつちを見たけど、そんな場合ではない。

ちゃんとやれ、と目線を送ればカズマはシヨボくれた。

「学生をしていた時期もありましたが、学校卒業後は特に何かする訳でもなく実家に籠っていました」

「……無職という事か？」

「そういう言い方もあると思います」

「私には他の言い方が思いつきませんが・・・」

部屋の書記係りの人がペンを鳴らす。

あの羊皮紙にはサトウカズマは無職と書かれているのだろう。

「家に籠っていたのは、何か事情が？」

その質問にサトウカズマの肩が跳ね、凄く辛そうな顔をした。なので変わりに黙秘を伝えておく。何故かそれに引掛かりを覚えたらしいセナさんがしつこく聞いてきたので「プライベートの事なので」と一言添えれば渋々引き下がった。

しかし、なんかセナさんのしてやったりな顔がムカついたので、一言付け加えておく事にする。

「サトウカズマさんの尊厳の為、加えて証言させて頂きます。サトウカズマさんは確かに家に籠っていましたでしたが、何もしていなかった訳ではありません。通信機器を駆使し、大規模戦闘における作戦指揮をとっていました」

カズマがぎよつとした。

大丈夫任せとけ、とウインクしとく。

本場の事しかいうつもりはないし。

「大規模戦闘の作戦指揮を？自宅からですか？確かに理論上は可能でしょうが・・・指揮者が現場にいないなど」

「事実です。サトウカズマさんは指揮能力が非常に高く、多くの人から信頼を得ていた為、通常とは異なる形ではありましたが指揮を任されていた。功績は非常に大きく、ドラゴン討伐にも参加した事がある。聞き及んでおります。まあ、そのように特異な立場であった為、あまり世間には知れ渡っていませんが」

「ドラゴンの討伐・・・！そ、それはっ、事実であれば、確かに中々の功績と言えますが」

セナさんはチラツと魔道具を見た。

嘘の反応は勿論ない。嘘ついてないもん。

前に世間話で引きこもっていた時にやったゲームの話、聞いたまんま言ったただけだもんね。いつもいるカズマさんがネットゲームで信

頼られてたのは本当だし、チームを組んで戦ったというのも聞いた話。ゲームの中だけだけど、あはは。

カズマもそれに気がついたのかプルプルしてる。

顔を見れば複雑な顔してる。笑えばいいのか、恥ずかしがればいいのか、肝を冷やせばいいのか——さっぱり分からない。そんな顔だ。

「二ホン・・・聞いた事はありませんが、そのような国が・・・いや、しかし嘘の反応は・・・。まあ、分かりました。次の質問よろしいでしょうか？」

カズマは口を真一文字にしたまま神妙に頷く。

「冒険者になった動機をお聞かせ下さい」

「それは魔王軍・・・っはふん!?!」

カズマがつまらない見栄を張りそうだったので足を踏んづけておく。涙目でこっち向いたけど、無視してやればションボリした。

「冒険者ってなんか格好良さそうだし、楽しんで大金稼いで・・・美少女にチャホヤされたいなと思いました・・・」

カズマがなんかこっちをチラチラ見てくる。

大丈夫だからこっち見んなと言いたい。

お前がモチなかつたのは聞いているから。

わかつてるから、その捨てられた子犬みたいな目は止める。撫でたくなるだろうが。

セナさんはというと、微妙な顔した。

「えっ、と、次です。領主殿に恨みなどなかつたでしょうか？」

「それについてはサトウカズマさんに代わり、私からお伝えします。ありましたよ。恨み。デュランハン討伐の際、街の修繕費として多額の借金を背負わされていますから。当然でしょう。魔王軍討伐に大きく貢献したにも関わらず、与えられたのは荣誉でも金銭でもなく、借金なのですから。聖人君子でない限りあり得ませんでしょう。あなたのいう領主殿とやらは本来支払い義務のある修繕費どころか、一切の援助金も出さず傍観。何故かダステイネス家が修繕費の大半を肩代わりするという異例な事が起きなければ、サトウカズマさんは魔

王軍討伐に貢献したにも関わらず一切の――」

「わ、分かりましたっ！その件につきましてはっ、こちらでも調査しております！分かりました!! 弁護士、落ち着いて下さい!」

「――」ご理解頂けて何よりです。恨みは勿論ありました。ですが、それと今回の件について因果関係はありません。その点をご理解頂ければ幸いです」

一通り言い切ると、セナさんは「次の」とまだ質問を続ける。しかしその内容ときたら下らない事ばかり。核心をつかずフラフラな質問。それもこちらになんとか非を作ろうとする、姑息なやり口。

暫く付き合っていたが、余りにもラチがあかない話。

面倒なので思いきってぶった切る事にした。

「サトウカズマさん、私の質問にイエスカノーで答えて下さい」

セナの言葉をぶった切った俺の言葉に、カズマは首を額に汗をかきながらイエスと答える。

「サトウカズマさんは意図を持って、領主の屋敷へコロナタイトを転移させましたか?」

「い、いいえ」

魔道具に反応はなし。

当たり前だ。

「聴取は終わりで構いませんね? セナ検察官。それとも、それ以外にまだ何か容疑がありますか? 国家転覆罪を疑う程の大きな容疑が……?」

「それは……」

「今回の聴取はあくまで、件のコロナタイトによる屋敷損壊を発端としたものでは無かったのですか? それとも、まだ核心もつかぬ質問をダラダラと続けますか? 信用足りうる装置が――今はつきりと、意図は無かったと証明しましたが? まだなにか? それとも、やはり装置は紛い物でしたか?」

「そのような事は決して――っ!」

思わず立ち上がったセナさんに顔を近づけた。

ぎよっとするセナさんの顔を見れば目が泳いでく。

「そうでしょう。検察方の用意した道具に誤りなどあるわけありませんよね。言葉が過ぎました、申し訳ありません。——では、本日はお世話になりました。もし、また何かありましたら冒険者ギルド経由でご連絡下さい。お待ちしております」

「ああ、それと。屋敷の損壊について、こちらも、多少の非はあると思いますので賠償金の請求には応じます。額については適切な価格を協議して決められればと思います。——そして同時に、サトウカズマさんが被った国家転覆罪という名誉毀損も甚だしい容疑には、慰謝料を請求させて頂きますので、そのご用意もお忘れなく」

二つの言葉を告げれば、セナさんは椅子に座り込んだ。
やっぱり真面目なイイ人だ。話が分かる。

あの様子だと上司の命令と自分の中の倫理とかが真つ向からぶつかって、胃とかにダメージ受けてそうだけど。

それから書記さんから聴取を書き取った文書の写しと、その文書の写しを保証するセナさんからの保証書。聴取に使用した魔道具についての証明書の写しを貰い警察署を後にした。

取り敢えず、今日の所は乗り切った。

まだ初日、気は抜いてられないけども。

「よし、息抜きにエッチするぞ!!」

「おう、そうだな・・・いや、そんな空気にはなれないわ!!」

うるさいー！頑張ったんだから、ご褒美くれたって良いじゃないあー
いー！

勝利の鍵ですか？それは勿論、愛と友情と利益ですとも。

ああ、朝から晩まで死ぬほどセックスがしたい。ズッコンバツコンされたい。種付けプレスされたい。子宮口をグリグリされたい。

そんな考えが頭を過る、徹底抗戦宣言四日目。

願掛けの意味もあって、なんやかんやとサトウカズマと致してない俺は、その日もせっせと作戦を遂行していた。

王都で。

「——と、これで取り敢えず王都での仕事は終わりつと。次は…と、あ、ルナさんお疲れ様です」

「あ、いえ、お氣になさらず…怒ってましたねえ…はあ」
一緒に王都の冒険者ギルドを出てきたルナさんは深い、それは深い溜息をついた。

その目には言い知れない、深淵すら生温いとでもいうような、闇より暗き闇の波動を感じる。

まあ、決定した事が事なので、そんなルナさんの気持ちは分からないでもないけど。アクセルの冒険者ギルドの責任者の名代とか、一職員でしかないルナさんには荷が重すぎる。今更だけど、相変わらず最低だな、うちのギルドの責任者。

こうして名代なルナさんと王都に来たのには幾つか理由があるが、主な目的は二つ。一つは単純な情報収集。もう一つは今回の件に冒険者ギルドをぐるつと巻き込む為の、その下準備だ。

はつきり言おう、何度も言おう。

今回の件、まともにやったらまず勝てない。

王政の世の中で、その王家からの判子貰った書類がある以上、それは絶対の効力を持つてる。理由も証拠も些細な物。「知らん、首チヨ

ンパね」と言われたらそれで終わり。勝負にもならない。

だから勝つ為に、こつちの土儀に引き摺り込み勝負の形に持つていく為に、どうしても後ろ楯がいる。

王家が一度許可した執行命令を、王家の威信と天秤に掛けてもなお撤回ないし停止を考えせられる、強力な後ろ楯が。

そしてその後ろ楯として俺達が目をつけたのが、僕と私と皆の冒険者ギルドだ。

この国において冒険者ギルドの威光は絶大。

王都の冒険者ギルドなんて、下手な貴族よりよっぽど発言力があつたりする。

きつと最初は、長き魔王軍との戦いで疲弊した王国軍にとって、冒険者ギルドは使い勝手のよい金さえ払えば兵力を補填してくれる、単なる傭兵団でしかなかったんだろう。今でも冒険者を無頼の輩と揶揄して毛嫌いしてる貴族の噂を聞けば、昔どんな風に扱われていたのか分かるうというもの。

それが今では王国兵は元より王国騎士団すら押し退けて、冒険者ギルドは民衆からかなりの支持を受けているという現実。一番人気だ。警らの王国兵に頼むくらいなら腕の良い冒険者を雇うよ、なんてよく聞く話らしい。

冒険者という職種事態にそこまで人気はないものの、腕っぷしに覚えのある者にとつて、実力いかんで一攫千金も夢ではない冒険者は魅力的な職業で、毎年一定数の人数を確保。

対して王国兵への志願兵は今や減少の一途を辿っており、それに比例するように質の低下も激しいのだとか。組織を運営する貴族達の体制の悪さも影響してか、一部の兵を除き頗る評判が悪い。

情報収集すればするほど、この国に未来を感じないのはどうした事だろうか。やっぱり、国出た方が良くないかなあ……。

まあ、そうなってしまった背景には、度々この世界に訪れる俺やカズマの同族連中、つまりチート持ちの転生者と思われる連中が、王国

兵やら王国騎士団の面目を潰す勢いで冒険者として戦果をあげたり——伝説的な偉業を成したり——そもそもその活躍の場を根こそぎかつ浚ったりした事がメチャクチャ影響してそうなんだが……いや、まあ、それは俺とカズマのせいじゃないし。知った事ではないんだけど。

自称女神の水色はこの世界を本気で救う気あつたんだろうか……。あいつのテキトーさで、今確実に滅びに向かっていつてるんだけど。

「……カナデさんは随分と余裕がありそうですね。正直いって、私ストレスで吐きそうな程なんですが……」

考え事していると、不意に話し掛けられた。

その声と表情から本気で痛いんだろうなああと染々感じる。逆にノンストレスだったら怖いのでいいけど。良いのか？

「——いや、人を超人みたいに言わないで下さいよ。これでも胃とかチクチクしてますよ？ちよつとだけ」

「ちよつとで済んでれば十分だと思いますよ。私きつと穴が空いてますから——初めて会った時から、何かと目の引く人でしたけど、まさかこうなるとは思いませんでした。ああ、でも彼女は違いましたね」

一瞬誰の事だろうと思つたけど、直ぐにルナさんと仲が良かった同僚の顔が浮かんだ。

「同僚ですか？私の事何か言っていました？」

「いつか何かやりますよ、と。こんな事だとは思いませんでしたが。私は精々男女のあれこれで、ギルドが荒れるとか……そんなだと思つていたんですけどね」

「まつさかあー、あはははー」

軽いジョークを笑い飛ばすと、何故かジト目で見られた。解せぬ。

「それにしても、本当に動いてくれるとは思いませんでした。あの王

都の冒険者ギルドが」

ルナさんが疲れた顔でそう呟いた。

俺としては事情を聞けば動くと言っていたので、寧ろ動かないと思っていた事の方が意外だ。

まあ、対応した連中は中々に鼻持ちならない連中ではあったけど。

「そりゃ、動きますよ。今回の事例が通ったら他人事では終わりませんもん。寧ろ、貴族に近い王都の冒険者ギルドだからこそ、殴り込みにくる勢いで手を貸してくると思いますよ」

「そうなの？私としては静観するのが賢いと思うんだけど」

「それこそ無いですよ。聞いた話だと王都の冒険者ギルドはかなり恨みを買ってますから。冒険者ギルドに大部分の活躍の場を奪われている所は大半。王国軍と王国騎士団、警察や検察も何故かとぼつちり受けているみたいですし——あははっ。王都見た目は綺麗なんですけど、調べれば調べるほど、ドロツドロなんですよねえ」

「えええ……カナデさん、全然笑えないんだけど」

苦笑いするルナさんに、思わず俺も苦笑いを返してしまう。調べる前はファンタジーな世界だからくなんて少し思ってたけど、人間なんて何処にいつても変わらないんだなあと思はれる。

確かに王都の冒険者ギルドは大きな発言力を持っている。——けれどそれは、かなりギリギリのバランスの上にある力でもあるのだ。

力はあるとは言っても貴族界からは睨まれ、王国の武力組織には睨まれ、常に隙を狙われている四面楚歌の現状。王都の冒険者ギルドは権威を守る為に必死だ。今回の協力要請に大した見返りもなく助力を申し出たのが良い証拠。こっちの無い袖を理由に協力を出し渋れば、次は自分達に火の粉が振り掛かる。もしその上で回避しようものなら、アクセルの街の冒険者ギルドを、身内から叩き出すくらいの骨を折らなくちゃいけない。そのダメージは計り知れないし、それこそ王都の冒険者ギルドにとって最悪の選択に他ならない。

なにせ王都の政治は表面上こそ平和そうにしてるけど、一度裏に回

れば足の引つ張りあい当たり前の泥沼の戦場。弱味の一つも見せようものなら、一気に潰け込まれ腕の一本二本簡単に落ちてしまう、そんな弱肉強食の魑魅魍魎が跋扈する世界。

「今回の件が押し通ってしまうと、今後の冒険者達の活動に大きく支障をきたしますからね。これのいかんで責任問題について定義が決まる可能性もありますし」

「えっ、定義……？これで決まるの？というか、それが決まるとどうなるの？」

どうなるか……具体的には俺にも分からない所だな。

「まあ、極端な話で言えば、冒険者がクエストを受注しますよね？それで今回みたいな事故が起きて……例えそれが不確定要素が多分に含まれた状況で冒険者に責任があるとは思えない時でも、冒険者が一方的に事故の責任取らされたりとかですか？極端な話ですけどね？」

そう伝えるとルナさんが渋い顔をした。

伝わったみたいだ。

「……ああ、何となく理解出来ました。それは王都の冒険者ギルドが黙ってる訳ありませんね。その、難癖つけ放題な定義が決まる可能性は高いんですか？」

「どうですかね？貴族が本気で騒げば、王家も無視出来なからからね。何かしらは影響はあると思いますよ。あとは司法の判断次第ですけど……」

「カナデさんはその司法も疑ってるんですよね……？」

「ええ、まあ」

叩き潰す相手が一杯で大変だ。

マジで。

司法に関してはダステイネス家辺り期待していたのだが、ダステイネス家現在マジボンコツだったからなあ。めぐみん達が上手くやってくれてれば良いけど。

ふとルナさんが黙り込んだので振り返ってみると、さっきの渋い顔が更に深刻そうな物に変わっていた。

「カナデさん。今更何ですけど、割ととんでもない事態になってませ

んか?——というか、そうなるように仕向けてませんか?」

俺はルナさんからそつと視線を外し前を向いた。

笑顔を浮かべ行き交う人々の姿が目映る。何処かの出店からお腹がすくような香ばしい匂いが鼻を刺激し、楽しい声や活気のある声が鼓膜を揺らす。

うん、平和だなあ。

「——ルナさん。さっきの会合じゃ碌に食べられなかったようですし、何処かでご飯食べてから次行きましょう」

「誤魔化されませんよ!?もしかしてですけど、これの結果次第で国が傾つ——もがあ」

「おっと、ルナさん。口元に汚れが」

軽く恐慌状態のルナさんの口をハンカチで封じ、俺は静かに路地裏に連れ込んだ。ここはゆつくりと、二人きりでのお話し合いが必要みたいだからな。大丈夫、ルナさん。そんなに怯えないで。少しだけだから。少しだけ、ほんの少しだけ、ちよつと怖い話するだけだから。

大丈夫、上手くいけばチャラだから。
多分。

げっそりしたルナさんとアクセルに帰還。

ルナさんを冒険者ギルドに預け屋敷に帰ると、めぐみん達が玄関の所でオロオロしていた。

どうやら時間切れみたいだ。

四日間の保留。

個人的にはぶつちやけ持った方だと思う。

「カナデっ! たたたつ、大変です! カズマがつ!!」

「大丈夫、分かっている。拘留されたんだろ? 裁判の話はどんな感じだ?」

目を丸くするめぐみんに代わり、隣にいたダクネスが指を三本立て

る。

「三日後の正午だ。事は国家に関わる問題ではあるが、これはあまりに早すぎる。知っている中でも異例の早さだ。やはり何かあるぞ」

「三日後か・・・二日間の半日、ちよつと厳しいかな」

リーン達とクリスに頼んだ事もあるので、一週間は欲しかったのだが・・・やはり世の中はどのようにも上手くはいかない。こんなもんだとは思うけど、何とも言えない悔しさが残る。

まあ、その代わりにというか何というか、裏で糸を引いてる奴がいるのは確定したけど。

「——つよし！めぐみん！」

「はっはい！」

「ダクネス！」

「ああ！」

「水色！」

「神々しく麗しい女神な私の名前を呼ぶ事に抵抗を覚えるのは分かるけど・・・そろそろ名前で呼んでも、私怒らないわよ？カナデ」

「水色!!」

「・・・ふあい」

じつと見つめてやれば、全員の顔つきが変わった。

戦う前として、ベストないいい面構えだ。・・・なんだ水色。その気の抜けた顔は！お酒抜くぞ！よし、いい面構えだ!!

「ここからは俺の指示の元動いて貰う。あともう一踏ん張りだ。リーン達とクリスも動いてくれる。他にも何人も協力してくれている。最後まで諦めず、徹底的に叩いて、叩いて、叩き潰す感じで頑張るぞ!!おーおー!!」

「おおおーおー!!」

「叩き潰すのは止めてくれ。というが、カズマよりよっぽどカナデのが危険人物なのだが」

ダクネスの冷たいツツコミが来たけど、取り敢えずスルーしておく。気にしたら負けだもんね。

それにしても、裏で糸を引いてるのは何を考えているのだろうか。

あまりにも色々と杜撰過ぎる。これならいっそ、水色の方が頭を使っているくらいだ。

「罨・・・か？嫌でもな、なんか違うんだよなあ」

「ん？カナデ、何か言いましたか？」

「あつ、いや、何でもない。頑張るぞー！」

上手くないのは世の常ですが、あまりにもあまりではありませんか？

「はあ!?協力要請に応じない!?!」

裁判を翌日に控えたその日の朝。

カズマと裁判の事で打ち合わせにいかうと準備を着替えていると、ひよっこり郵便屋がやってきた。渡された手紙を裏返せば封蝋に王都の冒険者ギルドの印璽が入っており、裁判のあれこれでの話かと思つて見てみれば、そんな馬鹿みたいな事が書いてあつた。

一人手紙の内容に驚いていると、郵便屋は他にも何通か手紙を寄越してきて、どれも似たような内容が書かれていた。ルナさんと回り説得した、冒険者ギルド全滅という結果にちよつと、というか本気で焦る。

俺の声を聞いてめぐみん達が集まつてきた。

不思議そうな顔をしたそいつらに手紙を渡してやれば、同じように驚愕の声をあげる。

「こ、これ、どういう事ですか!?裁判は明日なんですよ!?なんで今更!!」

「これも先の件について撤回の手紙か・・・まさか、これ全部か?」

「何を二人は慌てるの?そのお手紙が何なの?借金の請求書?」

焦りを見せる二人の姿に、水色だけ不思議そうに首を傾げた。・・・こいつはあ。

手短に内容を噛み砕いて説明してやると、途端に額に汗を浮かべてオロオロし始めた。・・・こいつはあ。

「うそ、うそよね!?あんなに頑張ったのに!?私、お酒も我慢して頑張ったのに!?ちよつと、めぐみん貸して頂戴!」

めぐみんの見ていた手紙に水色の手が掛かった。

そつと引き抜かれるそれを逃がすまいと、めぐみんは指先に力を込め——必然紙がピンッと張る。

「うわっ、ちよつ、まだ私が見ているのですが!」

「ちよつ、ちよつとだけよ！なによ！良いじゃない私が先に見てもお！！」

「おい、止めろ、アクア、めぐみんっ——たあ！あふつ、こらっ、あふん！もつと、叩いて——はっ！なんでないぞ！！二人ともその目はやめろお！堪らないだろうが！」

ワチャワチャし始めた三人を放って置き、最初に見たその手紙をもう一度読んでみた。その文自体フエイクで何かしらのメッセージが入ってるのではと思ったけど、やっぱりただのお断りの手紙。なんの変哲もない。

まさか王都の冒険者ギルドがこれを蹴ってくるとは思わなかった。自殺志願者か、と本気で疑う。脳足りんでもこうはならない。並みの貴族では圧力は掛けられない。とすれば王家クラスからとなるけど・・・こんな大きな動きがあったなんて聞いてない。

「・・・どうなってんだ？」

流石におかしい。

いや、情報収集してた時点で気づいていたけど、今回の件といい、前回の魔王軍討伐に関することといい、あまりに異常だ。異常過ぎる。敵の動きがまるで見えないのだ。

裏で誰かが糸を引いているのは分かってはいた。汚い手を使われる事を承知だった。だから王都や各街に潜り込ませた冒険者達に監視をして貰っていたのだ。不測の事態にいち早く気づけるように。

なのに、その動きがまるでない。

それなのに魔法みたいにコロコロ状況だけ変わる。

それこそ魔法・・・魔法・・・みたいにな??

「めぐみん、ちよつと」

「ん？はい、なんですか」

声を掛けるとめぐみんは手紙を放ってやって来た。

そんなめぐみんにそつと耳打ちして聞いてみる。

ふと思ったそれを。

「人の心を操ったりする魔法ってある？」

俺の質問にめぐみんは唸る。

「ないとは言いませんよ。ですが、そういった魔法は昔から煙たがれる物でして・・・あまり取得してる人はいないです。かつこよくありませんし。我が故郷、紅魔の里でも使用者は片手の数もいませんね」

「あるにはあるんだな？魔法も、それを使える人も」

「はい。——ですが、恐らくカナデが思ってるような使い方は出来ませんよ。操るといつても簡単な命令だけですし、外部からの刺激に弱いので小突くだけで解けてしまう物ですから。それに魔力消費も馬鹿になりません。紅魔族の者でも、日に一人二人を操る程度しか出来ません。こういった事を覆そうとしたら、責任者だけ操れば済む話ではないですよ？だから無理です」

絶対に？と聞けば、めぐみんは首を横に振った。

「・・・文献の中にはそういった古代魔法、ロストマジックも書かれています。強大な魔法で都市の人全てを操ったりしたとも。ですがそれも確かな証拠がありません。所詮は眉唾物なのです」

「うーん、そうか」

これが一番しつくりくるんだけどな。

何かと残念なめぐみんだけど、魔法の知識は本物だろうし、嘘つく理由もないだろうし・・・。

取り敢えずこのまま手をこまねいても仕方ない。

駄目が元々でもう一度王都の冒険者ギルドに助力を願うしかない。カズマとの打ち合わせをめぐみんと水色に任せ、ダクネスには留守を任せた。

そして俺は一人で再び王都へと向かう。

是が非でも、領かせる為に——。

——と、ある程度覚悟していたのだが、あつさりと受諾されてしまった。寧ろおかしな手紙を出してしまつて済まないと謝罪される始末。お土産にお菓子のお詰め合わせまで持たせてくれるというおまけ付き。

俺はギルドを出て、そのまま首を傾げた。

折れるんじゃないかって程に。

「絶対おかしい」

本当におかしい。

なにこれ。

意味が分からない。

さつき会った責任者はかなり遠回しではあったけど謝ってきた。当時、何故そう考えたのか分からないが、少なくともそれがその時は当たり前前の事だったと思ったのだと言った。そうするのが正しいと。念の為に他の職員に聞いても、今回の件についての書類を処分してしまった事を謝られ、今日中には届けると言ってくるだけ。そしてそれは、冒険者ギルド職員全員にいえる事だった。誰もが口を揃えているのだ。その時はそうするべきだと思っただと。誰も口を揃えているのだ。その時はそうするべきだと思っただと。

勿論、それらは彼等が本場の事を話してる前提でだが。

「これって、やっぱり、そうなのか？」

おもえば告発者を叩き潰す為にめぐみん達に頼んだ事の、その報告も大概妙だった。今回の告発者について色々と探らせていたんだけど、その周囲があまりにもおかしい事になっていたので。

今回の告発者であるアクセル一帯を管理してる領主アルダープは頗る評判が悪かった。それこそ、なんでこんな奴の告発なんて検察までもに受けてんの？と思う程に。

メイドに手を出すのは日常茶飯事で、子供が出来ても責任も取らずに放り出す鬼畜野郎。

アクセルの管理なんて小指一本分もまともにしないでくせ、恐らく国から補填されてるであろう補償金だけはちやっかり着服してる税金泥棒。

その他にもあげたらキリがない程、領主のアルダープはやらかしていた。脳ミソどっかで落としてんじゃないのか？と思うレベルでだ。それも、それだけやって起きながら、ただの一回も訴えられていない。

それに、あれだ。もう1つ引つ掛かつてる事がある。

めぐみんと水色が領主の話を聞きにいくと、何とも無かったかのようには話し始めるのに、毎日が毎回話してる途中で表情や態度を急変させ、怒り狂ったり泣き喚いたりしたそうさ。

最初は権力に負けて泣き寝入りしたものの、思い出したら色々と思う所があつたんじゃないか？ぐらいの気持ちで聞いていたんだけど、それにしてもあまりにあまりだったと。

めぐみんから言わせると、まるで忘れてたみたいだったとも。

「……うーん、なんかあるよなあ。状況から考えると、脅し掛けられるというより絶対何かされてると思うんだけど。魔法、催眠、暗示、そんな類いのこと」

情報が少な過ぎる。考えるだけ無駄な気がする。

でも、だからと言ってこのまま放置する訳にはいかない。

どうやってるかは分からないが、もし何かしらの手段で人の気持ちや考えを誘導したり出来るのであれば、裁判なんて勝てる訳がない。土壇場でこれをやられたら堪らない。まず、間違いなく証言は潰される。裁判官の印象操作なんてされたら負け確だ。

取り敢えず話せば何とかなるみたいなので、次の協力者を説得する為に俺はレポート屋へと向かう事にした。

場当たりの対応だが効果がある以上やるしかない。

人混みを縫うように進み、レポート屋の旗を見つけた所で――
急に横から出てきた黒の胸板にぶつかった。

小走りでの衝突による衝撃は決して小さくない。

鼻が潰れてめっちゃ痛い。

「っ、すみません」

「いや、気にする事はない。我も意図して行った事だ。何分、貴様の未
来は酷く見えづらくてな。矢鱈と眩しい小娘よ」

「は、はあ、眩しい？」

顔をあげると頭二つ分は大きい、端正な顔つきの男がいた。黒い

スーツみたいな服がやけに似合ってる。

男はこつちを見下ろすと、不躰にジロジロ見てきた。

「漸く捕まえたが……ふむ、やはり妙だな。てつきり、奴らの手先かとも思ったのだが……人間は人間か。しかし鬱陶しい光だ。まったくもって気に入らん」

「はあ」

「まあ、良い。貴様には幾つか聞く事がある。悪いようにはしない。暫し貴様の時間を超越せ」

そう言うとも男はいきなり俺を横抱きにした。

俗にいうお姫様抱っこだ。

突然の事に動けずにいると、男はそのまま歩き始める。

テレポト屋をすつかり過ぎ、人の賑わいが過ぎ、いよいよ人氣のない路地裏に入った所で、漸く脳が高速で回り始めた。緊急危険信号キヤッチである。

「っ!?!ちよつ、なんだよ!?!離せつ、こらあ!!」

「なんだ今更。暴れるな。何を喚いているのだ。ふむ?——くつ、わからん。人間の分際で、見通す事を生業とする我の目を誤魔化すでないわ。忌々しい」

顔をしかめるこいつに離す気配はない。

なので右拳を顎目掛けて振り抜いた。

直撃寸前かわされたが体勢が崩れ、死角が生まれた。なのでそのまま体を起こし、渾身の頭突きを横つ面にかましてやる。

「っぼはっ!?!」

「びぐうわっ!?!」

男が手を離し大きくのけ反り倒れる。

当然俺を支える者もいなくなった訳で空中に放り出され——尻から落ちた。衝撃と痛みで変な声が出てしまう。痛いなんてもんじやない。超痛い。内臓飛び出るかと思った。

お尻を擦りながら何とか立ち上がると、男もフラフラしながら立ち上がった。こつちを見る視線が鋭い。

「貴様っ、本当に文明人か?いきなり殴り掛かるわ、頭突きをくれる

わ。正直、品性を疑うぞ」

「・・・いつ、いきなり抱っこされて、人気のない所へ運ばれたら、殴り飛ばす権利くらいあつて然るべきだと思うんだが？」

「なるほど、それは何とも文化的だ。権利を主張するあたり、まったくもつての文明人だな。——それが如何なる暴力的で短慮に過ぎる主張であつたとしても、まったくもつて文化的だ。貴様、一万年は生まれる時を間違えたな」

喧嘩売ってきてるのだけは分かった。

誰が原始人だ。おい。

「フハハハハ！ふむ、その悪感情、中々に美味である」

何か戯言を抜かした男は額に手を当てる。

撫でるようにその手が顔から離れると、白黒の仮面が男の顔に付けられていた。

「まずは自己紹介と行こうか。我は悪魔、見通す悪魔のバニル。七大悪魔の一柱にして、第一席を頂く地獄の公爵である。以後お見知りおきを」

恭しく礼をする姿には、身分の高さを感じる。

悪魔がどうというのは信じるのは別としても、それを当たり前に出来る以上タダ者とは思えない。

第一、こんな所に、王都のど真ん中に、魔王軍幹部のバニルがいるわけないし。

「・・・冒険者、兼、冒険者ギルドのウェイターのカナデです」

「ほう、我が悪魔と聞いても動じないとは。これは中々・・・しかし、ふむ？ウェイターか・・・女性の店員であればウェイトレスが適当ではないか」

・・・・・・おう？何いってんだ。

それは当たり前前の事だろ・・・・・・おう？

・・・・・・うん？

・・・・・・ほう。

あれ、もしかしてずっと間違つて名乗つてた？

「——ふむ、その羞恥、中々に美味である。貴様、思った以上に感情豊かだな。貴様個人としては少し気に入ったぞ。これからもちよいちよい、我がからかつてやろう」

「喧しい、ぶっ飛ばすぞ」

「ふむ、怒りの悪感情、美味である——さて、チカチカと眩しい貴様をいつまでも見ているも仕方ない。早速だが豆電球の小娘カナデ、貴様今、随分な面倒事に関わっているだろうか？」

「バナルと名乗った男は顔を近づけ続けた。」

「我にも一枚噛ませよ」

「ことわ——」

「ええい、少しは考えよ。貴様にとつても、そして我にとつても決して悪い事にならぬ。これは対等な取引と言える。見通す悪魔の名において保証しよう」

「——る」

「躊躇いもなく言い切るでないわ！」

小便は済ませた？神様にお祈りは？ああ、待て、ごめんって。誰がタライ持ってきてー。

「――よ、カズマ」

「おう、カナデ」

準備という準備を済ませた、運命の決戦の日。

被告人に誂えられた部屋で俺達は最後の打ち合わせの為、その顔を合わせた。緊張しているのかカズマは死にそうな顔をしていた。言い出しつぺ、おい。

「信じてるぞ、カナデ。アクア、めぐみん、ダクネス」

目が泳ぎまぐるカズマに、めぐみんが小さく溜息を溢した。

「声はしつかりしています、そのすがるような目は止めて欲しい所なのですが。私達カズマの号令でこうしているのですよ？」

「緊張するのは分かる。だが、ここは私達を信用してくれ。カズマはパーティーリーダーとしてどっしりと構えていれば良いのだ。任せろ」

「さっさと勝って帰って宴会よ！カナデに我慢させられた分、一杯飲むわよー！おーー！」

「おい、最後のやつ」

水色の気の抜けた発言にカズマのテンションが少し戻った。流石女神。人の心を救う為に、空気ブレイクなんてお茶の子さいさいな。はいはい、ワチャワチャしない。ワチャワチャしない。カズマ！水色！待てだ！！ステイ！

緊張が解れた所で前日の打ち合わせ内容を再確認し、軽いエールを掛け皆で部屋を後に――する筈だったのだが、カズマに呼び止められた。

皆に裁判の準備を任せて先へ行かせ、カズマの元に向かう。何やら妙にモジモジしてる。

「どした？」

「……いや、な。その……」

歯切れがいやに悪い。

まあ、表情や仕草を見てれば、何となくその理由は分かるけど。まったく、この男は。

モジモジするヘタレの顔を掴み、そのまま唇を重ねた。

舌を絡ませ合う、がつつりのデイープキス。

暫くぶりのそれを出来るだけ長く、熱を込めて。

部屋についてた見張りが咳払いした所で口を離せば、唾液の糸が唇から唇の間に垂れる。

顔を離せば必然、上気したカズマと目が合う。

良い目をしてる、なんて程格好はつかないけど、さつきより少しはマシになったように見える。

「——少しは勇気出たか？」

「お、お、おう。勇気というか、別の、何かが」

「うんうん、そんなくらい余裕があれば大丈夫だな。こんな下らない事さつきと終わらせて、一杯エッチしような。期待してるからさ」

「……オウ。オレ、ガンバル」

ロボットみたいな話し方をするカズマを置いて、俺は気持ちを新たに部屋を出た。

あつ、勿論、見張りの人に口止めするのも忘れず。

さあ、戦場に辿り着いた。

後は真つ向から、叩き潰すのみ。

それから少しして、多くの冒険者と冒険者ギルド職員——それと水色が何故か連れてきたデストロイヤーですら滅ぼせない熱狂的な某教徒達に見守られ、カズマに掛けられた国家転覆罪を巡る裁判が幕を開かれた——

被告人、カズマ。

弁護人、カナデWithトンチンカン。

検察官、セナさん。

告発人、領主アルダープ。

裁判官、書記官。

知らないオツサン×2。

——以上の九人による、国家転覆罪を裁くには妙にこじんまりとした、その裁判が。

熱狂的な某教徒達の祈りの言葉をBGMにカズマへの人定質問が終ると、セナさんが資料を手に立ち上がる。

読み連ねられるのは今事件の起訴状の内容。つらつらと読み上げられるそれは、如何にもカズマが犯罪者のように語られている。イラツとしたけど、そこは我慢。弁護人が逮捕されては意味がない。

何より、何処か不服そうなセナさんに当たるのは間違っている気がするし。

裁判官のオツサンからお口チャックしてもええよとカズマが言われれば、次は俺達の番。

資料を片手に一步前へと踏み出すのは、見掛けは一番ちゃんとしてるダクネス。読み上げさせるそれは、勿論カズマに掛けられた罪状への否定の言葉。

カズマの無罪を求める声に続き、性癖以外は有能そうに見えるダクネスの言葉には貴族令嬢もかくもやという品性が見え隠れし、良く通るその声は裁判官の目を開かせるだけの迫力があつた——まあ、きつと、おっぱいの力と美人の力もあつた事だろうけど。

こうしてお互いの主張が示めされた。

出された意見が食い違う以上、後に始まるのはどちらかが倒れるまで終わらない暴力なき殴り合い。

いよいよ戦いのゴングが鳴り響く。

検察側から早速召喚されたのは見覚えのある証人達。

話には聞いていたけど、やっぱりきたか。

カブラギキョウスケの取り巻きーズ。

これでセナさんの攻め方は理解する。

証拠が不十分の中どうするかと思えば、やっぱり人間性から攻めて

きたか、と。

「あれはっ、あれは間違いなく厭らしい手つきでした!!あいつは公衆の面前でっ!!」

悲鳴のような声をあげる女性二人に空気の温度が下がる。下らない内容だが、裁判官の視線も鋭くなり悪い心証を与えたのは間違いない。

続く証人にはカズマが酔った勢いでパンツステイルをかまされたといい冒険者達。似たような事を証言され、温度は更に下がった。ここにクリスがいたら尚下がった事だろう。仕事に縛り付けておいて良かった。

たっぷりカズマの人間性やら何やらをボコボコにしたセナさんは、続いて貧乏店主さんや当時現場にいた冒険者を召喚。今事件の肝である、コロナタイトの転送指示を出した事実を証言させる。

「――以上の事から被告人であるサトウカズマ氏の、人間性や倫理観の欠如は明らかであります。加えて任意での事情聴取にて魔王軍幹部討伐による報酬を巡り、領主であるアルダープ氏に遺恨がある事が判明しております。物的証拠こそありませんが、状況証拠からサトウカズマ氏が今回のような凶行に走った可能性は非常に高いと言わざるを得ないでしょう」

結局証拠は状況証拠のみ。その状況証拠も内容はメチャメチャだ。コロナタイトを転送したランダムレポートについても一切触れていない。あれが意図して転送場所の選択が出来る証明が出来ない以上、ただの言い掛かりでしかないのに。

けれど空気は完全に悪い方向に流れてしまっている。裁判官は勿論、傍聴席も何ともいえない空気が漂う。

流石にその若さで検察官になるだけあって、セナさんは普通に優秀らしい。だから余計に可哀想に思う。上司からなんて言われてここに立っているのだろうか。

「皆――敬虔なアクシズ教徒の皆――!アクシズ教のアークプリーストの私が命じるわーもう一度最初から教義の復唱よ!不当な逮捕に抗議よー!」

「はい、同士」

「アクシズ教徒教義―第いち―」

――後、さつきから聞こえてくるワケわからない教義も印象を悪くしてる気がする。・・・いや、これはこれで意味はありそうだけど。だって裁判官が完全に引いてる。ゴキブリや雑草よりしぶといと噂のアクシズ教徒が、こうも応援するカズマ。関わりたくないが為に、罪が軽くなりそうな気がする。

ダクネスに一つ合図を送っていると、高圧的な声が耳に響いてきた。

「――弁護人のカナデさん。仰りたい事があれば声に出して下さいさつて構いませんよ。どうぞ」

急にセナさんからそう声を掛けられた。

不思議に思っ顔を見れば、キリツとした真面目な顔とは裏腹に呆れすら混じる瞳が目につく。

茶番を終わらせると、そう言ってる気がする。

なので、お言葉に甘えさせて貰って行動を開始しよう。

「めぐみん、やるぞ」

「了解です、カナデ」

書類をテーブルに広げ、俺はめぐみんと立ち上がる。

「裁判官、検察のあげた証拠や証言について、弁護側は不同意であると
言わざるを得ません。弁護側は検察側証人への取り調べを要求しま
す」

俺の声に裁判官は頷き話を促した。

呼び出されたのはカブラギキョウスケの取り巻きーズ。

取り巻きーズはこちらを睨みつけてくる。

「先の証言について、私も現場にいましたので、厭らしい手つきにつ
いては事実であったと証言致します」

「そ、そうよ！私達は何も間違った事は言っていないわ！」

「ステイールする気だったのよ！公衆の面前で！」

認めた事で元気に反論する取り巻きーズ。

キャンキャンと煩いそいつらを、ちよつと目を細めて見つめてやれ

ば口を告ぐんだ。

「——ですが、事が起こる前。サトウカズマ氏がそうせざる得なかった状況であった事も証言致します」

目を見開く二人を無視して続ける。

「サトウカズマ氏はそちらの証言者のお二人方のお仲間であるカブラギキョウスケ——」

「カナデ、ミツルギキョウヤです。誰ですか、カブラギって」

「——ミツルギキョウヤ氏と決闘を行いました。ただの決闘ではありません。お互いに話し合い決められた権利を賭けての決闘です。勝負はサトウカズマ氏が勝利し、一つだけ言うことを聞くといい権利の元、魔剣グラムを正式に譲り受けました。——ですが、そちらのお二人方は勝負の結果を不服とし、あろう事かサトウカズマ氏の所有物となった魔剣グラムを奪おうと窃盗及び暴力行為に及んだのです。サトウカズマ氏はあくまで己の所得物を守ろうとした結果の行動、至極全うな理由からの正当防衛であり、一方的に貶められる言われはありません」

「なっ!!?」

その言葉に二人が喚いたが、法廷に控える騎士に押さえて貰い話を続ける。それが如何に正当な行為であったか、裁判官に同情を誘うように。

ついでにその件についての証言者の入廷を裁判官に申し出て、水色に説得させたあいつを舞台に引っ張りあげる。

「しよ、証人要請を受けました、ミツルギキョウヤです……」

「えっ!？」

「キョウヤ!？」

申し訳なさそうに登場した勇者の姿に、その件に関する勝利の鐘の音が響いた気がした。……おら、証言しろよ。初心者マークついた冒険者に賭け勝負挑んだ、恥知らずの敗北者。水色が見てるぞ——
——いや、水色にはダクネスと共に別の仕事任せて向かわせたから、実際にはもう見てないんだけども。勇姿だけは伝えてやるからさ。うん。

ミツルギによる証言により、厭らしい手つきに関しては情状酌量の余地ありという雰囲気にも持ち込めた。王都にてそれなりに評価されてるミツルギの言葉はよく響いたようだ。それを皮切りに他の自称被害者追及を始める。実はこの被害者達、向こうの完全なヤラセである。何せ本当の被害者はOHANASHIAIにて、こつちできつちり押さえている。フリーの被害者がいるわけない。

被害を受けたという自称被害者に日時や状況を尋ねれば簡単に綻びが生まれる。証言について虚偽があった場合こつちに訴える準備がある事を伝えれば、その声を小さくしていった。

・・・パンツステイルされた本物の被害者達には、後でカズマに土下座させよう。うん。

検察側の証人を根こそぎぶつた切り、いよいよ今事件の確信について反論を始める。先程の貧乏店主さん達を法廷に呼び戻し、コロナタイトを巡るやり取りについて再証言をお願いする。

「えっと、カナデさん同じ事で良いんですか？」

「構いませんよ。お願いします。きちんとサトウカズマ氏がコロナタイトを手にした所から、貴女にカズマが言った言葉を覚えてる限りご説明下さい」

促され貧乏店主さんは当然その話をした。

魔術をかじっていれば気づく矛盾点。

ランダムテレポートという不確定要素が高過ぎる転送による攻撃が、如何に非現実的な事なのか。

それを口にした貧乏店主にめぐみんからツツコミを入れさせる。魔術理論と確率論を合わせたためぐみんの批判の言葉に裁判官が小さく呻く。もういい加減、この裁判がどれだけ無茶なのか理解しているだろう。

いや、無茶自体初めから承知の事かも知れないが。

「——よって、カズマに意図して転送する術はありませんでした。国家転覆罪は不適切と言わざるを得ません。責任者として命令した以上、無実とは言い難いですが、その責任はカズマを責任者として任命した冒険者ギルドにもあります。弁護側はカズマ個人に掛けられ

た国家転覆罪の撤回と、この件について責任の所在について再調査を求めます」

言い切ったためぐみに合わせ、しまっていた書類を机の上に引っ張り出す。

そして裁判を警護している騎士に頼んで、裁判官へとそれを届けた。

「これは……」

「王都冒険者ギルド及び、他街の冒険者ギルドより預かった、再調査依頼の署名です」

「成る程……これは根回しの良い事だ」

厳格そうな裁判官が僅かに頬をひきつらせた。

これで容易におかしな判決は出せない。

この裁判の行く末を見ているのが、ここにいる連中だけでない事が嫌でも分かった筈だ。

順調、そう言わざる得ない状況。

元より普通にやれば勝てる裁判だったから、それはなんらおかしいとは思えない。当たり前前の結果。

ここまでは。

「くだらんっ！」

荒々しい声に視線を向ければ、領主のアルダープが顔をしかめながらこちらを睨みつけていた。

裁判官とセナさんに緊張が走るのが見える。

「さつきからベラベラベラベラと。証言、証拠、それが何になる。ワシの屋敷は確かにそいつの命令で吹き飛んだ。それが事実だ！——」

——それをいつまでも煩わしい！裁判官、さつきと死刑を言い渡せ！ワシが誰だか、分かっておるな!? ええ!？」

その言葉に道理はない、最早ただの癩癩だ。

けれどそれだけの力がある。

検察も裁判官も無視して、誰かを陥れる力が。

『貴様に一つ未来を教えてやろう。最悪とも呼べる未来。そしてそれを回避する方法もな——とまあ言っても、貴様は信じぬであろう？故に我への報酬は後払いで構わん。まずは聞け——』

王都冒険者ギルドの威光も効かず、検察や裁判官も止められぬ以上、あの男の提案を受け入れるしかないようだ。最後の最後で他人任せとは……はあ。

めぐみんへと視線を送れば小さく頷いた。

すぐそこに待機しているらしい。

ダクネス達が上手くやったようだ。

「裁判とは検察、被告、弁護、裁判官によつて行われる事。多くの議論を重ねて審議し、真実を導き出す場所である。——幾ら告発者という立場があるとはいえ、開廷中大声をあげる事も、その立場にない者が判決を口にする事も、許されていないと思うのだがね。アルダープ殿」

威厳に満ちたゆつくりと紡がれる低い声。

アルダープが目を見開いてそこを見た。

『お前の側で喧しい女がいるであろう。アークプリーストだ。奴をある男の元へと向かわせよ。変態ドM娘が共におれば、何なく顔を合わせる事が可能だ』

カツカツと硬質な足音が響く。

『貴様がタイミングさえ間違えなければ、それで貴様らは未来を掴めるであろう。もう一度、奴に機会を与えよ。貴様が見限った、その男にな』

足音は俺の隣で止まった。

横を見れば金髪の髪を後ろに流した、背がピンと伸びた壮年の男の姿がある。

「ダスティ……ネス、何故、貴様がつ」

震えるような声に壮年の男は鋭い視線をアルダープへと送る。アルダープの肩が大きく跳ねあがる。

「仮にも上位貴族であるダステイネス家当主である私に、随分な口の利きようだね。君はいつの間に関私より偉くなつたのかな？アルダープ殿」

「っは、はっ、はい申し訳・・・」

「謝罪は不要。後日、君には少しばかり聞きたい事が出来てしまった。無理にでも時間を作つて貰うよ。王家の懐刀としての要請だ、拒否は許さない。残念に思うよ、君は国と民を思う同士だと信じていたのだがね——さて裁判官殿、そろそろこの茶番もお開きとしよう。もう十分審議しただろう？おっと、私が口を出すべき事ではなかったね。申し訳ない」

そうダステイネスさんがウインクすると、裁判官は唾を飲み込んだ後咳払いした。

「えっ、えー、け、検察側！弁護側！以上質問はありませんか!？」

焦りの滲んだ声に頷いた俺達を見て、裁判官は形式的にカズマへと視線を向けた。もう答えは決まっているだろうに。

「被告人、言い残した事は」

「・・・ありません。言いたい事は、俺を最後まで信じてくれた・・・皆が・・・言つてくれましたので。甘んじて、これからの判決を受け入れます」

「そうですか、ならばよろしい」

カンカンとハンマーが鳴らされる。

「少し手順を飛ばしましたが、これ以上の審議の必要性を私は感じる事が出来ません。よって、判決を言い渡します」

「被告、サトウカズマは無罪。事件の責任については検察に再調査を申し付けます——以上閉廷」

高らかに告げられた言葉に歓声があがった。

喜びの声や驚愕の声、まだ聞こえる怪しい教義。

どれもが祝福するモノ。

こちらに振り返って笑顔を見せるカズマに手を振りながら、俺の頭の中はあの胡散臭い男の声が甦っていた。

『もし私の助言通り事が上手くいったなら、今度は貴様が誠意を見せよ。貴様が文明人だと言うのであれば、何も難しい事ではないだろう？——これは取引だ小娘。忘れるな』

そんな男の声が。

いや、まあ、条件ギリギリに縛ったから、大した事させられないと思うけども。悪魔に良心問われるとは思わなかったもんな。

☆ご褒美あげても良いじゃない。頑張ったのだし。

無事勝訴を勝ち取ったその日。

領主の件もあって当初より敗訴濃厚と噂だった今裁判。その下馬評を覆し見事戦いに勝利し帰宅したカズマと俺達を迎えたのは、黄色い声援を送るアクセルの街の人達だった。

まるで英雄を迎え入れるかのような対応に、カズマが分かりやすくビビる。あのめぐみんでさえたじろぐ事態だから、仕方ないのは仕方ないけど。

領主への告訴を棄却させた。

それはきつと長い間、領主に煮え湯を飲まされてきたアクセルの人達にとって一種の憂さ晴らしとなったのだろう。他にも幾つか理由はあるだろうけど。

そうして、沢山の人達から祝福を受けたカズマは――

「はああああああああああ、死ぬかと思ってたあああああああああ」

――酷く長い安堵の溜息を吐きながら、俺のおっぱいに顔を埋めていた。

裁判の後始末がーとか、冒険者ギルドに報告があるからーとか、テキトーな理由をつけめぐみん達と別れた俺とカズマは、飽きもせずいつもの宿にやってきた。

本当ならパーティー内でお祝いでもしようと思っていたのだが、裁判の疲れが思った以上にあって皆グロッキーだったし、翌日に冒険者ギルドで無罪を祝う会をしてくれるというので、お祝いは翌日に持ち越しとなったのだ。それでこれ幸いに――という訳なのである。

それで部屋に入り早速シャワーを浴びにいこうとジャケツトを脱いだ所で、カズマに引きずり込まれるようにベッドに倒され今に至る

という。

胸にかかる熱い吐息にちよつとだけ背中をゾクゾクした物を感じながら、覆い被さるように乗つかかるカズマの頭を撫でてやった。

相変わらぬチクチクした固めの髪。手触りが良いとは言えないけど、やっぱりこうしていると何だかんだ落ち着く。

「お疲れ様」

「・・・おう、でもな、それは俺の台詞だ。ありがとうな、頑張ってくれて。——はあ、ほんつつと、アルダープが最後に喚いた時、心臓止まるかと思った」

「ああ、それは俺もかも。もっと早い段階で喚いてくれたら、やりようもあつただけけど・・・あれはなあ」

カズマを頭を撫でながら裁判を思い出す。

あのタイミングで言われるとどうにもならない。

何せ審議は半分以上終わり、状況証拠や他冒険者ギルドの署名からカズマへの有罪判決が難しくなつてからの発言だ。例え領主が本物の馬鹿で、何も考えなしに発言しただけだったとしても、裁判官も檢察のセナさんも——ひいてはあの場にいた誰もが、発言の裏にある領主の権力の強大さを深読みしてしまった筈だ。

ん？俺？俺はこいつ本物の馬鹿なんじゃないかと、ずっと疑つてたから確信しただけだったけども。

何せ、あの裁判を有罪にするというのはそういう事。

冒険者ギルドを敵に回す事は勿論、横暴そのものである裁判が貴族の発言によつて左右されたという事実は、恐らく——まあ、良いか。何がともあれ起きなかつた事。気にしても仕方ない。どうせ殆んどの人達は気づいてないだろうし。

「・・・ダステイネス閣下は、分かつてたかなあ。あの様子だと」

「——？なんか言つたか？」

「ん？いや、何でもない。気にするな」

「ひよっ！」

ぎゅつと抱き締めてやれば、カズマは変な声をあげながら静かになつた。ういうい、もう本当可愛いなあ。カズマはいつまでたつても

反応が新鮮で良い。

暫く頭を抱き締めながら温もりを感じていると、カズマがモゾモゾし出した。胸の谷間から覗かせた上目遣いの目が、何か言いたげにこつちを見てる。何処か期待も入り交じってて、何かして欲しいのは分かるけど——分からん。

「まったく、お前な・・・言ってくれないと分からない事もあるんだぞ？」

そうおでこにちゅーしてやると、カズマは顔を赤らめた。

「・・・あのですね、ちよつと、その、顔を挟んで頂けたらと」

「？おっぱいで？てか、もう挟まってるだろ」

「いや、そのなんていうか、自分でやるのじゃなくて、されたいというか・・・こう、ぎゅつと、こう・・・お願いします」

「はいはい、お願いされました」

胸をサイドから寄せあげ、カズマの顔をぎゅつとしてやる。巨乳という程のサイズでないせいか、やっつてこつちからすると手応えがなくて微妙な感じなのだが・・・カズマは思いの外嬉しそう。挟んだ顔を握ねるように力を入れてやれば顔がどんどん緩んでく。

本当、おっぱい好きだな。こいつは。

「楽しいか？」

「楽しいというか、なんとというか、人は本来こうあるべき的な、そんな感じですよ」

悟り開いた人みたいになってる。

・・・水色とかダクネスのおっぱいに挟まれたら、どうなるんだこいつ。死ぬのかな？ん？あーはいはい。こう？そつ、良かったねえ。顔をおっぱいで握ねてやって少し。

妙に固い物が股の近くを触るようになった。

替えの服を持ってきていないので暴発されても困る。

例によって下着はもう取り返しがつかないレベルでビショビショだけど、幸いな事に上着とかスカートはまだ無事。まあ、スカートはギリのギリではあるんだけども。

取り敢えず一旦手を止めて服を脱ごうかなあ———と思つたんだ

けど、ふと良いことを思いついた。

「なあ、カズマ。そろそろ準備OKなんだけどさ」

「ん？あ、わりい、俺一人で——」

「やる前にお願ひあるんだけど、聞いて貰って良い？」

そう伝えると体を起こしたカズマが首を傾げながらこちらを見てきた。

「お願いって・・・俺が出来る事なら別に良いけど、何だよ？」

「今日は裁判で一杯頑張ったろ？思ってるよりクタクタなわけ。そりや、カズマが頑張ったのは知ってるし、気疲れしてるのも分かるけどな？」

「あー良いって、俺の事は気にすんな。そもそも無理言ったのは俺だしな。で、前置きは兎も角として何しろって？」

嫌な素振りはない。カズマの目は熱っぽくて厭らしくて・・・優しい色をしてる。

それならばと、思いついたそれを伝える事にした。

「だからな、疲れてるからさ、脱がせて欲しいんだよ？カズマに」

「ああ、それくらい任せ・・・ろお、おう？脱が、脱がせるのか？俺が？」

「そう。脱がせて欲しい。シャツも、スカートも、靴下も——勿論、こども」

そう股の所へ手を置けば、カズマの目から優しさが消え、すっかり獣の目になった。変わり身の早さにゾクリとし、少しだけ後悔して、少しだけ期待する。

「替えがないから、服が汚れると不味いんだよ。——ねっ、だからお願い、カズマ」

上目遣い気味にお願いすると、カズマは無言のままキリつとした顔つきで頷いた。

ゆっくりとカズマの手が伸びてくる。

首もとのボタンに触れ、小さな衣擦れの音と共に服がはだける。一つ一つ、ボタンが外れる度、露出していく肌。撫でる外気と刺さるような熱い視線に、チリチリするような、ゾクゾクするような、何とも

言えない感覚が走っていく。知らずの内に呼吸が荒くなり、心臓がドクドクと強く脈打ち、体が熱く火照っていく。

最後のボタンが外れ、首もとからお腹に掛けて外気がなぞった。顔を起こさなくても肌が晒されてるのが分かる。カズマはそれを舐めるように見つめた後、シャツをゆっくり左右へと広げた。

肩に隠していたシャツの感触が消える。

今あるのは腕に掛かった頼りないシャツの感触だけ。

自分がどんな姿になってるか想像していると、喉を鳴らす音が聞こえた。カズマの方から。はつきりと。

「う、腕んところ、後でも良いか？」

「・・・ん、好きにしろ。でも、汚すのは駄目だからな」

と、思わず言ってしまったが、正直に言えば脱がすなら脱がすで一気にやって欲しい所だった。

中途半端とか逆に恥ずかしいな。なにこれ、普通に照れる。エッチ前の余興として良いかと思っただけど、想像以上にドキドキしてる自分がいる。

そうこうしているとカズマの手が腰元に触れた。

ベルトを外せば簡単に脱がせられるのに、カズマの手は焦らすように撫でてくる。指の感触にあそこがいちいち反応してしまって、どうしようもなく熱くなってしまう。

「っん、ん」

暫く腰を撫で回した後、掌はスカートを止めていたベルトの金具に触れた。カチャカチャという音が鳴り、腰を締め付けていた感触が消える。

「カナデ、その、下ろすぞ」

「な、なんで言うかなあ・・・」

「いや、なんつーか、礼儀？」

変に声を掛けられたせいで余計に意識が向く。

カズマを見れば余裕のなさそうな顔してるから、わざとじゃないのは分かるけど・・・天然でやらかしてるなら相当だ。いや、嫌いじゃないけども。

止め金の外れたスカートを止める物は何もない。カズマの手に引かれずり下がっていく。肌を擦っていく布の感触にゾクゾクが止まらない。

感触は太腿を抜け、脹ら脛をなぞり、爪先を僅かに引つ掛けながら通り過ぎ——カズマの手にスカートが下がった。

カズマは焼けつくような熱い視線で濡れたそこを凝視してくる。その熱烈さといったらない。指先すら触れてないのに、それだけで妊娠しちやいそうな程強い何かを感じた。

カズマは何も言わず、荒い鼻息のまま顔を近づける。

どうするのかわかっている、生温かくて湿りのある何かパンツ越しに撫でていった。

「ひゃっ、あっう！——かずまっ、まら、ぱんつぬいでにゃんああー」
体を起こして見ればパンツ越しに、そこへとしゃぶりついているカズマの姿があった。慌てて止めようとしたけど、クリトリスを強く吸われ軽くイってしまった、もうそれどころじゃない。

「もう、こんなに濡れてたら関係ないだろ？」

「やつ、らあめっ、かずゆっまー！」

ジュルジュルと厭らしい音が聞こえてくる。

溢れてるそれがカズマに吸われてる音。

それが興奮を誘い、余計に濡れてしまう。

カズマの舌が布の隙間に潜り込んで、アイスでも舐めるみたいに這わせてくる。執拗に。

甘い刺激に耐えていると、舌がまたクリトリスをなぞっていった。

「——ここ好きだよな、カナデ」

「ふああ？——あっ、やあっ！やらああっ、かずゆま、まら、あああん！！」

ざらつく舌が強くそこを撫でた。

瞬間、ビリビリした刺激が腰元から頭の天辺まで、一気に這い上がってきた。一瞬、頭が真っ白になる。

「カナデ」

「ふえ、あっ、んっ」

声に視線を向ければカズマの顔が側にあつて、力強く唇が重なつた。差し込まれた舌が俺の舌に絡んでいく。カズマの舌を伝つて熱い唾液が口に広がつてく。

注がれるそれを啜ると、カズマがお返しと言わんばかりに啜り返してくる。

「カナデ、舌出して」

「うん」

言われた通り舌を伸ばせば、カズマの唇が優しく食んできた。そして味わうみたいに表も裏も沢山舐められ、取れちゃうんじゃないかと思えるほど吸われた。

ゾクゾクと走る快感に頭がぼーっとする。気持ち良くて止めたくならない。

カズマとのキスは好きだ。

それはどうしようもないほど。

触れるだけの優しいキスも、こうして舌を絡み合う激しいキスも、一方的に貪られる乱暴なキスも。

だって伝わってくるから。

唾液の甘さから、温かな舌の熱から、柔らかな唇から。

俺の事を好きなんだって、言葉なんかよりも、ずっと強く。

「——か、ずま」

重ね合わせた唇から、漏れた言葉。

カズマは重ねていた唇を離し、熱っぽい視線を送ってくる。

「どうした？」

優しい声に思わず頬が緩む。

こんな時でもカズマは俺の知ってるカズマである事が嬉しい。だからそんなカズマによく聞いて欲しくて、俺はカズマの耳元へ口を寄せた。

「すぎ、かずま」

言葉にすると、自分の気持ちをはっきりする。

お腹の所がきゆうってしてポカポカするのだ。

一言口にするだけで胸が熱くなって、もっと好きになってく気がす

る。

それは酷く甘くて、心地よい感覚。

「すぎ、すぎ。かずま、だあいすぎ——きょうは、いっぱいしような？」

ぼんやりする頭でそう言うと、カズマに抱き締められた。反り立つそれがお腹に触れる。

「今日は本当に寝かさないからな」

夜はまだまだ長そうだ。

☆子作りしたって良いじゃない、だってあなたの事がこんなに好きなのだし

「ううん、これがリアルか。腕枕かたい・・・」

「文句いうなら降りろ」

「断る」

抑圧されていたおよそ一週間。

お互い溜まる物はすっかり溜まっていたようで、あれから狂ったみたいにエッチしまくった。数えきれない程キスを交わして、数えきれない程愛を囁きあって、頭がショートしそうになるほどイキまくって、入りきらないほど注ぎ込まれて・・・エロの権化たる俺でも流石にちよつと疲れたので、今はカズマの腕で絶賛休憩中である。

ちよつとあそこもヒリヒリするぜ。

エッチは好きだ。

エロい事は大歓迎だ。

へい、子作りしようぜ！OK！サッカーチーム作ってやろうぜベイベー。

基本そんなノリで生きてる俺だが、こういうまったりとしたのも嫌いじゃない。

「んー、カズマあー」

「うおっ!?急には動くのは止めろ」

腕に擦りつくとかズマがくすぐったいそうに身を振った。照れたような顔が可愛いかったので、もつと擦り擦りしてやれば頭を抱き締めるように止められた。

ちよつと締め付けが強くて文句を言おうとしたけど、口が胸板に押し付けられて上手く開かない。

「ふあふうふあー」

「こそばゆい、止めろ・・・たく、お前なあ、もう、もうお前はあ・・・！」

何故だかもつと強く抱き締められた。

ちよつと苦しい。

頑張つて脱出するとこつちを見下ろすカズマと目が合う。普段より澄んだ目を見てるとカズマの顔が近づいてきて、おでこにちゅーが一つ落ちてくる。

何処かやり遂げたみたいなの顔をしたカズマが少し癩で、お返しに頬つぺたにちゅーしてやれば、分かりやすく顔を赤らめた。

自分からするのは平気になったみたいだけど、相変わらずやられるのは駄目らしい。・・・くう、もう！きゅんきゅんさせるなよな！休憩中なのに、やりたくなつちやうだろうが——ん？

「——もう、んっ」

物欲しそうな顔に気づいて目を瞑れば、唇に柔らかい物が触れた。小鳥が啄むみたいな小さな接触。漫画とかアニメならちゅつと音が鳴りそうな軽いキスだ。

何度か重ねていると、触れる時間が少しずつ長くなっていった。

舌が唇を割って入ってきた所で、カズマの手がお尻の肉を掴んできた。ぎゅつと握られて、ぞくりとした物が這い上がってくる。

「っん、んんっ！んあつ、かずつ、まあ」

「カナデは本当、可愛いな。どこも柔らかいし——」

カズマが舌を絡めるのを止め、唇を食んできた。

舐められて、啜られて、噛まれて。

でも痛くはない。どれもすごく優しいから。

「——どこも甘い」

お尻を触っていた手が腰からお腹へと滑るように置かれる。そしてカズマの物で一杯になってそこを、優しく労るように撫で回してきた。

それは刺激としては小さくて弱かったのに、何故だか酷く興奮を誘ってきた。すごくエツチな気分。

労るような優しいカズマの手に、俺は自分の手を重ねる。重ねた手は自然と絡まって強く繋がれた。

「カズマ、しよ？」

「っ、お、おう・・・そ、そうだ。カナデ試してみたい体位があんだけ

ど・・・」

「ムードもへったくれもないな、お前は・・・はあ、それで、どんな？」
喉を一つ鳴らしたカズマは意を決したように口を開く。

「バックからやりたい・・・！」

「おう、ガツンとこい。望む所だ」

「悩んだ俺が馬鹿みたいだぜ」

安心しろ。カズマは馬鹿じゃない。

そっち方面に疎い癖に、スケベが先行する変態なだけだ。

それから言われた通り四つん這いになると、直ぐにカズマが反り返ったソレを差し込んだ。

もう濡れまくりだからヌルヌル入るのだが、背後から入れられる感覚はまた独特で、顔を見てエッチする普段の体位と違って妙な感覚がある。

「——カナデ」

熱っぽい声が耳に響いて、少しだけヒンヤリした指の感触が首筋をなぞっていき背中へ。少しの間背中を擦った指は滑るように脇腹を撫でていき、重力に従って垂れ下がる乳房に触れた。

くすぐったくて身を振ると、肩に柔らかな感触が触れて——小さな痛みが走った。

「んっ」

思わず溢れた声に、柔い感触を割って現れた湿りのある熱いそれが、痛みが走った場所を労るようになぞる。

そう間も置かず、また痛みが走った。

それは肩の先から段々と首筋へと向かっていく。小鳥が餌を啄むよう、小さく何度も。

「っあ、ふっ、んんんっ」

不意に乳房を触っていた指が、すっかり立ち上がったそこを摘まんできた。背筋にゾクゾクするような甘い痺れが走る。枕に口元を押し付けてなかった、きつと情けない声をあげていただろう。

「気持ち良かったか？きゅって、しまったぞ。カナデ」

耳元で囁かれた言葉に胸がドキリと高鳴る。

普段の姿を知っているせい、カズマの真面目ボイスは余計に興奮を誘う。一人ドキドキしていると、俺の中で差し込まれたソレが大きく膨らんだ。振り返ればカズマの荒い息遣いと、熱気の籠った溜息が顔を撫でていって——上気したカズマの目が合う。

「このまま続けるぞ・・・良いか？」

「ふふ、馬鹿だな。そんな事聞くなよ——いいよ。一杯して、カズマ」

そう答えると、差し込まれたソレが膣壁を抉りながら出口に向かい——また一気に奥へと叩きつけられた。

肉を打つ音が、液体が弾ける音が、部屋に響く。

そして俺の体にも、ビリビリするような刺激が。

「んあつーふあつ、ああつ、あん！」

カズマのソレが出し入れされる度、ゾクゾクするような、ビリビリするような刺激が体を走っていく。お腹から込み上げてくるその刺激は激しく、熱く、甘い。

愛液と精子が満ちたそこから、カズマのソレで引き摺りだされた液体がベッドに染みを作っていく。

「んふっ、ん、ふうー、ふうー」

液体からは噎せかえるカズマのオスの匂いが漂う。

それは今まで嗅いできた物より濃い。溜めていたせい、何なのか知らないが、嗅いでもただでお腹がきゅんきゅんと疼いてしまっただけではない。

断続的に走っていく刺激に、四つん這いを維持する腕や足から少しずつ力が抜けていく。腕の方が耐えきれなくなつてベッドに突っ伏すと、カズマは胸から手を離して両手でしっかりと腰を掴まえてきた。「ちよつと強めにいくぞ」

そんな言葉と共に突き上がる形になったお尻に、カズマが強く腰を打ち付けてきた。それまでより深くカズマのソレが突き刺さる。一番奥へ強引に押し込まれる感覚に、そこから全身へと走っていた刺激に、一瞬息が止まる。目の前がチカチカする。

カズマの腰が何度も打ち付けられる。

反り上がったソレが膾壁を強くなぞりながら、俺の中の奥ずっと奥を、強く、強く、強く襲う。

それまでならリズムを変えたり、ストローク位置を変えたり、色々してくれてたのに、それはただ強くて、乱暴で、こんな犬みたいな格好で―――なのに不思議と嫌じゃなかった。

「カナデっ、出る！出るからな！」

「ふえっ？んんっ、いいよ！いっぱいほしい！かずまの、たくさんんっ！かずまあ、かずまあ！」

覆い被さるように抱き締めてくるカズマの声に、伝わる体温に、俺の奥に押し付けられるソレの感触に体が震える。

余裕のない仕草だけど、それは以前あった焦りからくる物じゃないのは分かっている。手に込められた力も、熱い視線も、鼻を擽る匂いも、いつもと違う。

「んんっ、あああん！」

強く突き刺さったソレから火傷しそうなほど熱い物が噴き上がった。新たに注ぎ込まれた熱を逃すまいと、俺のあそこは反射的に強く締め付ける。けれどももう沢山注ぎ込まれたそこはもう満杯で、入りきらない熱が僅かな隙間から染みだして、股の間からだらしなく零れていってしまう。

カズマの腕の中で注ぎ込まれた熱の余韻に浸っていると、耳の裏を湿り気のある生暖かい物が這いずっていった。掛かる吐息が、それが舌である事を教えてくれる。

耳の形を確かめるようにペロペロと舌が耳を撫でる。

舌は段々と外側から内側へと移動していき、耳穴に滑り込んでくる。厭らしい音が鼓膜を揺らす。ざらついた舌の感触に背筋が震える。

「――っ、ふにゃあ」

急に耳を食まれ、思ってもない変な声が出てしまう。

カズマはそれにもお構い無しに耳をしゃぶってくる。アブノーマルな趣味はないんだけど、甘噛みされた耳たぶが痛気持ちいい。

「・・・耳も開発してたりするか、お前」

「っんん！そんなにや、わけっ、ひゃうっ！」

俺を何だと思ってるかと睨もうとしたが、その動きを遮るようにカズマが乳房を摘まんた。ビリリと走る甘い刺激に思わず肩がびくついてしまう。

「お前はなんでも自分で始めるからな。良かったよ。まだお前の初めてが残ってる。お前そっち方面はただのド変態だからな」

そう言うとかズマを耳をねぶりながら、乳房を弄り始める。未だに童貞臭漂わせてる癖に、触るのが本当に上手くなった。癩に思う反面、カズマの指の感触が気持ち良くて、喘ぎ声をあげるしか出来ない。

快楽に身を預けていると、カズマが腰をゆっくりと引いて――
―不意をつくようにカズマのソレが子宮口へキスしてきた。ゾクリとする感覚が腰から背中を通り頭へと抜けてくる。それと同時に、弄られていた乳房と耳から痛みの混じった強い刺激が走り、頭の中が真っ白になる。

今度こそ全身の力が抜けてベッドへ落ちる。

フワフワした頭でぼんやりしていたら、カズマが横に寝転んできて抱き寄せられた。カズマの温もりもそうだけど、それよりも汗の匂いが鼻をつく。男特有の匂い。でも嫌な感じは少しもしない。どちらかと言えば好きな匂いと言えるし。

目の前の胸板に頬を擦り寄せれば、カズマが髪をとかすように撫でてきた。くすぐったいけど、それもなんか気持ちいい。

「サラツサラだな・・・なあ、カナデ。俺からのお願い。これから、その、性感帯つつーの？それ勝手に開発すんの禁止な」

「んっ、うっ？・・・にゃんれ？」

「俺の楽しみが減るだろ。それにお膳立てされっぱなしっていうのは、やっぱり面白くないしな」

「おれいろにい、しよめたいいきな？」

「そうだけど・・・それは止めてくれ、なんか心にくる物がある。恥ずかしい。中学の頃を思い出す」

自分で言っておいて、とも思ってたけど、余計な事を言うのは止めておいた。

なんのかんの、俺はムードを大切にする派だから。

だからそこは大人しく、カズマの体にくつついてポカポカする事にした。季節はまだまだ冬だし、いくらお腹が……あつ。

「……あー。なあ、かずま、かずま」

「ん？どうした？流石にもう立たないぞ」

「あつたま悪い返しありがとう、馬鹿。今更だけど、まあ、大丈夫だとは思うけど、一応念の為に教えておこうかと思つてさ……いや、大丈夫だとは思うけど」

「その前フリは絶対大丈夫じゃないヤツだろ……」

俺には裁判の事につきつきりで、ついうっかり忘れてた事があつたのだ。ここまでやつといて、なんで今更な話ではあるんだけども。

「今週分の薬飲むの忘れてた」

そう教えるとカズマが動かなくなつた。

顔を見上げると、何処か遠くを眺めてる。

無の境地といった様子。

「……多分大丈夫、だと思ふ。周期的にも……いやまあ、いきなりくるかもしれないけども——」

「あー、悪い。少し、色々考えてただけだ。嫌だとかそういうんじゃないからな。そんな不安そうな顔すんな」

そう言うとかズマの手は髪をとかし始めた。

そこに動揺は感じなかった。

話す前と一緒に、優しく温かい。

「……カナデの子供だったら、美少女か美男子が産まれてくる訳か。俺。パパか、まじか……まじか」

「もう出来た体で話すなよ。寧ろ出来る可能性のが少ないからな？……てか、産まれるにしても俺オンリーにはならないだろ。カズマみたいなのが出てくるかも知んないぞ。そしたらカズマJr.つて名前にしような」

「勘弁してくれ、カズマJr.つてお前。俺は息子にそんな罪深い名前を背負わせたくない。クズマなんて呼ばせたくない」

「それは、お前の日頃の行いが原因だ。一緒にするな、Jr.を」

それからそんなもしもの話でカズマと沢山話した。

子供の教育がどうか、何人欲しいのかなんて、誰かに聞かれたらバカツプルなんて呼ばれそうない話。

眠くなるまで、沢山。

▲我が名はめぐみん！爆裂魔法の愛し子にして、真実を見抜く真紅目（レッドアイズ）を有する者！！

「何回目か忘れちゃったけど、もう一回行くぜ！皆！ジョッキ構えろー！！」

そんな酒精混じりの声に、顔を赤らめた連中が応えるようにコップやジョッキを手にしていきます。勿論各人が手にした物には並々と注がれたクリームゾンビアが揺れていて、どこもお酒の臭いが凄い事になっってます。

「サトウカズマの無罪判決にカンパーーーーーイ！！」

「二カンパーーーーーイ！！二」

掛け声と共に勢い良く掲げられたジョッキやコップ。

当然並々に注がれていたクリームゾンビアが器に収まっていらられる筈もなく、周囲へと飛び散っていきます。

「景気良く奢ってくれる、ダステイネス家のお貴族様にカンパーーーーーイ！！」

「二カンパーーーーーイ！！二」

音頭をとるその掛け声は更に大きく、動きも激しく強くなり、掲げられたジョッキやコップからもクリームゾンビアがドバドバ溢れていきます。きつともう殆んど残っていない事でしょう。勿体無いですね。

「クソ領主に目にもものくれてやった俺のカナデちゅわんに、カンパーーーーーイ！！」

「何が俺のカナデちゅわんだ！ボケ！！殺すぞ！」

「そうだ！馴れ馴れしいぞ、クソダスト！！」

「死ね！性犯罪者ア！！」

「カナデちゃんのけつ触った手だせや！！今日こそ引きちぎってやる！！」

「んだと、こらあああああ！！！！やんのかこらあ！！あんだこらあ！！上等だ、雑魚共！！掛かってええーこいやあ！！」

何故だか喧嘩が勃発したようです。

原因の根底に仲間がいるみたいで、何とも言えない争いですね。正直見ていられません。

私は厨房から直接貰ってきた山盛りの唐揚げを抱えながら、慌ただしいそこを後にしました。

人混みを縫うように進んで少し、いつものパーティーメンバーと主に女性冒険者達がくだを巻いてるエリアへ戻ってこれました。こっちも大概ベロベロの酔っぱらい集団らしく、大分グダグダしてるようです。

「あつ、めぐみんらあ！」

「ああつ、ほんろらあ！めぐみんらあ！」

楽しげな声に視線をやれば、クリスとリーンが赤い顔でフラフラしながら近づいてきます。以前の女子会でお酒はもう止める、と固く決意表明していた二人なのですが・・・駄目だったようです。

「どよこひっへはのー？かにやでがねえー」

「そうらあ！ひよこひつてたんらあ！こちりやの、くりすちやんが、ありがたああー！いおはなししてくれりよのに！」

「ありがたいなんてゝえへゝそんなにやでもないけど・・・」

「にやんで、うっそー！くりすちやん、おせつきよーばばあのみきでしたあー！」

「なんりやとおお!!だれぎや、ばばあらあ！ここによこによー！」

ここでも争いが勃発しました。

なんでしようね、酔うと喧嘩しなければいけない決まりでもあるのでしょうか。

そのまま放っておくのもなんだだったので、貰ってきた唐揚げをそれぞれの口に放り込んでおきました。これで治まるとは思いません——

「おいひー」

「にくじゅーうまあ」

——治まりましたね。酔っぱらいって一体何なんでしょうか。

もう一個余分に唐揚げを口に詰めてやってからパーティーメン

バーの元へと戻ると、カナデとダクネスが静かにグラスを傾けていました。この間の女子会の時は魑魅魍魎の巢でしたが、今日はちよつと大人な雰囲気か漂っています。

「おっ、めぐみんお帰りー」

「ん？ああ、お帰り。しかし、また随分と貰ってきたな・・・」

カナデがこちらに手を振ってきました。そしてダクネスの視線は山盛りの唐揚げにきました。

流石ダクネス、筋肉になりそうなお肉の山は見逃しませんか。ふっ、いやしんぼですね。伊達に腹筋が割れてる訳ではないという事でしょう。

「・・・何か失礼な事を考えていないか」

「気のせいですよ、ダクネス。それより唐揚げお待たせしました。レモン掛けてきちやいましたけど、大丈夫ですよね？」

テーブルへ置きながら念の為に聞いてみましたが、二人は笑って大丈夫と言ってくれます。ほっとしたのと同時に違和感を感じます。こういう時ひねくれたカズマと妙に拘りを持つてるアクアが一言くらい文句言ってくるのですが——んん？

「——そう言えば、カズマとアクアは何処にいったのですか？」

ふと見渡すといない二人の姿。

私の質問にカナデは口元に人差し指を当て、苦笑いで自分の膝を指差します。

よくよく覗いてみれば、酒臭いカズマがイビキをかいて寝ていました。まさかの膝枕です。

さつき戦争を始めた人達には見せられない光景ですね。ある意味で結束して、一時的に平和になりそうでもありますが・・・そのあとを考えなければ。

「それで、アクアは向こうだ」

ダクネスの指差した方向には十八番である花鳥風月でギヤラリーを湧かせる、酒瓶を装備したアクアの姿がありました。

「どうも、どうもー！あ、おひねりは投げないで下さーい！これはそういう物ではないので——」

・・・あそこはある意味で平和そのものですね。
カナデの隣を諦めダクネスの隣へ。
席についた私の前に小さいグラスが置かれました。
とてもシユワシユワしています。

「・・・か、カナデ？あの、これは？」

シユワシユワを置いたのはカナデです。状況から考えれば、普通なら飲んで良いよという事でしょう。ですが、普段飲酒に関して一番に厳しい態度を示すのも、そのカナデなのです。

なのでどういう意味でこれを置いたのか聞いてみると、カナデは悪戯っ子のように悪い笑みを浮かべます。

「子供の内から飲むは良くないけどな・・・まあ、この国では14歳つていったらもう成人だろ？それにお祝いの席だしって事で——
ちよつとだけな？」

「い、良いのですか!?後で怒りませんか!？」

「怒らない怒らない。でも、それだけだぞ。後はもちよつと体が大人になってからな」

「はい！頂きます！」

シユワシユワとその名前の通りの音がなるコップを手にとると、コップ越しその冷たさが伝わってきます。

そのまま口をつけようとした所で、私は一旦その手を止めました。別に飲みたくないからとか、体の事を考えてとかではありません。そこら辺は今更です。

手を止めたのは他でもありません。

どうやって飲んだ方が一番美味しく飲めるか、それを悩んだからです。

よく一気で、という言葉聞きます。

ギルドで食事をしてるとそれは実際よく見る光景で、そういう人達は決まって凄く良い顔をしているものなのです。まあ、お酒の弱い人は大変そうでもあるのですが。

ですが、折角許された一杯。

それを一気に飲んでしまつては勿体無い気がします。

そんな事して味分かりますかね？

やはり、よく味わって飲んだ方が……ですが、一番美味しく頂けるのが一気であれば一気の方が……しかし、量も問題です。これだけしかないのです。ほんとの一口だけ。果たして一気で美味しくなるのでしょうか。なんか、こう、ガブガブ飲むのが気持ちいいな、様子を見てるとそんな所もある気も……しないでもないです……むむむむ！

「はははっ、そんなに悩んで飲むもんでもないぞ？」

「そうは言いますが、私にはこれしかないのですよ？こんな機会、次はいつあるか……」

「次は当分なさそうだもんなあ」

「むむむっ！その言い方聞き捨てなりませんよ!!そうやって余裕でいられるのも今の内だけですからね!!直ぐに私の方が……」

……どうでしょうか。少なくとも私の母を見ている限り、血筋的な面で言えば希望はなさそう……い、いえ！血筋が全てではありませんよね！そうです、そうに決まっています……

ふと胸に触れて見ると、そこにはほんのりとした膨らみがあるだけ。というか、その膨らみも、ほんのりもほんのりです。もう14歳なのに……

『——めぐみん、勝負よ！』

脳裏に同い年でありながら凶悪な巨峰を抱えるあの子の姿が浮かび、胸の奥底へ何とも言えない痛みが走っていきました。ぐぬううう、次あつたらもぎつてやりましょう。

「……どした、めぐみん？」

「はっ—い、いえ、何でもありませんよ。よし、決めました——」
「何してるのーみんなー……あっ！駄目よ、めぐみん！」

これからという時に、パツと横から伸びてきた手が、コップを拐っていきました。突然の事に呆然としてると、コップを拐っていった犯人がそれを一気に飲み干し「ぶはーっ」と気持ち良さそうに吐息を漏らしました。

勿論、私の目の前です。

「もう一駄目じゃない、カナデもダクネスも。ちゃんと見てない！めぐみんが間違ってお酒飲んでやう所だったわよ？もう、みんな私がないと駄目ねー！ふふふ！あつ、感謝はいらないわよ！私もお酒貰えたから、まあ、おあいこで——」

「な、なな、ななな！何をするんですかあー！！わた、私のっ！あ、アクアあああ!!」

「——っうえ!?な、何よ!!いきなり大きな声出して？お腹でも空いてるの？」

あまりにもベストタイミング。一瞬三人に謀られたのかと思いましたが——流石にそれは邪推し過ぎたようです。アクアの間の抜けた顔に計画性は感じられません。嘘つけるような人でもありませんし。

ついでにカナデとダクネスも随分な間抜け顔を晒しているので、きっと本当に白なのでしよう。

事故、事故なら、致し方ありません。

仕切り直せば良いだけですから。

「カナデ、あの——」

「残念だったなあ、早く飲まないから」

「——え」

私の言葉を遮るように、カナデがそう言いました。

ちよつと内容が分からなかったのでカナデを見つめて復唱を求めましたが、唐揚げを食べ始めてしまつて見てくれません。

「ダクネス、あの——」

「それだけ、という約束だからな。残念だったな、めぐみん。まあ、そう焦らずともその内飲めるようになるから、いま暫しの我慢だ」

「——ええええええ！そんなっ！私、少しもっ、カナデえ！」

私の声にカナデがこつちを向きます。

カナデは優しく微笑み、その手で唐揚げを摘まむと私の口元へ差し出してきました。

「はい、あーん」

「あーんっ……っって、騙されませんよお!!」

「あはは」

何とか二人の説得を試みたものの、結果は断固としてのNO。最初に言ったように『それだけ』だそうです。まあ、もたもたしていた私にも非はありますから、あまりしつこくはしません。——え、いや、アクアとは話し合いの場を設けますよ。勿論です。

それから暫くは、いつものようにお喋りしながらご飯を食べていたのですが、ふとある事に気づきました。

カナデの飲み物の事です。

カナデが手にしたジョッキの中身がずっと水なのです。いつもなら好きじゃないとしても、周りに合わせてそこそこ飲む筈なのですが……。

「……カナデ、体調悪かったですか？」

そう尋ねるとカナデは不思議そうに首を傾げました。

「いや、別に？ああ、いや、ちよつと眠いのはあるかな。でも、いきなりどした？」

「さつきからお水ばかり飲んでいたので」

カナデは一瞬目を丸くした後、苦笑を浮かべました。

「ちよつとな」

それだけ言うとカナデは視線を落としました。

様子を伺っていましたが、もう何も言う気がないようです。なので、また、それまでと同じように食事に戻ろうとしたのですが——
——それが目に止まりました。

優しい顔でお腹を撫でる。

カナデの、その姿が。

それまで小さな違和感はずっとありました。

確信を得る為にも動きましたが、いつも寸前でかわされています。状況的には限りなく黒でしたが、物理的に何も掴めなかった以

上、何も言わないでおきました。

ですが、そんな顔されてしまったのは、もう素直に知らないふりはしてあげられませんよ。

カナデ——。

特に何も無い日々ですが？ええ、そういう時もあると思います。

冬の季節には珍しく、よく晴れたその日。

早々に洗濯物済ませた俺は、以前同僚から格安で譲って貰った厚手のカーデイガンを肩に、太陽の光がよく差し込む窓の側で椅子に腰掛けていた。

僅かな生活音のみの静かな部屋の中。

俺は手元で編み込んでいるソレから目を逸らさず、窓の外へ向けそつと耳を傾けた。聞こえてくるのは小鳥の囀り。冷気をのせた空風と、そこに混じる僅かな街の喧騒。

いつもなら水色が馬鹿やったり、めぐみんが詠唱の練習を始めた、ダクネス辺りが修練を始めてもう少し賑やかになるのだが．．．この様子だと今日はそれもなさそうだ。朝御飯を食べた後、水色は直ぐにバイトに出掛けていない。めぐみんはダクネスを爆裂散歩へ誘って出掛けたから、きつと今頃はアクセルの外へ。帰ってくるのもお昼過ぎ以降だろう。

あれからもう一週間。

領主の件はかなり根が深い問題だったらしく、未だに調査は続いていて終わりの目処はたっていない。カズマの件に関しては、裁判の翌々日にやってきたセナさんから、功績も考慮にいらした上で今後この件で罪に問うことはないと言われているが．．．それでも全部が全部解決した訳ではない以上、油断は禁物だ。それは俺も重々承知している。

——けれど、今日くらい、一息くらいについてもバチは当たらないだろう。神様もきつと許してくれる。

そう勝手な事を思いながら。

戻ってきた日常の空気を感じながら。

俺は手元にあるそれを、また一つ縫い込んだ——。

「……なあ、カナデ」

不意に掛かった声に顔をあげれば、黙々と製図していたカズマが手を止めてこちらを見つめていた。

「どした？」

「いや、どしたって……確認なんだけどき、まだ出来てないよな？」
「ん？そりゃ、そうだろ。何言ってるんだお前。そんなに早く出来るもんか」

赤ちゃんが出来るまでどれだけ時間掛かると思ってたんだ。こいつは。俺はお腹を撫でながら、カズマに赤ちゃんが出来るまでを簡単に説明してやる。ついでに出来たかどうか確認出来るのも、次の生理がくる辺りである事も。

すると一通り俺の話を聞いたカズマは、俺の手元へ向け指差してきた。

「それ、何作ってたんだ」

「何って……着ぐるみ？」

俺の手元には耳をつけるだけで完成する、赤ちゃん用のネコの着ぐるみだ。黄とらバージョン。

昨日作った前掛けは可愛すぎたので、今日はどっちでも大丈夫なように、黄色を基調とした物で作ってる。

その何が問題なのか……？

「堪らなく不安になるんだよおおお！いやな、別にな、それが嫌とかいうんじゃないぞ!?何度も言ってるけど!!もうな、そこら辺は問題ない!!大丈夫だ!上等だ!責任は取る!ちゃんと取る!覚悟は出来た!———と思う!」

「おう、ありがと」

「でもな、それはそれ、これはこれなのお!!不安になるんだよ!堪らなく!その、もう完全に出来た体であれこれしてる姿見てると、兎に角落ちつかねえんだよ!俺ちまちま物作ってる場合じゃねえんじやね!?働きにいった方が良くね!?ギルドいかねえと駄目なんじやねとか!?あああああつ、上手く言葉になんねえええ!!」

おっと、マリッジブルーならぬベイビーブルー。
知らん間にプレッシャーになってたのか。

ごめんな。

「いやあくあはは、もしかしたらと思うと……ねえ？こう、いても立つてもいられないと言うか」

「……はあ、いやな、そもそもは、まあ、堪え性のない俺が悪いんだけど……」

「お前だけ悪いって事はないだろ。俺もしたくてしてる訳だしな。そこはお互い様だ——それにな、もしそうなくても、悪い事なんて少しもないぞ。寧ろ、嬉しいくらいだからなあ」

そう言っただけで笑って見せると、カズマが顔を赤くしてそっぽを向いた。もうあれこれしてる間柄だったのに、何だっただけでこいつはこうなんだか。可愛すぎか、こいつめ。

「それで、どうなんだ？出来そう？」

「ん？ああ、まあ、凶面は何とか起こしてみた所だ。後は必要な材料揃えて、組み立てて見ない事にはな……大丈夫だとは思うんだが」
ちよつと覗いて見たら、随分しっかり描かれてた。

そういう物に詳しくはないけど、それがちゃんとした知識の上で描かれてるのは見てれば分かる。

普通に凄と思う。

前に自作のライターを見せて貰った事もあるけど、あれはしつかり出来ていた。カズマは知っていれば誰でも作れると謙遜してたけど、俺個人としてはそうは思わない。再現するのも技術と発想が必要だ。実際、俺が作れるかと？と聞かれれば、間違いなく首を横に振る話だ。

こいつ本当に、なんでニートしてたんだらうか。

「ふうん、ライターはよく出来てたからなあ。ちよつと期待。出来る
と良いな、コタツ」

「その上で売れてくれりゃ、もつと良いんだけどなー。ライターの売り込みの事とかも考えないとな……。それに本格的に売るとなったら量産の方法も考えないといけないし……っか、そもそもどうやっ

て売るかも考えないといけないし……はあ、課題はまだまだ多いな」
「そこは焦っても仕方ないだろ？一つ一つやっつけてけば良いんだよ」

「……おう、ありがとうな」

それから暫く、カズマとまったりとした時間を過ごしていると「頼も……うー！」という大声が庭の方から響いてきた。

何事かと二人で覗けば、門の所に女の子が立っていた。

女の子の姿にカズマが感心するような声をあげ——直ぐにこつちを見て「違う」と言い訳してくる。女の子はおっぱいが零れ落ちそうなエロい服を着ていたので、多分それを見たことを謝っているのだろうけど……別に責めたりしないんだけどな。男の視線が自然とそういう所に向くのは理解出来るし、注意してどうにかなるものでもないと思うし。

まあ、でも、悪いと思ってくれるのは……悪くない気がする。

「——それにしても、何処の誰なんだか」

「なー。ん？でも何処かで見たとかな……なんだ、この感じ。服の感じとか、雰囲気とか」

「めぐみ……ん!!いるのは分かってるのよ!!出て来て、私と勝負しなさい!!」

続いた女の子の台詞に俺達は思わず顔を合わせる。

カズマの目には確信に似た何かが宿っていた。

そして多分、それは俺もだろう。

「めぐみんって呼んだな……そういう事か？」

「そういう事だろ？でも今いないからなあー」

二人で門の方へ視線を向ければ、女の子は声をあげながら門の所を世話しなく動いている。屋敷の中の様子を窺おうとしているのか柵に顔を押し付けたり、壁の上から覗こうとしているのかピョンピョン跳び跳ねる。

「めぐみ……ん!!ねえ!いるでしょー!いたら返事してよー!ー
!めぐみ……ん!すみませー!ー!あのー!ー
!無視しないでー!ー!い、いないのかなあ?あのー!ーちよつとすみませー!ー!」

そして必然おっぱいが揺れる揺れる。
当然カズマの視線も釣られる釣られる。

……あー。

「……はっ!?ち、違う!違うからな!これは、なっ、まあ、ほら、お前も——」

「あーはいはい」

「——あれっ、怒ってる?割と怒ってる!?怒ってるよな!?ちよ、こっち見てくんね?か、カナデさーん。あの一、カナデさーん。カナデさんの、可愛いお顔が見たいなあーなんて」

怒ってる訳ないだろ、ぶっ飛ばすぞ。

鬱陶しいカズマを押し退けて、俺は縫いかけの着ぐるみを置いて玄関へと向かった。ええい、着いてくるな。お前はキリキリ働いてる。何?怒ってないわ。怒ってないって。怒ってないって。怒ってないって。怒るぞ!!怒るぞ!!があああ!!

「あ、あの、初めましてっ。私めぐみんのライバル……ライ……バル……くう……!——我が名はゆんゆん!!アークウイザードにして、上級魔法を操る者!めぐみんのライバルにして、やがては紅魔族の長のなる者!!」

めぐみんの知り合いらしい女の子を家に招いて少し。

お茶を差し出した俺に、少し挙動不審っぽかった女の子が大きな声で自己紹介してきた。どうやら女の子はゆんゆんというらしい。詳しく聞けば、やっぱりめぐみんの同郷だとか。ライバルとか自称しているが、恐らく普通の友達だろう。つい先程そう尋ねた時、全力で否定していた割に顔が嬉しそうにやけていたので間違いない。

それにしても相変わらず紅魔族の名前のセンスはいかんともし難いな。ゆんゆん、か。まるでパンダの名前みたいだな。

ん?カズマはどうしたって?知らん。

一回こっちに顔出したけど、諸々の事情で追い払ってやってから見

てない。とぼとぼ階段登ってく所までは確認した。

後は知らん。

「ゆんゆんか、まあ宜しくな。じゃあ久しぶりにやるか——我が名はカナデ!!冒険者を生業とし、ギルドのウエイトレスをたまにしなから、日々家事に勤しみつつエツチも忘れず嗜む者!!」

挨拶を返してやるとゆんゆんがキョトンとした。

「あの、それって……」

「?紅魔族風の挨拶なんだろう?おかしかったか?」

「い、いえ、おかし……いや、自分で言っておいてあれですけど、おかしいとは思ってますけど。そうじゃなくて、その、笑ったりとかしないんですか?」

あー、言われて見ればこの挨拶はかなり白い目でみられるもんな。まともに返すのって俺くらいか。カズマも気分が乗った上で、パーティーメンバーだけの時とか、死ぬほど酔っぱらってる時はやるけど……それくらいだもんな。

「まあ、そういう文化つてだけの話だからな。それにな、俺個人としては好きだぞ。だってカツコいいだろ?」

「か、カツコいいですか?」

「カツコいいぞー。自分が誰で、どんな奴で、どんな風になりたいのか。嘘つかないでちゃんと言えるつて。俺は……ずっと出来なかったからな……」

「……あの、カナデさん?」

いつの間にか下がっていた視線をあげると、心配そうにこちらを見つめるゆんゆんがいた。安心させてやりたくて笑顔を返せば、開きかけていた口が閉じた。

「ありがとうな、心配してくれて。でも、大丈夫だから。今は、な……でまあ、なんだ、だからな、そうやって言葉に出来る強さを、この先も大切にしてくれなつて話。それだけ。——はい、難しい話は終わりな。冷める前にそれ頂いちゃってくれ」

俺がそう言うのと慌ててカップに口を着けたゆんゆんだったが、お茶はある程度熱さを残していたようで肩が大きく跳ね上がる。すげー

熱そう。

「大丈夫か？」

「ひゃい、ひゃいひょうふひえしゅ。おいひいーひえしゅ」

「そうかーそれは良かったよー」

どうみても味が分かつてるようには見えないけど。

まあ、満足して貰えてるなら良いか。

コーヒーならバイトでやってたから自信あるけど、紅茶はいまいち勝手が分からんからな。文句言われてもどうしようもないし。誰か紅茶の入れ方とか知らないだろうか。一度聞いてみたいんだよなあ。

ゆんゆんが普通に紅茶の味が分かり始めた頃、ようやくまともな会話が始まった。

めぐみんと共に紅魔の里から上京したゆんゆんは、めぐみんと同様に冒険者となつたらしい。しかしアクセルの街にてライバル（設定）の二人は共に行動する事を選ばず別々の道へ。めぐみんはアレなのでアレだったが・・・ゆんゆんは多種多様な魔法を操れる為に、特に苦もなく実績をバンバン詰んでいき、王都がらみの依頼を受ける程になれたのだと。

それで暫く活動の拠点を王都にしていたのだが、めぐみんのパーティーが領主と裁判したとの情報を聞きつけてしまい——それで心配になつて理由をつけて会いにきたらしい。

ゆんゆんの回りくどい話を要約すると、そんな所だ。

「まあ、めぐみんももうすぐ帰ってくると思うから、それまでゆっくりしててくれ。大したおもてなしは出来ないけどな」

「え、あ、あの、良いんですか？自分で言うのも、何ですけど、こんないきなり押し掛けた、怪しい私が・・・いても・・・その、お邪魔じゃ・・・」
怪しい・・・まあ、怪しいっちゃ怪しいけど。

人ん家の前でピョンピョコピョンピョコ。

不審者以外の何者でもない。

でもな、俺には悪い子には見えないからなあ。

冒険者なんて仕事してるのに、身なりはちゃんとしてるし、礼儀正しくて気も使える。めぐみんの事を話す目は真剣だし、何よりゆんゆ

んからは嫌な感じがしない。

これでもアホ父のおかげで色んな人を見てきた。

主に悪い輩の方が多いから自慢は出来ないが、そういう人を見る目はあるつもりだ。

俺は顔を伏せるゆんゆんを安心させる為に、そつと頭を撫でてやる。最初こそ肩を跳ねさせたけど、嫌そうな感じはないのでそのまま続けた。

「大丈夫、邪魔じゃないぞ。ゆつくりして行って良いからな。お茶おかわりいるか？」

「はっ、はい。いた、頂きます・・・」

顔を真っ赤にして頷くゆんゆんが可愛くてワシヤワシヤ撫でていると、「何をしているのですか、カナデ」と声が後ろから聞こえてきた。

振り返ってみれば所々濡れてる、ダクネスとそのダクネスに背負われためぐみんがいた。二人とも唇が少し青くなってる所から、大方雪でも被ったのだろう。

「二人ともお帰り。お客さん来てるぞー」

「ああ、ただいま。見ない顔だな？どちら様だ？」

「お客さん、ですか？うん？私にはそんな人は見えないのですが・・・誰ですか？初めて見る顔です」

ダクネスとは対照的に、床に下ろされためぐみんは首を傾げながら素っ気ない言葉を吐いた。

ゆんゆんが椅子を鳴らして立ち上がる。

「ちよっ！私よ！見れば分かるでしょお！ほら、紅魔の里の学園で同期だった！めぐみんが一番で、私が二番で！それで、私は上級魔法を使えるまで修行してくるって・・・!!——はっ!?ちがつ、違うんですよ！カナデさん！私本当につ、めぐみんとはライバルで!!めぐみん!!めぐみんからも言つてよー！」

「随分と自己主張の強い妄想女ですね。私が？貴女と？学園の？ちよつと何を言ってるのか分かりません。大体さつきから『私』『私』と、名前を名乗らない辺り怪しさ満点です。カナデ、何を言われたか分かりませんが、関わってはいけませんよ。これ、前にカズマとカナ

デで教えてくれたオレオレ詐欺の類いですよ。きつと」

完全にからかつてるめぐみんの言葉に、ゆんゆんが地団駄を踏みながらバツと構えた。

「何よー!!や、やれば良いんでしょーやれば!見てなさいよ!我が名はゆんゆん——」

そうして二回目の自己紹介が始まり、二人はわちやわちやと話し始めた。どちらも素直じゃないのか大概な会話内容だったが、二人の表情を見れば悪い関係でないのは疑うまでもない。

俺とダクネスは楽しそうに話す二人を眺めた。

その二人と同じように笑顔を浮かべながら。



「・・・なんだろう、下の階から楽しそうな声が聞こえる・・・駄目か、まだ行っちゃ駄目なのか!?!」

△はわわっ、想定してない事されても困るのですが!?

——完全に失敗しました。

私はそんな思いと共にベッドへと倒れこみました。体を包み込むふとんからふんわり日向の匂いがします。きつとカナデが干してくれたのでしよう。側にある枕を手元に引き寄せれば、同じように日向の匂いがしました。

今朝天気を見ながら随分とはりきっていましたからね。この様子だと皆のふとんも干してそうです。

ふとんの上をゴロゴロしながら思い返すのは、イレギュラーな訪問者ゆんゆん。彼女が来たせいで大分流れが変わってしまいました。お陰でこの数日の努力はペアです。

数日間に渡ってカズマもしくはカナデの監視を続けていました。敢えて隠れずに、あれこれと理由をつけて側にいながら。どうしてそうしたのかと言えば、構って欲しかったからとかそんな幼稚な理由ではありません。焦らす為です。

カナデの様子はいつも通りでしたが、案の定堪え性のないカズマは見事にボロを出しました。明らかにカナデを見ながら、そわそわしているのです。

だから敢えて、今日は泳がせてみたのですが……まさかゆんゆんが来るとは。

「まったく、本当に、間の悪い子ですね……」

別に来るなどとは言いませんけど、タイミングくらい考えて欲しいものです。あの後も中々帰りませんでしたし……というか、夕飯食べてお風呂まで入って帰っていききましたからね。あの子。随分と図太くなつたものです。本当に、もうう。

いや、まあ、全部カナデが勧めたせいなのですが。

それにしても、随分と楽しそうにしましたね。あの子……今度遊んであげるとしましょう。勿論ただではありませんし、この件が片付いてからになりますけど。

「——はあ、仕方ありませんね。いつまでもクヨクヨしても何の

得にもなりませんし、次を考えましょう」

立ち直った勢いでベッドから這い出た私は、そのまま机に座り改めて作戦を練り直しを始めました。解決が早い方が良いのは間違いありませんが、だからといって焦りは禁物です。着実に、確実に、決定的に、突き止められるように。慎重に作戦を立てなければ。

カナデには沢山助けられています。

それには沢山感謝しています。

ですがそれはそれ、これはこれなのです。

私に内緒にしてる罰です。

うんと驚かせなくては。

それからどれだけ時間が経ったのか。

腕を枕に机に突っ伏していました。ふと視線を落とせば机が涎でしっとりしています。——ついでに寝巻きの袖もしっとりしていて、思わず頭を抱えました。救いがあるとすれば、参考書として読んでいた推理小説が無事である事と、誰にもみられてなかった事でしょ……んん？

何か違和感を禁じて肩を見れば、毛布が掛けられていました。少し考えてみましたが自分で掛けた覚えはありません。誰だろうかと考えていると、机の端においてあるそれが目につきました。

銀のティーポットと白磁のティーカップです。

ティーカップは空でしたが、ティーポットを手にとってみると中身が入ってるようで重さがあります。ティーポットの蓋を開ければ、僅かな温もりと甘い香りが漂ってきました。

ティーカップに注げば琥珀色のそれが、カップの中で小さな波紋を浮かべます。湯気こそ出ませんでした。色味も綺麗で匂いも香しくて十分美味しそうです。

「こういう事をするのは、カナデしかいませんね」

灯りが付きっぱなしだったので、何かやってると思っただけで来たのかも知れませんが、何のために机に突っ伏していたかを考えるとその優しさが辛いです。もとはといえば、話してくれないカナデが悪いとは思いますが・・・ううん。それでも辛いものは辛いです。

注いだそれに口を付けると、香っていた匂いを裏切らない甘さが口の中に広がりました。渋みがあまりなくて口当たりよく飲みやすいです。基本的に渋めが好きですが、こういうのも嫌いではありません。

しかし、紅茶を入れるのは自信がないといっていました。これだけ出来るなら十分だと思えます。カナデは何処を指摘しているのでしょうか。まあ、拘りを持つ事は悪い事とは言いませんけど。

用意して貰ったそれを飲み干した所でちよつと体が震えました。せつかくだからと全部飲みましたが、少し量が多かったようです。

厚手のケープを羽織り、私はお花を摘みに廊下に出ました。薄暗がりの廊下はいつもながら何処か不気味です。少しだけランプを用意するか迷いましたが、そもそもランプを持ってない事に気づきます。屋敷には魔力で灯りを生み出すライトがあるので、部屋にあっても邪魔なランプは物置部屋にしまっていたのです。

幽霊騒動があつて暫くは携帯していたのですが・・・。

私はランプを諦め、意を決して静かな廊下へと足を踏み出しました。ひんやりとした風が漂う廊下は、本当に静かで昼間とは空気が違うような錯覚を覚えました。何処か見知らぬ場所を歩いている気分です。

幾つかの部屋を横切り真っ直ぐトイレへ———と思っていたのですが、それが耳につきました。

「・・・？」

音は酷く聞き取りづらく、一瞬何なのか分かりませんでした。ですが良く良く聞いてみると・・・誰かの、女の子の声が聞こえた気がし

ます。

音に釣られて歩くこと少し。

私は閉めきられたある部屋の前に辿り着きました。

そこはカズマの工作室で、色々危ない物があるからと立ち入り禁止にされてる部屋でした。工作室に使ってるだけあって仮に誰かがいても廊下に響く程音は聞こえない筈なのですが・・・ふと気になってドアに耳を当ててみましたがいまいちです。ですが中から何か話すような声は聞こえます。それもカナデとカズマの声です。

声の主に気づいて咄嗟にドアを開けよう——と、しましたが理性で止めました。どうせ鍵が掛かっているでしょうし、以前それでしらを切られてますからね。

どうするか考えていると、廊下で聞いた声がまた聞こえてきました。それはその部屋からではなく、隣の部屋から聞こえてきているようです。試しに隣の部屋のドアノブを回せば、ガチャリと小さな音を上げて開きました。

少し妙にも思いましたが、そのまま開いた部屋の中を覗くと真っ暗な部屋の中に光の筋が射し込んでいます。

誘われるようにそこを覗くと——見知った二人の姿がありました。

「——かずまあ」

「カナデ」

床に敷かれた厚手の毛布。

脱ぎ散らかされた衣服。

小さな炎が揺れるランプ。

毛布の上に腰掛けながら。

甘い声をあげながら見つめ合い。

唇を重ね合わせる、その二人の姿が。

「あわっ・・・」

「ちゃんと準備してきたんだろ？」

「い、一応は・・・でも、やっぱり無理。なんか、ちよつと、そこは違うというか——ふあん、にやつ、やあ」

「ここからだと良く見えません。」

ですが位置からすると・・・そうカズマの指の行方を考え、お尻がきゅつとしました。

「この間より余裕ありそうだな？」

「んんっ、ふっ、ふっう、あう、やああん」

何かを出し入れする音が聞こえてきます。

粘っこい液体をかき混ぜるような。

その音はカズマの腕の揺れに合わせ、激しくなっていきました。

「かつ、かずまあっ！ま、まえにやらっ、しゆきに、しへいいかりや、おしりっは、ひやつぱひっ、ンンンツツツ！ふう！」

「そう言いながら段々ここなれてきてんだよなあ、お前。本当に底なしだな。ほら、ここだろ？」

「——ツツツツひやあん！」

腕の動きが治まった瞬間、カナデの肩が大きく跳ねあがりました。カズマの背中に回された手は、その背中を離すまいと強く掴んでいて、場所によっては僅かに血が滲んでいます。

「・・・やらあっへ、いつひやのにい」

カズマの肩に顔を埋めたカナデは肩で息をしながら抗議の声をあげます。ただ、その声はしまりのない甘ったるいだけの物で迫力は少しもありませんでした。

近くで聞いていたカズマもそうなのか、使った指を掃除しながらカナデをいとおしそうに見つめるだけ。反省の色は見えません。

「ごめんな、カナデがあんまり可愛くて」

「・・・むう、そういつてれば、いいとおもってるだろお。だまされないからなあっ、んっ」

不服そうに頬を膨らませたカナデでしたが、怒っていられたのはほんの少しだけ。直ぐにキスされて顔を蕩けさせました。くちゅくちゅと音をたてながら、口元から唾液が溢れ落ちて、胸元やおへそ、ふ

とももを汚していきます。その姿は何処か厭らしく、とても妖艶でした。

「本当だって、カナデの事が好きだ」

「ほんとお？」

「本当。ほら、こんなになつてるんだぞ？」

そういつて、カズマは何かをカナデのお腹にぶつけました。それはランプの灯りに照らされてヌラヌラと光る、振り返った棒のような何か。

カナデはそれを見ると妖しい笑みを浮かべつつ、それに触れます。壊れ物を扱うように、そつと。

「すごい……ふふっ、ふーん」

カナデは自分の腰をそれへと近づけ、股の割れ目の所へすり付け始めました。水を交えた触れ合い。ヌチャヌチャと背中がぞくぞくするような音が響いてきます。

それは何故か股の所が疼かせて……。

ふと違和感を感じて視線を落とし私は、ズボンを引つ張つてショーツを覗きました。するとショーツには濡れたような染みが浮かんでいます。

私はそこへと手を伸ばし——カナデと同じように手を擦り付けて見ました。

すると、ぞくりとした何とも言えない刺激が腰から這い上がっていききました。

「んっふ、ん、ん」

カナデの姿を見ながら、カナデの動きを見ながら。

同じように擦り付けていく。

何回も、何回も。

走る刺激は段々と大きく。

はつきりとして——。

「——カナデっ、そろそろ、良いか？」

急に聞こえた声に視線を向けると、カズマのそれが割れ目の所へと宛がわれていました。くちゆりと反りたつそれが、割れ目の隙間に入

り込もうとしています。

カナデはそれを見つめた後、カズマに視線を送り頷きました。ゆっくりと入り込むそれに合わせて、私も指をそこへと潜り込ませます。くちゆりと、カナデと同じような音をたて指が吸い込まれていきます。

ピリツと刺激が背筋を走っていきました。

「んっあ、んん！」

何度もカナデの中へ出入りするそれに合わせて、私も指を何度も潜り込ませていきます。カナデの喘ぐ声を聞きながら。

「あっ、あっ、あう……」

段々と激しくなるカズマの動きに合わせて手を動かしていると、何かが直ぐ側までできてるのが分かりました。言葉にするにはあまりにも、言葉に出来ない何かが。

「カナデっ、そろそろ出すぞっ、良いか!!」

「んんっ、い、いいよお、きへ！かずまのっ、ひっぱい、おくにして、ぎゅっうってして！」

カナデの大きな声に応えるように、それが背筋を昇り頭の中を駆け巡っていきました。

頭が真っ白になるような、それが。

それから数時間。

私は二人を眺め続けました。

濡れてしまったショーツを撫でながら。

見通す悪魔は所望するらしいですけど？あ、いや、でも今日は帰ってどうぞ。

こっそりセックス生活も板についてきた今日この頃。

ちよつとした事情からお尻に違和感を感じつつも皆が出掛けた後一人屋敷の掃除をしていると、門の所に掛けてある呼び出しのベルが鳴り響いた。

訪問者自体少ないので何だろうかと掃除の手を止めて見に行けば、スーツを着こなしたオールバックな男前がそこにいた。見知らぬ男にホウキ片手で警戒すれば、男は俺を見て何が面白いのか高笑いを始める。

そして、その様子に気づいた。少し前に見た、あの胡散臭い男の事を。

「フハハハハハ!!暫くぶりであるな、性欲のまま日夜仲間のスケベ小僧と爛れた生活に励む娘よ!!魔王より強いかも知れないと噂の、偉大なる悪魔公爵バニルさんだ!今日は汝が払うべき約束の対価を受取るに——っはあうわ!!」

俺は水色から貰っておいた聖水を叩きつけた。

水色曰く悪魔特効のあるありがたいお水で、並みの悪魔であれば即成仏レベルの代物らしい。ただ、動きこそ鈍くなったとはいえ、目の前のこいつにはそこまでダメージなさそうだが。

「ぐおおおおお!!?貴様っ——ぶおはっ!!?ぐおおおっふぐえっ!!?あだだだだだ!?!なっ、何個持つてるのだ!?!貴様っ!?!相も変わらず見通しにくいっふぐお!?!」

隙だらけの姿に聖水をぶつけまくる。

こんな時の為に水色から安く買い上げておいた。

手持ちは15個しか用意してないが、今投げてる小瓶なら家に帰れば100個はある。一撃必殺の大瓶も5個あったりする。

投げて、投げて、投げて、投げまくる。

手持ちが尽きた所で、肩でせえせえと息する隙だらけのそいつの脳

天目掛け、ホウキの柄に全体重を乗せ突く。

しかしまだ息があつたのか、当たる寸前の所でかわされた。惜しい。

「鬼か!? 貴様っ!? ここまで徹底する者も、久しく見ないぞ!! よく人の姿をとつた我にここまで攻撃出来るな!」

「?・・・人じゃないんだろ?」

「いや、確かに人ではないがな!? 我が言うのもなんだが、貴様本当に人か!」

「人に決まつてるだろ」

流石に魔王軍幹部といった所か。

あわよくばと思つたけど、そう簡単には死んではくれないらしい。

「まあ、良いや。用があるなら外で話せ。入ってきたら殺す」

「・・・この悪魔の公爵たる我を前に、ここまで堂々と殺意をぶつけてきたのは記憶する限り神以来だぞ。魔王ですら敬意を払うというのに・・・貴様、本当にいい性格をしてるな」

「悪魔に言われたくないわい」

「言われたくなければ、少しはしおらしさを学んで来るが良い。万年発情娘が——ぐふっは!? 貴様っ、まだ隠し持っていたのか!」

全部投げたとはいってない。

まだそこらに置いてある。

「魔王軍幹部を辞めたい?」

掃除と洗濯を済ませた午後。

書き置きして戸締まりをきちんと済ませた俺は、夕飯の買い出しついでに例の約束を果たす為、見通す悪魔と町外れの酒場へとやってきていた。

最初は心底嫌ではあつたが人目につく方が不味いので、屋敷の中で話を聞こうと案内したのだが・・・何やら家の屋敷に結界が張ってあ

るらしく悪魔が断ってきた。無理をすれば破れるし、成仏したりもしないらしいのだが、結界を破れば結界を張った術者に察知されると言うので外へと出掛けたのだ。

それで今あまり人のいない酒場の隅っこにて、こっそりお話し合い中なのである。

「ああ、そうだ。相違ないぞ」

「辞めたいから辞める、なんて出来る職種なのか？悪……魔？」
「人が少ないとはいえ悪魔は止めろ。というかそこで踏み止まって何故言い切った？敬意も添えてバニルさんと呼べ。——ふむ、まず魔王軍の幹部とは言っても、魔王に頼まれて城の結界の維持をしているだけの、いわばなんちゃって幹部でな」

「なんちゃって幹部……」

正面に座るバニルの表情からは何も汲み取れない。ただ、大分信用し難いふざけた発言だけど嘘も感じない。

悪魔の言動にどれだけ信用がおけるか謎だが。

「そして我輩は、世間で言う所の悪魔族。悪魔の最高のご飯は汝ら人間が発する、嫌だなどと思う悪感情だ。我輩達にとって、汝ら人間は美味しいご飯製造機であり、それを壊したりするなどナンセンスではないのだ。むしろ、汝ら一人生まれるたび、我は喜び庭駆け回るくらいなのだ」

「ふうん？食糧調達のために、死なない程度、真綿で首は絞めていきますけどね……って？いい性格してるな」

「貴様に言われたら申し訳ないだな。まあ、良い。話を戻すぞ——」

色々あつて俺達が倒した魔王軍幹部の調査を引き継ぐ事になったバニルだったけど、最初からやる気とかなかったらしい。結界の維持にも飽き、魔王の部下から貰える微妙な悪感情にも飽きてしまい——
「この仕事を機に引退し、以前から温めていたとある計画を実行する事を決めたのだとか。」

「——とまあ、そういう訳だ。こちらの街に住んでいる友人とも話をつけ、次の宿り木も見つけた。我が引退するに相応しい舞台も見つけ……それらの支度も終わっている。二人がかりだというのに、随

分と手間が掛かったがな。それで仕上げの部分、口火を切るのに顔の広い貴様の手を借りたいのだ。当然、貴様の出した条件はクリアしている。まあ、今回対価について、この羊皮紙に詳細をまとめた。目を通し、問題がなければサインせよ」

ぱつと胸元から取り出された羊皮紙の束を見てみれば、長つたらしく俺がやる事が書き込まれていた。やること自体は難しくはないのだが、言い方がアホみたいにまどろっこしい。完全に条件を山のよう提示した俺への当て付けだろう。

まあ、条件書き込みまくってやったからな。復讐される覚えもなくてはない。

書類の中には条件の中に盛り込んだ相互利益の提示もされていて、今聞いた話と相違ない内容が明記されてる。書類の上ではこちらが不利益を被る事はなさそうに見えるのだが・・・相手は未来を見通すと自称する悪魔。確実にここに書かれてない利益が存在するだろう。そしてそれは俺の不利益も同じように。

とまあ、ぼやいた所で未来の事なんて予想出来ないし、対策も打ちようもないし、はつきり言っただろうもないのだが。

その後は書類を確認しながら、気になる所を確認しつつ数十分。一通り確認し納得した俺は羊皮紙へサインを書き込みバニルへと差し出す。

少しだけ怪訝な顔で羊皮紙を掴んだバニルに、一言だけは付け加えておいた。

「俺の身内に何かあったら、地獄の果てまで追い掛けに行くからな」
目を見てそう伝えれば、バニルは呆れた表情で羊皮紙をとっていった。

「その悪感情、好みではないが中々美味である。——が、恐ろしい事をさらつと言うな。我とて恨みを買って良い相手くらいは選ぶ。誤って玄武をくびり殺すような真似はせん・・・まあ、あれらはそうそう死ぬようなたまでもないが」

「玄武？」

「それも直に分かるであろう」

それだけ言うとバニルは羊皮紙を懐にしまい出口へと向かっていく――が、出入り口の戸に手を掛けた所でこちらに振り向いてきた。

「これは助言だ。掃除がてら屋敷の至る所へ聖水を撒くのを止めよ。出会いの妨げとなっている」

「出会いの？」

「貴様らにとって損はない。信じるか信じないかは、貴様の自由だがな……ああ、それと、我の見立てでは痔にならぬから安心して昨晚のように励むが良い。今も尻穴が気になって仕方がないド淫乱変態TS娘よ」

「……うむ、その羞恥美味である」

話し合いが終わって一時間程。

聖水片手に悪魔を追いかけ回したが、残念ながら仕留めるには至らなかった。奴が逃げ去った路地裏を見ながら、次は仕留めようと改めて心に誓い、聖水用の小瓶をダースで購入して帰った。後日一杯届いた。

それから数日の間、俺は頼まれていた事を実行へと移した。何も魂を捧げるとか、生け贄を差し出せとか、誰かを陥れるとか……如何にも『貴様つ、悪魔かつ！』みたいなそういう事はしてない。

俺がやったのは頼まれた噂を流す事、それだけだ。

内容は『魔王軍幹部のバニルさん、キールのダンジョンで引退パティーするつてよ』つという愉快極まりない噂だ。正直こんな噂を流して魔王を刺激しないのだろうかと疑問に思い聞いたが、バニル曰く「私の行動に関しては割り切っておろう。結界に関しては、頭を抱える事になるかも知れぬが、なっ！……フハハハハ！ただでさえ寂しい頭がどうなるか、これから見ものであるな!!」らしい。あいつは

最低だと思う。

ウエイトレスしながら冒険者達へと流した噂は、尾ひれも付きながらあつという間に広がっていった。引退につきお宝大放し祭りなんだとか、モンスターが宝石をドロップするとか、今ならスタンプ二倍だとか、イーजीモード実装とか、ダンジョン攻略すると二つとない秘宝が手に入るとかなんとか。

勿論俺はそこまで質の悪い噂は流してないので、恐らくあの悪魔が人に紛れて余計な話を追加していったのだろうと思う。ただ、実際に宝と呼べる代物を手にした者もいて、丸つきり嘘でもないそうだった。実際に宝を見たクリスが血眼になって探してるらしいので、相当の値打ち物なんだろう。

噂が噂を呼んで、多くの人がダンジョンへと引き寄せられた。そしてキールのダンジョンから最寄りの街であるアクセルにも当然その余波はあり・・・暫くの間アクセルの街は人でごった返す事になった。

俺はウエイトレスとして奮闘し、街の皆もこのお祭り騒ぎに便乗し、それぞれがそれぞれに稼ぎまくった。いつもは閑古鳥が鳴いてる貧乏店主さんの店もその時だけは大盛況で、笑い声が特徴的な男と一緒に荒稼ぎしていたらしい（めぐみん談）。

うちのパーティーも例外ではなく、カズマとめぐみんが開いた屋台が大当たり。キャベツの報酬なんて目じゃないレベルで稼ぐ事が出来た。水色はいつもの調子で戦力外、ダクネスは実家が大変な事になってると帰ってしまったりでアレだったらしいが。

おおよそ一週間程続いたお祭りだったが、それはある日突然終わりを迎えた。———というか、うちのパーティーが終わらせてしまったようだ。聞く所によると以前の功績で冒険者仲間によいしよされたカズマが他のパーティーメンバーと特攻。なんやかんやとバニルを討伐してしまったとか。いずれ頃合いを見て倒されるとは聞いていたけど、まさかうちのパーティーに倒されるとは・・・。

同僚には「良かったねえ」とニヤニヤされたが、正直裏事情を知ってる身として微妙で、頑張っても苦笑いしか出来なかった。報償金貰えるのは嬉しいけどな・・・うん。

いや、まあ、嫌に格好つけて「野暮用を済ませてくるぜ」と死亡フラグ立ててったから何かあるとは思ってたよ？まさか魔王軍幹部倒しにいくとは・・・プレッシャーかけ過ぎた事は反省はしてる。

最後にうちのパーティーメンバーに代わって、ダンジョン攻略組が持ち帰ったクリア報酬についてだけ教えておこうと思う。

彼らがげんなりしつつ、ギルドへ報告の為に持ち込んだそれは、裁判やら何やらで俺達を散々に振り回した、領主アルダープの無駄に神々しい裸夫画だった・・・俺がやつの笑い声を幻聴したのは言うまでもない。

☆身を寄せあっても良いじゃない。まだまだ冬なのだから。

バニルの計略により起きたお祭り騒ぎの忙しさも一段落ついた今日この頃。ゆんゆんと爆裂しにいったためぐみんと、この間の討伐報酬の分け前を一瞬で溶かし尚且つ借金まで背負ったアホ水色が働きに行くのを見送った俺は、いつものように一人家事に勤しんでいた。

忙しい間ギルドで働き詰めだったので、必然屋敷は放置気味。一週間近く放っておいたので、どうにも埃っぽかったので朝から大掃除してる。一通り部屋の片付けが終わった今は、絶賛廊下モップがけ中だ。屋敷が屋敷だけに流石に一人だとしんどい。商品開発が大詰めにいったカズマはともかく、ダクネスには手伝って貰いたかった。作業が忙しいとかいつていたが、いつになったら帰ってくるのか。はあ。

気合いを入れて廊下を磨いてると、何か視線を感じた。

視線をそこへと向ければ——カズマが廊下の角から何か言いたげにこつちを覗いている。

「どした？今忙しいから、お茶なら自分でやれ」

「おお、そ、そうか。悪かった、いや、そのな、あれが一応出来たから、見て貰いたかったんだけど・・・」

ああ、そういう事か。

それなら話は別だ。

これから家計を助けてくれるかも知れない、大切な商品だからな。

「ここだけやったら行くから、部屋でちよつと待ってる。——あー、

ついでだからお茶も持ってってやる。お茶うけ何が良い？」

「お茶うけか・・・みかんとか有ったら最高なんだけどな」

「みかんはないけど、似たやつならあるぞ」

「マジか」

何故か木じゃなくて、モンスターに成るやつだけだな。

切るまで動いたりたまに鳴いたりするし、見た目はみかんだけどレ

モンに近い味だし、そのまま食べると中毒とか起こすらしいけど。

「……それ、野山を駆けずり回ったりするか？」

「野山は駆けずるとかは聞かないな。それに切ってハチミツ掛ければ……まあ、大丈夫だ」

「それは大丈夫じゃないって意味だぞ」

ジト目で見てくるカズマをスルーして掃除を再開。

区切りの良いところまでモップがけを済ませる。

その後はさつきと手洗いしてから、お茶の用意と調理したみかんらしき物をおぼんに乗せ部屋に向かう。部屋についた所で扉をノックすれば、何処かワクワクしてそうなカズマが出迎えてくれた。

「来たな。カナデ、見てくれ」

そう言つてカズマが見せてくれたのは日本にいた頃、冬になると当たり前のように見ていたコタツだった。見た目はそのままコタツ。取り敢えず手にしたおぼんをコタツの上において、手を布団の中に突っ込んでみる。するとちよつと温い。

「入つてみても良いのか？」

「おう、その為に呼んだんだ。感想聞かせてくれよ」

促されるまま腰掛けて足を入れてみる。

気持ち温い気もしないでもないが、窓全開で掃除してた身には十分過ぎるほど温かくて気持ちいい。でもまあ、布団をもう少し厚手にした方が良いかも知れないな。

「温度調整とかは出来ないのか？」

「温度調整が難しくくてな……魔力の出力とかどうやって絞るのか分からないんだよ。いや、出力自体は絞れるんだけどな？ そうしたら今度は魔力不足で温まりにくいし、安定して起動しなくて……それに安全面を考慮すると——」

「あー、分かった。俺じゃ分からない話だな？ そこら辺はあとでめぐみんと相談でもしてくれ。布団もう少し厚くすれば丁度良いと思うぞー」

「布団か……ああ、それなら直ぐ改良できるな。今度買ってくる」

カズマは成る程と頷くと、作業机にあるメモ張へ書き込んだ。最初

ぺったんこだったメモ帳だったけど、今は随分と嵩張って見える。ヒモで括っただけの簡単な造りのメモ帳だったから、書き終わる度に継ぎ足していったんだろう。以前見せて貰った事もあるけど、一枚一枚かなり書き込まれている物だから、その束を見ればどれだけカズマが試行錯誤したのか見てとれる。

それだけにやっぱり思う。こいつ、本当になんでニートしてたんだろうか。

「カズマ。お茶入れてやるから、お前も休憩しろ」

「ん？ああー、そうだな・・・頼む」

そう言うとかズマは俺の対面に座り、そのままコタツへと足を潜らせる。

「ひゃっ!?!」

コタツの中、伸ばされた足が俺の足に触れた。

それは温まってきていた俺の足に少し冷たくて、思わず変な声が漏れてしまう。そんな俺の様子にカズマは少しだけ申し訳なさそうにしたのだが、直ぐ何か企むような顔になって冷たい足で俺の足をペタペタ触ってきた。

「ちよっ、冷たいっ、てのー!こらー!」

「よいではないか、よいではないかあ」

エッチなのは歓迎だが、こういうタイプのだつきり系は好きではない。冬場いきなり背中に手を突っ込んでくるタイプの人間なんか、特に嫌いだ。——なのでカズマの太もも辺りの肉を、親指でぎゅっとなねってやった。靴下をはいてもそれぐらいは出きる。直ぐにカズマが「ひよえっ!?!」とか変な声をあげ、苦悶の表情と共に謝ってきたが・・・うん?許さん。

ちよっとお仕置きした後、みかんらしき物を摘まみながらまったりとお茶をすすりつつ休憩。カズマなんかもテーブルに頬をつけてすっかりグダグダしてる。これは今日のお仕事終わりかなあ・・・やる気でない。

「世界で最初にコタツを作ったやつは、どうなったんだろうか・・・なあ、カナデ」

「まあ、俺達みたいになつたんじやないか？」

「だよなあ……てか、このみかんみたいなの美味しいな……みかんじやないけど。なにこれ、レモン？レモンなのか？おかわりとかある？」

「さあ……まだ倉庫にしまつてあるけど、おかわりは出さないぞ。食べ過ぎると中毒になるからな」

「何て物食わせてくれてんだ、おい」

まったりしていると、カズマが視界から消えた。

ちよつと背筋を伸ばして覗けば、寝つ転がつているカズマの姿が見える。コタツで寝ると風邪引くぞーと何処かで聞いたような言葉が出かけた時、風邪カズマの足がまた懲りずに俺の足を触ってきた。さつきよりは冷たくないけど、いきなりやられるとビクッリしてしまう。

「カズマ」

「も、もう冷たくないだろ？」

「……まあ」

カズマは明後日の方向を見るばかりで、全然こつちを見ない。足は相変わらずペタペタと触ってきていて、止める気配は少しも見えない。

というか、少しずつ触れる場所が上へと上がってきてる気がする。

「……んっ」

足先から伝ってきたカズマの足が、股の間をそつと押すように触れてきた。ちよつとだけゾクツとする。こういうゾクゾクは嫌いじゃない。放つて置けば、カズマの足は擦るようにもつとあそこに触れてくる。

「んっ、んんっ……」

触れる度、それに応えるように段々と体が火照つてきた。少しずつそこが濡れてきてるのが分かる。洗濯したばかりなので気持ち的にはパンツをあまり汚したくないんだけど……まあ、それはそれとして。気持ちいいのでそのままにしとく。

「んっ」

不意に足の感触が無くなった。

待つていても中々来ない。

どうしたのかと背を伸ばそうとしたら、明らかに足じやないものが太ももに触れてきた。五本の指の感触。それが両の太ももをゆっくりと揉みながら、少しずつ上へと昇ってきて——お尻をぎゅつと掴んでくる。

「ひいうっーんんー！」

さっきのお返しなのか、それは少し痛いぐらいの力だった。普通は怒る所なんだろうけど、最近お尻ばかりせめられてたせいで、その痛みに少しだけ気持ち良さが混じってしまう。

「あつ、ちよつ・・・あん」

ずるずると、パンツが下げられていく。

愛液で張り付いていた布が無理に下げられたせいで、敏感になつてるところが擦れ、腰からゾクゾクする刺激が背筋を昇っていく。

「——ふあつ!?あつ、あうつ、んっつー！」

小さな痺れに意識を向けていたら、急にあそこが吸われた。油断してた事もあつて、その刺激はずっと大きかった。一瞬で腰から脳髓まで駆け巡ってきて、頭の中を真っ白にさせてくる。目の前にパチパチと光が散つて、頬が熱くなつて、意識が遠くなつて——お腹の所が熱くなつて仕方ない。

ぼーっとする意識の中、じゆるじゆるとエツチな音が甘い痺れを伴つて聞こえる。敏感になつているそれを熱い舌が撫でて、ヒクついてるそこへ熱い吐息が吹き込まれてく。そしてその刺激に応えて、また溢れていく俺の愛液をカズマは執拗に啜っていく。耳がくずつたくなるほど、イヤらしい音を出しながら。

断続的に走る刺激に座つてられなくなつて崩れるように横になると、カズマはねぶるのを止めて隣へ這い出てきた。嬉しそうな顔が隣に並ぶ。

「むう、ばかかずまあー。このあとそうじしなきやなんだぞ」

「まあまあ、今日くらいゆっくりしても良いだろ?俺もカナデも一週間忙しかった訳だしな」

いやまあ、忙しかったのは認めるけど、今はその一週間を取り戻そうとしてただけ。掃除的な意味で。

文句を言っただろうと思っただが、言葉が出る前にキスで塞がれた。カズマの舌が遠慮なく潜り込んできて、俺の舌に絡まってくる。甘い痺れが口の中に広がる。

「んんんっ、ん」

キスの心地よさに蕩けそうになると、カズマの手が服の下に潜り込んできて胸に触れた。軽く何度か揉むとすっかり膨らんでしまった突起を掴まんでくる。きゅっと強く摘ままれ、刺激に肩が跳ねてしまう。

「カナデはMの気強いよな」

「んん？そんなこと、ないとおもうけど・・・」

「そうか？今だって物欲しそうな顔してるぞ」

ピンっと指で突起が弾かれた。

不意のそれに、お腹がきゅんとしてしまった。

あれだけ一杯吸われた筈なのに、またあそこが濡れてきているのも分かってしまう。

「顔、蕩けてるぞ。変態」

耳元で囁かれ、またゾクリする。

もうお腹もずつときゅんきゅんしてて、疼きが抑えられそうになり。い。

「——か、かずまあ、して？」

そうカズマのテントを擦ってお願いすれば、喉を鳴らす音が聞こえてきた。自分から誘っておいて何故にと思わなくもないけど、入れてくれるなら何でも良い。死ぬほどズツコンバツコンしたい。

頑張っただけ濡れたあそこをカズマのテントに擦りつけアピールすると、少しだけ困った顔になる。まあ、スケベな面に代わりはなかったけど。

「どした？やっぱりしない？」

「いや、したいのは山々なんだけどな・・・前は、ほら、な？赤ちゃんがいる時とか良くないって聞くし・・・だから、後ろで——」

「ああ、あれな。やっぱり駄目だった」

カズマには言わなかったけど、まだ忙しかった頃に普通に生理がきていた。稼ぎ時にそんな話してもあれかなーっと黙っておいたのだ。残念だけど生理がきた以上、今回は当たりじや無いということ。

その事を教えたらカズマが凄く微妙な顔をした。

どうしたのかと思つてるとまたキスされる。

さつきよりもずっと情熱的に。

「――薬、また飲んでるのか？」

唾液の糸をひきながら唇を離すと、熱っぽい視線と共にそんな事を聞かれた。一応駄目だと分かった日から飲んでるので、肯定の為に頷いてみせると強く抱き寄せられた。気のせいかも知れないけどコタツなんかよりずっと温かい気がして、俺はカズマの体へ同じように抱きつく。それはとても温くて、フワフワした気持ちにさせられた。

「薬、もう駄目な・・・絶対孕ませてやる」

「ひよえ？いや、でもな、冒険者で子育てって現実的に厳しいというか、生活のことも考えたら、まだ早いだ――つああ!?あつ、ばかつ！いきなりはやめつ、んつ、あんっ！」

それから沢山、数えるのも馬鹿らしくなるくらい、カズマと体を重ね続けた。日が暮れて、皆が帰ってくるまで。何回も。

そして何度も何度も注がれた。

注がれたその熱を、体が忘れられないくらい。

本当に沢山。

で、一つ由々しき問題が発覚。

もしかしたら、俺はMかも知れない。

せめられるの気持ち良いんですけど。一方的にやられるの、ちよつと好きだ。

またお亡くなりなつたんですか？ いい加減にしないと本気で怒るぞ。

「……」

「おう、言いたい事があれば言ってみろ。馬鹿共」

出来るだけ優しく、丁寧に。

それでいて笑顔を浮かべながら、尚且つ指を鳴らしながら、見た目は反省してそうなそいつらに聞いてみる。俯いていて表情は見えないが、正座させた全員が肩を跳ねさせたので、どんな顔してるのかは見なくても分かる。一応反省はしてるらしい。

「俺が見送った時……出発する前に、いったよな？ 最近上手く行ってるからって、調子に乗ったり油断はするなよって？ 俺言つたよな？ アタッカー一人欠けた状態で行くんだから、よくよく気をつけて行けよって？——水色、俺さあ、言つたよな？」

名前を出すと水色がびくりと肩を揺らす。

視線を沢山泳がせた後、辿々しく話始める。

「いつ、言いました！でも違うのよ？聞いて頂戴カナデ。私はちゃんとしてたの。ほっ、ほらっ、カズマのこともちゃんと蘇生させたでしょ？ね？それに私ね、とても頑張つたの。敵に一杯襲われて凄く大変で——」

口が回るようになってきた所で、水色の部屋に隠してあつた酒瓶を取り出し水色に見せつける。

水色の表情が絶望の色に染まった。

「お前が最初に馬鹿やらかしたの聞いたばっかりなんだけど、それがお前の言いたかつた事で、良いんだな？」

「——はい、ごめんなさい。調子に乗つてすみませんでした。でも、本当に、良かれと思つたんです。本当なんです、ごめんなさい。だからその手にあるお酒は取らないで下さい。お願いします、カナデ様」

「……はあ」

今日のその騒動は朝早くから屋敷に突撃してきた、領主との一件以来アクセルの街に常駐させられてるセナさんから始まった。

魔王軍幹部バニル討伐の功から、最近カズマに色目を使うセナさんが持つてきた話は、リザードランナーの討伐というクエスト。火を吐いたり、魔法撃つたり、さんまが畑から採れたり当たり前前の世界で、攻撃力が馬くらいしかない上、基本大人しいことで知られる家畜系モンスター討伐依頼なんて何で持つてきたのか？と思つてると、とある事情があつた。

それがリザードランナーのマドンナ、姫様ランナーの出現だ。

リザードランナーはメスを巡つて、他種族を相手に走り競い、その抜き去つた数で勝負をする特殊なモンスターだ。その競争時にオスは非常に気性が荒くなり危険で、普段の温厚さはどこに差し出したのかと思わんばかりの蹴りを放つてくるそう。え？うん。俺自身何言つてるんだろうかとは思うけど・・・他種族と走つて、蹴りなりなんりの妨害行為をしながら、その抜き去つた数で勝負するモンスターなのだ。

そんな七面倒な生態系をもつリザードランナー。

メスの中でも特異個体である姫様ランナーを巡る争いともなれば、オスのやる気もいつもの数十倍とからしく、何十匹も群がりながら馬車を追い抜いたり、蹴ったり、騎竜追い抜いたり、蹴ったりするので非常に危険で、出来るだけ早くに討伐して安全を確保したいとか。

丁度俺の装備が新調中だったし、ギルドで手伝う約束もして予定が合わなかった。なので今回は他の冒険者に任せようと提案したのだが、魔王軍幹部討伐で変に自信をつけたカズマはこれを快諾してしまつた。

鼻の下を伸ばしながらセナさんに調子の良いこというカズマの背中に、何とも言い難い嫌なモノを感じつつも、カズマがそこまで言うなら何か手があるのだろうと・・・クエストに出掛けたカズマ以下トントンカンを見送つた訳なのだが・・・はあ。

結果は、まあ、姫様ランナーと群れの大半を討伐と格好のつくものに終わった。終わったが・・・その代価がよろしくなかったのだ。カズマ、二度目の死亡という、その結果が。

半泣きで謝る水色から一応深い反省を感じたので、取り敢えずお酒は返しておいた。ほっとする水色から視線をカズマへと映す。

カズマはびくりと肩を揺らす。

「まず、首は大丈夫か？」

「首は大丈夫です。はい、違和感はありませんけど。はい。すみません」俺は抑えきれない溜息を一つ吐き、めぐみんとダクネスに視線を向けた。何故か二人も肩を揺らす。

今回は群れの討伐では活躍したというのに、なんでビクビクしてるのか不思議で仕方ない。さっき聞いた報告ではダクネスが敵を引き付け、めぐみんが集まったそれをきっちりりと爆裂魔法で仕留めたと――褒められることはあれ、怒られる内容ではないと思うんだけど。「めぐみんとダクネスは良くやったな。馬鹿と抜け作のフォロ―大変だったろ。お風呂入れといたから、ゆっくり入って疲れでも取ってこい。夕飯は・・・俺がお金出してやるから外で好きな物食べてくれると良い。俺はカズマとじっくり話す事があるから、気にしなくて良いぞ」

笑顔でそう伝えると二人が静かに頷いた。

聞き分けの良い子は好きだよ。俺は。

めぐみん達にお金を握らせてると、水色がこそっと手をあげてきた。視線で言葉を促せば恐る恐るといった様子で口を開く。

「あつ、あのー、カナデさん？私は、どうなるのかしら？私も、あの、お腹ペコペコなのだけでも・・・」

「水色は一回ぐめんなさいしたしなあ・・・まあ、自主性を重んじる、とだけ言っておく」

「そ、そう！それなら私も、ちよっとお出掛けしてくるわね！めぐみん達とご飯行ってくるわ！ね、めぐみん！ダクネス！」

慌てた様子でそういうと、水色はめぐみん達と風呂場に向かって逃

げていった。あれだけ反省してそうでも、恐らく三日もすれば綺麗さっぱり忘れるんだろうなあと思いながら——俺はカズマに視線を戻し、満点の笑顔を見せてやった。カズマが見るからに怯える。「おう、カズマは取り敢えず、暫くはそのまま正座しようか。それからちよつと面貸せや」

「はっ、はいっ!!カナデ様あ!!」

めぐみん達が逃げるように出掛けて少し。

言われるがままついてきたカズマは、俺の部屋に入るなり何も言わずとも石畳の床へ正座した。カズマは基本ひねくれた事しか言わないし口先だけで誤魔化す事が多い奴だが、本当に自分が悪いと思つた時は潔く謝る奴なので、今回の事は本当に反省しているんだろう。

「・・・取り敢えず立て」

「はい」

すつと立ち上がったカズマに、ベッドを指差してみせる。カズマは少しだけ怪訝そうな顔をしたが、命令に逆らうつもりはないのか大人しく従い、ベッドへと腰掛けた。

「ちよつと顎あげろ」

「お、おう?」

変な方向に曲がったらしい首を確認してみる。

水色の治癒が適切だったのか、傷痕や変な所は見受けられない。カズマに一言触る事を告げてから、触ってみる。やっぱり特別おかしな所はなかった。

「触られて痛かったりしないか?違和感あるっていったけど、具体的にどう変なんだ?」

「痛いとかは、ないです・・・違和感は、その、寝違えた時みたいな、左向く時とか少し動かしづらいというか・・・」

「そっか」

万全とはいかなくても、生活に支障が出る程ではないか。しかし、違和感か・・・。水色は怪我自体は完治してるって言ったのにな。

まあ、カズマも首の骨がへし折れたらしい事はほんやり分かってるみたいだし、気持ち的な問題なんだろうな。

「あの・・・カナデ様？怒ってないんですか？」

首の具合を確かめると、妙にしゃちほこばった言い方でカズマが尋ねてきた。目には緊張以外に困惑が見てとれる。またお説教の続きをされるのかと思つてたのだろう。

そりや怒つてゐることは怒つてゐる。

水色がいるお陰でこうして帰つてこれたが、本来ならカズマのミスは命を落とす致命的な物。生きて帰つてきたなら、そりや小言の一つや二つや三つ言いたくなる。自殺しかけた俺に言う資格があるかは別として、本当に身勝手な話であるけど、カズマには死んで欲しいとは思わないから。

でも正直言えば、怒りたくないという気持ちの方が強い気がする。体の調子とか悪いだろうし、疲れているだろうし。何より形はあれとして、クエストはきちんと果たしてきたのだ。労いの言葉を掛けて、ゆっくり休ませてやりたいとさえ思う。

頭に浮かんだそれをどうやって伝えれば良いか考えてると、首を擦つていた俺の手にカズマの手が重ねられた。元ニートとは思えない無骨な手から、じんわりと熱が伝わってくる。

「・・・あのな、怒つてゐるぞ。普通に」

「あつ、はい。ですよね」

「もつと気をつけろ、馬鹿たれ。水色がアホなものも、めぐみんが好戦的なのも、ダクネスがDMなものもお前はちゃんと分かつてるだろ。もつと、もつと気をつけろ。馬鹿。前に無茶した俺が言える事じゃないかも知れないけど・・・」

首に添えた手のひらをそのままに、もう一つの腕で頭を胸に引き寄せ、ぎゅつとカズマの頭を抱きしめる。

呼吸の熱が胸に触れて、汗の匂いが鼻について、髪がチクチクと肌を刺激する。そんな色んな事が、カズマが生きてるって事を教えてくれる。

「っお!?あつ、カナデ?!」

どこか慌てるような声をあげたカズマだったが、頭を撫で撫ですれば動きも声も静まった。なんか犬撫でてる気分。

「カズマ、聞こえてるか？」

「えっ、はい、き、聞こえてます！なにか!？」

「別に、ちよつと呼んでみたかっただけ……今そういうことしたら、マジで怒るからな」

カズマの手が太腿に触れたので一言釘を刺しておけば、物凄い早さで手が離れてった。

空気の読めない無粋さとその抑えきれない下心に、少しだけ呆れた気持ちになったけど、それがカズマなのだと思うともう許してる自分がいて……自分にも少しガツクリする。こういうのは惚れた方が負けだというけど、あれは本当らしい。

「……あのな、カズマがどうしてもって言うなら、何だつて幾らでも相手するけど……でもな、出来たら今日はこのままが良いんだけど……駄目か？」

一応そう聞いてみると、カズマは少し悩んだ素振りにはみせたけど首を横に振った。即答しない辺りカズマらしい。———というか、そこで首を振るな。胸がくすぐりたい。

「か、カナデ、キスくらいは、良い感じか？」

「この野郎……」

まあ、なんののかんのも言っても、我慢させ続けるのも可哀想なので、仕方なしに抱き締める力を緩めてやる。

すると直ぐ胸から顔を覗かせたカズマと目が合った。

「んっ」

目を瞑って唇をちよつと突き出せば、柔らかい物がそこに触れた。小鳥が餌をつつくみたいのに、小さくツンツンと。それはくすぐりたくて、いつもとは違うけど気持ちよかった。

「……舌入れたら、怒る?」

「怒る」

「……おう」

それから暫く、めぐみん達が帰ってくるまでの間、俺達はいつもよ

りやんわり触れ合った。手を絡めて遊んだり、添い寝してみたり、子供みたいなキスをしたり・・・まあ色々。

本番なしでカズマは少し消化不良そうだったけど、俺はそれなりに楽しめたので今度もやろうと思う。

てか、男を焦らすの、普通に楽しいわ。

あの子犬みたいな顔でこっち見てくるのとか、なんか堪らないもんがある。ゾクゾクするもの。

これはMではないな、俺は。

お貴族様から呼び出しですか？そうですか、夜逃げの準備始めますね。

「きちやっただなあ・・・いや、仕方ないけど」

「きてしまいましたね。それにしても、何とも立派なお屋敷です。爆裂心が擦られます」

「やっぱり家のよりおつきいお屋敷ねえ。ねえカズマさん。女神たる私を住まわせるなら、本当はこれくらいいやなきや駄目なのよ？感謝して、今のまま生活に甘んじている私の優しさに感謝して」

「黙れ、穀潰しの駄目神がつ。犬小屋に住まわせないだけ、ありがたいと思え」

「犬小屋ですって!?!この無礼者お!!そろそろ罰の一つも与えるわよ!!」

こっそりセックス生活も板についてきた今日この頃。

カズマの朝立ちんこを二三回ヌキヌキした後、なに食わぬ顔で家事をパパッと済ませた俺は、仲間達と一緒にとある屋敷へとやってきていた。

アクセルの街においてもっとも入りがたい場所、そう大貴族ダスティネス家のお屋敷である。

ワチャワチャ喧嘩を始めたカズマ達を横目に、門の前で屋敷を眺めていると——玄関から胸元の開いた派手なドレスを着た女性と使用人らしき人達がやってきた。

「皆ここだ！待っていたぞー！」

嬉しそうに小走りする女性・・・ダクネスの胸が揺れる。胸元が開いているせいでその様子は嫌みな程よく目につき、案の定俺の隣からは歯軋りが聞こえてきた。

「めぐみん、スティ」

「・・・大丈夫です。我はこんな事で仲間魔法を撃ち込むほど、性格ねじくれています。仮に撃ったとしても手加減します」

おう、そうか。

手加減するなら良いや。

ふと、喧嘩してる二人が静かになったので視線をそちらに向けると――案の定、カズマが鼻の下を伸ばしている。水色はといえば能天気にもドレスを見て感嘆の声をあげていた。

カズマのその下心満載な顔は割りといつものも事で、別に怒っていないし気にもならなかったけど……ダクネスに着いてきてる使用人達の目もあつたので、悪い印象を与えぬ為に止めさせる事にした。

極々一般的で、極々女性的で、極々目立たない。

そうそれは優しさと思いやりから生まれた、人をこつそり嗜めるに最適な方法――思いつきりカズマの足を踵で踏んでやる。

「ツツ!?!」

足を踏まれカズマがこちらを見てきた。

じつと目を見てやれば額に汗を浮かべ、顔を青くさせ震え始める。

「リーダーなんだから、きりつとしてろ」

「う、うつす……!」

「……誰がリーダーなんでしようか」

そうしてカズマに気合いを入れ直した後、俺達はダクネスもとい『ダステイネス・フォード・ララティーナ』さんの案内で大きく立派なその屋敷へと足を踏み入れた。

一連の事件、その顛末を知るために。

ことの発端は前日、ダクネスが「皆に聞いて欲しい事がある!」と食卓で大声をあげた事から始まる。真剣な顔をしていたので何を言うのかと待ったが……皆はそうは思わなかったらしい。

例えば「なんだよ、今更、性癖については知ってるぞ。属性追加か?」とか、「腹筋が若干割れてるくらい大丈夫よ!素敵な腹筋だったわ!私が保証するもの!」とか、「鎧の臭いなら気にしなくて大丈夫ですよ。まだまだ許容範囲です」とか茶化したのだ。

ダクネスは静かに泣いた。

取り敢えずアホ連中を説教してから、改めて話を聞けばカズマの身におきた裁判関連の話に加え、ダクネス自身に告白する事があるという。

「・・・実はな、私の本名はダステイネス・フォード・ララティーナというのだ。そう、もう分かっているかも知れないが・・・ダステイネス家は私の実家なんだ」

ウソつくさい悪魔のアドバイスを聞いた時から、いやそれよりずっと前から、ダクネスの正体について薄々勘づいていたので「ふうん」と軽く流したんだが・・・それはそれで泣かれた。

いやでも考えてもみて欲しい。寧ろ分からいなか、という話なのだ。

幾ら人道的な事で有名な貴族であったとしても、いきなり現れた一般人の話を聞く訳がない。まず間違はなく門前払いされる。仮に話を聞いて貰えたとしても、突然裁判へ参加してくれなんてアホな事いつて領く筈もなければ足を運ぶ訳もない。立場があるのだ。

だから、裁判の場にダステイネスの現当主が現れた時点で、ダクネスの正体は俺の中で確定的だった。

そもそもDMな所を抜けば、ダクネスの行動は品が有り過ぎていたし、身なりも常に清潔過ぎていたし、装備もかなり価値のあるものだったし・・・わりと早い段階でダクネスの事は貴族か、それなりに良いところの商家の娘ではないかと思っていたのだ。加えて、ウエイトレスしてる時とか、ダステイネス家の一人娘の噂はよく聞いているので、もう、本当に、今更としか言えないじゃん？な？

皆でダクネスを慰めまた改めて話を聞けば、どうやら領主との一件が片付いたらしい。

それでダクネスのお父さんが当事者だったサトウカズマパーティー全員に、お詫びと事の顛末の説明を「直接」したい——との事だった。

貴族と関わると碌な事にならない。

ウエイトレスの時散々聞いた教えに従い最初は断るつもりだった

のだが、魔王軍幹部討伐の報酬の件や借金の件、加えてどこで聞いたのかカズマの発明品の販売にいい話があると言われ……。俺達は話し合いの末、ダステイネス家当主の元へと行く事を決め、今日という日を迎えたのである。

「お待ちしておりました。サトウカズマ様とそのパーティーメンバー御一行様。今日は御足労頂きありがとうございますと御座います」

ダクネスに連れられて屋敷へ入ると、背筋がしゃんと伸びた紳士然とした老執事を筆頭に、ずらりと並ぶ使用人達に頭を下げられた。練習でもしたような一子乱れぬ綺麗な礼に、根っからの小心者カズマが息を飲む。めぐみんは流石の胆力で少し驚き、水色はどこか満足げにうんうんと頷いてる。水色は緊張するのかと思ったので、少し意外だな……。なんて思ったけど、よく考えたら敬われて当然な女神だったな。こいつ。

「爺、あまり堅苦しいのはよせ。皆が萎縮してしまう。それよりお父様は？」

「お部屋でお待ちしております。それより、ララティーナお嬢様。ご友人がいらっしやって嬉しいのはお察ししますが、淑女たるもの何時如何なる時も――」

「わっ、分かってる！私だって、ちゃんとする時はする。今は……。皆といるのだし、その、良いだろ」

チラツとこつちを見るダクネスの頬は赤く染まってて、何処か気恥ずかしそう。普段が普段だから、俺達の前でお嬢様になるのがちよつとあれなのかも知れない。

するとそんなダクネスの姿を見て、うちの問題児連中が悪い顔をした。

「なんだよ、ララティーナお嬢様。遠慮しないでいつも通りお嬢様していいぞ。俺達は気にしないから」

「そうです。私達の事は気にせず、ダクネスはいつも通りにお嬢様して大丈夫ですよ。どんなダクネスでも、ダクネスはダクネスですし」
「やっぱり素敵ね、ララティーンナって名前！今度から私もララティーンナって呼ぶわね！ララティーンナ！」

「ララティーンナって呼ぶな!!」

元気にカズマ達に怒るダクネスを見て、執事さんも使用人の人達もほんわかした視線を送ってる。無礼なっ！って怒られそうならカズマ達をひっぱたくつもりだったけど、その心配はいらなさそう。この調子だと、当主も大丈夫そうだな。こういうものは上に立つ人の気質が出るもんだし。

執事さんとララティーンナお嬢様に案内され、高級感溢れる廊下を歩いて少し。ダクネスの父親がいると言われた部屋の前へとついた。

執事の人が入り口に控えていた使用人に確認をとった後、執事の人に促されて扉の先へと入ると、裁判の時に会った金の髪を綺麗に後ろへ流したナイスミドルがそこにいた。ナイスミドルはさつと俺達の姿を確認すると、腰掛けていた椅子から立ち上がる。

「やあ、裁判の時以来だね。サトウカズマくん、めぐみんくん——
—それと、カナデくんだったかな？」

がつつり名前を覚えてるアピールしたナイスミドルは、それはそれは柔らかな笑みを浮かべた。

俺はその笑みを見ながら、お腹真っ黒じやなければ良いなど、今は見えないお星さまに祈った。

身構えて挑んだ話し合いだったけど、結論から言えばまったくの杞憂で終わる。ダクネスの父親は確かに貴族ではあったけど、かなりの庶民派で多少の無礼な言葉使いも笑って流せる器量を持った人だったのだ。もし短気な貴族だったら水色がぼつくりいっていただろう。

まず最初に領主が関わった事でこちらが迷惑を被った件について謝罪があった。貴族としての立場があるから直接的な謝罪ではなかったけど、大貴族の当主が一般人に行くものでは当然なくて、ダクネスは目を剥いてびっくりしてた。カズマとめぐみんも察していた

みたい・・・水色だけは首を傾げてたけど。

続いて門の修繕費として徴収された魔王軍幹部討伐の報酬についての話になった。領主が門の修繕費を冒険者ギルドに押し付けたのはやはり越権行為だったらしく、俺達に掛かった借金は帳消し、報酬も全額支払われる事になった。——とはいえ、流石に今すぐという訳にもいかないようで、それなりに時間が掛かるらしい。

ただこの件について、返納金と報酬金は辞退しておいた。改めて考えるとその件に関してこちらの非が大きかった事もあるし、何より裁判所に足を運んで貰い領主を抑えてくれた恩もある。

しかし、ダクネスの父親はそれを良しとしなかった。

聞けばダクネスの父親は水色に呪いを祓って貰った大恩があるらしく、これ以上借りを作りっぱなしではいられないとの事・・・本当何してん、水色。おまつ、そういう事は、ちゃんと教えろや。馬鹿。——おやつ要求するな。ぶっ飛ばすぞ。

話し合いの結果、カズマの発明品開発にダステイネス家から援助が入ることに決まった。商品の出来についてダクネスからある程度聞いていたようで、カズマ式ライターの特許申請の話を始め、製造ラインや販売ルートの話も進み——気づけば春にはダステイネス家の領地内と限定的ではあるけど販売開始される事とあいなった。利益配分、権利関係はかなりこちらに有利になっており、ダステイネス家の本気の善意に震えた。恐怖で。

まあ、利益配分に関しては後で変更出来るようにしておいたので、利益次第ではパーセントゲージを変えて恨みを買わないように調整するつもりだけ。

最後に、領主であったアルダープの諸々の罪が明らかになった事と、容疑者となったアルダープが行方不明になった事を伝えられた。王家から権限を委託されたダステイネス家は罪状を調査中してる間、アルダープを本人が所有していた別宅へ軟禁していたらしい。——ところがある夜、アルダープは監視の目を掻い潜って突然姿を消してしまったのだと。慌てて別宅を調査した結果、幾つか隠されていた地下室を発見。その中で宝物庫として使われていた様子の部屋には

荷物を運んだ形跡が残っており、金銭的に価値のある物をもって逃走したとみられてると。

現在逃走したアルダープには国から賞金が掛けられているらしいが行方は依然と分かっておらず、報復に動く可能性もあるので気をつけて欲しいとの事。今度会うような事があれば、賞金も掛かっていることだししこたま殴つてやろうと思う。

「——と、まあ、そんな所かな。ごめんね、難しい話ばかり。さてと、私としてはララティーナと友人である君達と、もう少しばかり話をしてほしい所なのだが、少しやらなければならぬ仕事が残してしまつててね——それは夕食の席にとつておこるかな？」

一通り話が終わると、ご当主様はダクネスに目配せした。ダクネスはその視線の意味が分かったのか、目を輝かせ立ち上がる。

「よし皆つ、夕食の支度が終わるまで時間がある。折角だ、屋敷を案内しよう！」

鼻息荒く言い放つたダクネスにカズマは心底面倒臭そうな顔をすするが、めぐみんと水色は目を輝かせ「探検ですね！」「探検ね！」と乗り気で立ち上がり、先導するダクネスに続いて早々に部屋の外へと駆け出していった。

その姿に嫌な予感を感じてカズマを見れば、俺と同じ考えにいたつたのかカズマは重い溜息を吐き出す。

カズマは「先にいく」と一言俺に言うのと、用意された紅茶を飲み干し、穏やかに笑うご当主様へ一礼すると慌ただしく追い掛けていった。

ガランとした部屋の中で、俺はご当主様へ静かに頭を下げた。

「……申し訳ございません。うちのアホ達が」

「いやいや、先導したのは他でもないうちの娘であるし、何より冒険者ならあれくらい元気でなければ務まらないよ。魔王軍幹部と渡り合う豪傑であれば、まだまだ可愛いものさ。何かと面倒を掛けると思うが、これからも娘の事を宜しく頼むよ。カナデくん」

「善処します」

穏やかに笑い合えたのもそこまで。

それから直ぐ、カズマの怒鳴り声が響いてきて、俺も慌てて部屋を出る羽目になった。

誰が何をしたんだ!! 水色お (決めつけ) !!

温泉ですか？どこにそんなお金があるんですか。働きなさい、馬車馬のように。

「にゃー」

洗濯物を干していると、そんな鳴き声が聞こえてきた。

手にしたシーツを下げ辺りを見渡すと、黒い塊が足元でモソモソ動いていた。

「ん、どしたー？ちよむすけー」

シーツを洗濯籠に置いて、足に擦りついてきたちよむすけの顎をかいてやる。ちよむすけは目を細め気持ち良さそうに喉をゴロゴロ鳴らす。

「ご飯はさつき食べたろー？お夕飯まで我慢しろ」

「にゃー・・・にゃにゃー」

「・・・はあ、まったく」

円らなお目めに見つめられ、呆気なく絆された俺はポケットから猫用のオヤツを取り出した。ちよむすけはオヤツを見ると目をキラキラさせ、ちよこんと座って尻尾をふりふりする。

口元にオヤツを近づけると、ちよむすけはそれをパクつと啜えてさつさと何処かに行ってしまった。

まったくもって現金な猫である。

去っていくちよむすけの後ろ姿を眺めながら、随分となついたものだなあと、何となしに思った。めぐみんがモジモジしながら連れてきた当初は、警戒心が凄く強くて少しも触らせてもくれなかったのだ。今でこそ自分から寄ってきて餌をねだってくるけど、何回引つかかれたか・・・。

「さあて、残りもさつきとやっちやおうつと」

ちよむすけが茂みに入ったのを確認してから、俺は洗濯物を再開した。午後は新調した装備をとり武器屋にいたり、夕飯の買い出ししたり、お風呂も準備しないといけない。やることは幾らでもあるのだ。

「はぁー、たまにはゆつくりエッチしたい」

一日中ズツコンバツコンしたい。

何も気にせず、朝から晩までしたいなぁー。

無理だけど。

「はぁ、温泉？」

慌ただしく過ごしたその日の夜。

ちよむすけにご飯をあげてると、カズマと水色がニッコニコしながらそんな事を言ってきた。

「めぐみんが教えてくれたんだけどな、水と温泉の都とか呼ばれるアルカンレティアっていう有名な温泉街があるらしいんだよ。最近何かと忙しかったろ？たまにはゆつくり温泉でも浸かって、のんびりしないか？」

「カナデ最近色々お疲れみたいだし、丁度良いと思うの。ねえ、行きましょう？温泉みんなで行きましょう？温泉入って、美味しい物食べて、美味しいお酒飲んで、たまには贅沢してぱーっと楽しみましょう？ね、ね！」

温泉かぁ・・・温泉は嫌いではないけど、時期的にちよつとなぁ。「今やつとライターの製造ラインが動き出した所だろ？順調みたいだけど、何かあった時お前が対応に走らないといけないんだし・・・もう少し落ち着いてからにしないか？それに本格的に事業拡大するならお金は幾らあっても足りないんだし、無駄遣いはなぁ。―――」
で、水色。お前はこの間豪遊してたろ。貰った分け前全部突っ込んでいて、よくそんな事言えたな。働け」

思った事をそのまま伝えると二人がシユンとする。まるで怒られた犬みたいだ。

シユンボリする二人を眺めてると、めぐみん達もやってきた。その手にはチケツトらしき物が握られていて、この件がもう現在進行形で

動いている事を察する。俺の視線に気づいたためぐみんは笑みを浮かべた。

「カナデならそういうと思い、既に駅馬車と旅館の手続きは終わらせておきました。因みに行くのは明日からです。今からキャンセルすると、少くないキャンセル料を請求されますよ？それこそ無駄ではないですか？大人しく旅行するが吉です！」

「今回の旅費は我が家から出したから、お金の事は気にするな。カズマの怪我の療養も兼ねてるが、何より普段から苦勞を掛けてるカナデに疲れを癒して欲しくてな。どうだろうか？」

「ずっと攻めてくる二人。」

続いて一度撃墜した二人も復活し、カルテットに攻められてしまえば、特別不都合もない現状無下に断る事も出来ず――

「・・・はあ、分かった分かった。温泉いくか」

――と折れる事になった。

温泉行きが決定した翌日。

新調した真新しい装備を着用した俺は旅行カバンを肩に背負い、トーチンカン達を引き連れて駅馬車の停留所となっている街の広場へ向かった。

きやつきやとはしやぐ仲間達を引率しながら、ギルドに寄って遠出する事を伝えたり、足りない雑貨など買い出して歩く事少し、駅馬車の並ぶ街の広場へ辿り着く。

やることがあるとか何とか言っていたカズマとは現地集合なのだが・・・軽く見渡した感じだとまだ来てないようだ。

預かっていた全員分のチケットを受付に渡すと、立派な造りの一台の馬車へ案内された。

御者に手伝って貰い荷物を荷台に詰め込み、カズマの到着をのんびり待っていると、何やら大きな荷物を背負ったカズマがやってきた。

「ウイズじゃないか？どうしたんだ？」

ダクネスの言葉にカズマは渋い顔で話し始める。

用事があると云ったカズマはライターの卸売り先の一つである貧乏店主さんことウイズの所へ、製造ライン稼働のお知らせと販売に関するあれこれを話にいったのだと。

そこでまあ、あれこれあって、少し前からウイズの所で働き始めた噂の店員から、金遣いの荒いウイズが仕事の邪魔になるからと押し付けられたらしい。店主が追い出されるとは、これいかに。新手の詐欺ではないかとカズマに聞いたが、ウイズとその店員は友人であり、貧乏なアホ店主を騙して店をどうこうする人ではないらしい。本当に、純粹に、ただ邪魔なのだと言われたとか。

普通に可哀想な人だな、貧乏店主さん。まっ、あんな商売のやり方してれば、ボロクソ言われても仕方ないけど。

まだ会った事ないけど、その店員とは仲良くやれる気がする。

それから間もなくカズマのドレインタッチでダクネスの体力を分けて貰いウイズは目を覚ました。

ボロクソ言われた所をかいつまんで状況を説明すれば、元々温泉好きだったらしいウイズは普通に喜んだ。なんか聞き捨てならない悪魔の名前に感謝した気がするけど、楽しそうにしてるウイズに突っ込むのは野暮なので止めておく。今度会ったら滅ぼしてやろう。あの悪魔。

それで漸く馬車に乗り込み、さあ出発となった所で問題が起きた。俺達が、という訳ではない。駅馬車側に、だ。

「これを？」

「はい。〴〵予約して頂いた特別馬車のお客様に、本当に申し訳ないんですが・・・この子も乗せて貰えませんかねえ」

そう言つて駅馬車の責任者と御者に見せられたのは、鳥籠に入った翼の生えた小さな赤いトカゲ。レッドドラゴンと呼ばれるモンスターーの赤ちゃんだ。ちよこんと座ったままその子は、くりつとした目でこちらを上目遣いで見てくる。指を籠の隙間に差し入れると甘

噛みしてくる。なんだこいつ、可愛い。

「実はですね、元々別の馬車の一席をこの子にご予約する筈だったんですが、こちらの手違いで手配し忘れてしまいました・・・それで他の馬車の方にも声は掛けたのですが、やはりどこも満員で預けられる所が、もうこちらしか・・・」

「ふうん？」

「もつ、勿論、ご迷惑をお掛けする事になりますので、お値段など勉強させて頂きますし、何か問題があればこちらで対処致します。どうかお考え頂けませんか・・・？」

指でドラゴンを可愛いがりながら、馬車の広さを見てみた。用意して貰った大きめの馬車は、元より八人乗りなので余裕はある。スペース的な問題はないだろう。

ただ、ドラゴンって言うのがどれだけ手間の掛かる生き物なのか分からないのが難点だ。問題があれば対処するというが乗っている馬車が違う以上、多少なりとも俺達が見ている必要があるだろう。癖の強い生き物だと絶対に気疲れする。

「ズルよおおお!!絶対ズルよ!!三回連続で勝つなんておかしいわよ!!絶対ズルしてるわよ!!カズマさん、もう一回よ!私は再戦を要求するわ!!」

「やかましい!!何回やらせれば気がすむんだ、この我が儘女神が!!席なんてどこも変わらないつーのに・・・あと一回だな?」

相談しようとカズマ達に視線をやれば、まだ席順決めるじゃんけんしてた。こいつら、何処まで子供なんだ。ちやつちやと適当に座れよ。本当に。

「はあ、まったく・・・すみません。取り敢えずうちのリーダーが来るまで待つて貰えませんか?俺の一存では答えられないので」

「いえいえ、待たせて頂きます。こちらこそご無理を言つて申し訳ありません、奥様。旦那様と従者の方々には私めからもう一度ご説明差し上げますので」

「良いですよ。それくらいは俺から伝え——奥様?」

不思議な単語に引つ掛かりを覚えて眩くと、相對した二人がニツコ

り笑みを浮かべた。

「ええ、奥様」

周囲を見て誰もいない事を確認。

二人の視線が俺に向いてることも確認。

自分を指差して「奥様？」と聞けば、「ええ、奥様」と二人が続く。

「これ程お美しく聡明な奥様がいらつしやるなら、旦那様が快適な旅をと、こちらの馬車をご予約した理由が分かるというものですか」

「こちら滅多に出さない特別便です。普段はお貴族様にご利用頂いているのですが、今回は旦那様がどうしても、そうおつしやるものですから。いやあ、奥様は愛されておらつしやる」

「おお、明らかによいしょ。ここまで露骨だと逆に清々しいまであるな。」

しかし、ちよつと心外でもあるな。古今東西何処にでもある、こんな安つい手に俺が乗ると思われてるのは……ん？お似合い？誰が？俺が？そ、そうかな？美人つてのは、ちよつとよく分からないけど……まあ、可愛いとは言われる事は、まあ……え、そうなんだよ。カズマがな。普段ヘタレなんだけど、こう、さ、なんかさ、欲しい時にな？言ってくれるんだよ。そんなんされたらさあ、キョンつてするじゃんね？分かる？分からないよなあ……そうっ！そうだよ！カズマはそういう所がカッコいいんだよ！言うべき時にというか、やるべき時にこうっ、な！そうだよな、やっぱり分かる人には分かるかあー。分かつちやうかあー、えへへ、そうなんだよ。うん。そう、あの顔もな、良いんだよ。愛嬌つていうのかな？本人は自分の顔に自信ないみたいだけど、俺は——えっ、トカゲ？良いよ、どうせスペース余ってるし。俺から言つとくし。

「……カナデ。なんだ、それ」

「トカゲの赤ちゃん」

「いや、そういう意味じゃなくてな・・・」

「トカゲの赤ちゃんだ」

「おう、そうか。分かった」

追及するカズマを振り切った俺は、膝の上に乗せた籠を抱えながら『俺もまだまだだな』と窓の外を眺めた。

窓枠から見えたそれは旅日和の良い天気だった。

「――カナデ。ちよむすけがカナデと仲良くしたいそうです。交換しましょう」

「いや?」

結局、猫連れてきたのか。めぐみん。

あー、交換な。うん、はい。預り物だから大切にな。

ようやくおにゅー武器の出番ですか？あれが相手なら丁度良いですね。

『チキンレース』

それは走り鷹鷲というモンスターが繁殖期に見せる、メスに向けたオス達の一風変わった求愛行動をさす言葉である。本能的に硬度の高い物を見つけたオスは全速力でそこへと駆けて行き、激突するギリギリでそれを回避する。対象物は硬ければ硬い程に良いし、回避はギリギリであればギリギリである方が好ましいそうだ。

当然回避に失敗するものもいるが、その際はほぼ即死らしい。まあ、硬い物を好き好んで選んで突っ込んでるので自業自得以外の何物でもないのだが。

そして、そんな走り鷹鷲は今——全力で求愛行動をしていた。体力を注ぎ込み、精神を削り、命を死に晒し。躊躇う事なく、全速力で走りまくっていた。

「カズマ、カナデ！来たっ！次が来た！今度こそはっ、今度こそはもうダメだ！ああああっ！ぶつかる！ぶつかるううううー！！」

硬い事に定評のあるうちのパーティーメンバー、変態ドM騎士ダクネスこと、ダステイネス・フォード・ララティーナに向かって。

両手両足を拘束されたダクネスから、それはそれは楽しそうな歓喜の声があがる。

良かれと思つてバインドという拘束スキルを走り鷹鷲に放ち、結果としてダクネスを縛りあげてしまった馬車の護衛務める冒険者からは悲痛な声があがる。

そもそも欲望のままバインドを邪魔したダクネスが全部悪いのだが、そこら辺は関係ないらしい———というか、なんか果てしない勘違いをしてるっぽい。あいつは俺ですら及ばない、変態の中の変態だぞ？騎士とかおまけ要素だぞ？なぶられたいだけだぞ？

カズマに確認を求めて視線を向けたら、迷いなく目を逸らされた。そんな中、走り鷹鳶達はダクネス目掛け突っ込んでいき――弾丸のような速度を保ったまま、背面飛びでかわす。ダクネスの前髪にかかるギリギリ回避。見守っていた護衛の冒険者達から悲鳴がある。

一匹の走り鷹鳶が駆け抜けていくと、直ぐ様別の走り鷹鳶達がダクネスへと迫る。そして高速正面飛び、挟み飛び、ベリーロール、開脚飛び、前方三回ひねり、ひざ抱えこみ飛びなど華麗に技を披露しながら飛びかわして行く。どれもギリギリ。

その度に護衛の冒険者を始め、他の馬車のお客様も悲鳴をあげている。ダクネスは何を口にしたのかは言うまでもない。

「カズマっ、カナデェー！これは焦らしプレイの一環なのだろうか!?このギリギリでのお預け感がまた……！なんて事だ、私の体の上を次々と発情したオス達が通り過ぎていく……!」

「よし、人目もあるんだ。お前はもう黙ってろ!」

「一緒にされても嫌だから、俺の名前は呼ぶなメス豚のララティーナ」「ふあ!?こ、こんな時にも言葉責めっ、だど!?カナデは心得過ぎている!!こんなに興奮させて、私をどうするつもりだあ!!」

どうもしないわ、まったく……ん、なんだよ。カズマ。その目は。なんもしないわ。なんもしないって、言ってるだろ!こらあ!

温泉旅行が始まって暫く。

カズマの幸運は何処へやら、俺達一行を乗せた馬車は早速アクシデントに巻き込まれていた。

野生の走り鷹鳶の襲撃である。

大体水色で次にめぐみんが原因だったりするのだが、今回はダクネスの硬さに惹かれてモンスターが集まったようだ。ダクネスは鎧がどうか、アダマントタイトがどうか言ってるけど、絶対ダクネスが

硬いからだろう。腹筋なんて割るから。

ダクネスの尻拭いの為、自主的に戦闘に参加する事にした俺達パーティーは、護衛の冒険者達に雑ざりそれぞれ戦闘を開始した。

「——っつっつっつぜえあ!!」

ダクネスを飛び越えてきた走り鷹鳶の群れ目掛け、新調したハルバードに渾身の力を込めて振り払う。全身のバネを使つて放つた空気を切り裂く必殺の斬撃は、風切り音と共に鮮血を撒き散らす。

跳ね飛ぶ首と地面を転がってくる死体をかわし、次の獲物目掛け体にひねりを加える。踏み込んだ足の爪先から、全身を巻き込むように一気に回転。全体重を乗せるイメージで二振り目を振り抜く。当たりが悪かったのか、一撃目より若干鈍い感触が手に走つたが、刃は難なく走り鷹鳶の首二つと胴体一つを切り裂いた。

直後、ピューーヨロロロと鳴き声が響く。

身を翻えせば走り鷹鳶の一羽がこちらに向かつてきた。瞳に明らかな敵意が滲んでいる。

流石に刃を返してる時間が無かった為、そのまま刃の反対側についているピツクを横つ面へ叩きつけた。鈍い感触が手に響き、白目を剥いた走り鷹鳶が俺の隣を転がっていく。

次の獲物が迫ってきてるのが見え、俺はハルバードの切っ先を地面に突き刺し、全力でその地面を蹴り飛ばす。棒高跳びの要領で宙へと浮いた俺の下を、走り鷹鳶が駆け抜けていく。二羽が通り過ぎた後、俺の落下に合わせたようにタイミングよく走り鷹鳶が落下地点を通り抜けようとしたので、そのまま背中に飛び乗ってやった。走り鷹鳶は酷く暴れたが、首を握り絞め行きたい方向へと傾ければ大人しく言うこと聞いて走ってくれた。

これは良い。

「はい、どうどう。あっち行こうなっ!」

走り鷹鳶を走り鷹鳶で追い掛け回し、何羽か今夜の夕食の材料にしたまでは良かったのだが、首を絞めすぎたせいで騎乗してた走り鷹鳶

がお亡くなりなってしまうというアクシデントが起きた。いきなり崩れ落ちてびっくりしたけど、着地はばつちりしたので怪我はない。惜しいやつを亡くした。

それからも通り過ぎてく走り鷹鷲を切ったり突いたり叩いたりしながら、おにゅー武器の感触を改めて確かめていく。しつかり試して選んだグリップは凄く握り具合が良い。柄の長さも、重さも丁度良い。良い感じだ。

デストロイヤー戦で壊れて以降、間に合わせてデストロイヤー内部に落ちてた古ぼけたメイスを使っていた。とにかく頑丈で、造りも良くて、錆びにくい材料で作ってあって、武器として申し分なかったけど、俺が扱うには少し重くて大きすぎた。

そこで新しく新調したのがこのハルバードだった。

流石にギルドで使ってたやつと比べると質が落ちるけど、それでも十分過ぎる切れ味と頑強さに文句は出ない。

一通り走り鷹鷲が駆け抜けていくと、「カナデー！こっちこい！」とカズマに呼ばれた。振り向けば馬車に向かって歩を進めるダクネスを担いだカズマの姿がある。

「重いだろ、代わるぞ？」

「いや一人じゃ無理だ。手貸してくれ」

「おっ、おいっ!?二人して私が重いみたいな感じで話すな!!正しく言い直せ!!鎧が重いんだ!!私はそんなに重くない!!」

喚くダクネスを無視して二人で担ぎあげる。

カズマの言うとおり、地味に重い。

レベルがあがったお陰か、多分今の俺なら一人で持てない事もないけど。

ダクネスを担いで馬車に入ると、パーティーメンバー全員の姿がある。またカズマが何か企んでいるのだろうか。

「お客さん！もう限界ですよ！馬車が壊されちまう！」

悲鳴のような御者のおっちゃんの声に、カズマが「準備出来た、おっちゃん出してくれ！」と怒鳴り声を返した。待ってましたと言わんばかりに馬車が走り出す。

すると他の馬車の周りで駆けずり回っていた走り鷹鳶達の視線がこちらを向いた。何を察知したのか分からないけど、鳶みたいな鳴き声をあげて一斉に駆け出してくる。

「がつつり引き連れてきちゃってるぞ、カズマ。何するつもりだ」

「御者のおつちやんが言うには、この先に洞窟があるらしい。ダクネス囷にして誘導する。——んで、いつものだ」

カズマに視線を向けられたためぐみんは、杖を胸の所に抱え鼻息を荒く頷く。

「りよ——でも、このままだと直ぐ追い付かれるな」

「そういう事だ。——アクア、俺達に筋力増加の支援魔法頼む！」

「分かったわ、パワーード！」

水色の魔法で体が妖しく光り、何処からともなく不思議と力が湧いてくる。しかしな、やっぱり支援魔法はいつ受けても変な感じがするな。慣れない。

カズマの狙撃と俺の投擲で牽制、時間を稼ぐ。

途中ウイズの協力もあって馬車は無事洞窟へと辿り着いた。そこから先は、まあ言うまでもない。

『「エクスプロージョン」!!』

俺達の前にいつものと同じ業火が降り注いだ。

小山のような洞窟を綺麗に吹き飛ばす。

必殺の業火が。

すっかり日が暮れた頃。

馬車の旅は休息の時を迎えていた。

灯りの乏しい夜間の移動は危険なので、日暮れ前には馬を止め野営するのがスタンダードだそう。勿論例外はあるそうだが。

そんな野営中。

商隊の皆さんや護衛の冒険者達にがつつり取り囲まれ、あれこれやと世話を焼かれていた。

「さあ、どうぞどうぞ！良い部分が焼けましたので、是非とも召し上がってください！」

率先して焼けたお肉を渡してくるのは商隊のリーダーをやってるおじさん。凄いニコニコで俺やカズマに渡してくる。

少し離れた所でご飯を食べてるめぐみんとダクネスも満更でもない様子で接待中だ。水色はウイズと一緒になんかやってる。どうせ得意の水芸だろうけど。

「しかし、お見事でした！まさか、爆裂魔法をお使いになる程の大魔法使いがおられるとは……！しかも、あれだけの負傷者を簡単に治療してしまったアークプリースト様に、走り鷹鳶の群れを相手に一歩引かず、それらを一身に引き受けた勇敢なクルセイダー様……！そちらの方の上級魔法である泥沼魔法での咄嗟の足止め！見事な判断で敵を洞窟へと導き、一網打尽にしたあなた様のその機転！いや、お見事です！そして——」

そこにいた全員の視線が俺に集まった。

心臓がどきりとする。

「走り鷹鳶の群れに迷いなく飛び込み、槍の一振りごとに血の旋風を巻き起こす！返り血に頬を濡らし、武器を肩に走り鷹鳶へ股がる姿は、正に伝説に聞きし鬼神が如し！いやあ、お見事です！凄いモノを見せて頂きました！」

そういう商隊のリーダーさんの目はキラキラと光ってる。その様子から褒めてるのは分かるのだが、全然褒められてる気がしない。

てか仮にも女の俺に鬼神とか言うかね？確かに戦士系のジョブを選択する女性は、下手に女性扱いするより武功を称えたり、今みたいに男性戦士に向かって言うような褒め言葉が好まれるのかなんとかギルドで聞いた事はあるけどさ？むむー。

鬼神というパワーワードについて考えてると、近くにいた戦士風の冒険者が鼻息荒く詰めよってきた。

「本当に見事なお手前でした!!俺も長物を扱っておりますが、ああも上手くは扱えませんか!!尊敬致します！よき師をお持ちですね!羨ましい!!スキル構成はどのようによ?」

「す、スキルって言われても・・・攻撃系のスキルは持ってないので。あつ、投擲とかなら、一応？」

「スキル無し!?まさかつ、そんな!?それでは、あれは貴女自身の?信じられない、その若さで・・・やはり師の教えが貴女の・・・?しかし、あのような技見たことが・・・」

師とか言われてもな・・・昔幼馴染の実家の道場で薙刀やったくらいしかないなあ。あれも齧る程度だし。うーん。

「薙刀なら、少し・・・?」

「やはり!ナギナタというものは少し分かりませんが、さぞ高名な槍術なのでしよう!ご迷惑でなければ、一度手合わせを——」

捲し立てる冒険者の顔を遮るよう、程よく焼けたお肉が俺の目の前に現れた。良い匂いが鼻を擽る。

何処からやってきたのかと出所をみれば、しかめっ面のカズマから手が伸びていた。

「すみません。俺達は今、完全なプライベート、旅行中なので、そういうことは控えて貰えませんか?予想外の戦闘で疲れてもいますし」

「——あつ、も、申し訳ない。そんなつもりでは」

「いえいえ、分かって貰えれば。手合わせはまたの機会ということ・・・あつ、これは貰ってやって下さい。冒険者の方はこれから仕事でしようし、精のつく物を食べてゆつくり休んで下さい」

カズマに笑顔で肉を手渡された冒険者は、何ともバツが悪そうな表情を浮かべ離れていく。そんなカズマの様子を見て、商隊のリーダーさんも料理を盛った皿を置いて今もちやほやされて喜んでるめぐみん達の元へ去っていった。きつとその内、水色オンステージの方にも行くんだろう。あれ見てる分には地味に楽しいんだよな。

ちよつとだけ静かになったそこで、何となくカズマの手に自分の指を絡めてみた。するとそれに応えるようにカズマの指が俺の指を弄り始める。

「嫉妬した・・・?」

「別に・・・」

「ふうん?」

そう言ってる間にもだんだん弄り方がエロくなってきた。撫でられたり、擦られたり、ムニムニ揉まれたり・・・ちよつとこそばゆい。「・・・今夜は駄目だからな」

「当たり前だ、こんな所でやってたまるか。俺が言うのもなんだけだな、お前の頭の中はピンク色か」

そう言われて少し考えてみた・・・考えてみたけど、特に意味はなかった。

最近忙しくってあれだったけど、あの時から基本的に気持ちはずつと変わってないから。

「ふふ、ごめんな。わりとピンク色だと思う」

「お前な・・・っ?！」

皆の隙を見て、頬にキスしてやる。

真ん丸に見開かれたカズマの瞳に俺が映る

「——でも、カズマのせいだからな?」

そう笑い掛ければ、カズマは照れ臭そうに顔をそっぽに向けてしまった。顔は見えないけど、耳が赤いのは見える。可愛いな、こいつは。良い意味で慣れないやつだ。本当。

「・・・鬼神とかないわ。お前は、絶対、小悪魔だと思う」

「それはそれで、微妙な気分になるな」

それからカズマと焚き火を眺めながらまつたりした。

途中から鎧を直して欲しいとダクネスがきたり、暇そうなめぐみんがやってきたりで二人きりにはなれなかったけど、それはそれで楽しい時間に思えた。

でも、出来たらだけど、今度は二人きりでこういう事が出来たらなと・・・薪の上で揺れる炎を眺めながら、少しだけ思った。

んで、その日の深夜。

明日に思いを馳せたり、夜の余韻に浸ったりしながら寝たというのに——ゾンビ襲撃で夜中に叩き起こされて戦いました。原因の水

色は後で絞めようと思う。
というか、ゾンビ討伐した後に締めた。
こう、きゅって。

水と温泉の都か．．．ほうほう。ヴェネ●ア的なあれ
ですわね？

「ああ．．．じやりっぱつ．．．じやりっぱが行ってしまいます．．．
じやりっぱ．．．」

悲しげな声をあげ馬車を見送るめぐみんを他所に、俺達は青の街並
みへと視線を向けた。

アクセルの街を出てから二日目の昼過ぎ。

走り鷹鳶を殲滅したり、ゾンビだの蹴散らしたり、水色の誤爆で
うっかりウイズを成仏させかけたり、ていうかウイズって人間じゃな
いの!?リツチー!?マジで!?あっ、でも前にそんな聞いた気がするか
も．．．?てか魔王軍幹部!?つてなったり．．．思ってたより慌ただ
しい旅路を経て、俺達は目的地である水と温泉の都ことアルカンレ
ティアへと辿り着いた。

流石に観光の名所となってるだけあって、その景色は中々目を見張
るものがあつた。

「ふあ．．．」

青を基調とした統一性のある美しい街並み。

街の至るところに通された水路は、太陽の光を反射して宝石のよう
に煌めいている。そしてそんな水路が張り巡らされた街は、まるで湖
畔に揺蕩う浮島のように、凄く綺麗で、凄く幻想的だった。

あまり美術的なセンスはないつもりだけど、流石にこれには熱い溜
息が溢れてしまう。

「来て良かった」

思わずそう溢すと、視界の端に映ったカズマが嬉しそうにニヨニヨ
した。素直に笑えば良いのに．．．まったく。まあ、そんな顔も好き
だったりするから、俺もどうしようもないんだけど。

「ああ．．．じやりっぱ、じやりっぱが．．．」

自分の甘っちょろさに呆れていると、めぐみんの悲しそうな声が聞
こえてきた。さつきから、何なんだろうか。じやりっぱ、じやりっぱ

と。じやりつぱって何？

俺が不思議に思っているとカズマも疑問に思ったのか「なんだよ。その”じやりつぱ”って？」と尋ねた。するとめぐみんより先に水色が何か思い付いたように手を打つ。

「あのドラゴンの子供の事？そういえば、お金持ってそうなお客さんの一人に、色々と助けてくれた大魔道師様に、名前を付けて欲しいって頼まれてたわね」

・・・よりにもよって、めぐみんに頼んだのか。

カズマも俺と似たような事を考えたのか、酷く可哀想なものを見る目で馬車の走り去った方向を見る。

「ドラゴンは一度名前を付けると、二度と他の名を呼んでも反応しなくなる」と聞いたのだが・・・」

未だに意識が戻らないウイズを背負ったダクネスがそつと爆弾を設置すると、カズマが重い溜息をついた。完全にやっちゃまったなあ顔だ。気持ち、分かる。

「お前、俺の愛刀におかしな名前付けるだけに飽きたらず、人様のペツトになんて事してんの？訴えられたら、どうすんの？馬鹿なの？ああ、ネーミングセンスはもう馬鹿だったな」

「なっ!?何ですか、失礼な！格好いい名前を付けてあげたじゃないですか！ちゅんちゅん丸の何処がおかしいと!?!」

「おかしいだろ。お前、ちゅんちゅん丸って。そもそも何処から出てきたんだよ？ある意味すげえよ。いい加減、お前ら紅魔族のネーミングセンスは変だって自覚しろよな」

そうカズマが言い切るとめぐみんが見るからに不機嫌そうに眉間にしわを寄せた。ネーミングセンスは皆無だけど、矢鱈と自信はあるから当然の流れか・・・。

というか、あの腰の刀ちゅんちゅん丸って言うのか。

何回聞いても教えてくれないから、どうしたのかと思っただけど・・・成る程なあ。

「ふん。カズマに名付けのセンスが無いのは分かりました。せつかくそんな格好良い名前を持つてるのに嘆かわしい。将来カズマに子供

が出来たなら、私が名前を付けてあげますよ」

そんなめぐみんの言葉に、カズマが諸にこつち見てきた。止めい。そんなに、熱い目で見えるな。ちよつと疼いちゃうから。やめ、止めろ、馬鹿野郎。

めぐみんとの会話戻れ、馬鹿。

じつと念を送れば、カズマははつとしてめぐみんに視線を戻して・・・何か気づいた。

「お前に名付けはさせないのは・・・まあ、確定事項なんだが・・・俺の名前がなんだって？カズマって紅魔族的にいけてる名前なのか？それ、凄く凹むんだけど」

「大丈夫だ、俺も格好良いと思うし」

「えっ、そう？マジ？・・・じゃ、良いや」

「それはどういう意味ですか!?!カナデは良くて、なんで私だと凹むのですか!?!カズマ!?!カナデもなんか言ってお下さい・・・あれ、カナデ？カナデ聞いてます？カナデ!?!」

涙目で訴えかけられたけど、下手に助けて将来子供に変な名前を付けられても困るので目を逸らしておく。

すまん、めぐみん。それ以外なら、味方になってあげるからさ。うん。

それから少し、荒れ狂うめぐみんを宥めた後。

早速宿屋へと向かおうとしたのだが・・・ここにきて水色が恐ろしい言葉を口にした。

「そうよ。このアルカンレティアこそ、水の女神を御神体と崇め奉る、我がアクシズ教団の総本山なのよ!どう、凄いでしよう!」

綺麗な街は見掛けだけの人外魔境だったようだ。

人も見掛けで判断してはいけないと言うけど、どうやら街もそうらしい。知らずの内に、下手な悪魔信仰者よりよっぽどによっぽどな連中の巣窟に迷い込んでるとか・・・どんな悪夢？手が鉤爪のおじさんとかいる？

「ようこそいらっしやいましたアルカンレティアへ！観光ですか？入信ですか？冒険ですか？洗礼ですか？ああ、仕事を探しにきたならぜひアクシズ教団へ！今なら他の街でアクシズ教の素晴らしさを説くだけでお金がもらえる仕事があります。その仕事に就きますと、もれなくつ、なんとつ、アクシズ教徒を名乗れる特典が付いてくる！さあ、どうぞー！」

「……結構です」

「そう言わずに！お話だけでもお！今ならこちらのアクシズ教団のシンボルマーク入りの石鹸もついてきますよ！百パーセント自然由来の成分で作られた肌に優しく、なんなら食べられる大変ご利益のある石鹸で、一擦りで汚れが落ち、二擦りで罪が洗い流され、三擦りで宝くじが当たったり当たらなかつたりするとかなんとか」

「本気でいらない」

水色の言葉が切っ掛けになったかは分からないが、それから宿に着くまでの道中、悪質なアクシズ教徒に勧誘されまくった。通りを一つ越える度に勧誘されたのだから、もう狂気としか言いようがない。見たたよな？断ったの？頭おかしいのん？ってなった。……アクセルの街にもこういう手合はいたが、あいつらはまだ話が分かる連中だった。それに比べてここの連中は精練され過ぎてて……もうあれだ、端的にいつて怖い。昔から苦手だけど、ここのは特にヤバイ。怖い。

ただ――。

「なんて美しく輝かしい水色の髪！地毛ですか？羨ましいです！その、アクア様みたいな羽衣もお似合いで！」

「ふふふつ、この髪の美しさをよく分かっているじゃない！やっぱり、我が可愛い信者達はやれば出来る子ばかりね！」

「当然です、同士！我がアクシズ教徒に出来ない子などいません！歓迎いたします、アークプリースト様！」

「ほほほほー！」

水色はアクシズ教のアークプリーストとしてチャホヤされて喜んでいるみたいだったけど。

旅行が終わったらそのままあいつは置いていった方が幸せなので

は？とカズマに相談すると「あいつを一人にして大丈夫だと、本気で言ってるのか？」と言われてしまえば「頑張ろうな」としか返せなかった。

もともとカズマの特典扱いだし、それなら持ち主が最後まで責任持たないとももんな。世間様に迷惑は掛けられない。

「・・・今度首輪でも買っとくか？リードと合わせて」

そうぼやくと皆に微妙な目で見られた。

何故に。

「カナデは時々、私より過激ですね」

「過激な自覚はあったんだな、めぐみん」

「寧ろ、そっちに驚きだな」

「カズマ、ダクネス。爆裂魔法の的にされたいなら、素直にそう言っして下さい。喜んでぶちこんでやりますよ」

悪質なアクシズ教徒から逃げるように早足で駆け抜ける事少し。予約していた温泉宿へと着いた。

カズマが予約したそこは街で最も大きい温泉宿と言われるだけあって、それまで通りで眺めてきたどんな宿より大きく立派で、貴族御用達といってもおかしくない高級溢れる西洋風の建物だった。

そしてあまりの立派さに、正直腰が引けた。

主に料金の事が心配で。

ダクネス家が料金を持ってくると聞いていたが、それでも心配になってカズマを見れば、苦笑いと共に宿泊券と書かれた紙を見せてくる。

「なんだ、それ？」

「いや実はな・・・」

不思議に思っただけ、今回旅路を共にした商隊の人が偶然にも予約した宿の経営もしてたらしく、お世話になったお礼にと3日分の宿泊券をくれたらしい。どうやらあの商人の人に随分と気に入られたようだ。

尤も、感謝してるのは嘘ではなさそうだけど、モンスター討伐の手際の良さに加えて、めぐみんや水色が人外魔法とか見せちゃったから

なあ。顔を繋ぐ意味も含めて下心半分で渡した物でもあるんだろうけど。行商人なんかは何かと冒険者と絡むからなあ。

マツチポンプ感を気にしてるカズマにその事を教えてやれば、最初は怪訝そうな顔をしてたけど直ぐに理解してホッとした様子で胸を撫で下ろした。訴えられないかどうかと、ヒヤヒヤしてたそうさ。

「いらっしやいませ！旦那様からお話は伺っております！どうか、ごゆるりとおくつろぎください！」

「いらっしやいませ!!」

入り口の所にいた従業員に宿泊券を見せると、直ぐ支配人らしき人と何人もの従業員が現れた。どう伝わってるのか分からないけど、思ったより掛けられた期待値が大きいのかも知れない。

ウイズと荷物を予約していた部屋に置くと、夕飯までの空いてる時間は解散となった。俺としては温泉入って部屋でのんびりしようと思ってたのだが――

「カナデ、ちよつと付き合ってくれよ」

――カズマが外出を誘ってきた。

いつもなら二つ返事で行っているかも知れないが、外には話の通じない狂信者達が当たり前のように闊歩してる。ぶっちゃけ領き難い、というか普通に行きたくない。デートとか期待してたけど、ここではやだ。

俺は飲んでいた紅茶をテーブルに置き、優しい声を心がけて諭すように伝えてやった。

「俺の事は気にしないでめぐみん達と行ってこいよ。俺は、ほら、ウイズの様子見とくからさ。観光は、ほら、まあ、明日とかにするよ」

笑顔と共にそう伝えると、カズマは俺の隣の席に腰掛けた。その子犬のような瞳に諦めの兆しはなし。

さてどうやって断ろうかと考えてると、太ももにカズマの手が置かれた。相変わらず温い。

「あいつらはアクアと行くらしいからさ。というか、さつきもう出掛けてった」

「ええええええ……追い掛ければ良いじゃん。俺は温泉入るからパス」

放って置いたカズマの指が、俺の太もをいやらしく擦ってくる。ちよつとこそばゆい。

「お前、割りと本気で行きたくないのな。まあ、気持ちは分からんではないんだけど・・・」

「わつ、分かっているなら諦める・・・んつ、こらつ」

太ももを擦るのに飽きたらず、今度は首筋にキスしてきた。

唇が触れた場所が熱い。

「何かあっても、俺が何とかするから。なつ、一緒に出掛けようぜ？最近は、ほら、な？」

「んーつ、でも、なあつ、ひやつ！・・・あれと関わるの・・・ふあつ！いい、嫌だかりやつ!?おつ、おい、お前つ、気絶してるけど、そこにウイズがいるんだからにやつ！」

話してる間もカズマは少しづつ場所を変えながらキスしてきた。一つ唇が触れる度、体が勝手に反応してしまう。胸のドキドキが止まらなくて、首筋からゾクゾクしてきて、お腹がポワツとしてきて、頭がポーツとしてしまった。――それだけでも馬鹿になつてるのに、耳たぶまでねつとりしやぶられて、もう考えがまとまらない。

「カナデ」

「ふえつ、あつ、ん」

呼ばれて顔を向けたら唇を食まれた。

エツチな音を立てながら啜られ、舐められ。

優しく甘噛みされる。

カズマの熱の籠った瞳に唇ばかり映つてて。

何だかそれが酷く恥ずかしくて、でも何処か嬉しくて。

俺はそのままカズマに体を預けた。

暫く唇を味わった後。

カズマは俺の頬に手を当てながら見つめてきた。

何も言わずに、ただじつと。

「・・・続きしたいだろ？じゃ、流石にここだとあれだから、お出掛けしような？」

「・・・うん、いくう」

「そのチヨロさ、少し心配になるんだけど・・・いや、まっ良いか」
頑張って返事を返せば、カズマが頬を撫でてきた。
そして、また、熱いキスをしてくれる。

「……………ん、えへへ、かずまあ、しゆき」

「その顔止めてくれ、我慢出来なくなるから」

「ふぁーい」

「……………うーん、うーん、ベルディアさんが、ベルディアさんが……」

水の都でお出掛けらしいですけど、これってデートですか？あつ、やっぱり。えへへ。

カズマに連れ出されてから少し。

俺とカズマはアルカンレティアの市場を出歩いていた。

流石に観光地なだけあって人の賑わいは凄く、特別何か催し物をしている訳でもないのに人の往来が激しい。一応手を繋いでるけど、気を抜いてると直ぐにはぐれそう。

カズマの手をニギニギしながらぼやーつと市場を眺めると、ファンタジーの定番であるエルフっぽいのとドワーフっぽいの見掛けた。何が気に入らないのか、店員とおぼしき二人は商品片手に店先で口論してる様子。ゲームが趣味のカズマなら興味あるかと思つて教えてやれば、興奮した様子でそこへと視線を向ける。キラキラと子供みたいな目が眩しい。

「マジじゃねえーか!?・・・おお、耳ながつ、髭すごつ。エルフトドワーフってやっぱ実在したのかあ。はあーまじかー。ゲームとかだと相性悪かったりするけど、あれもマジかー。本当に仲悪いもんなんだな。すげえ、マジかー」

よっぽど嬉かったのか言葉が幼年期まで退化してる。どう見てもアホっぽい。マジ何回言うんだろうか。

いつものカズマならあの胡散臭い連中のちよつとした違和感にも気づいただろうけど、今はそのセンサーも碌に働いてないらしい。何気に勘がいいやつなだけだな。普段は。

「・・・話し掛けてみれば?」

「えっ、いや、でもな・・・いや、いい。あのファンタジー感を崩すのは気が引けるし」

「なんだそれ」

なんかカズマにはカズマの拘りがあるらしい。

無理強いするつもりはないし嫌なら別に構わないけど、その割に中々立ち去ろうとしないのはどうなんだろうか。なんだよ、めっちゃ話

し掛けたいんじゃないか。なに？ツンデレ？そのツンデレは別に可愛くないぞ。

「あの、すみません。ちょっと良いですか？」

「はうつ?!カナデさん?!」

取り敢えずカズマをスルーして声を掛けてみた。

すると思いの他二人はにこやかに「いらっしやい」と反応を返してくれる。喧嘩していたのが嘘のように、それはそれはニツコリと。胡散臭い胡散臭いとは思ってたけど、もしかしたらあの喧嘩はカズマみたいな人向けのパフォーマンスだったのかも知れない。

少年のような目をしたカズマと観光名所のことやらなにやらを聞いてみれば、思い出したように喧嘩しながら色々教えて貰えた。どうやら観光客に人気の水路を利用したゴンドラがあるらしい。最近お湯の不具合で駄目になった混浴の話も聞いたけど・・・まあ、それは興味ないしな。えっ?うちの宿にもあるの?混浴?ふうん・・・後で。

暫く話してるとこっちの懐事情を察したのか、元々持っていた饅頭を置いて工芸品をその手にした。目にはそれまで浮かべていた生温い雰囲気はなく、完全に商売モードである。

「お土産は是非うちのものを!ドワーフみたいな汗っ臭い下品な連中が作った、脂汗が染み込んだくっさい金属細工より、うちの衆が作った木工細工なんてオススメだよ!彼女さんの綺麗な髪に、こちらの櫛なんて如何かな?おっと、色が気に入らなければ相談して下さい。各種揃えてますので」

「なんだと、この耳長野郎!!てめえらの作った貧弱な木工細工なんざ見た目だけのガラクタだろうが!!お客人!お土産を買うならうち金属細工にしときな!ほれ、このネックレスを見てくんなあ!どうでい、この艶!この輝き!この細かな彫刻!綺麗だろう!?!その上頗る頑丈ときてる!そう!派手な塗装なんざいらねえやな。このシンブルな金属の色味こそ堪らんのよ!」

「いやいや、金属なんて今時普通過ぎて流行りませんよ。こちら我が故郷から取り寄せた樹齢百年の木を、名工が丹精込めて作ったもので

して――」

「良く言うわ、量産品だしおつて！それよりこちらをつ！どうですこの花の彫り物。綺麗に彫れてるでしょう？こいつを作った従兄弟はまだ若造で、名前もまだ売れてやしません、半端もんだけは作らん奴なんですよ。品質だけは保証しますぜ。少量のアダマンタイトとプラチナ、それと――」

「アダマンタイトといっても、アダマンマイマイからとった混ぜりものではなかったかな？違ったかな？あれれ、品質保証とは？」

「なっ、なんだと!?アダマンマイマイから取ろうと、アダマンタイトはアダマンタイトでえい！ちゃんと分けりや問題ねえ!!それを、てめえこの野郎！人の足引つ張るんじゃねえや!!」

「先にやったのは貴方でしよう!?前々から思っていましたけど、貴方は肝心な所で直ぐ・・・!!」

欲に目が眩んだのか、割りと本気で喧嘩し始めてしまった。エルフもドワーフも、そこら辺はあんまり人と変わらないだろう。

殴りあいの喧嘩が始まりそうになつた辺りで、何やかんやお人好しのカズマが仲裁に入つていった。お土産を買う羽目になつたのは言うまでもない。

アクシズ教徒の勧誘包囲網を回避しながら市場を抜けて少し。教えて貰ったゴンドラに乗り込んだ俺達は、アルカンレティアの水路にて流れに揺らされていた。

「目線が違つと、やっぱり景色も変わるもんだな」

買つて貰つたネックレスを指で弄つてると、隣にいたカズマが辺りを見渡しながらそう呟いた。

雰囲気は釣られて眺めて見れば、水路を囲むように並ぶレンガの建物と、太陽の光を反射してキラキラと光る水面が目映る。耳を澄ませばチャプチャプと揺れる水の音や何処か遠い街の喧騒が聞こえてきた。

それらはなんだか心地よくて、アクシズ教徒絡みでささくれだった

心を癒してくれる。

「そうだなあ」

そう言つてカズマの肩に頭を乗せれば、労るように頭を撫でてきた。気持ちよくて細めているとカズマの顔が近づいてきて、頭にキスを落としてくる。

なんだかくすぐつたい。

「——カナデ」

「ん？どしたあ？」

「・・・いや、何でもない」

放つておくとカズマは髪に顔を埋めてきた。

犬みたいに鼻息がスンスン煩い——というか、こいつ普通に臭い嗅いでる？旅の最中だったから仕方ないとはいえ、俺の頭つて今はアレだと思っただけだ。

「・・・汗臭くないか？」

「まあ、ちよつとムアつてする」

「だらうな。体は一応拭いたけど、頭は寝癖直したくらしか弄つてないもん。臭いフェチだったっけ？」

「いや？別に・・・」

そう言つてカズマは髪を手を撫でながらクンクンを続けてくる。俺もカズマの臭い嗅ぐし、嗅がれるのも嫌でもないから好きにさせていたんだけど・・・それにしても嗅ぐ時間が長過ぎた。だって景色も見ないで、ずっと俺の髪に顔を埋めているのだ。船頭さんの案内もどこ吹く風とずっとクンクンしてるのだ。

船頭さんの呆れた視線に晒されながら、熱のこもった吐息の感触や荒い呼吸音を聞いてると、なんかすごく無性に恥ずかしくなってくる。

「かつ、カズマ、その辺りで良いだろ？」

「んー、もう少しだけ」

「何だよ、何がもう少しなんだよ」

「いやあ、なんか、こう、汗臭いのは汗臭いんだけど、このムアつてのが癖になるというか、いやでも、これはこれで、まあ、良いというか・・・」

臭いフエチでも良いかなあって、うん」

フエチに目覚めてるじゃねえか、この変態野郎。

放っておくといつまでもやりそうなので、仕方なしに力で剥がしておいた。カズマが名残惜しそうにみるけど、無視だ。無視。駄目だ、こら。はあ？お風呂入らない日を作らないか？作るかボケ。可能な限り、旅先だろうと洗いまくってやるわ。

「あーらあらーそのー！そのお髭が素敵なその貴方！またお会いするなんて奇遇ねえ！どうだったかしら、この間の石鹸は？素敵な石鹸だったでしょう？それも当然！同士が丹精こめて、司祭様が祝福を授けてくだり、アクア様のご加護が宿ってるような宿ってないようなアクシズ教謹製の石鹸ですもの！今入信すれば今度はこの洗剤もついてくるわ！勿論石鹸と同じで自然由来百パーセント！」

「やめろおっ！いらんと言ってるだ——押し付けてくるなあ！！ポケットに突っ込むんじゃない！！なんなんだ、お前らのその洗剤への執着は！！」

カズマと肩を寄せあいながら揺られていると、通りの方からアクシズ教徒とおぼしき元気な声と被害者の悲鳴が響いてきた。水路は平和だけど、地上は相変わらずのようだ。

「酷いもんだ」

「本当だな。アクセルの街にもいるにはいたが、ここまでじゃなかったもんな」

カズマのぼやきに返事を返していると、船頭さんが苦笑いを浮かべた。

「すいやせんね、せつかくの所に水差しちまって。あいつらも以前はあそこまで酷くなかったんですがねえ」

「そうなんですか？」

「へい、奥様。アクア様の教えを広める為ですから、そりやあ勧誘自体は以前からありやした。ですが、最近若者連中を中心に妙なもんが流行っちまいましたねえ・・・」

聞けば最近の勧誘は以前よりしつこく、演技じみた——というより詐欺同然の悪質な勧誘が主流になってるらしい。ここに来る途中

何度もカズマが追い払った、胡散臭い小芝居のことだろう。何でも旅の魔法使いから教団のお偉いさんにアドバイスがあつたとか何とか。因みに船頭のおじさんもアクシズ教徒ではあるけど、商売優先で仕事中は勧誘しない主義だそうだ。

「特に影響された次期最高司祭のゼスタ様が中々の問題児でねえ。アークプリーストですので腕っぷしだけは良いんですが、それ以外は本当にもう。昔っから女風呂覗くわ、美人なエリス教徒を狙ってセクハラしにいくわ、何かと碌なことしやがらねえんですよ。ゼスタのボンも歳を喰えばちつとは大人しくなるかと思っただんですがねえ……いやはや、勇者様のお言葉通り『三つ子の魂百までノーチェンジ』なんですかね」

「どこの勇者だ。馬鹿な言葉残したのは」

『勇者』がというか、『転生者』は本当碌なやついな。送り出していたのがあの水色だと思うと、当然といえば当然だと思うけども。聞けばデストロイヤーも転生者が作つたらしいし……もうさ、魔王とかも実は転生者だったりしない？このノリでいくとき。

それから喧騒を耳にしながら、慣れた様子であれこれと説明してくれる船頭さんの声を聞きつつ、カズマとアルカンレティアを色々見て回っていく。観光地として有名なだけあって、水路から見える歴史の重みが漂う景色は中々に見物だった。途中、ゴンドラの利用客に向けた水上屋台に寄つたり、船頭さんのオススメの店でカフェでお茶したり……なんかアクシズ教徒が多数生息してる割には、平和に普通なデートをしてしまった。ある程度覚悟したので拍子抜けだ。

不思議に思つて聞いてみると、ゴンドラの利用客はお金持ちや貴族が多いから——だそうだ。凄い現金な理由だけど納得はした。上手くやればアホみたいに稼がせてくれる相手だけど、それ以上に下手な対応が出来ない相手ばかり。必然的にそれが出来る店が残るのは当然だろう。

そうして観光する事暫く。

街の入り口からでも見えた湖についた。

湖のあちこちに湯気が昇っている所をみると、水脈は目に見える川

だけではないのだろう。ちょっと手を伸ばして水面に触れてみれば、まだ冬だつていうのに少しだけ温かった。身を乗り出して覗いてみれば、元氣よく魚が泳いでる姿が見えた。水温が高いお陰か冬だといふのに生き生きしているようだ。あつ、バナナも泳いでる。何度見ても慣れない光景だなあ。

「奥様。あんまり身を乗り出すと危ないですよ。ここいら温泉が湧き出している所があるんですが、稀に強く噴出したりして——」

フラグみたいな言葉を聞いた直後、それに応えるようにゴンドラが大きく揺れた。

端に寄り掛かったせいもあつて体勢が崩れる。

バランス感覚には自信があつたけど、体が半分ゴンドラの外に出てしまつてる。戻れそうにない。

だから諦めて身を任せたのだけど——急に腕が力強く引き寄せられて、気がついたらカズマに抱き締められていた。見掛けに寄らず男らしいガツシリとした腕と胸板にぎゅつとされる。

「——つぶね、大丈夫か？」

心配そうなカズマの顔が覗いてくる。

厭らしさの見えない真つ直ぐな瞳に胸が高鳴った。

鼓動を重ねる度、顔が体が一気に熱くなつてく。

ポワポワした気持ちの頭の中を埋めて——。

「……だい、大丈夫か？聞いてる？カナデさん？」

「きいてる……」

「聞いてないやつだ、これ」

困つたような顔のカズマは船頭さんへと視線を向けた。揺れた理由を聞いているみたいだけど、俺はもうそんなことどうでも良くて、そのまま胸板に頬を擦り付けた。

理由は分からないけど、何となく、そうしたかったのだ。

「旦那様、良い休憩所知ってますけど……」

「変な気を使わないでくれます!?!」

それから夕日が湖に差し込み始める頃までのんびり遊覧し、その景色を眺めながら一回だけ唇を交わした。
少しだけ長いそれを、一回だけ。

癒されにきたのだから、当然温泉に入りますとも。いや、取り敢えず女仲間とですけど？

「ふふっ！この街はとっても素敵ね！カズマ、カナデ！お金も一杯ある事だし、別荘の一つも買ってたまに皆できましようよ！そうよ、それが良いわ！ね！」

カズマとデートをしたその日の夜。

夕食時、街を散策しにいった水色はそれはそれは楽しそうに、カエルの唐揚げを頬張りながらそう言ってきた。よっぽど楽しかったのかギルドで飲み会してる時みたいにニッコニコ。隣に座るダクネスも賛成なのか、恍惚の表情を浮かべてウンウンと頷いているが……めぐみんが死んだ魚の目で虚ろにステーキとサラダを頬張っているのが凄気になる。何があったのかは察せる。

反対に一人温泉に入ってたのんびりしていたウイズはホクホク顔だ。温泉が随分と気に入ったようで、この後も入るらしいけど。

「ああ、本当にここは良いところだった。アクシズ教団の総本山がだけあって、皆熱心なアクシズ教信者でな……エリス様のペンダントを見せると、それはそれは辛辣になじってくるのだ。あの態度……思い出すだけでも……くう！」

「いや、お前は何を楽しんでんだよ。それは楽しむ所じゃ絶対にならないからな？」

「そうはいつでもな……あのごみを見るような目、堪らん！」
「お前らと行かなくて本当良かったわ……」

ダクネスの話の聞いて、カズマが心底呆れたように溜息をつきドリックを呷った。そんなカズマの横顔をポケットと眺めていたら目があつて無様なウインクを見せてきた。言いたい事は分かるのでウインクを仕返したら、顔を赤くしてそっぽを向いてくる。自分でやっておいて恥ずかしがるなよ、まったく。

まあ、そういう所も可愛いんだけども。

真つ赤になったカズマの耳を眺めると、視界の端にウイズに耳打

ちしてる水色の姿が目にはいった。何か余計な事を吹き込んでるな。
「——えっ、カズマさん本当に別荘をかうんですか!?!でしたら、ぜひ温泉つきの一戸建てを買った方が良いでしょう!私聞いたんですけど、そういう物件を取り扱ってる不動産屋さんがあるみたいなんです。お値段は結構するみたいですけど……でもカズマさんなら大丈夫ですよ!宣伝用に冒険者の方にお渡ししたライターの評判は上々ですし!見せて頂いた発表前の商品も凄そうですし!温泉のある別荘!素敵ですね!購入したら遊びにいかせて下さい!楽しみにしてます!」

「えっ、い、いや、買わない買わな……い。いや、もしかしたらあ、買うかも知れないけどお……」

確認をとるようにカズマが見てきたので、俺の気持ちを込めてニツコリ笑っておいた。するとブルリと体を震わせて「買わないかな」と神妙な顔でウイズに伝える。

分かれば宜しい。本当に儲かって儲かって、余裕一杯が出来たら検討くらいはしてやる。検討くらいは、な。

……それにしても、めぐみん大丈夫か?

さつきから暗い顔で黙々とご飯食べてるんだけど。

全然こっちの会話に反応しないんだけど。

「めぐみーん?大丈夫か?」

「えっ、は、はい。カナデ、何ですか?」

本当に聞いてなかったのか、めぐみんが慌てた様子でこっちを見た。正面から改めて見ると、本当に疲れてた顔してる。

「元氣ないな、そんなに大変だったか。お守り」

「お守り……は、そこまでは。ただ、己の仕出かした事の大きさに、どうして良いか分から……あっ、いえ、何でもありません。勧誘が酷くて……いえ、元はといえば、それも私が……あっ、いえ何でもありません」

「良く分からないけど、今夜は美味しい物食べて風呂入ってゆっくり休め。ほら、デザートあげるから」

「……ありがとうございます」

しょんぼりするめぐみんに取り敢えず手元のデザートを渡した所で明日の話になった。水色は今日訪問した教会でチャホヤされた事に味をしめたらしく、明日もアクシズ教のプリーストとして大手をふって街を練り歩くそう。ダクネスもそれに着いていくらしい。カズマから「そんなに虐められたいのか、この変態クルセイダーが」と罵倒を貰って「違う！」と頑なに言い張っていたが、頬を朱に染め口元をニヤケさせる表情に説得力はなかったとだけはいつておく。

ウイズは引き続き温泉に入りたかったみたいだけど、めぐみんに誘われて爆裂魔法撃ちに行くらしい。心配なのでついて行こうかと言っただけ、「そこまで野暮でもありませんので」と断られた。……野暮？

「——そう言えば話は戻るけど、カズマとカナデもあの後出掛けたんでしょ？何処に行ったの？どうせ出掛けるなら一緒に行けば良かったのに」

不意に掛けられた水色の声に心臓が跳ねあがった。

カズマも俺と似たような気持ちなのか、飲み物を変な気管に詰まらせて咳き込んでる。俺も食べたり飲んでたりしたらあんな事だろう。笑えない。

「ねえねえ、何処に行ったの？私達は教会に行く前に、大通りの屋台とか有名な建物とかフラフラ見て回ったけど、二人とは会わなかったでしょ？二人は何処を見てきたの？何か面白いものあった？あんなに遅かったんだもの、きつと何か見つけたのよね？ねえ、意地悪しないで教えなさいよ」

グイグイと迫られるカズマが分かりやすく助けを求める顔をした。こんな時こそお前の良く回る舌を使えと言いたいけど……まあ、仕方ないか。いきなり詰め寄られてパニックなんだろうし。

「——俺達は」

「それよりもアクア。この後アクシズ教団御用達の秘湯に行くんだっただよな？折角の機会だ、私もついて行って良いだろうか？エリス教徒の私では普段は縁が無さそうな場所だしな」

そう言っただクネスが話に割り込んできた。

きよとんとしてると、意味深なわざとらしい笑みを向けられる。

「ん？ダクネスも秘湯に入りたいの？本当は敬虔なアクシズ教徒しか入れちゃいけないけれど・・・まあ、仕方ないわね。良いわよ。特別に私が口を聞いてあげるわ」

「秘湯ですか!?で、でしたら、アクア様、私も一緒に・・・」

「アンデットは駄目よ。可愛い信者達の憩いのお風呂場が穢れるじやない。こっちこないで」

「そ、そんなあ、あの、そこを何とか」

「ちよ、すがらないでっ！いやよ！アンデットなんて入れてなるもんですか！お湯がアンデット臭くなっちゃうでしょ！もうっ、ダクネスも見てないで何とか言って！」

放っておくとウイズも話に交ざってきてすっかり温泉の話になってしまった。わいのわいのと喧しい。話が逸れたみたいで、こっちとしては助かったけれど・・・あの笑みはなんだったのか？まさかカズマとの事がバレてる？とも思ったけど、あの鈍きこと脳筋が如しな変態にバレる訳もないと思うので、よっぽど秘湯に興味があつたんだろう。結局心臓をどきりとさせた話そのまま蒸し返される事なく、賑やかな夕飯は暫くして終わりを迎えた。

夕飯後、結局熱意に負けた水色はウイズも連れて三人で秘湯へと出掛けていった。「アンデット嫌いの水色が丸くなったなあ」と水色達の近くで話を聞いていたカズマに漏らせば「対価に馬鹿高い酒を要求してたぞ」と教えてくれた。やっぱり水色は水色だった。

しかし、貧乏店主の何処にそんな金があるのか・・・謎だ。

「はあああー」

それで出掛けた連中を見送った俺達とは言えば、仲良く宿の露天風呂だ。混浴があつたからそっちに皆で入ろうとしたけど、他のお客もいるようなので大人しく女風呂にきてる。妄りに肌を晒すつもりはないからな。カズマは・・・どうせ混浴だろ。だってカズマだしな。

夜空を眺めながら暖まっていると、少し離れた所でちよむすけを洗おうと奮闘していためぐみんが漸く湯船に入ってきた。奮闘の結果がどうなったのかは分からないけど、風呂桶の中でぐったりしてるちよむすけの様子を見れば熱い戦いだったことは察した。

湯船にちよむすけ入りの桶を浮かべたためめぐみんは浴槽をまじまじと眺めた後、ジャブジャブと音を立てながらこちらに泳いで来る。

「カナデ、カナデ。折角貸し切り状態ですし、ちよつと競争しませんか？」

ビシツと湯船の端を指差すワクワク顔のめぐみんに、俺は右手を左手に添えてビシユツと水鉄砲を放つ。突然の不意打ちにめぐみんの口から可愛い悲鳴があがった。ついでに桶の上で湯船に揺られていたちよむすけからも甲高い悲鳴があがった。ちよつと掛かったようだ。

「なっ、何をするのですか、いきなりっ！ちよむすけも私もびっくりですよーもうー！」

「ははは、ごめんごめん。でもなお風呂で泳いだら駄目だぞ。マナー違反だからな」

「それはそうですね。．．．こんなに広いお風呂で二人と一匹っきりの貸切状態。湯船はうんと広くて、開放的で．．．ほら、ウズウズしませんか？」

そう言われてしまえばウズウズしないとは言えない。

大きなお風呂ってそういう魔力があるものだし、何より”駄目と言われれば尚更”という所もある。

目をキラキラさせるめぐみんに「少しだけな？」と言えば、嬉しそうな笑顔が返ってきた。なんかフリフリっなわんこの尻尾も見える気がする。

そうしてちよむすけの鳴き声を合図に始まった水泳競争だが．．．あっさり俺の勝ちで終わった。距離が短い為、本当に一瞬で終わった。口ほどにも無かった。鼻で笑ってやったらむきになって再戦を申し込んできたので勿論受けてやる。ただし一度きりという条件つきでだ。

お客さんがこないか確認してから始まった二度目の競争の結果は——言うまでもなく俺の勝ち。僅差ではあるけど、やっぱり俺の勝ちである。大人げないと言うことなかれ。競争は真面目にやっこそだ。それに負けること自体悪い事じゃないしね。時に敗北は勝利以上に学ぶことがあるものだ。うんうん。

競争を終えるためぐみんは疲れたおっさんみたいな声をあげながら、湯船の囲いの岩へへたり込んだ。ぐでーっとする姿はなんか虎の敷物みたい。

「レベル差も開いてきましたし、そろそろ勝てるのではないかと思っただけですが……やはり魔法使いと戦士では基本的な筋力に差がありますね」

「戦士といっても、ジョブでいえば冒険者だけだな」

「だからこそ勝てると思っ……はあ、カズマになら勝てる気がするのですが」

ガタツと、混浴のある柵の向こうから物音がした。

「それはそうと、カナデまた大きくなりました？」

そう言ったためぐみんの視線は胸に釘付けになってる。

その眼差しの中に少し憎しみが籠ってる気がするの、きつと気のせいではないのだろう。昔幼馴染が似たような目で胸の大きい女子を睨んでいた事があつたし、なんかそういう、女子にしか分からない何かがあるんだろう。いや、知らないけど。いっても俺は女子歴一年未満だからなあ。

「少しだけなあ」

「少しだけ……むう、私も成長期の筈なのですけど」

ペタペタと触るそれは僅かな膨らみ。

ないのと一緒に言っていた、中三の春に見たあの悲しき横顔を思い出す。まあ、そんな顔したあいつはその後、急激にでかくなつたんだけど。協力しといてあれだけど、まさか本当に効果があるとは思わなかつ……た——あつ。

「……えつと、揉んでみるか？」

「はい、揉んでみて貰って……ふえつ!?も、揉んでつ、ひえつ!?カ

ナデ、何を言ってるのですか!？」

掌をグーパーしながら提案すれば、一気にめぐみんと距離が開いた。物理的にでもあるし、多分精神的にも。

「偶然だとは思うけどな? 昔の知り合いに揉んで貰って大きくなったやつがいたからさ。どうかなくて」

「ええ...それはよく聞きますけど、ただの迷信ではないんですか?」
「どうだろうなあ...そいつは母親も割りと大きい方だったからなあ。そのまんま遺伝のような気がする」

「ほら、やっぱり。いい加減な事言わないで下さいよ、まったく...: んん?」

呆れたように笑っためぐみんだったけど、何やら急に思案顔になった。

「...一つ聞いても良いですか? カナデのそれが大きくなったのって、具体的にいつ頃から?」

「んん? いつ頃とか言われてもなあ... 気がついたらそうだったとしか。この間、ほら魔王軍幹部がまた来た時あったろ? あの時久しぶりにウエイトレスの制服きたらきついかかな? ってなってな」

それを聞くとめぐみんは胸を張った。

そして腰に両手を当て、キリッとした男前な顔つきで口を開く。

「さあ、カナデ、ばーんと来て下さい!!」

やだ、カツコいい。

竹を割ったようになってこんな感じだろうか。

めぐみんは気持ちのいい子だな、本当に。

「保証はしないぞ?」

「いえ、ある意味で保証があるみたいなので」

「ん? そうか? まあ、良いけど。それじゃ軽く揉んでみるか... とその前に。カズマ、そこにいるなら今すぐ離れろ」

出来るだけ低い声でそういうと、バツシャアーンと激しく水に飛び込む音が聞こえてきた。めぐみんが顔を真っ赤にしながらアワアワしてる。この様子だとすっかりカズマのこと忘れてたみたいだ。

石鹸と桶とちよむすけの雨を降らせた後、少しだけめぐみんの胸を

揉んでやった。めぐみんは終始擦ったそうに身を振りながら頑張つて揉まれていたけど、果たして効果はあるのだろうか。まったくの謎である。

ご利益があるようにと、おっぱい揉まれて拝まれた身としては効果があつて欲しいけれど。

取り敢えずエリス様に、めぐみんの胸が大きくなるように祈つておいた。

えっ、身近に女神がいるのにな？あの女神はご利益どころか、膨らんだ乳房をイリユージョンで消し兼ねないからなあ。

☆温泉でだってイチヤイチャしても良いじゃない。
色々配慮はしますし？

「時折、お前の行動力には呆れる時がある」

歓楽街から響く楽しい声を聞きながらガランとした露天風呂を眺めつつそう溢すと、隣にいたカズマが「カナデには負けるわ」と呆れたように笑った。どういう意味で言ったのか知らないが、それなりに高級宿の温泉を一晚だけとはいえ貸し切った奴に言われたくないんだけども。

頬を膨らませて抗議すれば、カズマが頬をふにふにと触ってきた。気持ち良くて目を細め身を任せていたら、不意におでこへ唇を落とされる。

「……お前どんどん可愛くなるな」

「そうか？」

小首を傾げて尋ねれば今度は唇を重ねられた。

軽く吸い付くような感触と、ちゅつとエツちな音が聞こえる。離れる感触に目を開けると、カズマの何処か不安な目と視線が交差する。

「どうかしたか？」

「……いや、今更だけど、あの、俺で良いのか？なんて言うか、釣り合っていない気がしないでもないというか」

「なんだそれ、本当に今更だなあ」

「いや、だってな……っ！」

今度はこつちから唇を重ねてやる。

軽く触れるだけの子供みたいなキスだけど、カズマの目はちゃんと俺をみた。カズマの黒い真珠みたいな瞳に、頬が緩んだ俺の顔が映っている。自分の顔ながら、なんともしまりのない顔。ちよつと照れ臭い。

「ふふっ。好き、って言っても分からないだろ？分かるまでしてやる。何回して欲し——っっん」

回数を聞く前に、また唇が重ねられた。

貪るみたいに荒々しく。
何度も。

めぐみんがベッドに沈んでから少し、水色達の帰りを待つて観光案内に目を通していたらカズマが部屋にやってきた。一人寝が寂しいのか？とからかうと、「それもあるけどな・・・」と前置きしてから「混浴に行こう」と誘われた。確かに約束はしたけど、知らない奴に裸を見せるかも知れないのは普通に嫌。だから断わろうとしたんだけど・・・なんでもこの時間から翌朝まで貸し切ってるんだとか。しかも貸し切りの料金はとづくに支払い済みで返金は出来ないらしい。

幾らかかったのかと正直問い詰めたくなかったけど、それもこれも俺に氣遣って用意してくれた事。あんまり文句を言ってやる気にもなれなくて・・・それでなんやかんやと、俺はカズマと一緒に露天風呂へとやってきた。クリアすべき問題が解決してるなら、俺が断る理由もないし。

「――カナデ、痒い所はないか」

いっぱいのキスを堪能してから暫く、今は湯船に入る為に体を洗いつつ中だ。慣れた手つきで髪の毛をワシヤワシヤしながら聞いくるカズマに、「後ろの方」と言えば後頭部をワシヤワシヤと洗ってくれる。痒い所をドンピシャにいかいてくれる。

「はあ、気持ちいいい。カズマ床屋とかやれば？」

「知らん野郎の頭なんか洗えっつてか」

「じゃ、女の子だけ洗えば？」

「そうか、確かに。一理ある・・・っていう訳ないだろ。ほら、目を瞑れ。流すぞー」

言われた通り目を瞑ればお湯が頭に掛けられた。

アワが流れる感触が肌を伝う。一度ではアワが落ち切らなかつたのか、二度三度とお湯が掛けながらカズマの手が髪を優しく撫でてい

く。壊れ物でも扱おうみたいに。それが何だかくすぐつたい。

「そんなに慎重にやらなくても大丈夫だぞ？俺なんて、普通にかあーってやつちゃうし」

「そういう所だけ男らしいな」

「そりや生まれてから死ぬまで、取り敢えず男だったし」

「すつかり女の子だけだな」

軽くツツコミながらカズマは髪をまた撫でていく。

すつかり肩に掛かりそうなまでに伸びた髪を。

本当に優しい手つきで。

「なあ、カズマはさ。長い髪と、短い髪どつちが良いと思う？」

「なんだよいきなり・・・」

「そろそろ伸びてきたから、どうしようかと思ってたんだよ。前髪は自分で切ってたけど、他は流石に自分じゃ出来ないからな」

そう言うときカズマは髪を撫でる手を止めた。

少しの間をおいて、またカズマの手が髪を撫で始める。

「こうしてられるなら、長い方が良いかもな」

「そつ、それじゃ取り敢えず伸ばしとくか」

「そうしとけ。今度髪飾り買ってやる」

「・・・ふへへ、ありがとなー」

髪を洗い終われば、カズマは背中を洗い始めた。

相変わらず自分の手で洗うのが好きみたいで、泡だらけになって両手で背中を「ごしごし」擦ってくる。

「っん、カズマっ、洗うだけだろ？」

「ん？洗ってるだけだぞ？」

そんな風にすつとぼけながら、カズマの手は背中を伝って胸に触れた。最初は一応洗っていたけど次第に手つきは厭らしくなって、完全に弄ぶようになった。揉んだり、押し上げたり、撫でたり。乳首の回りをなぞってみたり、立ち上がった乳首をつねってみたり。もう好き勝手だ。

声を我慢して耐えていると、カズマの手は胸を離れてお腹を撫で始める。なにかを探るような手に、最近カズマの口からよく聞く『孕ま

せてやる』という言葉が脳裏を過つて、お腹がきゅんきゅんと疼いてしまう。

カズマの指はお腹を伝い、濡れ始めたそこを撫でる。

膨らんだクリトリスや、愛液を溢すそこへは触れないようにしながら。もどかしくてカズマの手を掴んで、触って欲しい場所に持つていこうとしたら、軽く振り払われてしまう。

「洗ってるだけ、だからなあ」

そんな意地悪な声が耳に響いてきた。

もう俺の気持ちなんて分かっている癖に、カズマはとことんまで焦らすつもりなんだろう。こうなったらこつちも意地なので、耐える方向に気持ちをシフトさせとく。思い通りにさせてたまるものか、と。

けれど、その誓いも長く続かなかつた。

もう、ものの数分で限界ギリギリ。

我慢し過ぎて馬鹿になりそう。

カズマはすっかり俺の弱点を把握してららしく、的確に弱い所ばかり弄ってくるのだ。それも微妙な力加減で達さないようにしてる。ただ焦らして、焦らして、焦らしてくる。

熱くなりつつあるお腹に意識を向けてると、いつの間にかカズマの手がお尻を撫で回し始めていた。けれど次第にカズマの手はお尻を揉んだり、割れ目をなぞるようになって・・・ついには不意打ち気味に割れ目の奥へと潜り込んでくる。

「ちよっ、やだ、汚いからっ」

「まあまあ、一回温泉入ったしな。うん」

「まあまあじゃっ、ひゃう！」

カズマの指がお尻の穴を押しした。

焦らすように、入るか入らないかぐらいの力で。

ゾクゾクするような刺激が背筋を這い上がってくる。気持ちいいとはまだ言えないけど、最近カズマに教えられた刺激は体を火照させるには十分で頬が熱くなってしまう。

「入れるぞ」

「ツツツツん、んん！」

にゆるり、と指がお尻の穴に入っていた。

同時に異物が入り込む感触がイメージと共に頭に入ってくる。奥へと沈みこむ指がはつきり分かる。何処にあつて、何処へ行くのか。

「つつ、ひゃあんっ！」

不意に指が壁をなぞりながら引き抜かれた。

思わず甘い嬌声が口から溢れる。

それに味をしめたのか、指はまた穴に沈むこんできて、壁をなぞりながら外へと飛び出す。何回も繰り返されるそれに、背筋を昇る刺激にどうしても甘い声が漏れて、少しずつ音は厭らしさを増してく。

じゅっぽ、じゅっぽ。

そんな音が俺のお尻の穴から聞こえてくる。

馬鹿なあそこもじんわり濡れてきた。

襲ってくる刺激に座って居られなくて崩れるように四つん這いになると、指が引き抜かれたそこへ硬くて熱い物が押し当てられた。

「カナデ、入れるぞ」

「ふえっ、らっ、らめっ、ひゃう！んあ！」

一気に熱く滾るそれがお尻の奥へと差し込まれた。

突然全身を走った刺激に目がチカチカする。

呆けていると、差し込まれた異物がゆっくり引き抜かれていく。きゅつと締まった、お尻穴を一杯刺激しながら。

「ああああっ！やつめ、へ！やらっ、やら！くりゆ、しゅごいのつ、きちやうかりやつ——んんあああ！」

ズんっ、と。

また奥へと差し込まれる。

頭を駆け巡った快感に、声が出ない。

カズマはそんな俺のことはお構い無しに、またゆっくり腰を引いて——強く叩きつけた。お尻の肉がカズマの体にふれてパアンと音をあげる。

「んあ、かずっ、まっ！やつ、やん！」

「カナデっ……！カナデっ！」

何回もカズマのソレがお尻の穴に出し入れされる。

本当はえっちする場所じゃないのに。
汚い場所なのに。

「あんっ！あん！ふっ、にやっ！んん！んあ！」
それなのに一杯えっちな音がなってる。

駄目なのに、声が止まらない。

気持ち悪い筈なのに、体を駆け巡るビリビリしたそれは気持ち良くて堪らない。嫌な筈なのに、打ち付けられる度、走る刺激が嬉しくて、幸せで、蕩けそうになる。

「カナデっ、出すぞ！一番奥に出すからなっ！締め付けろ！」

そう言っただけカズマはそれまで以上に強く、腰を打ち付けてきた。深く突き刺さった瞬間、痺れるような刺激が体を駆け巡った直後、差し込まれたソレから灼熱が吐き出された。火傷しそうな程熱いそれが、お尻の奥で生き物みたいに跳ね回る。それは頭を真っ白にさせる程に刺激的で、俺は心地よさと共に床に身を預けた。

「……カナデさん？あの、大丈夫？」

心配するような声が聞こえる。

俺は頑張っただけの声の方へ視線を向けた。

文句を言っただけだ。

「ばあーか。らいじようふじや、にやいにつ、きまつへるだりよお。ありやう、ひやけっへ、ひつたのに」

「悪かったってば、あんまりにも可愛くて。つい」

「ばあか」

頬を膨らまして抗議すれば、カズマは俺を抱き起こして、そのまま抱き締めてくる。その抱擁は普段のひ弱さのイメージは何処へやらと言わんばかりに力強い。

「風呂、もう上がるか？」

優しい声に、俺は少しだけ考えて首を横に振った。

約束した訳ではないけど、一緒に入れるなら入りたかったのは俺も同じだから。

「すこし、このままで、いさせて。やすんで、らいじよーぶに、なったら、いっしょにはいる？おれも、かずまとはいりたい」

そう伝えるとカズマに唇を奪われた。
情熱的な、舌を絡め合うキス。

「やすみ、よこせ、あほおー」

そんな文句が口から出たのは、息が苦しく成る程口の中を蹂躪された後だった。

はい？これからまた温泉ですけど。良いでしょ、温泉きてるんだから。

お尻に違和感を感じる今日この頃。

朝から元気に出掛けていったカズマ達を見送った俺は、一人朝風呂を堪能していた。広い湯船に一人きり。今の家だとなんやかんやお湯の節約で皆で入るし、宿行くとカズマと二人で入っちゃうしで、のんびり入れないからたまには良いもんだ。

いや、カズマとワチャワチャしながら入るのは好きは好きだけどね？それとこれとは別というか……。

「はあー……」

朝から露天風呂は良い。本当に良い。

この青空を見ながらの、この解放感がたまらないよなあ。耳に響く温泉が湯船に流れ込む音、少しずつ活気ついてく街の喧騒、小鳥の囀る声。うん、いいね。

それにしても、カズマ達大丈夫だろうか。

任せろとは言ってくれたけども。

昨日俺とカズマが温泉で第2ラウンドに突入仕掛けた時、水色が号泣しながら帰ってきた。俺達が慌てて温泉を出て来てロビーで騒ぐ水色達に事情を聞きにいけば、何でも水色達が入りにいったアクシズ教団の秘湯が汚染されて、水色は良かれと思って温泉を浄化したらしんだけど……温泉の効能も何もかも浄化して真水に変えてしまつて、秘湯を管理してたアクシズ教団の人にメチャクチャ怒られた上に立ち入り禁止を言い渡されたのだとか。

『だって！あんなのに入ってたら、病気になっちゃう！私は悪くないのに！皆の為に浄化してあげたのに！！なんで怒られなきゃいけないの！あんまりよおお！』

『そうですね、アクア様。アクア様は悪くありません。悪くありませんから、分かりましたから……お願いですから私を抱き締めるのを少し止めて貰えませんか。涙が、アクア様の涙が、その、凄いピリピ

りして、あの聞いてますか？アクア様？あのー」

慰めるのは貧乏店主に任せてその日は寝た。

カズマが続きをやりたそうにこっちを見てたけど仕方ない。そこはしっかり諦めて貰う。そういう雰囲気でなくなってしまう。何より皆が帰ってきてしまったのだ。流星にバレてしまう。まあ、そろそろ皆には話しても良いと思うんだけど、どうもタイミミングがなあ……。

水色の泣き声響く夜も明けて翌日。

前日の秘湯の件が引つ掛かってるようで、水色はアルカンレティアの温泉調査を言い出した。本当になんらかの理由で汚染があるなら確かに放っておけない事ではあるけど、水色曰くアクシズ教団を恐れた魔王軍の工作らしいとの事でイマイチ胡散臭い。まあ、温泉の異常については街をぶらついてる時にも聞いたし、何かはあるのかも知れないけどな。

それでも話し合いの結果、調査だけはしようという事に決まった。それには勿論俺も参加するつもりだったが、カズマから休むように言われてしまった。昨日の碌に用意もなくお尻にぶちこんだ事を反省してるらしく、今日はゆっくり休むようにとの事。分かってるならばちこむんじやあないよ、と皆の前で言う訳にも行かなかったので脛を軽く蹴ってやるだけで済ませてやったが。

「……はあ、大丈夫かな。あいつら」

心配だ。果てしなく心配だ。

一旦任せると決めた以上、今から手伝いに行くのはカズマを信用してないって言ってるようなもんだし、だからいく訳にも行かないけど……本当に、果てしなく、限りなく心配だ。行けば良かった。

いまいち落ち着かない気持ちで湯船で空を見上げると、ガララと音を立てながら脱衣場のドアが開いた。女性のお客さんなんて数える程度しか入ってない宿。泊まってるお客の顔は何となく覚えてる。だから興味もあってそっちを覗くと、赤い髪が特徴的な胸の大きい女性があった。確か他の階のお客さんだったか。

「混浴より少し手狭だけど、良いわね——あつ」

俺の視線に気づくと、その女性は軽く会釈してきたので俺も軽く頭を下げておく。そのままさっさと掛け湯を済ませた女性は湯船に身を浸した。静かな露天風呂にチャポチャポと音が響く。

「……………」

少しだけ気まずい。

別に何か話さないといけない訳じゃないけど、二人きりだから静寂が妙に堪える。

「——今日は、彼氏さんと一緒じゃないのね？」

不意に掛けられた言葉に思わず噴き出す。

その女性は何か面白い物を見つけた見たような目で、うつすら口元を弧に歪めた。

「ふふふ、驚かせてごめんなさいね。でも昨日、混浴場貸し切っていたのあなた達でしょ？こっちまで声が聞こえてきたわよ。若いって素敵ね」

「あ、いえ、そのご迷惑をお掛けしまして……」

「ちゃんとお金を払って貸し切っているんだもの、あれくらい良いんじゃないの。気にしない気にしない。若い二人が入ったらどうなるのかなんて宿の主人も分かっているんだから、これも宿のサービスの一環でしょ」

女性の話を聞くと途端に恥ずかしくなってきた。

だってそれって完全に丸聞こえだったよって事だ。

いや、冷静に考えると露天風呂なんだから声が外に響くのは当たり前前なんだけど、でも魔法とかある世界でなんの……いや、あるわけない。あるわけないじゃん。だってめぐみんと入った時にカズマが耳を澄ませてたじゃんか。あれって、混浴の声とか聞こえてるよって事で、あわわわわわ。

道理でっ、道理でっ!!やたら男性客から妙な目でみられると思った!! あれは、そういう事か!!カズマああああ!!あの野郎っ、詰めが甘いんだよ!いや、気をつけなかった俺も悪いけど!?!けどね!?!と
というか、貸し切ったのって混浴だけか!!てつきり、一晩だけでも、全部かと思つて……うわあああああ!ああああああ!——いや、

まあ、興奮もするけども！ちよつとね、あるけどもね!?背徳的な、うん。あるけど・・・やっぱり恥ずかしいわ!馬鹿あ!

身悶えていると笑い声が聞こえてきた。

そこへと視線をやれば女性が楽しそうに笑ってる。

「あ、あのー、この事はどうか内密に・・・」

「分かってるわよ。秘密ね。一緒にきた子達にはまだ話せてないんでしょ?見てれば分かるもの。ふふ、付き合っでどれくらい経つ?」「・・・どれくらい、ううん、どれくらいだろ。どこからカウントしたら良いのか・・・何というか、体の関係から始まったので」

「あらあら、そうなの?お酒の勢いとか?」

「ええ、まあ、お酒の勢いで・・・その寝込みをちよつと」

「えっ、まさか襲われたの?」

「あ、いえ、俺が襲いました。辛抱堪らなくて」

「へえーそうなの、貴女がねえ・・・貴女が襲ったの!?!」

女性が物凄く驚いた顔をした。

昨日の流れを聞いてるなら、そう思うのも無理ない気がする。確かに最近受け身気味だったし。

「ちよつと性への欲求が凄くて。その頃は、どうしてもチンコをマンコに入れたかったと言うか、子宮ガンガンつかれたかったと言うか、ズボスポされたかったと言うか、中出しされながらイキたかったというか・・・それで、毎日オナってるくらいでして・・・まあ、若気の至りのなあれですよ」

「若気の至りとは少し違うと思うけど・・・」

今思い出すと随分と無理矢理だった気がする。

もし訴えられたらどうするつもりだったのか、あの時の自分は。幾ら証拠を手に入れた上であったとしても、もう完全レイプだったもんな。犯罪だよ犯罪。よく嫌われなかったな、俺。

「それからは、まあ、ずるずると。セフレって言うんですかね?隙を見つけてデートして、エッチして、エッチして、エッチして、エッチしました。気持ち良かったあ」

「セフレ・・・昔勇者がそんな文化を伝えたって聞いたけど、本当にそういう関係ってあるのね。都市伝説の類いだと思ってたわよ。抵抗なかったの？見てる感じ、なさそうだけど」

「それは寧ろカズマの方が・・・ああ、えっと、彼氏の方が、気にしてたみたいで。その、えへへ、ちよつと前に、プロポーズみたいいな事言われて、赤ちゃんの事もちゃんと考えてくれてるみたいで、ふふふ、えへへへ」

俺の話を聞くと女性は感心したように「へえ」と呟く。

「いい子なのね、あの子。お姉さん、ちよつとあの子の事見誤ってたわ」

「良いやつなんです。本当に・・・俺みたいなの、好きだって言ってくれて・・・本当に」

体は本当の女の子だけど、俺の心はビルから落ちたあの頃からそんなに変わってない。男として生きてきて身に付けた言動は今もそのまま、俺は他人から見たらあまりにも変なやつだろう。いずれは直さなくちゃとは思うけど・・・俺はまだまだ中途半端な存在で、でもそれをカズマは受け止めてくれて、好きだって言ってくれた。

「悪い関係じゃないなら良かったわ。でも、みたいなのって、自分の卑下するような言い方は相手にとっても失礼よ？もつと自信持ちなさいね」

「それは・・・はい。そうなんですけどね。どうしても、まだ・・・ははは」

「そう。自分で分かっているなら、これ以上余計なことと言わないでおくわ。人のあれこれに首を突っ込むほど、愚かではないつもりだしね」

お互いの顔に苦笑いが浮かんだ。

それからその女性と宿の料理の話やら、観光の名称やらお土産やら当たり障りのない話をした。温泉の話になるとやたら饒舌に色々教えてきたけど。あそこの温泉はどうとか、こっちの温泉はどうとか。湯治としてはこっちの方が良いらしいが、そうでないなら王都の近くにも温泉があるらしく、そこも中々オススメだとか。一人で泊まっている

みたいだから傷心旅行とかその類いかと思ったけど、この女性好きで一人で泊まってるのかも知れない。

暫く話していると、女性は何故か重い溜息をついた。

不思議に思つて顔を覗くと、困つたように笑う。

「いやね、ちよつと残念だなあつて思つてね……こんなに良い温泉なのに……」

「宿に何かあるんですか？確かに女性客は少なめではありますけど、十分に繁盛してるように見えるんですが……？」

「ん？いいえ、違うのよ。宿というか……」

少し悩んだ素振りを見せた女性だったが、俺の顔を見ると近寄つてきて耳打ちしてくる。

「質問はなし、一度しか言わないわよ。——近日中、ここの温泉が多分駄目になると思うから、変な病に掛かる前に仲間と彼氏を連れて帰りなさい。悪いことは言わないから」

「ん??それは……？」

「質問はなし、それに一度しか言わないつて言つたでしょ？後どうするかは貴女次第よ。また会えるのを楽しみにしてるわ」

それだけ言うとうと女性は立ち上がり、颯爽と湯船からあがつていった。浴場にはまた静寂が戻つたが、俺の頭の中には今しがた言われた言葉がずっと反芻してうるさいくらい。どういう意味で言つたのか分からない。そのまま受けとるなら、そういう事になるんだろうが……俺に話すのはあまりにリスクが高い筈。周囲を警戒したけど、そういった反応はない。そうなるからかわれただけの可能性もある。

ただ、あの女性の真剣な顔つきに嘘が感じられなかったのも本当の所。

「……まさか、本当に？」

水色の言が頭を過つた俺は取り敢えず湯船から上がった。脱衣場に戻るときつきの女性の姿はなく、使われた形跡のあるカゴが残ってるだけ。さつさといつも服に袖を通してカウンスターで女性の事を聞けば、つい先程チエツクアウトした所との事。

何処に行つたのか聞いたが勿論聞いておらず、もう一度話を聞くのは無理だろう。仕方ないので部屋に置いてある武器を装備し、カズマ達を探す為に宿を出た。

もしかしたら俺が思つてるずっと、面倒な事がこの街で起きているのかも知れない。

そんな事を考えながら。

信用がないのは初めからじゃないですか？え、悪化してんの？あーどんまい

「我が敬愛なるアクシズ教徒達よ！この街では現在、魔王軍による破壊活動が行われています！お風呂は今危険で危ないので、事態が治まるまで入らないで下さい！繰り返します！我が敬愛なる——」

装備を整えてからカズマ達を追い掛けて少し。

真つ昼間の歓楽街のど真ん中、噴水のある広場に異様な人だかりを発見した。嫌な予感と共に近寄ってみれば、噴水の所に見慣れた黄色と水色の二人の姿。メガホンのような物を持った水色はそれを口元に当て、何処かの選挙前の政治家のように演説する。頭の悪そうな演説だけ。

周りを見渡してみれば、広場の端っこに死んだ魚の目をしたためぐみんとカズマの姿を見つけた。声を掛ければ生気のない目で返事を返してくる。なに、ゾンビ？

「色々と言いたい事があつただけど……えっと、取り敢えずカズマ達から状況報告お願いしていい？」

「……ああ。つても、言える事なんて殆んどないけどな」

カズマが言うことによ、あれから温泉巡りしつつ調査して実際に汚染されてる場所は幾つか見つけたらしい。温泉に混じっていた毒素はそこまで強くなかったものの、長期間に渡って利用すれば肌が荒れたり体調が悪くなったり下手したら皮膚病やら何やらに掛かる恐れがあるレベルだったそうだ。

それで水色がそれを街の皆に教えろと言って……まあ、後は見れば分かる。

「アクアがいうように誰かの工作なのかは分からないけど、源泉かもしくは源泉を通してパイプになんかある可能性は出てきたな」

「……そうなのか？」

「ああ、この街の温泉は全部向こうに見える山の源泉から引いてるらしいんだよ。——んで、それは行政がちゃんど管理してるそう

だ。役所にいつて何処から引いてて、どんなパイプを通ってきてるのか、ある程度は調べたら直ぐに分かったぞ。因みにこれが今回汚染のあった場所と何処から引いてるのか調べたメモ。あと、これが温泉のサンプルな。取り敢えず行つた所は全部とつておいた」

さつとポケットから取り出された用紙と、肩掛けしたバッグの中から名前の書かれた小さな水筒数個が顔を出す。取り敢えず用紙を見させて貰えば、温泉の名前と源泉についての記録が書かれていた。言われた通り、今回汚染されてた温泉は引いてきてる場所が同じみたいだ。

よく気がついたなと軽く関心したら、カズマが分かりやすく顔をニヤつかせた。チョロロいんだから、まったく。可愛いから別にそのままで良いんだけど、変な女に引つ掛かるなよ?——と心の中で思っていると、カズマとの間にめぐみんが体を割り込ませてきた。何か言いたげ。

「——因みに、それを最初に言ったのは私です」

「おい、こら。共通点があるかも知れないのに気づいたのは俺だぞ」「カズマではそこから先は思い付かなかったでしょうから、実質私の天才的な頭脳のお陰です。感謝して下さい。浴槽を削りとつてきて『原因はここにある。俺の灰色の頭脳が、そう直感している!!』って言いながら浴槽の欠片片手に無駄に格好いいポーズでドヤ顔したのは誰ですか?」

「おまつ!? あ、あれは、汚染されてた風呂場の創設時期が近かつたし、お湯が原因と決めつけるのはアレだったからで! それにあの時はありとあらゆる可能性を考慮してだな!」

「アクアが浄化する前にサンプルを取ろうといったのも私です」

「おいおいおい! それは流石に俺だからな!」

喧嘩し始めた二人を宥めていると、水色達の方が騒がしくなってきた。三人揃って様子を伺うと、水色がアクシズ教徒らしき集団から罵倒を浴びせられている。水色がちよつと涙目になつてるのも見えた。話を聞いてなかったからどうしてそうなつたのか分からないけど……。

「温泉をお湯に変えてるってのは、ねえちゃんのことだったのか！何だってそんな質の悪い悪戯しやがる!!」

「魔王軍だか何だか知らねえが、てめえも大概じゃねえか！何が狙いだ！」

「ウチの温泉駄目にしやがって!!今日の売上どうしてくれんだ！出るところ出てやるぞこら！」

「アクア様みたいな綺麗な髪をしていて、なんて罰当たりな!!丸坊主になってアクア様に謝罪なさい!!この不心得者!!」

わあお、凄いやわれよう。

でも流石にちよつと言い過ぎだろう。

そりや、水色は余計な事ばかりしてるから文句を言われるのは仕方ないけど・・・だからと言って、ちよつとこれは見てられないな。そもそも誰の為に頭パーのあいつが、アホみたいな演説してると思ってるんだか。

「はあ、まったく・・・カズマ、めぐみん」

二人に視線を送れば、何も言わず頷いてくれた。

顔は少し嫌そうな表情だったけども。

取り敢えず喧しいのを震脚で黙らせる事にする。

スキルを発動し、光の灯った足で思い切り地面を踏み抜く。すると振動と轟音が周囲に響き渡り、騒がしかった喧騒が悲鳴に変わる。ギルドの酔っ払いに教えて貰った瞬間的に攻撃力を強化するスキルだけど、威圧としての効果もそれなりにあったみたいで場はすっかり静まりかえった。代わりに視線がアホみたいに刺さってくるけど。

俺が一步足を踏み出せば面白いくらい簡単に人ごみが割れ、水色達の元へと続く一本の道が出来た。

「行くぞ」

「つす！カナデさん!!」

「はっ、はい！了解です!!」

なんで敬語。

沢山の視線を浴びながら噴水の前へ行けば、顔を赤く染めながらプルプルしてるダクネスと顔を青くさせながら涙目になっていた水色

が明るい表情を浮かべる。そしてそのまま水色はポロポロ涙を流しながら飛び付いてきた。いつもなら投げ飛ばしたり、かわしたりする所だけど、今回は仕方ないので抱き止めてやる。

「何してんだ、お前は」

「うわあああん！カナデええええ！聞いてよおお！私悪くないのに！皆を助けようとしただけなのにいいい！」

「話聞いてなかったからよく分からないけど、どうせ昨日みたいに勝手に温泉浄化しちゃったんだろ？ちゃんと事情話して、納得して貰ってからやらないと駄目だろ」

「でもっ、でも！あんなお湯に入ってたなら、病気になっちゃうと思ったからああああ！それなのに、皆があああ!!」

「はいはい、よしよし。そうだよなあ、困らせようとしたんじゃないよなあ。泣かない泣かない」

水色をよしよししているとダクネスからいやに視線を感じて・・・何となく手招きをしたけど首を横に振られた。違うのか。頭撫でて欲しいのかと思っただけだな。

「・・・突然現れてよオ、その、嬢ちゃんなんだよ？」

水色の慰めを続行していると、側にいた売上がどうたらと叫んでいたおっちゃんが話し掛けてきた。なので普通に仲間である事を教えると顔を真っ赤にして怒り始める。温泉浄化しやがってとか、賠償金払えとか。

なので至極当たり前に、常識の範囲で言葉を返す。

「温泉を浄化してしまった事は、こちらの不手際ですから謝罪します。必要であれば今回の損害について賠償金を支払う準備も致します」

「そっ、そうだろ！お宅らは俺の温泉を駄目にしやがったんだ！きつちり落とし前を——」

「ですので、そちらも謝罪と賠償金の用意をお願いしますね？」

そう伝えるとおっちゃんは目を点にした。

同じように温泉を浄化された事に対して文句を言っていた連中を一通り視線を向ければ、どれも似たような顔をしている。何でそんな顔してるんだか？

「何、言ってるんだ？謝罪と賠償金？俺達が？」

「ええ、そうですよ？温泉の水質管理を怠り、著しく安全性の欠けた温泉を素知らぬ顔で一般開放していたんですよ？それで経営者の方になんの責任もないと本気で思っているんですか？私の仲間はその温泉に入り、身体的にも精神的にも耐え難い苦痛を受けました。今現在、健康的な被害はありませんが、もし何かあれば追って連絡します。この件についてこちらも断固とした姿勢で抗議させて貰いますのであしからず。——後日、裁判所から通達が来ると思うので、そこで改めてお話出来ればと思います」

「えっ、裁判所？な、なんで、裁判所が出てくんだよ？」

「はあ？ですから、訴えるので覚悟をしておいて下さいね？と言っているんですが」

笑顔でそういうと宿経営者陣が固まった。

「温泉の管理について怠った結果こうなっているのでしょうか？まあ、お互い責任はとった方が後腐れありませんし・・・ああ、そうですね。裁判をする前に、まずはこちらを警察に届けないと行けないですね。ん？これですか？私の仲間が採取した温泉のサンプルですよ。刑事責任が問われるかは分かりませんが、公衆の集まる場である温泉に毒素が混じってるなんて笑い話で済むものでもないでしょうし、犯人や原因は兎も角としてもきっちり調べて貰いましょうね？」

「ま、待て待て、お嬢ちゃん！警察は待ってくれ！そんな事したら——
——」
「どうなるんですか？何か問題でも？」

じつと目を見つめるとおっちゃんは顔を背けた。

そりゃ何も言えない。警察とは名ばかりの貴族の犬共なんか話したら、原因がなんであれ温泉の管理が杜撰であった事が公になってしまう。法的に罰則を食らうのは勿論、汚染された温泉を開放していたなんて広まれば社会的制裁を食らうのも間違いない。アクシズ教徒天国だったここに、アホ貴族から利益を搔っ払う為に要らない横槍が入るかも知れない。そうなったらそれこそ、宿が潰れかねない。下手をすれば観光で成り立ってる街そのものが終わる可能性もある。

だからこんな所でウダウダ吼えてるのだ。訴えようにも、温泉の管理側にも問題はあつて、そしてその自覚もあるから警察には話せないから。

これは温泉が汚染されてる噂をキチンと調査せず、誤魔化して営業し続けてきた、この街の連中へのツケそのものだ。

こういう時なんかやかんや気の優しいカズマ辺りなら、責任は水色にあるとかなんとか言つて補償金とかそのまま払いそうだけど——俺はそういうのはごめんなので痛い所はガンガン突かせて貰う。抵抗するなら使える手は全部使つて、徹底的に叩きのめす所存だ。

俺は顔を背けるおっちゃんの耳元に口を近づけ、そつと囁くように続ける。

「よく聞いて下さい。私の仲間は温泉の汚染に気づいたあなた方に頼まれ、善意から無報酬で汚染された温泉を浄化した。浄化の魔法が効きすぎて真水になってしまったものの、元より善意からの行動であるし、何よりお客様に健康被害を与える事が”なかった”ので大目に見る事にしようと思う——分かったら頷いて貰えますか？」

体を震わせながらコクコクと頷くおっちゃんに、分かったら他の人にも教えてあげて下さいと伝えれば人混みの中に突っ込んでいった。そして何人が集まつて話をすると、そこにいた全員がこちらに頭を下げた。

「二二申し訳ありません、こちらの勘違いでした!!また何かあれば助力頂けると幸いです!!」

綺麗に揃つてそう言うスゴスゴと帰つてく。

元気に批判してた連中が静かになると、話の流れは変わつていつてヒソヒソと皆が最近の温泉について話し始める。確かにこの所肌荒れが酷いとか、前より変な臭いがする時があるとかなんとか。

まいったく、現金な物だ。

「カナデ様って呼んだ方が良いかしら」

「水色……ふざけた呼び方してると、今すぐ尻に蹴り入れるからな？」

「わ、私、一応女神なんですけどお!？」

水色達を助けてから暫く。

場所を近場の喫茶に変えてた俺は、軽食を摘まみながら露天風呂で出会った怪しい女の事と聞いた不穏な話を皆に聞かせた。カズマは「本格的に面倒な事になりそうだな」と本気で嫌そうな顔になり、めぐみんは「我が爆裂魔法の出番ですね」と目を赤く輝かせ、水色は「きつと悪魔ね、殺しにいきましょう」と黒いオーラを垂れ流して立ち上がった。

自由だな、こいつらは。

アホスリーを眺めてるとダクネスが「いいか？」と声を掛けてくる。「その女が何者なのかも気になるが、それよりもやはり今は温泉の事だな。もしその話が本当なら、一連の騒ぎは人為的に行われてる可能性がある。罪のない民を苦しめる所業、騎士を目指す者として見過ごせん」

「まあ、騎士云々はおいておいても、何もしないのは流石に心が痛むもんな。・・・警察に証拠提出して帰ろうな」

「カナデ、帰ったら駄目だぞ。帰ったら話が終わりだ」

「良いじゃん、いつでもこの街の連中がどうなろうと関係ないし——」
「と思つてたらめぐみんがテーブルをバンつと叩き立ち上がる。」

「そうです！駄目です！カナデ！こんな面白——こんな爆裂チャン
スに帰るなんて！私達で調査し、犯人を見つけてドカンとやりましょ
う!!私は準備万端です！」

「面白いのがまだマシだったぞ、めぐみん」

バンつとテーブルを叩く音が続く。

振り返れば水色が立ち上がっていた。

「駄目よ！私の可愛い信者達が困つてるのよ!?警察なんか任せておいて、手遅れになったらどうするの!?今日回った所にはかなり汚染されていた場所もあったの！アレにお客さんが入ってたら病気にでもなっていたのよ！」

いつもテキトーな水色がいやにやる気を見せる。

少し意外な姿だけど……そもそもこいつは女神で普通の人は色々違うやつだ。当然、価値観だって大分違う。自分を信仰してくれる信者は俺達が考えるより大切なのかも知れない。

ふとカズマの方を見れば、俺の視線に気づいたカズマは頭をかきながら溜息をついた。それで仕方ないって顔でこつちに苦笑を返してくる。リーダーがそういうなら、俺にいうことはない。

「取り敢えず、だ。調査は続ける。ただし、もし犯人を特定出来たり見つけたりした場合、戦闘は避け冒険者ギルドに任せる。それでいいな？」

カズマの言葉に水色が目を輝かせるが、めぐみんが不満げな顔をすする。どうせ爆裂魔法撃ちたいんだろう。それなりの付き合いだ、分かる。

めぐみんが文句を言おうと口を開く瞬間。

バタバタと騒がしい足音と共に喫茶店のドアが壊れんばかりの勢いで開いた。視線をそこへ向ければ、さつき騒いでた温泉宿のおつちちゃん達が息を切らしながらそこにいた。

「あつーいたぞー！水色のねーちゃんだ!!」

「本当だー！いたあああー！」

突然の野太い大声にビビったのか、水色が袖を掴まんでくる。不覚にもちよつと可愛く思ったのは内緒だ。

おつちちゃん達は荒い呼吸のまま近づいてきて、そのまま俺達のテールブルの前までくると凄いい勢いで頭を下げた。

「さつきの事は本当にすまねえー！こんな事言える立場じゃねえ事は分かっただが、あんたの腕を見込んで頼みたい事があるんだよ！」

「また汚染された湯が噴き出やがったんだよ！それもウチらの所だけじゃねえ！知り合いの所もえれえ事になってんだ！ギルドにも頼んだんだが、汚染の濃度が高くて並みの術師じゃどうにもならねえつて……！」

えええ、マジかー。

あの時から嫌な予感してたけど……女の勘って当たるもんだな。女になって初めて知ったわ。

犯人はこいつじゃないのかって？いや、流石にそれはないよ。今回は。今回は。

街中の温泉が汚染された、その翌朝。

朝食をさつさと済ませた俺達は、女子部屋にて全員集合していた。勿論遊びにきてる訳じゃない。昨日同様、温泉の汚染事件について情報共有する為だ。

「源泉が怪し——」

「というアクアの」源泉が怪しい説は一旦おいておいて、俺達は調査の結果新たな情報を掴んだ」

昨日温泉を浄化しまくって自身満々な水色の言を一言でぶつたぎり、カズマは静かに調査内容を書いた羊皮紙をテーブルの上へと置いた。皆の視線が羊皮紙に集まる中、カズマは水色に噛みつかれながら（物理）説明を続ける。

「念の為に各温泉の従業員に話を聞いて回ったんだが、事件が起きた温泉にはとある怪しい人物が出入りしてる事が判明した。というのが、この二人だ」

トン、とカズマが指を立てた場所にはちよつとデフォルメ気味な男女の顔が描かれている。こっちの人のタッチじゃないから、恐らくカズマが描いたものなんだろうけど・・・というか、それより、この絵あれなんだけど。

じいつと紙を覗いていたためぐみんな、眩くようにいった。

「こちらの男性はともかく、もう一人はアクアですね」

「どうみてもアクアだな」

「・・・えっと、アクア様ですね」

「まじうことなく、水色だな」

なんだ、事件解決じゃないか。

そう思っただけ水色を見ると肩をびくつかせた。

分かりやすく怯えてる。

「ちよつ！そ、そんな訳ないでしょ!?!どうして私が信者の子達が苦し

むような事しないといけないの!?!違うわよ!これは浄化する為に温泉巡りしてただけで、温泉を汚染させる為じゃないわ!女神がなんで悪いことしなくちゃいけないの!?!」

「純粹に悪いと思わず、気がついたら悪い事をしてるのがお前だからな……はつきりいって何かしたんじゃないかと疑ってた。割りとは本気で」

「なんでよお!……ん?疑ってた?過去形なの?」

首を傾げる水色を見て、カズマが俺とめぐみんを見てきた。どうやら茶番劇は終わりみたい。めぐみんに視線をやれば「それでは私が説明しましょう」と鼻息荒く立ち上がった。

「今回の件、あまりに用意周到過ぎているのです。ようやくそれらしい目撃証言は出てきましたが、他は碌なモノが出てこない状況です。もしこれがアクアの仕業であれば、犯人を三回は特定出来て尚おつりが出る程の証拠が見つかる筈ですからね。第一、最初に汚染が起きたのは私達がくる随分前との事です。アクセルの街でキャベツの代わりにレタスを捕まえていたアクアにそんな余裕も時間もないでしょう。——なので、アクアが犯人では絶対ありません!」

どこぞの頭脳は大人な探偵も顔負けに、そう威厳たっぷりめぐみんが言い切る。効果音がつくなら、きつと『ドンツ!!』とかだろわか?中々様になつてるな。

調査を始める前から事件の手口に知性を感じていたので、元より頭パーな水色の事は疑ってなかった。それは俺だけじゃなくてカズマ達や貧乏店主さんも同じだ。加えて昨日の働きぶりや、調査結果がはつきり出てしまえば疑う方がどうかしている。——まあ、温泉を勝手に浄化しまくって、それはそれでかなり迷惑は掛けてたみたいだけだ。

めぐみんがこちらを見てきたので、続きは俺が引き継ぐ。

「話を戻すけど……っと、なるんだ。もう一人の不審者が明らかに怪しいって事になる。身長は平均男性より若干高く、浅黒い肌を持ち、茶色い髪を短く切り揃えた男。今回事件の起きた温泉には、必ず一度はこの男の姿が目撃されている」

「そうなの、カナデ？そう毎回毎回、誰かに目撃されるなんて事あるの？」

「この男アクシズ教徒ホイホイみたいで、大体アクシズ教徒に勧誘されてぶちギレする姿が目撃されてる。男の怒鳴り声や、アクシズ教徒が悪質な勧誘してるらしく目立つそうだ。アクシズ教徒が、特に」

俺の言葉を聞いて水色がお口をチャツクした。

「それでな、ダクネスの協力の元——」

「カナデ。その件だが、市役所やギルドで私の家の名前を使ったこと、私はまだ許していないからな」

「体の頑丈さと家柄とおっぱいしか取り柄ないんだから、それくらい喜んでやれよ。エロネス」

「しっ、辛辣過ぎやしないか?! い、いや!そこまで突き放されると、それも・・・くうっ!」

話の腰を折りにきた変態はスルーして続ける。

「市役所とギルドに問い合わせた所、この街の住人ではないそうで、身元は不明とのこと。また街の住人に聞き込みした所、多くのアクシズ教徒が彼と何度も接触しており、その際アクシズ教への勧誘も行っているそうだが、良い返事は未だに貰えてないそうだ。・・・まあ、ここまで嫌な思いをしながら街から出る事なく、汚染が起きる温泉で必ず目撃される。犯人かどうかは別としても、何か特別な目的があつて滞在してる事は明白だろう——今ので喜ぶような、エロネスみたいな変態なら、また話は別だけどな」

「カナデ?! わ、私はっ、変態ではないからな!これはあれだ!そう、これからの闘いを思つての武者震いだ!」

心の中でダクネスは変態だろうと思ひながら、話をまとめる役のカズマへ視線を向ける。カズマは一つ頷くと口を開いた。

「——で、だ。情報をまとめると今回被害にあつた温泉は全部同じパイプを通つてきてる物だった。一部のパイプの内部には経年劣化とは違う、明らかに不自然な腐食跡が残つてる物もあった。——

以上のことから、何者かが腐食性の高いなんらかの毒素を温泉へ混入させてる可能性が高い事が判明した。なので、役所やギルドには既に

報告を済ませている。もうじきギルドから正式に温泉の調査隊も出るだろう。つまり、結論何を言いたいかというところ、俺達の仕事はここでお仕舞いということだ。……お疲れ、解散！」

キリつとした顔で言い切ったカズマの姿によく言ったと頷くと、トントンカンが声をあげながら一斉に椅子から立ち上がった。特にめぐみんの反応が凄い。軽く目が血走ってる。

「何を言うのですか、カズマ!!目と鼻の先に敵がいるのですよ!!?どんなやつかは分かりませんが、毒を使うようなのはどうせ碌なやつではないのです!ぶつ飛ばしたって文句も言われません。……そう、つまり!爆裂魔法で吹き飛ばせる最高のチャンスなのですよ!!それをみすみす見逃すと言うのですか!?今からでも調査隊に入るべきです!」

「そうだとカズマ!皆が困ってるというのに、私達だけは何もしないというのは冒険者としても人としても駄目だ!!こういう時こそ、勇気を奮い起たせ元凶へと立ち向かうべきだろう!?違うか!?調査隊が出るなら参加すべきだ!」

「私の可愛い信者達が困ってるのに人に任せるなんていやよ!!それに昨日の様子を見てても、私以外まともに浄化出来る人はいなかったもの!誰が悪戯してるか知らないけど、温泉に混じってた物と同じ毒を使うようなやつなら、私がいないと全滅しちゃうわ!可愛い信者達を苛めた罪、私直々裁いてやるわ!シュツシュツ!」

主張内容の細かい所はバラバラだけど、一点して調査隊に参加したい事には変わりはないらしい。予想はしてたけど、ここまで綺麗にまとまるとも思ってたなかった。めぐみん辺りは冷静に判断してくれるかと思ってた期待したんだけど……昨日爆裂させなかったから?私も前にオナ禁したから分かるけど、習慣になってるものって止めたら結構ストレスだからなあ。そこいらでテキトーに言ったら……まあ、怒るんだらうな。あれで目標には拘ってるみたいだし。私もテキトーなコケシ渡されてオナれって言われたら怒ると思うし。

とはいえ、止めようと思えば止めれる。

命を預けあい戦ってきた仲間達だ。付き合いは短くても、暴走特急

トンチンカン号の事はちゃんと分かってるつもりだ。当然、その止め方も。あの手この手を使えば、こいつらに諦めさせる事は出来る。

けど――

「カズマ」

――そこら辺はやっぱり・・・我らがリーダーに決めて貰うとしよう。俺の視線を受けて、カズマが少し照れるように頬をかき。けれどすぐに真っ直ぐな目でこちらを見返して、力強く頷いてみせた。

「聞いてくれ。あのな、正直あんまり乗り気じゃない。面倒なことは放り投げて帰りたいってのが本音だ。何せ俺達の見つけた、恐らく敵であろうこいつは、随分と用意周到に今回の件を計画して実行してる。つまり非常時の備えもばっちりだって事だ。藪から蛇どころか、ドラゴンとか出て来てもおかしくない。だから、そんな危ない事を俺はやりたくない」

「俺はいつも思ってた。毎回、毎回、なんだって俺達が身の丈に合わない仕事ばかりしなきゃならんのかって。一流の冒険者は幾らでもいるのに、なんだって駆け出しの俺達がつてな。デュラハンと戦った時も、デストロイヤーと戦った時も、初心者殺しと戦った時も、バニルと戦った時も、俺はいつだって後悔しっぱなしだ。でもな――」

「――きつと、あの時、一度だって逃げてたら、アホなお前達ほつたらかしにしてたら、俺はもつと後悔してたと思う。ここでお気楽に笑っていられなかったと思う。・・・だからな、もう本当っ、今回だけで馬鹿野郎共!!」

ヤケクソ混じりのカズマの言葉を聞いて、トンチンカンが喜色をその顔に浮かべる。水色はやたら眩しい後光を背負いながらシャドーボクシングを始めて、めぐみんは瞳に赤い光を灯しながら杖を胸に抱えて不適な笑みを浮かべ、ダクネスは腰に提げた剣を鞘から僅かに引き抜くと剣の鈍い光を確認してイケメンスマイルを見せる。

本当、可愛いやつらだ。こいつら。

あつ、貧乏店主さんも巻き込まれてる・・・。

頑張つて下さいねー。あはは。

「・・・で、本当に良いのか？」

「どうせ反対したって、あいつらは勝手にいつちまうだろ。だったら、まだ俺が指揮した方がマシってもんだ。あんな馬鹿共だけど、死なれでもしたら胸くそ悪いしな・・・なんだよ」

「別に・・・ふふ」

カズマはお人好しだ。それも損するタイプの。

素直じゃないから、その優しさは凄く分かりづらい。分かる人には分かるけど・・・でもきつと、気づかない人の方がずっと多い。いちいち悪態なんてつかないで、そのままの素直に気持ちを伝えれば、前の世界だってこの世界でだって、もう少しモテただろうに。

本当、残念なやつだ。

でも、そうできてくれたから、俺が隣にいられる。

何とも皮肉で嬉しい話だ。

「カズマ」

「なんだよ——つよ!?!」

皆の視線がこっちに向いてないタイミングを見計らって、俺はカズマの頬に一つキスを落とした。カズマは酷く慌てた様子でパーティーの皆と俺を交互に見て、皆が気づいてないことを察すると見るからにホツとする。

「おまつ、お前なあ・・・」

ジト目で見てくるカズマの耳に唇を寄せて。

俺は胸の中で溢れ出そうになるそれを、精一杯の気持ちを込めて声に出した。

「お前のそういう所な、大好きっ」

アホみたい顔に顔を真っ赤にさせたカズマを追い越して、俺は皆の背中を追い掛けた。

えっ、あれですか？友人ではないですよ。ただの通りすがりの信者です。知り合いじゃないです。止めて下さい。

「控えよろー控えよろー！このペンダントが目にはいらぬかあー！」
「こちらにおわすお方を何方と心得ますか！王国の懐刀と噂される名門貴族ダステイネス家のご令嬢、ダステイネス・フォード・ララティーナ様その人であらせられるのですよ!!」

「冒険者風情がつ、頭が高い!!控えおろう!!」

水色・めぐみん・カズマによる三段式演説により、そこにいた調査隊の冒険者達・及び居合わせたギルド職員が一斉に片膝をつく。基本的に自由人な冒険者達も大貴族と呼ばれるダステイネスの名前は怖いのか実に従順である。まあ、俺があれをやられる立場なら様子見の為に一旦はこうしたと思うけど。

「あまりこういうのは、その、良くないと思うのだが・・・」

「聞きましたか！ララティーナお嬢様は調査隊の指揮は自分直々にとると申されています！温泉に仇なす輩は自分の手で討ちとると！そう、おっしやられています！」

「めぐみん!?!ってないぞ?！」

酷く焦ったダクネスがめぐみんに叫ぶが、めぐみんは何処吹く風と膝をつく冒険者に当然とばかりに胸を張る。

そのめぐみんに続きカズマが一つ咳払いしてから口を開いた。

「今回の件について指揮官を任されている者は直ぐ様前に出よ!!そして指揮権のお引き継ぎをするのだ!!ダステイネス家に逆らえばどうなるか、分かっているだろうなあ!」

「カズマ止めろー!そういうのは本当に止めろ!家名を、権力を笠にして脅すのは駄目だといっただろう!」

「脅す?まさかまさか。自主的に指揮権をお嬢様へと引き継ぎするように、平和的にお願いしているだけですと・・・」

チラツとカズマが視線を向けてきた。

なので元から決まっていた通りにハルバードの柄を地面に叩きつける。石畳を砕く鈍く重い音と石に打ち付けられた金属の甲高い音が響き渡る。耳に痛い音を聞いて見上げてくる全員へ冷笑を浮かべつつ見つめてやれば、大体の奴らがぶるりと震えて顔を下げた。文句はないそうだ。何人か恍惚としているのが気になるけど・・・まあ、それはそれでいいか。言うことは聞きそうだし。

「ね？」

「何処の暴君だ!?!カナデもそういうのは止めろ!完全に脅しだろうそれは!!一番駄目なやつだ!!」

「はははっ、ご冗談を。わたくしめもカナデめも、何も言っではおりませんではないですか」

「言葉はな!!でも、それ以上に伝わるものがあるからな!?!」

カズマに食って掛かるダクネスをよそに、調査隊を集め始めた水色がアクシズ教のシンボルマークが入った紙をヒラヒラさせる。この街にきてから散々見てきたアクシズ教団への入信書だ。

「今日から調査隊の皆は全員アクシズ教に入信するのよ。アクシズ教徒じゃない子はこの紙を書いて提出しなさい。いい?今日から皆で神聖なる水の女神アクア様を信仰するの。毎日朝と晩に祈りを捧げるの。逆らったり、逃げたり、エリスなんか信仰したら駄目よ。その時はダステイネス・フオード・ララティーナ様が黙っていないんだから!」

「アクア!止めろ!私の家名を使って布教活動するな!しかもそれでは我が家がアクシズ教徒みたいになるだろ!!ダステイネス家は今も昔も敬虔なエリス教徒だ!!」

忙しいな、ダクネス。

廻ることちよつと前、俺達は調査隊と合流する為に冒険者ギルドへと行った。丁度出発前の一団に遭遇したまでは良かったのだが、この街での実績のない俺達パーティーは面白いくらい信用されておらず、調査隊への参加を断られる始末。仕方がないので手っ取り早く説得

する為に、伝家の宝刀であるダステイネスの名前を使わせて貰う事に
して――で、こうなった。

「死にたい……ぐすつ」

ぎゅつ、ぎゅつ、ぎゅつ。

纏まった足音を背に、ダクネスは真っ赤になった顔を隠しながら歩
く。その足取りは酷く重い。そんなダクネスの後には先程説得した
調査隊のメンバーである冒険者達。殆どどの連中が固まった表情の
まま絶賛行進中である。流石に一糸乱れぬとまではいかないが、中々
の纏まり具合にダステイネス家の権力の高さに改めて怖さを感じる。
今は借金まみれな筈だけど……やはり腐っても鯛か。

「……ええい、いつまでメソメソしてんだ。ダクネス。ちよつと名前
を借りただけだろ。いい加減機嫌直せよ」

「なつ、お前つ！カズマ！そのちよつとで、ダステイネス家へどれだけ
悪い印象を持たれたか！そもそもちよつとだから良いとか、そういう
物ではない！貴族とは民を守る盾であり剣だ！それがあのような名
を笠にして命令するなど――！」

「おわっ!?ちよつ！分かったから！落ち着け！」

「あわわわ、カズマさん、ダクネスさん落ち着いて下さい」

じゃれあいしてるダクネスとカズマは貧乏店主さんに任せ、俺とめ
ぐみんは改めて調査隊の指揮について元調査隊の隊長と話し合いを
始めた。調査対象となっている山にはモンスターも普通に出るそう
なので、街を出るまでに役割を大体決めておきたい。迅速に物事を進
めるには準備は大切だ。

「――と、事前に決められるのはこの辺りか。しかし君達六人は
編成なしで大丈夫なんだな？状況から考えて、源泉付近は何があるか
分からんぞ」

「問題ありません。というか、寧ろ過剰戦力と言えるでしょう。この
パーティーなら魔王軍幹部でも殲滅出来ますからね。もし調査中に
非常事態が起きた場合は魔法で合図を出して下さい。援護に向かい
ます」

「魔王軍幹部か、それは大きく出たな。紅魔族のお嬢ちゃん。本当な

「心強い」

「事実です。魔王軍幹部程度、何度も倒してますから」

本当の事ではあるんだけど、めぐみんが胸を張って言うとき子供の強がりにしか見えない。お陰で隊長からは生暖かい視線を送られてる。火力だけなら本当に強いんだけどな。本当に。

「まあ、おつかねえ嬢ちゃん。そっちは頼んだぜ」

「大丈夫です、任せて下さい」

「なっ!?何故カナデだけに言うのですか!さては信じてませんね!ちよつ、こつち見て下さい!こつちを見ないと実力のほどを見せることになりますよ!」

キャンキャン吠えるめぐみんを慰めつつ歩く事暫く。

街の中央広場が見える所までくると、道を塞ぐように集まっている人だかりが視界に入ってきた。何事かと首を傾げると、その人溜まりにいた一人がこちらを指差して大声をあげる。

「あつ、いたぞ!!昨日の演説してた青髪の嬢ちゃんだ!!」

その声を合図にそこに集まっていた人間が一齐にこちらへと走ってきた。よくよく見れば、そこにいたのは昨日水色を糾弾していたアクスズ教徒の連中だった。それに気づき怯える水色を背中に匿い、牽制の為ハルバードの切っ先をそいつらへ向ければ即座に足が止まる。脅しが効く程度、理性のある相手で少しほっとした。そうじゃなかったら見せしめに何人か叩きのめしてる所だ。

「何ですか?事と次第よると・・・」

「い、いや!違う!思わず叫んじまったが違う!敵意はねえよ!頼むから武器下げてくれ!!」

どうするかカズマに視線で聞いてみれば、隊長達と二言程度交わしてからコクリと頷いてくる。冒険者達が自らの武器をそつと手にする姿を確認してから、俺は言われた通り構えていた武器を下げた。

その光景にみるからにホツとした先頭の男は、一度自分の後ろに並び連中の顔を見渡した後、こちらに向き直り頭を下げた。

「昨日はすまなかった!特に青髪の嬢ちゃんには悪い事をした!よく

知りもしねえで疑っちゃまってよお！」

「ありがたいな青髪の嬢ちゃん！真水にはなっちゃったけど、お陰で誰も病気も怪我もしねえよ！助かった！」

「浄化する嬢ちゃんは女神様みてえだったぞ！」

「昨日はごめんなさいねえ！その目や髪色に相応しい力を見せて貰ったわ!! 貴女にアクア様の祝福を！」

「うそつきっていつてごめんなさい！おねえちゃん！」

男の口から謝罪が溢れると、後ろにいた連中も次々に謝罪やら感謝を口にしてく。俺としてはあまりの掌返しに呆れたけど……。

「どうもどうもー！そんなでもありますけどー！おほほほほ！花鳥風月うー！」

肝心の本人が当然の如く受け入れてるので何も言えない。最初はキョトンとした癖に、状況を理解していくと共に段々と鼻が高くなっていつて——オドオドしていたのが嘘のように上機嫌でいつもの水芸を披露し始める始末。どうもどうも、ではないぞ。お馬鹿。警戒したこっちの面子が何とも言えない顔になってるからな。隊長が本気で困ってるだろ。

そうこうしてる内に水色はアクシズ教徒達と意気投合。伊達に信仰対象にしてる訳ではないらしく、アクシズ教徒とは本質的な所で死ぬほど噛み合うらしい。終いには意気投合した水色と街の為に温泉調査隊へ参加するとまで言い始めた。今回のクエストの責任者である、敬虔なるエリス教信者の隊長はちよつと泣いた。なんやかんや、この人も責任とらされるから仕方ないけど。

隊長は流石にこの蛮行を止めに行ったが、それで止まるなら多くの人々から頭おかしいとか、ゴキブリよりしぶといとか、ペンペン草すら負けるとか、悪魔より悪魔とか言われる訳がない。結束したアクシズ教団は正に狂気の軍団と化し、教義を口にしながら水色を筆頭に進行を開始した。

「アクシズ教、教義！アクシズ教徒はやればできる！できる子たちなのだから、上手くいなくてもそれはあなたのせいじゃない！上手くいかないのは世間が悪い！」

「アクスズ教徒はやればできる！できる子たちなのだから、上手くいなくてもそれはあなたのせいじゃない！上手くいかないのは世間が悪い！」

紡がれる言葉が、何十人もの足音が、昨日の騒ぎのせいで少し静かになった街へ響いてく。雑多な武器を手にしたアクスズ教徒の行進は新たなアクスズ教徒を呼び寄せて、人数は爆発的に増えていき数えられないレベルになっていく。集まった連中の中には目を血走らせながら聖戦と口にする者までいる。――それに途中からお祭りと勘違いして観光客とも交じつてきて、いよいよ収拾つかない事態へと変わっていた。隊長は泣いた。奥さんの名前と子供の名前を呟き、謝りながら泣いた。

「カズマ、カズマ」

「はいはい、カズマですよ」

「いよいよ、とんでもない事になってきましたけど……これ収拾つくんですよね？」

泣いてる隊長を眺めていると、不意にめぐみんがカズマへ問いかけた。めぐみんから問いかけられたカズマは、何処が遠くを見るような目で空を見上げる。

「なあ、めぐみん。今日は良い天気だな」

「いや、曇ってますよ。がつつり曇りです」

そう指摘されると、カズマは泣きそうな顔でこっちを見てきた。俺に母性本能があるのか分からないけど、取り敢えずその顔には胸の所がキュンとする。かわいいな、もう。帰ったら一杯えっちしよ。

ムラムラする気持ちを胸の奥に隠しながら、俺は精一杯の笑顔を返しておく。

「もうな、なるようにしかならないから。腹を括れ」

「はい、終わりのいい！カナデが諦めてるじゃん！もう終わりだよ！めぐみん、分かったか！なるようになれだ！どうにもならなかったら即トングラだからな！」

カズマの叫びにめぐみんが良い笑顔を浮かべた。

「やっぱりそうよね。分かりました。気持ちよく、一発ぶちかまし

て帰りましょう」

諦めの境地に達したためぐみんの言葉に、今度はダクネスが血相を変
える。

「ええええええ!?待て!待て!待て!待て!待て!待て!めぐみん!カズマもカナデも
!!あれを放置する気か!?本気で!?仮にも一度私の名前を使つて集
まった集団だぞ!?何か起きたらダステイネス家の名誉に傷がつくん
だからな!許さん!放り投げて帰るなんて、そんな事絶対許さんから
な!」

「うるせええええ!!そもそも俺は最初から反対してたろ!!カナデもだ
!!でも、お前らがやるって聞かないからあれこれお膳立てしてやった
んだろお!!寧ろ感謝しろこの野郎!つーかな、悪いのは先導してるあ
いつだから!俺じゃないから!!なにあの顔!なんであんな良い顔で
笑えるの!?!あいつ本当馬鹿だろ!!」

カズマの空しき叫びが空に吸い込まれていく。

されど返ってくるのは沢山の足音と、聞いているだけで馬鹿になりそ
うなアホみたいな教義の復唱だけ。

「悪魔殺すべし!魔王しばくべし!はい!」

「二「悪魔殺すべし!魔王しばくべし!!」」

「悪魔殺すべし!魔王しばくべし!」

「二「悪魔殺すべし!魔王しばくべし!!」」

「悪魔殺すべし!魔王しばくべし!」

「二「ひゅうううううう!!」」

なにこれ、怖い。

だから宗教関連って苦手。

そうして妙な集団と化した俺達は、そのまま源泉を求めアクシズ教
団本部の裏手に存在する山へ向かった。途中、源泉への道を管理して
る街の騎士団による厳重な警備に阻まれたものの、アクシズ教徒の説
得によりダクネスの権力を執行するまでもなく突破。無事に山へと

入る事が出来た。

突破する際、街の騎士団からこれ以上ないほどの侮蔑の視線を向けられたけども。

そして隊長は涙が枯れた。

もう少し演出あっても良いんですよ。多分、山場ですし？

悪名高きアクシズ教徒達と行進を始めて暫く。

観光客と早々に別れた俺達は道中のモンスターを数と物理と暴力で押し退けながら難なく進み、目的地である山の中腹にある源泉その一へと辿り着いていた。

そこには俺達の予想通りというか、なんとというか。

まあ、それなりに怪しい奴はいた・・・いたんだけど。

「褐色の旦那じゃないか！おーい、褐色の旦那あ！今日こそ俺達と幸せになっちゃうじゃないか！」

「あらいやだよ！褐色のお兄さん！今日は朝から見掛けないと思ったらこんな所にいたんだねえ！ほら、あんたの大好きな石鹸さね！今日も持っておいき！もっと欲しければこの紙にサインするだけで、教会いけばタダで貰えるようになるからね！！」

「これはこれは！褐色の旅人様！！この間の一万人目来訪記念サービスは健在ですぞ！！こちらにサインして頂ければ、アクシズ教秘蔵アクア様が穢れを落としたと言われたり言われてなかったりする泉の水から作ったありがたい聖水もお付けします！是非サインを！」

「ハンスさんですよね！ハンスさん！私です！ウイズですよ！あれ、なんでこっちは見ないんですか？さっきから無視しないで下さい！私ですよ！ほら、昔同じ魔王軍か——んん！えっ、と、ほら、ウイズです！昔同僚だった！」

魔王軍幹部なのか・・・あれ。

一応現役で魔王の城の結界係りやってる、借金幹部様が言うんだから間違いは無いんだろうな・・・無いんだろうけど、何だろう。この空気。やりづらい。

ぼーっと眺めてると水色がピョコピョコ動き出す。

嫌な予感がして止めようとしたけどアクシズ教徒に阻まれた。物理的に距離を作られたのと、そのアホみたいにデカイ入信を求める声

にだ。怖い。

「なあに、ウイズ？知り合いなの？それなら仕方ないわね！今回は特別に・・・私直々！そう、私が直々に！貴方の入信を受け付けてあげるわ！汝、憐れな迷い子ハンス、これまでの人生を悔い改め、麗しの水の女神アクア様に祈りを捧げなさい。さすれば宝クジ当たったり、彼女出来たり、健康になったりする——かも知れないでしょう。中々願いが叶わない時はお布施が足りなかったり、祈りが足りなかったりちやんと原因があるから決して女神のせいにしてはいけません。誠心誠意尽くせば、女神アクアは必ず貴方に幸を与えます。迷わず祈るのです」

「褐色の人、ハンスっていうのか。ハンスっ、サイン！ここに！一緒にアクア様にお祈りしよう！な！」

「ハンスさんってどう書くの!?ここに書いて教えておじさん！」

「ハンスさん！」

「ハンス！」

褐色の謎男、改めて魔王軍幹部ハンス。

確実に何かを企んでいた暗躍せし者ハンスの周りには今、アクシズ教団員による無慈悲なまでのハンスコールが鳴り響いていた。怖い。思わずカズマのマンントの端っこ掴んでしまうくらい怖い。

「カナデ、本当に苦手なんだな。こういうの。うんうん、好きだけ掴んでろ。しかし、なんだ、ひでえな・・・」

小さなカズマの呟きに、私とめぐみんも思わず頷いてしまう。せやな、と。

「・・・ダクネスは垂涎ものだろ？」

「馬鹿を言うなカズマ！私もあの手の言葉責めは好かん！なんでも興奮する尻軽女と思うな！」

「大体何でも興奮するど変態騎士が大きくでたな」

「どっ、ど変態っ、騎士だと・・・つく！」

「早速喜んでんじゃねえーよ!?なに!?お前のそのスイッチ何処にあるの!?ねえ!?!」

カズマが変態の相手をしてる間に、向こうの方はまた荒れ始めた。

「だあああああ!!止める!!ハンス、ハンス、ハンスと糞人間共が馴れ馴れしいわ!!———」というかなあ!おい、ウイズてめえ!!あのお方との約束じゃあ、俺達には干渉しねえ筈だぞ!!なに人間共と交ざって仲良くコールしてやがる!!氷の魔女様が随分とひよったなああ!」

「やつ、やめて下さい!皆さんも見てますし、その話はまた今度ということに……」

「うるせえ!!こちとらてめえのせいで名前までバレてんだよ!!計画もおじやんだ、ぼけえ!!てめえに分かるか!!俺はあ、これからこの腹立たしい糞信者共に、ことある事に名前を呼ばれる羽目なんだぞ!!その気持ち分かるか!!分からねえだろうなあ!!くそつ、やつとつ!この糞共を殺せる下準備が出来たつてのによ!!くそ、くそ!腹立たしい!腹立たしいなあ!!」

「「ハンス!ハンス!ハンス!」」

「無意味に呼ぶんじゃねえ!!糞共!!なんのハンスコールだ!!止める!!鬱陶しい!!やめろ、本気で止めろおおお!!つーか、今の話聞いてたろ!なんでまだ入信させる気満々なんだよ!!お前らのそういう所が、俺は本当に嫌いだ!!常識的に考えろよてめえら!!」

うわあ……

あまりの惨状に目を逸らすと丁度カズマと目が合った。

何とも言えない視線に気持ちを察する。

大体俺と一緒に、と。

「で、まあ、カナデどうする……?」

「どうするって……いや、それはリーダーが決めるよ」

「頼られるのは悪い気はしないんだけどな。こういう時のはズルいだろ。お前」

「なんだよ。じゃ、めぐみんで爆裂するか?」

そう言つて隣の魔法使い方へ視線をやれば、鼻息荒く「爆裂ですね!」とやる気満々に瞳を赤く光らせる。バツチリスタンバってたみたい。カズマは「ステイ、めぐみん」と言いながら、振り翳されようとするめぐみんの杖を腕力を持って止める。

「な、何をするのですかカズマ!!先程チラツと魔王軍の幹部だとウイ

ズが教えてくれましたし、爆裂しても何も問題ないじゃないですか!!」

「ええい、喧しい！何だっとうちの連中は基本血の気が多いんだ！あの様子からすると敵なのは間違いないし、吹き飛ばすのは俺も賛成だが・・・お前、位置を考えろ。源泉まで吹き飛ばすつもりか！それにアクシズ教徒の人達もいる！少しは考えろ爆裂馬鹿！」

「あっ・・・」

爆裂魔法の攻撃範囲を考えると、カズマの言う通り確かに今のハンスの位置は悪い。直撃はせずとも何かしら影響を与えてしまう距離だ。源泉の事もあるし、温泉を麓に運ぶ設備もあるし、うろちよろしてるアクシズ教徒もいるし・・・ここで爆裂魔法を使う場合は損害無しには考えられないだろう。敵は倒せるかも知れないけど、失う物が多すぎる。——まあ、個人的には源泉はともかく、どっちも吹き飛ばしてしまえば良いと思うが。

「・・・それで、どうやって引き離すつもりだ」

「分かってる、ちよつと考えさせろ」

「それなら、取り敢えずは時間稼ぎでもしとくか？」

「いや、これ以上弄るな。下手に刺激して暴れられても困る。寧ろ、あの全力で煽ってる馬鹿達を止めるの手伝ってくれ。ダクネスは何かあった時、直ぐ対処出来るよう前の方で待機。めぐみんは辺りに爆裂魔法撃てそうな場所を探して——」

カズマが皆への指令を言い終わる、その時だった。

身も凍るような冷気が頬を撫でていったのは。

ゾクリと背中を震わせながらそこへと視線を向けると、いつもホンワカしてる貧乏店主が殺気と冷気を漂わせながら片腕を失ったハンスと相對していた。先程までの旧友との再会に気を抜いた、何処か間の抜けた雰囲気はない。

「っつーて、てめえ！ウィズ！約束はどうしたあ！いきなりぶちかましやがって!!」

「約束を破ったのはそっちです。ハンスさん。私は確かに貴方がたのやる事に関わらないと言いました。けれどそれは、冒険者や戦う事に

身をおいた方々への対処についてです。モンスターを倒す事、誰かを倒す事を生業とする者ならば、当然その牙や爪に、剣や魔法に、命を刈り取られる覚悟をするべきです。それが力を振るう者達が背負うモノだから——ですが、貴方の食べたという温泉を管理していた方は、何の関係もないじゃないですか!!」

怒号を飛ばし、貧乏店主が掌を前へと翳す。

漂っていた周囲の冷気がうねりをあげながら翳された掌へと収束していく。

『カーズド・クリスタルプリズン』ツツツ!!」

再びの怒号と共に貧乏店主の掌から銀の光がハンスへと飛ぶ。それは地面を凍らせ風を巻き起こしながら、悲鳴のようなけたたましい風切り音をついでに連れて。

「つちい!!」

咄嗟に横に飛び退きハンスはこれを回避する。

だが、反応が少しだけ遅かった。直撃こそしなかったものの、腕を失った側の半身が巨大な氷柱の中へと閉じ込められる。魔法で凍らされるのがどういう状態なのかわからないが、見たままに凍結されているのだとすれば、この時点で死んでないハンスは普通の人間ではないのだろう。……身近に人類の耐久値を容易く凌駕する変態騎士がいるから断言は出来ないけど———というか、ダクネスって人間で良いのか？ダクネスこそ人間ではないんじゃないや、人間か。いや、人間か？ん？

「——流石に俺様も、この貧弱な体のままじゃあ、氷の魔女様の相手は難しいな」

そんな呟きと共にハンスが凍結された体を切り離す。

これは流石にダクネスも出来ない。良かった、うちのダクネスはちゃんと人間らしい。

「スライムはスライムらしく……本能のまま、喰らうとしよう」
どろっ、とハンスの体が溶けるように崩れる。

そして人の面影など欠片も残っていない、体に良く無さそうな少し濁った紫色のドロドロした何かに変わった。

ただそのドロドロの何かはどうやって人間サイズに収めていたのかと不思議に思うほど大きく、目算で高さは十メートル以上・幅もその倍程あり巨体の一言に尽きる存在だった。その威圧感たるや「スライムだけど、俺の知ってるスライムじゃない!!絶対ヤバイやつだろこれ!!」とカズマが嘆くほどだ。

アクシズ教徒は突然の事にプチパニック。貧乏店主は見事に騒ぎに巻き込まれて揉みくちや。

水色は一応信者達を守ろうとしてるのか、皆の前で膝を生まれたての小鹿のように震わせながらファイティングポーズ。

ダクネスはダツシュして水色の加勢に向かった。

若干顔を赤らめてなく、鼻息が静かだったら格好良かっただろうな。本当、あいつは何処までいっても残念騎士だな。役割的にはいつも重要な所にいるのに。

「—————かああああ!!ウイズは違うと思ってたのにいいいい!!くそつ、めぐみん!さつき言った事覚えてるな!!爆裂魔法をぶち込んでも問題ない場所探せ!あとはいつでも撃てる準備!!何とか誘導する!!」

「分かりました!!来る途中で色々見てましたからね。よさげな場所に心当たりはあります!合図は何ですれば良いですか?」

「これ使え。発煙筒っていつてな、使うと直ぐ煙が昇る。使い方は横に書いてあるから—————待てこら!行く前にスライムについて教えろ!どうも俺が知ってるやつと違い過ぎる」

「スライムですか?良いですが・・・そんなに詳しくないですよ?それにあれは普通の物では、いえ、兎に角スライムはですね—————」

めぐみんにより一通りスライムの説明が終わると、カズマは頭を捻りうめき声をあげる。思ってたのと大分違うらしい。まあ、物理ほぼ無効で魔法耐性まであり、一度取り付かれたら消化されるか、口を塞がれて即死ときたら、うめき声の一つもあげなくなるだろうけどな。

めぐみんはと言えば説明が終わると同時にカズマから手渡された発煙筒を手に、歓喜の声をあげ杖を振り回しながら駆け出していた。本当に目星をつけていた場所があったのか進む方向に迷いはな

い。移動中妙にキョロキョロしてると思ったら・・・あいつ。

「それで、カナデ。お前には悪いけど、一番危ない所頼むぞ。お前がこの中で・・・一番速く動けるからな」

「あいよ。寧ろ、簡単な役押し付けてきたら、ぐうでひっぱたいてやった所だ。任せとけ」

「せめて内容聞いてから返事しろよ・・・ったく。でもお前あれだからな！俺が退けつて言ったら絶対退けよ！良いな！バーサーカー！」

「誰がバーサーカーだ。誰が」

マントから手を離し、俺も武器を手に握る。

カズマに手入れして貰っていたグリップは新調したての時のようにしっかりと手に馴染む。これなら振り回しててすっぽ抜ける事はま
ず無いだろう。

「兎に角、アクシズ教徒の避難が先だ！あいつらいると何も出来ない！俺が避難させてる間————なんとか時間稼いでくれ！物理攻撃の効果が薄い以上倒すことは考えなくていい！兎に角回避に集中してくれ！その間に、俺はあの化け物倒す方法を考える!!危なくなったら、合図がなくてもトンスラしろよ!!いいいな!!」

カズマの声を背中で受けながら、俺もまた駆け出した。

自分の役割を果たす為に。

根性とかあったんですね？ええ、まあ、少しだけ見直しました。少しだけ。

「オオオオオオオオオオオオオオ!!!」

地鳴りのような音も立てながら、それは私の目の前で蠢いた。透き通る薄い紫の巨体を揺らしながら触れる生物全てを飲み込み、何十という牙を不規則に体内を漂わせながら、体から伸びた丸太のように太く生糸のように滑らかな触手で空気を切り裂きながら——スライムと呼ぶには、あまりに巨体で、あまりに異様な化け物は大気を大地を揺らして進む。

小鹿のように足を震わせ、源泉の前で一人ファイテングポーズを取る水色へ向かって。

「ちよっ、な、なんでよお——!!カズマさああああん!!助けてえ!これは死んじゃう!私でも死んじゃうからあ!!女神なのにい!私女神なのにい!!」

完全に逃げ遅れた凶だけど、あれは何故か逃げなかった水色が悪い。他の信者達はダクネスとカズマの誘導で安全圏とは言えずともそこそこ退けている。スライムの狙いが水色ならまず標的になる事もない位置だ。

まあ、何がともあれ俺も軽い様子見を終わりにして、いよいよ敵の攻撃射程へ入る。相変わらずの声を意識の外へ。意識を闘う事へ集中中。

俺の雰囲気を感じてか、牽制を引き受けていた調査隊の男が肩を掴んだ。

「お、おい!おっかない嬢ちゃん!迂闊に近づくなつて!」

「大丈夫、大体把握した!!牽制続けて!!」

「——っち!おい!牽制班!!攻撃ペースあげろ!!少しでもあいつの気を引き付けろ!!おっかない嬢ちゃんが突っ込むぞ!!」

調査隊の男を聞きながら敵へと駆ける。

カズマの言葉を思い出しながら武器を握り、姿勢を更に地面へと傾

け加速する。

肉食獣のしなやかで鋭い走りを頭で思い描き、足を強く蹴り飛ばす。少しでも前へと踏み出す。

カズマは言った、時間を稼いでくれと。

それは勝つことでも、ましてや負ける事でもない。

ありとあらゆる手段を使い敵に何もさせない事。

時間という概念をただ、ただ、消費させる事。

それが時間を稼ぐ者の役目。

カズマが倒せと言わなかった以上、俺自身思っていた事ではあったが勝機はないのだろう。攻撃手段の相性か、はたまたあれが存在として格が違い過ぎるのか・・・何にせよ、目が利き頭がよく回るカズマが倒す算段所か、ただただ時間を欲しがったのだからそういう事だ。それが何を意味するのかは考える間でもない。目の前のあれはそれだけ規格外の化け物という事で、まともにやり合ってまず勝ち目は無いという事だ。

「——っ！」

矢と魔法の雨をくぐり抜け、不意に触手の一本がこちらを薙ぐよう振り回された。冷静に攻撃の着弾位置を見極め、地面を思い切り蹴飛ばし宙へ跳ぶ。

直後、足元を轟音と共に触手が通りすぎていく。

俺のかわした触手は勢いそのままに、けたたましい音をあげながら地面の岩肌を抉り飛ばす。すっかり抉り取られ深い影の落ちるようになった地面を見れば、注意しなくてはならないのが紫色の怪しげな体に内包される成分だけでない事は明白で、あれが魔王軍の幹部である事がよくよく理解出来た。確かにあれは驚異だ。

そうこうしてる内、二本目が振り落とされた。

フェイントもなしの縦に真っ直ぐ。

駆ける足を止めずに横へとステップ、次に備えて武器を構えた。

落雷のように地面へ叩きつけられた一撃。

砕かれた岩肌が周囲へ礫となって弾け飛び、地震でも起きたかのよう
に地面が激しく揺れる。地面の揺れは地震大国に生きる者なら誰
しもが持つジャパニーズハーツで乗り切り、飛び散るそれは武器で叩
き落とす。特に礫に紛れて飛んでくる紫の体液は確実に。

防ぎ切れなかった岩の礫に皮膚が多少裂けたものの、当たるとヤバ
そうな体液の被弾はゼロ。致命傷もなし。身体を動かすに不足はな
い。武器に付着した紫の体液が怪しい臭いを醸し出しながら煙を上
げている以外、大した問題は見つからない。

しかし、腐食効果があるのは考えていたけれど、ここまで効果が強
いのは誤算だった。刃が駄目になるのも時間の問題。防げてあと何
回か。であれば、やはり出来る限り触れないで対処するしかない。

武器についた毒を振り払い、更に向かつてくる触手を身を翻してか
わし進む。そのまま一気に駆け抜け、水色の前へと滑り込んだ。

「うええええん！カナデえええん！」

「いいから、強化ア！」

声を上げれば直ぐに半泣きで強化魔法を掛けてくる。

腕や足に力が沸き上がる感覚が走っていった。

伊達にアークプリーストではないらしく水色の魔法の効果は絶大
で、手足にみなぎるそれは普段の数倍近いモノが宿ったように思う。

「死にたくなかったら走れ!!時間稼ぎはするけど、お前の面倒まで見
てられないぞ!!」

「で、でも！温泉が!!」

「今日は頑固だなあ！」

そうこうしてる間に触手が放たれた。

解き放たれた矢の如く、真っ直ぐに宙をかけてくる。

狙いは直線上に並ぶ俺と水色だろう。

水色はなんのかんのかわす心配がない。

寧ろ受け止めるつもりなのかキーパーみたいな構えをし出した。
これが止められるなら稲妻シュートも怖くないだろう。本当にアホ
だ。

でも、まあ、こういう馬鹿に付き合うのも悪くない。

守ろうとしてるのが、変態宗教の信者なのはいかんともし難いが。全身のバネを使い地面をコの字に切り裂き、ハルバードを二つの斬撃を繋ぐそこへありったけの力を込めて突き刺す。そして強化した腕力で、柄を地面へ向けて無理矢理押し倒した。

木製の柄が弓の用にしなり、嫌な音が柄の所から響いてくる。だが、それでも剣と魔法の世界らしくファンタジック満載のハルバードが壊れる気配はなく、逆に地面に大きな亀裂が入った。

「——ハアアツ!!」

震脚と共にハルバードの柄を地面へと更に叩き落とせば、斬撃と亀裂の入ったそこから地面が捲れ上がった。テコの原理で空へと浮き上がった地面の一部は触手とぶつかり轟音を立て弾け飛ぶ。

流石に相殺する事は出来なかったが、着弾位置を大きく逸らす事は出来た。調査隊達の方から「ゴリラだ!」とか暴言が飛ぶがそれは無視しとく。言ったやつは覚えておくけど。

「うわあ!?!ちよ、カナデーちゃんをやつて!ちよつと入っちゃったわよ!?!」

声に視線を向ければ、紫色が滲む源泉を覗き込みアワアワしてる水色の姿が見える。悪いとは思うが、こっちもギリギリで何とか直撃を防いだのだ。感謝はされても文句を言われる筋合いはない。水色の態度にそう文句の一つも出かかったが、それより早く水色が湯気の立ち上るそこへ手を突っ込んでしまい、それどころではなくなった。

「あつつう!?!あつつううう!?!ぴゅりふいけーしょん!!ぴゅ、『ピュリファイケーション』!!」

「お前つ、手を抜け!!馬鹿か!」

「嫌よ!!このまま放つて置いたら毒が回っちゃう!温泉が駄目になったら、私の可愛い信者達が生活出来なくなっちゃうの!!『ピュリファイケーション』!!『ピュリファイケーション』!!」

あれを可愛いというのは世界でこいつだけだろう。断言しても良い。

ふと視線をそこへと向ければ、やはりと思わざる得ない光景があった。

「異教徒が邪魔するな！」

「そうよそうよ！温泉の危機なのよ！生活が掛かっているの！」

「異教徒は滅びろー！」

「あつ、投げないでくれ！頼むから物を投げないでくれ！石鱈が地味に痛いから、あつ饅頭も駄目だぞ！食べ物も粗末にするな！頼むから避難を——つおふつ?!ちよつ、あつふん、らつ、らめえ！」

「何遊んでんだ、変態騎士!!お前少しは自重しろよ!？」

「おつ、おたくら余裕だな!!」

こんな時でも異教徒への制裁を忘れない逞しいアクシズ教徒の姿である。さつきまでパニックで逃げたのにもう復活してる。あの不屈さと驚異の団結力は何処からやってくるのか。本当やだ、あの一団。

ついでに避難誘導し始めは真面目だったのに、もう趣味に入り込んでる変態と、それを嗜める彼氏の姿。それと避難誘導に割り当てられた調査隊達の姿が視界に入ってくる。変態はあとで締めるとしよう。

「——はあ、まったく。水色！やるからには根性みせて最後までやれ!!あれは俺が引き受ける!!」

『ピュリファイケーション』！わつ、分かったわ！『ピュリファイケーション』！飲み込まれちゃ駄目よ！『ピュリファイケーション』全部溶かされちゃったら、私でも蘇生出来ないから！」

逃げる様子のない水色を背に、回避の間に合うギリギリの位置までスライムとの距離を詰める。すると予想通りスライムの狙いが俺へ向いた。

距離に比例するように触手の振るう頻度が高まり、巨体の進行方向が明らかに揺らぎが見える。スライムを軸に時計回りに移動すれば、それに吊られて地面を揺らしながら巨体がジリジリ追い掛けてくる。

突っ込む前に少し試して分かった事ではあるが、このスライムには恐らく知性はない。本当の姿を現す前、本人自らが溢していたようにスライムの本能とも言える食欲だけで動いているのだろう。調査隊の矢や投石で注意を逸らそうとしてもまったくの無反応。魔法には僅かに反応もあったが動きを制限する程でもない。——なのに、

地面に生えた小さな雑草には面白いくらいに飛び付いた。アクシズ教徒の投げた石鹼と饅頭でもそれは同様で、饅頭に大して進行方向に揺らぎが出る程反応を示した。その上動きを観察すれば、食べやすく食いでる獲物がいても距離があくと見向きもせず、痩せ細った近場の獲物を追ってしまいう事にも気づいた。

そう、あのデカブツは兎に角利に叶わない事ばかりする。だから思ったのだ。

あれには理性も知性もなく、本当にただの食欲だけで動いてるのではないかと。

そして、その予想は当たったらしい。

触手が鳴らす風切り音を紙一重で聞きながら。

俺は耳元スレスレを通り過ぎ、空へと遠ざかっていく触手を見ながら染々思う。

まったくもって損な役回りで、面白い役割だと。

「——もう少し、付き合って貰うぞ。デカブツ」



饅頭と弓矢を背負い戻ってくると、そこで天女が踊っていた。紫の触手の合間を縫うように、彼女は淀みのないしなやかな動きで体をクルクルと舞踊らせる。

雄々しく手にしたハルバードで風切り音を鳴らしながら、優雅に艶やかな黒髪を靡かせながら、可憐に額の汗を輝かせながら——彼女は、カナデは、その顔に見惚れるような愛らしい笑みを浮かべつつ、そこが舞台の上であるかのように華麗に踊る。

その光景に息を飲んだのは俺だけじゃないようで、作戦実行の為に
ついてきた連中も一同に言葉をなくしていた。男も女も関係なく、食
い入るようになってしまう。

動けずにいると、不意に背中を叩かれた。

意識が戻ってくる感覚と共に振り返れば真面目な顔をしたダクネ
スがそこにいる。

「呆けている場合か！恐らくアクアの強化を受けて動いてる筈だ！長
くは持たないぞ!!」

言われてようやく頭が回った。

確かにあれは普段の動きより速く力強い。

強化を受けているのはまず確実だろう。

「あつ、わ、分かってる！お前ら！用意は良いな！」

慌てて号令を出せば、背後に控えていた連中がバラバラと返事を返
し動き始める。

「これから魔王軍幹部ハンスの討伐を始める！全員役割を思い出せ！
思い出せたら、気を引き締め直してついてこい!!行くぞ!!」

再びの号令に今度は息のあつた返事が返ってくる。

俺はそれを確認し駆け出した。

巨大な敵を一身に引き付け踊る、カナデに向かって。

最後の一撃は切ない？見た感じ苛烈ですけど

「カナデえ!!そのまま後方に跳べっ!!」

触手の波状攻撃を死ぬ気で払つてると、うちの参謀にしてリーダーの怒鳴り声が響いてきた。声に従つて後方に向け全力で飛び退けば、背の前に迫っていた触手が数発の矢で撃ち落とされる。体力がギリだったので援護は素直に嬉しい。とはいっても撃ち落とされたのはスライムという不定形生物の一部。所詮はどうなっても痛くない体積の欠片。私が触手を切り払い続けても大した効果が無かつたように、攻撃の手は弛む事はないと——そう思っていたのだが、矢を受けた触手は何故か動きが鈍い。

「今の内に安全圏まで退け!!」

続けて掛けられた言葉に俺はスライムの様子を窺いながら警戒をしつつ下がった。追撃はなかった。それにやはりスライムの動きが鈍い気がする。

そうして様子を見ながら下がっていくと、視界の中スライムの足元に落ちた矢が見えた。よくよくそれを見てみれば矢の先端に何か刺さってる。

スライムは大きな体をモゾモゾ動かして近づき、そのまま矢に触れて体内へと取り込む。そして矢じりだけを美味しくないと言わんばかりにペツと吐き出した。

あれって・・・まさか、饅頭？

「よし、お疲れ！代わるぜ!!」

俺と入れ代わるように軽装に身を包んだ冒険者が攻撃範囲に足を踏み込んでいった。盾を使い触手を逸らし、身を翻し触手をかわし敵の視線を集めていく。饅頭矢の援護もあつて攻撃をかわす余裕が見てとれる。

そのまま安全圏までたどり着くと、同じような軽装に身を包んだ冒険者達が待ち構えていた。

「おしつ、よく耐えた！すげえよ、姐さん！」

「回復役後ろにいるから癒して貰つてきな。作戦についてその人が

知ってるから聞いてくるのも忘れずに」

「あつ、おい、あの野郎もうへばってやがる！交代してくるわ!!」

慌ただしい冒険者達に押されるように下がっていくと、女性ヒーラーが杖を構えて待っていた。

「怪我はありませんか？気分が悪いとかは？」

「特には・・・少し疲れたくらいかな」

「では体力回復を優先させて貰います」

ヒーラーが呪文を口にするると体が光り、怠さが少しだけ消えていった。全快とはいかなくても、もう少しは頑張れそう。

「それでは作戦についてなのですが、指定ポイントまで敵の誘導です。ポイントには弓士を立たせていますのでそれを目印にお願いします。先程のメンバーと交代で当たって貰いますので、いま暫くはお休み下さい。敵の捕捉距離については貴女自身が理解しているでしょうからその説明は省きますが・・・何か質問はありますか？」

「特にはなし。回復ありがとう」

「いえ、この程度。先程は――」

「――よおし、無事釣れた!!アクシズ教徒の皆ア、配置ついたか!!始めるぞ、ごらあ!!」

ヒーラーの声を遮るように、若干自棄つぱちなカズマの声が耳に響いた。振り向くと少し遠くの位置に弓を手にしたカズマが見える。狂信者達からは歓声のような返事が返っている。伝わってくるのは危機感よりお祭り感。割りどギリギリのやり取りしてたこつちとしては少し腹立つが、文句を言うのは後にしよう。休むのが先決だ。

「第一投射、撃て!!」

その合図と共に白い塊が空を飛ぶ。

そうしてボトボトとスライムの側に落ちたのはやはり饅頭であった。温泉マークの入った饅頭であった。

しかし間抜けな感じのその効果は絶大で、スライムはズリズリ饅頭の方へと進んでいく。

「第二投射用意――」

カズマの声で再び白い塊が宙を飛ぶ。

一斉に空を駆けるそれは流星群の如く。

そこへ白い軌跡を描いていく。

遠くから見ると、知らないやつから見ると、これはきつと間抜けな絵面だ。何せ魔王軍幹部を倒そうというのに、温泉饅頭投げている訳なのだから。笑われても仕方ない。

必死の形相で饅頭を投げる人達も。怒号あげながら盾を掲げる戦士達も。真剣な顔で水色に駆けつける神官達も。無心で弓に奇妙なおまけ付きの矢をつがえる弓士達も——きつと、それを指揮してるカズマも。

どれだけ真剣にやってもお間抜けに映ると思う。

けれど、俺の胸の中に沸き上がったのは違った。

そんな連中を揶揄するものでは無かった。

思ったのはたった一つ、それだけだった。

うちの彼氏、めっちゃカッコいいんですけど。
である。



カナデの奮戦の結果、俺が考え付いた作戦の内容は至ってシンプルだった。餌を目の前にちらつかせて誘導し、安全な場所でめぐみんの爆裂魔法を使いぶっ潰す。

それだけ。

だがこれには問題があった。

誘導しようにも温泉を優先するうちのアホ女神が、敵からの最優先タゲを取り続けている事である。

カナデがその身を持って証明した通り、敵の攻撃は常に最も近くの生物もしくは消化しやすい食べ物に集中する。その上、狙った獲物の大きさによって、ある程度優先度を変える性質があるみたいなのだ。饅頭は積極的に触手で取り込み、カナデには体を進ませたのが良い証拠だ。

今はカナデがギリギリの距離で戦っている為アクアに矛先が向いてないが、もしカナデがアクアより離れた位置に下がった場合はその瞬間標的はアクアに戻ってしまうだろう。饅頭で多少気はまぎらわせても、やはり一番の狙いはアクアのままだ。

カナデにギリギリの距離を保ちつつ誘導出来る余裕があれば良いが、現状の様子を見る限りそれも難しい。アクアから完全に引き剥がす頃にはスライムにやられる可能性が高い。

ぶつちやけ、アクアさえ逃げる気になつてくれれば、何とかなるのだ。あのデカイ図体の方とはもかく、触手は獲物を取り込むと消化の為に動き鈍くなる。その特性を上手く利用すれば逃走については余裕で援護出来るし、アクアさえいなければ饅頭だけで誘導も出来る。饅頭様々である。

まあ、尤も、あの馬鹿がその気にならないから問題なのだが。…：
仮にも女神であるアクアが本気で居座ると決めた以上、やることをやりきるまで自主的に動く可能性はない。俺が誘導しようとしても嫌だの一点張り。筋肉の塊であるダクネスですら物理的に動かすのは無理だった。

それで思いついたのが、これだった。

「――― 投射ア!!」

饅頭と人による誘導作戦。

軽装の冒険者と少量の饅頭を餌に注意を向けさせ、アクシズ教徒達と大量の饅頭で一氣に標的を切り換えさせる。

アクシズ教徒達に触手を防ぐ術はない。その為アクシズ教徒達はかなり距離を取る必要がある、その距離はスライムの標的に選ばれない距離。

だが、のだが、意味がない訳ではない。確かにスライムはある一定距離まで近づかなければ攻撃目標を変えることはないが―――それでも大量の獲物を知覚してないわけではないのだ。あれはどうやってか、獲物をかなり広範囲で感知している。

先にいったようにアレはあくまで近くの獲物を優先するが、それがなくなれば知覚範囲内で最も近く、より多くの獲物がある場所へ向かう。そしてそれは同じ距離であれば、狙うのはたった一人であるアクアではない。狙うのは大量の食料を手にしたアクシズ教徒達だ―――。

「っしやあああああ!! やってやったぞ、この野郎!!」

目標位置に投げ込まれた饅頭と誘導を任せていた冒険者達を追って、スライムがやっとアクアから予定位置まで移動してきた。アクアが安全圏に入った事を確認した神官達が一斉に駆けていく。

その様子を見てた饅頭投射班であるアクシズ教徒達が、魔法で用意した岩の影から歓声をあげた。喜んでる場合か! 直ぐその場から逃げろ! という言葉が喉から飛び出しそうになったが、俺はそれを何とか飲み込む。もっと面倒になる事が目に見える。無心で計画を進めるが吉。よし。あそこにはエリス教徒の隊長もいるし、大丈夫だ

ろ。多分。

「――誘導班は安全圏まで退避!!誘導は饅頭に切り換える!!敵がルートを外れるまで体力温存!!距離は維持したまま回復に専念してくれ!!ルートに変化があった場合は直ぐルート修正出来るよう準備だけは頼む」

指示を飛ばせば誘導班のカナデ達が手を振り上げ応える。体力にまだ余裕はありそうだ。

「饅頭班は避難場所まで進め!!最後まで護衛頼むぞ護衛班!弓班!!ここからが本番だぞ!!等間隔に撃ち込んで!!球数は限られてるからな!!無駄撃ちするなよ!!」

矢に饅頭を突き刺し、フリーズで固定。

狙いを定めて引き絞った弦から指を放す。

甲高い音と共に飛び去っていく矢は饅頭の空気抵抗で若干逸れてしまうが、それでも狙った場所付近へ落ちる。それに続いてその矢の周囲へ数本な饅頭矢が落ち、少し離れた所にも饅頭矢が降り注ぐ。

大量に投射した饅頭を飲み込んだスライムは、アクアの方には目もくれず饅頭矢を追って尚も前進。触手で饅頭矢を飲み込みながら、巨体は徐々に狙った方向へと近づいていく。動きに乱れが出る時もあるが、饅頭矢の掃射だけで方向の修正が出来ている。誘導班の損耗も未だにない。順調といいいい。

「カズマさん!!こっちはもう大丈夫だ!!あんた他の仕事あるだろ!!そっち行ってくれ!!」

敵の進行方向を確認していると弓班の一人が駆け込んできた。俺の隣に立つと矢を構える。構えたんだが、その矢の先端部分が目に入った。

「なにそれ」

「オレの非常食。ハンター様謹製の手作り干し肉だ」

「饅頭切れたのかよ」

「元からギリギリだったからな。こっからは全員の手持ちかき集めた食べ掛けもんばっかりだ。お口に合うと良いんだけど―――っな!!」

ギオンと飛んだ干し肉付きの矢は風にあおられルートから少しずれた所に落ちる。触手は追い掛けていくが、進行ルートにズレは然程ないようだ。

「もう少し近づかんと駄目かもな。まっ、こっちは引き継いでおく。弓班の指示だし程度なら任せてくれ。必ずポイントまで移動させる。あんたは止め頼むぜ。あの紅魔族はあんたじゃないと手綱とれん」
「ああーっ分かった、頼む」

その場に残りの矢を置いて、最後のポイントで準備しているであろうめぐみんの元に向かう。走り出して数分。辿り着いた最終ポイントにて、膨大な魔力の渦の中で目を爛々と輝かせているめぐみんを見つけた。

そしてその直ぐ側にはウイズと護衛として送り込んだ連中がぐつたりしてる。果てしなく嫌な予感がする。

「はああああああああ!!これはキテます!!さいっこうにキテます!!これ程までに魔力が上手く練り上がったのは久しぶりです!!これは、これは、間違いなく最高の爆裂魔法になりますよ!!ふへへへへへへへ!!!」

「気持ち悪い笑い声をあげるな!!魔女か!!あっ、魔女だった。っーか、ウイズどうした!!」

「んーその声はカズマ!!魔力と風が凄くて全然見えませんが・・・私の強さを嗅ぎ付けて見に来たのは分かります!見てください!!この洗練された魔力を!!凄いのが撃てます!!これ、ヤヴァイです!絶対ヤヴァイのが撃てますよ!!」

1日爆裂魔法をお預けにされた影響かどうかは分からないが完全にテンションが振り切れてる。恐ろしいくらいにぶっばなす事しか考えてない。普段のなんやかんやキレるめぐみんは何処に。

そして目の前にあるめぐみんの魔力は異常の一言に尽きた。伊達に爆裂散歩してた訳じゃない。成功するなら、恐らく過去最高の威力になるだろうことは容易に想像がつく。勿論、成功すれば、だが。

「おい、大丈夫なのか!?!これ、大丈夫なのか!?!」

「分かりません!!こんな撃った事ありませんからあ!!ウイズに協力

して貰って、控えてた冒険者達から魔力をちびとずつ借りたら、なんか、凄い事に!! あっ、いえ、これも全部私の才能あつてのことです!! 独力です!!」

「なんの見栄なんだよ!? てか、それが原因か!!」

不意に魔力の渦が歪に歪む。

その様子を冷や汗が吹き上がる。

嫌な予感しかしねえ!!

「ああああっん、駄目です! も、もう限界です!! 撃ちたい!! 何でも良いから撃ちたい!! この圧倒的魔力で、眼前にある一切を灰塵と化したい!!」

「まってまってまって!! 誘導班が避難してからだ!! 安全確認と、敵の誘導が完了してから!! 我慢しろ馬鹿!! やれば出来る子だろ、めぐみん! 頑張れ頑張れ!」

「ああん♡! らめえ♡! 出ちやいますう♡!」

「変な声出さないで貰えますう!?!」

魔力の渦がまた不穏に触れたその時。

遠くから光の合図がきた。

視線を目標地点に向ければ、崖に覆われたそこで巨大なスライムが餌を求めて蠢いている。

「よし、めぐみん!! 合図がきた!! やっちまえ!!」

「了解しましたあ!! やっちまいますよお!!」

めぐみんは元気に応えると杖を高く翳した。

『哀れな獣よ』

渦を描いていた魔力がうねりながら空に飛んでいく。

『紅き黒炎と同調し』

空に打ち上げられた魔力が鮮烈な赤を放つ。

『血潮となりて償いたまえ!』

幾十もの魔法陣が重なるように浮かび上がり。

『穿て! エクスプロージョン!』

その叫びと共に光りが墜ちてきた。

太陽の如く激しく燃える、灼熱と呼ぶにはあまりに生易しい——
——最強と呼ぶに相応しい一撃が。

「……おい、おい、おいおいおい!! 威力強すぎだろ!! アホなの!? ねえ、お前、限度とかあるだろ!! こっちまで余波来るぞ!? おいしいおいしい!!」

「——はふっ、わたしは、もう、やりきりました。かりにこれからすと爆裂でも、くいはありません。まんぞくです。かずま……ないす、爆裂」

「ナイス、爆裂————じゃねえからあ!! いやあああああああ——ふべえっ」

後処理が残ってるんですか？それ、あとで良いですか。ちやんとやるんで。

未だ紅蓮の残る、熱風渦巻く砕かれた大地。

倒れふす迷い子達、祈りを捧げる子羊達、絆を紡いだ仲間達を背に彼女は立ち上がった。

「悪魔殺すべし……！」

すべてを包み込む母なる海のような青の髪を。

淡い光を放つ薄紅色の羽衣を。

風に靡かせて。

「魔王しばくべし……！」

サファイアの瞳を輝かせながら、彼女は右の拳を空へと翳した。途端、暗雲の立ち込めていた大地に——いや、神々しいまでの輝きをその身から発する彼女の元へ光が落ちる。彼女を祝福するように。

「——貴様っ、この気配は!!」

彼女の姿に大地を焦土と変える一撃を生き残った異形は驚愕の声をあげる。漂う雰囲気は禍々しき紫に染まる異形はその場から逃げ去ろうとするが、彼女の仲間達が残した残り火達がそれを許さない。

その光景に紫の異形は吼える。

「その青い、髪!!羽衣!!あいつらが崇拜してる!あの、忌々しい女神は!!まさか——!!」

彼女は祈りを背に駆ける。

その身より発していた光を右の拳に集束しながら。

足を止めた異形に向かって。

「懺悔なさい!私の可愛い信者達をイジメ、パーティーの皆をボロボロにし、魔王にくみし世界に混乱を与えたその罪を!!あと、滅らさない借金の罪を地獄の底でえ!!」

「待てえ!覚えてねえけど、何となくこの惨状はおれのせいじゃねえ!どうみても爆心地だろうが!スライムの俺に出来るか!あと借金は絶対に俺のせいじゃねえだろ!!」

「問答無用!!受けなさい、女神の怒りと悲しみとほんのすこしの切なさに乗せた必殺の拳!!『ゴッドブロー』オオオオオ!!」

光を纏った拳が異形へと打ち込まれる。

空気を切り裂く必殺の拳は異形の形を容易く歪ませ、その口から絶叫を上げさせた。されどまだ、異形の体は消失せず拳へと抗いを見せる。

「この、程度のっ!攻撃で!!俺は、魔王軍幹部!デットリい、ぽいつ、ずん、スライムだっ!喰らって——この力はっ、お前っ、ま、まだ!!」

「そして、これがあ、女神の愛と哀しみの鎮魂歌!!『ゴッドレクイエム』ツツツツツツ!!」

聖歌の如く紡がれる祈りを拳に乗せ、彼女は——女神アクアは二つ目の拳を異形へと叩きつけた。流星の如き光の濁流が異形の体を貫き、砕き、塵へと変える。

「こんな、こんなやつにい——!!」

彼女の拳から放たれた光は異形を飲み込み空へと駆け上がる。大気を揺らし闇を貫き、周辺一体を太陽の如く照らしながら真っ直ぐに高く。何処までも高く。

人々は空と大地を繋ぐ、その光の柱を見た。

彼女が産み出した奇跡を。

「——っていう、夢を見たのか」

「ちつつつがうわよ!!」

魔王軍幹部討伐から翌日。

宿で目を覚ました俺達は事の結末を知っていると言い張る水色の話を食事をしながら聞いていた。

ベーコンエッグ美味しい。

「本当なの！そんな感じで私が大活躍してあの忌々しい魔王軍幹部倒したの！ほら、ギルドからも討伐記録だって貰ってるでしょ!!なんてそんな可哀想なものを見る目でみるの!?!おかしいわよ!おかしいわ!」

怒り狂う水色にカズマ達がジト目を向ける。

「そうは言ってもなあ・・・お前のゴツドブローとかゴツドなんちゃらっていうの、まともに機能したの見たことないからな。魔力がバカ高いことも、ステータスの筋力が高い事も認めるけど、それはお前幾らなんでも盛りすぎだろ」

「盛りすぎ!?!何言ってるのよ!カズマは知ってるでしょ!私は女神よ!歴とした女神なのよ!それくらい出来るの!元から出来るの!カエルは、いろいろ、なんか、あれだっただけで、ゴツドレイエムは受けたら本当に死ぬの!本当よ!?!」

身振り手振りを交えた必死な言葉に、めぐみんが仕方ないと言わんばかりに溜息をついた。

「まあまあ、カズマ。倒したのは本当のようですよ、この際その過程については追及しないで置きましょう。私にはそういう経験はありませんが、その、なんとというか、気持ちは何となく分かりますので」
「まっつて、めぐみん!私のどんな気持ちが分かったの!?!その顔は分かかってないやつだと思っんですけど!?!その過程を信じて欲しいだけなんですけど!?!」

「分かります。アクア。時に人は見栄を張りたい時もあります。今回は、誰も傷つかない嘘ですし、私は信じますよ」

「それは百万パーセント信じてない人の台詞よ!!だあ、もうっ!ダクネス!ダクネスからも何か言っつて!ちよつと意識あつたでしょ!回復させた時、起きてたでしょ!」

水色に泣きつかれてダクネスは苦笑いを浮かべ困ったように頬をかく。

「すまない。弁明してやりたいのは山々なのだが、あの時の事はあまり覚えていないんだ。意識は朦朧としていて、アクアに回復して貰い

始めた頃からしか・・・流石にあの規模の爆裂魔法は堪えた。よもや、あれほどの威力とは思わなくてな。ああ、しかし、本当に凄まじい威力だった。あまりの威力に震えた。魔王軍幹部にもきく威力という事は、すなわち魔王軍幹部級の威力ということ。そう考えるとあれは・・・いや、何でもない」

「か、カズマあ!!カナデ!!ダクネスが完全に変な扉開いちやってるわ!大変よ!!もう痛くしてくれるなら、何でもいいみたいになってるの!!」

「ちがつ、そんな事は言っていない!!止めろ、アクア!!私を何だと思ってるんだ!!」

「安心しろ、アクア。そいつの変な扉とやらは年中無休ずっと開きっぱなしだ」

「カズマ貴様あ!!」

カズマとダクネスが仲良く取っ組み合いし始めた所で水色が涙目でこつちを見てきた。仕方ないので手招きして、側に寄ってきた頭をぐりぐり撫でてやる。

よしよし、頑張ったなあー。うんうん。わかってるわかってる。助けてくれてありがとなー。ほら、野菜スティックだぞー。はい、美味しいね。うんうん、帰りに地酒一杯かって帰ろうな。

その時の状況は兎も角、あのスライムを倒しきれてなかった以上、意識を失い倒れていた俺達がピンチだった事に変わりはない。実際こうして討伐記録もある。一回意識を取り戻した時、荒れ地で元気にチョコチョコ動いていたのは水色だけだった。余波を受けたと思われる貧乏店主が薄くもなってたし・・・今回に限り信じてやろうと思う。今回に限り。

暫く慰めていると元気を取り戻した水色は勢いよく立ち上がり、「街にいった皆にお祝いして貰うわ!」と出掛けていった。正直行かせたくなかったが、ワクワク顔のダクネスが様子を見るとの事なので見送ることに。

宿の玄関を出る時”水色の話が本当ならアクシズ教徒が良い意味で黙ってないと思うのだが、なんでこんなに静かに過ごせるのか?”と疑問を抱いたが、まあ放っておくことにした。泣かされて帰ってきたら、その時はまた慰めてやろう。何時間もつかない。

めぐみんはご飯を食べ終わったら貧乏店主を伴って爆裂散歩に出掛けていった。昨日の今日だというのに元気一杯であった。いや、昨日の今日だから、かも知れない。

あと、貧乏店主がまだちよつと薄かった。カズマ経由でダクネスエネルギー送らなかつたら今頃成仏してたかも知れないな。あれは。

因みにカズマも例の如く爆裂散歩に誘われたが、戦いの影響で全身が痛いとの事で宿に残る事になった。

俺は温泉に入りたかったので普通にお留守番を選択。アクシズ教徒と会いたくないし、他に選択肢はない。

さて、明日はいよいよ帰る日。

明日の出発は朝が早く、朝風呂に入ってる時間もない。なので今日がゆつくり温泉に入れる最後の日なのだ。

俺は着替えを手に宿の温泉へと向かった。

「……………はあ」

皆と別れてから少し、無事温泉に浸かる事は出来た。

出来たが……………少し問題がある。出来た、というのが正しいのかも知れないが。

目の前にある湯気の立ち込めるそれを手に掬い、そつと嗅いでみる。そこに昨日まで漂っていた硫黄の臭いはなく、色も温泉と呼ぶにはあまりにもあまりに澄んでいた。そういう温泉もあるだろうが、少

なくとも昨日はちゃんと色があつたのに。

「……あいつ、やったな」

犯人には心当たりがある。

こういう事を出来る人間はそうはいない。

今朝の様子から悪戯を企んでいたようには思えなかつたので、これは恐らく犯人も意図しない出来事だつたに違いない。

「……本当にゴッドなんちゃらやったのか。あいつ」

貧乏店主が余波で消滅しかけた一撃。

浄化魔法としての効果もあつた破壊の一撃。

当然比較的近くにあつた源泉にもその人ならざる者の力、正真正銘の神パワーを示してしまつたのだろう。

「——はあ、まあ、広いお風呂つてだけでも、悪くはないけどな……俺は」

そう、俺は。街の人間が納得するかは別の話。

道理であいつの元に誰もこない訳だ。今頃街はパニックが起きてるのであろう。当たり前前に出ていた温泉が全てお湯に変わつてしまつて。

そしてそこに、元凶たるあのお馬鹿は突っ込んでいった、と。成る程。頭痛いなあー。

「うーん、ダクネスだけで何とかなるのか？」

言っちゃなんだが、何ともならない気がする。

あーん、ん。もういいや。

考えるだけ疲れる。

ぼーつとしてるとガラガラと戸が開く音が聞こえた。

振り返ってみればカズマがこそつと覗いてる。

部屋に備え付けてある個室とはいえノックぐらいして欲しいものだけど……まあ、良いか。見られたからつて別に減るものでもないし。

「入ってOK？」

「良いぞ」

そう許可を出せばカズマがビクリとした。

「どうやら入りにきた訳ではないらしい。
よくよく見れば浴衣も普通に着てる。」

冗談のつもりだったのか？分かりにくい。

「・・・あっ、や、つ、疲れてるかなあーと」

「そういうの気にするならノックもしろ。びっくりするだろ？大丈夫だから入ってこい。背中流してやるから」

「あっ、はい」

大人しく服を脱いできたカズマに合わせ、俺も湯船から上がった。今更タオル巻くのもアホらしいのだが、カズマが隠してくれとお願いするので胸元の所から股が隠れる大きめのタオルを巻いとく。どうせ湯船に戻るんだから、巻いたって仕方ないだろ？と聞くと、タオルの大切さをとくとくと語られた。濡れたタオルのしたに見える体のラインとか、うつすら見える肌の色とか、股間がギリギリ見えないチラリズム感とか、なんかそんなのが良いらしい。

その気持ちはまったく分からないとは言わないが、お互い飽きる程裸見せ合ってるのに、何を今更・・・と思わなくもない。いや、やるけどさ。

宣言通り背中を流してやって（エロなし）一緒に湯船に浸かった。隣に座ったカズマは何かしたそうだけど、これはスルーしておく。直ぐそんな事言ってもらえない状況になる気がするからだ。主に水色関係で。

「なあ、カナデ・・・」

「んー？」

ぼんやりしているとカズマの手が腰に触れた。

探るように優しく撫でてくる。

「お前、体痛いんじゃないのか？」

「まあ、全然痛くないという嘘にはなるな。傷自体はアクアが治してくれたし言うほどじゃない」

「そっか、それなら良いけど」

コテつとカズマの肩に頭を預けると、腰を撫でてた手が体を支えるよう置かれた。視線を上げてカズマの顔を覗けば、分かりやすくえっ

ちな顔してる。欲望に正直か。こいつ。まあ、いつもならドンとこいなんだが・・・今はなあ。

「あのなあ、カズマ——んっ」

水色達の事を教えようとしたら、カズマに唇を塞がれた。いきなり舌が口の中に潜り込んできて、遠慮なしに口の中を這いずり回っていく。ざらついた感触が口内を暴れていく。ゾクゾクするほど、厭らしい音を立てながら。

俺の口の中を蹂躪しながら、カズマは空いてる手でお腹に触れた。酷く優しい手つきで、壊れ物でも触るように。カズマの指はその場所を撫でていく。

「——っ、は、カナデ」

息が苦しくなるほどの長い口づけを終わらせ、カズマが切なそうな声をあげた。けれどそんな声とは対称的に、

カズマの目は獲物を前にした獣みたいにギラついていた。見るだけで撫でられているお腹の所がきゅつとする。

「しても、良いか？実をいうとな、昨日の戦いの後から、おさまりが悪いというか、なんとというか・・・」

おねだりカズマ可愛い。

その仕草だけで俺のあそこは受け入れ準備しちゃってる。・・・いや、違うか。これは昨日からずっとだ。疼いていた。

だって、あんなに格好いい姿を見せられて、胸がときめかない訳がない。怪我なんてしなければ、絶対カズマを誘ってる。それこそ朝までコース。頭が馬鹿になるくらいカズマにいっぱい可愛がられて、苦しくなるぐらい精を注ぎ込まれて、蕩けそうなほどキスをして、何度も指を絡めて、キスマークつけあったりして——。

だから一思いに領いてこのままカズマに付き合っただけで、あの馬鹿共がなあ——。

「・・・まっ、いつか」

「ん？」

「昨日頑張ったのは俺もだし。ご褒美くらい貰っても罰は当たらないだろ。うん。あとでやれば良いや」

きよんとするカズマの唇に、俺は自分の唇を重ねる。

さつきのお返しに今度は俺が舌を挿じ込む。

舌を絡めて、唾液を啜って——昨日やりたかったそれをぶつける。

応えてくれたカズマの指はお腹を伝って下へ。辿り着いたそこでじんわりと濡れる秘部に触れる。

カズマの指は少し膨らんだそれを摘まみ、くりくりと刺激してきた。重ねた唇から思わず甘い声が漏れる。

ゾクゾクするものが背筋から這い上がってきて、俺は弄ってくるカズマの手をそつと止める。

「——カナデ？」

「だあめ、本気でしなくなっちゃう」

秘部を弄っていたカズマの指を口元に引き寄せ、それに舌を這わせた。ペロペロと舐めると少ししょぱい味がする。そのまま口に含んでしゃぶってやれば、カズマの荒い息づかいが耳に触れた。

「んっ……ここですると、あいつらがきちゃうかも知れないだろ？それでお預けなんて、やだ。むり。だから、二人きりになれる場所つれていって。カズマ、俺な——」

カズマに体を這わせながら耳元に顔を寄せる。

出来るだけ甘い声を出せるように心掛けて。

そつと吐息を交えて言った。

「——子供りえつちしたいの♡本気の、えっち。いっぱい、いっぱいカズマの赤ちゃん汁、ここに欲しい……ねえ、お願い♡」
効果を確認する為に体を離して顔を覗けば、カズマが赤い物を鼻から流していた。つーつと。音もなく。

「……あつ、はい。ちよ、ちよつと、ちよつと待ってる……！待ってる下さい!!」

鼻血を出したカズマは湯船からあがると勢いよく駆けていった。滑るから気をつける、と声をあげる前に見事に転ぶ——が、こけな。突撃する猪みたいに鼻息荒く、態勢を素早く整えて滑りながら脱衣場を出ていった。凄い、エロパワー凄い。

「うーん、さてと、エッチしますか」
恐らく泣いて帰ってくる水色達に心の中で軽く謝って、俺も湯船からあがった。

☆肌を重ねても良いじゃない！あなたの温もりが欲しいんだもの。

カズマの手配で新しく借りた宿の一室。

閉めきられた薄暗い部屋の中で、俺達は息を切らしながら一心不乱にお互いの唇を貪っていた。口の中はお互いの唾液でどろどろ。下腹部の繋がった所からは厭らしい音が響き、腰がピストンする度収まり切らない白濁の液体が溢れる。

「っ、かず、まつ、んっ、んん」

名前を呼んで触れあう体にしがみつく。

もつとカズマの体温を感じたくて。

ぎゅっ、て。

そうしたらカズマも応えるように体を抱き締めてくれる。痛いくらいにぎゅうって力強く。いつもは壊れ物を扱うみたいに優しいのに、返してくれたそれは凄く乱暴。――でも、嫌じゃない。だって目の前にあるカズマの瞳が、繋がった性器から、体を締め付ける腕から伝えてくれるから。押し潰れそうまでの熱烈な好意を。火傷しそうな程の激しい情欲を。

求められてるのが分かる。

その全身全霊で。

この目の前の男に。

「かな、でっ、カナデ．．．！」

「――っんくう♡！」

切ない声を上げながら熱く滾った物を俺の中へ吐き出した。何度目になるか分からない射精に、何度目になるか分からない絶頂に頭がぼんやりする。もう俺の赤ちゃん部屋はカズマに注がれた物で一杯で、注がれたそれは直ぐに溢れ出てベッドに新しい染みを作ってく。

「かずまあ♡もう、はいらにやい、よお♡」

ベッドに横たわったまま、覆い被さるように股がるカズマへ何とか声をあげたら、俺の中に入ったカズマのそれが固くなるのを感じた。

カズマは何も言わず固くなったそれで奥をグリグリしてくる。敏感になったそこからビリビリと刺激が走り出す。背筋を這い上がってくる甘い刺激に思わず仰け反ってしまう。

「やつぁ、ら、らめえ♡かずまぁ、いま、は、らめなの♡ひって、るからぁ♡あたま、ばかになつひやう・・・」

「お前は、元から頭は馬鹿な方だろ。今更何気にしてんだよ、ど変態。それに、そんな嬉しそうな顔されて、止められる訳ないだろ」

カズマのそれがグリグリするのを止め、赤ちゃん部屋をノックしてきた。とん、とん、とん、と。

それに合わせるように、俺のあそこはカズマのそれをきゆうきゆう締め付けてしまう。

「分かるか、カナデの一番奥。俺のチンコにちゆうちゆう吸い付いてるの。いつもよりずっと下に下りてきてるの」

「っん、んあ、あん♡わ、わかん、にやい♡わかんにやい、から、おしえてえ♡かずまぁ・・・んっ♡」

「ぬぐつ、く、し、しようがないな。教えてやる」

鼻を抑えたカズマはもう一つの手でそっとお腹に指を這わせる。

「いつもは多分ここら辺、お前の赤ちゃん部屋があるんだ。でも——」

「——」
「つーつと、指が肌を伝いながら下へと移動し、ある場所に辿り着くと優しく撫でてくる。」

「——」
「今はここ。意識を集中しろ、ここだぞ？」

お腹を撫でながら、カズマはゆっくりソレを奥へ押し付けた。意識が集中していく。グリグリと押し付けられたソレに、俺のそこがちゆうちゆう吸い付いてるのが分かってしまう。離さないように、少しでもカズマのソレがそこにいるように。必死になって吸い付いてる感触が、どうしようもないくらい分かってしまう。

顔が、体が熱くなってくる。

火が出そうな程。

だって、恥ずかしいのだ。

だってそれは、カズマに俺がどれだけ種付けして欲しいか言ってる

ようなものだ。言葉は取り繕えるけど、これは本音の本音。打算も、何も無い。俺の心の、一番奥にあるもの。

思わず顔を隠そうとしたら、手を押さえつけられた。

熱くなつた顔がカズマに見られる。

「ああん♡かずまあ♡やらあ、みちややあ♡いじわる、しちや、やあらのお♡」

「お前、本当、お前なあ——」

「——ひやあん♡！」

腰が強く打ち付けられた。

意図せずあがつた嬌声にカズマは喉を鳴らす。

そしてまた腰が打ち付けてくる。

何度も。

「——好きだ、カナデ」

甘さが滲んだ声が耳を擦る。

「カナデ、好きだ」

腰を動かしながら、カズマは囁いてくる。

「カナデ、カナデっ！」

「やあああああんん♡♡♡!!」

一際強く、カズマのソレが打ち付けられた。

勢い良く押し込まれたソレが赤ちゃん部屋を抉じ開けて、また盛大に熱くて熱くてどうしようもない物を注ぎ込んできた。瞬間、頭が真っ白になって全身が痺れるような感覚に支配される。目の前がチカチカして、頭の中がフワフワした物で一杯で、知らず知らず体から力が抜けていく。

入りきらない白濁が音を立てて吹き零れるのを感じながら、ぼうつとしてるとカズマが俺の横に寝転んだ。視線を送ると、荒い呼吸をしながらこつちを見つめるカズマと目が合う。こんなにえつちしたのに、まだカズマの瞳には情欲の炎が映ってる。

「カナデ……」

ゆつくりとしたどうさで、カズマの手が俺の頬に触れる。

「こつち、きてくれ」

甘えるような声に、俺の体は動いた。

「もうくたくたな筈なのに。」

それが当然みたいに。

ベッドの上をずりずりして近寄ると、カズマの腕が俺を抱き締めてくる。俺の髪に顔を埋めて、ぎゅつと。

そしてスンスンと鼻を鳴らす。

「カナデは、甘い匂いがするな」

「んっ、やらあ。いまは、くんくんするなあ」

「大丈夫だ。汗臭くない、少しも。良い匂いなんだよ。本当に。寧ろずっとうとうしてたいくらいだ」

「ん、もお・・・」

注意したけど止める様子が全然なくて、俺は諦めて筋肉質な胸板へ頬を寄せた。カズマの温もりと、鼓膜を揺らす心臓の音が心地よい。

「なあ、カナデ」

「んー？どしたあー」

「呼んでみただけ」

「んふふ、なんだよ、それ？」

おかしくて笑うとカズマの指が唇に触れた。

ふにふにと、指で押してくる。

あんまりずつとふにふにしてくるから、パクつと噛みついてやった。少し驚いたのかカズマの肩が跳ねる。

そのままガジガジ甘噛みしてやれば、お返しにと指が舌に絡んできた。

「舐めてくれ。えっちに」

蕩けるような声に従ってカズマの指を舐めた。

カズマのソレを舐める時みたいに。

舌を絡めて、しゃぶって、啜って。

ちゅぱ、ちゅぱ音を立てながら指を弄んでると、カズマの足が俺の足に絡んでくる。凄く厭らしく。

視線をあげると、カズマの熱の籠った瞳と目が合う。

「カナデ、好きだ」

「・・・んふふ、きいた。さつき。おれも、すき。だあい、すき♡ぜつたい、おまえよりすき♡」

「いいや、俺のが好きだから。この歳まで色々と拗らせて引きこもってた童貞舐めんなよ。死ぬほどチヨロいんだからな。お前が嫌だっ ていつても、もう離せないからな。あれだぞ、別れてもストーカーと かするからな」

「なんだ、それ・・・ふふ、へんなの。——でも、まあ、いいよ？すとーかーしてもさ。おふろだつて、といれだつて、ねるときだつてつ いてくれば？かずまがみたいなら、ぜんぶみせてあげる♡おれがやつ てあげられることなら、ぜんぶしてあげる♡」

だつてもう、俺はカズマのものつもりだ。

カズマが不幸にさえならないなら、何だつてしてやるつもりなのだ。エツチな事だつて、何だつて。

「お、お前つ、おお・・・」

鼻から赤い血を垂らしながら、カズマは顔を真つ赤にさせた。可愛 いくて頬つぺたにちゆうすれば、もつと赤くなつていく。可愛い。凄 く、可愛い。

「あつ、あのな、ストーカーだつて言つてんのに、そこは許すなよ」

「ゆるす。だつて、かずまならいいもん・・・というかな、もつと、み てほしい♡もつと、もつとみてほしい♡」

「そういう話じゃないんだつつの・・・はあ、いや、良いか」

呆れたようにそう溢したカズマは、そのまま唇を重ねてくる。啄む ような軽いキス。ちよつと物足りなくて上目遣いで見つめると、カズ マは髪を手櫛てすきながらキスしてくれた。

嬉しい。

「髪の毛サラサラだな」

「ん、すき？やっぱりながくしよつか？」

「あー、何この子。本当に、もう、止めて。可愛い。なに、本当、俺のこと殺しにきてるの？萌え死ぬよ？そのうち」

「ええー・・・しんだら、ふつーになくぞ？」

「精一杯生きさせて貰います」

「んふふ、そうしろ」

カズマの体に頬を擦り寄せ目を瞑る。

髪をとかす優しい手の感触に胸がポカポカとしてくる。

あんまりにも気持ち良くてウトウトして——不意に甘い痺れに目を覚めさせられた。

「目覚めたか？カナデ姫」

声に視線を向けると、カズマは背後から抱き着くような体勢になっていた。ウトウトしてる間に位置を変えたのか、それとも俺が寝返りでもうったのか。その理由は分からないけど、一つだけ悪戯された事だけは分かった。

頬を膨らまして怒りを伝えようとしたら、甘い痺れが走ってきて文句の変わりに嬌声が漏れる。痺れの走ってきたそこに目を向ければ、背後から回されたカズマの手におっぱいが驚掴みされてる。カズマの指の動きに合わせてむにむに歪む乳房から、言葉に出来ない刺激が走る。くすぐったさの混じる性的な刺激が。

「っ、っん、ん、あん♡」

不意に、膨らんでしまった突起が指で摘ままれた。

思わず肩がびくついて、俺の中がきゅっとする。

カズマの指はその反応を楽しむように、焦らしながら時折強くその場所へ刺激を与えてくる。摘まんだり、引つ張ったり、弾いてみたり、転がしたり。

「やあ♡ん、あう♡♡」

すっかり慣れた手つきで。

執拗に。

「かずっ、まあ♡」

股の所がウズウズしてきて声をあげた。

自分で思ってるよりずっと甘い声が出て、少しだけ恥ずかしい気持ちになる。

だけど、そんな事は直ぐにどうでも良くなった。

だってまた固くなったソレが、俺の中に入り込んで来たから。

「あっ、ああっ——」

ずずずつと、きゆうきゆう締まる肉の壁を押し退け。
固く反り返ったソレが奥へと進んでく。
そしてまた一番奥に触れた。
ちゆう。

吸い付くような感覚がお腹の下の所から伝わってくる。
さつきカズマが教えてくれた場所から。
しつかりと。

「んふう♡」

突き刺さったカズマのソレは、はしたなく吸い付く俺の子宮口をなぞるように動く。狭い空間を押し広げながら。まるでマーキングでもしてるみたい。そこは俺のものだぞって、教えられてるみたい。

「カナデ、動くぞ」

「らっ、らめえ♡まつひえっ——ふにゃあ♡！」

カズマは俺の体を抱き締めながら腰を動かす。

激しいピストンではなく、ゆっくりねっとりした動き。

でも気持ち良くないなんて事はなくて、いや寧ろ激しいピストンよりゾクゾクするものがあった。

「っ、カナデっ、あんまり締めるなよ。直ぐ出ちやうだろ」

「そっ、んにゃ、こと♡ひっ、ひやって♡」

焦らすようその動きに、俺の中はどうしてとひくついてしまう。いつもよりぎゆうって、ソレを締め上げてしまう。意識すると余計にそうなってしまうって、何も考えられなくなってしまう——。

「ツツツツツんんあっ♡♡♡!!」

まだカズマが出してもいけないのに、痺れるような快感が頭の中を突き抜けていった。俺のあそこがぎゆうぎゆうに締まって、その刺激がまた背筋を這い上がってきて体がびくついてしまう。目の前がチカチカして、意識がぼんやりしてくる。

「んあ♡!?!」

全身を走っていった快感の余韻に浸っていると、俺の中に差し込まれたそれが動き始めた。敏感になったそこは僅かな刺激さえ、稲妻で

も走ってるのか如く激しく背筋を這い上がってくる。

ほんの少しカズマのソレが引いていかれただけなのに、頭がおかしくなりそうな程の快感が頭の中を駆け巡る。

「カナデっ、動くからな」

「らっ、らめえ♡!!いみや、ほんろ、らっ♡!!んんんっ♡!!っ♡♡!!あん♡♡♡!!とんっ、とん、しひや、らめえなのお♡♡♡」

カズマは少しも止めてくれない。

「カナデっ!」

「りやめえ♡♡!かずゆ、ま♡♡!ばかつ、になっひやう♡♡!!ほん、と、まっ、きゆうん♡♡!!ああ♡!いきっ♡しゆぎてえっ♡わかんにかく♡にやる、かにや♡♡♡!!」

切ない声をあげながらソレを何度も奥に突き刺してくる。

「また、出すからな。カナデっ」

「やあら♡!いま、は、らめえ♡♡!かずまの、こと、しゆきに、なっひやう♡♡!だみえな、くりやい、しゆきに、なっひやうからあ♡♡♡!!」

「そうして、くれよ。俺以外見るなよ。俺だけ見てろ。孕め、カナデ」

—— ツツツ!!」

鼓膜を揺らしたカズマの声に、俺のあそこがカズマのソレを強く締め上げた。その瞬間またカズマの熱が赤ちゃん部屋の入口を突き破って、パンパンになったそこへ注ぎ込まれる。そしてそれは快感の濁流を身体中に走らせて、体を跳ねあげさせた。

「はあ、はあ、カナデ・・・大丈夫か?」

「っん、ら、らめえ・・・も、もう、ほんろ、らめえ♡・・・じゆ、じゆっぶん、まってへえ♡」

「底なしか。俺は流石に10分じゃ回復しないわ」

「ひーる、ちゆかつて、まっへへ♡しゆぐ、ふっかちゆ、しゆるかやあ♡」

「ヒールにそういう効果ないから」

結局その後もお猿さんのようにエッチして、思い残すことなくすつきりきつかり終わったのはどっぴり日が暮れてからだ。それから二人でイチヤイチャしながら夕飯を食べて――街の広場で見かけたアクシズ教徒に張り付けにされてる水色を助けて帰ったのだった。

泣くな、泣くな。あいつらは俺とカズマで締めておくから。明日にでも。ん？ そうな、頑張ったよな。水色は偉いねえー、偉い偉い。明日は帰りに地酒とおつまみ買って帰ろうな。うん。えっ？ なんか生臭い？ 気のせいだろ（脅迫）。

あーごめんだけど、誰の何がなんだって？ん？

「——では以上を持ちまして、アルカンレティアの温泉の問題に対する本件について和解成立とします。代表者はお手元の契約書を確認して頂き、契約書に誤りや内容に異論がなければ同意を示すサインをお願い致します」

息が詰まりそうな室内で静かにカズマが書類を確認する。隣から見ると、紙を手にし余裕たつぷりに眺めるカズマの姿は中々様になって気がした。素直に格好いい。好き。まあそれも、彼女としての欲目かも知れないが・・・彼女、彼女かあ。ふふ。彼女・・・ふふつ。ムラムラしちやうなあ。もう。

重く静かな雰囲気とは対象的に、カズマの事を考えてると思わず頬が緩んでしまう。

するとそんな俺を見て、カズマが真剣な表情を浮かべながら顔を寄せてきた。

「カナデ、この書類、書き方回りくどくて全然分からん。大丈夫？」

・・・お前、何を真剣に見てたんだ。おい。

百年の恋も冷める気がしたが・・・まあ、それがカズマだしな。そんなカズマが好きな訳だし。ていうか、そこまで完璧になられると、それはそれでちょっと違う気がするしな。うんうん——めぐみん、水色、ダクネス、そんな目で見ないの。顔を立てろ。今は。止めなさい。

色々言いたい事を飲み込んで、俺は書類を確認した。

特別おかしな所もなく問題ないように思えたので、問題がない事を伝えればキリツとした顔でサインする。

テーブルを挟んだ対面に座るアルカンレティア温泉管理組合の面々の中には若干渋い顔の奴等がいるものの、俺がにつこりと笑顔を見せつけければ額に汗を流しながらサインしてくれた。物わかりが良くて宜しい

お互いがサインした書類を仲介者であるギルド職員に渡す。ギルド職員は書類を確認したのち、魔法で印をつけて立派な筒の中へとそ

れをしまい込んだ。

これで今回の水色のやらかしは帳消しだ。

水色を回収した翌日。

帰る前にお土産を買っていた俺達は、この街のギルド職員に足を止められた。理由を聞けば水色がやった事に対して、この街の温泉を管理してる団体から猛抗議がきたそう。そして抗議だけならまだしも、水色が温泉の件で発生した損失を補填しなければ、警察に被害届を出すとも。帰りの旅は急遽中止。その日から告発者である温泉組合の連中と話し合いをする事になった。

温泉組合の要求額は法外とは言えずともかなりの大金。今後の宿の経営を考えたら寧ろ安いくらいのものである。良心的といえれば良心的。

ただ、それでも個人が払うには高過ぎる額。こっちとしても簡単に領く訳にはいかない。

なので話し合いは数日に渡った。当然お泊まり延長。流石にこれまでの宿は高かったので、冒険者ギルドが紹介してくれた安宿に変えたが……え？その間？そりゃ、やることやったよ。当たり前だろ。そこに温泉があつて男女がいたら、そりゃやるよ。隙を見つけて盛りをついた猫が如くやったわ。良かったよ、凄く良かった。

そんな夕べはお楽しみでしたね状態な俺達と温泉組合の話し合いは難航した。何せどちらにも譲れる余裕がない。温泉組合も引かない。こちらも引かない。

お互いの妥協点を探り、探り、探——らせて手に入れた情報を元に温泉組合と楽しいOHANASIAIをし、今回の魔王軍幹部の懸賞金全額を補填にする事で黙らせた。ついでに水色が起こした問題の一切を不問とし、今後この件について追及しない事を約束させたりした。

あつ、宿代は冒険者ギルドに払わせた。彼らの都合で止めた訳だからね。勿論だよ。いやー、やっぱり話し合いが出来るって素晴らし

いなあ。

水色は最後までゴチャゴチャ言ってたが、頑張ったご褒美に高いお酒を買ってあげる事、屋敷に帰ったら好きな酒の肴を作る事を約束したら満面の笑みでOKサインを返してきた。水色の人生は本当に楽しそう。

話し合いも終わり、この後どうしようかなあーとか、隙があれば最後にデートとかしたいなあーとか考えながらウキウキしつつギルド館を出た所で「あー！ー!!」と女の子の声が聞こえてきた。また面倒事かと視線をそこへと向ければ見たことある女の子がそこにいた。

胸元が大きく開いた服を着た、赤い瞳を煌めかせる巨乳の魔法使い。めぐみんの友人である『ゆんゆん』である。

「もうっ、めぐみんったらー！何にも言わないだから！旅行に行くなら行くって、一言くらい教えてくれても良いじゃない!!」
プリプリと怒るゆんゆん。

俺の隣にいるめぐみんは冷たい眼差しを送る。

相も変わらず素直じゃないな、どっちも。

「それで追い掛けてきたのですか？暇ですね」

「おっ、追い掛けてなんてないわよ！これには——」

「どうせ私達が出掛けてる間、何度も屋敷にやってきたのでしよう。冬も終わりとはいえ、まだまだ仕事は少ない筈ですからね。ぼっちで出来る依頼なんてたかが知れてますし」

めぐみんの指摘が凶星だったのか、ゆんゆんが思い切りたじろぐ。その様子にめぐみんが頬をつり上げる。いじめっ子の顔だ。

「まったく、ぼっちは困ったものですね。拗らせるとこんな事をするようになるとは・・・はあ、一応友人である身として悲しい限りですよ。待つくらい出来ないものですかね。今更来ても、私達も帰る所ですよ。いつになった——」

楽しげにゆんゆんを虐めるめぐみんを見ると、カズマが呆れたよ

うに溜息をついた。ダクネスは困ったように笑い、水色はお帰りムードなのかも露店へスキップしてつた。あいつは駄目だな。

「何だってこいつらは会う度に喧嘩するんだ。まったく。喧嘩するほどナントカつていうが、もう少し静かに再会出来ないのか？」

「まあ、人には人の付き合い方があるからなあ。それに喧嘩といつてもただのじゃれ合いだし、大目に見てやれよ。可愛いもんだ。……女同士のガチ喧嘩とかこんなじゃ済まないぞ。俺が働いてたギルドも——」

「止めて、怖い。裏のお話しないで。ギルド行けなくなるから」

そんなに怖い話でもないのに止められてしまった。

カズマが嫌なら聞かせないけど……そんなに怖い話でも無いんだけどな。ただ、男を取り合つて散々陰湿な嫌がらせの応酬を交わした後、裏口で血みどろの殴り合いしてただけで。端から見ると普通に面白かったんだけどなあ。結局その二人も仲直りして、この間バイトいったら一緒に仕事してたし。何故か男は捨てられてたけども。

「だつ、だって！予定が過ぎても全然帰つて来なかつたじゃない！」

「——ひゅっ!？」

不意にあがった大声に思わず肩が跳ねる。

それはゆんゆんの側にいたためぐみんも同じで、こっちにいる二人も同様だ。水色？水色は既に露店で試食の饅頭食べてるよ。なんて幸せそうな顔するんだ、あいつ。こんな何か面倒な事が起きそうな時に、あいつ（怒）。

そうこうしてる内にゆんゆんが涙目で反撃を始めた。

何日か屋敷に顔を出しにきたらしいが俺達が一向に帰ってくる気配がなく、仕事先で何かあったのかと心配してギルドに確認しにいったらしい。すると温泉旅行にいつてる事が分かり一先ず安心したものの、今度は帰つてくる予定日になつても一向に帰つてこない。

不安になつてギルドに確認しにいけば、魔王軍幹部を討伐した件で揉めてるらしいと聞き、デストロイヤーの時のような事になつてるかも知れないと——心配で様子を見にきたそうだ。

涙目で必死に訴えてくるゆんゆんの姿に今度はめぐみんが狼狽え

てた。基本、ド直球に弱いめぐみん。ストレートに「心配して」と言われてから、すっかり赤く染まった顔であわあわする姿は年相応で可愛いの一音である。

「なんか話長くなりそうだし、露店で何か買ってくるか？」

「露店か・・・さつきアクアが食べてた饅頭気になってたんだよなあ」
「じゃあそれ買ってくるか。ダクネスは？」

二人を眺めていたダクネスへと視線を向ければ、ダクネスは顎に手をやって考え始めた。

「確かに美味しそうに食べてたな。しかし、食べ歩きというのは少々頂けないのだが・・・いや、まあ、郷にいつては郷に従えと古の勇者の言葉もあるしな。うん。私の分も頼めるか、カナデ」

「はいはい、じゃその間二人のこと宜しくな」

財布を手に歩き出すとカズマも着いて来た。

どうしたのかと聞いたなら、元から一緒にいくつもりだったらしい。

別に断る理由もないので二人の事をダクネスに任せ、俺達と一緒に露店へと向かった。

「手繋いだりする？」

「・・・後でな」

「ふふふっ、おう。後でなあ」

露店で買った肉饅頭を堪能して少し。

皆でお土産の話をしながら紅魔族ズを生暖かい目で見守っていると、お昼少し過ぎた頃にめぐみんがトボトボ戻ってきた。顔の赤みは薄くなっていたが、なんかちよつとげっそりしてる。敗者の顔だな。

さつと肉饅頭を出してやれば迷う素振りもなく両手で掴みあげ、そのままハムハムと食べ始めた。

「——ゆんゆんも食べるか？」

「えっ・・・いい、良いんですか？その、あの、あつ、後で、対価に、大金を要求してきたり、悪魔と契約させたりとかは」

「しないしない、何処の悪徳業者だ。仮に私が悪徳業者でも友人はカモにはしないから安心しろ」

「ゆっ、ゆう、友人……!」

「友人以外はカモにするのか」

「カズマ、しゃらっぷ」

袋からもう一個取り出して渡してやれば、ゆんゆんは目の端に涙を滲ませながら肉饅頭を――ポシエットにしまおうとしてたので止めた。食べなさい。とっておかなくて良いから。記念つてなんの記念だ。止めなさい、止めろ。出来るだけ保存しなくていい、食べろって言うてんだ。

無理矢理ゆんゆんの口の中へ肉饅頭を押し込んだ後、捨てられた子犬みたいな顔をされたので「一緒に露店見て回るか？」と聞けば首をコクコク頷かせた……が、直ぐに何かを思い出して首を横に振る。忙しい子だ。

「そうなの、めぐみん! 私ここに来たのはめぐみんの事もあったんだけど、もう一つ事情があつて……ちよつと待つてて! えつと、あつ、あつた!」

そう慌ただしく差し出されたのは一枚の手紙だった。

不思議そうな顔をしためぐみんがそれを受け取り読み始めると、何とも言えない顔をする。

「……色々と言いたい事はありますが、何処まで信じていますか? まず、間違いなく何も起きてませんよ」

「わっ、分からないじゃない! こんな手紙一度も貰ったこと無かつたのよ! 予言の事もあるし、もしかしたら魔王軍に……」

「あり得ませんね。魔王軍に簡単に負ける事もあり得ませんし、何より魔王軍に蹂躪されるくらいなら手紙なんて悠長な物是用意せず、皆とつくに里をトンスラしてますよ。私の所は兎も角、居場所の分かっているゆんゆんの元に誰も訪れてないのが良い証拠です。緊急事態ではないですよ……それとちらつと予言がどうか言つてましたが、それは何の事ですか? まさか大金を払つたり、変なツボ買わされたり、おかしい契約とか結んでませんよね?」

呆れたようにめぐみんが言うのとゆんゆんは涙目になり「もう良いわよ！めぐみんの馬鹿！」とこつちに駆け寄ってきた。めぐみんみたいに飛び込んでくるかな？と身構えていたが、ゆんゆんはカズマの前で足を止めた。

むっ？と思つてると、ゆんゆんが決意に満ちた顔で口を開いた。

「すつ、すみません！あの、私つ、カズマさんにお問い合わせがあるんです！も、もしかしたら、必要じゃなくなるかも知れないんですけど、でも、もしそうだったら、カズマさんにして欲しい事があつて・・・！」

ゆんゆんの大声に目を白黒させながら「えつ、なに？」と少し怯えながらカズマが返した。

すると、ゆんゆんは顔を赤らめながら続けた。

「私、カズマさんの子供が欲しい!!」

「・・・カズマ？」

「待て待て待て待て待て待て待て待て！なんだその疑いの眼差しは!! 違うから!! 違うよ!? 違うんだよ!! 本当に身に覚えがないから!! 無いんだよ!?!」

「わっ、私！カズマさんの、子供が——」

「やっ、やめろおおおお!!なんで繰り返そうとしてんの!?!馬鹿なの!?!一旦止めろ!?!本当に止めろ!?!ちよつと、カナデと話をつけてくるから、待ってろ!?!いいな、待っててこの野郎!!!」

えっ、また問題事ですか？退屈しませんね。

ゆんゆんカズマの赤ちゃん欲しいんだけど問題から暫く。ちよつとした路地裏にてカズマから熱い接ぶ……説得をされた後、改めて話を聞いてみればゆんゆんの勘違いだった事が判明した。ゆんゆんが狂行に走ったのは二通の手紙が原因だったそうだ。

ゆんゆんの元に届いたそれは一通は父親からの近況報告、もう一通が暴走の原因である予言の手紙。内容は簡単にいえばゆんゆん達の故郷である紅魔族の里が魔王軍によって滅ぼされ、生き残ったゆんゆんとアクセルの街で出会ったヒモ男との間に出来た子供が、魔王を倒す英雄になるよ———というものだった。それでアクセルの街で出会った人の中で一番それっぽいカズマにそんな事を言ったらしい。

ところがだ、その手紙調べてみれば予言と思われたそれはゆんゆんの友人が書いた完全フィクションの小説の一篇だったそうで、予言でも何でもなかったらしい。

事実気づいたゆんゆんは手紙を消し炭にした。

まあ、もう一通の方が少し問題だったが。

手紙は簡単にいえばゆんゆんの父親が娘に宛てた近況報告なのだが、内容が些か不穏であった。

何でも以前より紅魔族と仲が険悪だった魔王軍が、紅魔の里を本格的に攻める為に近場に軍事施設を建てて準備してるとか。それも状況が宜しくないのか、相討ち覚悟！みたいな事も書かれていた。

話を聞いたためぐみんは紅魔族がそんな簡単に負ける訳もないと少し余裕ぶっていたけど、内心は少し心配なのか里帰りするつもりゆんゆんの事をチラチラ見えた。

そんなめぐみんの姿に、何とも言えない顔をしたカズマが俺に許可をとるように視線を向けてきたので「好きにしろ」と声を掛ければ、何やかんやお人好しのカズマは紅魔の里行きを決定。俺達はアクセル行きの馬車をキャンセルしてそのままゆんゆんと共に紅魔の里へ向かう事にした。

とはいえ、こちらは何も準備していないし、何よりアクセルの街で

進めてるライターの件も様子を見に行ないといけないので出発は翌日に持ち越し。もう一晩アルカンレティアに泊まる事になった。ト
ンチンカンの三人は。

「むっ、随分と遅いお帰りだったな。店長。おっと、そこにいるのは穢れに穢れきつた爛れた性活をする変態小娘と、毎晩発情した犬の如く女に股がり腰を振る種馬小僧ではないか。貴様らも一緒という事はライターの件——ぐはあっ?!?!」

「色即是空、悪霊退散ツツツ!!!」

貧乏店主のテレポートでアクセルの街に帰ってきた俺達はそのまま貧乏店主の店に向かった。旅支度の為でもあるし、例のライター販売の件で確認する事があった為だ——なのに、そこには何故かエプロン姿の腐れ悪魔がいた。なので当然、速攻で聖水の瓶を叩きつけてやる。少ないけど、持ち歩いてて良かった。

止めに大瓶を取り出すとカズマが間に割って入って止めてくる。事情を聞けば、これが例の店員らしい。

「大丈夫なのか?こいつ、本物の腐れだぞ」

「ああ、まあ、外道で腐れなのはそうなんだけどな?一応今回の件では色々手配して貰ってるし、アクセルでの販売に関してもちゃんとして貰ってる。だから、な?」

「.....はあ、分かった。もう持ってないし、攻撃は止める。でも今度からこの畜生と何かする時は呼べよ?確認するから」

「おう、そうする」

「貴様ら、我の前で堂々と腐れだの、畜生だの、外道だのと好き勝手に呼びおって.....良い度胸だ、まった——ぐうっ?!?貴様っ、まだ持っておったか!!悪魔を謀るとは貴様も大概ではないか!!」

ちっ、死ななかつたか。

最後の聖水を使い終わった後、改めて販売準備の状況を確認。俺達が旅行を満喫してる間、製造ルートからの連絡窓口となってるバルは、資料片手に今の進捗状況を伝えてくる。聞いた所だと特別な問題はなく順調そのもの。当初に予定していた販売数も直に確保出来るとの事。

ただ一つ誤算があったとすれば宣伝用で冒険者に流したライターが予想より反響を呼んでいる事くらいだった。その反響は大きく既に初回販売の予約は締め切り、次回納入分の予約まで埋まる寸前だとか。

魔法のある世界で何だつてこんなにライターが売れるのか疑問だったが、バニル曰く魔法があるからこそ売れるのだという。魔法という特異な技術が発展した事によって、俺達でいう科学という分野の発展が大分遅れてるそうだ。魔道具という製作時や使用時に魔力を必要とする道具は数あれど、こうした魔力にまったく依存しない道具というのは取り分け珍しい物なんだとか。

今回のライターは魔法を使えないジョブについてる者、魔力が弱く低級魔法も使えぬ者、魔法と関わりを持たない一般市民にとって、魔力なしで簡単に炎を産み出せるライターという道具は非常に画期的らしい。

魔法で火を付けられない者達がそれまで火打石を使っていた事を聞けば、売れる理由にも納得がいく。

「ライターなんぞなくともティンダーという初級魔法で十分、と思う者もいるだろうが——実際に魔法を行使する者の大半はスキルポイントの無駄とこれを取得していかないのだ。仮にこれを取得していても、だ・・・危険性も何もない平時ならいざ知らず、旅の最中やダンジョン内では非常時に備えて魔法を行使する者は魔力を温存する傾向がある。ティンダーの魔法すら節約し、火打石で焚き火の火を点す連中は決して少なくないのだ」

現状カズマは強力な魔法を使えないから魔力の温存についてそこまで考えないが、出来る事が増えれば当然そうなっていくだろう。切り札があるに越した事はないのだから。

「一度利便性を理解した客はライターを手放せなくなる。これまで火打石を打ち付けて、魔力を消費して産み出していたそれを、指先のワンアクションのみで作れるのだからな」

ニヤリと笑う姿は正に悪魔そのものだった。

「そして何より、これが使い捨てタイプであるという事がまた素晴らしい！ははははは!!まったく持って笑いが止まらぬわ!!一度購入したが最後、燃料が切れる度に何度も買い直す必要があるのだからな!!」

高笑いするバニルを眺めながら『ここまで読んでカズマはライターを作ったのか?』なんて思い、ちよつと期待して隣へ視線を向けたが・・・それは違うらしい。なんか分かりやすく関心したような顔してる。期待し過ぎたか、うん。ん?んーん、何でもない。こつちの話だ、気にするなカズマ。

それから販売に関しての打ち合わせを済ませ、旅に必要な道具の購入を始める。と言っても、ここでの買い物は殆んどない・・・どころか皆無に近い。それと言うのも品揃えが極端なのだ。貧乏店主の店の品揃えはそう悪くない。たまにえげつないポンコツ商品があるけど、基本的に性能はそう悪くない魔道具ばかりなのである。

だがその性能の高さ故に、如何せん値段が高いのだ。魔法薬一本が平気で百万エリスとかする。

貧乏店主が貧乏店主である理由が正にこれだったりする。中級者や上級者の冒険者ならば喜んで買う商品も、初心者の集まる街では見向きもされない。需要と供給がまったく違って良いほど噛み合っていないのだ。

「アンデット避けの魔道具ね・・・」

「お目が高いな、性欲モンスター。そちら中々の優れ物だ。蓋を開けるだけでアンデットを寄せ付けない神気が半日ほど漏れ続けるアイテムだ。効果は抜群。特別デメリットはないが、使い捨てタイプである事と、値が張るのが傷といえは傷だろうな」

「幾らよ?」

「一本、お値段たったの百万エリス」

そつと、俺はそれを棚に戻した。

「待て待て、小娘。考え直せ。買っていったって損はないぞ。お前達の仲間によたらアンデットに好かれる頭のおかしなものもあるだろう？保証しよう、必ず役に立つ。今ならこの見通す悪魔が予言も一つプレゼントしてやろう」

「本音は？」

「こんな馬鹿高い上に在庫スペースを圧迫するだけのゴミ、誰も買わんから1ダースまとめて買っていけ」

「酷い本音だな・・・ふうむ」

しかし、アンデット避けは悪くない。

アルカンレティアの道中のような夜間のアンデット襲撃も起きない訳だからな。水色がいる以上、今後も悩まされる事だろうし。

「1ダースまとめて50万エリスなら買う」

「鬼か貴様。それでは流石に売れん。最低でも10000万エリスが限度だ」

「冗談よせ、10000万なんて大金払えるか。俺はお前の在庫処分協力してやろうと思つて善意で言ってるんだ。本来なら捨て値同然で処分する物だろう？」

「ゴミとはいったが、実際買い手は幾らでもいる。勘違いするな、我はサービス精神で提案しておるのだ。確かに値は張るが効能に関しては我お墨付きの一級品。この値段で買えるのはここだけだ。他所に言ってみろ、王都ならば200万エリスはくだらんぞ」

「だったらそこに買い取つて貰えよ。わざわざ俺達に売り付ける必要もない。・・・こんな話知ってるか？最近な、アンデット系の討伐依頼は落ち着いてきてるんだつてさ。今月なんて別支部からの委託依頼の中に、ただの一件もそれがないらしくてなあ。なんでも？モンスターにも出現周期があるらしくてさ、今年はアンデット系は出現率が低いってのがもつぱらギルドの予想らしいんだよなあ・・・買い取つて貰えば？王都でも、何処でも。買い取つて貰えるなら。使用期限過ぎる前に買い手が見つかるの良いな。応援してるよ、ははは」

優しい笑みを返すとバニルが舌打ちした。

その様子を見て心配して見にきたカズマがそこら辺で止めとけというけど、この取引はどちらにとつてもそう悪い話ではない。大丈夫だと返して反応を待つ。

少ししてバニルは額を指で何度かトントンと叩き、溜息を吐きながら肩を竦める。

「貴様も大概性格が悪いな。……1ダース買うなら600万エリスだ」

「高い高い、出しても100万」

「馬鹿を言え、550万」

「150」

「安過ぎる、500万」

「200、これが限度だ」

「話にならないな、他を当たる」

話を打ち切ろうとしたので「そっか、残念だ。見通す悪魔さん」と言葉を掛けるとしかめっ面がこつちを向いた。見通す悪魔ともあるうやつが、これから定価で売れる可能性のある物に対して値段交渉なんかする訳がない。つまり、これはそういう物。

「どうする？200。こつちもサービス精神で言ってるんだぞ。これからもお付き合いのあるこの店の為に、本来捨てるだけの物に200も払うとって言ってるんだ」

「貴様に持ち掛けたのが間違いだったな。それで良い。きっちり持つていけ。持ち合わせでは足りまい、一筆したためて貰うぞ」

「そうしてくれ、銀行には伝えておく。で、予言は？」

「……貴様、本当に人間か？悪魔の類いではなからうな」

呆れたような溜息をついて、バニルはカズマを見つめた。

「貴様はこの旅の目的の地にて、仲間の迷いを打ち明けられる時がある。貴様の言葉次第では、その仲間は自ら歩むべき道を変えるだろう。汝、よく考え、後悔のない助言を与えるようにな」

「ん？なんだ、そりゃ」

「我から言えるのはそこまでだ」

それだけ言うと、バニルはこつちも見てきた。

「なんだよ?」

「貴様にも助言をくれてやる。汝、この旅の終わりにて大きな転機を迎えるであろう。選択はいく通りもある、よくよく考えて後悔なき選択する事だ」

「・・・それだけ?」

「貴様の未来は見通しづらい、それが限度だ。ほら、買い物は終えたであろう、さっさといね。疫病神め」

アンデット避けの魔道具を持って追い出されるように店を後にした俺達は諸々の準備を済ませ、日暮れ前には一旦家へと帰った。

一晩明けたらまた旅の始まりだ。

聞いた話だとアルカンレティアから紅魔の里への道中は危険なモンスターがそこそこいるらしいので、安心して眠れるのはまた暫く先になるだろう。

だから今夜は柔らかいベッドでゆっくり———と思ってたんだけど、一つ屋根の下、男女二人きりで何も起こらない訳もなく……。

「んっ、ちょよ、カズマ♡明日からまた大変なんだぞ?」

「まあまあ、な?」

「なっ、じゃにゃい♡もう♡」

☆ちよつとは我慢してくれても良いじゃない。これから幾らでも出来るんだし。

アルカンレティアからようやく帰って来たその日。

次の旅の準備と諸々の用事を済ませた俺とカズマは一旦家へとやってきた。

急ぐのであればそのままアルカンレティアに帰る手もあったのだが、勿論そんな事はしない。せっかく気兼ねなく二人きりになれるチャンスなのだ。思う存分イチヤイチヤするつもりだった。

ただ、翌日の事を考えてエツチするつもりはなかった。それと言うのも翌日の予定となつてた、紅魔の里への旅路に少し懸念があつただ。

聞いた所によると紅魔の里への道中には危険度の高いモンスターが多く生息しており危険らしいのだ。それなりに備えのある隊商が紅魔の里だけは交易ルートから外してるとの事なので、よっぽどの魔境なのだろう。

まあ、そうなつてるのは危険性だけじゃなくて、紅魔族の連中がレポートなどで近隣の街へ直接物資を購入しにくるのも理由の一つなのだろうが。

そして今は魔王軍の影もちらついてるとききたもんだ。

その危険度は推して知るべしなのである。

だから、翌日に響くような事をする気はなかった。

魔王軍の事がなくても危険だと言われる場所。油断は出来ないし、出来る限り体調は万全にしておきたい。寝不足や疲労のせいで対応が遅れて、怪我をなんてしたら目も当てられないから———なんだけど、カズマはやる気満々らしく、食器を洗つてると早速ベタベタしてきた。後ろから抱き着いてきて、首筋にちゅっちゅしてくる。

「カズマ、明日早いんだから、んっ」

「ん——、カナデえ」

「くんくんするな。こそばゆい」

やんわり止めるように言ったが、カズマは首筋に顔を埋めてイヤイヤと首を横に振る。身体を抱き締める力が少し強くなって、何だか大きな子供みたい。大の男がやっても可愛いくない仕草だが、俺の中でカズマは別らしい。何だか無性に甘やかしたくなってくる。

これが母性なんだろうか、不思議。

けどどやっぱ翌日の事を考えると、甘やかすのは得策とは言えない。俺は心を鬼にしてカズマへと振り返った。

「こらあ、駄目だつてば……もう」

「少しだけ、な?」

「だあーめ。明日早く向こうに帰るんだろ? 里までの道中、何かあるか分からないんだから寝不足なんてのはもつての他なんだからな?」

頬を膨らませてそう言うと、カズマは捨てられた子犬みたいな顔をする。下がった眉に一瞬絆されそうになったが、それを何とか耐えて突き放すように人差し指でおでこをツンとしてやる。

けれどカズマの顔色から諦めは消えない。

寧ろ『今夜絶対に抱く』と、強い意思を感じてしまった。身体を抱き締めて腕に籠った力から、瞳に灯った強い光から、甘くせつなげな声から。無理矢理とは言わないまでも、カズマはその気になっている。俺のあそこに硬いそれを突き刺して、滾ったそれを注ぎ込むつもりなのだ。

そう思うとお腹の下の所がきゅんと疼いた。我慢してるのは俺もだつていうのに勝手だ。俺だつて明日の事がなければ我慢なんてしない。一杯奥をグリグリして貰って、火傷するくらいズッコンバツコンしたい。種付けして欲しい。それこそお腹がタップタップになるまで。不意にカズマの手がお腹を撫で始めた。

赤ちゃん部屋の真上だ。

優しい手つきで撫で撫でしてくる。

そんなんでは簡単にきゅんきゅんしてしまう。

少しも我慢出来てないはしたない子宮に内心で溜息をついて、俺は仕方ないとそれを口にした。

「もう、少しだけだぞ?」

「少しだけ〜?」

「だめ、それは譲れないからな。寝不足なんかで怪我でもしたら笑えないんだから」

真剣にそう伝えれば、カズマは渋々といった様子で頷いてくれる。しゅんとするそれは、なんか反応が怒られたワンちゃんみたい。

それがおかしくて愛らしくて、俺はカズマの頬にキスを落とした。

「——その代わりに、カズマの好きなプレイに付き合っただけでやるからさ。な?」

少しきよとんとしたが、直ぐにカズマはぎゅつとしてきた。背中越しに伝わってくる鼓動が早くなってる。お尻に当たってるカズマのソレが、もぞりと立ち上がってきて擦りついてくる。

肌に触れるカズマの感触に胸をドキドキさせてると、耳を真っ赤にしたカズマが顔を近づけてきた。興奮してるのが一目で分かる。目を瞑って少し唇を突き出せば、ちゅつと柔らかな感触がそこに触れた。

それから何度かちゅつちゅと軽く触れあつた後、優しくあつた行為はより強く深い口付けに変わる。

カズマの舌が口の中に潜り込んでくる。

ちゆうなんて何度もしてるけど、いつになってもカズマとのそれは気持ちいい。蹂躪するような遠慮のない動きも、愛でるような優しい絡みも、舌から伝ってくる唾液の味も、どうしようもなく俺の鼓動を高鳴らせる。

好き、好きだ。俺はカズマとちゆうするのが好き。出来るなら、ずっとしてたい。エッチな音を立てながら、求め合っただけで、どろどろに溶けちゃう程してたい。

「んっ♡」

薄く瞼を開けると、火傷しそうな程熱の籠ったカズマの瞳がそこにある。見てるだけで背筋がぞくぞくして、もっと興奮していく。

「んっ、ん、んん——あ♡」

甘い刺激に頭がぼんやりしてしまう。

止めなくちゃいけないのに、程々にしないと歯止めがきかなくなっ

ちやうのに、頭の中はカズマとちゆうする事で一杯で――

「――かず、まあ……♡」

――思わず漏れた声は、もうとつくに蕩けてた。

その声にカズマの唇が離れた。

どうしたのかと見つめれば、カズマは厭らしく笑う。

意地悪な顔だ。

「カナデ、食器片付けないとな」

「……ん、しょうらな」

ぼんやりする頭で流し台に向き直って、泡のついた食器を手を取った。汚れを落とす為にスポンジを擦っていると、首筋に小さな痛みが走った。その刺激は知ってる。カズマが肌に吸い付いたのだ。きつと赤い印がついてしまってる。

「か、カズマっ、見える所は駄目だからな？」

「分かってる。でも、全然見えない所につけてもな。それじゃ意味ないだろ」

「んっ、馬鹿……♡」

ちゅっ、ちゅつと、小さな痛みと共に音が鳴る。

何もしなければ髪に隠れる場所だけど、激しく動けば簡単に見えてしまう位置。明日の事を考えると不安を覚える。けれど、それと同時に皆から向けられるかも知れない視線を考えて、興奮してしまってる自分もいる。

変態であるのは自覚してたけど、これでは何処かのドMも馬鹿に出来ない。

「んうっ♡」

そんな事を考えてると、エプロンの下に手が潜り込んできた。首筋にキスし続けながらも、カズマの両手は寝巻き越しに胸の膨らみをゆっくり揉み始める。

「カナデ、下着もつけないでスケベだな」

「ちがっ♡後は、寝るだけのつもりだったからあ♡」

お風呂は夕飯前に済ませて、後は寝るだけのつもりだったから下着は着けてない。別に変な性癖でそうしてた訳じゃないし、カズマを誘

惑するつもりでもなかった。ただ単に胸が窮屈だと寝れないからだ。水色達もその辺りは変わらないだろう。この世界の下着は着心地が良くないのだ。

カズマは俺の話を聞いて「ふうん」と面白くなそうに呟くと、胸の先っぽをきゅつと摘まんでくる。

思わず嬌声を漏らすと、味を占めたように指で弄び出した。摘まんだり、しこしこしたり、弾いたり。弄られれば弄られる程、俺のそこは硬く熱くなっていく。じんわりと股の所が濡れてきて、疼いてきて、体が火照ったまらない。

「カナデ、洗い物」

「ふえ、う、うん。分かってるう♡」

手が止まってしまうと、カズマが耳元でそう囁いてくる。言われるまま手を動かし始めるけど、時折胸の先から走ってくる甘い痺れにどうしても手が止まる。

「——ひゃっ♡」

不意に生ぬるくて湿った物が、首筋を撫でた。

かぷりとカズマの口が俺の首を優しく食む。

カズマは甘噛みしながら、舐めて啜ってくる。エッチな音を立てながら、少しずつ場所を変えて。服から覗く場所全部を味わってく。

散々に肌を食ったカズマは胸のボタンを上から半分ほど外して、服を下へとずらしてきた。両肩が出てきて、胸が服の外に溢れ出してしまう。流し台の前で胸だけさらけ出している奇妙な状況に、何故だか羞恥が沸き上がってくる。

カズマはそんな俺の気持ちもお構いなしに、胸を下から掬いあげるように持ってたゆんたゆん揺らして遊んできた。

「はあ、いつ見ても、カナデのこっちは綺麗だな」

「ひゃっ、ちよ、やだあっ♡」

「触り心地も良いし、な」

カズマの目は胸だけに向けられた。

熱心過ぎる視線に、耳元で囁かれ声に、ぞくぞくする。

恥ずかしさのせいなのか、いつもより敏感になってる胸から絶え間

なくビリビリと電気が走ってくる。

「カナデ、触るぞ」

「ふえっ?・・・ひゃう♡」

カズマの片手が弄んで胸からズボンの中に入ってきた。

そのまま男らしい武骨な指は、迷う事なくグチャグチャに濡れた割れ目まできて——ズプリと突き入れられる。

「あっ、あう、だ、駄目っ♡カズマ、まだ、洗い物、終わってな・・・んあ♡!」

言葉を遮るように、カズマの指が俺の膣壁をなぞった。ビリッと走る刺激に思わず肩が跳ねる。

カズマはその様子を見ると、割れ目に入れた指をピストンしてくる。首筋も厭らしく音を立てながらしゃぶってきて胸も弄び始めた。痺れるような甘い刺激が背筋を這い上がって、一気に脳天へと押し寄せてくる。

胸から、首筋から、股間から。

次から次へと。

気がつけば我慢なんて忘れていて、カズマに凭れ掛かりながら喘いでいた。頭の中はフワフワしてる。気持ち良くて何も考えられない。もっと、一杯して欲しい。

「カナデ、ずっとビクビクしてる。限界なんだろう、そのまま一回いっちゃえ」

「ひんっ♡ら、らめなのっ、ひま、ひったら♡ばかに、なっひゃうかりやあ♡♡♡」

「もうとつくに馬鹿だろ。たく、普段はスケベ大魔王なのに強情だな。今日は——大丈夫。何があっても、俺が何とかする。だから、カナデ。俺の見てる前で、思いつきりいつちやえ」

そう言いながら、カズマの指が摘まんだ。

胸の先っぽで硬くなってる乳首も、股の所で勃起してるクリトリスも。

「ちゃんといけたら、この後一杯犯してやるから」

ぎゅっと、カズマの指が強く摘まんだ。

「んんあああああッッッ♡♡♡!!」

瞬間、酷く甘い嬌声が口から溢れ出ていった。

思わず体が仰け反るような激しい痺れが全身に走り回っていく。頭は一瞬で真っ白になって目の前がチカチカする。蕩けそうな多幸感に、全身から力が抜ける。

立ってられなくて倒れそうになったが、カズマが側のテーブルまで移動させてくれた。

けど、それは優しさではなかったらしい。

カズマは俺の上半身をテーブルに倒れ込ませると、そのまま手で固定しながらズボンをずり下げた。

勿論、パンツもだ。

カズマは指で割れ目をくちゆくちゆと軽く弄った後、熱くて太い物を押し付けてきた。見てないけど感触で分かる。カズマのおちんちんだ。

「やつ、やらあつ、まってへ・・・いま、らめ、ひってるかりや♡ふにやつ、あ、ああ、あう♡まつ、へってひっはの、に♡♡♡」

制止の声をあげたが、カズマのソレは遠慮なしに俺の中へ入ってきた。振り返ったソレが膣壁を抉りながら、俺の中のずっと奥へと潜っていく。敏感になつてるせいで、それだけで何度も軽くいった。気持ち良くておかしくなりそう。

必死に意識を保つてると、カズマのソレはコツンと一番奥へと触れる。きゅんとお腹が疼いて、俺のあそこはカズマのソレを締め付けた。

「っ、締め付け過ぎ、だろ!こんなん、直ぐ出ちやうぞ。カナデ」

「ふえ♡しよ、しよんにや♡こと♡ひっはっへ♡♡♡あん♡や、やらあつ♡!かずゆま、びくびくさせないれ♡♡♡!」

ソレの震えが、甘い痺れになつて這い上がってくる。

あそこが馬鹿みたいに吸い付いて止まらない。

「ちっ、動くからな!カナデ!」

「っ♡♡♡!?!むりっ、ひまつ♡ほんろにいいいい♡♡♡!?!あん♡♡!」

腰がピストンする度、甘い痺れに息が止まった。

耳に聞こえるのは心臓の音と、耳元を撫でていくカズマの鼻息。遠くから水を捏ねる音が微かに響いてくる。

一つ突かれる度、全身の血が沸騰したように熱くなった。腰を押さえるカズマの指の感触でさえ、酷く気持ちを滾らせた。カズマのおちんちんが赤ちやん部屋をノックする程に、頭の中が真っ白になる頻度があがって、もう何も分からない。

ただ、もつと気持ち良くなりたくて、もつと求められたくて、もつと繋がっていたくて仕方ないのだ。

「かずま♡！かずゆ、ま♡!!すきい、すきい♡♡！もつとついて♡！おく、に、してえ♡!!」

「お、俺も好きだ！カナデ、好きだ！出すからな！一杯出してやる！お腹タプタプにしてやるから！だから今度こそ、ちゃんと孕めよ！カナデ!!」

嬉しい。

掛けられた言葉が、肌から伝わる温もりが、あそこを蹂躪するソレの力強さが。

全身で好きだっていつてくれてるみたいで、それがたまらなく嬉しい。それに応えるように、子宮が下がってきてるのが分かる。突き刺されたソレが欲しくて、赤ちやん部屋の入口がちゅうちゅう吸い付いてしまってる。

「うん♡！つくりゆう♡かずまの、あかひゃん♡おれがつ、つくりやから♡らして♡♡おなかいっぱい、かずまの、あかひゃん♡しるらして♡♡♡」

「出すぞ！いけ、カナデ!!」

「あつっ♡♡♡！いつくツツ♡!!あん！ツツツツン♡♡♡!!」

脈動するソレからお腹の中に勢いよく灼熱が噴き出した。びゅーびゅー注がれる灼熱の感触に、それまで以上の快感が体中を支配していく。幸せの中惚けてると、カズマが疲れた様子で覆い被さるように倒れ込んできた。

ソレをさしっぱなしで倒れ込んできたせいで、あそこが変に刺激さ

れて嬌声が漏れでてしまったのは仕方ないと思う——そしてそのせいで、カズマのソレがまた硬さを取り戻すのも。

「……………かつ、かいふく、はやすぎい♡」

「わ、悪い……………その、息整えてから、また良いか？治まりそうもなくて」

「もう♡……………あと、いつかいだけな♡？」

「ぜ、善処する」

それから何度もエッチして、何度も同じような問答を繰り返して——結局眠ったのは朝の方が近くなってしまっただったのは言うまでもない。

あと全然関係ないが、今度青姦してみようと思う。羞恥攻め、嫌いじゃない。

旅立ち初日から幸先悪いと？いえ、いつもこんなです。

「……出発前にも聞こうと思ったのですが、カズマは向こうで何をしていたのですか？」

アクセルの街で用事を済ませた翌日。

アルカンレティアで待っていた水色・めぐみん・ダクネス・ゆんゆんは無事合流した俺達は、予定通り紅魔の里へ向けてアルカンレティアを出発して街道を進んでいた。

そんな最中、めぐみんは目の下に隈を作り死んだ魚の目をしたカズマへ、探るような視線を向けて尋ねた。

めぐみんの視線に、カズマはぼんやりと俺の事を見た後、掠れた声で「ちよ、ちよつとな」と誤魔化にもならない言葉を返す。流星に朝までエッチしてたとは言えないし、下手に嘘つくとか気づかれそうだからこれでもベターな返しだと思う。

当然、めぐみんは納得した様子もなく、けれどカズマが口を割らないと判断したのか俺の事を見てきた。俺も話すつもりないから意味ないが。

「まあ、色々とな」

「その色々の内容について聞いているのですが」

「ふふ、内緒」

「むうー！何ですかそれはあー！むむむー！」

むくれるめぐみんの頬つぺたをツンツンしながらご機嫌をとつてみると、水色が何を思ったのか俺の顔を覗き込んできた。

そしてジロジロと眺めた後カズマの顔を見て、また俺の顔を見る。

「カナデの方は体調がなんか良さそうね。ツヤツヤしてるわ。何か良いことでもあったの？……あつ、もしかしてカナデだけアクセルで美味しい物でも食べてきたんでしょ！ずるい！ずるだわ！！私達が安宿で泊まってる隙に！！何を食べたのか正直に吐きなさい！！そして、帰ったら私にも食べさせて！！」

「はいはい、食べさせる食べさせる。好きな物言えよ、何でも作ってやるから」

「えっ、ほ、本当に!? やったあー!! それじゃ帰ったら皆で宴会ね!! おつまみ何作って貰おうかしら? カエルの唐揚げは外せないわね。鴨ネギのお鍋も食べてみたいし、手に入るならまた霜降り赤蟹も——はっ! お酒! そうよ、おつまみも大切だけどお酒はもっと大切だわ! カナデ、私はお酒も要求するわ!! 良いでしょ!!」

「酒は自分のお小遣いで買え。安いのだったら用意してやっても良いけどな」

「ええ...そ、それじゃ、せめて選ぶ時一緒に行かせて頂戴。ちゃんと安いを選ぶから。ねっ、お願いよ」

肩を落として言われた言葉に頷いてやれば、水色は嬉しそうにスキップし始めた。勘だけは良い奴だから何を言うのか一瞬ヒヤツとしたが...所詮水色は水色か。めぐみんと違ってポンコツで良かった。

「カナデ...」

不意にダクネスから声を掛けられた。

振り返ってみれば、頬を赤く染めたダクネスが何か言いたげな顔をしている。どうしたのかと思っって首を傾げると、ダクネスは俺の首筋を指差された。

ナイフの刃の部分の鏡代わりに確認すれば、襟元から首についた赤い点が覗いてる。俺は襟の所を整えてからダクネスを見た。ついつ、と目が逸らされる。

「...虫刺されだな」

「そ、そうか。虫刺されか。ならば、問題はないな。うん、ない。一向にない。しかし、む、虫にも、毒を持つ物もいるから、屋敷に帰ったら一度、ほっ、本格的に掃除をした方がいっ、良いかもな!」

「そうだな、業者でも呼んで害虫駆除やって貰った方が良いかもな。はははは。じゃあ、先を急ごう」

……んんん!?

何事もなく全員歩き出したけど、これバレてないよな？バレてないって事で良いんだよな？ていうか、馬鹿カズマ。見える所は止めろって言うてんのに……！幾ら時間がなかったとはいえ、一度着替えておいて気づかなかった俺も馬鹿だけど！

咄嗟にポーカーフェイス決めただけど、一瞬真顔になってしまった気がする。何よりそれを聞いてきたダクネスのリアクションがあまりにも不自然過ぎる。あれは知ってるタイプの反応だ。流石に分かる。

いや、でも、知ってて黙っておくか？なんか一言くらい言わないか？パーティーの問題になるし……いや、逆に言えないか。その手の話は。でも、だとするといつ気づいた。いや寧ろ、本当に気づいてるのか？なんか変な勘違いしてたりしないか？あのダクネスだぞ。めぐみんならまだしも……。

私と一緒に先頭を歩くダクネスへ視線を向ける。

ダクネスは不自然なまでにこつちを見ない。

なんか気まずさを漂わせてる。

「ダクネス」

「ひょえ!?な、何だろうか!」

「いや、何でもない。モンスター出たら教えて」

「も、勿論だ!ま、まあ!かつ、カズマが警戒してるのだから、その必要もないだろうがな!!」

バレたやつじゃないか、これ。

まあ、バレたなら仕方ない。

「ダクネス」

「ひゃい!」

「後で話すから、それまで内緒な」

口元に指を押し当ててそう伝えれば、ダクネスは顔を赤くして激しく頷いた。分かってくれば良し。元より隠し通せるとも思っていないし、いい加減言わないと思ってたんだ。この旅が終わったら、一

度カズマとちやんと話さないとな。これからの事。

暫く街道を歩いてると、カズマが警戒を口にした。

どうやら敵感知スキルに反応があったみたいだ。

カズマを先頭にし、反応があった場所に息を殺して近づいていくと林の入口付近で人影を発見した。

より近くにいけば岩の上に腰掛けた緑髪の女の子である事が分かる。よくよく見れば怪我してるのか右足首の所に血の滲んだ包帯が巻かれていた。

アンポンタンの三人がそれを見て早速近づこうとしたので、取り敢えず全員足払いしてその場に止めておく。感知スキル持ちが警戒を口にしてる時にホイホイ動くな。馬鹿共が。

「怪我人か・・・こんな所で不自然だな。カズマ」

「ああ、あれだ。敵感知に引っかけてるのは」

「人型のモンスターか。知性があるなら厄介だな。取り敢えず投げナイフで様子見するか？それで倒せそうなら、ゆんゆんに攪乱して貰って、隙について俺が首を跳ねてくる」

「落ち着け、バーサーカー。何でそう好戦的なんだ。確か出発前にギルドで貰った資料に・・・ああ、あった——」

そうして始まったカズマの説明によれば、あれは安楽少女という植物型のモンスターらしい。物理的な危害を加えてくる事はないが、庇護欲を刺激して人間などの知性をもつ獲物を精神的に捕らえて養分にするそうだ。食虫植物の人食いバージョンと言うことだろう。

そして冒険者ギルドからは、その危険性が故に見つけ次第駆除して欲しいとのこと。

「——よし、俺が殺してこよう」

ハルバードを肩に立ち上がると、全力でめぐみんと水色に涙目で止められた。何故に。

そうこうしてると安楽少女もこっちに気づき、いたたまれない笑顔

を向けてくる。ちよつとだけ殺りづらい気がしてきた。殺るけど。

「か、カナデ正気ですか!? あんな弱い女の子を、本気で切るつもりですか!? 見てください、あの泣き出しそうな顔を! あの子はきつと違えます! バイバイってお別れまでしてくれる優しい子なんです!!」

「カナデっ、止めたげて! お願いだから止めたげて!! あんな悲しそうな目をしてる子、きつと悪い子じゃないと思うの!! 悪魔とアンデットと魔王軍なら滅ぼしても良いけど、あの子はお願いだから止めたげて!!」

二人の力は中々力強い。怪我をさせないで引き剥がすのは少し難しいだろう。困った。

チラツとダクネスに殺るように視線を向けたが、さつと目を逸らされた。曲がりなりにも騎士を目指すのなら、恨まれるのを覚悟してアレを斬り倒して欲しい。どう考えても碌なもんじゃないからな。アレ。

俺が二人に捕まってる間に、何時のにかカズマがちゅんちゅん丸片手に近づいていった。二人に気づかれないように見守っていると、カズマは剣を高く振りかざす。妙に肩に力が籠ってる。せめて一思いに斬り倒してやりたいんだろうか。

「コロ・・・ス・・・ノ・・・?」

そう安楽少女が口にした瞬間、カズマは膝から崩れ落ちた。

「で、出来るかああああああ!! 話すなんて反則だろうがあああああ!!」

まあ、カズマには無理だと思ってた。

鬼畜とか外道とか変態とか色々言われるけど、基本的人好しで情に弱い良い奴だからな。仕方ない。

一頻り世の理不尽さを呪ったカズマは、水色の駄目な教えや安楽少女の儂げな微笑みに負けて、このモンスターを見逃そうとか言ってきた。俺個人としては、嘘の臭いがプンプンするこいつを叩き斬って、さっさと経験値にしちやえば良いのと思うだが。

「でも、モンスターですよ? 討伐しましょう」

不意にゆんゆんがそんな事を言った。

めぐみんが眉をつりあげて「なんて事を！」とか怒鳴り声をあげる。「胸に栄養を奪われて、ついに人の心まで失ったのですか！ゆんゆん、見損ないましたよ！」

「ええっ!?で、でも、モンスターだし、それに街道に置いておいたら、他の人が通った時に犠牲になる人が出るかも知れないじゃない。冒険者として、見過ごすのは・・・ちよつと」

「そ、それは、そうかも知れませんが・・・いえ、そこは説得しましょう！人を襲わないように！この子も話せば分かってくれる筈です！」
「で、でも、仮に話して約束したとして、それって信用出来るの？ここまで大きくなつた事を考えると、これまで誰も襲つたことのない個性じゃないと思うんだけど」

一番同情しそうだと思つてたゆんゆんが、どうやら一番リアリストだつたらしい。

ゆんゆんに言い負かされためぐみんは今回ばかりは分が悪いと思つたのか、何も言わず静かに目を伏せた。その様子を見れば、めぐみん自身もその可能性には気づいてんだろう。感情的に認めたくないだけで。

「で、でもでも、ゆんゆん？ほら、あれよ。ね、可哀想じゃない？」

「え？いえ、そういうモンスターですし。そこは全然。寧ろよくここまで大きく育つたな、と。近くに紅魔の里もありますし、出来るなら直ぐ処分したいんですが」

「.....」

頑張つてめぐみんを援護しようとした水色が撃ち落とされた。瞬殺であつた。

ダクネスも何か言うかと思つて視線を送れば、既に下を向いて沈黙していた。誰の流れ弾が当たつたのか。

静かになつたその場所で、ゆんゆんが俺を見た。

何か言いたげな様子に先を促す。

「あの、経験値結構貰えるんです。どう、しますか？」

「うーん、じゃあ俺が貰つても良い？他の皆と比べるとレベル低いし」

「はい、それじゃ一応周囲の警戒をしておきます」

「いや、ちょっと待て、頼むから。待って下さいい」

二人で打ち合わせしてたらカズマが割り込んできた。

どうしたのかと二人で見ると、意気消沈したカズマの顔がそこにある。

「…………お前が代わる？お前もレベル低いし」

「いや、そういう事じゃなくて。えっ、マジでやるの？流石に俺でも良心が痛むレベルなんだけど？平気なの？」

「そういうモンスターだろ？やるぞ」

誰がやっても良いけど、それだけは決定事項。

何せ放っておいたらカズマを含めたうちのパーティーメンバーがその内引つ掛かりそうだ。身内に手を出される可能性が残る以上、絶対に見逃す訳にはいかない。せめてここで俺達に出くわさなければ、そうする事もなかっただろう。知らない何処かで、知らない誰かを犠牲に生きれば気にも止めなかった。

でも会ってしまった。ここで。そしてこいつの擬態は、うちのポンコツ共に有効である事も分かってしまった——で、ある以上、そこに慈悲はない。

「カズマ、俺はな……いつか仲間に手を出すかも知れない奴を放っておく気はない。やれるなら、やる。まして、こんな嘘臭い奴を見逃せるほど、平和ボケもしてないつもりだ」

「う、嘘臭い…………？」

「何処まで知性があるか分からないけど、これ相当頭が良いぞ。勘だけどな——ちょっと試してみるか」

ハルバードを振り回しながら安楽少女へと近づく。

最初は殊勝に懺悔するようなポーズを取って、か細い声でなんかボソボソ言ってたが、いよいよ攻撃圏内へ足を踏み込むと明らかに安楽少女の目の色が変わった。

俺の態度や目を見て悟ったのだろう。

こいつ、本気だと。

「さっ、さーせん!! さーせんした!! もうここでは狩りはしないんで、本当、マジで勘弁して下さい!! ここまで大きくなるの、滅茶苦茶苦労したんですう!! お願いします!! 見逃して下さい!! 絶対にお仲間には手を出しませんので、何卒おおおツツ!!」

俺はハルバードを振り回すのを止めて、皆へと振り返った。何とも言えない顔がずらつと並んでる。

カズマに至っては真顔になって「経験値」とか言いながらちゅんちゅん丸を引き抜く。ゆんゆんは「ほらね?」とか言っつて、めぐみんに言い寄り始めた。

「――で、誰がやる?」

「じゃんけんで決めようぜ」

じゃあ、カズマだな。

頑張れ。

冒険者としての資質ですか？俺にはないと思いますけど。

紅魔の里を目指して街道を進むこと丸一日。

夜の帳が降りた頃、俺達は初日の行進を終え、街道から少し離れた草原の片隅で野営の準備を始めていた。

と言っても焚き火もしなければ、シエルターも作らないので寝床となる場所から邪魔な岩やら何やらをどかし、レジャーシートのような敷物を置いて、貧乏店主の所で買ったアンデッド避けのお香を焚くだけだ。

本来なら獣避けに焚き火をするのだが今回それはない。

事前にギルドから聞いた話でここら辺りに棲息しているモンスタリーの多くが火をあまり恐れず、寧ろ火に興味を示す種が多い事を聞いていたからだ。

加えて近隣には魔王軍が駐留していると思われる為、より一層夜間での焚き火などという目立つ事をする訳にはいかない。モンスタリーの猛猛さも魔王軍の精強さも、基本的にアクセルの街でのんびり冒険者生活してる俺達には手に余るものだ。会わないならそれが一番。

モンスタリーの徘徊する場所での野営となれば当然見張りを立てる必要がある。話し合いの結果、六人もいるので二人一組に分かれ、三組で二時間ずつの見張り交代となった。組分け内容はカズマとゆんゆん、めぐみんと水色、俺とダクネスといった具合だ。

組み合わせ自体には特別な意味はない。

夜間でも索敵能力のある敵感知スキル持ちのカズマと、そのカズマから敵感知スキルを教わった俺、暗闇の中でも昼間のように見通せる水色が被らないようにしたくらいだ。後はなるだけ戦力が均等になるように組んだだけで・・・俺とダクネスが同じ組になった事に何の他意もない。

野営地を整えた後は携帯食で腹拵えしながら明日の打ち合わせ。紅魔の里までのルート、棲息するモンスタリーと接敵した時の対処につ

いて、魔王軍と接触した場合の対応方針、現在の体調など他にも細々と確認した。

そうした話し合いも終わり、星空も見えない闇夜の中で俺達は休息を開始した。

俺とダクネスの組は一番最後の交代なのでゆっくり休ませて貰うつもりだったのだが、現実はその上手くいかなかった。危険地帯と呼ばれる場所での休息は予想以上に神経を使う所業だったようで、全然寝付けなかったのである。風に揺れる小さな草音一つで抱えてる武器を握る手に力が籠ってしまう。

眠れない理由は昼間に遭遇したモンスターの強さが頭に残ってるせいだろう。初心者殺し程ではなかったが、遭遇したそれは中々に強かった。ゆんゆんがいなければもつと苦戦していたのは間違いない。少なくとも魔王軍に見つかる覚悟で、めぐみんに爆裂魔法を使わせる事になっただろう。その代償は軽くはない。

しかし、この眠れない感じ懐かしいな。

借金取りに追われつつ、河川敷で眠った中学生の時を思い出します。……まさか、あれがマシだったと思う日が来るとは。人生って分からない。

うちのパーティーメンバーが凶太くイビキをかき始めた頃。取り敢えず目を瞑ってじつとしていれば、カズマとゆんゆんの話し声が聞こえてきた。俺達を起こさない為なのか、こそこそと二人で話している。耳を澄ませてみれば最近のクエストがどうか、紅魔の里の事とか、魔法の事とか、そんな世間話程度の会話が聞こえてくる。

最初はカズマに話掛けられておずおず返事を返してたゆんゆんだったけど、段々とその声に落ち着きを感じるようになっていった。ついにはカズマからだけではなく、ゆんゆんからも話題が振られ始める。

何となく、本当に何となく、二人の様子が気になってうつすら目を開けて見てみれば、地べたに座って周囲を見渡す二人の姿があった。何となく距離が近いがする。気のせいだろう。気のせいだと思う。

「……あの、カズマさん、今回はご迷惑を掛けてすみませんでし

た。いきなりあんな事を……」

ゆんゆんの謝罪の言葉に顔を真っ赤にした姿が頭を過っていく。あんな事……もしかしなくても、アルカンレティアでの事だろう。人前での発言はない。追い詰められていたとしてもない。俺ですらベッドの上でしか言ったことないのだ……ないよな？あれ、あるのか？ない、ないと思う。少なくとも人前ではない。

これまでの自分の行いをあらためて振り返っていると、カズマの乾いた笑い声が聞こえてきた。そんなカズマにゆんゆんが申し訳なさげに言葉を続けていく。

「あの手紙を見た時から、私本当に焦ってしまって、手紙の内容と合致する人なんて、考えても知り合いの中ではカズマさんぐらいしか思いつかなくて……でも、私もやりたくなかったんです。本当なんです、でも予言だって言うから、魔王軍を倒す為に必要みたいだったから、だから仕方なく——」

「あのさ、ゆんゆん。普通に傷つくんだけど」

会話の内容を聞いて、俺は静かに寝返りを打った。

ちよつと疑ってごめんな、カズマ。

後で一杯慰めてやるから許せ。

「それでカズマ、結局アクセルの街で昨日は何をしていたのですか？」

休息が始まってから二時間後。

水色が起きなかつたせいで引き続き見張りをする事になったカズマに、ゆんゆんと交代で見張りについたためぐみんが威圧感たつぷりに言った。言外に逃がさないと聞こえてくる言い方だ。

そんな言葉を受けてカズマと言えば、そつと目を草原の彼方に向け「夜の草原って、俺素敵だと思っんだ」と言い訳ですらない言葉で誤魔化そうとする。

当然めぐみに効く訳もなく、カズマはじりじりと物理的にも詰め

寄られていった。

「この際です、はつきりと吐いて下さい。カナデとはどういう関係なのでしょうか」

「——めぐみん、それを説明するにはゴッドウォーズ戦国時代、つまり俺が祖国にて『インしたらいるカズマさん』と呼ばれるまでの軌跡を一から説明しなくちゃならない。長く……なるぞ?」

「ゴッドウォーズ戦国時代……なんなんですか、それは。初耳です、聞いた事ありませんよ。ですが、何だか妙に心を擦る響きですね。格好いんです。カズマはそこで——ではありませんよ! 騙されませんよ!」

それから暫くめぐみんの追及は続いた。

ひやひやしながら聞いていたが、思ってた以上にカズマは口が良く回るようで、あの手この手で追及をかわし続けた。詐欺師もかくもやといった口達者ぶりに、毎回の事ながら本当になんでこいつニートやってたのかと疑問が浮かぶ。最終的にはめぐみんから「もう良いです」という言葉も引き出してみせた。

舌戦? に敗北し、すっかり不貞腐れた様子めぐみんは、カズマの隣へようやく腰を降ろした。

「カズマといい、カナデといい、良く口が回るものです。カズマとカナデは同郷なのですよね? 遠くの国だと聞いてますが……皆カズマ達みたいな感じなのですか?」

「馬鹿言え、俺達なんか可愛いもんだぞ。前にも教えたように、オレオレと名乗るだけで大金をせしめる輩が——いや、カナデはどうだろ。あれはちよつとアレかも知れない」

「アレかも知れないって、どれなんですか。意味が分から……ない事もあります」

「どういう意味だ、お前ら。おい。」

思わず出掛けたツツコミを飲み込んでみると、めぐみん少しだけ寂しげな声を出した。

「カズマ達はその国に帰る予定とか、ありますか?」

「何だよ、藪から棒に」

「い、いえ、同郷であるなら一緒に帰郷する事もあるのかと思いますし
て……あの事もありますし」

「どの事だよ」

モジモジするめぐみんの他所に、カズマがこつちへ顔を向けた。自
惚れでなければ見られてる気がする。

それから少しこつちを眺めた後、カズマはまた周囲へと視線を向け
た。

「遠い所なんだよ、本当に。それこそ帰りたくても帰れない程にさ。
でもまあ、仮に帰れたとしても今更帰るつもりはないけどな。俺は。
何の未練もないつと言ったら嘘になるけど、こつちの生活にも慣れて
きたし、目標も出来たしさ。……あとは、ほら、商売が軌道に乗
れば大金持ちだしな。今帰るのは勿体ないだろ。毎日霜降り赤力二
食べ放題だつて夢じゃないぞ」

「毎日は流石にやり過ぎです。第一カナデがそんな贅沢許す訳があり
ません。カナデはあれで貧乏性ですからね。あれは雑草を食べてき
た者の目です。私には分かります」

「どんな目だよ」

めぐみんは良い目をしてる。雑草は食べてないけど、山菜で生活し
た事はある。

夏休み借金取りに家を追われて、一月山で暮らして時があつたけ
ど、あの時は食べられるのも大体食べたっけ。良い思い出だ。

「きつとセミの味だつて知ってるはずですよ」

「いや、セミは食べ物じゃないだろ」

「人は飢えると、セミも食べられるんですよ。仮にも冒険者を名乗っ
ているのですから、それくらい覚悟してください。情けない」

「あー、急に国に帰りたくなってきたなあ……」

うへえとカズマが溜息をつけば、クスクスとめぐみんの笑い声が聞
こえてくる。視線をそこへと向ければ、めぐみんがカズマの横顔を見
ながら楽しそうに肩を揺らしていた。

その姿を見てカズマが「人をからかって楽しいか？ええ？」と嫌み
たつぷり言えば「楽しいですよ？」とめぐみんは返す。浮かべた笑み

は本当に楽しそうだった。

「こんな時間だつて楽しいです。皆とこうして冒険して、時にはピンチになったりもして、でも皆でそれを乗り越えて……私は今の生活が気に入ってますから。だから、カズマ達には悪いのですが、帰れないというのは私には少し嬉しい誤算です。ずっとこのまま、皆で一緒にいられたら良いなって、思ってしまったので」

少し切なさげに語られた言葉に、カズマが深く息を吐いて空を見上げた。めぐみんもそれだけ言うのと口を閉じ、静寂がその場を支配する。

基本的に後ろ姿しか見えないけど、それでもカズマが動揺してる事と、これから余計な事言いそうなのは察した。今頃遠くの方を警戒するふりしながら、必死になつて状況を確認してると思う。『モテ期!』とか思つてそう。後ろめたさに負けて、チラチラこつちを見てくる辺り間違いないと思う……なんかバレそうだから目を閉じとこ。

不意に、肩に何かぶつかった。

小さくて固い感触。

目を閉じたせいで何かは分からない。一応敵感知スキルを発動してみたが、周囲にそういう物の気配はなかった。

じつとしてると、また何がぶつかった。

今度は腰辺りに。

ぶつかった物はさつきと同じような物だろうか。

流石に気になつて脛を薄く開くと、カズマがこつちをチラチラ見ながら小石を投げていた。……こいつ、この状況をこつちに投げるつもりか。

格好悪い事この上ないが、惚れた弱みというやつだ。

思わず漏れそうになつた溜息を押し殺し、俺は欠伸をかきながら身を起こした。捨てられた子犬みたいな目で見られてしまえば、嫌はいえない。これも惚れた弱みというやつだ。なんやかんやと体の休まらない休息だったなあ。状況的に仕方ないけど。

「——という訳でな、全然寝てないんだ。俺は」

「それは私に言われても……」

カズマ達の間割りに割り込んでから少し。

めぐみんに膝枕しながら、俺はダクネスと見張りを始めていた。良い機会だったので、ついでにあの件の事も少し話そうと思ったのだが、膝の上にめぐみんがいる状態では流石に出来ない。真面目に見張りの役に徹しようと思う。ダクネスも空気を読んで何か言うつもりはなさそうだし。

「……しかし、賑やかな休息だったな」

「……それは私も思っていた」

「……起きてたのか、お前も」

「……寝られるような状況ではなかったからな」

そこまで話して、俺とダクネスの視線は最初から最後までイビキをかいて寝てる水色へと向いた。

俺達の目の前で水色が涎を垂らしながら『もう飲めない』とか、定番過ぎる寝言を呟いてる。

「……あれが冒険者の姿か。何処でも休息をとり、体調を整えられるのも才能なんだな」

「……いや、カナデ。あそこまでぐっすり寝たら意味がないからな。少なくともあれは冒険者失格だ」

そっか、やっぱりか。

それから朝陽が草原の彼方に見えるまで、俺達は見張りの仕事に徹した。特に何もなかった。

ただ皆を起こす前にダクネスとは少しだけ話して、紅魔の里のゴタゴタが落ち着くまで例の件は保留という約束だけは取り付けたが。やっぱり、人間はお話し合いが一番だな。うん。

アブノーマルな体験ですか？それは御愁傷様です。

紅魔の里を目指して、二日目正午。

私達パーティーは紅魔の里へと向かうのを一時中断し、とある理由から林の中を駆け回っていた。

「——いたぞっ、カナデー！皆！！」

決して大きくはないが緊張感のあるダクネスの声に、周囲に散らばっていた皆の視線がダクネスへと集まる。

ダクネスは茂みの向こうを見ながら腰に提げた剣を引き抜く。どうせ当たらないんだからしまっつけ、と少し思ったが今は何より見る物の方が気になる。

さっさとダクネスの側へ行き茂みの向こうを覗けば、探していたそれが目についた。

「……無事、のようだな」

そういうダクネスと俺の視線の先、猿轡されたままズボン脱がされたカズマと、厭らしい音を立てながらカズマの股間に顔を埋め何かにつつく豚っぽい人型モンスターがいた。周囲にはモンスター同士が争ったのか、同種の豚モンスターがボコボコにされた状態で捨て置かれてる。

「無事かなあ……あれは」

「い、命の危機はなさそうではないか」

そう言いながらダクネスは目を逸らした。

お前も内心は無事と思っただろ。

まあ、それも仕方ない。あれは別の意味で死んでるようなもんだからな。

飛び込むタイミングを伺っていると、めぐみん達も足早にやって来て

——茂みの向こうを覗いて顔を赤くした。

「あわわわわっ、大変です！か、カズマのっ、カズマのカズマが！」

「め、めぐみん！あれって、そういう!?そういうのよね!?ど、どどどっ、どうしよう！カズマさんが！」

狼狽える紅魔コンビとは違い、水色は分かりやすく顔をげんなりさ

せる。流石に女神やってただけあって、この程度では狼狽えないらしい。

「うわっ、カズマのあれって・・・もう手遅れじゃないの？バツちいんですけど。助けたくないんですけど」

「バツちいとか言うな。可愛いもんだぞ。流石に俺も、一回洗わないと唾えられないけど」

「えっ？くわっ、えっ、カナデさん？私何か変な言葉聞いたんですけど？幻聴かしら？幻聴よね？あの・・・カナデさん？」

「・・・気のせいだろ」

「そうよね！びっくりしたわ！」

危ない、うっかり本音が漏れてしまった。

ダクネスもそんな顔で見るな。バレちやうだろ、やめい。

この発端は丁度三十分程前。

当初の予定とは少し遅れたものの、特別大きなトラブルもなく予定休憩ポイントまでやってきた俺達は少し遅いお昼休憩を取っていた。

警戒しながら食べる干し肉と堅パンはそもそもの味が良くないし、その上緊張感があったせいで楽しい休憩とは言い難いものではあった。しかし、何かあった時に動けないなんて事はあってはいけなないので、皆で流し込むように食べて体を休めていた。

そんな中、カズマが用を足しにいくという。近場で済ませろと言ったのだが、カズマは見られるのが恥ずかしくと近くの林まで行って――で、帰って来なかった。大きい方にしても遅すぎると探しに行けば、使い損なったらしいちゅんちゅん丸とモンスターの足跡しかなかった。いや、臭いのもあったが。

そんな訳で皆で足跡を追い掛け、搜索の果てようやく辿り着いたら・・・もうある意味で手遅れだった。

いや、手遅れと言っても、もう死んでるとかではない。ちゃんと生きてる。こうして見ても呼吸してるのが見えるし、瞬きも一応してるから。けれど、呆然と空を見上げたままの生気を感じない瞳や、モンスターの暴挙に対して僅かな抵抗もしない姿を見ると・・・も

う駄目なんじゃないかなって。もうオチンポ立たへんのやないかなって。

「——んもう！なんて我が儘なふにやちんぼなのおお!!こんなに尽くしてあげてるのに!!いけずよ、いけずう！しよーがないわねえん!!貴方だけ特別よ！サービスしてあげるわあん♡！」

そう言つてアマゾネスなブラを投げ捨てたのは、絶賛カズマを襲つてるオークと呼ばれるモンスターのメス。ゆんゆん曰く、同族のオスを犯り殺すだけには飽きたらず、この辺りを縄張りとする種族を選ばず男を犯り殺すと評判のセックスモンスターらしい。

セックスモンスターなだけあって極めて暴力的な巨乳が惜し気もなく晒してくるが、カズマは股間も表情もシユンとしてる。まったくの無反応。顔も体も化け物ではあるが、一応人型のメス相手にここまですら無反応なのは・・・もう駄目かも知れん。男として。

「男はパイズリ好きでしょう♡！優しくしてあげるから、早くオチンポおつきさせてえん♡！」

「つむ・・・むぐ・・・?！」

「そうよおん♡！ほら、今からこの私のおっぱいが、頭のオチンポをむにゆむにゆしちやうのよお♡!!想像するだけでオチンポ立っちゃうでしょう!!」

「むぐううううう!!もぐ!!むぐ!!おおおお!!」

おお、激しく嫌がってる。

そろそろ限界かと武器を手にした所で、周囲の様子を確認し終えためぐみんとゆんゆんが戻ってきた。二人の報告によつて俺の敵関知スキルの射程外、黙視出来る範囲に潜伏してる敵はいないらしい。めぐみん達とは反対側の様子を見てきた水色とダクネスからも潜伏してる敵はいないとの事。

「よし、じゃあ、取り敢えず俺が突っ込むから援護宜しくな。ゆんゆん」

「はい、カナデさん」

「俺が敵の相手してる間に、ダクネスはカズマの保護に走れ。良いな?」

「うむ、任せておけ」

「めぐみんは敵の援軍が来た場合に備えて、爆裂魔法撃てる準備」

「ええ、任せられますとも！わあーつときたら、ドカつとやってやりますよ!!」

「水色は何もするな」

「仕方ないわね！ええ、任せて頂戴！女神の……ってなんでよお！」

お前が一番問題起こしそうだから、って言ったら面倒だから秘密兵器だからって事にしておいた。……そうだよ。お前はうちの一番のエースだからな、うん。隠しておかないと、切り札は。そうだよ、お前はうちの秘密兵器だから。バレたら駄目なんだぞ。いざという時にきてくれないと。逆転の手立てなんだから。だから、その時まで秘密なんだ。のけ者にしてる訳じゃないんだ。OK？そうか、分かってくれて良かった。危うく眠らせなきゃいけない所だった。

水色を説得した後はカズマを襲ってる隙だらけのオークの首から撥ね飛ばしにいった。

ついでに周りに転がってる連中も先に逝ったオークが寂しげらなように仲良く経験値にしてあげた。経験値うまうま。

ん？何で離れた、ダクネス。めぐみん？ゆんゆん？何で逃げ腰……え？怒ってないよ。怒ってない。だから、怒ってないって、言ってるでしょ？水色。

「……カズマ、もう本当に、敵はいないぞ」

紅魔の里への旅を再開してから一時間後。

可哀想だからと放置してきたが、いい加減歩きにくいので上着の裾を掴みながらくつついてるカズマにそう言った。カズマは捨てられた子犬のように目をウルウルさせて、いやいやと弱々しく首を振る。

直接しゃぶられたおちんちんは洗って綺麗になったが、襲われた時のダメージまでは抜けなかったらしく、旅を再開してからずっとこの

調子だ。

正直に言えばそれはそれで可愛くは思うし、思いつきり甘やかした
い衝動にかられるけど、今は危険地帯を進行中。さっきのセックスモ
ンスターしかり他のモンスターしかり、急に何が出てくるのか分から
ない以上、咄嗟に動けるようにしておきたい——のだけど、その目
を見るとどうにも強く断れなかった。やんわりと遠回しに離すよう
伝えるのが精一杯。

「・・・はあ、仕方ないな。もうちよつとだけだぞ?」

そう伝えて頭をポンポンしてやるとカズマがコクコクと頷く。そ
の仕草が何となく愛らしくて、その頭を撫でてやればほわつと顔を緩
めてきた。なんかこれ可愛い。本当に犬みたい。

そうやって少し心が癒されてる中、ダクネスとめぐみんが冷たい眼
差しと共に口を開いてきた。

「いや、いい加減立ち直れ。カズマ。カナデの邪魔になるぞ」

「そうです、シヨックなのは理解しますが場を弁えて下さい。カズマ
が動けない今、まともなアタッカーはカナデだけなのですよ」

「そうだぞ、カズマ。まともなアタッカーは・・・待て、めぐみん。ガ―

ド主体ではあるが、私も一応アタッカー枠だと思っただが・・・」

「ほら、カズマが立ち直らないからダクネスがおかしな事を言い始め
ましたよ。早くツツコミして下さい」

「めぐみん!?めぐみんは私を何だと!」

「元気なやり取りをする二人から隠れるように、カズマが俺の背中の
方へびつたりくつついた。

その姿にめぐみんとダクネスは何とも言えない視線を、ゆんゆんか
らは分かりやすく幻滅した視線を・・・意外と男心というか、今回カ
ズマが受けたダメージを理解してたらしい水色からは生暖かい優し
げな視線が送られる。水色の浮かべた慈愛の表情は酷く優しく、初め
て女神に見えた程であった。

「まあまあ皆、カズマさんだってこんな時くらいあるわよ。もう沢山
虐められたのだもの、あんまり責めたら可哀想よ。カナデの邪魔にな
るのが駄目なら私が代わりに預かるわ。それで良いでしょ?」

その提案にカズマは分かりやすく不信感を露にした。

さつき一度見捨てようとした事や、普段の言動と比べてまとも過ぎる事を言うので、俺も最初は何かおかしな事でも企んでるのかと思っただが———どうやら今回の件について水色は本心から同情してるっぽい。

ばつちいと言つてたちんこを綺麗にしたお陰なのか、元より現代人なカズマの精神的なキャパの限界を知ってるからこそなのか……理由は分からないが、既に疑った事を後悔するレベルで濁りのない綺麗で優しい瞳してる。

さつき一瞬でも見捨てようとしたのが、まるで夢か幻だったかのようだ。夢でも幻でもないけど。

まあ、何がともあれ迷惑な掌返しでもないので、カズマに聞くだけ聞いてみる事にした。

「……カズマ、別にお前が嫌だから言う訳じゃないぞ？ただ実際問題、俺の役割的に何かあった時に直ぐ動けないと不味いから、もう少し落ち着いた場所に着くまで水色の所へ行つて貰つて良いか。水色、任せて大丈夫なんだよな？」

「ええ、勿論よ。さあカズマさん、こつちにいらつしやいな。カナデの代わりに、この麗しのアクア様が特別に構つてあげるわ。悪いようにはしないから、ほらほら。ちつちつちつ、おいでおいで」

「聞き分けない子供を相手してるようですね」

「いや、庭先にいる小鳥か何かだろう」

「どつちにしても、大人の男性への態度じゃないんですね……」

三人が余計な事を言つたせいでカズマが意固地になりそうになつたが、俺と水色の説得の甲斐あつてカズマは無事に水色へと移つた。

俺の時と違つて必要以上にくつつく事はなかったが、変にからかったりしない女神モードな水色の側も落ち着くようで、カズマの安心したような表情を浮かべる。

前々から思つてた事だけど、やっぱりこの二人相性が良い。普段のやり取りを見てると余計に思う。俺自身こいつと付き合いがなかった頃は、皆に教えられた通り二人の関係は夫婦だと思つてた。

縁があつて今は俺が付き合つてるが、何か間違えてたらこいつら普通にくつついてる気がする・・・まあ、そんな事言つたら、めぐみやダクネスも、なんて話になるかもだけど。

そうして進む事少し。

そろそろ目的地周辺と言える場所に差し掛かった所で何か大きな音が響いてきた。方角としては俺達の目的地の方だ。ゆんゆんへと視線を移せば、緊張した面持ちで俺の予想を肯定するように頷いてくる。

紅魔の連中が交戦してる可能性が高いと踏んで全員に戦闘準備と警戒を、めぐみんに爆裂魔法の用意をさせながら加勢する為にそこへと駆けつけたのだが・・・そこにいたのは魔王軍の旗を掲げた大軍ともいえるモンスターと、変なポーズを取りながら赤い目を爛々と輝かせる、何処か既視感を感じさせる格好に身をつつんだ四人組だった。「肉片も残らずに消え去るがいい、我が深淵より生まれる、闇の炎によつて！」

「もうダメだ、我慢出来ない！この俺の破壊衝動を鎮めるための贄となれええーっ!!」

「さあ、永久に眠るがいい・・・、我が氷の腕に抱かれて・・・！」
「お逝きなさい。あなた達の事は忘れはしないわ。そう、永遠に刻まれるの・・・この私の魂の記憶の中に・・・！」

魔法の詠唱・・・と一瞬思ったが、何処か聞き覚えのある感じにゆんゆんへ視線を向けたら顔を逸らされた。

言葉での返事はなかったけど理解した。

「ちよつ、待つ」

明らかな逃げ腰満載な台詞に、紅魔族らしき四人組は怒声をあげた。

『ライト・オブ・セイバー！』

『ライト・オブ・セイバー』ツツ！

『セイバーツツ！』

『セイバアアアアーツツツ!!』

前口上完全無視で放たれた同種の上級魔法の一撃で、モンスターの

大軍は一瞬でその姿を塵へと変えた。

四人組の顔に一切の疲労は感じない。逆に物凄く生き生きした顔してハイタッチしてる。

今見たもので全部判断するのもどうかと思うが、少なくともこいつらには余裕が見てとれる。とても追い込まれてる連中の一部とは思えない。

「……ゆんゆん、魔王軍に……何だよな？」

「えっ、う、うん。手紙では、そう書いてあったんですけど……こ、これは」

ゆんゆんに改めて確認すると、ハイタッチしてた四人がこっちに気づいた。その中の一人が笑顔を浮かべながらこっちにくる。

「やあやあ！旅の人とは珍しいな！観光ですか！我が名はぶつころりー！紅魔族随一の靴屋のせがれ！アークウイザードにして――」

――っと、めぐみんとゆんゆんじゃないか。里帰りか？」

そしてやつぱり、その呑気な語り口に緊張感はなかった。欠片も。

「ゆんゆん……？」

「わ、私に聞かれても！」

☆ズツコンバツコンしなくても良いじゃない、気持ち良くなる方法なんて幾らでもあるんだし。

紅魔族の連中と合流してから暫く。

ぶつころりー達の転移魔法に便乗してあつさり紅魔の里へと辿り着いた俺達は、早速ゆんゆんに手紙を送った張本人であるゆんゆん父、もとい紅魔族の長の元へと向かった。

そしてその結果分かったのは、魔王軍が攻めてきている事は事実だが特にピンチとかではなかったという事。寧ろ、魔王軍を蹴散らす様子を観光の一つにしようか協議してるレベルで平和だった。観光内容は平和とはかけ離れてるが。

元よりゆんゆん父の元へ着くまでの間、安穏とした空気が流れる平和そうな集落の様子や、気が抜けまくりなブツコロリー達の様子を見ていれば何となく分かっていたので驚きはなかった。だがやはり、それなりに覚悟を決めて出発した事、それまでの旅のストレス、カズマの負った傷を思うと言い知れない脱力感が襲ってきた。

しかも手紙について聞けば、危機感を煽る部分は紅魔族にとって挨拶でしかなく、その内容は娘へのただの近況報告であった事実も判明した。おかしな文化を前に、キレ掛けた俺は悪くないと思う。

そんな訳で俺達の無駄な旅が終わった。

帰るまでが旅？帰りの心配？急ぎなら暇人が格安でアルカンレティアまで、今回の旅のお陰で転移魔法の座標登録が出来たゆんゆんを待てばアクセルまで一瞬で帰れるよ。やってられん。はあー。

なので、もうエッチしようと思った。

「……あの、カナデさん？」

ゆんゆんの家から少し離れた林の中。

木陰の下で腰掛けるカズマの股の間に頭を突っ込み、ズボン越しのちんこに頬擦りしていると、困ったようなカズマの声が聞こえた。そのまま視線を上げて見てみれば、眉をハの字にしながら照れ臭そうな表情を浮かべるカズマの顔があった。

「んー？なんだあー？」

「可愛がって頂けるのは嬉しいんだけどな？野外はやっぱり止めとかないか？何処にあの暇人達が潜んでるか分からないし、アクア達だっていつ帰ってくるか分からないし……」

確かにめぐみんの爆裂散歩についていった水色達だけど、戻ってき次第観光しようって話になってるから案外早く戻ってきそうだ。暇人達の動向も確かに謎。変な理由で潜んでたり、訳分からん所を徘徊してそう。

「それに今はなんと言いますか、あのですね、まだ心の傷が癒えてないと申しますか、その、えつと……ち、ちんこ勃起する気がしないんだよ。本当にさ」

カズマのその懸念は分かる。

頬擦りしてるそれはピクピクしてるけど、さっきのダメーヅが残ってるのか今の所勃起する気配がない。勃起してる立派なやつを知ってるだけに、そのしよんぼりした姿に少し寂しさを覚える。だけどこればっかりは仕方ない事だ。俺は服越しにそれにちゅーしてから、出来るだけ優しくその場所を撫でた。

「分かってるって。あんな事あったんだ、無理ならそれで良いよ。正直言えばさ、カズマのチンコで俺のあそこメチャクチャにして欲しいけど……無理そうならこうして一緒にイチャイチャしてるだけで十分だから——それとも、今は一緒にいるのもやだ？」

小首を傾げ上目遣いで聞いてみる。

カズマはこれに弱い。

予想通り「ふぐう」とカズマがたじろいだ。

「そ、そんな事はないっ、それ自体は嬉しいし、でもなあ、多分だけど、

今は本当にさ、期待に応えられそうにないんだって。その気にさせて何もしないってのが、なんとというか男の威厳的に――」

カズマの言葉を遮るように唇を重ねた。
触れるだけの軽い口付け。

「ふふ、変な所で誠実なんだから。そういうの気にしなくて良いってば。ねえカズマ、して？」

「カナデ……」

切なそうな声に目を瞑るとまた唇が重なる。

カズマからされたそれは俺がした物と同じで軽くて、とても優しいキス。目を開いてみれば、視界に入ったカズマの瞳に優しい色が滲んでいた。大切ににされてる事がわかって思わず頬が緩んで、胸がポカポカしてくる。

だけどやっぱり少し物足りなかったもので、そのお返しにまた唇を押し付けた。今度は軽く吸い付く口付け。柔らかいカズマの唇の感触を味わい、そのまま唇を離すとチュッと音がする。

そうしたらまたカズマがお返しにできてきた。今度は俺の方がカズマに唇をチュとされる。見つめ合っていたカズマの瞳に少しだけ熱が籠ってきてるのが分かって、俺はあそこを撫でていた手をカズマの首に回して、また飽きもせず唇を重ねた。

「っん、かずま♡」

舌を絡めないその優しい触れ合いは交互に、そして何度も続いた。小鳥の囀る声や木々のざわめきしか聞こえない静かなそこに、俺達のリップ音が鳴り響いてく。唇を重ねる度に胸が高鳴り、首に回した腕にも自然と力が籠っていった。

「――ふにやつ!?ちよ、もう、いきなりは止めるよ。ばか♡」

ビリつとした甘い痺れに視線を落とすと、カズマの手が服の下に潜り込んでいた。厭らしい手つきで腰の辺りを撫で回してる。擦ったさに耐えていたら耳元で「ステイール」と囁かれた。その瞬間、消失感を感じた。場所はズボンの下だ。相変わらずの引きの良さにジト目を向けたが、カズマは指先で摘まんだパンツをヒラヒラさせながら呑気に眺めていた。

「うーん。流石に、実用性重視か・・・」

「悪かったな、可愛いので穿いてなくて」

「いや、まあ、こういうリアルな感じも嫌いじゃないけどな」

そう言うときズマはパンツの臭いを嗅ぎ始めた。

流石に恥ずかしくて取り返そうとしたけど、カズマの奴は俺の手を猪口才にかわして来る。上手い事手が届きそうな時もあったけど、そういう時は脇腹を擦られたりお尻を揉んだりされて妨害されて駄目だった。

実際問題、パンツの一枚や二枚取られた所でどうという事もない。既にエッチしてる爛れた関係だ。裸も下着姿も、もつとあられもない姿だってお互い数え切れない程見てきた。だけど、目の前で二日間穿いた汗ジミのついたパンツを嗅がれるのは俺の中では別らしく、どうにも恥ずかしくて堪らなかった。

「ちよつ、汚いから！こら、おまつ、いい加減にしろカズマあ・・・」
「えつ、オコなの？ちよつとくらい良いだろ。ケチケチするなよ。減るもんじゃないし」

「駄目！それは一昨日からはきっぱなしの奴なんだから！汚いだろ！
変な病気になったらどうすんだ！欲しかったら、新しいのやるから・・・ほらっ」

側に置いておいたバッグからパンツを引っ張り出してみせたが、カズマは嫌そうな顔でクンクンを続ける。「凄いカナデ臭い」とか良いながらクンクン、クンクン、クンクンしてる。変態か。気持ちは分からんではないけど、本気で止めて欲しい。

「論点がズレてる気がするけど、取り敢えず新しいのならくれるのか。でもそれ使用済み？」

「間違っても人前でそれ言うなよ。一応使用済みだよ。洗濯はしてあるけどな」

「洗濯済みじゃなあ・・・」

何が良いのかと言いたい所だけど、洗濯前に結構な頻度でカズマのパンツの臭いを嗅いでオナニーしてる俺としては文句は言いづらい。バレてないと思うけど、なんか気持ち的に。

「使用済みなら、良いんだな？」

「うん？そんなにバリエーション豊かに用意してたのか、パンツ」

「んな訳あるか、ちよつと待ってろ」

一度立ち上がったから、俺はズボンを脱いだ。

カズマの視線は迷う事なく割れ目を見つめた。チンコたたない癖にスケベなままらしい。既に濡れ始めてるそこを開いて挑発しても良いけど、今は使用済みパンツを作る事が先決なので洗濯済みのそれを穿いた。

そして少しの間を置いてからそのパンツを脱いでカズマへと突き出す。

「はい、使用済み。交換」

「漢として惚れそうだわ、その即決っぷり。はい、交換な」

「はいよ、確かに。次からはちゃんとしてる時に頼むぞ？家にいる時なら大体ステイールしているから。最高のタイミングでこいよ、皆の前で辱しめるやつ。凄いの穿いて待ってる」

「そこまでされると逆に盗ろうと思えないわ」

そう良いながらカズマは交換したパンツの臭いを何度か嗅いで、当然のようにポケットに突っ込んだ。

別に代えのパンツに余裕があるから良いが、旅先で女物のパンツをポケットに忍ばせてどうするつもりなのか。オナニーするつもりなのか。コレクションなのか。何にせよ、変なタイミングで出てこないが良いけど。

取り敢えず下半身丸出しは思う所があつたので新しいパンツを探し始めると、カズマからストップが掛かった。どうしたのかと聞けば、そのまま一回オナニーしてみてくれとの事。ポーズも指定された。寝転がったのM字開脚で、だそうだ。

この後は目一杯甘やかして、出来そうなら性的にご奉仕してやろうかなと思ってたんだけど・・・その本人から熱心にそうお願いされれば嫌とは言えず、それに俺としてもそういうシチュはやってみたい気持ちもある。色々と考えた結果、俺はカズマのお願いに了承を返した。

夜営の時に使ったマントを地面へと敷き、カズマにお願いされるままそこへと横になって股を開いた。

春先の冷たい風がうっすらと開いた割れ目の奥へと流れ込んで、背筋にゾクゾクした物が走っていく。

「それじゃ・・・するからな？」

「あ、はい、お構い無く」

痛いくらいカズマの視線を感じながら、まだ何もしてないのに涎を垂らしながら勝手にひくつくそこへと指先を沈めた。キスだけで十分準備完了していたのだろう。にゅぷという感触と共にすんなりと指が入り、小さな痺れが触れた場所から背筋を這い上がってくる。

「んっ♡」

体が思わず震える快楽を感じながら、深く指を入れて膣壁をゆつくり撫であげればゾクリとする感触が走ってきた。物欲しそうに俺のあそこが指に吸い付く。

「あっ♡んん、んっ、んふっ♡」

そのまま膣壁に触れながらピストンすれば、チャプチャプと粘りのある厭らしい水の音を鳴り響かせた。

音が上がる度に小さな甘い痺れが走ってくる。

擦れば擦るほどやってくるそれは気持ち良くて、それは意識をどんどんボヤけさせていく。

あそこを弄る手はそのままにして、もう一つの手で乳房に触れた。皮鎧と服の隙間に潜り込ませた俺の指は、その柔らかな感触の中から固くなったそれを、乳首を直ぐに見つけた。指先でそれ強めに摘まめば、ビリビリとした物が胸の先っぽから流れてきて肩が跳ね上がる。

「あん♡あう、あ——ひいうっ♡!？」

不意に生暖かい風があそこに触れた。

顔を上げて見て見るとカズマの顔が近くに寄ってきてた。あそこを見つめるギラついた瞳に、ぐちゃぐちゃに濡れたあそこが映って見える。

「やつ、やらあ♡かずまあ♡」

カズマは何も言わない。

手を出すこともなく、ただ黙って息を荒くしながら見つめるだけ。それは恥ずかしくもあつたけど同時に凄く興奮も誘って、気がつけば口から溢れていた喘ぎ声はもつと甘く、指の動きが速く強くなつてしまふ。

「んっ、か、かずまつ♡かずつ、まあ♡♡」

最初の頃は玩具所か指を入れるだけでも痛かった。全然濡れないし、気持ちよくないし、マジでセックス出来るようになるのか不安だった。泣きながら同僚に助けを求めたのも、今となつては良い思い出だ。帰りにお土産買ってあげよう。

ちよつと感傷的な気持ちになりながら続ける事少し、快樂の波が少し変わってきた。断続的に響いてた甘い痺れは最初の頃より強く、より短い感覚でやってくるようになった。続ける程にその感覚はどんどん強くなつていって——ふと予感を感じた。

「みてっ、て♡かずまつ♡いくからっ♡かずまのっ、みてるまひえでっ♡いくかりや♡んんんっ♡♡かずま♡かずま♡」

俺の中から、何かがせりあがってくる。

止められないそれに合わせて摘まんだ乳首を、あそこを弄っていた手で膣の中と陰核を強く刺激した。

「——んふッッッッッ♡♡♡♡♡」

その瞬間やってきた衝撃は凄くて、一瞬で頭の中が真っ白になった。割れ目の所から熱い物が噴き出し、身体中から力が抜けていく。

体の中を駆け抜けていった甘過ぎる刺激の余韻に浸っていると、暖かくて柔らかい物があそこに触れて——強く吸われた。

「んきゆううううッッ♡♡はうっ♡あッッ♡やつ、やめへ、いまはやらあつ、まひや、いっちやつ——んんんあああッッ♡♡♡!!」

じゅっつと、エッチな音がした。

その瞬間、さつきより強く吸われた陰核から衝撃が走ってきた。勝手に腰が跳ね上がって、目の前に光がパチパチ浮かび、半分蕩けていた意識が全部真っ白になる。

だけど、意識は直ぐに戻った。陰核を撫でたぬるりとした感触が俺の意識を叩き起こしたからだ。

「はう♡あう♡だ、めえ♡かずま♡」

「何処が駄目なんだって、こんなに濡らして」

そう言いながら、カズマはぐずぐずになった割れ目に舌を這わせてくる。指で割れ目を押し広げながら、溢れて出てくるそれに口を当ててじゅるじゅる煤っていく。

「やつ、らめなの♡かずまあ♡しよこ、は、きたにやいかりやあ♡おねがつ、ひ、やめへ♡?ひやう♡!?」

「大丈夫だ、今日も綺麗だぞ。ピンク色で、艶々してて、だから良いよな?」

「らめえ♡しよゆうゆーことじゃ、にやいの♡ひいうん♡♡♡やらあ、らめつへ♡ひつひやうかりや、んんツツ♡♡♡」

止めさせようと手を伸ばすけど、手に力が入らなくてカズマの頭を押し退けられない。

その間にも一杯吸われて、一杯気持ち良くされて、頭がどんどんふやけていった。どうしようもないくらいに。

息が絶え絶えになった頃。

割れ目をペロペロ舐めていたカズマが何かを思い出したように、俺のあそこを苛めるのを止めた。ぼんやりした頭で様子を見ると、何かに気づいたらしいカズマが俺のあそこに唇を落とした。ゾクリとした物が背筋に走って、思わず嬌声が口から溢れる。

「カナデ、時間切れだ。あいつらが戻ってきたっぽい。取り敢えずこの続きは夜にな。今夜は寝れると思うなよ?」

そう言つてニッコリ笑うと、カズマはズボンに出来たテントを見せ

てくれた。少しでも心の傷が癒えた証拠を嬉しく思うと同時に、今夜の情事の激しさを想像した俺は別の意味で頬がにやけるのが抑え切れないまま返事を返した。

「ふ、ふあい♡しよーしゆるう♡」

格好のつかない、そんなふやけた声で。

えっ、林で？ちよっ、何を言ってるのか分かりませぬね。

最低限の体裁を整えて水色達と合流してから少し。

めぐみんの案内の元、俺達は紅魔の里をブラブラと観光する——
筈だったのだが、めぐみん達の帰りが予定より遅かったのと、想定よりめぐみんがお疲れな為、観光は翌日に持ち越しとなった。

それで今は何をしてるのかと言えば、めぐみんを実家に送り届ける途中だ。勿論、めぐみんの実家の場所なんて知らないなので、カズマのドレインタッチで本人を復活させて案内して貰ってる。

「あっ、カズマ。そこを右です」

「あいよ」

いつものようにめぐみんをおんぶしてるカズマは言われるがまま道を曲がる——が、進むほどに段々道が狭く、人家がなくなってる気がする。

まあ、元より家より田畑が目につく里ではあったが。

「どんどん人気のない所に入っていくんだけど、お前間違ってるんじゃないかな？」

「自分の故郷ですよ！間違う訳ないじゃないですか！何ですか、カズマは私をボケ老人か何かだと思ってるんですか?!」

「最上級の爆裂馬鹿だとは思ってるけど」

カズマの言葉に齒軋りしためぐみんは、俺の方に助けを求めるような視線を送ってくる。

そういうカズマの態度はめぐみんの日頃の行いの悪さが招いた事——とはいえ、その顔を見てるとちよっと可哀想になってきて、今回は援護してやる事にした。

「はあ、カズマ？」

嗜めるようにそう伝えるとカズマは俺の顔を少し見た後、何かを考える素振りをしてからゆっくりと溜息を吐いた。

「あー、はいはい。めぐみんの事は非常に頼りになる、偉大で天才な

アークウィザードだと思ってるよ。いつも苦勞お掛けしてます」

「そ、そうでしょう！そうですとも！その通りです!!これまで私の爆裂魔法がどれだけ多くの功績を残してきたのか！それを考えればその反応も当然ではありませんが、まあ、私も寛大です。これからの行いを改め——」

「本当、俺達のパーティーには勿体ないくらいの人材だよ。本当、優秀優秀。是非とも、アクセルの街に戻ったら相応しいパーティーへと移籍すると良い。ああ、俺達の事は気にするなあ、ゆんゆんっていうフリーの、優秀なアークウィザードを誘ってみるからさっ！」

「な、なあ、なあああっ?!聞き捨てなりません!!聞き捨てなりませんよ!!何ですかその言い草は!!しれっと追い出そうとしている所も腹が立ちますが、それよりも何よりも!!何でっ！私の代わりがゆんゆんなんですかああ!!喧嘩売ってますね！喧嘩を!!」

「ぐえっ?!お、おまつ、首はっやめ!!」

仲良く喧嘩する二人を放ってダクネスと水色を引き連れ歩いてると、林を抜けた所で一軒家の前に辿り着いた。日本家屋風の木造の建物で、お世辞にも大きいとは言えない・・・いや、ちよつとがたついたボロい家だ。めぐみんの実家はあまり裕福ではないと聞いているし、道はそこで終わっていて他にそれらしき人家もないし、恐らくはこれだろうが・・・うーん。

「うん、なんというか・・・雰囲気のある離れだな。我が家にも似たような物はあるが、これは少々古めかしいというか——」

「ダクネス、これが本宅だと思うぞ」

「——わ、分かっていたぞ！さっきのは軽いジョークだ！これは、そう、趣のある家だな！うむ！味がある！」

趣があるか、物は言い様だな。

ただのボロい家なんだが。

「私は勿論、最初から分かってたわよ！カナデ！」

「あーはいはい。そうだな、流石だな」

「そうでしょう！女神たる私の目は誤魔化されないわ！敢えて外見を悪くさせて、泥棒達の眼を欺く造りなのよね！前にめぐみんから実家

は魔道具職人って聞いてたもの！いい、ダクネス？これはセキユリ
テイの一種なのよ？」

「なんと！そうか、だから敢えてこういう造りに！」

変な事をダクネスに教えるな。

水色、こつちにおいで。

お馬鹿な水色のコメカミを拳でグリグリしながら、俺は改めてめぐ
みん見てみた。なんか見覚えがあるような？少し考えてみたが、特に
これといった物も思い付かなかった。一般的な日本家屋風の建物だ
し、前世に似たものを見たのかも知れない。

少しするとカズマ達もやってきた。

一応、背負われためぐみんに確認すると、やはり目の前のボロい家
はめぐみんはの実家だそうだ。

そしてめぐみんの言葉に、ダクネスが静かに冷や汗かいた。俺は家
について何も言わないでおいた事を改めてほっとする。

めぐみんに代わり俺はドアをノックした。

乾いたコンコンという音に、バタバタという足音が家の奥から駆け
てきて―――ドアがそつと開かれる。

開いたドアの先にはめぐみんを小さくした感じの女の子がいた。
歳のころは小学校低学年くらいだろうか。くりくりした真つ赤な目
で俺達をマジマジと見てくる。

「ほう、めぐみんの妹か？随分と可愛らしい子だな」

そう言いながら、ダクネスが柔らかい笑みを浮かべた。

「なんかちつこいめぐみんが現れたんですけど。ねえ、小めぐみん、飴
ちゃん食べる？」

「こめっこ、ただいま帰りましたよ。良い子にしていましたか？」

本場のマジシャンより鮮やかに何処からともなく水色が飴を取り
出し、カズマの肩越しから顔を出しためぐみんが穏やかな表情で優し
げに声を掛ける。

『こめっこ』という何とも言えない名前に思う所はあったが、それより
何よりミニめぐみんの視線が気になった。なんか俺の顔とカズマの
顔を交互にガン見してる。何か嫌な予感を感じ始めた頃、こめっこが

俺の事を指差しながら口を開いた。

「さつき林の所にいたおねえちゃん！」

その言葉に俺は固まった。

思慮が一瞬で停止する——が、直ぐに高速で回り始める。そして気づいた。めぐみん実家さつき見た。カズマと致す為の場所探しての途中、林の奥に人家を見つけてそれで別の場所へと行ったのだ。

しかし、何処まで見てるんだ。この子。歩いてる所ならまだ良い。まさか最後まで？いや、まさか。でも感知スキルに反応は……。

「林？なになに、虫取りでもしてたの？カナデって男の子っぽい所あるとは思ってたけど、そういうのも好きなの？それならあつちの所でカブトムシいたわよ。セミとクワガタも……あつ、クワガタは小さいやつよ。大きいのは見てないわ」

水色、頼むからシャラップしてて。

あとな、いらん。虫は。

「おにいちゃんも！」

びつ、と指差されカズマも固まる。

水色はそんなカズマを見て「あらやだ、カズマさんも虫取りしてたの？お子様ね！」とプークスクスと一笑いしてから、俺にしたようにカブトムシの場所を教え始めた。カズマにそんな話を聞いている余裕はなかそうなんだが。

そうこうしてる内にこめっこは酷く驚いた顔をした。

何に気づいたのか”驚愕”といった様子だ。

問題が大きくなる気がして咄嗟に手を伸ばしたが、伸ばしたそれを軽く搔い潜られる。

「おとうぎーん!!お姉ちゃんが、男ひっかけて帰ってきたー!でもふりんだよー!」

ちよ、ちよつと待って!!

お菓子あげるから!!

「ほーら見てごらん？このちゃぶ台の上にひっくり返したマグカップ。これがスイスイとちゃぶ台の上を動き回りますよー！」

「すごい！すごい!!どうやって？ねえどうやってるの？青髪のお姉ちゃん、どうやってる?!」

「磁石だ！きつと、ちゃぶ台の下から磁石で動かしてるんだ！そうだろう？当たり前だろアクア!？」

ちゃぶ台の上で動くマグカップを中心に楽しくワイワイとやってる三人を他所に、俺・カズマ・めぐみんの三人はめぐみんの両親と向かいあっていた。重苦しい空気と共に。

何を言うか考えていると、不意にめぐみんの父親であるひよいざぶろーさんからアイコンタクトされた。なんだろうかとその鋭い視線の先を追うと、隣に座ってるカズマの視線がマグカップに向いていた――ので、足を軽くつねっておいた。くぐもった声と共にカズマの顔が前へと向き直る。現実逃避したいのは分かるが、もう腹を括れお馬鹿。

「家の娘が日頃からお世話になっているそうだね。それについては、心から感謝する」

感謝すると言いながら、カズマを睨み付けているが。

そのお陰でカズマが小刻みに震えてるので止めてあげて欲しい。この子、普段はノミの心臓なんです。ここ一番だけしか強くないんです。本当に。

そんなカズマの様子をひよいざぶろーさんの隣に座ってるめぐみん母、ゆいゆいさんが何処か楽しそうに眺めながら口を開く。

「カズマさん達の事はめぐみんからの手紙がよく伺っております。いつもお世話になっているようで・・・」

チラっと、ゆいゆいさんが俺を見る。

何か言いたげな視線だ。

その視線に続くようにひよいざぶろーさんが咳払いし、カズマを見つめながらゆっくりと話始める。

「それで、カズマくん。キミは家の娘とはどのような関係なんだね？
そのカナデくんとも、どうなのかね。うちのこめっこが、林がどう
のと、不倫がなんだとかって言ってたのは一体なんなのかね？説明し
なさい。さあ、ほら、今すぐに」

「あの、どのような関係と言われましても。ただの友人で仲間です」

カズマの言葉を聞いたひよいぎぶろーさんは目を瞑り深く息を吐
く。そしてゆっくりとした動作で水色達がキヤツキヤはしやいでる
元に向かい、ちやぶ台へと勢いよく手を掛けた。

瞬間、ゆいゆいさんがひよいぎぶろーさんへとタツクル。羽交い締
めにして動きを止める。

「なあああああ!!くっ、離せえ!妻よお!!俺はあ!!おれはあああああ
!!俺はこのクズにい、言ってやらねばならぬ事があるのだああああ!!
娘にかわってなあああああ!!はああああ!!」

「あなた!!それなら言葉だけにして下さい!!やつ、止めてっ!ちやぶ
台をひっくり返して壊すのはもう止めて下さい!今月は特にお金が
ないのよおとおお!!」

二人の荒れっぷりに若干引きながらも、カズマとダクネスが慌てて
二人を止めに入っていく。俺?俺はそれ所じやないから。言い訳し
か考えてないから。

「お、お父さん!少し落ち着いて下さい!まずは深呼吸しましょう!!
深呼吸を!!話なら幾らでもしますので!!だから、どうか、ちやぶ台か
ら手を離して下さい!!」

「うるさあい!!だまれえ!!誰がお父さんだ!!殺すぞ、貴様あ!!はっ、貴
様っ、まさか既に手を出してる訳ではないだろうな!!お父さんになる
ような事、娘にしてるんじゃないだろうな!!まだ成人前だぞ!!この変
態野郎う!!純粋な娘をだまくらかしてえ!!ゆるさあん!!」

「まあ!あらやだ、そんなっ!私はてつきり!!それならそうと、カズマ
さんには聞きたい事があるのですけれど。何か事業を為さっている
とか・・・あつ、私の事はお義母さんと気軽に呼んで貰って良いで
すからね。ここも自分の実家だと思って」

「めっ、めぐみんのお母様!?何かとんでもない勘違いを為さっている

と思うのだが!?カズマとめぐみんはそのような……違うよなカズマ? そうだったなら、流石に私も一言あるのだが。カナデの事もあるのだし——」

「ああああツッ——!!ああああああ!!このっ、なんでお前まで疑ってんだよ!!変態ポンコツ騎士!!良いからお母さ——ゆいゆいさんを止めてろ!!」

「なっ、なに馴れ馴れしく俺の妻の名前を呼んでいるんだ!!まさか、妻にまで手を出すつもりか!!貴様あ!!」

「あああ!もう、この親父さんなんだよお!」

騒ぐ四人を横目に水色がマグカップをちやぶ台から浮かせてスイスイと動かし始めた。こめっこは大興奮である。騒ぎに無関心過ぎる、この二人。

そんな混沌としてきた空間で、めぐみんがそつと耳打ちしてきた。

「あの、両親がすみません。何か勘違いしてるようで」

「あー、うん、いや、まあ、気にするな。多分、俺達のせいもあるから……けれど、カナデ達は林で何をしていたのですか?まさか本当に虫取りしていた訳ではないんですよね?」

「いや、虫取りだ。セミを取ってた。懐かしくてな」

「え、せ、セミ……?」

「小腹減ってたからな」

真顔でそう伝えるとめぐみんは口を閉じた。

何か言いたげだけど、取り敢えず突っ込む気配はない。

なのでめぐみんの事は一旦置いておく。

さて、どうやってこの状況を丸め込もうか。

説得に必要なものですか？情報、根気、はったり、それとお土産でしょう。

「——うまい、うん。旨いな。素晴らしいお土産をありがとう。カナデくん。そしてカズマくん。歓迎するよ。しかし旨いな、この饅頭は。なあ母さん」

「本当ですね、もくもく・・・甘味なんていつ以来かしら。最近特に厳しかったから・・・ふふ、あつ、カナデさん、カズマさん、お茶のお代わりは幾らでもありますからね！遠慮せずに言ってお下さいね！」

「んまあい！お饅頭おいしいねえ！」

苦し紛れに始めた『お土産作戦』がすっかり二人の空気は軟化させた・・・どころか、全身全霊で歓迎してきた。険しい顔をしていた厳格という言葉を体現していためぐみん父は柔らかい笑みを見せ、めぐみん母はおっとりとした雰囲気にとぐわな速度でお茶を用意してみせた。

あまりの手の返しの早さに、めぐみんが何とも言えない顔をしたのは言うまでもない。

お土産から一ミリも視線を動かさなくなっためぐみん妹も含めて、あまりに食べ物への執着が凄いこの家族の姿を見て、旅の為に用意していた残りの食糧も差し出してみたら旧知の仲ぐらゐに距離を詰めてくる。

めぐみんが顔を赤くさせて掌で覆ったのは見なかった事にしておいた。

そんな訳で大分穏やかに話し始まったのだが、いよいよ勘違いの原因であるめぐみんの手紙を見させられて・・・俺は何も言えなくなつた。それまで色々と言いつつ訳を考えていたのだが、一文一文読む度に、頭が真っ白になってしまうのだ。ニコニコでお土産を貪るめぐみん親子を前にすると、余計にいたたまれない気持ちになる。

何せそこに書かれていたのは、多少言い方を変えてはいるが俺がやってきた事だ。

「いやあ！すまない！カナデくん！こんな常識のある心清い君が近くにいる、娘がこんなふしだなら事をされている訳がない！カズマくんも疑ってすまん！」

「いやあ……」

「あははは……」

ガハハ、と笑うめぐみん父に俺とカズマの乾いた笑い声が返される。心の中で、ふしだらでごめんないと謝りながら。

めぐみんが両親に送った手紙は基本的に至って普通の近況報告なのだが一部分がヤバかった。両親に見栄を張ったと思われる、男女関係についての報告だ。そこに書かれていたのは俺とカズマの情事の事が大半だったのである。一緒にお風呂に入っただけにやらしたとか、男のちんこほにやらしたとか、お尻の穴をほにやらしたとから……すつごい遠回しで多少脚色はあるけど、俺達が屋敷でやってたプレイそのものだった。

きつと親御さんに手紙のやり取りの中、子供扱ひされた事があったのだろう。そしてそれにムツと思っただろう。ちゃんと冒険者として身を立っているのにと。

実際めぐみんはつい最近まで未成年の子供ではあったけど、それと同時に魔王軍幹部を打ち倒したり、なんちやら要塞デストロイヤーを破壊するといった冒険者として立派な活躍を納めている。その功績を考えたら『もう子供じゃないんだと』言いたい気持ちは良く分かる。

でもだからと言って、大人の女になってますアピールはどうなんだろうか。背伸びしたいその心は分からなくはないけど、他にもやりようはあった筈ではないだろうか……と、思った所で後の祭りだ。そもそもバレるような迂闊な真似した自分が一番悪いし。

「……うわっ、カズマ。貴方めぐみんにこんな事してたの？何か変な臭いがする時があるのは気づいてたけど、そういう事だったのね。幾ら愛があってもこれは引くわー、成人前の子供にそれは引くわー」
「!?みつ、水色!?変な臭っ、止めるー!そういう誤解を生むような事言うのは!それにめぐみんにカズマがそんな事する訳ないだろ!」

「分からないじゃない、だってカズマさん女の子のパンツとって喜ぶ

変態だもの。この間もちよむすけにパンツの柄を覚えさせながら、命令したら取ってくるように躰たもの。それにしても、また過激ねえ、ふうん、へえー、ほー」

ぼーっとしてたらうっかり水色に手紙を取られた。

取り返そうと伸ばした俺の手をかわしながら、水色は苦々しい顔で手紙を読み続けていく。身体能力の高さは理解してたつもりだったけど、本気を出すとこんな面倒なやつだったのか、こいつ。

「フンツツツ!!!」

「ぐえっ!」

何処で余計な事を溢すか分からないので、仕方なく鳩尾で水色を沈めた。水色が短い悲鳴と共に床へと転がり、手紙の束が床へと散らばっていく。

「か、カナデくん?」

「どうかしたの、カナデさん?」

「むぐ?あむあむ」

「あああっ!すみません、家のカナデが!!いや、あのですね、家のアークプリーストは昔から頭が弱い所がありました、何か不適切な事をこめっこちゃんの前で言うかも知れないので、それで今、はい、ちよっどですね、眠らせたというか……カナデ、こっちは良いからそっち宜しく!!」

めぐみんの家族をカズマに任せた俺は床で青い顔した水色の首をキュツとして気持ちを落ち着かせてから、無言で散らばったそれを集め始めた。少しして何とも言えない顔したダクネスとが頬を赤く染めためぐみんが手伝い始める。

俺と同じく無言で。

「……いつからだ」

カズマ達の話声や水色の寝息より静かに。

俺は二人に尋ねてみた。

めぐみんは視線をキョロキョロと泳がせた後、恐る恐るといった様子で口を開く。

「か、カズマの工作室で、お尻でエッチしてるのを見てからです。すみ

ません」

あつ、え、ご、ごめんなさい。

こつちこそ普通じゃなくて。

「私は、その、悪いとは思ったんだが、ある噂の真偽を確かめる為にクリスとお前達を尾行した事があつてだな・・・あの、あのな、つ、連れ込み宿に入ったのを見た時が最初だ」

連れ込み宿つてお前、かなり前の事なんだけど。

最近そつちはご無沙汰なんだけど。

いつて無さすぎてポイントカードの期限切れかけなんだけど。

「.....」

微妙な空気と静寂がその場を支配した。

カズマ達の話声が異様なまで大きく聞こえる。

水色の寝言も喧しいくらい聞こえる。

「と、取り敢えず、後で話す・・・それで良いか?」

申し訳なささと後悔で頭を一杯にしながら聞くと二人は静かに頷いた。怒つてる気配がないのは幸いだ。

「その歳で、君は屋敷を持っているのかね!」

二人の様子にほつとしてると、不意にめぐみん父の大声が鼓膜を揺らした。見ればカズマが冷や汗をかきながらあたふたしてる。

「い、いや、屋敷を持つてるといふか、今はまだ借りてるだけで・・・近い内にちゃんと購入しようとは思ってますけど、それも商品の売上次第な所もあるので今はなんとも」

「いやいや!待ってくれ!そもそも屋敷を買い入れる額なぞ、そう簡単に稼げるものか!嘘をつくんじゃない!」

ばんつ、と床を叩かれカズマが更に慌てた。

何となく不味い気はしたが、止めるより早くカズマの口が再び開いてしまう。

「いえいえ!嘘じゃないんです!本当に、今度知り合いの伝で王都とアクセルの街で商品を販売するんです!初回は様子見であまり出さ

ないんですが、予定通り売り切れれば今月末には四百万程は……」

「四百万!?!」

「すいませんっつっ!嘘つきました!既にどっちの店からも追加発注来てまして!!商品が間に合えば恐らくは一千万くらいは行くと思います!!」

「一千万!?!」

それを聞いた二人は少しの間呆けていた。

けれど直ぐにハツとした顔になって、それぞれカズマの肩をがっつりと掴む。

「本当に良く来たね、カズマくん!!君みたいな子がめぐみんとパーティーを組んでいてくれてワシは嬉しい!!今日は泊まっていきなさい!ご飯を一緒に食べよう!なっ!なに、遠慮はいらん!!可愛い娘の友人なら、あれだ、君もワシの子供みたいなものだ!!いつでも来なさい!我が家だと思って!さあ、母さんは飯の用意だ!うんと旨いものを作ってやりなさい!!」

「はい、直ぐに用意しますね!あなたは奥の物置——げふんげふん!!使っていない部屋を用意して頂けますか?カズマさん達の寢床を作らないと!ああ、めぐみんにこめっこ!お母さん達忙しいから貴女達で、カズマさん達の為にお風呂の用意して頂戴」

「ん!できる!いこ、お姉ちゃん!」

「わわわっ、こめっこ!そんなに慌てないで下さい!私はまださっきの疲れがあるので——」

慌ただしく各所へ散っていためぐみん一家を見送ったカズマは少しの間呆けてから、錆び付いたブリキ人形みたいな動きでこっちを見た。

「これ、不味ったかな……」

俺はダクネスと顔を見合わせた後、そつと頷きその言葉を返した。

「いつも思う。お金って怖いな」

「……なんだろう、言葉が重いなあ。俺カナデとは腰を据えてじっくり話さないといけない気がする」

「奇遇だな、カズマ。私もそう思ってた所だ」

二人してなんだ。

それはどういう意味だ。

おい。

それから暫くして賑やかな夕飯が始まった。

先に渡した食糧と近くの商店で買ってきた食材も合わせた豪華な鍋にめぐみん一家は多いに喜んでくれた。肉の取り合いで多少険悪になる時もあったが、概ね平和な夕食の時間であった事に変わりはない。

夕食を終えるとカズマはめぐみん父に随分と気に入られたようで、そのまま晩酌タイムへ移行。俺と他の皆は順番にお風呂の時間となった。

「おおおー、カナちゃんおっぱいすごい。お姉ちゃんと違ってぽよぽよしてるー」

それで俺は今何をしてるのかと言えば、めぐみん妹であるこめつこと仲良く入浴中だ。もつというなら頭を洗ってあげてる。お鍋の世話をしたら随分となつかれてしまった。やはり肉を多目にとつてあげたお陰だろうか？この一家は食べ物に対する耐性が低過ぎて、変な騙され方しないか心配になってくるな。

あと、お姉ちゃんと違ってとか本人に言わなきゃいいが。あれで気にしてるから。

「はいはい、良い子だから前向いて目瞑ってるよ。頭の泡流しちゃうからな」

「はーん」

こめつこは元気な返事を返すと、おっぱいから視線を外して前を向いた。目を瞑るように一声を掛けてからお湯を掛ければ、白い泡が落ちて黒くて艶々した髪が顔を覗かせる。

まだ傷みが目立つけれどこのままちゃんと手入れを続ければ、今のめぐみんみたいにもっと綺麗な髪になるだろう。そこら辺はやっぱ

り姉妹と行ったところか。

「もう目開けて良いー?」

「良いぞ、ほら見てごらん。綺麗になったろ」

「ん?・・・わああ、ほんとだあ」

湯船に映った自分の姿を見たこめっこは、湿った髪を指でなぞりながら嬉しそうに笑う。その姿は子供の割には妙に色香が漂っていて、めぐみんとは違う方向で将来性がありそうだ。

「こめっこ、いつも何で頭洗ってたんだ? 凄いやゴワゴワしてたぞ」

何となく気になって聞いたら、「んっ!」と隅っこにある洗濯石鹸を指差した。そりやゴワゴワもするわ。それは頭洗うやつ違う。せめて普通の石鹸であつて欲しかった。

まあ、そうは言つてもだ、前の世界と比べると石鹸だとか洗剤だとかは気軽に買えるものでもないから、これも仕方ないんだが。シャンプーみたいな髪用の洗剤は贅沢物の類いになるし・・・というか、最近生活が潤つてきてこういう物に手が出るようになったけど、思えば俺も来たばかりの頃は髪具合なんて気にしてる余裕はなかったか。人の事は言えないな。うん。

「仕方ないな、こめっこにはこの石鹸をあげよう。匂いはないやつだけど、髪が綺麗になる石鹸だぞ。直ぐ無くなっちゃうから髪洗う時だけに使いな」

「いいの?」

「良いよ、あげる。女の子の髪は綺麗にしておかないとな」

そう言つて頭を撫でると、こめっこは擦つたそうに目を細めた。

「えへへ。カナちゃん、ありがとう」

「どういたしまして」

それからさつさと体も洗つてしまつて、二人で湯船へと浸かった。お世辞にも広いとは言えない浴槽なので、こめっこは俺の膝の上である。暫く俺のおっぱいに後頭部をぶつけてポヨンポヨン遊んでたこめっこだったけど、ふと何かを思い出したようにこっちに振り返つた。

「カナちゃん、お兄ちゃんとおまたペロペロして遊んでたのは内緒に

するからね！大丈夫だよ！」

その言葉に思わず吹き出した。

がつつり見てるやん。あれから全然何も言わないから大丈夫かと思ってたのに、想像以上にがつつりしつかり見てるやんって。

「そ、そっかあ、うん、ありがとう・・・今度ケーキ買ってあげるからな」

「ケーキ？なにそれ？」

「甘い焼き菓子だ。美味しいぞ」

俺の言葉を聞いたこめつこは「やったあ！」と湯船の中でパシヤパシヤとはしゃぐ。それだけ見ると可愛げがあるんだが、俺にはどうにも膝の上にいるその子が小悪魔の類いには見えなかった。

逃げも隠れもしませんよ？はい、釈明させて頂きませす。

古めかしい家具に囲まれた薄暗い部屋の中。

窓から射し込む月明かりを頼りに、俺達三人は用意された布団の上でマジマジと向かいあっていた。

勿論、カズマとの事を話す為だ。

そのカズマの姿はここにはない。

本来ならあいつも説明する側としてここにいるべきなんだろうが、今はめぐみんの親父さんと一緒に居間でイビキをかいてる。酒を同伴に魔道具談義で随分と盛り上がっていたようだ。カズマも職人気質な所があるからめぐみんの親父さんとは馬が合ったみたいで、子供みたいに目をキラキラさせて話す姿は可愛く——と、思い出して居る場合じゃなかった。

気持ちを入れ直し、俺は二人へと視線を向けた。

「えーと、その、まあ、なんだ。取り敢えず、カズマとのこと黙っててごめんな。話すつもりだったんだけど、どうにもタイミングが掴めなくて」

頭を下げながらそう言うと、二人はお互いの顔を見合わせてからこちらに苦笑して見せた。

「いや、カナデの気持ちは良く分かる・・・とまでは言えないが、パーティー内での男女関係は難しい問題だからな。慎重になっちゃいするのは理解出来る。そこまで気にするな」

「パーティー内の男女関係で崩壊するパーティーも少なくないですからね。ですが、もう少し早く話して欲しかったのも本当です。見ないフリするの大変だったので」

見ないフリ、という言葉に嫌な汗が流れる。

気になって何時から知ってたのか聞くと、二人は何とも言えない顔で遠くを見つめた。先に口を開いたのはダクネスの方だ。

「悪い事だと知りながら、以前クリスの誘いに乗ってカナデ達を尾行

した事があってな・・・連れ込み宿に入ってくのを見たのが始まりだ。騎士を目指す者としてあるまじき事だが、少しばかり盗み聞きまですてしまった。申し訳ない」

つつ、連れ込み宿って・・・暫く使っていないんだけど。随分前からバレてたのか。マジか。ていうか、クリスも知ってるの？前に俺の事見て、妙に頬を赤らめてる時があつて、その時は「なんだろう？」と不思議に思ってたけど——そういう事か。

「ていうか、その現場も見た事があってだな。正確には立ち会ったというか、あつ、勿論不可抗力ではあつたんだが」

「——ぐふつ!!ぐつ、ぐほつ、えつ、ちよつ、ええ!?!なに、は、はあ!?!いつ!?!」

「あれだ、ほら、皆でカニを食べた時があつただろ。あの時、カナデは随分と酔つていて、危ないから一緒に風呂にいったんだが・・・先にカズマがいてな。それで、成り行きで、うん」

どうしよう、いたたまれない。

恥ずかしさで顔が熱くなるのを自覚していると、めぐみんが「あのですね」と続いてくる。

「私はカズマの工作室で、お尻を使ってエッチしてるのを見たのが最初です。初めはカナデが騙されてたり、弱みでも握られて脅されて、カズマにエッチな事されてるのかと思つていたんですが・・・その、何日か観察を続けてく内に、そうじゃないのが分かったので、それではい・・・そんな感じですよ」

「お尻つ——カナデ、お前そんなプレイまで。そうか、お尻で」

色んなプレイしてると言うのに、寄りにもよつてアナルプレイをめぐみんに見られてるとか。

めぐみんのご両親、預かった娘さんに変なの見せてすみません。本当にすみません。ダクネスもそんな目で見えるな。何でちよつと嬉しそうなんだ。違うからな、お前の変態性癖と一緒にするな!仲間じゃないからな!

「そ、それで、もしかして水色も知ってる?」

「いえ、アクアは知らないと思いますよ。カズマの事を怪しんではい

るみたいですけど。絶対私達で穢らわしい妄想してるわよ！というのは良く聞きますが」

「カズマの事を未使用エクスカリバーと揶揄っていたからな・・・」

すまん、水色の幻想を崩して。

俺のせいですつかりヤリチンなんだ。

使用済みずる剥けブーメランエクスカリバーなんだ。

俺のマンコで調教済みなんだ——いや、調教されてるのは俺かも知らんけど。

最近の挿入のフィット感が凄いいからな。納まる場所に納まつてる感じで、繋がってる時凄く安心する。だからって刺激がない訳でもない。挿入される時はそれだけで軽くいっっちゃうし、一回動き出すと気持ち所ばっかり責められて啼かされっぱなしになっちゃう。熱い物を注がれる度に、お腹の下の所がきゅんきゅんして・・・。

「カナデ、カナデ。お願いですから、妄想の世界から帰ってきて下さい。涎垂れてますよ」

「はっ、ごめんごめん」

「バレた途端にポンコツになり過ぎです」

一旦冷静になってから改めて考えてみる。

話しによれば二人共随分前から知っていたらしい。

そう知ってしまったえば今更ながら二人が何かと理由をつけて家を留守にしていた事に思い至った。隙を見つけたつもりになってたが、どうやらかなり気を使われてたらしい。思えばアルカンレティアの時もカズマと一緒にいた事を深く追及されなかったし、一旦アクセルに帰ると言った時も理由をつけて二人きりにしてくれた。いつだって突然やってきて空気をぶち壊していくのは水色だけだった気がする。

そう考えると羞恥心が込み上げてきて頬を熱くさせた。いたたまれなくて枕に顔を埋めて謝ったが、二人からは過ぎた事だからと、これから相談してくれば良いと宥められてしまう。ありがたい。

「・・・ただな、カナデ。アクアにまだ話すつもりがないなら、お風呂でそういう事するのは止めた方が良いでしょう。声が良く響くからな」

心臓がドキリとした。

枕から顔をあげてダクネスとがつつり目が合う。

冷や汗が額に浮かぶ俺に、そういう話ならとめぐみんが続ける。

「台所でイチヤイチャするのも程々にして下さい。カズマがカナデにセクハラしていると勘違いしたアクアが『カナデは身内に甘いわね』ってぼやいてました。それから妙に大人ぶった態度で『代わりに怒ってあげた方が良いのかしら？』とか何とかも言っていましたよ。多分もう覚えてないと思いますけど」

おっと、思いの外がつつり見られてた。

屋敷に住んでからそんな場面何度かあつて、特別皆の反応がなかったから誤魔化せてると思つたんだが……いや、まあ、そうだよな。うん———というか、水色も水色でなんでそれで気づかないのか。

「あと、細かい事ですが、カズマの洗濯物の臭いを嗅いだり、干したてのカズマの枕抱き締めたり、そういうのは止めた方が良いでしょう。一応気にして目立たない所でやってるみたいですけど、見ようと思えば意外と見えるので。あとカズマの世話を焼く時も、かなり表情に出ますよ。一回気づくと凄い目について……いえ、それまで私に気づかせなかったので、十分隠蔽出来てはいると思うのですが」

俺は静かに布団へと潜った。

穴が合つたら入りたい、という言葉はこういう時に使うものらしい。成る程、正確に理解した。

抵抗する俺を布団から引き摺り出しながら、めぐみんの話聞いたダクネスも最近特に表情に出てるなと続けた。曰くカズマを見る時に熱の籠った瞳をしてる時があるとか、曰くカズマと話す時の声のトーンが甘いとか、曰く慈愛に満ちた顔でお腹を撫でてる時とか、曰く子供用品の編み物してる時矢鱈と幸せそうな顔をしてるとかなんとか。特にお腹を撫でてる時とか編み物してる時なんか、いよいよ来るものが来たのかと肝を冷やしていたそうだ。

「それなのに、カナデはいつもと同じくらい働くだろう？アルカンレティアの時もそうだったが冒険者としても平気で最前線に立つし、家事にしても一切手を抜かないしな。カナデも馬鹿ではないから、もし本当に身重なら無理はしないと信じてはいたが、やはり気が気でなく

てな——かと言って、一応知らない事になつて身としてあれこれ言うのもな？」

「ああ、それは私も気にはなつてました。カナデそういうのはまだないですよね？」

二人からジト目を向けられた。

今の所そういう症状は出てはいない。

いないのだが……。

「ど、どうだろ……今のところ、そういうのは症状的にはないぞ。それに避妊薬はちゃんと飲んでるし」

カズマに薬は禁止されたが、あれから欠かさず服用してる。勿論カズマには内緒だ。

少し悩んだ事ではあるけど、考えれば考えるほど子供作るには時期が悪いと思つたからだ。せめて商売が軌道に乗ってから、欲をかけば魔王軍の攻勢が落ち着く頃まで待ちたかつた。冒険者という職業である以上、あれらの事は他人事には出来ない。何かあれば駆り出される可能性は高い。それに既に幹部の何人かを葬っているのだし、何らかの報復行動がある可能性は高い事も考えれば余計にだ。非常事態に妊娠を理由に足を引っ張るのも、力になれないのもごめんなのだ。

二人にその事を簡単に説明すると、少しだけ寂しそうな顔をしたが納得してくれた。冒険者の厳しさは俺より早くこの業界に入った二人も良く分かっているのだろう。

「まあ実際、冒険者という家業で家庭を作るとするのは難しい話ではあるしな。常に命の危機が付きまとう仕事だ。私も父から冒険者を止め、家庭に入る事を望まれているからな」

ダクネスの父が再婚するか養子を取らない限り、次のダステイネス家の家督はダクネスなのだから当然だろう。俺と違ってダクネスは王国を支える貴族で、後継を作るのは絶対の義務の一つといつていい。

ダステイネス家に釣り合う家柄から婿を取るとなると、かなりの上位貴族になる筈だ。聞いている話だとダクネスは幾つも縁談を潰してららしいし、年頃を考えればダステイネス閣下が繋げられる縁談は実

はそう残ってないのではないだろうか？あれ？やばい？

「改めて考えると、ダクネスは早く引退させた方が良いよな。閣下に睨まれるのは怖いし。めぐみん、今の内に新しい盾役見つけておくか」

「残念ですが仕方ありませんね。私としてはいつまでも一緒に冒険者していたいですが、ダクネスは赤ちゃんポコポコ作らないといけませんからね。貴族ですからね」

「ちよつ、ちよつと待て二人共!?なんでそういう話になった!?カナデっ、都合が悪いからつて話を変えるな！私は誤魔化されないからな！というか、それをいうならカナデの代わりを見つけるのが先だろう！私より離脱する可能性が高いではないか！」

流石に騙されなかったか。

それから布団を被りながらカズマとの関係について聞かれるがまま話した。告白したのはどっちとか、そういう関係になったのは何時とか、どういってお付き合ってるんだとかとか。めぐみんもダクネスもこういった話題に興味津々といった様子で根掘り葉掘り聞いてきた。恋に恋するお年頃だからこれも仕方ない。特に俺達の近くには男気のある者もおおらず、こういった類いの話は普段する人もいないから余計だったのだろう。

まあ、そんな俺も人の事は言えないくらい浮かれてしまったが。黙ってた分色々溜まってたらしくて、一回話し出すと言葉は俺が思ってたよりスムーズに出ていったのだ。全然自覚はないのだが、俺の話はのろけが過ぎるとのコメントも貰ってしまったくらいだ。

「——それで、カナデは結婚とかはどうするんですか？」

不意にめぐみんがそんな事を聞いてきた。

ダクネスも興味深そうに見つめてくる。

「・・・うーん。正直言うとな、結婚っていうのはあんまり現実味がなくてな。これぐらいの距離で今は良いかなと思ってるんだ」

「そうなのですか？」

「別にカズマがどうかかっていう話でもないぞ。個人的に思う所があってな」

カズマの伴侶になって良いのか正直迷ってる。

俺みたいな半端者じゃなくて、もつとちゃんとした相手が良いのではないかと。それこそめぐみんでも良いし、ダクネスでも良い。水色は・・・あれで女神なんて大層な存在だから色々無理があるのかも知れないが、俺よりはよっぽとちゃんとした女性だ。カズマはそういうちゃんとした女性と、普通の所帯を持つべきだと個人的には思ってるのだ。

なにせ側に置くには俺はあまりに特殊過ぎる。

恋に浮かれてる今なら幾らでも愛を囁いてくれるだろうが、いつか落ち着いた時に、もつと良い出会いがあった時に、俺との関係をカズマは後悔するだろう。カズマは俺と違ってまともだし、いつまでも恋に浮かれ続けられるほど間抜けでもないのだから。

「それより、めぐみんはそういうの無いのか?」

「うえっ!? わ、私ですか!? そ、その、私は・・・爆裂魔法がありますので、そういう事に現を抜かしてる暇がないと言いますか、あの・・・だっ、ダクネスとかはどうなんですか!? この間は男性の冒険者と飲んでましたよね!」

「ああ、確かに飲んでいたぞ。ただし、ララティーナ、ララティーナと面白おかしくからかってくる、元パーティーメンバーだった酔っ払い共とな! モテなくて悪かったな!」

それからまた暫く俺達は話をした。

話し始めた頃の緊張感が嘘のように、いつものような他愛ないの話を――――瞼が落ちるその時まで。

何でもない朝ですか？その通りです。それが良いのです

紅魔の里を訪れた翌日の朝。

いつもの癖で早くに目が覚めた俺は、イビキをかくめぐみん達を起こさぬようにそつと布団から抜け出した。

そのまま二度寝しようと思えば出来ない事もなかったが、肌を撫でる冷気に少し尿意を覚えたし、居間に転がされてるであろうカズマの事が少し気になったのだ。

そうしてトイレを拝借してから居間に顔を出してみれば、昨日の呑兵衛達が乱れた布団に包まったまま畳の上を転がっていた。

カズマは兎も角、めぐみん父はこの家の大黒柱であろうに・・・今更言ってもあれだが、やっぱり無理にでも布団まで運べば良かったかな？でも気持ち良さそうにしてたからなあ。

様子を窺つてるとカズマが少し寒そうにしてたので、起こさないように気をつけながら布団を掛け直してやった。ついでにめぐみん父にもフアサつといた。手間でもないし。

そのまま部屋へと帰り二度寝しようとしたのだが、ヒヤリとした感触に足を止められた。視線を落として見てみれば、布団から伸びた手が俺の足首を握っている。その様子を眺めると布団がモゾモゾして、寝ぼけ眼のカズマが顔を出す。

「…………おっ…………す」

「おはよ」

カズマは俺の言葉に返事はしたものの殆ど目を開けず、眉間に深いシワを寄せて何やら苦しげな声をあげる。

しゃがんで寝癖のついた頭を撫でながら「どした？」と聞けば、カズマは「頭痛え」とうめき声をあげつつ、頭を撫でてた手にもつとスリついてくる。猫かな。かわいい。

「なんだ、一二日酔いか？昨日はどれだけ飲んだんだよ。お馬鹿。お水飲むか？ん？」

「……あゝあゝ」

「はいはい、分かったからちよつと待つてろ」

カズマを適当にあしらい、台所からコップを一つ拝借。日も上がらない朝っぱらから井戸水を汲んでくるのは面倒だったので、クリエイトウォーターでパパツと水を注いでやる。

だが、折角持つてきてやつてもカズマは飲もうとしない。ぐったり横になったまま呻いてるだけ。仕方ないので体を起こしてやつてコップを渡してやれば、苦痛で顔を歪ませながらも漸くそれに口を付けた。

「調子悪そうだな。もしあれだったら、今日の観光に付き合わないでゆっくり休んでて良いぞ。めぐみん達の事は俺が見てるし」

「……い、いや、良い。大丈夫だ。少し、すれば、なん、とかなる、多分」

「そっか、でも無理はしなくて良いからな」

カズマは水を飲み干すとまたぐったり横になろうとした。なのでそのまま頭を引き寄せて膝枕をしてやった。手透きだったので引き続き頭も撫でてやる。

依然として頭痛そうにはしてるが、撫でられてるカズマの表情は心なしに綻んだような気がする。喜んでくれてるなら何よりだ。よしよし。

「なあ、カズマ?」

「んー?」

「昨日さ、俺とカズマの事な、色々皆に話しちゃった。悪い。二人から話聞いたら、もう誤魔化すの無理そうだったからさ」

「へえー、そうか……マジかー」

飛び起きるだろうかと思っただけど、カズマの反応は思ったより大きくなかった。膝の上で少し身動きした程度だ。寝起きでほんやりしてるのもあるかもだが。

「あんまり驚かないな?」

「まあ、流石に、そろそろ、バレるとは、思ってたからなあ。どうせなら、俺から、伝えたかったんだけど……なんか言ってたか、あい

つら」

そう言われて思い返してみたが、カズマに対して何かを言ってる姿は特に思い出せない。これまで黙ってた事に関して不服そうではあったけど、二人共黄色い声をあげながら楽しそうにしていただけだ。それだけ、あつ、ダクネスはちよつと、いや、かなりアレだったか。まあ、でも、まあ、いつもの事だしな。うん。

「んー、特には。あーでもな、なんかめぐみんが『カズマには私からガツンと言ってやりますよ！任せて下さい！』とは言ってたかな？腕捲りしながら」

「何をガツンされんだ、俺は。しかし、そうかー、まあー、なるようにしかならないからなあー」

そんな事をぼやきながらカズマが太腿に頬擦りしてくる。やつぱり猫かな。猫にしてはデカ過ぎるけど。

旅の疲れが出てるのか、指に触れるカズマの髪は少し固くパスついでる。それはお世辞にも手触りが良いものではなかった。

でもだ、俺には、その手触りも、膝から伝わるカズマの鼓動も、太腿を撫でる熱い吐息も心地よかった。胸の所がポカポカする。嬉しい気持ちで胸が一杯になる。頬が自然と緩んで、何でもしてあげたくなってしまう。

まあそうはいっても、側でめぐみん父がいるし、そもそも人の家だから、エツチな事とかはお願ひされてもしてやれないのだが。我が家で、めぐみん達が側にいなければ、全然普通にやってたかも知れないけど。うん、やってたな（確信）。

そう言った気持ちの代わりという訳ではないが、そのまま腰を曲げてカズマの横顔にキスを一つ落とした。ちゅっ、という音と共に高ぶっていた気持ちが少し落ち着くのを感じる。

けれど擦ったそうにしつつも頬の感触を当たり前のように受け入れたカズマを見ると、何となくもっとしたくなってオレは何度もキスを落とした。静かな部屋に小さなキスの音が続いてく。

一つキスをする度に、胸が高鳴った。

好きな気持ちに次から次へと湧いてきて、する度にもっとその感触

が欲しくなっていく。唇に伝わる感觸度に、胸の中で好きな気持ちが膨れ上がってく。

何でこんなに好きなのか分からない。

理由なら一杯思い付くだけでも、そのどれもオレの中でピンとこない。何故だか言葉にしてしまうと、どれも後付けのような気がしてしまうのだ。

そしてその理由を、触れなくなる理由を、抱き締めなくなる理由を、この人の子供が欲しくなるちゃんとした理由を、オレは欲しいとは思ってない。きつとカズマに抱く気持ちに、オレは理由が欲しくないのだと思う。

「かーずまあー」

頬をつついて呼べば、横を向いてた顔がちよつとこつちを向く。眠たそうな顔に胸がきゅんとする。

「・・・ん？なんだ」

「んふふ♪ごめんな、起こしちゃって。何でもないから寝てて良いぞ。なんか、ちよつと呼んでみたくなっただけだから」

「お前、さらつとお可愛いムーヴしやがって・・・俺が童貞なら死んでるぞ」

「んー？そう？よく分からんけど、それなら大丈夫だな。カズマはもう童貞じゃないもん。それにな、こんな事、カズマにしかないから大丈夫だ」

そう言っつてこめかみに一つキスを落とせば、カズマは耳まで赤くして布団を頭まで被ってしまう。個人的にはこういうウブな所も含めて、カズマの方がよっぽど可愛いムーヴしてると思うのだが？

呼んでも揺らしても出てこなくなったので、仕方なく布団の上から頭をポンポンしながら暫くぼーつと過ごしていると、ドタドタと賑やかな足音が聞こえてきた。

音を視線で追っかけていると目の前にあつた襖が音を立てながら勢いよく開いた。その先にはパジャマ姿のこめつこと水色。どちらも楽しそうなニコニコ顔である。

「おつまみの残りはどこだー！」

「余りのお酒も寄越せー！」

どっちも朝から欲が迸ってるなあ・・・山賊かな？

「おはよ、二人共。残念だけど余り物なんか無いぞ。昨日のうちに片付けちゃったからな」

遊び疲れた二人が早々に寝てしまった後の事だ。

あれから暫くカズマとめぐみんの親父さんは魔道具談義で盛り上がっていたが、日付が変わる頃にはどっちも呆気なく酔い潰れてしまった。カズマは旅の疲れがあった事だろうし、親父さんも親父さんで久しぶりの深酒だったそうで酔い潰れるのが早かったらしい。

そして二人が酔い潰れると、私達とめぐみん母のゆいゆいさんとで余り物はさっさと片付けてしまっていた。

ゆいゆいさんとしては余り物を翌日の食卓にオカズとして並べる気満々だったようだが、滞在中の食費として極一般的な宿代分に少し色をつけて手渡したら盛大に俺達へ祈りを捧げたのち考えを変えたようで、満面の笑みと共に余り物をモシャモシャしていた。その様子はおつきなこめつこであった。親子なんだなあつて。

そんな訳で余り物なんてはない。

それを聞くと二人が見るからに元気をなくす。

どちらも絶望と言わんばかりの顔だ。昨日は昨日でちゃんと夕飯食べておいて、余り物の一つや二つで一喜一憂し過ぎではなからうか。

「・・・大袈裟な。今夜にでもまた飲めば良いだろ。こめつこも、そんな顔するな。今日出掛けた時にでもお菓子買ってきてやるから」

その言葉を聞くや否や、二人は見るからに元気になった。言われてもないのに何か言いたげに手を挙げてくる。

「——お菓子！カナちゃん、わたし昨日のおまんじゅう!!それと、クッキーとお煎餅も!!」

「そうね、そうよね！今夜も飲めば良いのよ!!昨日はお鍋だったんだから、今日は焼き鳥パーティーよ！カナデ!!」

「はいはい、分かったからあんまり騒ぐな。ここに二日酔いに苦しんでる奴等がいるから」

俺の言葉でカズマの存在に気づいた水色は「あらあら、なつきけないわねえ」と人を小馬鹿にした顔でやってきて、布団越しにカズマの頭をポンポンと叩き始めた。

一応二日酔いの痛みを知る仲間だからかポンポンする手つきは程々に優しいのだが、酒を飲めなかった恨みからかネチネチと鬱陶しい絡み方をする。

そんな水色にイラツとしたのか、カズマが布団をくるまったままコロコロ部屋の隅へと移動するが――結局カズマを追い掛けて水色も移動していったので意味はなかった。

頑張れ、カズマ。

そんな二人を他所にこめつこが俺の膝を枕にコロロンと横になる。食べ物がないからか、完全に二度寝体勢である。

まったくもって抜け目なし。

こめつこが可愛い寝息をかき、カズマ達の攻防が徐々に激しさを増し始めた頃。「んあー」と間延びした声が背後から聞こえてくる。そつと声のした方へ視線を送れば、親父さんが布団を押し上げむくりと起き上がっていた。

こめつこを撫でながら挨拶すると、相変わらずのぶつきらぼうな挨拶を返し、こつちに何か言いたげな視線を送った後で「顔を洗ってく」とか何とか言つてさつさとその場を離れていった。・・・うーむ、聞かれてたかもしれない。

それから少しして、めぐみん母やめぐみん達も起きてきた。

俺はこめつこを水色に預け、めぐみん母と共に朝御飯の支度へ。

そしてカズマとめぐみん達はどうと――

「それじゃあ、カズマ。少し向こうに行くぞ」

「安心して下さい、カズマ。今回の所は、朝御飯が始まるまでに終わらせてあげますから」

「おつ、おお、お手柔らかにっ」

――颯爽と近くの茂みに連行されていったのであった。両手

に花であった。些か、あれな雰囲気だけど。うん。

えっ、これが観光名所ですか？なるほど、把握しました。把握。

めぐみんの実家にて賑やかな朝食を終えてから暫く。

よく晴れたその日、俺達はめぐみんの案内でのどかな田畑風景広がる紅魔の里を進んでいた。

そう、前日の予定通り観光中だ。

近くに魔王軍在中の戦場があるのは心配ではある。あるのだけど、渦中の紅魔族達がのほほんとしてるし、めぐみんの両親も普通に仕事へ出掛けるし、水色が観光したいと目をキラキラさせるし、ダクネスも鍛冶屋に行きたいって言うし、こめっこともお姉ちゃんと遊びたいと言うしで———なんやかんやアクセルへ帰るのは翌日に持ち越しとなり、本日はこめっことも連れて紅魔の里観光と洒落込んだ訳である。

まあ、元々そういう予定でもあったしね。

用心するのは大切だが、心配し過ぎは良くない。精神的にも。

何かと面倒事に巻き込まれる我がパーティーとはいえ、そうそう何度も、行く先々で、問題が起きる訳じゃないし巻き込まれる訳がない。ないよな？

最近だって魔王軍の幹部とかち合うっていう最大級の不運に見舞われた訳で、残りの魔王軍幹部だって、破壊と殺戮を撒き散らす移動要塞だって、勝ち目のほぼない畜生裁判だって、そう何度もやってこないだろう。こないよな？こないだろ。幾ら何でも。ねえ。ないよな？本当じゃないよね？ないんだよな？

そういう訳で絶賛観光中なんだが……。

「商店街という程栄えてる訳でもありませんが、この里で買い物するなら大体そこで揃います。鍛冶屋もその近くですね。外食する場所

なんかは喫茶店ぐらいしかありませんが……まあ、今日は天気も良いのでお昼はお弁当にしましょう。観光客用に売ってる物があるので。少しお高いですが——良いですよ、カズマ」

満面の笑みでそう言うめぐみんに、カズマは力なく「ああ」と答える。

「あ、それとですね、帰りの時で良いので服屋によって欲しいのです。元々持っていたものが大分ボロボロになってまして。いい機会ですので予備も含めて何着かローブを買おうと思ってるのです——良いですよ、カズマ」

非常に楽しそうにニコニコしてるめぐみんに、カズマは再び力なく疲れ切った瞳で「ああ」と答える。

なんぞ、これ。

朝の件で戻ってきてからこれだ。

なんかカズマが尻に敷かれている。

普段からある意味で俺を含めた女性陣尻に敷かれてはいるけど、それにしたって随分と良いように扱われているのである。

気になって聞いてみても、めぐみんからは笑顔で何でもないと言われるし、カズマもこつちの話だから気にしなくていいと言うし、ダクネスは苦笑いして答えてくれないし。

まったくもって分からない。

余りに気になってダクネスを見る。

するとダクネスはまた苦笑いを浮かべた。

「言いたい事は分かるが、暫くは放っておいてやれ。別に二人の事に対して、私もめぐみんもどうこういうつもりはないのだが……それはそれとして、色々と思うことがあるのだろう。あまり行き過ぎるようなら止めても良いと思うが、その辺りめぐみんも馬鹿ではないだろうからな。ははは」

そう言ってダクネスは快活に笑う。

何か釈然としないものがある。むーん、という感じだ。

だが、カズマとめぐみんの様子を見ると険悪という訳でない事も確かなので、ダクネスの言う通り一先ずは様子を見ることにする。納得

はしてないが。

そんな風にダクネスと話していると、こめつこを連れた水色がやってきた。何か嗅ぎつけたのか、二人共目がキラキラしている。

「ねえねえ、カナデ。カナデ達はなんのお話してるの？内緒話？二人でずるいわ、私も交ぜなさいよ」

「カナちゃん交ぜてー！」

無邪気な笑みを浮かべる二人に少し考える。

なんやかんやめぐみん達二人にもバレた訳だし、いい加減水色に話す頃合いだろう・・・けど、ことはパーティーの存続にも関わる問題だしな。二人は受け入れてくれたが、男女関係の問題は根が深いのである。

故に俺だけの判断で話すことは避けたい。

チラツとカズマを見たが、先程と変わらずめぐみんの相手をしていて気づく様子はない。となれば、今はテキトーに誤魔化しておいた方がいいか。

「うーん？夕飯の時に出すお酒は何にしようかな？つて話してたんだよ。ゆいゆいさんに聞いたら、それなりに有名な地酒があるらしいぞ」

「そうなの?!いい、良いわね地酒も!!ねえねえ、カナデ!いえカナデさん!!私ね、いいお酒にはいいオツمامミも必要だと思っの!」

「はいはい、オツمامミな。用意する、用意する」

やったーと無邪気に喜ぶ水色にこっちもニツコリである。

被害さえなければ可愛いだけだ。

いつもこうなら良いのに。

そんな風に水色は軽くあしらえたが、こめつこの瞳にはどこか理知的な雰囲気と好奇心の籠もった輝きが消えない。無邪気な顔して侮れないな。この子は。

流星にめぐみんの妹と言いたいが・・・。

「さて、今日のオヤツは何にしようか。ねえーこめつこ?」

一言そういえば、こめつこの瞳から賢さが消えた。

「お、やつ・・・!で、でもつ、こめつこお金ないよ」

「お金のことは気にしなくて大丈夫。今日案内してくれるお礼にオレが奢ってやるからさ。だから、今から何買うか考えておきな？ね？」
「えへへ、うん！」

めぐみんとベクトルが違うだけで、欲望に忠実なのは一緒だ。要点を押さえれば扱うのは難しくはない。

初対面の時こそドキツとさせられたが、一度理解してしまえばなんて事はない。可愛いだけだ。

いつまでもこれだけの可愛げが残ってれば良いだけだな。なんか大きくなったら人を手玉にする悪女になりそうな気がする。考え過ぎだろうか？うん。

「うん？どうしたの、カナちゃん？」

「ん？いや、何でもないぞ。それよりお弁当何にしよつか？こめっこはどういうのが売ってるのか知ってる？」

「知ってるーうんとね、えーつとね、今頃のお弁当はねえ——」
のどかな田畑が広がる風景を眺めつつ、皆と他愛もない話をしながら進むこと少し。最初の目的地である商店街に辿り着いた。

まあ、めぐみんの言葉に違わず、通りに建ち並ぶ店は数える程度しかない。見える範囲で鍛冶屋、お土産屋、喫茶店、服屋なんかがあったが、それくらいだ。

初日の時点で、めぐみん家に行く途中で見たから知っていたが、確かにこれは少し寂しいかも知れない。

まあ、里の規模を考えれば妥当ではあるのだが。

特に目ぼしい物もなく、途中で商店により野外で食べられそうな軽食を購入。鍛冶屋に向かうダクネスとは一旦別れ、俺達は他愛もない話をしながら長閑な里を散策を続けた。

そうして暫くして田畑を抜け人家から少し離れた小さな森の中、和の雰囲気漂う木造の神社へと辿り着いた・・・辿り着いたのだが。
「なにこれ」

神社へと微妙そうな顔で呟くカズマ。

その隣で口を真一文字に閉じ感情の読めない目をしてる水色。

めぐみんは「里の御神体です」と言いながらムフーと胸を張ってる。

そしてそんなみんなを見てる俺自身はどうかと言えば・・・特に思うことは無い。紅魔族のすることだし、元よりそんなに期待してなかった。それでも敢えて言葉にするなら、懐かしいなあとかだろうか？親友が部屋に飾ってた奴を思い出す。もっとバイバインのエロいやつだけど。

「どう見ても、猫耳スク水少女のフィギュアなんですけど」

水色の言う通り、社の最奥に納められた里の御神体とやらは、かつてオレ達のいた国で美少女フィギュアとか呼ばれる代物だ。

神社に置かれるには、あまりに場違い過ぎる存在である。

まあ、ここが『猫耳神社』という名前らしいので、有る意味でこれ以上ないほどぴったりの御神体でもあるけども。

めぐみん曰く、霊験あらたかとは口が避けてもいえないこのトンチキ神社は、紅魔族のご先祖様がモンスターに襲われそうになってる旅人を助けた結果、そのお礼として旅人が持っていた『命よりも大切なご神体』とやらを譲り受けた事から始まったそうだ。

神社の作り方もその旅人から教わつたらしい。

「——まあ、これが何の神様で、どんなご利益があるとか、その辺りはさっぱり分からないのですが」

呆気らかに言い切つためぐみんに、水色は不機嫌そうに眉を潜めた。そりやそうだ。普段自称なんちゃら様とか、駄女神とか馬鹿にされてても、こいつはモノホンの女神なのだから。

自分と同じ様に、美少女フィギュアが崇め奉られてたら文句の一つ二つは出てくるだろう。

「ねえ、カズマ。美少女フィギュアが、この私と同じ神様扱いされてるの見るのは腹立たしいんですけど」

俺の予想通り飛び出した言葉に、今度はカズマが眉を潜めた。まあ、そうだろうな。その自称なんちゃら様の世話をしてるのは、基本こいつだからな。文句の一つ二つ出てくるだろう。

あれ、デジャヴ？

「うるさいわ。こんな物持ち込む奴をここに送つたお前は、むしろ紅魔族に謝つとけ。デストロイヤーの奴といい・・・ホントお前は余計

な事しかしないな。息をするように面倒事おこしやがって。なんなの、疫病神なの？」

「はあああッ!?このヒキニート!!誰が疫病神よ!!私は女神よ!水の女神!!」

またワチャワチャと喧嘩し始めたカズマ達から、俺は手を繋いでるこめっこへと視線を落とした。

そして頭に浮かんだそれを聞いてみた。

「なあ、こめっこ。こめっこがオススメする観光地って何処かあるか？」

こめっこはさつき商店で買ってあげた飴を口に放り込みながら、ニッコリと笑って返してきた。

「さつきのお店!!美味しいの一杯だよ!!」

これは期待出来ないかも知れない。

えっ、観光名所ですか？いきましたよ。ええ、あれでしたね。あれでしたよ。

「碌なもんじゃなかったなあ……」

すっかり太陽が高くあがった午後頃。

お茶を啜りながら遠い目をしたカズマがそんな事をぼやいた。

場所は小高い丘の上、『魔神の丘』と呼ばれる場所で、丘の上で告白して結ばれたカップルは魔神の呪いにより永遠に別れる事が出来な
いと言われているいわくつきの場所だ。

何故こんな場所にきたのかと言われれば、水色がムーディーな場所
に行きたいとリクエストした結果なのだが……ムーディーとは一体
なんなのか、カズマと一緒に頭を悩ませたのは言うまでもない。

そんな色んな意味でアレな場所ではあるけど、この丘は素晴らしく
見晴らしが良かった。朝から変わらず天気も良いままで、時間帯もお
昼頃になったという事もあり、オレ達はそこでお昼を取ることにした
のである。

そして今はその食事も終わり、皆でまったりと食休み中だ。

色んな意味ではあれだった猫耳神社を出た後も、めぐみんの案内で
里の観光スポットを見て回った。

抜いた者に強大な力が備わるといふ岩に刺さった聖剣。

斧やコインを供物として捧げると金銀を司る女神が召喚出来る願
いの泉。

世界を滅ぼし兼ねない兵器が封印されている地下施設と、その近く
に併設している経歴も用途も不明の謎の施設。

後は話だけだけど、邪神が封印された墓とか名もなき女神が封印さ
れた土地とか……どっちも既に封印が解かれていて見るものがない
とかなんとか——名前とか由来とかはいい感じなのだが、どのス
ポットも詳しくその内容を聞くとがっかり感が強い場所ばかりだっ

た。

最初にあげた聖剣なんかは、紅魔の里の鍛冶屋の親父が四年前くらいに設置した物だった。聖剣を抜きにチャレンジする為には挑戦料が掛かる上、その肝心の聖剣ときたら選ばれた勇者とか英雄とかは関係なく一万人目の挑戦者が引き抜けるように魔法で封印されている始末。

願いが叶う泉も仕掛け人は鍛冶屋の親父らしく、これまで泉に女神が出たことはないし、泉に投げ込まれたコインや斧は鍛冶屋の親父が回収しリサイクルしてるのだとか。

謎の施設と地下施設は用途も経歴も謎の、正真正銘の謎の場所ではない。なかなか。

まあ、そうやって色々を見て回ったわけだ。

で、その感想はといえば——ぶっちゃけた話、個人的には面白かった。ツツコミどころは探すまでもなく色々あったけど、紅魔の里の文化というか人間らしさを感じれて、見たり聞いたりしてる分にはそれなりに楽しめた。

同時にまかり間違ってもここには引越さないと決めただけ。

カズマとしてはツツコミ疲れたらしく、ご飯を食べ終えたらすっかり黄昏れてしまった。なんか少し老けた気がする。

その元凶の一員である水色は、こめつこと一緒にお昼寝モードに入った所だ。どちらも食べ過ぎが原因で妊婦のようにふっくらしたお腹を上に向け、スカーフと寝息を立てている。

めぐみんはと言えばオレの隣にいて、妙にくっついてきていた。

どうしたのか？と聞けば、頭でスリスリしてくる。

その様子が可愛いかったので頭を撫でると、めぐみんは頬を少し赤らめて甘えるようにもつと強く擦りついてきた。

可愛いのもつとヨシヨシしといた。

そうしているとカズマが物欲しそうな顔でこっちを見ているのに気づいた。どうやら黄昏タイムは終わったらしい。

なので仲間に入れてやろうと手招きすれば、さきつとカズマが近づいてきてピタっとくっついた。そしてカズマと反対側にいるめぐみ

んが嫌そうな顔をした。

「……カズマは、離れて下さい。どうせ、後で、幾らでも、時間があるのですから。今は私の番です」

「それはそれ、これはこれだ」

「むむむ」

何故か俺を挟んで威嚇し合う二人。

何が二人にこうさせるのかは謎だけど、取り敢えずどっちの頭も平等に撫で撫でしておいた。なんか、そう、甘えたい次期なのだろう。誰にでもそういう時はある。うんうん。

「それはそうと、これからどうしようか。他にも観光スポットはあるんだろ?」

午後の予定についてめぐみんに聞くと、猫みたいに目を細めながらうーんと考える素振りを見せた。

「んー?。そうですね、後は展望台くらいでしょうか。超強力な遠視の魔道具が設置されている、全てを見通す展望台。その名もバニルミルド」

「おお、なんか凄そう」

「勿論です。遠くの魔王城も隣にあるかの如く、くつきりはつきり見えてしまうのですよ。お金が掛かるので私は直接見たことはありませんが、オススメの監視スポットからは魔王の娘の部屋も覗けるそうです」

碌なもんじゃなかった……おっと、カズマと台詞が被っちゃったな。えへへ。

「……魔王の娘」

呟くようなカズマの声にふり返れば、カズマが物凄い勢いで目を逸らした。顔は見えないが首筋に流れる冷や汗が見て取れる。

その様子を寸前までホワホワしていた気持ちが一気に冷め、思わずジト目で見てしまう。隣のめぐみんもジト目だ。

二人でジトつと見てると今度はカズマが話し始めた。

「それはそうと、めぐみん。観光はこの辺りで終わりで良いだろ。ほら、あれだ、ローブ買ったよな? 帰りによって行くこうぜ。か、カ

ナデも、何か買うなら奢るぞ。紅魔の里製つて他にはあんまり出回らないらしいし興味あるだろ？」

「ええ、勿論そのつもりです。予備の分も含めて一杯買って貰いますからね。財布の用意をしておいて下さい」

「まあ、確かに気にはならないと言ったら嘘になるけども。それより

――」

「よ、よっ、よーし！それなら午後の予定は決定だな！おい、アクア！休憩はボチボチいいだろ！商店街行くぞ、商店街！買い物して喫茶店辺りでオヤツでも食おうぜ！いやー忙しくなるなあー！」

慌てて立ち上がったカズマは水色達を起こしに行く。

その後ろ姿をジト目で見てると、隣のめぐみんが「本当にあれで良いのですか？」と聞いてきた。言いたい事は分かるので、思わず苦笑いしてしまう。確かに今の姿はカッコ悪い。

でも、仕方がないのだ。

そういうのも引つくるめて、もうすっかり好きになってしまったのだから。

「まあね、惚れた弱みってやつだよ。めぐみん」

「ふうん？そんなもんですかね」

「そんなもんだよ。めぐみんも好きな人が出来たら分かるよ。あんな姿でも可愛く見えちゃうもんだよ。それにめぐみんだって、カズマのカッコいい所はよく知ってるだろ？」

カズマ達を見ながらそう言うと、めぐみんはジッと同じ方向を眺めた。

「ま、まあ、そうですね。今はアレですけど」

そつとその言葉を呟いためぐみんの横顔は、随分と可愛らしいものだった。頬は林檎のように真っ赤だ。瞳も優しい色に染まっている。

「……………今度、三人で一緒にする？もう成人してたよな？」

「しっ、しませんよ！何を言ってるのですか！カナデはハレンチです！変態です！エッチ大魔神です！あーもう！漸く話したと思っただらこれですか！これもあれも、カズマがスケベなせいですよ！どーしてくれるんですか！カナデが変態になってしまったではないです

かあ!!」

なんか、カズマのせいにされた。

スケベ度合いでいったらどっこいか、もしくは俺が勝ってると思うんだが。

最初に襲ったの、俺だし。

まあ、流石にその辺りは詳しく話すつもりはないけども。昨晚だつて大分ぼやかして伝えておいたのだ。それはもう、ぼやんとした感じに。恋に恋する少女達の夢を壊さないように……いや、既に何度か見られてたらしいけどね。それでもね。うん。

やっぱりこういうのは男の威厳というか、そういうのがあると思うし。半分レイプ紛いに童貞奪った話とか、カズマの為にも黙っておくべきだろう。

プンスコしながらカズマの元に行くめぐみんを横目に、俺は改めて心の中でそう固く誓つといた。

始めてのプレイの内容は、墓場まで持っていくことを。

早々に片付けを済ませて、出発の準備が出来た頃。

それまで周りのメンバーとワチャワチャしていたカズマが神妙な顔で里の方を見つめ始めた。何事かと聞けば「ちよつと待ってくれ」と真剣な声が返ってくる。

気になって同じ方向を見てみたが、俺には長閑な里の光景が見えるだけで、特に気になる物は見つけられなかった。

俺と同じ様にめぐみんも里の方を見つめて首を傾げる。

「何かありましたか?」

「いや、特には」

二人で疑問を抱いてると、水色が手を筒のようにして里の方を見つめた。

「あら?何かしらアレ」

水色が何を見つけたようで、それにつられるように同じ方向へと視線を凝らせば里の端の所で何かが蠢いているのが見えた。森の中を

進むその影ははつきりと見えませんが、どうにも不審な様子だ。

一瞬、里の住人達が変なイベントでも始めたのかと思ったが、めぐみん達の様子を見るにそういう訳ではなさそうだ。

「あれは、家のある方向ですね。モンスターでも迷いこんできたのでしょうか?」

めぐみんがそうぼやくのと同時に、カズマが「あッ!」と大きな声をあげた。

「いや、あそこにいるのは多分魔王軍の連中だぞ!数はあんまりないみたいだが……」

「おや、性懲りもなく来たのですか。あれだけこっぴどくやられておいて、まだ襲撃してくるとは。しかし少数でくるとは自殺志願者でしょうか?目的がわかりませぬ。あんな風にコソコソしているという事は、何か理由があるとは思いますが……まさか里の施設でも狙っているのでしょうか?」

里の施設と聞いて、午前中に見て回ったあれ等が脳裏を過る。

そして同時に、あれ等が狙われる理由とは思えなかった。

それもう色んな意味で。

「確か、邪神の墓とか、物騒なものがあつたよな?封印されているとかいうやつ……いや、でもあれは、もう封印解けてるんだだけっけか」

「はい、解けちゃいましたね。なので今更魔王軍の幹部が欲しがるような物なんて、この里には……はっ!まさか、猫耳神社の御神体が!」

「それが本当だとすれば、そんな魔王軍はこの里と一緒に滅びればいいと思う」

あーでもない、こーでもないと話した結果、世界を滅ぼし兼ねない兵器辺りが狙われてるのではないか?という事になった。

次点で、里長や指揮官クラスの暗殺当たりじゃないかという事にもなった。情報が足りないのでどっちも予想の域は出ないのだが。

「とにかく、まだ里の連中が気づいてない。あのままじゃ侵入されるぞ!さっさと下に降りて、里の人達に魔王軍の連中がウロウロしてますよってチクリに行くぞ!」

格好いいんだか、格好悪いんだか分からないカズマの台詞と共に、

俺達は急ぎ足で下山を始めた。

「さすが、カズマさんね。虎の威を借る他力本願っぷりが潔いわ！」
あと水色の余計な一言も添えて。

あれが騎士ですか？いいえ、あれは打たれ強い変態です

いきなりな話だが、俺は自分がスケベだと理解している。

スケベ、そうスケベだ。もしくは助兵衛、助平、すけべえともいうソレ。それはイヤらしいこと、異性に強く興味を示す者、好き者、好色漢——もしくはソレ自体の行為を指し示す言葉でもある。

そうだ、スケベとはエロスやエツチに同等する、いやらしさの象徴となり得る卑猥な言葉なのである。

そして俺は紛うことなき、そのスケベだ。

四六時中とは言わないが、それでも家事をしてる時、仕事をしてる時、雑事をこなしている時、仲間達とお喋りしてる時、何かをしている時に不意に訪れる暇な瞬間……そういう瞬間に、何となしにエツちな事、イヤらしい事で頭が埋め尽くされているくらいにはスケベだ。そんなスケベな俺だが、分別というものくらいはある。

そりや仕事の合間を縫ってオナった事はあるし、皆で打ち上げパーティーしてる時に隙を伺ってこっそりオナった事もある。仲間達がいる屋敷の中で、こっそりイチャイチャしたり、バレないようにセツクスしたり、そういう事もしたことはある。

でも、あれだ、あれもこれもこれも、他人にそこまで迷惑は掛けたりしてないと思うのだ。いや、結果的にめぐみん達に見られたり聞かれてたり、気を使われてたりした訳だけど、それでも迷惑は掛けまいといつだつてこっそりを心掛けていたしてきた。

だから、言わせて欲しい。

「んあああああ♡!!ふうふう……なんだ、その程度で終わりか!!魔王軍の責めとやらは!!もつとこい!!腰を入れて来い!!来てみるお!!」俺をあんな変態と一緒にしないで欲しい。

頼むからめぐみんは同類を見るような目で俺を見ないで欲しい。

幾ら俺が人一倍にスケベだつて、こんな公衆の面前でオープンに性癖を披露はしてないからな。

紅魔の里に侵入していた魔王軍の元へ走り出してから暫く。

紅魔の里の人達に状況の説明と増援を要請した俺達は、敵の発見位置がめぐみん宅の近くという事もあり、最悪の状況を想定して一足先に現場へと向かった。魔王軍の殲滅とはいかないまでも、増援が来るまでの時間稼ぎが出来れば良いという考えからだ。

そうして息を切らせて辿り着いた先に広がっていたものは、予想とはあまりにも違うものだった。

そこはめぐみんの家のおすぐ近く、林の間にある碌に舗装もされてない田舎道。小石が転がっていて雑草の目立つ、踏み固められただけの土の道だった。

農村であれば何処にでもありそうな、そんな何の変哲もないありふれた場所に——それはあった。

そこにいたのは我らがパーティーのタンク役。

ダステイネス家のご令嬢ダステイネス・フォード・ララティーナこと、変態クルセイダーのダクネス。

そして向かい合うは魔王軍の兵隊達。

魔王軍の紋章が入った貧相な装備を身に纏うモンスターと、ただ者とは思えない雰囲気を漂わせる露出度の高い赤いドレスを着た指揮官らしき女。

偶然か、はたまた何かを察知して駆けつけたのか……駆けつけてきたばかりの俺達に判断はつかなかったが、俺達が辿り着いた時にはダクネスは一人魔王軍の兵隊と対峙していた。

そこまでは良い。

騎士として貴族として、ダクネスには王国の敵として人類の敵として魔王軍と戦うだけの理由があるのだ。一人で多数を相手取る無謀さに思う事が無いわけではないが、ダクネスにはダクネスとして譲れない立場というものがあるは良く分かっていづもりだ。無謀な戦いに挑むのも仕方ない。

故に、己の矜持や義務の為に、魔王軍に立ち向かうまでは良いだろう。良いのだ。そこは。

「ぐうう♡！そ、そんなにやものかあ！貴様らの攻撃は！ひゃん♡！」

何処か嬉しそうに、敵の攻撃を受けてなければ。

悲しいかな、俺達が駆けつけた時には既にこの有様だった。

語尾にハートマークついてそうな声をあげながら、ダクネスがひたすらに敵に攻撃されていた。ボコボコである。フルボッコである。それはもうタコ殴りだった。

一応、隙を見て剣を振る事もあるが、その剣が敵に当たることはなく、攻撃を外す度に「くっ、やるな！」とかカツコつけた言葉を吐きながらも、何処か嬉しそうな顔で敵の反撃を受け止めていた。

「くっ、わたしは♡！くっひゃない♡！きしゃまらの攻撃なんぞに、100万回受けようと、決してくっしやないぞお!!もっごいツツツ!!」

またバチーン！と凄いい勢いで敵のムチが顔面にヒットする。

が、しかし、駄目。無傷。まったくの無傷。

そしてダクネスの顔に浮かぶ隠しきれない高揚感。

お世辞にも敵に攻撃されている奴の顔じゃない。もはやただのS Mプレイになっている。これには割と色々寛容な水色もドン引き。こめっこ？こめっこは俺によって目隠し中である。こら、手をどかそうとしない。目が腐っちゃうぞ。

はあ、こんな事なら様子見なんてことはせず、駆けつけた勢いのままさっさとハルバード叩きつけてやるんだった。

なんかタイミングを逃した気がする。

目の前の光景に頭を悩ませていると、隣から惨状を覗いていたカズマが耳に口を近づけてきた。

なんだと思いき耳を貸せば「なあ、カナデ。同じ変態として頼む、何とかしてくれ」とクソ失礼な事を言ってきた。

なのでデコピンを返しておく。

「俺は変態じゃない。エッチな事が好きなだけの、純然たるスケベだ。一緒にするな。そして嫌だ。てか、お前がどうにかしろリーダー」

「無茶言うなよ。見た感じダクネスだから何とかかなってるみたいだけど、敵の攻撃力は冗談じゃ済まないレベルだぞ。俺みたいな低レベル紙装甲冒険者が割って入って何とかかなるようなもんじゃないだろ。別の意味でもあそこに交ざりたくないしな」

呆れたような視線をダクネス達に向けるカズマに、今度はめぐみんが声を掛けた。

「それならどうするのですか？私が一発かましますか？ダクネスなら巻き込んでもどうせ平気でしょうし。でもですね、出来ることなら里の中の爆裂魔法は避けたいのですが。実家とか、畑とかも近くにありますし」

「あー、取り敢えず爆裂魔法はまだ止めとけ。それできっちり倒せるなら良いんだが、あのドレスの女辺りなんか耐えそうな雰囲気があるんだよな。やるにしても後詰めの人魔族達が出てからだな」

「背中を向けた所にドカン、ですね。任せて下さい」

「いや、撃たなくて済むなら撃たなくて良いからな？そのまま里の人達に任せて良いからな？止めるよ、ホントに。変に目を付けられたら後が大変なんだからな？」

なんか、こっちも物騒な話を始めたな。

家や畑よりダクネスの心配がされてない辺り、内情を知らない奴らがみたら酷い話に見えるだろうな。

実際、アダマントよりも高いらしいダクネスの防御力のこととは置いて、人類が扱える中で最強クラスの魔法の一撃を敵諸共撃ち込む話してるのだから、酷い話ではあるんだけど。

でも耐えるからな、あいつ。マジで。原型が残らない一撃を、軽症で済ませるからな。しかもそれを喜んでるし。

「面倒臭いわね、もうドカンとやっちゃいなさいよ。魔王軍を放っておくなんて麗しき女神たる私の名が廃るわ」

「お前の名前は既に限界近くまで廃ってるから気にするな」

「なっ、何ですってヒキニート！」

カズマと水色をワチャワチャし始めた頃、今度は魔王軍の連中が何やら話し始めた。

「なんて頑丈な女だ！シルヴィア様！いい加減こいつは放っておきましよう！キリがありません！それよりも目的を果たしましょう！幸い、あれは攻撃に関してはアレのようですし、時間稼ぎは我々で行います！」

「ふん！そうしたいのは山々だけれどね、それは難しいだろうね。一見すると攻撃に関してポンコツに見えるけど、アタシにはどうしてもアレがあの子の本当の実力とは思えないからね。ここまで私達の攻撃に耐えられてる所を見るに、あの子が高レベルのクルセイダーであることに違いないわ。ならば、戦闘能力もそれ相応にある筈」

「まさか、あれが演技だと!?!」

「ふっ、とんだ策士もいたもんだわ。背中を見せようものなら、その時は一瞬でバツサリでしょうね……そうでしょう、クルセイダーのお嬢さん！」

なんか魔王軍の連中面白いこと言い出してる。

そこまで能力あつて考えて行動出来るなら、今頃ダクネスは色んなパーティーに引つ張りだこな存在だっただろうな。

でも、そうではないんだよ。そうはならなかったし、そうはならないの。だってそこにいる人は変態だから。馬鹿みたいに防御力が高い、真正のドMの変態だから。

そのドMの変態はと言えば、魔王軍の連中の言葉に「ふっ、勘のいい者もいるようだな」と震え声で返していた。一体あそこの何処に勘の良い奴がいるのか問いたい。敵味方漏れなくアホしかいないだろうに。

結局、乗り込むタイミングを完全に見失った俺達は、援軍が来るまで待つことになった。その間もダクネスと魔王軍のプレイは続き、周囲には妙に艶っぽいダクネスの苦悶の声と、魔王軍の連中の悲痛な嘆きや怒号が響いていった。

あと、こめっこの耳も塞いだ。

水色に手伝って貰った。

世の中には知らなくて良いこともあるのだ。

「やあやあ！外なる世界より訪れし、めぐみんの盟友達！待たせたね！」

そうして待つこと少し、紅魔族の面々がやってきた。

予定よりずっと早く駆けつけてきてくれたのは素直に嬉しく思う……思うのだが、何故に誰一人としてまともな装備をしていないのか聞きたい。全員、見事に普段着である。諸に農家と分かる人もいた。割といた。

装備する暇もなく慌てて駆けつけたと言われれば、そういう事もあるだろうと納得出来るけど、どうにもこの人達は違う気がしてならない。陽気に挨拶してくるし。

「なあ、カズマ。俺の感覚からするとき、敵が防衛ライン越えて侵入してくるのって割と深刻な状況だと思ってただけど？」

「いや、俺もそう思うけど……この雰囲気を見るに、割とあることなのかもな。撃退まで含めて」

これが日常というならやっぱりここは魔境だ。

紅魔族の風習といい、この危険極まりない環境といい、間違ってもここには引つ越さないと俺は改めて心に決める。

そんな俺の心の内をよそにカズマは来てくれた紅魔族達に状況を説明していた。

カズマの話聞いた紅魔族は足早にダクネス達の状況をその目で確認。戻ってきた時には、その目に闘志を宿らせていた。

なんでも、たった一人で魔王軍のモンスター達に立ち向かうダクネスの姿は紅魔族的にはとてもクールに見えるらしく、ダクネスに負けではいられないとやる気に火がついたそうだ。

そのやる気たるや——これからの作戦をカズマからの聞きながら、ほぼ全員が闘志を滾らせながら格好いいポーズと台詞を考え始める程だった。

いや、やる気の方性よ。

思わずツツコミが口から溢れそうになったけど、それは何とか止めておいた。多分ここでツツコミを入れても、状況は良くはならないからな。寧ろマイナスになりかねない。

実績はあるんだ。大丈夫。寧ろ放っておいても平気な連中。紅魔族はこういう連中。カズマの話聞いてなさそうだけど、うん。大丈夫。よし。

そうこうしてる内に準備も済み、俺達も行動を開始する。

と言っても俺達はあくまで囿であり、本命は紅魔族の連中だ。

敵を完全に殲滅するべく所定の位置に向かい散開していく紅魔族の背中を見ながら、俺達もダクネスの元へと向かった。

「よく堪えてくれたな、ダクネスー」

カズマの大きな声にそこにいた全員の視線がこちらを向く。

驚愕、戸惑い、恐れ——羞恥。

なんか一人見当違いな感情を抱いてそうだけど、それは取り敢えず無視して俺達はそれぞれ武器を構えた。

そしてそれを視界に捉えながらカズマも続けた。

「魔王軍、大人しく観念するんだな。デュラハンのベルディア、デッドリーポイズンスライムのハンス、果ては大物賞金首、機動要塞、デストロイヤーに至るまで……！数々の猛者を屠ってきた俺達パーティーに出会ったのが運のつきだ！」

「な、何ですって!?!ベルディア達の話は聞いていたけれど、いつの間にハンスまで……でも、そう、成る程。それ程のパーティーメンバーであれば、この防御力の高さも領けるわね。ねえ強い人、貴方は何処の、誰なのかしら？」

敵のドレス女に、カズマは腰の刀を抜き放ち告げる。

「——名乗る程の者じゃないが、敢えて教えてやろう。ミツルギキョウヤ、それが俺の名前だ。覚えておけ」

それはそれは堂々と、カズマは偽名を名乗った。
一周回って格好良くみえた。